

第四卷

目次

第2編 各説

第3章 広島市内各学校の被爆状況 1

第1節 序説 1

第2節 各国民学校 5 3

第1項 広島市本川国民学校 5 3

第2項 広島市袋町国民学校 5 8

第3項 広島市幟町国民学校 6 7

第4項 広島市中島国民学校 7 7

第5項 広島市大手町国民学校 8 4

第6項 広島市広瀬国民学校 9 8

第7項 広島市神崎国民学校 1 0 5

第8項 広島市天満国民学校 1 1 2

第9項 広島市観音国民学校 1 1 8

第10項 広島市竹屋国民学校 1 2 4

第11項 広島市白島国民学校 1 3 0

第12項 広島市千田国民学校 1 4 9

第13項 広島市段原国民学校 1 5 9

第14項 広島市三篠国民学校 1 6 5

第15項 広島市舟入国民学校 1 7 2

第16項 広島市皆実国民学校 1 7 9

第17項 広島市荒神国民学校 1 8 5

第18項 広島市大芝国民学校 1 9 3

第19項 広島市牛田国民学校 1 9 9

第20項 広島市尾長国民学校 2 0 7

第21項 広島市比治山国民学校 2 2 1

第22項 広島市己斐国民学校 2 2 1

第23項 広島市大河国民学校 2 3 1

第24項 広島市矢賀国民学校 2 3 8

第25項 広島市江波国民学校 2 4 3

第26項 広島市宇品国民学校 2 4 8

第27項 広島市古田国民学校 2 5 4

第28項 広島市仁保国民学校 2 5 9

第29項 広島市楠那国民学校 2 6 5

第30項 広島市草津国民学校 2 7 0

第31項 広島市青崎国民学校 2 7 6

第32項 広島市似島国民学校 2 8 1

第33項 広島市立第一国民学校 2 8 4

第34項 広島市立第二国民学校 2 9 2

第35項 広島市立第三国民学校 2 9 8

第36項 県立広島師範学校男子部附属国民学校 3 0 4

第37項 広島陸軍偕行社附属済美国民学校 3 1 0

第38項 光道国民学校 3 2 1

第3節 各中学校 3 2 6

第1項 広島県立広島第一中学校 3 2 6

第2項 広島県立広島第二中学校 3 3 7

第3項 県立広島師範学校 3 4 3

第4項 広島県立広島工業学校 3 4 9

第5項 広島県立広島商業学校 3 5 8

第6項 広島県立広島第一高等女学校 3 6 3

第7項 広島県立広島第二高等女学校 3 6 9

第8項 広島県聾学校 3 7 5

第9項 広島県盲学校 3 8 2

第10項 広島市立中学校 3 8 7

第11項 広島市立第一工業学校 3 9 3

第12項 広島市立第二工業学校 4 0 0

第13項 広島市立造船工業学校 4 0 5

第14項 広島市立第二商業学校 4 1 3

第15項 広島市立第一高等女学校 4 1 7

第16項 広島市立第二高等女学校 4 2 9

第17項 修道中学校・修道第二中学校・修道学校 4 3 5

第18項 山陽中学校・山陽商業学校・山陽工業学校・山陽中学校附設広島中学校 4 4 6

第19項 崇徳中学校 4 5 4

第20項 広陵中学校 4 6 2

第21項 松本工業学校 4 6 8

第22項 安田高等女学校 4 7 4

第23項 進徳高等女学校 4 8 1

第24項 広島女学院高等女学校 4 8 8

第25項 比治山高等女学校 4 9 6

第26項 広島女子商業学校 5 0 5

第27項 安芸高等女学校 5 1 1

第27項 西高等女学校 5 1 7

第4節 専門学校・高等学校・大学 5 2 5

第1項 広島女学院専門学校 5 2 5

第2項 広島女子専門学校 5 3 4

第3項 広島工業専門学校 5 4 7

第4項 広島医学専門学校 5 5 4

第5項 広島女子高等師範学校・附属山中高等女学校 5 5 8

第6項 広島高等学校 5 8 2

第7項 広島文理科大学・広島高等師範学校・附属中学校・附属国民学校 5 8 8

第4章 広島市内主要神社・寺院・教会の被爆状況 6 1 2

第1節 序説 6 1 2

第2節 神社（広島護国神社ほか15社） 6 1 7

第3節 寺院（慈仙寺ほか15寺） 6 3 6

第4節 教会（日本基督教団広島流川教会ほか2教会） 6 6 2

第5章 関連市町村の状況 6 8 2

第1説 序説 6 8 2

第2説 各市町村 6 9 0

第1項 呉市 6 9 0

第 2 項	大竹市	6 9 7
第 3 項	三次市	7 1 0
第 4 項	庄原市	7 1 6
第 5 項	因島市	7 2 1
第 6 項	佐伯郡五日市町	7 4 2
第 7 項	佐伯郡廿日市町	7 3 5
第 8 項	佐伯郡沖美町	7 4 2
第 9 項	佐伯郡宮島町	7 4 6
第 1 0 項	佐伯郡大野町	7 5 0
第 1 1 項	佐伯郡湯来町	7 5 3
第 1 2 項	佐伯郡能美町	7 5 8
第 1 3 項	佐伯郡大柿町	7 6 0
第 1 4 項	安佐郡祇園町	7 6 2
第 1 5 項	安佐郡安古市町	7 6 7
第 1 6 項	佐郡佐東町	7 7 1
第 1 7 項	安佐郡安佐町	7 7 4
第 1 8 項	安佐郡沼田町	7 7 9
第 1 9 項	安佐郡可部町	7 8 3
第 2 0 項	安佐郡高陽町	7 8 8
第 2 1 項	安芸郡府中町	7 9 3
第 2 2 項	安芸郡船越町	7 9 6
第 2 3 項	安芸郡安芸町	7 9 9
第 2 4 項	安芸郡海田町	8 0 1
第 2 5 項	安芸郡坂町	8 0 9
第 2 6 項	安芸郡瀬野川町	8 1 2
第 2 7 項	安芸郡矢野町	8 1 6
第 2 8 項	安芸郡熊野町	8 2 0
第 2 9 項	安芸郡熊野跡村	8 2 2
第 3 0 項	安芸郡江田島町	8 2 5
第 3 1 項	安芸郡音戸町	8 2 8
第 3 2 項	安芸郡倉橋町	8 2 9
第 3 3 項	高田郡白木町	8 3 2
第 3 4 項	高田郡向原町	8 3 6
第 3 5 項	高田郡吉田町	8 3 8
第 3 6 項	高田郡甲田町	8 4 3
第 3 7 項	賀茂郡志和町	8 4 7
第 3 8 項	賀茂郡黒瀬町	8 4 9
第 3 9 項	賀茂郡八本松町	8 5 3
第 4 0 項	賀茂郡西条町	8 5 9
第 4 1 項	山県郡戸河内町	8 6 5
第 4 2 項	山県郡加計町	8 6 8
第 4 3 項	甲奴郡上下町	8 7 5
主要付図・一覧表		

1、広島市学童疎開実施表 1 2

2、集団疎開児童の記 1 5

3、広島市内各学校の建物疎開作業出動状況 3 3

4、広島市内各学校被災状況表（動員学徒を含む）	37
5、建物疎開作業に出動した地域国民義勇隊の被爆状況表	685
6、避難者郡町村別内訳表	689
資料提供者氏名表	888
参考図書一覧表	900

第三章広島市内各学校の被爆状況…1

第一節序説…1

教育都市

明治三十五年に広島高等師範学校が設置せられてから、広島市は西日本における教育の中心地となった。

以後、広島文理科大学をはじめ、高等学校・専門学校・中等学校・小学校など各種の教育機関が充実し、教育都市としての大きな役割をはたしてきた。

戦時教育

しかし、日本の軍国化が進むにつれて、教育方針、教育制度なども変えられ、昭和十四年四月、これまで自由制であった青年学校(昭和十年創設)を義務制度として、軍事教練を強化した。続いて昭和十六年四月には、国民学校令の制定により、小学校を国民学校(昭和二十三年、再び小学校となる)と改称した。同時に、義務教育を八か年(戦時中の延期措置)に改めた。

また、同年十二月には、大学・専門学校などの在学年限、または修業年限の臨時短縮に関する勅令が発せられ、明年度卒業の見込みの者に対して、卒業期限の短縮措置が講ぜられ、国内の総動員態勢に備えられた。

この頃、国民学校の運営要綱が改訂され、戦力増強の根基をつちかうことになり、次の二つが教育の実践目標(広島県教育八十年史)となった。

第一 勤労の強化

教育実践の一環として勤労を強化し、国民学校高学年においては、毎学年六〇日を作業に振りかえ得る期間とし、その間に食糧増産その他国家緊要の労務に挺身させた。農村にあっては、校庭はもちろん、原野・山林・河原の開墾により、食糧増産を行ない、高学年は農家に動員して、その耕作を助け、校庭に炭がまを築いて製炭をし、あるいは未利用資源の収集に努力し、廃品更生のため、その収集にあたった。

また、都市の児童は、軍需工場に動員されて生産に従事した。

第二 教科および教科外指導

教育全般にわたり、行学一体、戦力増強の根基をつちかうため、精神訓練・国防訓練・生産増強・職業指導に重点をおいた。すなわち各学校には忠霊室を設け、殉国の卒業生の写真を掲げ、戦地・病院、あるいは軍人遺族への慰問を続けた。興亜奉公日・大詔奉戴日などには、神社参拝などによる戦意昂揚の行事がおこなわれ、各都市ごとに高学年児童をまとめて伊勢神宮参詣をおこなった。

空襲の激化にともない、各学校にそれぞれ防空壕、防火用水槽を設け、焼夷弾の延焼を防ぐ火叩きなどを備えた。万一の災害に備えて、防空頭巾・モンペを通学の服装とし、集団登下校が励行された。

団体訓練は、体力錬磨と共に重視され、歩行訓練・防空待避訓練・乾布磨擦・水泳指導・耐寒訓練などが、強力に実施された。そのため、昭和十八年には高等科担任教師の現職教育として、少年兵学校入隊がおこなわれると共に、陸海軍少年兵が校門から送り出された。

満蒙開拓を目ざす興亜教育が唱えられ、昭和十七年に県立広島師範学校附属国民学校において、興亜大会が催された。そして逐年、青少年義勇隊は内地の訓練を経て、満蒙の奥地開拓に赴いたのであった。

学徒動員令

昭和十九年八月、ついに学徒動員令が発せられ、中等学校以上の学生・生徒に対して、軍需産業部門に対する勤労奉仕が強制されることになった。さらに同年十一月、被爆による火災の拡大を防ぐ目的から、内務省の告示により消防道路・防空小空地を造ることになり、広島市内では一三三か所(八、二〇〇)の建物疎開を実施したが、この建物疎開作業の跡片づけ(瓦や材木の整理)に国民学校高等科・中等学校・高等女学校の生徒約八、三八七人が出動していて被爆し、約六、二九五人が無残な最期をとげた。もっとも被害の大きかったのは、八丁堀付近に出動していた崇徳中

学校で、出動生徒の九九パーセントが死亡した。ついで水主町県庁付近が九八パーセント、市役所裏の雑魚場町付近が八〇パーセント、土橋・小網町付近が七九パーセント、鶴見橋付近が四九パーセントの死亡者を出した。また、市内各事業所に出動していた学徒も多くの犠牲者を出した(別表・建物疎開作業出動状況表を参照)。

学童疎開

昭和十九年七月、学童疎開実施要綱が発表せられ、昭和二十年四月から七月末にかけて、市内の各国民学校は、佐伯・安佐・山県・高田・双三・世羅・比婆の七郡下の寺院や集会所に集団疎開を行なった。当時(昭和二十年五月一日現在)、児童総数四一、六三八人のうち、集団疎開児童数八、三六五人、個々の縁故疎開児童一七、四七一人、病気その他の理由で学校残留児童一五、八〇二人であった(新修広島市史)。

低学年の一、二年生は疎開せず、学区内の寺院や集会所に分散して授業を続けていたため、多数の犠牲者を出した。すなわち、爆心直下の本川国民学校の低学年児童をはじめ、至近距離の袋町・中島・済美、および本川などの各国民学校児童は、ほとんど全滅という惨状であった。この頃、夏休みは、八月十日から二十日までという戦時態勢をとっていたと言われる。

被害状況

この戦災誌に集録した学校数は、国民学校三九校、中等学校三〇校、大学・高等専門学校九校、合計七八校であるが、その被害状況をみると、国民学校では、全壊全焼一五校、全壊一校、全焼二校(半壊後に全焼したもの一校を含む。)

半壊一〇校、使用可能一校である。中等学校では、全壊全焼一三校、全壊四校、全焼二校(半壊後に全焼したもの二校を含む。)

半壊九校、半焼一校、使用可能一校である。また、大学・高等専門学校では、全壊全焼六校、全壊二校、半壊一校となっている(別表・広島市各学校被害状況表を参照)。

臨時救護所

被爆直後、本川・袋町両国民学校のように鉄筋コンクリート建ての外郭だけでも残った学校や、周辺部で焼けなかった学校は、いずれも負傷者が収容され、臨時救護所となったが、一か月ばかりのあいだに、元気を取り戻して出て行く者、肉親や縁故者に発見されて連れ帰られる者、あるいは死亡する者などあって、収容患者は減少していったが、終戦直後まともに授業の再開できる学校は、ほとんど無かったと言ってよい。

授業再開

八月二十一日に、国民学校校長会が開催され、学校の復旧対策・授業再開などについて協議されたが、行政機関も壊滅的な打撃からなかなか立ち直れず、復旧資材も資金も乏しかったから、まったく前途は暗いとばかりに包まれている。

しかし、教育に対する情熱は強く、各学校の責任者は、それぞれ復旧計画を進め、軍の解散後の施設や文房具などの獲得に努力したが、持ち帰った建築用材が、家のない市民に一夜のうちに盗まれたりして、辛苦を重ねた。

九月十五日から学校を再開するよう県当局から指示があり、家族や縁故者に連絡のついた疎開児童が復帰しはじめたから、ある学校では焼失しなかった学校へ一時通学させたり、ある学校では焼跡で青空教室を開いたりして、授業の再開をはかったが、教科書も文房具も無いにひとしい状況であり、まともな授業らしい授業はできなかった。食糧の不足も甚だしく、授業よりも焼跡を整理して、野菜作りに励むようなありさまであった。

焼跡の学校は、開校したといっても、多数の教師が死亡したり、負傷加療中で出勤する者が少なく、また出席児童もごく少人数であって、まったく心細いものであった。

なお、集団疎開児童のうち、被爆により帰るべき家もなく、肉親も縁故者も失い、いわゆる原爆孤児になった者五九人は、佐伯郡五日市町の広島市戦災児育成所(昭和二十年十二月一日開設)に収容された。

学校の再開と復旧について、全壊全焼した学校はなみだいていのことではなく、爆心地から約九〇〇メートルの地点にあった幟町国民学校の場合にみると、まず九月初めごろ、学校再開を決定して、生残り教師など関係者が再開対策を協議し、浅野泉邸内に、臨時収容所として軍が建てたトタンぶきバラック小屋で授業を開始した。そこへ集団疎開児童が復帰することになったので、受入れ態勢を整える必要に迫られ、東洋工業株式会社内の県庁をたびたび訪れて、外郭だけ残っている流川町の中央放送局を借用することに成功した。机・腰かけなどは旧軍隊の払下げ品で、十月五日からここで授業をはじめた。一方、校舎再建をはかり、三滝ほか二か所の兵舎の解体材を譲り受けることになり、用材は生存教員全員が一本ずつ運搬したが、積み重ねるはしから次々と盗まれ、校舎再建の用をなさなかった。

そのうち、放送局が避難先から帰って来ることになり、急ぎ立退対策を協議した。翌二十一年一月、中町の中央電

話局の借用に成功し、寒風の中を皆で器物を運びこんで移転した。とうとう幟町学区から隣の袋町学区へ入ってしまったのである。引続き当局と交渉を重ね、同年五月、焼野原の学校跡に帰って青空教室を続けながら、バラック建ての校舎再建に着手し、同年七月十五日に一〇教室が竣工、ここによくジプシー教室から脱することができたのであった。

この幟町国民学校のように、他の全焼学校も再建に苦労を重ねたが、本格的な校舎が建設されるようになるには、なお、二、三年の月日を要したのである。

中等学校もまた同じく、被爆後一か月余りたった九月十五日に学校を再開したが、多くは間借り教室で、例を広島県立第一中学校の場合にみると、翠町の第三国民学校(教職員七人・生徒約一〇〇人)・佐伯郡廿日市国民学校(教職員四人・生徒約五〇人)・安芸郡船越国民学校(教職員四人・生徒約五〇人)の三か所で授業が再開されている。勿論、教科書も学用品も焼失した者が多く、正常な授業はできなかった。

広島文理科大学は、鉄筋コンクリート建ての外郭が残ったから、被爆二か月後の十月ごろから早くも理科の一部は、被災校舎を整理して、実験再開をはかる研究室もあったが、翌二十一年一月に、江田島の津久茂国民学校において、大学三年生の授業が開始され、続いて一、二年生もこの地に集めて授業再開となったのである。まもなく化学部門は倉敷市(倉敷レーヨン)に移動して授業を再開した。続いて同年四月に、理科が東千田町に復帰した。こうしてようやく授業が軌道に乗りはじめたが、本格的な復旧をおこない、各室がまともに使用できるようになったのは、実に被爆十五年後の昭和三十五年であった。

このように国民学校から大学に至るまで、被爆による惨禍は計り知れないものがあり、現在の復興を見るまでには、言うに言われぬ苦心と多大な努力を必要とした。

上掲の写真は、被爆後七年目の夏、元安川における児童たちの遊泳風景であるが、この「平和」が、どのようにしてよみがえったかということを、忘れてはならないであろう。

広島市学童疎開実施表

学校名		疎開先	疎開児童	
			集団	縁故
一	本川国民学校	双三郡十日市 〃 八次	(8) 一四〇 (2) 六五	五〇〇
二	袋町国民学校	双三郡田幸村 〃 神杉村 〃 和田村 〃 川西村	(6) 四五〇 (3) 九六 (4) 五〇 (3) 八〇	不明
三	中島国民学校	双三郡三良坂町 〃 吉舎町	(15) 二一〇 (4) 五〇	約一、五四〇
四	幟町国民学校	山県郡八重町 〃 壬生町	(10) 二二〇 (6) 一三〇	七五八
五	竹屋国民学校	山県郡加計町 〃 安野村 〃 戸河内町 〃 筒賀村 〃 殿賀村	四〇 四〇 (15) 一三〇 四五 四五	三五〇
六	白島国民学校	安佐郡亀山村 〃 大林村 〃 飯室村 〃 鈴張村	(12) 二九〇	
七	三篠国民学校	高田郡本村 〃 横田村 〃 北村 〃 生桑村 〃 川根村	(10) 約二〇〇	約三〇〇
八	千田国民学校	山県郡大朝町 〃 新庄村 〃 川迫村 〃 蔵迫村	(6) 一三四 (4) 一一九 (2) 四〇 (2) 五二	約五五〇
九	天満国民学校	佐伯郡砂谷村 〃 水内村	(6) 一八〇 (5) 一五〇	約五〇〇
一〇	広瀬国民学校	双三郡酒河村 〃 川地村 〃 板木村	約 (8) 二〇〇	約一五〇
一一	段原国民学校	比婆郡山内西村		

		〃 山内東村 〃 口南村	(14) 三五九	不明
一二	神崎国民学校	山県郡吉坂村 〃 本地村 〃 南方村	(8) 一八〇 (4) 八〇 (4) 八〇	一、〇八〇
一三	観音国民学校	比婆郡東城町 〃 八幡村 〃 久代村 〃 田森村	(16) 三七二	六五〇
一四	荒神町国民学校	安佐郡小河内村 〃 久地村	(7) 九〇 (7) 九二	三八九
一五	比治山国民学校	佐伯郡津田村 〃 浅原村 〃 友和村 〃 栗谷村	(5) 八六 (4) 六〇 (2) 二一 (2) 三〇	約七〇〇
一六	皆実国民学校	安佐郡伴村 〃 戸山村	(5) 一五〇 (5) 一五〇	一、一三〇
一七	江波国民学校	双三郡吉舎町 〃 八幡村	(12) 一七〇	二四八
一八	尾長国民学校	比婆郡小奴可村 〃 八銚村	(9) 二四〇	約五〇〇
一九	矢賀国民学校	佐伯郡河内村	(4) 一二〇	殆んど無し
二〇	牛田国民学校	高田郡船佐村 〃 栗屋村	(12) 三八三	二〇
二一	草津国民学校	世羅郡吉川村 〃 上山村 〃 小国村	(16) 一七六	二四九
二二	己斐国民学校	世羅郡大見村 〃 東村	(1) 五〇 (1) 五〇	殆んど無し
二三	舟入国民学校	安佐郡狩小川村 〃 福木村	(10) 一八三	四〇〇
二四	古田国民学校	なし	〇	〇
二五	宇品国民学校	双三郡三次町 〃 布野村 〃 作木村	(25) 約四二〇	約九〇〇
二六	仁保国民学校	佐伯郡玖島村 〃 上水内村	(5) 一二〇 (8) 二二〇	殆んど無し
二七	大河国民学校	比婆郡本田村	(9) 二五〇	殆んど無し
二八	青崎国民学校	比婆郡庄原町	(13) 三五六	三七七
二九	楠那国民学校	比婆郡八幡村	(6) 一〇四	殆んど無し
三〇	大芝国民学校	双三郡三次町 比婆郡口北町	(6) 七三 (3) 四四	役二〇〇
三一	似島国民学校	なし	〇	〇
三二	大手町国民学校	比婆郡山内川北村 〃 高村	(4) 八八 (5) 一一四	三七八
三三	第一国民学校	なし	〇	〇
三四	第二国民学校	なし	〇	〇
三五	第三国民学校	なし	〇	約八〇〇
三六	光道国民学校	山県郡都谷村 〃 原村	(4) 役一〇〇	約六〇
三七	師範学校男子部附属国民学校	比婆郡敷信村	(29) 一五〇	一五五
三八	文理大学附属国民学校	比婆郡西城町	(26) 二七〇	一六〇
三九	陸軍偕行社附属済美学校	双三郡君田村 〃 河内村	(12) 三〇〇	一〇〇
四〇	県立盲学校	双三郡田幸	(26) 一〇六	
四一	県立ろう学校	高田郡吉田町	(18) 九八	
合 計			(478) 九、〇九一	一三、二四一

(註)

- ①この表は、学校側から提供された資料による集計である。なお()印内の数字は、引率教師の人数である。
 ②市周辺部の国民学校(己斐・草津・大河・仁保・矢賀・楠那など)では、縁故疎開児童は殆んど無かった。

集団疎開児童の記

一 竹屋国民学校の場合

本土決戦態勢に備えて、県北の各地に集団疎開を実施した市内国民学校の三年生以上の児童は、原子爆弾により、

その家族を失って孤児になった者も多数あったが、とにかく本人だけは被爆の惨禍から免れることができた。ここに竹屋国民学校の場合を例にとり、当時、学童疎開を担当した同校高井正文・児玉勘吾(現姓相良)両訓導の回想談と保管資料によって記録し、広島市学童疎開の諸状況をしのぶよすがとしたい。

疎開準備

昭和二十年三月三十一日、市学務課へ召集された校長から、電話で、「男子職員は全員残って待て。」という連絡があった。「人事異動にしては男子全員というのがおかしいなあ。」と、話しながら待っていると、午後遅く帰校した校長が、人事異動ならぬ学童疎開の実施について発表した。

それは、縁故疎開を含めての学童疎開要領の説明と、集団疎開先の発表であった。「明日ただちに現地の視察をせよ。」ということで、その出向先を担当訓導に指示した。

翌四月一日、指定疎開先の山県郡加計町・安野村・戸河内町・筒賀村・殿賀村以上五か町村へ、訓導五人がそれぞれ派遣された。高井訓導は加計町、児玉訓導は戸河内町へ出向した。

高井訓導は、加計に到着すると、すぐ町役場と県地方事務所を訪ね、種々打合せをおこなったあと、生活環境その他の調査をした。翌二日に帰広し、「現地は食糧事情は悪いが、受入れ態勢は良好で、地元の協力も得られる。児童の収容所・施設・収容能力・収容場所から加計国民学校までの距離・道路状況。それに、炊事婦・雑役夫とも現地採用が可能である。」ということ、詳しく校長に報告した。それぞれ担当者の視察報告が終ると、学校はあわただしく疎開準備に取りかかった。

集団疎開希望児童については、家庭の事情や身体状況(夜尿症なども含めて)を調査して編成され、夜尿症その他病弱な児童は残留組となった。こうして、疎開児童約三〇〇人、引率教職員一五人の出発準備が完了したのは、四月十日ごろであった。なお、集団疎開編成は次表のとおりである。

竹屋国民学校山県郡集団疎開編成表
(高井正文資料)

各班編成

番号	疎開地名	疎開学校名	宿泊の寮	担任者・その他	学童数
一	安野村本郷	修道国民学校	正覚寺	竹本正人 後 平田ミツ子 佐々木輝子 寮母三人 作業員二人	平均四〇人
二	加計町香草	加計国民学校	正念寺	高井正文 寮母一人 作業員一人	四〇人
			礼安寺 (鶴群寮)	京田光恵 寮母一人 作業員一人	
三	殿賀村堀	殿賀国民学校	西円寺	大目木保一 戦後 吉川静枝 寮母一人 作業員一人	四五人
			明願寺	保田初子 後 加藤純子 寮母一人 作業員一人	
四	筒賀村	筒賀国民学校	報正寺	岸本節夫 寮母一人 作業員一人	四五人
			西方寺	山河正人 寮母一人 作業員一人	
五	戸河内町本郷	戸河内国民学校	道教寺	吉本フサエ 寮母一人 作業員一人	一三〇人
			専正寺	児玉勘吾 寮母一人 作業員一人	
	同町柴木	四合国民学校	西善寺	荒川修一 後 養護婦 山根小静 寮母二人 作業員二人	
	同町松原	松原国民学校	松原集会町	片山鎮之 守山瑛子 寮母二人 作業員二人	
計	担任訓導 一六人 寮母五人 学童平均三〇〇人 養護婦 一人 作業員一四人				

疎开学童月別員数

月別	生徒数	教職員その他	計	摘要
----	-----	--------	---	----

四	三一三(人)	四四(人)	三五七(人)	(九月) 寮母一五人 作業員一四人 計二九人 (一〇月) 寮母四人 作業員四人 計八人
五	三〇九	四四	三五三	
六	三〇二	四五	三四七	
七	二九五	四七	三四二	
八	二七九	四八	三二七	
九	二三五	四八	二八三	
一〇	六五	二四	八九	
(参考) 引揚運賃 人件輸送 五五八円 物件輸送 四、九一八円				

残留児童

身体障害者などの残留組は、ずっと被爆のときまで学校で勉強した。一、二年生は、学区内を東西南北の四ブロックに分け、そのブロック内の寺院などを教室にあてて、分散授業をおこなうことになった。これらの担当教師は、毎朝一度、学校に集ってから、それぞれの担当場所へ出むくようにした。

出発

四月十三日、安野付・筒賀付・殿賀村各班が出発し、続いて十四日に加計町・戸河内町両班が出発した。

距離は広島市から約四〇キロメートルである。

学用品・衣類・寝具など児童の荷物はひとまとめにして、トラックで広島駅に送り、そこで貨車積みして、出発駅横川駅に送った。そして横川駅で待つ児童の疎開列車に連結され、安佐郡飯室駅まで運ばれた。

これらの出発準備・手配万端にあたっては、間賀田校長・光成教頭はじめ残留教職員・集団疎開児童父兄会、及び引率教師などが、それぞれ分担しておこなった。

出発の朝八時、児童は親に連れられて学校に集合し、引率教師の先導により、徒歩で横川駅まで行った。

静かに列を組んで歩く児童たちは、リュックサックを背負い、戦争のための避難とはみえず、まるで遠足にゆくようであった。引率教師は、この別離の道行きを心配していたが、乗った汽車がいよいよ動きはじめても、思ったより、見送る親も送られる児童も冷静であった。学校側も親たちに、子供が未練を残さないよう注意させ、「欲しがりません、勝つまでは」の覚悟を、どこまでも実行するようにと、強く励ましてきたからであろう。親と子は、汽車が見えなくなるまで手を振った。児童たちは、内心は、親と離れて遠くへ行くことが、淋しかったに違いなかったが、別れたあとの車中でも、わりあい明るくおとなしかった。

午前十一時ごろ、可部線飯室駅に到着した。児童たちは下車し、荷物も降ろしたが、連絡のバスが故障して、なかなか来ないため、近くの河原に出て弁当をひらくことにした。時あたかも春たけなわである。レンゲやツツジが溢れるように咲いている中を、児童たちは歓声をあげながら、走って、われ先きにと河原に出た。しばらくすると迎える木炭バスが来たので、急いでみんな乗りこんだ。荷物も乗せた。バスに揺られて行く道々レンゲ田が山峡の道をはさんで、あちらにもこちらにも、じゅうたんのように美しく咲いているのが、都会から来た目には、すごく印象的であった。高井訓導は一句をものした。

見らを率(る)てとぼしき峡(かい)のげんげ田に行く

高井正文

現地につく

こうして現地加計町に着いたのは、永い春の一日も、もう薄暗い夕ぐれであった。到着を待ちかまえていた地元の人々は、児童たちを拍手で迎え、すぐに用意の歓迎会が開かれた。高井正文班の泊る正念寺の場合はボタ餅であった。ひどい空腹の児童たちは、「いくらでも食べなさい。」と、やさしくもてなされて、疲労も忘れたようであった。新しい生活に人る緊張感から、一瞬解放され、やがて満腹すると共に、その場に眠りこみそうになる者もいた。たくさん作ってあったボタ餅は、その翌日の一食分にも足りるほど残っていた。

同じく加計町にきたもう一つの京田光恵班は、礼安寺を寮とした。この寮は、のちに土地の人が「鶴群寮」と名づけたが、ここの歓迎会も、正念寺とほぼ同様な状況であった。

その夜は、みんな早く眠り、翌朝になって、初めて自分の寮の全貌や、周囲の景色をはっきりと見た。そして今さらのように、これからの生活に対する緊張が湧いた。

加計国民学校

寺の本堂の前庭で、朝の体操をしてから、新しく編入する加計国民学校に登校した。学校では、疎開児童の受入式

と同時に、高井・京田両訓導の就任式がおこなわれた。校庭には、サクラが今を盛りと咲いていて、のどかなそして静かな山里らしい日和であった。

地元の人々

正念寺の疎開児童の世話は、所在地の香草部落と遅越・辻の川原両部落となっていたから、児童全員そろって、この三部落に行き、挨拶まわりをした。「何かとご迷惑をかけます。今後とも、どうかよろしくお願いします。」と、先生が言うと、子どもたちも一様に頭をさげた。もっとも遠い所は、辻の川原部落であった。篤農家として名高い富樫山次部落長は、子どもたちを見ると、涙を流して迎えられた。「よく来られた。なんでもお困りのときは、何時でも遠慮せず相談に来なさい。」と、一同を励まされ、白い粉のふいたツルシ柿を一つずつくださった。甘味に飢えていた子どもたちは、大よろこびで食べた。また夏になってからは、児童が一〇人も一緒に寝られる大きな蚊帳を提供されるなど、いろいろの温かいもてなしを受けた。

寒さこたえる

加計町は、広島にくらべるとかなり気温が低かった。しかも、今年は何時までも寒いということで、疎開生活も半月余りたった五月三日、八幡高原には雪が降り、イモの苗が、みな枯れるという騒ぎがあったほどで、加計でも霜が降ったのには驚かされた。なるべく荷物を軽くして来ており、もちろん冬支度のない児童たちに、この寒さはかなりこたえた。緊張感と衛生注意により、風邪をひく児童はいなかったが、他村の寮では肺炎性の感冒に罹る者もでるという状況で、引率教師として、いわば最初の難関に突きあたったのであった。夜尿症の子は残留組にして、連れて来なかったはずであるが、夜の寒気と夏用の薄いふとんでは、どの寮も、寝小便にまったく困らされた。

正念寺では、寮母が夜十時まで起きていて、十時に児童全員を起し、小便をさせてから就寝させた。その後は、広島との連絡や他の仕事で起きている高井訓導が、小便の世話をした。このため就寝午前二時というのが日課になった。三度の食事

山県郡の中でも加計地区は、もっとも米の生産の少ないところであったから、食糧事情は良くなく、洪水でもあって、三日も輸送が絶えると、もう米が底をつくといわれるほどであった。こんな土地であるから、田舎とはいえ、朝食はジャガイモの浮いたおかゆを、おわんに二杯だけである。昼食は白米であったが、艀の中で横になると、弁当箱の一方に片寄って隙間ができるというほどの少量であった。これも寮によっては、飯の中にワラビやゼンマイをはじめ、乾したヨモギがまじっているのもあった。ヨモギまじりの飯は、喉につかえ食べにくかった。時にはまた、幕末の飢饉の時に農民が食べたと伝えられるジョーボ(令布)と称する木の芽がまじっていた。イモがまじっているのは上の部であった。夕食は、朝と同じくおかゆで、おわんについでもらって手に持つと、タップタップと揺れた。

戸河内町の専正寺を寮とする児玉勘吾班は、わりと食糧事情がよかった。本郷部落にある高等科一、二年生が、自給農園の収穫物を、しばしば寄贈してくれたので、大いに助かった。その思いやりに頭がさがった。おかゆはやむを得なかったが、他にくらべると恵まれたものであった。それでもタンパク質の不足はひどく、山に行ってマムシやシヤカモを捕えて食べる子がいるというようなこともあった。

親の訪問

疎開児童の心を、動揺させないようにとの配慮から、親の訪問を禁止していたが、その申合せを破って、面会にくる者があった。個人的な連絡は、なるべく取らさないようにするため、後援会の「集団疎開児童父兄会」が、学校単位で組織され、それを抑えるようにしたが、親子の情は画一的におさまるようなものではなかった。手紙のやりとりは、最少限に許されていたが、やはり親も子も、現実に顔を合わさないと、気がすまなかったのであろう。そのため、親の来ない子どもが、一層さびしがった。

脱走

五月も中ごろを過ぎて、子どもたちもようやく疎開生活に馴れてきた。ある日、全員が地元の児童と一緒に弁当を持って、教師の引率のもと、みんなはしゃぎながら山へワラビ採りに出かけていった。

高井訓導は、ワラビ採りを他の先生にまかせて、学校の幹部会議に出席していた。そのとき、一二キロメートルほど下流の安野村の澄合国民学校から、電話がかかってきた。「疎開児童らしい女の子が二人、いま澄合部落を通り、広島へむかった。本校の職員が追っている。」という。高井訓導はびっくりして、同僚の自転車を借りて飛び乗った。心はあせり、ペダルを力いっぱい踏んだ。澄合部落から二キロメートルほど下ったところに、河岸道路が崩れたため、汽車のトンネルを道路に利用しているところがあり、そのトンネルの入口は、急な坂道から直角に曲って入るようになっていた。速度を出しきった自転車に、急ブレーキをかけて、曲ろうとしたとたん、高井訓導は自転車ごと投げだ

され、しばらく人事不省で倒れていた。やっと気がつき、あわてて自転車にまたがった。必死でペダルを踏み、飯室村の布がもうすぐというところ、久地付宇賀の対岸近くの道で、やっと追いつくことができた。

広島市はもうすぐそこであった。

先きに追いついていた澄合国民学校の先生は、女の子が頑として、加計に引返すことを拒むので、ほとんど手こずっているところであった。

この子たちは五年生と六年生で、六年生の子の父親は、硫黄島で玉砕していて、母親だけの家庭、内攻性の強い子であった。帰りたい一念からとはいえ、よくもこの長道を歩きとおしたものである。

「どうしたんだ。これから広島までは、ずっと遠い。今まで来た道の二倍も、まだ歩かないと帰れないんだぞ。」

高井訓導は、心のうちとは違ったことを、つい女の子に言った。

女の子の一人は、足を痛がり、つかまると、もう気がくじけて、歩けなくなった。それを自転車の荷台に乗せ、もう一人の子の手を引いて、今来た道を、また、トボトボと歩いて引返した。澄合部落まで歩き、そこからバスに乗せて、加計に帰らせた。この一度で、正念寺では何事も起らなかったが、半月ほどたって、殿賀村の寮から、電話で、「四年生の男の子が逃げたので、通ったらつかまえてくれ。」と、連絡があった。

それから間もなく、加計の町の下手で見つかり、なだめて送り返したことがあった。

フクロウ鳴く

正念寺の庭すみには、松の大木があった。そこで夜々フクロウが鳴いた。その声は、子どもたちをひどくさびしがらせたが、月の美しい夜、その姿をはっきり見ることで、かえってフクロウが親しみの対象となった。子どもたちは、自分たちの寮には、フクロウがいると言って、自慢するようになった。

お手伝い

麦刈や田植、麻の収穫などの手伝いをしたが、実際には、むしろ邪魔であったに違いない。それでもあちらこちらの部落から、よく迎えられた。それを機会にして、児童たちに腹いっぱいおムスビを食べさせてやろうという、農家の人々の温かい思いやりであった。

海兵隊来る

七月初め、海軍の設営隊(海兵隊)が二〇〇人ばかり、戸河内町本郷の国民学校へ来た。一教室二〇人で、一〇教室を使ったから、勉強できなくなり、疎開児童は寮で勉強することになった。設営隊は、松根を掘ったり、木炭を焼いたり、発電所の仕事だという河原砂揚げをしたりしていたが、軍隊は十分な食糧・衣類その他、軍務遂行上に必要なすべての物資を、教室に積みあげていて、その生活内容は、民間人とくらべて格段の差であった。しかし、何事も軍優先の時代であったから、誰も何もいうことはなく、そのはかばかしくない作業ぶりにも、ただ傍観しているばかりであった。

チフス発生

八月初め、戸河内町松原の班で、集団チフスが発生した。児童約四〇人のうち、師範学校を出たばかりの若い守山瑛子訓導と、児童六人がわずらった。病院は一四キロメートルも離れた本郷部落にしかなく、そこへ七人が入院した。原因は、面会にきた父兄のおみやげのピワということであったが、ふだんは元気そうに見えても、一度病気に罹ると、身体に抵抗力がなかった。たちまち栄養失調の障害があらわれて、急激に症状が悪化した。その上、医薬品もひどく欠乏していた。

守山訓導の父親は連絡を受けて、すぐ見舞いにきたが、医薬品を買いに広島へ引返した日に、原子爆弾にあって死亡した。そんなこととはつゆ知らぬ守山訓導は、心細い病床で、父のくるのが遅いことを恨みながら、八月十一日ついに死んでいった。守山訓導の葬儀がやっと終わったところへ、父の遺骨を持った母親がたずねて来た。児玉訓導は、その母親にあうと、ぐっと胸がこみあげてきて、しばらく絶句したまま、つつ立っていた。

六人の児童は、どうにかこうにか元気を回復した。これがせめてもの救いであった。また、この松原部落の寮では、三年生の男の子が、腸捻転をおこして死亡した。連絡した父の来るのも間にあわず、医師の手当も効なく、苦悶のうちに死んだのである。

広島被爆

八月六日の朝、児玉訓導は五年生以上の児童を引率して、広島ではめずらしいリンゴとジャガイモを採りに、山の畑にあがって行く途中、ピカッと異様な光線を感じた。「おかしいぞ……」と思いながら、山の高い所から広島市の方を遠望していると、一五分ぐらいして、黒煙がもうもうと広島市内を包むように、立ちのぼっているのが見られた。

そのうち、ヒラヒラと紙切れがたくさん空から降ってきた。足もとに落ちたのを拾ってみると、紙ぎれは火に焦げており、あきらかに経文の断片であった。「寺町の方が空襲されたんだろう。そのうちに広島から連絡があるだろう。」と、子どもたちに言った。みんなはリングやジャガイモを採って、午後三時ごろ、山を降りた。

五時ごろ、定期の電鉄バスが着いた。そのバスに、父兄三人が乗って来たが、いずれもひどく負傷しており、衣服はボロボロに裂け、裸足のままという無残な姿であったから、子どもに逢わせないようにして、そこからすぐに他の寺へ案内し、治療その他のことを手配した。父兄には一週間ばかり子どもをあわせなかった。

高井訓導は、たまたま被爆前日の五日に、児童たちの冬物の引取りやその他の用務のため帰広し、その夜は、佐伯郡廿日市町の家族の疎開先に泊り、六日の朝、家を出るところで原子爆弾の炸裂に遭遇した。午後二時、学校のことが気になり、急ぎ出て行ったが、観音橋まで来たとき、校医の松林医師に出会い、市中は大火災の最中であることはできないと知らされた。また、橋のたもとの家が炎上中で、道路をはばんでおり、どうすることもできなかったから引返さざるをえなかった。翌七日昼ごろ、まだ余燼のくすぶる中を、学校跡にたどりついた。見渡す限り焼野原となり、コンクリート建物の学校の玄関だけが、ポツンと建っているだけであった。その壁に、焼けぼっくりか何かで、「八月〇日、職員はここに集まれ。」と、連絡事項が書いてあったが、全市一面、焦土と化したいま父兄の状況調査もできないまま、九日に加計町へ引返した。

加計の寮では、高井訓導もおそらく死亡したものと、予想していた。そこへ帰って来たから、児童たちは、寺の石段を飛ぶようにして下りて来て、歓声をあげた。

十一日には、戸河内班の児玉訓導が状況調査に広島市へ帰って来たが、学校はもちろん焼失しており、どうすることもできない。何とか判らないものかと、郊外の長束に住む吉本フサエ、江波の本田和佳子両訓導を訪ねて、ようやく概略を知ることができた。三日ほど滞在して歩きまわったが、父兄に逢おうにも逢えず、とりあえず戸河内町に引返した。待っていた子どもたちには、広島市内が焼野原になったとは言わず、「だいぶんやられているが、父や母は生きている。きっと皆を連れにくるから、その日までおとなしく待っていよう。」と説明し、動揺しないようにつとめた。各寮の引率教師の中には、市内に家庭のある者が少なくないので、広島の実情を聞くと、みんな気が気ではなかった。加計町の京田訓導も、学校と児童の家族調査をかねて、高井訓導と入れかわりに広島へむかった。京田訓導の家は、市の中心部にあったから、家族にも親類にも多数の死亡者があったが、充分にとむらういとまもなく、児童の家族について、できるだけの調査をして帰って来た。

児童の引取り

十日過ぎごろから、父兄の方から直接連絡があり、児童の引取りを希望する者もあったが、さらに八月十五日の終戦以後は、各寮ともぼつぼつ引取りがはじまった。八月下旬ごろからは、寮の方から進んで引取らせるよう調査を進めて、連絡の手配をとったが、引取りに来たのは、被爆しながらも、どうにか来られるという僅かの父兄だけであった。引取人の中には、その児童の縁故者という場合も少なくなかった。

児玉訓導のもとでは、家族全員が被爆死して孤児になった三年生の男の子を、その叔父が引取りに来た。

叔父は一晚泊したが、その時、男の子の持物を調べた。その子は、父親から万一の場合にそなえての配慮からか、二〇数通の貯金通帳と、そのほか財産一切のことを書いた紙を持っていた。「どんなものが書いてあるのか見せろと、叔父さんに言われて、今、見せているよ。」と、何となく不安を感じたらしい学友が、そっと児玉訓導に知らせて来たが、気がかりながらも、どうすることもできないことであった。後日、児玉訓導はその子が全部の財産を取られたうえ、いまだに行方が判らないということを聞いた。

ゆたかな食卓

終戦の日から、九日ばかりたったころ、本郷国民学校にいた海軍の設営隊が引揚げていった。そのあと、設営隊が確保していた軍用食糧が、どっと民間に放出されると共に、きびしく統制されていた物資が、自由に出まわるようになり、戸河内町の食糧事情が一変した。米や乾パンや、かん詰・衣類などが、疎開児童にもどっさり配給された。それに密殺の牛肉や鶏肉なども、金さえあれば欲しいだけ買えるようになった。

急に春が来たように、生活が解放され、食卓は夢のように豊かになった。子どもたちはわれを忘れて食べあった。「よう肥えて広島に帰るんだぞ。」と、児玉訓導は幾度も大声で言った。育ち盛りの子どもたちが、永い忍従の生活に、よくも堪えてきたことだと思いかえし、そのいじらしさに、こみあげてくる熱い涙をぬぐった。

引揚げ準備

子ども引取りの父兄も、来るだけは来たようだし、残っている子どもの家族の、その避難先や縁故者の有無なども、

ほぼ判明したので、各班とも、いよいよ広島へ引揚げる準備をはじめた。児玉訓導が先ず広島に帰り、学務課と連絡して、竹屋国民学校の児童三五〇人、及び寮母その他使用人の手当など、集団疎開経費八、九月分の一〇万円(二百円札五〇〇枚)を受取り、九月二十日ごろ、疎開現地へ帰って来て、それぞれの後始末をおこなった。

集団疎開 8・9月前渡金使用明細書

摘 要	収 入	支 出	残 高
高井先生より預かる	5,200.00		
8月分賄費 23円×48人		1,104.00	4,096.00
8月分諸費 9円 15×41人		375.15	3,720.85
9月分賄費 23円×41人		943.00	2,777.85
9月分諸費 9円 15×34人		311.10	2,466.75
児童冬物運送代		161.94	2,304.81
机、腰掛 6月ノ運送代		228.67	2,076.14
市ヨリ役場ヘノ謝礼		100.00	1,976.14
職員俸給及手当		823.90	1,152.24
寮務手当 30円×6月		180.00	972.24
医務手当 15円×6月		90.00	882.24

(高井正文資料)

引揚げ実施

九月十七日から十八日にかけて、枕崎台風が中国地方を襲って、太田川は氾濫し、堤防が各所で欠壊した。このため太田川沿岸の交通が寸断され、加計町では配給食糧の確保もおぼつかない状況に陥り、引揚げが急がれることになった。高井・京田両班は、九月二十五日に遠まわりの道を通して、第一次引揚げを実施することにし、これまでに引取り先のはっきりした児童だけ二〇数人で、朝早く寮を出発した。児童たちは、寮から帝国製鉄加計工場の木炭輸送トラックに便乗し、現在の豊平町まで行き、村のまん中で下車、そこから歩いて可部へ抜けたのである。その途中の道路も、河川氾濫の傷あとはひどく、子どもには相当な難行軍であった。山の中の木こりの通る細い路などを、登ったり下ったりして、ともかくも歩いた。子どもたちはまだ夏の服装のままで、手廻り品と弁当を詰めこんだリュックサックを肩に負い、手にもたくさんの荷物を持っていた。「広島に帰るんだ。さあ、歩け歩け。」と、お互いに励まし励ましして山を越えた。山越えの途中、雨が沛然と降って来たが、びしょ濡れになるのもいとわず、親のもとに帰りたい一心から、疲れたとも言わないで、赤土のぬかるみに足をとられながら、一步一步、前進した。しかし、やはり一日では可部まで出られなかった。鈴張で日が暮れかけたので、そこの旅館に一泊した。旅館では、みんないっせいに服やその他の雨に濡れた物をならべて乾すと、体力を消耗しないように早く眠った。

広島に到着

夜が明けると、身仕度をととのえて早々と出発した。帰る道々の町や村に、その子の肉身や縁故者が避難していれば、そこにそれぞれ引渡ししながら歩きつづけて、正午ごろ、広島市内に入った。引揚げる前に、各児童の肉親や縁故者と連絡を取り、横川駅で引渡すことにしていたから、迎えに来た人々には児童を渡したが、迎えに来なかった児童には、一人一人にその肉親や縁故者のいる郊外の避難場所をよく教えて帰らせた。しょんぼりと一人で別れて行く子どもの、うしろ姿を見送りながら、その無事を心に祈った。このようにして、子どもたちを家庭に送ってしまうと、いつか夜になっていた。

戸河内町の児玉班でも、引取りに来ない児童が約半数ほど残ったが、引続き調査の手をのばして、父兄の居場所がだいたい判った順に、七、八人ずつ三回に分けて引揚げを完了した。児玉・吉本両訓導は、児童の荷物を自転車の荷台に積みあげ、歩け歩けと、高井班と同じような強行軍で復帰した。寮を出るとき、役場から児童の一人一人が、白木綿(ヤール幅)三メートルと、特に両親の亡くなった者は毛布を一枚ずつもらった。

ふとんや蚊帳など大きい物は、トラックで己斐国民学校(広島市)まで送り出し、それぞれの家族が個々に受取るように連絡をしておいた。

戸河内町を朝出発して、広島市には午後三時ごろに到着し、各家庭に一人ずつ送りとどけた。それが終ると児玉訓導は、楽々園(佐伯郡)の自宅で一泊し、翌日また引返すという方法をとった。

引揚げ完了

引揚げの実施中、行方不明で存否のわからなかった家族が連れに来ることもあったし、連れに来なくても、避難場所が判明して連絡がついたりして、結局、引揚げ作業の完了したのは、高井班が十一月十五日、児玉班が十二月五日であった。その他の班も、だいたいこの頃には終了した。

児童の送届け

連れて帰った児童を家庭に送りとどけるにあたって、高井班では、単に広島市内や近郊だけでなく、相当遠いところもあった。十月二十五日のときは、四年生の女の子一人を福山市まで汽車で連れていったし、四年生の男の子一人は、父親から加計町に連絡があり、父は被爆で重傷のため動けず、母は妊娠中で外出できないとのことで、父母のいる島根県邑智郡出羽村岩屋の避難先へ連れていった。十一月六日、自転車で荷台に子どもの荷物を積み、膝に子どもを乗せて三坂峠を越した。朝早く出て、豊平町鳥越まで帝国製鉄のトラックに便乗したが、途中下車して道に迷い、「ガンバレ、ガンバレ。」と自分に言いかけせながら、自転車を押して山越えをした。新庄を経由して三坂峠へ出たのであるが、峠で自転車がパンクした。トボトボと田所まで歩いて行き、パンクをなおして、またペダルを踏み続け、夕方四時ごろであったか、ようやく着いた。

草餅をよばれて、その晩はそこに一泊した。

児童の復帰について、母親関係の内輪的なもつれから、その処置に困ったものも多くあった。ある六年生と三年生の姉妹は、妾腹であった。当時は私生児といって、世間から冷遇されたものであったが、姉妹の生みの親が、流川町の家で、姉妹の弟(一年生)と一緒に被爆して死亡した。姉妹は、いわゆる主人のかくし子であったから、義母は引取ることを拒絶した。その義母は横浜市に居住していたため、折衝も困難をきわめたが、幸い叔母が呉市にいたので、これを説得し、叔母がいちじ預かることになって結着がついた。十月ごろ、姉妹二人は叔母のもとに頼っていった。

また、両親が被爆死亡し、肉親といえば、山口市在住の祖父母だけになった子どもがいた。祖父母は、「年寄りで、今さら子どもをようみない。」と言って、引取ろうとしなかった。この子が最後まで残ったが、説得を続けたすえ、結局、祖父母が引取ったが、いちじは途方にくれた。

安野村の寮(寺)にい四年生の男の子は、賢い子であったが、被爆により家族が行方不明となり、これも引取人のない子の一人であった。これは、寺の方から請われて、そこの小僧になった。三か月ぐらい寺にいたところ、縁故者があらわれて、ようやく落着いた。

慰霊祭

十一月十日、学校の焼跡に間賀田校長以下教職員一〇数人が集合し、玄関前の焼残りのコンクリート壁のある所で、校内の遺骨を集めて慰霊祭を執行した。僧侶出身の寺沢篤雄訓導が読経し、原子爆弾被爆犠牲者の冥福を祈った。子どもたちの父兄は、ほとんど出席しなかった。父兄たちは、それぞれ被爆後の無残な生活に、その日その日をあえいでいたからであろう。

広島市内各学校の建物疎開作業出動状況

雑魚場町付近(市役所裏)

学 校 名	出動者数		死亡者数	
	引率者	生 徒	引率者	生 徒
袋町国民学校	一	七〇		約六八
千田国民学校	一	五〇	一	五〇
大手町国民学校	二	四五	二	約四〇
第三国民学校	八	二〇九	七	一五二
広島県立第一中学校	四	約三〇〇	四	約三〇〇
広島県立第二高等学校	三	四一	三	四〇
広島県立商業学校	約一三	四四〇	三	九〇
修道中学校	一〇	一八三	※一〇	一八三
山陽中学校 山陽工業学校 山陽商業学校	七	四一〇 (天神町を含む)	※一一	約四一〇
広島女学院高等女学校	一二	三五〇	※一六	※二八一
附属山中高等女学校	三	約三六〇	三	約三六〇 (一人生存)
合 計	約六四	約二、四五八	※六〇	約一、九七四 約八〇%

土橋付近(小網町・西新町・堺町)

学 校 名	出動者数		死亡者数	
	引率者	生 徒	引率者	生 徒
本川国民学校	一	約七二	一	七二
三篠国民学校	五	二五〇		一〇二
天満国民学校	三	九〇	三	九〇

草津国民学校	四	一六七		二
広島県立第一中学校		五〇		五〇
〃 第一高等女学校	六	二二〇	六	二二〇
広島市立中学校	七	三五三	四	二九二 (計算により求む)
崇徳中学校	二	一九七		不明
西高等女学校	不明	約一五〇	不明	約一五〇
安芸高等女学校	四	二三七		二三七
合 計	三二以上	約一、七八六	一四以上	約一、二一六 約七九%

県庁付近(水主町・中島新町・天神町・材木町)

学 校 名	出 動 者 数		死 亡 者 数	
	引 率 者	生 徒	引 率 者	生 徒
第二国民学校	五	約二五〇	※六	約二五〇
広島県立第二中学校	八	三四三	八	約三四三
広島県立広島工業学校	三	一八七	三	一八七
広島市立第一工業学校	一	一四		① 二四
広島市立造船工業学校	五	一九五	五	一九四
広島市立第一高等女学校	八	五四四	七	五四四
崇徳中学校	一	六二		不明
松本工業学校	② 四	② 七〇	一	五四
安田高等女学校	五	二五六	※七	二五六
合 計	四〇	約一、九二一	※三七	約一、八五二 約九六%

電信隊付近(皆実町)

学 校 名	出 動 者 数		死 亡 者 数	
	引 率 者	生 徒	引 率 者	生 徒
広島市立第一工業学校	※四	※二〇〇		
松本工業学校	②	②		

鶴見橋付近(鶴見町・昭和町)

学 校 名	出 動 者 数		死 亡 者 数	
	引 率 者	生 徒	引 率 者	生 徒
白島国民学校	一	六七		約六七
牛田国民学校	一	二六		一六
楠那国民学校	一	一四	一	〇
第一国民学校	五	約一五〇	一	四六
広島市立第一工業学校	一	一二	二	①
広陵中学校	四	四〇〇	一〇	二二
進徳高等女学校 (南竹屋町の校門)	一〇	三三九		約三三〇
広島女子商業学校	一〇	五〇〇		二六二
合 計	三三	約一、五〇八	一四	約七四三 約四九%

八丁堀付近

学 校 名	出 動 者 数		死 亡 者 数	
	引 率 者	生 徒	引 率 者	生 徒
崇徳中学校	七	五一四	七	約五一〇 約九九%

(註)一、※印は、他の工場などに動員されていたものを含む。

二、①は鶴見橋付近を含む死亡者計

三、②は皆実町付近を含む計

四、死亡者数は、即死者数十行方不明数及び重軽傷者のうち、その後死亡した数も含む。

五、「不明」の場合は、一応出勤者全員が死亡したものとして、パーセンテージを出した。

広島市内各学校被災状況表(動員学徒を含む)

[illegible]

○国民学校											
1	本川 国民学校	○	○				広島郵便局(細工町) 建物疎開作業(小網町)	1 1	17 約 72	2	89
2	袋町 "	○	○				建物疎開作業(雑魚場町)	1	70		約 65
3	幟町 "	○	○				な し				
4	中島 "	○	○				な し				
5	大手町 "	○	○				建物疎開作業(雑魚場町)	2	45	2	約 40
6	広瀬 "	○	○				大橋製靴工場(三篠町)	2	40		8
7	神崎 "	○	○				な し				
8	天満 "	○	○				建物疎開作業(土橋付近)	3	90	3	90
9	観音 "	○	○				な し				
10	竹屋 "	○	○				な し				
11	白島 "	○	○				建物疎開作業(鶴見町)	1	67		約 67
12	千田 "	○	○				建物疎開作業(雑魚場町)	1	50	1	50
13	段原 "	○	○				な し				
14	三篠 "	○	○				大芝兵器工場(大芝町)	1	40		102
							油谷重工業(安佐郡祇園町)	1	40		
							中広航空(中広町)	1	50		
							日産自動車(三篠町)	1	50		
							日本針工業(楠木町)	1	50		
							建物疎開作業(土橋)	5	250		
15	舟入 "					○	な し				
16	皆実 "			○			な し				
17	荒神町 "	○					な し				
18	大芝 "			○			な し				
19	牛田 "			○			建物疎開作業(富士見町)	1	26		16
20	尾長 "		○				な し				
21	比治山 "			○			な し				
22	己斐 "					○	広島鑄工所(打越町)	1	50		2
23	大河 "			○			自研自動車修理工場(千田町)	1	50	1	
							網本食品工場(旭町)	1	50		
24	矢賀 "					○	な し				
25	江波 "					○	な し				
26	宇品 "					○	な し				
27	古田 "					○	な し				
28	仁保 "					○	軍用テント工場(霞町)	2	150		
							鉄道電修場(蟹屋町)	1	50		
29	楠那 "					○	建物疎開作業(鶴見町)	1	14	1	
30	草津 "					○	建物疎開作業(土橋)	4	167		
31	青崎 "					○	東洋工場(安芸郡府中町)	2	161		
32	似島 "					○	陸軍兵器補給廠似島弾薬庫(似島町)	1	5	なし	
							高射砲陣地(似島)	1	51		
33	第一 "			○			駅前郵便局(松原町)	1	55	1	46
							杉原縫製(出汐町)	1	15		
							専売局(皆実町)	4	約 110		
							昭和金属(大洲町)	2	約 60		
							児玉工業(大洲町)	2	約 60		
							東洋工業(安芸郡府中町)	2	約 50		
							三星製菓(西蟹屋町)	3	約 80		
							建物疎開作業(鶴見町)	5	約 150		
34	第二 "			○			大和重工業(南観音町)	2	約 100	6	約 250
							昭和金属(観音本町)	1	約 50		
							広島印刷(南観音町)	4	約 250		
							帝国兵器(吉島羽衣町)	1	50		
							電鉄(千田町)	1	50		
							大木印刷(古田町)	1	50		
							熊野製罐(舟入南町)	2	50		
							小原製菓(水主町)	3	155		
							通信局(白島町)	1	50		
							建物疎開作業(県庁北側)	5	約 250		
35	第三 "			○			中国配電(立町)	1	20	7	152
							東洋製罐(天満町)				
							熊平金庫(宇品町)	3	約 70		
							広島瓦斯(皆実町)				
							建物疎開作業(雑魚場町)	8	209		
36	県立広島師 範学校男子			○			な し				

	部 附 属 国 民 学 校											
37	広島陸軍借 行 社 附 属 済 美 国 民 学 校	○	○				な し					
38	光 道 国 民 学 校			○			な し					
39	広島高等師 範 学 校 附 属 国 民 学 校		○	○			松 根 掘 り 作 業 (比 婆 郡 西 城 町)	1	18	なし		
合 計		16	17	11	0	11		92	3,657	24	980	
○ 中 等 学 校												
1	広島県立 第一中学校	○	○				呉海軍工廠(呉市)	2	約 100	11	約 220	
							東洋工業(安芸郡府中町)	6	約 280			
							旭製作所(江波町)	1	50			
							同 地御前工場	10	約 520			
							広島航空(古田町)	4	約 209			
							建物疎開作業(雑魚場町)	4	約 300			
							同 (土橋)		50			
2	広島県立 第二中学校	○	○				三菱造船所(南観音町)	10	約 500	8	350	
							食糧増産作業(東練兵場)	6	約 250			
							建物疎開作業(中島本町)	8	343			
3	県立広島師 範学校			○			暁部隊補給部(金輪島)本科一年生 呉海軍工廠(呉市)本科二、三年生 農業実習(安芸郡奥海田)予科二年	不明	不明	1	3	
4	広島県立広島 工業学校	○					呉海軍工廠(呉市)	2	75	3	189	
							呉海軍施設部(呉市)	3	146			
							日本製鋼所広島製作所(安芸郡船越町)	4	207			
							同 蟹屋町文所	1	57			
							三菱造船所造機部(南観音町)	3	145			
							電気試験所(横川町)	1	8			
							第十一海軍航空廠(岩国市)	2	58			
							帝国兵器(吉島町)	1	20			
							陸軍暁六一四〇部隊修理部(金輪島)	1	6			
							丸二木工(佐伯郡廿日市町)	1	52			
							倉敷航空機製作所					
							広島県広島工業学校工場(千田町)	1	13			
							日本製鋼所広島製作所					
							広島工場学校(千田町)	2	47			
							倉敷航空製作所吉島製作所(吉島町)	3	約 40			
							中国配電大洲製作所(大洲町)		10			
							萩野鉄工(大洲町)	1	20			
							旭兵器(吉島町)	1	20			
							建物疎開作業(県庁附近)	3	187			
5	広島県立広島 商業学校	○					三菱造船所(江波町)	1		3	90	
							石田兵器所(中広町)	1	約 45			
							亀田製砥所(大洲町)	1	約 45			
							建物疎開作業(雑魚場町附近)	13	440			
6	広島県立 広島第一 高等女学校	○	○				広航空廠(呉市)	6	約 300	6	約 220	
							東洋工業(安芸郡府中町)	6	約 300			
							被服支廠分所(安佐郡河内国民学校内)	2	約 100			
							広島印刷(南観音町)	6	約 300			
							広島航空(古田町)	6	約 300			
							第一県女救護班(県女内)	11	約 50			
							建物疎開作業(土橋)	6	220			
7	広島県立第 二高等女学 校(広島女 子専門学 校内)			○			第二総軍作業場(東練兵場) 陸軍作業場(金輪島) 広島地方専売局(皆実町)	17	約 250	3	43	
							建物疎開作業(雑魚場町)	3	41			
8	広島県 豊学校			○			な し					
9	広島県 盲学校			○			な し					
10	広島市立 中学校	○	○				三菱重工(南観音町)	7	300	4	365	
							建物疎開作業(小綱町)	7	353			

11	第一工業学校					○	東洋工業(安芸郡府中町)	4	144	3	50
							呉海軍工廠(呉市)	4	99		
							広島市役所(国泰寺町)	1	5		
							富田製油(舟入町)	2	50		
							中国配電大洲製作所(大洲町)	2	50		
							本校機械科工場(東雲本校舎)	2	30		
							建物疎開作業(水主町)	1	14		
							油谷重工(安佐郡祇園町)		20		
							同(鶴見橋)	1	12		
							同(皆実町)	4	200		
12	広島市立第二工業学校 (広島工業専門学校内)			○			なし				
13	広島市立造船工業学校	○	○				三菱観音工場(観音町)	13	約 400	8	246
							三菱江波工場(江波町)	7	約 300		
							呉海軍工廠(呉市)	7	200		
							広島国民学校防空要員(広瀬町)		30		
							建物疎開作業(材木町)	5	195		
14	広島市立第二商業学校 (本川国民学校内)	○	○				なし				
15	広島市立第一高等女学校			○			大東亜食料興業(西観音町)	1	45	7	544
							関西工作所(舟入川口町)		数人		
							日本製鋼所広島工場(西蟹屋町)				
16	広島市立第二高等女学校			○			建物疎開作業(材木町)	8	544		7
							単森金属工業(水主町)	1	49		
17	修道中学校				○		合同製鋼所(三篠町)	1	33	10	183
							日本製鋼所広島製作所(安芸郡船越町)	3	180		
							兵器補給廠(霞町)	5	306		
							三菱広島造船所(南観音町)	4	235		
							呉海軍工廠(呉市)	2	12		
							建物疎開作業(雑魚場町)	10	183		
18	山陽中学校 山陽工業学校 山陽商業学校	○	○				東洋製缶(天満町)	1	約 100	11	475
							桐原容器工場(舟入本町)	2	約 120		
							宮本航機工場(皆実町)	1	約 50		
							三菱重工広島製作所(南観音町)	3	約 200		
							呉海軍工廠	3	約 200		
							旭兵器工場(佐伯郡地御前)	1	約 100		
							日本製鋼所広島製作所(安芸郡船越町)	1	約 150		
							太東兵器(中広町)	2	約 90		
							大竹三菱化成工場(大竹市)	2	約 70		
							中国塗料(吉島本町)	1	約 60		
							中本鉄鋼所(大洲町)	2	約 50		
							宇品造船所(宇品町)	2	約 50		
							建物疎開作業(雑魚場町、天神町)	7	約 410		
19	崇徳中学校	○	○				水田金網砥石工場(楠木町)	1	40	7	514
							三菱重工機械製作所(江波町)	2	211		
							兵器支廠(出汐町)	1	60		
							呉海軍工廠(呉市)	1	45		
							学徒防衛隊(楠木町)	3	44		
							建物疎開作業(八丁掘)	7	514		
							同(小網町)	2	197		
							同(水主町)	1	62		
20	広陵中学校			○			広島陸軍糧秣支廠(宇品町)	2	150	2	38
							広島鉄道保線区(大須賀町)	1	50		
							広島鉄道第一機関区(西蟹屋町)	1	107		
							呉海軍工廠(呉市)	2	90		
							広島吉島航空機械工場(吉島町)	2	120		
							建物疎開作業(鶴見橋)	4	400		
21	松本工業学校		○	○			広島駅電気工事区(大須賀町)	1	20	1	54
							陸軍砲部隊(金輪島)	1	50		
							佐伯鋼業(舟入幸町)	4	115		
							三菱造船(江波町)	4	115		

1	広島女学院 専門学校	○	○				東洋工業(安芸郡府中町)	4	278	4	63
							広島財務局広島税務署(八丁堀)	1	25		
							師団司令部及び聯隊区司令部(基町)		10		
2	臨時教員養 成所	○	○				航空機工場(愛媛県)全員		250		5
3	広島女子専 門学校			○			陸軍運輸部(宇品町)	5	115		6
							水島航空機製作工場(倉敷市)	5	95		
							広島郵便局(細工町)		5		
							広島聯隊区司令部(基町)		1		
4	広島女子高 等師範学校	○	○				(附属山中高等女学校に含む)				
5	広島医学専 門学校	○	○				な し				
6	広島工業専 門学校	○					海運監督所(大手町) 東洋工業(安芸郡府中町) 三菱機械工場(安佐郡祇園町) 日本製鋼所(安芸郡船越町) 中国配電大洲製作所(大洲町) 坂発電所(安芸郡坂町) 三菱化成工場(大竹市) 帝人三原工場(三原市) 帝染福山工場(福山市) 三菱電気工場(福山市) 三菱車輛工場(三原市) ソノ田工場(徳山市) 新居浜化学工業(愛媛県新居浜) 日本酒類門司工場(福岡県大里市) 日東門司工場(福岡県大里市) 東芝余部工場(兵庫県余部) 東芝電気工場(兵庫県網手) 川西機械大久保工場(兵庫県大久保)		729		0
7	広島高等師 範学校	○	○				三菱造船所(江波町) 三菱機械製作所(観音町) 二、三、四年生の大部分	10		10	14
							東洋工業(安芸郡府中町)一年生				
							運輸部(宇品町)文科系の学生一部				
							被服支廠(旭町)	4	14		
							軍需管理部(皆実町・旧広島内)	5	31		
							機甲訓練所(宇品町)		4		
							糧秣廠(宇品町)		1		
8	広島高等学 校	○					日本製鋼所広島製作所(安芸郡船越町)	10	約 210	4	約 40
							東洋鋼板下松工場(山口県下松市)	1	約 280		
							呉海軍工廠(呉市)	1	約 130		
9	広島文理科 大学	○	○				日本製鋼所(安芸郡船越町)	10	150	17	20
							海軍煩研究部(大学内)		数人		
							学内動員(高師を含む)	80	130		
合 計		8	6	1	0	0		136	2,478	35	148
総 合 計		41	38	23	1	12		717	27,610	207	6,981

(注)一、「全壊」は、一部に倒壊をまぬがれ、大破・半壊程度のあるものを含む。

二、鉄筋建の外郭が残り、内部が大破焼失したものは「全壊・全焼」とした。

三、「半壊」は、一部倒壊した部分のある建物も含む。

四、夜間学校は、校舎が他校と重複するが、独立一校として扱った。

五、動員学徒の死亡数は、現時点(四十三年六月)で判明している「即死者＋行方不明者」の数である。

六、この集計表は各学校提出の資料に基づくもので、総合計数以外に不明分がある。

第二節各国民学校…53

第一項広島市本川国民学校(現在・広島市立本川小学校)…53

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市鍛冶屋町三九番地
校長 川崎政信
教職員 二六人
児童 概数約一、〇〇〇人
校舎 鉄筋三階建・二七教室(坪数不明)
敷地面積 不明
爆心地からの距離 約三五〇メートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十五日	双三郡十日市 双三郡八次	八人 二	一四〇人 六五 (男三六 女二九)	五〇〇人	
合 計		一〇人	二〇五人	五〇〇人	

広島市本川国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事 業 の 区 別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
広島郵便局	細工町	一人	一七人	郵便事務	
建物疎開作業	小網町	一	約七二	疎開跡片づけ	原簿焼失のため出動 人数は正確にはわか らない。
合 計		二人	約八九人		

四、指定避難先と経路

低学年の残留児童は、分散授業のため、分散先において、それぞれ避難させることにしていた。

五、校舎の使用状況

当時、県庁土木部、その他会社関係が二階の各教室を使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	一〇人	二一八人	三人	六日朝、原子爆弾炸裂前に登校して、空鞘神社に祈願に行った教員一人と児童二〇人は全員即死したといわれる。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…全壊全焼(外郭のみ残る)

当校は爆心地から西北西約三五〇メートル離れたほとんど爆心直下というべき至近距離の所に位置しており、その被害は言語に絶し、凄惨をきわめた。

校舎は、すべて鉄筋コンクリート建てであり、焼夷弾や普通爆弾では比較的安全に思われていたが、校舎以外の付属物は飛び散り、寸時にして強力な熱線のために着火したものらしく、外郭のみを残して完全に焼失してしまった。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	六人(二) (三) 五	二一八人(八九) 不明 不明	()内は学校外(動員先)での被爆者数
計	一一(六)	二一八人(八九) ただし、判明分のみ	

川崎政信校長は、運動場で被爆即死し、堀部克子助訓導(現姓堀江)・越智美智子事務員・白川慶子給仕の三人は職員室前の廊下で被爆し、顔面その他にガラスの破片が突き刺さって負傷、血に染まりながら、学校東側の元安川の河岸に避難し、石垣にしがみついていた。そのうち、白川慶子は水に流されて行方不明となり、越智事務員と連れて来

た四、五人の児童は、河岸に避難した数百人の中で散り散りになった。

小網町の建物疎開作業に引率教師として出動していた宮地和藤次訓導は、負傷児童を避難させてから帰校し、河岸で見つけた堀部訓導をかかえて二人で己斐方面まで避難した。しかし、堀部訓導の負傷がひどく動けないので、草津町の同訓導の両親のもとまで、事の次第を伝えに行ったが、宮地訓導もまたその場で倒れ、一週間ばかりのち堀部訓導宅で死去した。逆に堀部訓導は一命を拾い、現在(昭和四十五年五月八日)、広島市古田保育園園長を勤めている。

八、被爆後の混乱

学校は鉄筋コンクリートの残骸のみとなり、教職員も児童も多数死亡し、校庭には屍体の山が築かれるという惨状で、学校の機能はまったく停止した。

建物疎開作業、あるいは広島郵便局などに出動していた児童も全滅状態で、手の施しようもなかったが、集団疎開地から藤原寛訓導が帰校し、教職員および児童の被爆状況を調査し、あわせて疎開児童の縁故者を探すとともに、疎開児童の縁故者のない者の措置をとった。また動員中に死亡した生徒の縁故者についても調査をおこなった。

全焼して、外郭だけになった校舎は、被爆翌日から陸軍衛生隊が来て、西校舎一階に臨時救護所を開設した。終戦以後は、長崎五郎医師らが引継ぎ、大芝国民学校臨時救護所に移るまで、治療活動をおこなった。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年八月二十一日の臨時校長会によって、本校児童は暫定的に己斐国民学校に通学させたが、その数は全く不明である。しかし、昭和二十一年二月二十三日に学区内有志の協力によって、本川および広瀬の両学区を併せ、本川校舎内に復帰して授業を再開した時、教員は四人、児童数は約六〇人程度であった。

第二項広島市袋町国民学校…58

(現在・広島市立袋町小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市袋町二三の一
番地
校長 小林哲一
教職員 三四人
児童 八八六人
校舎 鉄筋コンクリート
三階建・二一教室
建坪・延七三六坪
木造建・延二三二坪
敷地面積 三、二一〇坪
爆心地からの距離
約六〇〇メートル

広島市袋町国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十五日	双三郡田幸村	六人	四五〇人	不明	集団疎開は町別に編成した。 (学年別ではない)
昭和二十年四月十五日	双三郡神杉村	三	九六		
昭和二十年四月十五日	双三郡和田村	三	五〇		
合 計		一二二人	五九六人	不明	

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	市内雑魚場町	一人	七〇人	疎開跡片づけ	高等科の女生徒は大手町国民学校の女生徒と合同作業班二班を編成して作業にあたる。
合 計		一人	七〇人		

四、指定避難先と経路

(一) 白神社境内＝正門・東門の二か所から分散して学校前の道路を南進して神社に至る。

(二) 比治山御便殿前＝東門から東進し、鶴見橋を渡って比治山に至る。

五、校舎の使用状況

消防団および医療団の詰所として講堂の一部を貸与。

鉄筋コンクリートの校舎の地下室は、学童および町民・消防団・医療団の避難場所として使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
残留児童・職員で朝礼後疎開校舎の整理作業	一六人	一四〇人	-	集団疎開・縁故疎開のため残留児童は少なかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…全壊全焼(鉄筋コンクリート造の校舎は、外郭のみ残る)

当校は爆心地の東南約六〇〇メートルの地点にあって、市内の学校では本川国民学校について、爆心地に接近していた。鉄筋コンクリート建校舎であるから、校舎は外形を保つことができたが、造作や付属の可燃物はすべて灰燼に帰した。他の木造建物はすべて倒壊し全焼した。

(二) 人的被害

前夜来の空襲警報が解除になったので残留児童・教職員全員で朝礼を行なったあと、在校児童は建物疎開をした校舎の跡片づけにとりかかっていた。そのとき、原子爆弾が投下され、瞬時にして様相は一変した。

作業中の児童・教職員は全員熱線と爆風にさらされ、ある者は即死し、ある者はひん死の重傷を負った。作業中、被爆した者の中で、一人として生存者がいないから、当時の状況ははっきりしないが、後日の調査によって、全員の死体が校内で発見されていないことから、動ける重傷者はそれぞれ一応は避難したようである。たまたま地下室にいた児童三人(四年生嵐貞夫・友田典弘 二年生太田晴)が命拾いをした。これは奇蹟的な現象であるが、爆心側に高い富国生命ビルが建っていて、幾分か爆風をさえぎったからではあるまいかと思われる。

伝えるところによると、炸裂と同時に、学校も付近の民家も熱線によって自然着火し、皆はたちまち猛火に包まれた。約二〇分たったころ、三川町の裁判所の方角の火勢が弱いようなので、その方向に、辛うじて逃げ道を見いだしたという。

坪田省三教頭は、疎開児童を訪問する父兄のために、証明書を発行するべく職員室で執務していたが、その場所は壁がさえぎり、爆源からは死角になっていて直接熱線を受けなかった。しかし、爆風によって室内の器物が反対側の壁に吹きたまる中に投げ出され、倒れかかる背後の戸棚にたたきつけられた上、ガラス戸の破片が全身にわたって突き刺さり、しばらく、気を失ってしまっていたが、幸いにも意識をとりもどし、脱出することができた。このとき、無残な即死体が横たわっている周囲のなかで、校長室で執務していた小林校長が重傷を負って倒れているのを発見し、これを背負って比治山へと避難した。その途中、三川町の裁判所のあたりまで来たとき、雨が降ってきたので、また別の何か投下されたのではないかと思い、二人は平田屋川(現在埋設)にかかるコンクリートの橋の下に身をかくした。ともすれば崩れかかる気力を鞭打ちながら、やっとの思いで比治山に辿りついた。比治山について教職員・児童の安否を確かめるべく所々方々を探し廻ったが、一人として見あたらなかった。おそらく、避難の途中、火炎につつまれて焼死んだものと思われた。小林校長はそこから自宅に帰り、坪田教頭は火勢の衰えるのを待って、市役所に状況報告に行ったが、市役所もまた被害甚大で報告することができなかった。やむを得ず自宅へ帰る途中、草津国民学校に立寄り、同校の山下校長に一切の事情を伝え、市に報告されるよう依頼したあと、重傷のため床に倒れたが、治療を続けて、健康を回復した。

教職員・児童の被害は次のとおりである。

区 別	教 職 員	児 童
即死者	一〇人	六五人
重軽傷者	五	不明
行方不明者	二	不明
計	一七	六五（判明分） （不明者は二一〇人ともいう）

八、被爆後の混乱

校舎は使用不能、学区内の児童とその家族はほとんどが死亡、教職員は坪田教頭と、雑魚場町の建物疎開に動員学徒七〇人を引率して出勤していた加藤訓導の二人の生存者を除いては、全員死亡した。すなわち、疎開児童とその引率職員だけが、残された当校の構成員となったが、それら引揚児童も、縁故者に引取られ、各地へ分散するといったようなことで、学校はしばらくの間、廃墟と化したままになっていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

疎開児童たちは、広島市内の各家庭が破壊されたままであったから、帰広させる訳にもゆかず、その目安もつかないままに、疎開先で日を過した。しかし、こうしているうちに縁故者が疎開地を訪れ、ほとんどの児童を引取っていた。

九月も終るころ、引取手のない児童を内田常吉訓導が引率して帰広することになった。しかし、この引揚げも容易ではたくて、芸備線は水害のために寸断され、徒歩連絡するところが多く、朝、三次駅を出発して、広島駅に到着したのは、夕方電灯のともるころであった。

焼跡に立った児童は、変貌を極めた廃墟の街に、自分の家の跡の見当さえつかず、不安と恐怖が胸にせまる表情でたたずむのみであった。

内田訓導は、児童から縁故者の住所を聞き出し、自分で送り届ける積りでいたが、たちまちどうすることもできず、帰ったその日は焼残った東警察署に泊った。翌日から早速活動を開始し、遠くは矢野町・祇園町まで縁故者を尋ねて、やっと児童の引渡しを終った。

父兄や縁故者全部を失った三年生男子児童一人は、川西村の疎開先の善立寺に養子として引受けられ、僧侶の修業をすることになった。

疎開地主任小丸訓導が、疎開地から帰広してきて、はじめて諸事務に当ることになったが、荒廃した校舎やその環境は、連絡にも適当でないと判断し、大手町国民学校・竹屋国民学校とともに連絡事務所を、第三国民学校(現翠町中学校)においた。

十一月に入って、坪田教頭が出勤できるようになって、事務所を当校の三階おどり場に移し、校長代理として開校の準備に着手した。

しかしながら、一階は県医療団が事務所をおき、また治療所も併置しており、二階は薬品統制組合と県衛生課が全部を使用し、三階の一部は薬品倉庫として使われていた。これら諸団体へは、その後、再三立退き交渉をしたが、当時としては容易に目的が達せられなかったのも無理からぬことであった。

その上、学区内には居住する市民もなく、極端な食糧不足、建築材料並びに資金の枯渇、真実味をもった七五年間は居住できないという風評など流れ、居住者を寄せつけない問題ばかり山積していた。このような中で、昭和二十一年六月になり、やっと開校の運びとなった。当日登校した児童は三七人、教職員は三人である。開校を知らせる方法は、教職員が自宅から持参した紙に開校する旨を書き、弁当の一部を糊の替りにして、焼け石や塀に貼りつけて連絡方法とした。登校児童が少ないのは、学区内に居住者がごく僅少のためであるが、後には、市周辺部に寄寓している児童も開校を知って、遠くから通学するようになり、次第にその数を増した。教職員が少ない理由は、生存者の少ないことは無論ながら、市内に教職員が居住しようにも住む家がないのと、教職員各自の事情によっては、勤務する学校を何処に選んでもよいという内諾を、当局から得ていたため、市内の学校に奉職するものが少なかったためである。

いざ開校はしたものの、教室は荒れ放題で、教具・教材は一物もなく、その日から教職員の努力で、すべてを造り出さなければならなかった。各自が硯・墨・筆を持ち寄り、板を探してきて墨を塗り、焼釘を石で打つなどして黒板を作り、ムシロを敷きつめ、その上に石炭箱を並べて、机の代用とするといった急造教室を造り上げた。

教科書や学用品についても、到底意の如くたらず、縁故者や疎開先から教科書を借用したり、教職員が知人や教え

子を探ね廻って寄贈を受けたりして、一冊の本をグループを作って共用した。裏の使っていない紙があれば、それを綴ってノートの代用とし、時には教職員が学用品を買歩き、それを児童に分けて、学習の助けとしたこともあった。このような状況下では、まともな授業など、到底できないことであった。

第三項広島市幟町国民学校…67

(現在・広島市立幟町小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市幟町四二番地
校長 ＊ 寿治
教職員 三一人
児童 一、三〇〇人(推定)
校舎 木造二階建・四一教室・建坪延一、四一九・五坪
敷地面積 四、三二三・〇五坪
爆心地からの距離 約一・一キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十一日	山県郡八重町	一〇人	二二〇人	七四五人	
	〃 壬生町	六	一三〇		
合 計		一六人	三五〇人	七四五人	

三、学徒動員状況

被爆当日は動員令による出動はなかった。

四、指定避難先

泉邸・西練兵場などと思われる。

五、校舎の使用状況

西寄りの校舎上下二〇教室に、広島地区第一特設警備隊(中国第三二〇三七部隊・部隊長山内二男磨大佐・隊員約三〇〇人)が駐屯していた。

また、八月六日朝八時ごろ、建物疎開作業隊の第二特設警備隊(中国第三二〇五七部隊・部隊長大原静雄中尉・通称世羅部隊)が、この学校で編成されることになっていて、駐屯地世羅郡東大田村から予後備の召集兵三〇五人が出て来たが、集合場所を大手町国民学校に変更した旨の貼紙を見て、また、その方へむけて歩いて行った。

なお、この日、建物の強制疎開に関して、市職員・町内会長の会議が開催される予定になっていた。

六、当日朝の学校行事予定

この日、校内の作業をおこなうため、一部の児童を集めることにしていたが、前夜から警報がたびたび発令されたため、集合時間を午前八時半に延ばした。従って、原子爆弾炸裂時の在校者は、教職員一二人・児童二〇人で、ほとんどの者は、まだ自宅で食事中か、登校中であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…全壊全焼

学校は爆心地から約一・一キロメートルの所にあり、校舎は全壊全焼した。

原子爆弾炸裂の一瞬、爆心に面して横長く建てられていた校舎は、強烈な爆風に吹きとばされて崩れ落ちた。崩壊した校舎はたちまち発火し、数時間後には焼けつくした。その余燼は、八日にたってもまだくすぶっており、駐屯していた兵隊はほとんど全滅した。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	二人	不明	登校中、または自宅で食事中の児童が多数死亡したが、その実数は不明である。
重軽傷者	一〇	二〇人	
計	一二	二〇人	児童即死者数含まず。

校庭にいて被爆し、火傷した者は、学校から北方約四〇〇メートル先の浅野泉邸(縮景園)や約三〇〇メートル先の西練兵場方面に避難したようである。

泉邸内に避難したことは、児童の遺品が落ちていたり、生存者の話などによって知ることができるが、その後、どうしたかについては判らない。

校舎内にいて倒壊建物の下敷きとなり、重傷を負いながらも脱出した者の中には、下柳町の電車鉄橋付近や京橋川に避難した者もあり、夕方救出されて、近くの東警察署に収容された者もあった。

また、安芸郡府中国民学校の臨時収容所に送られた者もあったが、意識を取戻してから、自宅の方向へ帰っていった。しかし、応急手当のかいなく、家にたどりつくまでに絶命した者も少なくなかった。

八、被爆後の混乱

前夜来の警報続出で、いつもより少し遅い時刻に、臺寿治校長は牛田町の自宅から歩いて出勤途上、大須賀町を通り上柳町へ至る栄橋を渡ったとき、原子爆弾の炸裂に遭遇した。強烈な爆風に吹きとばされ、飛来物を全身に受けながら、そばの川に避難したが、学校のことが心配で川からあがった。しかし、そのときすでに周囲は火炎に包まれていて、前進できず、やむなく市中からの避難者と共に、何が何やらわからないまま東練兵場にたどりついた。ここから尾長町西山根の松本道樹訓導の家に行ったが、ここではじめて自分が頭部から背筋にかけて、まっ赤に血を浴びていることを知らされ、応急手当を受けた。衣服もボロボロに裂けていたが、たまたま来合わせた加藤夫妻から服を借りて着かえた。

臺校長は、なお、教職員や児童の身の上が案じられ、じっとしていることができず、正午ごろ、皆の制止をきかずに松本宅を出た。途中の橋の所で、警備員に「死に行くようなものだ。」と、とがめられたが、校長のバッチを見せ、「わしは死ににゆくのだ。」と言ってゆずらなかつた。警備員は臺校長の頭から水をブツかけ、鉄兜に水を入れて持たせ、通過を許可した。鉄兜の水を頭にかけてかけ、火炎おさまらぬ中を、まるで這うようにして進んでいった。

川ばた伝いに橋本町の明神さんの付近にきたとき、川の中から「校長先生ッ!」と、呼ばれた。その声は、幟町校の女子訓導であった。一人ではどうにもならず、また、逃げて行く人が手を貸してくれるはずもない。「すぐ来る。」と待たしておいて、東警察署に行った。東警察署も大混乱の最中であつたが、ようやく担架を借りて川岸へいき、力いっぱい引っ張りあげ、片方誰も掲げる者のない担架を引きずって、ようやく警察署へたどりついたが、もう午後四時になっていた。

この頃、西条町から傷痍軍人療養所の救護班が同署に来援していて、負傷者の治療にあたっていたので、救出した女子訓導の応急手当をすることができた。署員の努力で焼けなかった東警察署内には、たくさんの負傷者が収容されていて、六日夜、臺校長は、ここにいて寝ずの看護にあたった。

七日早朝、比治山多聞院にいた仮県庁が、ここに移ることになり、女子訓導をはじめ他の収容者は、おおむね安芸郡の府中国民学校臨時救護所に送られた。

午後五時ごろ、臺校長は学校の状況を知りたく、その焼跡に行ったが、目前には灰燼に帰した跡だけがあつた。ちょうど有事に備えて以前から、味噌・醤油・塩・茶わんなど校庭に埋めていたので、罹災者に堀り出して配ろうと思い、棒を拾って堀りかけたとき、ポーッと意識を失って倒れた。誰が助けてくれたか、かかえられて我れに帰った。夜、牛田の自宅にたどりついたが、家は焼失していた。同町ながら山に近く、焼けなかった知人の別荘に行つて、その夜はとまった。

これより前、臺校長は尾長町西山根の松本訓導宅を、幟町国民学校の臨時連絡所に定め、教職員や児童の状況調査にあたることにしていたが、七日には、疎開先から急報に接して今田親人・浅井茂生両訓導が連絡に帰つて来た。

被爆から数日後、一応混乱もおさまりはじめた頃、牛田町二丁目宮田宅に、幟町国民学校仮事務所を設けて、積極的に状況探査を開始した。疎開先からの連絡もしげくなり、便宜を考えて、元の学校に近い浅野泉邸内に移った。泉邸内には、多数の避難者が残っており、軍の建てた応急トタンバラックの一部を使用した。

ここに、比較的軽傷の教職員が集合し、死傷児童の調査や疎開児童の保護者の探査・連絡をおこない、防空壕その他に分散疎開していた焼残りの帳簿・備品などの回収・整理をして、早くも、学校再建の準備に着手した。回収した

疎開荷物は一応日光にあてて乾したが、校門に立てる大きな日の丸の旗を、散乱した廃材の上にひろげると、そこだけが取残されたように新鮮で、ひどく目に沁みた。

八月十五日、終戦になると、集団疎開児童の引揚げ問題がおきた。その保護者が直接疎開先に出むいて引取って行った者もあったが、大部分の児童は、九月三十日に教師の引率で引揚げた。途中、児童たちは可部町大林国民学校で一泊しただけで、ずっと徒歩で励ましあいながら帰って来た。

帰って来た児童は、あらかじめ教職員が保護者や縁故者などに連絡をつけておいた者だけであって、引取人のない児童は、疎開先の八重町(現在・山県郡千代田町)に集めておき、教職員が連日縁故者を探して歩いた。

その間、縁故者の方から連絡があって、引取られていった児童もあったが、たいへんな辛苦のすえ、ともかく十月中には残らず引渡すことができたのであった。

なお、被爆二日目に設置された比治山国民学校(大破)の迷子収容所が、十二月二十三日、佐伯郡の五日市戦災孤児育成所に移ることになったが、育成所は、まず幟町国民学校の分校として発足し、同校から斗栴正主任・同良江、藤原各訓導が出向して、収容児三〇人の教育を担当し、涙ぐましい努力を続けた。

比治山国民学校迷子収容所および五日市戦災孤児育成所の当時の状況に関する斗栴良江の記録(第五巻参照)は、「頬に穴のあいた子」、「ひし型のよもぎ餅」など、人間愛のあふれた感銘深い追想が、数多く記されている。

ちなみに、昭和二十一年四月現在の育成所収容児数は、次のとおりである。

幼児の部																育成所 卒業生
年齢	四	五	六	七	計	学年 年齢	初一 八	二 九	三 一〇	四 一一	五 一二	六 一三	高一 一四	高二 一五	計	
男	一人		二	三	七人	男	三人	五	五	六	五	四	五	三	三五年	一人
女	一人	二		一	五人	女	二人	二	四	四	四	五	六	一	二八人	一人
計	二人	二	二	四	一二人	計	五人	五	九	一〇	九	九	一一	四	六三人	二人

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆の大混乱もややおさまった九月初め頃、学校を再開することに決し、罹災者の中から選ばれた世話役・教職員・児童の父兄などが集って、再開対策を協議した。

その結果、前述のとおり浅野泉邸内に軍が建てた応急バラックを使って、さしあたり授業を開始することになった。授業は青空教室であったが、バラックには罹災者らが生活していたし、集団疎開児童も引揚げて来ることになったので、至急に受入れ態勢を整える必要に迫られた。

臺校長は、東洋工業株式会社に仮住いの県庁に汗を流してたびたび通い、学校跡に近い上流川町の広島中央放送局を借用することになった。鉄筋コンクリート建の放送局も外郭だけの残骸であったが、青空教室よりは幾分かましであった。みんなで局内の大清掃をし、机・腰かけ・黒板などは、旧軍隊の払下げ品で、牛田国民学校にあった物を運搬し、十月五日からここで授業をはじめた。

この時の児童数は次のとおりである。

学年	初一	二	三	四	五	六	計
男子	五人	二人	五人	一〇人	四人	一〇人	三六人
女子		一	九	七	三	七	一四人
計	五	三	一四	一七	七	一四	六〇人

このように仮教室で授業を続ける一方、学校の再建を考え、校舎復興資材として、三滝ほか二か所の旧軍隊兵舎の解体材を譲り受けることになったが、運搬は一つ一つ自力でやるほかなく、まったく骨の折れる作業であった。しかし、折角運んで帰った資材は、見張りをしていても次々に盗まれていき、校舎の再建に至らなかった。

このような苦労を重ねるうち、こんどは放送局が避難先から帰ってくることになったので、急ぎ対策を練り、年のあける早々、二十一年一月、袋町学区内である中町の中央電話局を借りることに成功し、寒風の中をみんなで器材をせっせと運びこみ、ここに移転した。

この間、当局に対して交渉を重ね、同年五月、焼野原の学校跡に帰って青空教室を続けながら、バラック建ての校舎建設に着手することができた。

七月十五日、待望のわが校、一〇教室(うち二教室は事務室・宿直室・物置などに使用。)と便所一棟の計二五九坪の竣工をみ、ようやくジブシー教室から脱したのであった。

昭和二十三年二月、広島市立幟町小学校復興促進委員会が結成され、同年五月に復興資金三〇〇万円の募金を開始し、同年七月に移転新校地が決定された。続いて同年十月、第一期工事起工式を挙行し、いよいよ本格的な復興にか

かった。

なお、職町校は全壊全焼一五校のうちの一校で、全焼を免れた他校のように昭和二十年九月三日の開校はできなかったが、その後の急激な都市復興にともない、児童も比例して増加の一途をたどり、常に教室不足になやまされ続けた。

時 点	児童数	増築年月	増築概略
昭和二十一年四月	二六一人	昭和二十一年七月	バラック建八教室 ほか二室
二十二年四月	六三〇		
二十三年四月	九七〇	昭和二十三年九月	バラック建二教室増
二十四年四月	一、三〇五	昭和二十四年二月	新校地に木造二階建一三教室新築
同 年十月	一、六二三	同 年十月	一五教室増築し、全児童新校舎に移る

被爆直後の授業では、疎開中の教科書を使用し、不足の本や文具は教職員や父兄がそれぞれに集めて来て使用した。

[第四項広島市中島国民学校…77](#)

(現在・広島市立中島小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市水主町一二〇番地
校長 伊藤一義
教職員 約二〇人
児童 概数八〇〇人
校舎 木造二階建・七四教室
敷地面積 約二、五〇〇坪
爆心地からの距離 約一・一キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十三日	双三郡三良坂町(六か所) 双三郡吉舎町(二か所)	一五人 四	二一〇人 五〇	約五四〇人	
合 計		一九人	二六〇人	約五四〇人	

広島市中島国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先

緊急の場合の避難先につき、学区内の住民避難先に指定されていた佐伯郡原村方面(当校の西約一五キロメートル)を、学校児童の避難先とし、保護者と共に行動することを指導していた。

五、校舎の使用状況

学校付近には、県庁・武徳殿・日本銀行宿舎・県立広島病院などの建物が並び、これらの建物保護の目的からも周囲の民家および学校は家屋疎開の対象となった。そのため、被爆前の校舎は、講堂・宿直室だけを残して他の全校舎を疎開解体中であった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業 (職員朝会で当日の打合せ中)	一〇人	少数	-	午前七時九分、警戒警報が発令されて、一旦解除になったが、児童の登校者は少なく、また登校していた児童の中には、家にかえった者、親が引取りにきた児童もあって、被爆時

				に在校児童は少数であった。
--	--	--	--	---------------

当時の学区内分散授業所(四か所)と、児童の通学区別は次の通りである。

- (一) 学校の講堂＝四・五・六年生児童の残留組
- (二) 住吉神社＝水主町・吉島町の三年生以下
- (三) 慈光説教所＝吉島羽衣町一・二丁目、吉島本町の三年生以下
- (四) 誓願寺＝中島・天神町付近の三年生以下

七、被爆の惨状

被害状況

- (一) 校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から南南西約一・一キロメートルで、校舎のほとんど大部分(講堂と宿直室は残る)は、家屋疎開の対象となり、解体工事が進められて、その材木が運動場、ならびに空地に、山と積み重ねられていた。取残されていた講堂と宿直室は倒壊して、三、四〇分後には猛火に包まれ、集積した材木および倒壊建物が大火災となったが、消火のすべもなく、全焼してしまった。

- (二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	三人	一人	
重軽傷者	五	不明	
行方不明者	二	不明	
計	一〇	一 (即死者のみ)	

炸裂と共に講堂(職員室及び教室に使用)が倒壊したため、教職員と登校していた高学年児童は、下敷きとなり負傷したが、警戒警報までもないことで児童も少なく、ほとんどの者が倒壊講堂からはい出ることができたと思われる。猛火の中で親を求めて泣く者、先生・友だちをおたがいに呼びあう者、親が子供を探し求める声などで大混乱となり、手のほどこしようもなかったが、児童は親に渡したり、近所の人に保護をたのんだりして、残留者のないことを確認してから、負傷した教職員は西へ西へと避難し、ある者は本川土手を南に下って飛行場方面に、またある者は住吉橋を渡って、江波方面や己斐方面へと、それぞれ避難した。

八、被爆後の混乱

当日の在校児童はわずか高学年児童のみであり、そのほとんどの者が倒壊校舎からはい出してきた。負傷者は住吉神社の当校分散授業所に収容して、応急手当をしてから家庭に帰した。ともかく、校内にいた児童に対する緊急措置は、惨状の中にも、どうにかはたすことができた。負傷教職員は、猛火に包まれた倒壊校舎に残留児童のいないことを確認したのちに避難したが、そのとき即死した者についての確認まではできなかった。

被爆後の校地跡や周囲には、建物の土台・防火壁などの残がいがあるが、あちらこちらに残っているだけで、疎開させてあった防空壕内の重要書類も完全に焼けて、灰しか残っていない状態であった。また、負傷教員も原爆症にかかって床についたきりなので、学校機能は完全に停止した。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、爆心地から南南西約二キロメートル離れた吉島刑務所の南側(吉島本町一・二丁目)の一部焼跡に、仮小屋を建てて居住する人がぼつぼつ現れはじめたのみで、学区内の大部分は焼野原と化し、人影もなく対策の施しようがなかった。そのうえ、焼失した中島国民学校は廃校同然であったから、児童は舟入国民学校に通学することになった。また教員は校長宅(市内古田町高須)で、学校復興対策について会議を重ねたが、原爆症で倒れる者がつぎつぎに現れはじめて軌道にのらなかった。しかし、その後、十月十五日に疎開先から職員および児童の引揚げがあり、また出征職員の復員もあって、漸次健康な職員が増加するにおよび、機能の充実がはかられて、ようやく授業開始の準備が進められるに至った。

すなわち、学区内で焼失を免がれた吉島本町二丁目の土井正一宅、岡金吾宅ならびに吉島一丁目の永尾いさお宅、土井準一宅の協力を得て、納屋の二階などを借用して、これを仮校舎にした。ムシロ・古ゴザなどを敷き、長台を机の代用として準備ができたから、児童数約七五人くらいを三学級に編成し、職員は原爆症で治療中の者(五人程度)を除く五人ぐらいで、十二月一日から、授業を開始することができた。その後、児童もぼつぼつ増加したが、雨が降る日や、寒い日には休校することも多かった。また学用品や教科書などについては、焼失を免れたごく一部の地区およ

び疎開先から帰ってきた児童が所持していたものを共同で使用したが、授業の内容も充実したものはできず、教科書を中心に読み書きや計算練習を進める程度のものであった。

戦いのころと中島小学校

北川 まち子

「次は中島小学校前でございます。」市内に住みついて六年、ここを通るたびに窓外に目をやるのが習慣になった私である。暮色せまる校庭に長い影を落としている校舎、フッと涙を覚えてくる。それは二十年前のちょうど今ごろ、太平洋戦争も末期で一億総玉砕とまで追いつめられたころである。私たちの小学校(双三郡吉舎町敷地国民学校)にこの中島小学校児童の一部が学童集団疎開をしてきたのである。第二宿舎となったお寺は私の家と近く、何かにつけて接する機会が多かった。当時、私たちもわけもわからぬ緊迫感にヒシヒシとしめつけられて運動場や野山の開墾作業に精出していた。

都会の子供たちにできるはずがない。私たち土地っ子と疎開っ子はときおり子供らしい対抗意識がつき上って衝突した。しかしすぐ仲直りをしては広島のこと、彼らの家族のことをきかせてもらっていた。私は〇さんと特別親しくなり家によんできたかったが寄宿舎で禁じられていた。当然のことである。母が野菜入りむしパンを作ったときこっそりあげようと学校に持っていったが、先生や他の友だちに知れたときのことを思うと恐ろしくて渡せなかった。

数カ月たって広島に原爆が落とされた。全滅だということだった。本川と中島がもっともひどいときいた。私は子供心にも何を話していいのかわからず、以前のようにしゃべることができなくなった。児童の引率者だった寺田・松田両先生の胸中はどうな思いであっただろうか。秋風が立ちそめるころ、皆市内に帰っていったが、松田先生だけはそのまま残って、いなかで何年か教べんをとられた。それ以後文通した友だちもなく、消息は絶えてしまった。帰った友だちの中で、はたして何人が家族と手を取り合えたことだろう。またそれからの長い年月がどんなに苦しくけわしかったか。中島小学校の前を通るとき、また PTA でもないのに学校行事に参加したとき、疎開してきた六〇人の友だちを思い浮べては胸がうずくのである。

(昭和四十年六月四日付 中国新聞所載)

[第五項広島市大手町国民学校](#)…84

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市大手町八丁目
校長 伊藤 幸
教職員 三九人(うち事務員二人・看護婦二人)
児童 一、〇八二人(男五三六人 女五四六人)
校舎 木造二階建四棟・三〇教室・延八四〇坪
木造講堂一棟・一三五坪
木造附属建物・四〇坪
敷地面積 二、七五一坪
爆心地からの距離 約一・一キロメートル

二、校史概要

校史概要

(一) 明治四十四年三月、大手町八丁目に以前からある中島尋常小学校分教場(大手町七丁目・八丁目・九丁目・小町・国泰寺村共有)の隣接地一、四六〇坪九五七を買収し、これに五か町村の共有地三六九坪一四を合併して学校敷地とし、同年四月に校舎の起工をおこない、同六月に竣工した。

広島市大手町国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

敷地総坪数 一、八三〇坪九七
 校舎坪数 二階建三一〇坪
 平家建一五一坪七五
 土地買収費 二六、九四〇円八二
 土地埋立費 一、二九五円一三
 校舎建築費 二〇、二〇七円五四
 合計 四八、四四三円四九

竣工した六月、中島尋常小学校訓導植木愼太郎が、本校の訓導兼校長に任ぜられた。

引続き七月十二日、開校式を挙行した。

職員数 校長ほか二〇人
 児童数 男六三五人
 女五七一人
 計 一、二〇六人
 学級数 二二

(二) 歴代校長と在任期間

代	校長名	年限	在職期間
一	植木愼太郎	九年	明治四十四年三月から大正九年四月まで
二	梅田金平	二年一月	大正九年五月から大正十一年六月まで
三	三宅高二	六年一〇月	大正十一年七月から昭和四年五月まで
四	神田省二	五年一〇月	昭和四年五月から昭和十年三月まで
五	入沢満喜恵	三年一月	昭和十年四月から昭和十三年四月まで
六	伊藤一義	三年	昭和十三年四月から昭和十六年三月まで
七	伊藤 幸	五年二月	昭和十六年四月から昭和二十一年五月まで

(三) 最後の終了式

昭和二十年三月二十五日、初等科三六回(一九五人)高等科二一回(三五人)の修了式を挙式、これが最後の終了式となった。

本校創立以来の卒業児童数六、七五四人、最後の本校児童在籍者数は、男五三六人、女五四六人計一、〇八二人である。

三、学童疎開状況

学童疎開

昭和二十年三月十六日、閣議決定に基づいて発せられた通牒(広島市・呉市学童疎開強化要項)により、広島市内各校とも学童疎開が実施されることになった。

本校は父兄会と協議のうえ、広島市から指定された比婆郡山内川北村、および同高村の二か村へ、昭和二十年四月三日から集団疎開をおこなったが、その状況は次のとおりである。

(一) 学年別学童疎開状況

類 別	学年 性別	初一	二	三	四	五	六	高一	高二	計	合計
残留児童数	男	五一	三七	二〇	二五	四〇	三八	-	-	二一一	四六八人
	女	五七	二三	二七	三三	三〇	三六	三三	一八	二五七	
集団疎開児童数	男	-	-	二二	三一	三〇	四七	-	-	一三〇	二〇二人
	女	-	-	一〇	一九	一六	二七	-	-	七二	
縁故疎開児童数		三八	八四	九六	四三	七〇	四七	-		三七八	三七八人
合 計		146	144	175	151	186	195	33	18		1,048 人

(二) 学童疎開実施状況

集 団 疎 開 概 数					縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童			
昭和二十年四月三日	比婆郡山内川北村	四人	八八人		三七八人	
同 四月十二日	〃 高村	五	一一四			
合 計		九人	二〇二人		三七八人	

右表の明細は、つぎのとおりである。

(山内川北村への疎開状況)

- 一、川北寮(公会堂)…付添教員 宮原幸一
児童、三年四人・四年三人・五年六人・六年一人 計二四人
- 二、勝光寮(勝光寺)…付添教員 樋口量子
児童、三年一人・四年七人・五年八人・六年六人 計二二人
- 三、田川寮…………付添教員 渡辺富美
児童、三年四人・四年九人・五年六人・六年七人 計二六人
- 四、瑞泉寮(瑞泉寺)…付添教員 長尾正一
児童、三年三人・四年四人・五年四人・六年一〇人 計二一人
- 以上合計 付添教員四人
児童九三人

(高村への疎開状況)

- 一、世尊寮(世尊寺)…付添教員 溝岡芳人・柴崎君江
児童、三年五人・四年一三人・五年九人・六年一九人 計四六人
- 二、黎明寮…………付添教員 香島キヨコ
児童、三年九人・四年三人・五年二人・六年七人 計二一人
- 三、西念寮(西念寺)…付添教員 織居義枝
児童、四年六人・五年四人・六年一三人 計二三人
- 四、龍福寮(龍福寺)…付添教員 柿本泰生
児童、三年五人・四年五人・五年一〇人・六年四人 計二四人
- 以上合計 付添教員五人
児童一一四人

なお、寮作業員として、山内川北村には大久保芳枝・桑原芳枝を、高村には溝岡美代子・柿本栄子を常置した。

四、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	市内雑魚場町	二人	四五人 (高一・二年生女子)	疎開跡片づけ	

五、指定避難先と経路

空襲の際には、校内の防空壕(昭和十九年九月築造・収容人員一〇〇人位)に待避するか、状況によっては自宅に帰らせることにしていた。

六、校舎の使用状況

第二一特設警備隊(世羅部隊)の編成にあたり、幟町国民学校から大手町国民学校に、その集合場所が変更になり、八月六日朝、その隊員約三〇〇人が、続々と集合しつつあった。但し、被爆時には、まだ到着していなかったかとも思われる。

七、当日朝の学校行事予定

授業を予定していたが、前夜空襲があったので、午前十時に開始することになっていた。なお、建物疎開作業に出動する学童は、早朝から集合することになっていた。

八、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…全壊全焼

原子爆弾の炸裂と同時に、全校舎は倒壊し、周囲からの火災によって、すべて跡形もなく焼きつくされた。

なお、学校備品のうち、理科機械など高価な品ものは、特別に防空壕に入れて保管してあったが、防空壕の上部が爆風によって吹きとばされ、内部の物は微塵にこわれてしまった。

(二) 人的被害

学校には、六日当日、学徒報国隊を引率する教師が、五日夜から宿直しており、早朝から出動のために登校していた児童一四、五人と共に校内で被爆した。

他の教職員や児童は、まだ登校していなかったから、そのほとんどは家庭内か、あるいは登校途中で被爆したものである。

伊藤校長は、学童疎開地を数日視察し、八月五日に田部正夫教頭と交代、夜行列車で広島に帰って来た。

その旅装を解くまもなく警戒警報が発令されたので、ただちに学校にかけつけて警備の任にあたった。他の職員も登校し、それぞれの部署を守ったが、六日明け方になって警報解除となり、一応自宅に帰っていた。

当時は、前夜中に警報発令があった場合、翌朝の登校時刻(通常八時)を十時にしていたが、勤労作業に出るものは、職員・児童ともに別行動であったから、六日も早朝から登校していて被爆した。

被爆状況については、建物疎開作業に出動のため、五日夜から宿直していた山崎満寿子訓導が、負傷の身にペンを執って伊藤校長に報告した手紙が唯一のものであって、次にその手紙(伊藤幸所持)をかかげて被爆状況の記録とする。

(手紙)

校長先生には、その後お身体のご様子は如何でございますか。学校の様子諸先生のご様子を心にかげながらも失礼ばかりして居ります。私も丁度宿直(八月五日)でございましたし、それに受持ちの子供の事もございまして、一度くわしくご様子申し上げねばと思っておりますが、別にどこという大した事もございせんのに、身体がはっきりしませず、食欲もすすまず困って居ります。昨日も、四、五日前も登校するつもりで、横川までは参りましたものの、沢山のひとと暑さのために目まいが致しまして、学校へ行く事もならず帰って参りました。

本当に今頃のこと、校長先生を初め、諸先生方みなお身体が悪いのにおしてご登校の事と思ひ相済まなく存じて居ります。もう二、三日、明日にでも身体さえはっきり致しませば、登校致しまして教育の道につとめさせていただくつもりに居ります。何とぞよろしくお願い申し上げます。

手紙を持たせます子供は、災害の日、私と共に逃げた子供で、未だ肉親の者がみつからず、私の家に居る者でございます。今一人の石丸初美と申す高一の子供は、八月十六日仁方の親類へ送りました。この子供(木田キタヨ)も二、三日の中には、親類と連絡がとれるようになって居ります。

災害の日の様子は、お会い致しまして申し上げさせていただき、簡単に書かせていただきます。

作業に七時半頃つれて出るつもりで、子供の数を数へましたところ、一四、五人でございましたので、今少しと待って居りました。子供の全部は、運動場の樟の木陰で遊んでいましたが、木付・小林・山本(全部高一)の三人は水のみ場の方に離れて居たとか申して居ります。私は大下先生と共に炊事場に居りました。私は頭からうづもりまして、はねのけて出るまでには、かなりの時間をとりました。あちらこちらに火が燃えていたと思ひます。子供はと思ひましたが、校舎は倒れ、だれも見えませんで、炊事場より外に出て、門の所まで行き、市役所前に行きました。高一子供(木田・石丸・井上・天野)の四人が、先生と言って寄って来ました。他の人はと聞きますと、高二の子供や他の人は最早や逃げたと申しますので、私は四人の子供と共に飛行場に逃げました。大分行きまして前(註・水呑み場の子たち)の三人の子供の事を聞きますと、あの人達の顔は市役所の前では見なかったと申しましたが、今更火の海、如何ともすることが出来ず、心にかげながら逃げました。

七日朝、井上・天野はそれぞれ母親か親類の者に渡し、学校まで帰って見ましたところ、三人の子供らしき死体がありますので、本当に親達にも校長先生にも申訳なく思ひ、自分の助かった事をはずかしくさえ思ひました。

それにしても他の子供はよく逃げてくれたと思ひます。

私の家に来た子供を思ひ出すだけでも、高二久保・尾川・上川・松原・松浦・辰重・広島など皆何のけがもなかった様です。

重要書類は、解除になりましたので校務室まで持ち帰っておりまして、全部焼けたことと存じます。

早々に報告すべきでありましたが、父の葬儀にとりまぎれ延引致しました。(以下略)

この手紙を書いた山崎訓導は再起ならず、十数日後に、原爆症状を起してついに死亡した。また、六日当日、疎開作業出動のため、登校途中で被爆した柳田静子訓導は即死であったが、その後の調査で本人の自宅も全焼し、父・母・姉も死去していたことが判った。

死亡した三人の児童のうち、一人は父兄が確認した。それは、ワンピースのバンドのところだけが焼残っていたので、それをほどこいて、服の柄で判明した。他の二人の児童の遺骨は、田部教頭が自宅に持ち帰って安置していたが、昭和二十六年、父兄が学徒動員の証明を受けた田部教頭宅を訪ねて来たとき発見して持ち帰った。なお、大下訓導は、

下敷きから脱出でき、負傷はしたが助かった。

この日、講堂に集まっていた消防団員数人が、下敷きになったまま、全員死亡し、その遺骨が円形になったまま発見された。講堂の前には、数台の自転車がねじまがり、折りかさなって焼けていた。

児童被害状況（被爆当時の調べ）

学年		一	二	三	四	五	六	高一	高二	計	総計
区分	男	三人	二	五	一	四	三	○	○	一八人	三五人
	女	二人	一	一	三	二	三	三	二	一七人	
行方不明	男	二人	一	○	三	○	一	○	○	六人	一六人
	女	一人	一	一	○	二	一	二	二	一〇人	
連絡不能	男	一一人	二八	○	七	一〇	五	○	○	六一人	一六五人
	女	一八人	一八	一〇	二〇	八	三	一七	一〇	一〇四人	

右表のうち、六日朝、建物疎開作業に出動のため、学校に集合していた者、あるいは集合の途上で被爆した者、その他在校中被爆した者の状況は、次のとおりである。

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	一人（三）	校内（四）人 登校中（一）	教師は柳田静子、登校中に被爆死亡。
重軽傷者	四（二）	校内（一二、三） 登校中（二〇）	教師山崎満寿子、十数日後に死亡。
行方不明者	○	四	被爆後、連絡後、連絡不能で生死未確認 児童一七一人。
計	五（三）	四（約四〇）	

（ ）内は動員関係である。

九、被爆後の混乱

大手町国民学校区域の惨害は、あまりにもひどかった。区域内は一軒の例外もなく、建物はすべて焼きつくされた。それだけに、人的被害も徹底的なものであった。生残った人ひとりとして、区域内にいるものはなく、みんな市外に逃げていった。

そのころ、焼跡には肉親や縁故者が、人探しや屍体探し、遺骨掘りなどのため多く出て米ていたが、そのような幾日かが過ぎても学校を訪ねる人がなかったことは、惨禍の甚大さを物語るので、他地域にはない現象であった。

それだけに取残された疎開の子どもに与えた影響は大きく、そのあと始末に教員の苦労はなみたいていのものではなかった。

戦災による孤児と引取り困難な家の児童一二、三人は、十二月十九日に疎開先（川北寮へ集まっていた児童）から、市当局の指示により、佐伯郡五日市町の戦災孤児育成所に、松原貴美子訓導が引率して行き、収容された。なお、松原訓導は、引続き、育成所の職員になってとどまった。

疎開児童視察先から急遽帰広した田部教頭は、八日、学校焼跡に「大手町国民学校仮事務所」と紙に書いた看板を掲げた。そして、父兄との連絡を取ることに全力をあげると同時に、被害の状況調査をおこなった。しかし、九月になっても、依然として区域内に帰住するもの縊はほとんど無く、容易に開校のメドはたたなかった。

一時閉鎖

市当局は、諸般の状況を考えて、当校を一時閉鎖し、事情好転にともない復校するという方針をたてた。

九月末および十月末には、教員の希望により、市内または郡部転任の措置をとるとの指示があり、ここに一応の仕切りをつけて、校長および教頭がその残務整理をすることになった。

「残務整理」

- 一 校具に関するもの
- 二 簿冊に関するもの
- 三 疎開地に関するもの
- 四 保護者会会計に関するもの
- 五 学校関係諸団体会計に関するもの
- 六 職員転勤に伴う慰労金に関するもの

以上の六項目にわたって、調査と整理をおこない、学校関係については市当局へ、その他のことについては、生残った少数の保護者役員と接渉して、学校閉鎖の結末をつけたのである。

保護者会およびその他各団体会計

収入金合計 四、〇一六円六五銭

(内訳省略)

支出の主なるもの

職員慰労会の補助 五四四円

職員児童戦災追弔会費 八〇六円

疎開地の整理費 二九〇円

保護者理事会費 五〇〇円

残務整理雑費 三三二円六〇銭

職員転退職慰労金 一、五四四円〇五銭

なお、焼残り簿冊類は千田国民学校に保管した。

第六項広島市広瀬国民学校…98

(現在・広島市立広瀬小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市広瀬北町一丁目

校長 妻沢 襄

教職員 二五人

児童 概数三六〇人

校舎 木造二階建・二八教室

敷地面積 不明

爆心地からの距離 約一・一キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月二十一日	双三郡酒河村(三か所)	四人	約二〇〇人	約一五〇人	
	双三郡川地村(一か所)	一			
	双三郡板木村(三か所)	三			
合 計		八人	約二〇〇人	約一五〇人	

広島市広瀬国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事 業 の 区 別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
大橋製靴工場	市内 三篠町四丁目	二人	約四〇人	軍靴のこんぼう 運搬 材料の整理	当時、出動した生徒 は高等科の生徒

四、指定避難先と経路

(一) 学校から北広瀬橋を渡り、中広町を通過して山手方面に避難する。

(二) 学校から横川橋を渡り、打越方面に避難する。

五、校舎の使用状況

南側校舎(二階建)一棟は、第二特設警備隊(通称三二〇三八部隊・隊長は陸軍中佐諏訪他一郎)に貸与されており、その他、給食室も炊事に使用された。兵隊は約六〇人くらいが交替で駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
授業実施予定 八時二十分に朝礼を始め、 八時三十分から授業を開始 して、午後二時五〇分に終 了予定、十二時から午後一 時まで休暇	一五人	約五〇人	第二特設 警備隊約 六〇人	当校高等科の生徒は学徒動員により出勤中。 当日授業予定は疎開しなかった三年以上の残 留組であった。 また、一・二年生の低学年児童は学区内の広 島別院・広瀬神社での分散授業を実施してい た。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況……全壊全焼

当校は爆心地から北西約一・一キロメートル離れており、原子爆弾炸裂と同時に、一瞬にして校舎は壊滅したが、二階校舎は外側にむかって倒壊したため、登校中の児童で、外で遊んでいた者の大半が下敷きとなり、多数の犠牲者を出した。その後、火災は瞬時にして、南側隣接民家に発生したが、消火の手もないままに大火災となって、次から次へと延焼し、ついには当校も、この猛火につつまれて灰燼に帰した。しかし、校舎の炎上から全焼するまでには、相当の長い時間を費した模様である。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	七人 八 〇	約三七人 不明 約一〇〇	被害者の中には登校中の児童、家庭にあ った児童、動員に出ていた生徒全員を含 む。ただし、動員学徒については女生徒 八人が死亡したことははっきりしている が残りの学徒のことは全く不明である。 なお、広島市立造船工業学校専攻科の生 徒一五人が、広瀬国民学校の防空要員と して応召していて被爆死亡した。
計	一五	約一三七 (判明分)	

始業時刻は、午前八時二十分であったが、朝礼が一〇分間ほどあり、授業開始は八時三十分からであった。また当日の授業は、集団疎開しなかった三年生以上の残留組児童が中心であり、その他、疎開のない低学年(一・二年生)児童は、当時、分散授業(学区内の広島別院と広瀬神社)を実施中であった。

職員室にいた教員は、炸裂と同時に、その爆風で校舎西裏の天満川土手に吹き飛ばされたり、崩壊校舎の下敷きとなって即死した者もあった。また階上裁縫室で、大火鉢の下敷きになり、助けを求めながら焼死した女子教員もあった。

校庭で遊んでいた児童は、放射熱線で火傷したうえ、爆風に吹き飛ばされて死亡した者、また二階校舎が外側にむかって倒壊したため、その下敷きになって即死した者もあったが、負傷しながらもどうにか逃げのびた者も何人かあり、その児童は天満川を渡り、中広町から山手町方面に、または横川橋を渡って祇園町方面に逃げて、その後、安佐郡古祇園の嚶鳴国民学校に収容された者もいた。

炸裂の一瞬、倒壊校舎の下敷きになって、即死した者や焼死した者以外で、火傷姿のまま、逃げだした者は、その大半が西裏の天満川に入り、また土手の陰に身をよせて、火災の静まるのを待っていたが、ほとんどがその場で死亡した。その後の死体調査では、大半の死体が、強力な熱線で焼かれたうえに、あの大火災にあいながらも、各々負傷者は、猛火をさけながら避難していた関係か、半焼け状態の者が多く、氏名の判別できない者がほとんどであった。家族の引取りのない死体については、警備隊兵士の生存者と、教員生存者の話を聞いて、児童の性別や氏名をできるだけ判断してから火葬にしたが、黒こげ胴体だけの死体の判別は、ほとんどできなかった。火葬にした遺骨は、一時的に己斐町の寺院に保管を依頼した。

なお、南側校舎に駐屯中の兵士の中にも多数の即死者や焼死者を出し、校舎焼跡には、半焼け死体が転がり、その周りには銃・鉄かぶとが積み重なって、凄絶な光景であった。兵士の死体も児童と同様に、引取り手のないまま火葬にした。

八、被爆後の混乱

校舎は一瞬にして倒壊し、また完全に焼失してしまい、教職員七人は即死、その他八人が重傷を受けるなどの大被害であったため、機能も指揮系統も完全に停止の状態に陥った。当日、授業実施のため、登校した児童も全滅状態と

なり、また低学年(一・二年生)児童は広島別院・広瀬神社で分散授業を実施中であったが、大惨事のさなか連絡はとれず、その被害も調査できず、何もかも全く死の世界をさまよっている状態にあった。そのため、原子爆弾炸裂後に、集団疎開地から教師一人が被爆者の状況把握と、一応の連絡に帰広したが、何処に連絡してよいものやらわからず、とりあえず、校庭内にあった警備隊の地下防空壕に連絡員を置き、児童や教職員の連絡にあたることをきめた(連絡所開設は八月十日ごろ)。しかし、焼跡では仕事が不自由であり、調査も困難であるため、八月二十日ごろから市内己斐国民学校の教室一隅を借りて、広瀬国民学校の事務所を開設した。調査事務は、生存教員と疎開地引揚げ教員とであり、主に被爆児童の状況調査と、疎開児童の引渡しなどの仕事に当たった。なお、集団疎開の引揚げ事務などに関しては、被爆負傷した校長及び教頭も旬日後に死亡したため、疎開地の上席教員がこの仕事を完了したのであった。

九、学校再開の状況

学校の再開

一面の焼野が原にも、月日の経過と共に生存者が復帰しはじめ、バラックの住居が建ちはじめた。十一月ごろから何よりもまず第一に教育機関の設立をとという声が起り、広瀬国民学校の復興運動の声も町内会有志の間で協議されるようになったが、同じような協議が隣接の本川学区内でも起っていた。そのため、同じやるなら二学区が協力して復興しようということになり、さしあたって、外郭だけでも焼残った本川国民学校の内部を整理し、昭和二十一年二月二十三日に広瀬・本川両国民学校として再開された。両校は合同し、被爆後はじめて授業を開始したのであるが、児童数は約六三人(一年生から高等科二年生の全員)程度で、教員は両校の生存教員数人で授業にあたった。当分は焼跡の整理や、疎開していた机・腰かけなどを持ちかえったりすることだけに追われた。そして、窓もない校舎での授業が始まったのである。なお、教科書はほとんど疎開先で入手したものを使った。

第七項広島市神崎国民学校…105

(現在・広島市立神崎小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市河原町
校長 小松百合男
教職員 五〇人
児童 概数四二〇人
校舎 木造二階建・三三教室延一、一〇八・五坪
敷地面積 二、二九二・五坪
爆心地からの距離 約一・ニキロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月三日	山県郡吉坂村	八人	一八〇人	一、〇八〇人	楽王寺・公会堂 安養寺・明覚寺
昭和二十年四月五日	山県郡本地村	四	八〇		専教寺 浄楽寺
昭和二十年四月七日	山県郡南方村	四	八〇		光雲時 浄徳寺
合 計		一六人	三四〇人	二、〇八〇人	

三、学徒動員状況

出勤なし

四、指定避難先と経路

当時、学校内には数か所の防空壕が作られて、警戒警報・空襲警報発令の場合は、学校長指揮のもとに避難誘導をおこなうように日ごろから訓練していた。

五、校舎の使用状況

昭和二十年六月ごろから陸軍部隊(名称不明)が外地出動に備えるため、当校に集結し、約三週間位駐屯した後に、宇品港へ出発していたが、一回の駐屯兵数は大体一〇〇人程度であった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	七人	約二五人	—	学区内には、当時、学校の外に三か所の分散授業所があり、ここでいう在校教職員数は授業所全体の人数である。児童数は学校一か所の登校人数である。

なお、学区内分散所(四か所)についての児童通学区域は次の通りである。

場 所	分散授業所名	児童の通学区域
舟入町 小網町 学校 舟入本町	みはらし湯の二階 三光寺 学校 称専寺か永光寺	上河原町・舟入町・舟入仲町の東・西 小網町の南・北・西新町・西地方町 下河原町・舟入仲町東・舟入本町東 舟入仲町西の一部・舟入本町西

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から南西約一・二キロメートル離れており、原子爆弾の炸裂時には一瞬にして、二階建校舎は倒壊してしまい、炸裂時までに登校していた児童(約二五人)の大半が下敷きとなって、即死する者、ある者は重傷を負ったままの姿で脱出することもできず、焼死した者もあって、物的にも人的にも多大の被害を受けた。倒壊校舎や学校周囲の全壊民家からは、炸裂後、瞬時にして火災が発生したが、消火のすべもなく猛火はすべてをなめつくし、正午ごろまでには校舎も民家も完全に焼きつくされた。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	三人(一) 四 〇	一七人(不明) 一〇 不明	()内は、学校外での被爆者数
計	七 (一)	二七 (判明分のみ)	

原子爆弾炸裂時前に登校していた児童約二五人は、宿直室に近い校舎の西南階段(おどり場付近)でほとんどの者が被爆し、倒壊校舎の下敷きとなって幼い命を断ったものと思われる。

炸裂当日の学校には、宿直員三人と現業員一人が校舎内におり、その中の教員一人は、炸裂の一瞬に職員室で圧死し、また一人の教員(秋山訓導)は倒壊校舎の下敷きとなっていてところを、校長によって助け出され、付近の鈴木別邸内に運びこまれて、命はとりとめた。その時の話によれば、校舎倒壊の一瞬、腰部を強く打ち、一時は気絶していたが、気づいた時には、既にカーテンが燃えていたとのことである。炸裂下、混乱と恐怖ばかりで、救援隊などによる救出作業が全く無くて、下敷きとなった登校児童の、大部分についての状況もはっきりしないが、倒壊校舎や周囲の民家からの出火が早く、その上、消火活動のないままに、猛火は急速に広まっていったから、ほとんどの児童が焼死したのではないと思われる。しかし、倒壊校舎から這い出した数人の児童は、現業員(既に病死)の手によって助けられ、鈴木別邸の庭まで誘導されて、応急手当をうけた。

当時、広島市内の各国民学校では人的被害を最少限度におさえるためにも、集団疎開の実施や、学校以外に学区内の数か所に分散授業所を設け、集団疎開をしない残留児童(ほとんどの残留児童は二年生以下の低学年児童)を分けて授業をしていた。当校も学校の他に三か所の分散授業所があり、各々分散所には二、三人の担任教員と、平均約六、七〇人ぐらいの児童が区分されて、学習が進められていた。被爆当日、各分散所に出席していた児童は約三、四〇人程度であった模様である。しかし、各分散所も爆心地に比較的近く、炸裂時には大惨事をまきおこした様子で、全壊建物の下敷きとなった児童には、多大の死傷者が出た。

八月十二日ごろになって、生残った父兄らが、消息不明の子供をたずねて訪れて来るようになり、遺骨の引取りや、生死についての捜索がはじまったが、保護者たちは子供の通学分散所は知っているが、学校側では、誰が何処へ当日出席していたかについては皆目不明であり、捜索にも非常に困難した。

八、被爆後の混乱

学校は全焼し、人的にも多数の教員及び児童を失ったため、学校機能は完全に停止の状態となり、疎開先から連絡に帰校した教員も、ただ学校長と話合う程度で、対策措置などについては、何ら具体的な計画もなく、市当局(学務課)の指示で再度疎開地に帰って行くといった有様であった。

終戦と同時に、保護者の中には勝手に疎開地に出向き、児童を連れ帰る者もあり、また被爆保護者で、疎開地へ児童を引取りに行き、その地で治療を受ける者もあった。身寄りを失った疎開さきの児童は、最後に山県郡本地村の専教寺を集結場所としていたが、十月十九日、全員で帰校してきた。

十一月一日、全職員は、事務所に当てられた第二国民学校(現在・観音中学校)に集合して、学校対策について協議した(その後、小松校長は十二月に家庭の都合で退職したので、山王璋首席訓導が中心になり、対策協議が進められた)。こうした結果、昭和二十一年一月はじめに、学校焼跡内の東側空地を整理したうえ、廃材によるバラックが建てられたが、校舎として使用されず、被爆者の治療所として、また学校の運営などに関する連絡場所に使用された(後には、連合町内会の配給品受け渡し場、または町内会連絡所として使用された)。

そこで、校舎のない状態の当校は、同じく全焼した広瀬国民学校・本川国民学校の授業体と一緒に、本川国民学校校舎で授業をはじめることになったが、児童数は約六〇人程度であったから、山王璋首席訓導・山崎斌訓導・秋山ミチ子訓導の三人が本校職員として残り、他の職員は配置転換や集団疎開先であった田舎の学校で、そのまま奉職することになった。

なお、被爆によって校舎は全焼したが、校庭の一部が緊急整理されて、応急救護所が設けられたので、被爆者は約一か月間、電車江波線の路上にもムシロなどを敷いて、治療と生活を共にしていたが、後に本川国民学校内に設けられた救護所内に集結された。

九、学校再開の状況

学校の再開

原子爆弾炸裂後の二学期開始ごろ(九月の初頭)は、学区内には住民もごく少なかった。八月の終りごろから二、三戸のバラックが建ちはじめ、九月には、七、八戸ぐらいで、十月から十一月にかけて、約二五戸ばかりが、焼野が原の中に散在していたにすぎず、教育も放任状態であった。ようやく、第三学期にたつて本川国民学校で授業が開始されるといった状況であったが、その後、広島市に都市計画が生まれるにつけ、復興対策委員会の構成がなされ、委員長(当学区内居住者海部恵一郎)を中心として学校復興に力がそそがれた結果、校地拡張と移転変更が実現した。しかし、校地が決定しても、校舎の建設や学校機能についての問題が定まらない状態で、なかなか軌道に乗らなかった。

昭和二十五年四月一日、ようやく、広島市立神崎小学校として再発足し、校長以下職員一二人が就任した。しかし、未だ校舎もなく、学区内の児童も本川小学校及び舟入小学校に通学している状態であったから、新しい一年生の受付は、本川小学校と舟入小学校の両校でおこなった。その後、昭和二十五年九月八日に新校舎(現在の河原町二一三番地)が完成したので、はじめて自分たちの学校で授業を開始することができたのであった。

[第八項広島市天満国民学校…112](#)

(現在、広島市立天満小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地	広島市天満町五三六番地
校長	堀川一真
教職員	四六人
児童	概数六七〇人(疎開児童は含まない)
校舎	木造二階建・四三教室・延一、三一五坪
敷地面積	三、〇〇〇坪
爆心地からの距離	約一・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				緑故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十八日	佐伯郡砂谷村 佐伯郡水内村	六人 五	一八〇人 一五〇	約五〇〇人	
合 計		一一人	三三〇人	約五〇〇人	

広島市天満国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事 業 の 区 別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
建物疎開作業	小網町	三人	九〇人	建物疎開の跡片 付け	高等科一・二年生全 員

四、指定避難先

- (一) 小網町土手広場
- (二) 北榎町電話局前広場など

五、校舎の使用状況

当時、陸軍大国部隊約三〇〇人が駐屯しており、この部隊に貸与されていた校舎は、講堂と南側の校舎(階下四教室及び階上五教室)の計九教室であった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	そ の 他	
分散授業①本校 ②隣保館 ③中広町の寺 ④小河内町の寺 ⑤横堀町説教所	八人 一 三 三 三	約一五人 約一〇 約一〇 約一〇 約一〇	大 国 部 隊 約三〇〇 人	(一) 始業前のため正確な数は判明しがたい。 (二) 大国部隊の被爆状況は不明。
計	二一人	約五五人	約三〇〇 人	

七、被爆の惨状

被害状況

- (一) 校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から西北西約一・ニキロメートル離れており、原子爆弾炸裂の一瞬、校舎は全壊したが、学校からは火の手はあがらなかった。しかし、学校の南側民家から、炸裂後瞬時にして火災が発生し、消火する者もないまま、火災は急速に広まっていき、午前九時過ぎ、当校南側校舎に燃え移った。学校は一日中燃え続け、午後九時ごろになっても北側校舎の一部には、まだ燃えている所もあったが、とにかく全校舎は完全に焼失、灰燼に帰してしまった。

- (二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	一二人(三)	二八〇人(九〇)	()内は学校外(動員先)での被爆者数
重軽傷者	二〇	三九〇	
行方不明者	〇	〇	
計	三二 (三)	六七〇(九〇)	

炸裂直後は、一体何が起ったのかもさっぱりわからず、その上、一時、真暗となって一寸先も見えなかった。しかし次第に明るさをとりもどすにつれて、建っていた校舎はなく、下敷きになって助けを求める声、火傷を受けて校庭に倒れている者などが識別できるようになった。倒壊校舎の下敷きから自力で脱出した職員数人は、事の重大さに気づき、急ぎ児童の救出にかかったが、教員ら自身が皆負傷し、身体が自由がきかず、材木の下から救いを求める声をたよりに、一本一本の板切れや材木を取去るような救出方法しかできなかった。苦心のすえに、ようやく七人ばかりの児童が助け出され、動ける者には一刻も早く家に帰ることを指示した。そのうち、火災は広がり、方々に火の手が上って学校も延焼しはじめたので、互いに助けあって避難したが、校庭には数人の子供が動けなくなっているのが見られた。その後、校舎の焼跡からは教員および児童の遺骨六体が発見された。早く避難した児童は、己斐町や草津方面の郊外に逃げていったが、逃げ遅れた者は、川に飛び込み、岸や流木にとりすがって死んでいった者が多かった。

なお、駐屯部隊の被害状況は判っていないが、甚大な打撃を受けたであろうことは察せられる。

八、被爆後の混乱

被爆により、校長・教頭および教員のほとんどが死亡または重傷を負って、勤務できる教職員は四人にすぎなかった。また、学区内には、家屋らしいものはほとんどなく、生残った児童たちも、現在、何処に住んでいるのか、皆目わからなかった。学校としては、市内各所に立札を立てて、児童父兄との連絡をつけることに努めるのが、主な任務となった。また、集団疎開児童を引揚げ、学校再開の見通しを立てることも必要であったから、疎開児童の生存父兄を探しだして、児童引取り方を願った。その結果、漸次児童も引揚げ、十一月の引揚げを最後に、疎開も終わったが、引揚げた児童の中には、家族が全滅し、引取人がなく、原爆孤児となった者が一人あった。これら児童は、比治山国民学校の迷子収容所へ送った。学校は完全にその機能を停止した。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆の惨禍により、各所に避難した児童やその父兄との連絡が容易にとれず、開校の運びにはなかなか至らなかったが、焼跡、その他各所に立札をして、「天満国民学校は九月十五日より己斐国民学校において授業を開始する。なお、学校登校が不便な者は最寄りの学校に行け。」と、指示した。

九月十五日、己斐国民学校の講堂を借りて、授業を開始したが、当日出席した職員は四人、児童は約三〇人程度であった。その後、疎開児童の引揚げや、児童数の増加により、間借授業の不便さから、昭和二十一年六月、焼跡にバラックではあるが校舎が建築されて、新しい出発をしたのである。

被爆による全壊全焼から、学校の再建まで、次のように苦難の道程を経た。

昭和二十年九月十五日、市内己斐国民学校を借りて授業開始。職員四人・児童三〇人程度

昭和二十年十月 市内高須町真宗光明団を借りて授業

昭和二十一年三月 天満国民学校の焼跡にて青空教室

昭和二十一年五月 本川小学校の教室を借りて授業

昭和二十一年六月 バラック校舎二教室を東側校舎跡に建築して本校に帰る。

昭和二十一年九月 バラック校舎五教室を北側校舎跡に建築

なお、学用品・教科書の入手などについては、教職員、児童および保護者の相互扶助・創意工夫によって、困難を乗り越えることができた。

[第九項広島市観音国民学校…118](#)

(現在 {広島市立南観音小学校

{広島市立観音小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東観音町一丁目
校長 玉木 知
教職員 三三人
児童 一、六一七人
校舎 木造二階建四三教室延七三六坪
敷地面積 三、四八二坪
爆心地からの距離 約一・四キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				緑故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十三日	比婆郡東城町五か寮 八幡村一か寮	教員一六人 寮母二〇	三七二人	六五〇人	

	久代村一か寮 田森村一か寮	作業員一五			
合	計	五一人	三七二人	六五〇人	

広島市観音国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

該当なし

四、指定避難先

家屋の密集度が少ないため、いつも警戒警報発令と同時に家庭に帰宅させていたので、特に避難先は指定していなかった。

五、校舎の使用状況

該当なし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	一六人	約三五〇人	－	分散授業をおこなっていたので、本校への登校者は限られていた。

分散授業がおこなわれていた収容区分は、次のとおりである。

（一）在校児童＝東観音町一丁目区域の低学年及び五・六年児童全員

（二）イ 西高等女学校
ロ 大師堂
ハ 練成所会館

}
その他の区域の低学年児童

七、被爆の惨状

被害状況

（一）校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から約一・四キロメートル離れた地点にあり、爆発と同時に校舎は倒壊し、全焼した。

（二）人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	一二人	七四人	
重軽傷者	不明	不明	
行方不明者	不明	不明	
計	一二 （判明分）	七四 （判明分）	

児童が朝礼を終え、教員の指導が始まったばかりのとき被爆した。玉木校長は、午前八時、二階の校長室に入り、来客と対談中、ピカッと光った。「やりおったな」と、校長が言ったとたん、大爆発が起り校舎が倒壊し、その下敷きとなった。「私にかまわず、児童を、児童を……、天皇陛下万歳」と唱えながら玉木校長は死んだ(下川正一談)。

校舎内にいた一部の児童は、崩れ落ちる校舎の下敷きとなった。太い木材が幾重にも折れ重なり、身動きできなかった。

これを救出するにも、多数の人力と、機械力が必要であった。その上、時間的余裕もなかった。児童は口々に、父や母を呼び、先生に助けを求めて泣き叫びながら、まもなく、猛火に包まれてしまった。

また、校舎の外にいた者にとっても、異常な爆発、倒壊する校舎、下敷きとなる児童を眼前に見て、驚天動地の衝撃であった。無傷の者、または負傷者のうち比較的軽傷の児童はただちに下校させ、そのほかの者は、たずねて来た家族に引取られて帰宅した。

八、被爆後の混乱

下敷きをまぬがれた児童の中にも負傷者が大勢いたが、校舎が倒壊して、医薬品を取出すことができないし、手当をすることもできなかった。まずは火の手が町中に廻らないうちに帰宅させることが、先決であると考え、自力で帰ることのできる者は帰宅させ、帰ることのできない者は父兄の引取りを待つことにした。

校舎は全焼し、学校長以下教員一〇人のほか事務員・使丁を失い、町内の民家もほとんど焼失し、生存児童も家族

と共に各地に避難して連絡がとれず、学校の機能は完全に停止した。

疎開児童もまた帰るに家なく、家族や親戚などの引取りがあるまで、引続いて疎開生活を続行した。

九、学校再開の状況

学校の再開

南観音町南端(現在・観音新町)の三菱青年学校は、爆心地から約三・六キロメートル離れていたため、建物の被害程度も比較的軽く、応急の修理をすれば使用可能であることが判明した。ただちに三菱青年学校に交渉して快諾を得、九月十五日応急修理に着手した。

ところが、肝心の生存児童の大半は四散し、疎開児童も大部分が疎開先に残留している有様であった。そこで残存児童の実体を把握すべく、九月二十日、第二国民学校(現在の観音中学校)に集合を命じたところ、約四五〇人が集ったから、学校再開に対する見通しをたてることができた。そして十月に入るや学校の存続が決定され、第二国民学校(現在の観音中学校)を借りて開校式を実施した。

昭和二十年十月五日授業再開

学校長……職務代理 木村孝一

児童数……約五〇〇人(月末七七一人)

学級数……二二学級

元三菱青年学校校舎を本校とし、第二国民学校(現在の観音中学校)の一部を間借りして分校とした。

児童の教科書や教材はまったく乏しく、文部省発行のパンフレット型の教科書を、数人に一冊の割で使用したり、使用済用紙を各方面から寄贈してもらい、裏面に前記教科書を謄写して代用した。

[第十項広島市竹屋国民学校…124](#)

(現在・広島市立竹屋小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市竹屋町字二の割

校長 間賀田琢爾

教職員 二五人

児童 約六〇〇人

校舎 木造二階建・四一教室

敷地面積 四、三九五坪

爆心地からの距離 約一・五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十二日 より 昭和二十年十一月十五 日まで	山県郡加計町 安野村 戸河内町 筒賀村 殿賀村	一五人	四〇人 四〇 一三〇 四五 四五	三五〇人	
合 計		一五人	三〇〇人	三五〇人	

広島市竹屋国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

- (一) 爆撃の際……防空壕
- (二) 校舎火災の際……運動場
- (三) 状況に応じて……学校の東方約八〇〇メートルの比治山公園に避難する。

五、校舎の使用状況

陸軍部隊が駐屯する予定になっていた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	一一人	八〇人	一〇人	集団疎開しない低学年か、残留児童で、学校まで遠距離の地区の者については、近くの寺・説教所を分教場として授業をおこなっていた。

七、被爆の惨状

被害状況

- (一) 校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地の東南約一・五キロメートルの地点にあり、原子爆弾炸裂により、校舎は倒壊し、その直後ヨの字型に建っている校舎の、爆心に直面する西側(校舎配置図～の部分)から発火した。この部分は火気の全くない所であるから、熱線による自然着火と思われるが、奉安庫および玄関車寄せを残して全焼した。竹屋地区で最も早く火の手が上ったのは当校であるといわれている。

- (二) 人的被害

校舎外にいた児童は全員即死、または重傷を負った。

職員室とその東隣り校長室・衛生室とは、煉瓦造りの防火壁で隔てられていたが、その倒壊によって衛生室にいた光成選造教頭は圧焼死した。職員室・使丁室にいた職員のうち四人は圧焼死し、他の職員は延焼前に脱出した。このとき築地訓導らが全壊の北側校舎から児童二〇数人を救出した。しかしその後は、校舎のすぐ北側の道路は比治山への通路で、多くの避難者がこの道を東へ向って走っていたから、在校被爆者もこれに合流するなど、生存者は四散し、その実態は把握できないことになった。

後日の検分によれば、前記衛生室前で圧焼死した光成教頭の遺骨の傍には、明らかに、その側に走り寄って、共に圧焼死したと思われる児童の折り重なった遺骨が発見された。築地訓導らによって救出された児童以外の、多くの児童が脱出不能のまま、焼死したものと思われるが、詳細は不明である。

分散授業所の一つであった円隆寺(とうかさん)焼跡には、登校児童のものと思われる遺骨数体が点在していた。

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	五人(五)	五〇人(一五〇)	() 内は、学校外での被害者数
重軽傷者	六 (八)	三〇 (一三〇)	
計	一一(一三)	八〇 (二八〇)	

八、被爆後の混乱

学区・校舎ともに壊滅し、学区内居住者もなく、職員も大部分被災者であったから、学校の機能はほとんど失われた。焼残った玄関車寄せの壁に、焼炭で来校者氏名や伝言を書いて連絡方法とする措置がとられたほか、特別な措置はとり得たい状態であった。

被爆の前月、すでに退職願を提出していた間賀田琢爾校長は、当日朝、警報解除後、いったん吉島町の自宅に帰っていたから被爆死を免れたが、教頭以下の死亡その他負傷などにより、職員組織のほとんどが破壊されたため、退職命令が発令されぬままに、郷里の賀茂郡志和村の自宅から、週二回程度出勤して、引続き校務を担当することになり、玄関車寄せの壁を利用して、連絡所をつくり執務した。

職員のうち、自宅が市内にあって、家も半壊程度ですんだ石富訓導が、だいたい隔日に、この連絡所に出勤していた。また連絡のため、月一同程度の全員会議を開いたほか、随時、連絡・情報交換のため立寄る程度であった。こうしたうちにも、生残りの職員によって校地内の遺骨を拾集して遺族に渡し、十一月に、連絡のつく限りの関係者が参集して、形ばかりの慰霊祭をおこなった。

集団疎開の児童も、ほとんど孤立の状態となっていた。疎開地主任の高井訓導は引続き児童を疎開地に残留せしめ、まず帰広して引取人の存在を確かめ、引取人があれば、そのつど引取人のある児童を、疎開地から広島へ引率して帰る

という方法で、疎開児童の帰広を計った。こうして、児童の引渡しは、確実におこなわれたのであるが、最後に残された児童に至っては、遠く東は福山市、西は山口市までおもむいて、引渡しをしなければならない有様で、引揚げの完了したのは、十一月十五日であった。

十一月、車寄せの連絡所を取払い、第三国民学校(現翠町中学校)に事務所を移した。

十二月、間賀田校長の退官発令が確定した。その後、職員も逐時転勤・退職して、僅かな職員がますます減員してゆき、わびしい職員構成になった。翌二十一年四月以降、事務室を大手町国民学校などとともに、袋町国民学校の一隅に移し、高井訓導が校務取扱者として校務・残務に当たった。

その年十月以降は、高井訓導も袋町国民学校への転勤が決まり、しかもなお竹屋国民学校の校務取扱者として兼務するなど、竹屋国民学校には学校活動はなく、昭和二十五年四月に再興されるまで、完全に学校は閉鎖されたままであった。

九、学校再開の状況

学校の再開

前記のとおり学校は閉鎖されていたが、昭和二十五年に至ってやっと開校の運びとなった。昭和二十三年、竹屋小学校復興促進委員会が結成され、初代会長に任都栗司を推し、まもなく安田寿夫が第二代会長となり、復興促進運動が活発に展開された。

昭和二十五年に至って、学校再開が本決りとなり、四月一日、現在地において鋤入式が挙行され、校舎建設工事に着手したが、これは学区を挙げての喜びであった。こうして事務所を袋町小学校から竹屋保育園に移し、教職員三十五人が配置され、一年生は寺院・竹屋保育園・柔道場を臨時教室として授業を受け、二、六年生は千田小学校に、三、四、五年生は幟町小学校に、それぞれ間借りして授業を受けた。

同年五月、四教室が完成するや、これを一、二年生の教室に決めて、二部授業をおこなった。同年七月第一期工事完成と同時に、全員竹屋小学校校舎において授業を受けるようになった。

第十一項 広島市白島国民学校…130

(現在・広島市立白島小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東白島町
校長 小林宇一
教職員 四四人
児童 八七一人
校舎 木造二階建・三三教室・建坪五〇四坪
敷地面積 延坪二、六一一坪八五
爆心地からの距離 約一・五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十四日	安佐郡 亀山・大林・飯室・鈴張四 か村及び亀山西分校 (一説に三入村を含む)	一二人	二九〇人 (一説に約五〇〇人ともいう)	不明	
合 計					

広島市白島国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	鶴見町	一人	男・女 六七人	疎開跡片づけ	八月五日に男子三六 人出動済み

四、指定避難先

白島地区内の広場

連絡先は市役所または県庁

五、校舎の使用状況

昭和二十年一月から被爆まで軍隊がいたが、部隊名は判らない。

当時、白島校では、学童疎開残留組の五年六年および高等科の生徒が、本校正面校舎の二階の一部で授業をおこなっていた。一、二年、および三、四年はそれぞれ町内の寺院に分散授業がおこなわれ、学童の大部分は安佐郡の諸所に疎開していた。空室になった教室は、戦時体制に切替られ、外地出征の軍隊が寄宿していた。

これら軍隊の出入りを見ていると、まるで広島が戦場であるような感さえした。一部隊が出征したあと、山のように積まれた塵、その片づけに教室に入った者は、黒くなるほど足にしがみついて来るノミを恐れたものである(土田訓導手記)。

なお、専売局用の塩二〇俵が、ご真影を疎開したあとの奉安殿に保管してあった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
授業	不明（五人以上）	約三〇人ぐらいか？	不明	一、低学年は分散授業で、登校中か、家庭にいた 二、高等科二年は、建物疎開に出動。

七、被爆の惨状

被害状況

校舎は、原子爆弾の炸裂と共に崩壊し、熱線による自然発火で全焼した。

学校内では、土田康(旧姓三角)著・「げんばく記」によると、炸裂下、教室にいた兵隊たちが、飛び散った廊下から下の土台に寄りかかりながら、地面に坐ったそのままの姿勢で、ほとんど即死に近い状態で、「逃げないと火が来ますよ。」と言っても、なんの応答もなく最後のわずかな生命を苦しんでいた。また、一方では、屋根がとび摺鉢状に地面に叩きつけられた教室の中で、二〇数人の男子児童が、口々に「お母さん」と叫びながら、両手を挙げて、四方の壁ぞいになりながら、グルグル駆け回っていた。その瞬間からすべての思考力と判断力を奪われた子らは、イワシがたらいの中を游泳するように、ただ同じ個所をグルグル走り回っていたところを、土田訓導が倒れた柱をハシゴにして登るようと、声をかけて、やっと柱づたいに這いあがって来て、逃げだすことができた。急に元気を取りもどした子どもらは、すぐさま風の中の灰のように散っていった。子どものいなくなった教室からは、無気味な臭いのするガスが立ち昇っていた。

この日午前八時、鶴見町の建物疎開作業に高等科二年生の男女六七人(引率者田崎アキエ)が出動した。田崎訓導が竹屋国民学校に到着したことを連絡に行く途中で被爆、現場に引返してみると児童の姿は一人もなく、被服廠方面に逃げた者、また比治山下を流れている川に難をのがれた児童も何人かいたようであるが、六七人が全員死亡したものである。なお、田崎訓導は一命を拾った。

人的被害としては、全体で、校長小林宇一、および現業員一人、児童は約一〇〇人が即死。教職員二人、および生徒一人が負傷した。このほか児童の行方不明が多く、総人員はつまびらかにしない。

八、被爆後の状況

学校で被爆した人々で逃れる力のある者は、白島東中町通りを北上、あるいは長寿園土手から川上に向い、工兵橋を渡って祇園町・原村へと指して行った。

七日朝、大芝町の自宅で被爆したが被害のなかった山本訓導が、校舎の焼跡を訪ねて待機していたが、誰も来るものがなかった。

十日ごろ、重傷で安芸郡府中町に避難していた土田訓導が校舎をおとずれたとき、校内の奉安殿の前に、関係者連絡簿が石で押さえて置いてあった。移動先の欄には、各人の寄寓先の住所氏名が書かれてあり、死亡者の欄に小林校長の名があった。確認という字が一きわ大きく目に見えた。以下同文で死籍に名を連ねている知人の中に、土田訓導

自身の名があり、びっくりして抹消、「生存」と大書した。

奉安殿の横の壁には、瞬間的な熱閃光により、垣根の鉄柵の影がくっきりと焼きつけられており、ペンペン草の影を写した屋根瓦、人影を残したコンクリート壁など、奇妙な映像が見られた。

土田訓導が被爆した正面校舎の、左側半分の焼跡には、無数の白骨が、誰のものとも区別もつかず、貝がらのように白く砕けてあたりを埋めていた。校庭の中央に涼しい日陰をつくっていた大柳も、枝をみな焼きはらわれていた。その下に構築されていた防空壕から、死体のはみ出しており、腰には一振の軍刀が、生前を誇示するようにさがっていた。

校舎の土台石には、地藏尊を浮彫りにしたように、人の影がならんで焼付けられていたが、炸裂直後すでに死線にうめいていた兵士たちの、変りはてた姿であったようである。

いうまでもなく学校の機能は停止し、対策措置とてなく、まったくの壊滅であって、防衛計画で指定されていた応急救護所にも使われなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月末、焼跡もようやく秋づいて来たが、校舎再建の手がかりは、何もなかった。資材もなく、人手もなく、また頼るべきものもなかった。

九月上旬、牛田国民学校に生存児童を集合させて授業を再開した。そして、学童疎開で難をまぬがれた児童たちも帰って来て、これに合流した。再開当時、教員は四二人、七教室を使用した。児童数は牛田国民学校児童と混合していたため不明である。学用品や教科書は児童各自が探して、他から借り集めて来た。

この間、市の学務課や市議会では、白島校を廃校にするという意向に傾いていたが、教職員はもとより、大横田義雄など地元有識者らの何としても再建したい熱意と努力によって、翌二十一年二月に旧校舎跡地の一部に板張りの仮校舎を建設し、ここに復帰した。この再建に際しては、児童たちも地区内の焼跡から、煉瓦を一つ一つ運んで来るなど、涙ぐましい協力を示した。

建築資材は、学校関係者の努力によって、解体した白島北端の工兵隊兵舎の建材をはじめ、宇品曙部隊・キ隊のバラック兵舎・三滝の陸軍病院などから無償払下げを受けたもので、工兵隊の残務整理隊長は、材料を運ぶための軍用トラックを寄贈した。市もこの努力に動かされ、一九万円の建築予算を計上し、板張りのバラック建てながら教室六、宿直室一棟、小講堂一棟が完成し、四月十八日、校舎落成式を挙行了したのであった。

その後、この東白島町の校地は、電通局にゆずり、広島城天主閣と堀を隔てる現在地に、一部が昭和二十四年十月五日に移転し、昭和二十五年九月五日に、全部の移転を完了した。

きのこぐも(抜粋)

土田 康

(当時・白島国民学校勤務、校内で被爆、旧姓三角)

一、八月六日

八月六日朝、夜来の空襲からやっと解放された私は、食事を済ますと勤務先である直ぐ前の、白島国民学校へと家を出た。

肩から救急袋と防空頭巾を掛け、手に皮のカバンを下げている私。市民の誰もがこんな服装をしていたのである。

校門に入る。警報解除で登校して来た子供たちが四〇人程学校にいた。当時白島校では、学童疎開残留組の五、六年と高等科の生徒が本校正面校舎の二階の一部で授業を行っていた。一、二年・三、四年は、それぞれ町内の寺院に分散授業が行なわれ、学童の大部分は、安佐郡の諸所に疎開していたのである。空室になった教室は戦時体制に切替えられ、外地出征の軍隊が寄宿していた。これら軍隊の出入りを見ていると、まるで広島が戦場であるような感さえた。一部隊が出征したあと、山のように積まれた塵、その片づけに教室に入った者は、黒くなる程、足にしがみついて来るノミを恐れたものである。私はこんな状態を見て、いつか戦争の末期的症状を感じていた。

この朝、学校内には前夜からの宿直教員(男)と使丁二人しかいなかった。私は二階の教員室で出勤簿に捺印し、自分の教室に戻ろうと廊下を歩いて来たその時である。微かに B29 の爆音を聞いたように思ったが、警報解除後の安堵感から、友軍機だろうと気にもとめなかったが、次の瞬間ピカッともものすごい光が目射した。それは燈々色の火の玉が落ちた様にも思えたし、雷鳴時の稲妻のようにも感じられた。日もくらむようなけわしい金属性の閃光は、何時も

訓練で見せられているエレクトロン弾の大型のものの炸裂のように思えた。ハッとして、思わず窓越しに校庭の角力場の幕が燃え落ちるのを見ると、私は夢中で目のコンクリートの水槽へ走り寄った。そして、そばのバケツを取ろうとした時である。地軸を揺るがすような爆発音と共に、全身を棍棒で打ちのめされたように、その場に叩きつけられた。体内の腸わたを吐き出すような苦しい圧迫感の中で、遠く校舎の崩れる破壊音を聞いていた。

もうろうとした意識のなかで、「死んでは大変だ、なにこれ位のことで死ぬものか。」と、気強く考え続けていた。

しかし、それも極く僅かな時間だったに違いない。そのうち頭の芯が、ジーンとしびれて来て、ついに意識がなくなってしまった。

何が動機でこうなったのか、また、どれ程の時間がたったのか解らない。私はふと不思議に気がついたのである。

目を明けてみるともうもうと立ち込める黄塵の煙で何も見えないし、息をする事もできなかった。締めつけられる様な苦しさの中で、自分の手や足が何処にあるのかさえ感覚的にはっきりしない。そのうち目が馴れて来たのだろう。

薄暗い光線を通して直ぐ下の手の届きそうなところに、階下にいた兵隊たちが枕を並べて倒れているのが見えた。「死んでたまるものか。」、私は定かならぬ自分にそう言い聞かせながら、その場を脱出しようと、全身に重くのしかかっている壁土を引っ掻きながら、やっと片手を抜いた。しかし起き上ろうとしても身動きが出来ない。何か大きな物体が私の上にあるのだ。コンクリートの水槽のようだった。その角が私の左の肩胛骨の上にある。わずかに自由のきくようになった右手を、胸の下にあてがい、満身の力といっしょに体をねじってみた。ドスン!鈍い響きを立てて背中の上の水槽が下に転落した。まだ何か胸に引っかかっているようである。丸太から出た五寸釘が、左乳の中央を突き通して、私を釘付けにしていたのである。そっと抜きとるように上体を起す。よく見ると、私が歩いていた廊下の踏板は一枚もなく、踏板の下にあった横木の丸太と丸太の間に胸と太股をかけて宙づりになっていたのだ。二階にいた私の位置は、地面から一、二メートル程の高さのところであって、一階にいた兵隊たちは、飛び散った廊下から下の土台石に寄りかかりながら地面に坐っている。

幸いに、私は足だけは傷つかず満足のように思ったので、必死に逃げることばかり考えた。やっと滑り降りると、下の兵隊たちを揺り起しながら言った。

「逃げないと火が来ますよ。」しかし彼らはなんの応答もしなかった。微かに呻きながら、断末魔の苦しみにあえいでいたのである。このおびたしい兵隊たちは、みな即死に近い状態で、最後のわずかな生命を苦しんでいる。外見からは大した怪我も見当らず、その表情さえ眠っているとしか思えない不思議な状態で、しかしもう反応さえ見せない程、切迫した死を迎えようとしていたのである。「逃げなければならない。」再びそう思い直すと、自由のきかない体を動かしながら、折れ重なった材木の隙間からさし込む光線を頼りに、やっと表に出ることができた。

その瞬間不思議な光景にあ然とした。晴天であった筈の空が、夕暮れのように鉛色に曇っている。見馴れた広島城もなければ、天守閣も消えている。見渡す限り建ち並んだ家がつぶれて瓦礫と化した街、私は事の重大さをその時初めて知ったのである。原子爆弾というものについて一片の知識も持たない私は、それが空襲の結果とは考えられなかった。恐ろしい天災地変がおきて、この世の終りが来たように恐れおののいた。

屋根がなく摺鉢状に地面に叩きつけられた教室の中で、二〇数人の男の子が、口々に「お母さん」と叫びながら、両手を上に挙げて、四方の壁ぞいに一列になりながら、グルグル駆け廻っていたのである。見たところ怪我をしている様子もない。一瞬の、想像もつかない恐ろしい力の一撃で破壊された教室、その瞬間からすべての思考力と判断力を奪われた子らは、鰐がタライの中を遊泳するように、ただ同じ個所をグルグル走り廻っているのだ。「その倒れた柱をハシゴにこちらへ出なさい。」そう叫ぶと、中の一人が声を聞きつけたのだろう。斜めに倒れている柱にまたがり、四つ這いに登り始めた。そのあとに続くように、先頭の子と同じ動作でゾロゾロ登ってくる。登りつめて四方の視野が開けると、急に元気を取戻した。そしてすぐさま、風の中の灰のように散っていた。子供のいなくなった教室からは、無気味な臭いのするガスが立ちのぼっていた。

二、脱出

このあたり(白島国民学校旧位置付近)の木造建築は、斜め上からの爆風で北側(爆心地より反対方面)に一間ぐらい、敷地よりはみ出して押しつぶされていた。屋根瓦が爆風でめくられて、その下のトントン葺きのソギ板が、路上一面に隙間なく散乱して、歩行を困難にした。はだしの足裏に、ソギ板についていた二センチ程の細い釘がささり、それが次々と重なり合って、足駄にたまる雪のように厚くなってゆく。

泣き叫び、必死に肉親の名を呼び求める阿鼻叫喚のなかを、私は夢中で我が家へ向った。

火事がおきたのだろう。あちらこちらの地面から煙がかげろうのように立昇りはじめ、炎がチロチロ舌を出してい

た。その中を何処へ逃げようとするのか、難民の群れが津波のように押寄せて来る。両腕が肩から一五センチ位のところで、もぎ取られた男が、滝のように流れる血潮をものともせず、それどころか、残された上部の腕を前後に振りながら大股で歩いている。髪の毛はベトリ血で前額にへばりつき、ギラギラ光る目と、口をカッとあけている姿は、仁王像そのままだった。私は人波にもまれ、押し倒されそうになりながら、一足ずつ引ずるように歩いた。

「先生！！助けて」という声が足元から聞えた。誰だか解らなかったけれど、私を知っている人にちがいない。つぶされた家に五、六人の人がおさえられている。両肩からさきを出している婦人が手でさし招いていた。私は歩み寄って力一ぱいその手を引っ張った。簡単にスルスルと抜け出てくる。次に隣りの婦人を、そしてまた隣りをというふうに、何人かの人を引っぱり出したとき、私の力はすでに尽きていた。その時、もう一人両足を出してばたつかせている人に気がついた。最後の力を振りしぼって懸命に手を添えたが、どうしても出ない。手伝ってもらおうとあたりを見ると、今たすけたばかりの人が、もう何処にも見当らなかった。

学校正門前まで来た時、私は昨日奉安殿に疎開の塩を入れて置いたのを思い出した。

爆風でこわれたらしい、半開きの扉のなかをソツとのぞくと、幸い袋の塩はそのままだった。手を入れるとむさぼるようにその塩を掴み出して、首筋の傷口にぬりつけた。

止血剤のつもりである。そして、シミーズをさいてこしらえた繃帯に塩を包んで、それを首にあてがった。痛みも感じなかった。夢中で行なったこの応急処置が大変効を奏したらしいことを、後になって医師から聞かされた。

頸動脈近くからの出血がこの手当てで、ぐんぐん減って楽になった。

正門前の自分の家へ来て見ると、潰された家の中に二、三人の家族が閉じ込められているようだった。呼んでみると応答があった。微かな光の奥に、白いシャツとパンツが見えた。助けなければならない。とっさにそう思って見たが、非力で、重傷を負うた体は、折れ重なった柱や建具を取除いて、助け出すことなど思いもよらなかった。

ちょうどその時、大本営(広島城)の中から防護団と軍人の一団が出て来た。「助けて！」私はその中の一人にしがみついて頼んだ。「よし。」力強く返事してくれたその人たちは協力して、たった一押しで屋根の合掌をとり除いてくれた。「ありがとうございました。」そう言った途端に安心感から全身の力が抜け、失心状態で通信局の一メートルほどのどぶの中へ転落してしまった。

三、下水溝より

どれぐらいの時が過ぎてからだろうか。ドシンと重いものにぶっつけられて、フッと気がついた。私と同じように苦痛に失心した人が、道路から私の上に落ちてきたのである。すでに何人かの人が同じ形で落ち込んでいた。

下水に冷やされた頭は、今までの記憶を呼びさますのに、案外時間がかからなかった。私に折り重なるようにもたれかかっているその人は、全身火傷で一皮むけ、真赤な肉の塊りと化していて、すでに呼吸困難にあえいでいた。

身体の表面からは黄色の液が吹き出して、汗の玉のようになっている。頭髮はチリチリに、顔は全面焼けただれて蜂の巣の如く、年齢も定かでない。私は恐る恐る下水溝の渕の石垣につかまって、首だけ地上に出して見た。

白島一円はすでに火が廻り、私の家も玄関のあたりから煙が吹き出て燃え始めていた。破壊された家屋から飛び散って、空を覆っていた土ぼこりが静まったのか、再び顔を出した太陽がガンガン照りつけるのと、火災の熱気で、地上は溶鉱炉のように、灼熱の地獄の様相を呈していた。その路上を直射熱光線にあてられたのであろう、一条まとわぬ裸の行列が続いていた。光線を受けた片半面が焼けただれて、理科室の標本の体でも見るような人もいた。正面から焼かれて、顔全体がズルむけになり、その顔の皮がアゴや鼻先にぶら下がっている人、そのアゴの下に、皮のたれ下った両手を幽霊のように重く垂らしている人、浴衣を肌脱ぎしたように、背中一面を焼かれて、その皮膚が腰のバンドから、シャツの様にブラリと下っている人。全身茶褐色にはれ上り、髪はつつ立ち泥とほこりにまみれてヨモギのようになった全裸の婦人など、この世の人とも思えない重傷者が、大本営方面から次々と出てくる。

いずれも、アゴを幾分前に突出し、無性にカッと見開いた目は、死魚のように鈍く淀み、空間の一点に釘づけされて、まばたき一つしない。その頭や瞳は、前後左右に動かない。放心状態で、鋳型にはめられたように、同じ格好をしながら、延々と一列になって通りすぎて行く。腰のバンドにゴボウ劔の下っているのが兵隊なのだ。足にはいている軍靴と共に、唯一の見分けとなっている。脚に巻いていたゲートルなどは、熱波のあたった方だけが燃え、残りは一〇センチ程に寸断されて、バラバラと落ちてしまった、ということである。

目に見えぬ死神の手に操られているこれらの人の中には、発狂したのか、燃え盛る火の中へ急に走り込んで、倒れた己が生身を、火葬にふす者もいる。

四、白島周辺の惨状

一メートル程の深さのどぶを、私は芋虫が這い上るような格好で路上へ出た。直ぐ前のわが家へとって返すと、さきに家族が下敷きになっていた所はすっぽりと大きな穴になり、どうにか逃げ出した様子が、はっきり解る。

立ち昇る炎を仰いで、無事に逃げ終らせてくれることを、神に祈った。自分だけが逃げ遅れた淋しさも、恐ろしさも、その時は夢中で解らなかった。目の前の学校もすっかり火が廻って、何メートルもの炎が天を焦している。今のさきまでひしめいていた多数の避難民は、何処へ逃げ落ちたのか、一人も見出せない。ただあるのは、私達重傷者がウロウロ徘徊する姿だけである。

私は日頃懇意にしていた通信病院がまだ無事なのを見ると、仏の導きのように飛び込んでいった。…外科部長先生に「無事だったか。」と声をかけられたときは、涙がこぼれた。

…逃げ仕度の先生が、ハリネズミのように、突立った左首のガラスの破片を二、三とって下さった。「や、これは動脈へ半分食い込んでいる。大変な出血だ。下手をすると三時間位だぞ。」と教えられた。それでも出血多量で死が近づいているということがよそ事のように、何とも感じなかった。

…白島一円は、燃え上る火がうず巻いていた。病院前の広い道路を、白島終点へと出た。ここでは、市電が一台横倒しになって燃えていた。即死した乗客が焼けるのだろう。車内から、火葬場と同じ悪臭がムッと鼻をついた。電線はズタズタに切れて、クモの巣のように地上にたれ下っている。路上には、爆風で踏みつぶされたようになった人々が、血を吐いて死んでいる。

「お母さん！！お母さん！！」はげしい泣き声がすぐ後でする。振りかえると、すでに火のついた屋根の上に、中学一年になる男の子が上って、狂ったように叫んでいる。「お母さんはもう駄目なの、捨てて逃げて下さい。火が来るから逃げて、貴方はしっかり勉強して、立派になるんですよ。」呉服商であった〇〇さん一家の、母と子の最後の別離の言葉である。断腸の思いとは、このことであろう。

「お母さん！！お母さん！！」と言う声の、次第に遠ざかりゆくのを聞きながら、私は戦争というものに対する、はげしい憤りで全身がガタガタとふるえた。この母子に何の罪があらう。

…常葉橋際にもすでに一段と大火が猛威をふるっていた。土手の官有地だけがまだ火がついていない。京橋川を渡って逃げるより方法がない。土手沿いの民家のわずかなすきまを抜けて、私は川縁へと出た。しかし意地悪く川は満潮時で、川幅一ぱいに水が流れていた。この体で、水かさの増したこの流れを泳ぎ切れるだろうか。泉邸の土手には真黒に難民がひしめき合っている。重傷を負った人だろう。身を支え切れず川へ落ち、力尽きて、のろいテンポで水の上を浮いたり沈んだりしながら、川下へ運ばれてゆく。そしてその淀んだ流の中に、表皮をとられて真赤になったおびたしい屍が、漂流している。この世に血の池地獄の再現をみた思いだった。

飛び込んで泳ぐ元気などあろうはずがなく、どうしたらよいのか、ジッと水面を見つめて考え込む。しかし私のあとへも次々と人が集ってきた。仕方がなかった。私は砂防用の一メートル程の丸太を必死に引抜くと左脇にはさんだ。首の傷を水につけない為である。河水は気味悪いほど生暖かった。右手と足で、私は懸命に泳ごうとした。息がきれてゼイゼイ言う。水につけたためか、胸の刺し傷から、また血が吹き出してくる。心臓があつく感ずる。重い重い。こんな筈はない程重いのである。川の中央で、私はフッと振返った。なんと小脇にはさんだその丸太に、小学三年の針尾君がつかまって居るのだ。「先生！」と泣きそうな顔で一言いって、私の顔をジッと見つめている。重い原因の彼、けれどそれを振落す力も、叱る声も出ない。だまってそのまま、引きずるように泳いだ。平素は、子供を背負って平気で往復できた川を、幾つかの屍を掻き分けながら、私はやっとの事で対岸まで泳ぎついた。河原に這い上った時は、もうどうする事もできず、うつぶせになったまま、しばらく死んだ様に転っていた。

五、旋風

…この頃より急に空が曇り出した。火が雲を呼んだのであろう。私は常盤楼(料亭)の石垣の下にベッタリと坐ってボンヤリ河原の騒ぎを見詰めていた。後頭部に大穴のあいている人が、ありたけの声をふりしぼって、なぜか腹痛を訴えながら、のたうち廻る。二、三歳の幼児が、母を求めて泣き泣き徘徊する。何の幻にとりつかれたのか、抜刀して河の流れに突撃する兵士、天皇陛下万歳を三唱して息を引きたる軍人。そういう人達の間隙をぬって、「水！！水！！」と叫んでうごめく乙女の群。挺身隊の鉢巻が、この人々の姿をより一層悲壮なものにしている。突如として、雷鳴とともに沛然とした小石大の俄雨が降ってきた。焼けただれた人々の体を、容赦なく叩きつける。

針にさされるような痛さである。砂原の上を転がり苦しむ人々は、みるみる砂ダンゴのようになってゆく。私は急激な気温低下のためか、悪感戦慄が全身を襲ってきた。ガタガタと歯の根が合わない。全身鳥肌がたって息がはずむ。雷鳴を敵機襲来と間違って、逃げ廻る人々のさわぎも、遠い潮騒の響きのように、かすんだ耳に伝わるだけである。

私は横たえた体に、あたりの砂を両手でできるだけ厚くかけた。

降りしきる雨ではあるが、炎々たる火事には何の役にも立たないらしい。相変らず、真赤に天空を焦して炎を吹き上げている。その時である。突然旋風が起きた。京橋川の上を川上から川下へ、ものすごい勢いで吹き抜ける。そしてその風がつむじ風となって、川の水も、砂も、またその辺に徘徊していた幼児も、空へ巻き上げていったかと思うと、今度は頭上へ、市街より運んできた燃えかけの木片や、火の粉、消し炭の類をバラバラと叩きつけてくる。再び焦熱地獄が、河原の罹災者の上におそってきた。砂をかぶっている私はむし焼きにされるような苦しさである。こまかい砂と火の粉の風に呼吸もできない。立って物蔭に逃げる事もできない強風である。

「もう駄目だ。」心の中で何度そう叫んだであろう。しかし幸いなことに、しばらくの後にそのつむじ風は、ピタリと止んだ。恐る恐る目をあけると、今まで前にいた幼児達は吹き飛ばされて、影も形もなくなっている。

そして川中一ぱいに風に吹き飛ばされたと思える人々がうごめいていた。対岸の火の見やぐらの上には、大八車がひっかかって燃えていた。

私は、身体を休めていたここにも危険を感じ出したので、勝手に知った細道づたいに、常盤楼の庭へと出た。そしてふと見えた松の木の根元に、崩れかけた防空壕を見つけ、その中へ上半身を突込んで横になった。四十度近いと思われる高熱を発して、体中やけるように熱い。こみ上げてくる胸の苦しさは吐気を伴い、私は朝食をそのまま戻してしまった。そのうちに限りなく襲ってくる睡魔、私はこの恐ろしい状況の中で、苦しみながら、いつの間にか眠ってしまっていた。

六、饒津公園

どこまでが死への昏睡であり、どこからが生への目覚めであったか、その間の記憶は皆無である。身体中が高熱で火の玉でも抱いているように熱い。顔ははれ上り、目も口も開かない。私はその重いまぶたをやっと開けて周囲を見た。無数の大きな山蟻が真黒にたかっているのである。払い除ける力もない私は、彼らのなすままに、ジッとそれを見つめていた。ところかまわず噛みつく。出血している傷口にダンゴになってたかる。髪の中から鼻のなかまではいってくる。ふてぶてしい生命力、彼らはこれほどの惨害に、何の傷つくところもなく生きている。

…何時間か昏睡状態にあった私は、気がついたときその深い眠りのためか、かなり疲労から回復し、起ち直らせる力を与えてくれていた。静かに上体を起してみた。しかし起ち上れない。腰に力が入らない、左足がしびれているようである。後日調べてみたら腰椎にひびが入り、肩胛骨と肋骨三本が折れていた。

私は肩よりつつた左手を軸に、右手で徐々に後すざりをしながら壕を出た。陽が西に傾きかけていた。五時に近いようである。

対岸はすっかり焼け落ちて、火の手が低くなっていた。

あたりには動く人影一つ見えない。あるのは全部死に果てた累々たる屍だけである。頭上の松の枝に、どうして生残ったのか、ジイジイと鳴く油蟬の声が此の世の唯一のたよりのように聞える。

…私はあきらめてじりじり這い始めた。真夏の太陽と火災の熱気で、焼トタンのようにあつくなっている大地を、裸に近い姿で這うことは、たえられない苦痛だった。一寸刻みに歩行を続けていた私は、それでもどうにか山陽線の線路に辿りつくことができた。ガードの東詰めに貨車が脱線して燃えていた。

鉄道の枕木もすっかり燃えて炭になり、線路のレールだけが白銀色に光り輝やいていた。そして線路づたいに、逃げ遅れた人々が、真黒の炭の塊となって、点々と転っていた。

火災はまだ、遙か横川方面まで一望につづいていた。三篠橋際の工場の煙突が、手が届くほどの近くに見えた。私は饒津公園の方へ斜めに土手を這い降りた。遠く牛田の山が火を吹いていた。

公園の入口の茶店であったと思う。半焼の家の厨の水道から、水が溢れ出ている。私はその流しに掴まり起ち上った。手を洗い足も洗った。顔ははれ上りがひどく怖くて触れられなかった。ふと、そばに飯鉢のあるのに気がついた。ふたを取ると、高粱飯が半分程入っている。瞬間急に空腹を覚え、手づかみで食べ始めた。充分に開かない口へねじ込むようにむさぼった。他人のものを盗んでいる気持も意識の外だった。生きるものの当然の仕草のように夢中で食べた。この辺りにすむ人達はかなり余裕があったのか、境内わきのどぶのふちに、柳行李が二つ持出されていた。ふたが開いている一つの中に入れられているタオルと手拭を一本ずつ下駄を一足取出すと、再びゾロリゾロリと東練兵場の方へ歩いた。そのうち松木立の下に人影が見えた。一部火災を免れた家の人達が、野天で夕飼の仕度らしきことが始っていた。

東練兵場の入口へさしかかる頃、私は非常に心臓の苦しさを感じ、立っていられないようになった。やむを得ずま

た、道端の草むらの上に横になった。脈の結滞がおこっている。はっきりとそれが自覚できたけれど、どうする術もない。練兵場の中ごろに、天幕張りの救護所が設けられ、赤十字の旗がへんぼんとひるがえっていた。近郷にあった軍の医務室が移動したのだろう。救急車を押して歩いている兵に「ブドウ酒を下さい。」と頼んでみた。「そんなぜいたくなものはない。」と頭から叱られた。「カンフルは?」再び聞いた。「ない」「ではアルコール綿を下さい。」必死に頼む私に、兵士は胸のポケットから消毒用の綿の入った容器を投げてくれた。うれしかった。合掌してその兵士を見送った。ありがたさに、口がきけなかったのである。

私は急いでその容器からアルコール綿を取出すと口に含んで目を閉じた。

.....

人の気配を感じて、私はふと目を開けた。そばに女の人が立って、ジッと私を見ている。私はやっと住所氏名・職業を書きとめてもらって、その紙を頭の繃帯にはさんでもらった。そしてここで死んだと伝言をたのんだ。

七、東練兵場の夜

幽幻の境地をさ迷いながら、昏々として死んでいるような、眠っているような状態の中で、再び意識を取戻した。

肌に吹きつける夕風の寒さが肉体を通して私の生気を呼び覚ましてくれたのかも知れない。日はトップリと暮れて、夕闇に沈んでいる練兵場の空に、黒い煙が立ちこめていた。私はまだ死なずにいたのだ。

山一つ越した府中町や温品村に救急薬を沢山疎開してあったことが、ぼんやり頭に浮んだ。そこまで行きたい。行けば何とかなる、そんな想念が頭を去来する。はかない望みも、生死の境にある今の私には、生きるための重要な命綱となった。最後の力を振りしぼり、芋虫が這うように現場から離れていった。丘陵に林立する木陰の下は、避難民で埋っていた。途中、自分より大きい息子を、背負って、息も絶えだえに歩いている婦人に会った。背中の人はずでにこと切れている様子である。母の愛情、その偉大さに涙がこぼれた。私と同じように逃れのがれて、この辺りまで辿りついた人達の中からも、遂に力つきて倒れた死体が、草むらや、路上のあちこちに散見された。切迫した死を前にしての故か、微かに息ある人も、死体の顔と同じようにすべて表情を失って、動きの止った目を闇空の一点に向けたままの悲壮な姿も何人か見た。近郷から救出に來た人達だろうか、せわしげに大八車を引廻し、親類や家族をたずねる声が、死の夜空に響き聞える。救護所は手当てを受ける人の黒山だ。トラックで運んできた食糧や水をもらう人の行列が、闇の中に続いている。一条まとわぬ身体を、どこかで拾ったらしい一枚のゴザで覆った少女の姿が印象的で、ここの情景を一層深刻なものにしていた。

練兵場を横切ったところまで出て、私は、はたと困った。僅かな距離ではあったが、切通しの上り坂を登る自信がなかったからである。これ以上の負担を、この弱り果てた心臓にかけられそうもない。私は関東大震災の時、上野で野宿したのを思い出した。あの時は家族一緒だったけれど、いまは自分一人である。炎々と燃える火災から私達家族を守ってくれた山の松林、その同じような条件の、やはり松の木の山に私はいる。私は一切の運命をこの松の大木にかけて、一夜の宿をこうた。生え茂る雑草をふとんに、静かに身体を横たえた。長い夏の日もすでに暮れて、なお燃え続ける近くの火が、真赤にあたりを照らしていた。墨絵のように浮き上って見える人、人。しかし誰一人知った顔が見えない。いや解らなかったのかも知れない。自他共に満足な顔形を保っている者がいないからである。

軽傷者や幸いに元気な人は遠く避難し、残るは生死をさまよう重傷者ばかりで、夜が更けるに従い、死の静寂があたり立ち込める。こんな中で介抱を受ける身寄りの人と一緒にいる人は、どんなに幸せだったろう。その殆んどの方は、誰一人看取らぬこの夏草の上を、墓場として絶命していった。妻の名を、そして母の名を呼び続けながら、つぶやく声が切れたとき、その人は死の転機をとっていたのだ。

…練兵場の廻りを取巻く一本の道を、大型トラックが次々と怪我人や、病人を収容していく。救護の手を待っている重傷者が、急造の担架の上で、手を合せている。これで助かった、と思っているのだろう。涙なしに見られる情景ではない。他の一台は、すでに亡き人達を拾い集めていく。「あの車に拾われると、みんな焼かれるんだそうだ。」

誰かがそんなことをふれ歩いた。私はびっくりすると同時に、道端にいる危険を感じて、山の中へ七、八メートルほどすべり込む。そしてちょうどそこに、死んだように寝ていた兵士の隣へ横になると、その辺りの草をむしり取り、それを身体へふりかけて、身をかくすように眠った。

…翌朝、東の空が白みかける頃目覚めた私は、思い切って山越えをする決心をした。力の抜け落ちた身体を気力だけで一メートル、二メートルと這い歩いた。平素わずか一時間足らずで行ける府中までの行程を、生きるも死ぬも一切を運命に託して、ただ這った。途中、道端に投げ出されていた自転車のバックミラーに自分の顔が映ったとき、私は驚きあきれた。余りにも変わり果てた形相に、それが自分であることを納得しかねた。

…生ある者の執念とでも言おうか、神の御慈悲か、疲れ果てては眠り、休養から覚めてはまた前進を続けていた私、昼を迎え、夜を送り、それでも二〇数時間を費したころ、やっと市内を脱出することができた。

[第十二項 広島市千田国民学校](#)…149

(現在・広島市立千田小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東千田町字八一六番地の四
校長 伊達 高道
教職員 一五人
児童 概数三〇四人
校舎 木造二階建五〇教室・一、二五〇・五坪
鉄骨木造一、一五七・五坪
敷地面積 三、三〇〇坪

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十八日	山県郡大朝町大朝 大塚 田原	四人 一 一	八九人 二六 一九	約五五〇人	山県郡大朝町、川迫村、 新庄村に寺院に分宿し て、村内の各学校に通 学した。
昭和二十年四月二十日	山県郡新庄村	四	一一九		
昭和二十年四月二十二日	川迫村 蔵迫村	二 二	四〇 五二		
合 計		一四人	三四五人	約五五〇人	

広島市千田国民学校 学校敷地・後者配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事 業 の 区 別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
建物疎開作業	雑魚場町	一人	高等科五〇人	疎開家屋跡片付け	

四、指定避難先と経路

第一避難場所としては学校正門前から広島文理科大学グラウンド(現広島電鉄車庫)に避難する。第二避難場所としては南竹屋町の進徳女学校から平田屋川添いに避難する。

五、校舎の使用状況

当時、校舎の一部は軍隊に貸与されており、その状況については次の通りである。

部隊名 暁部隊(本隊は比治山電信隊)
人員 約三五〇人で、その他に教官・世話兵約五〇人
構成 中等学校三年生の卒業生を特別幹部生として養成
用務 戦艦「大和」の要員として待機させていた。

教室貸与については、当校南校舎全部と西校舎中央より南側の教室を使用していたが、物資などの集積品はなかった。しかし、教材として電信機材・日用品の毛布・食糧などが保管されており、これらの物資は被爆当日、当校正門前の平田屋川に兵隊が投げこんで逃れた。後に、これら投げこまれた物資が比治山の本隊に集結された事実はない。

なお、六日の朝、兵隊は朝礼のため運動場に出ていたから、直接被爆して全身火傷を負った者が多くいた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	

授業	七人	約一〇人	約四〇〇人 (軍隊)	当日は、残留児童の授業を行なうの予定で、平常は八時三十分開始であったが、当時、前夜空襲があったので、その時の申合せにより、始業を三十分遅らせたので、投下の際は、十人ぐらいの児童と教員四、五人だけであった。
----	----	------	---------------	--

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…全壊(一部半壊)全焼

当校は爆心地から南々東約一・七五キロメートル離れており、原子爆弾炸裂と同時に木造校舎はすべて全壊し、講堂は南側に傾き、宿直室および小使室のみは倒れず現状を保っていた。しかし、しばらくして南校舎西側の角より自然発火して棟伝いに両方面に燃え広がった。火勢は強く、棟続きの校舎は勿論全焼し、離れて建っていた講堂にまで及び、全焼してしまった。火災の終息は六日午後〇時三〇分から一時頃の間であったが、この火災で全校舎はすべて灰燼となった。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	二人 (一)	*一三人 (四〇)	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者	三	〇	
行方不明者	〇	(一〇)	
計	五 (一)	一三 (五〇)	

被爆当日は、残留組児童の授業を行なう予定であったが、前夜の空襲で、当時の申合せにしたがって九時始業となったので、十数人の児童しか登校していなかった。炸裂の一瞬、これら登校児童のうち三人は即死したが、残り七、八人は教師の目にふれることなく各家庭に帰って行ったものと思われる。教師も四、五人のうち一人は死体となって発見されたが、他の教師は校舎の下敷きになりながら互いに顔を見合せ、いない同僚を探し、自力で脱出してから御幸橋方面へ避難した。また小使は、門前の平田屋川の舟にのがれた。

雑魚場町の疎開地跡片づけに出動中の、当校高等科生徒五〇人は全員被爆し、ほとんどの者は死亡した模様であり、引率教員も全身火傷を負っているのを、本校職員が発見し、救援トラックで運んだが、二、三日後に死亡した。

また、当校駐屯の兵隊は、炸裂時がちょうど朝礼の最中であったため、火傷した者が多く、水を求めつつ、それぞれ各方面に逃れた。比治山の方へ逃げた一隊もあると言われる。

なお、六日午後三時ごろ、軍隊が遺体を収容に来校し、軍人の死体四、五体を探し出して持ち帰ったが、その時児童の死体も三体収容した。

八、被爆後の混乱

児童はほとんどの者が家庭で被爆し、それぞれの家庭から避難したもようで、その後の状況は明らかでなく、また児童も登校しなかったから、緊急措置のとりようもなかった。わずかに市内南千田町一帯の被爆をまぬがれた家庭の児童十数人が、後日登校してきたので、残留教員によって仮授業を行なう程度であった。

校舎は全焼し、児童も避難して状況がつかめず、教育機能は全く停止状態に陥った。しかし、その後焼残った家庭の児童も少数ではあるが登校するし、生存教員もだんだん学校に集結しはじめたので、教材はなかったが、とにかく仮授業を始めた。

被爆当夜から教頭と小使が学校跡に残り、二、三日後からは、学校長をはじめ数人の教員も加わり、校庭にテントを張って善後策を協議した。その後も、市内に居住する教員などで交互に宿泊して、学校教育機能が再開されるよう努力した。

なお、学籍関係書類及びその他重要書類は、被爆当日、教頭の手によって運び出されていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

(一) 学校の復旧対策

被爆後、学校は全く教育機能を停止していたので、廃校になりそうであった。しかし、児童も漸次登校して来だし、教員も集って来たので、残留教員で協議し、まず児童がどのくらい集るか、集団疎開から帰校する児童を調べ、それら児童を青空の下で授業させることが、可能であるか否かも協議した結果、見通しがついたので、九月に入って、広島県学務課へ学校存続を願い出た。十月二十五日、県・市から正式に学校存続について許可を受け、開校の運びとな

った。十月二十五日、貯金局四階を借受け、仮校舎として開校式をあげ、屋内での授業を開始した。

（二）第二学期授業開始の状況

貯金局四階の仮校舎で授業を開始したが、当時は集団疎開から帰広した教員及び残留教員は、合せて一二、三人程度で、児童数は当初一〇〇～一二〇人くらいであった。しかし、児童も漸次増加してきたので、校庭にテントを張り、それを中心にして青空教室を開設したり、また学区内の焼残りの寺院・民家をも借りて授業を行なった。この間町内会の幹旋により、工事費一九、〇〇〇円の醸金を得て、校舎一棟が竣工されたのは十二月末日であった。

なお、昭和二十年十一月末の調査によると、教職員数は二〇人、児童数は三四人程度となっている。

（三）学用品・教科書の入手と対策

仮授業開始期においては、土の上や瓦などに消しずみで書いていたが、貯金局に仮校舎を開いてからは、印刷用紙をもらって裏紙を使った。筆記用具は各児童が入手したものを使用していた。その後、不十分ながら救援物資が配給になったりしたので、不自由ながら授業は続けられた。疎開児童が帰って来てからは、それらの児童が持ち帰った教科書を、共同で使用したり、謄写板を入手して、教師の手で印刷配付したりしておぎなった。

千田国民学校にて被爆

円崎 正二

（当時・船舶通信補充隊五中隊三区隊）

梅雨明けと共に、毎日ガラガラする太陽の下で、激しい訓練が続けられた。八月初旬、宇品の対空射撃で敵機が一機撃墜され、飛び上って喜んだのもつかの間、やがて運命の八月六日の朝がやって来た。週番の私は三期・四期の朝礼を廊下でジッと見乍ら、或感傷にふけていた。親兄弟の事だったろうか、それとも故郷の山河であったろうか、とに角「忙中の閑」といったところであったろう。八時過ぎ、定期便の敵機が飛来した。いつもの事なので、別に気にもとめずにいた瞬間、閃光一閃。写真のフラッシュが一度に何千何万と発火したように感じられた。そして猛烈な爆風で、千田国民学校は、あたかも積木がくずれるようにペシャンコになって、その下に完全に下敷きにされてしまった。略帽と眼鏡は吹き飛ばされ、左下腿部にはハリがのっていた。これは大変なことになるぞと思い、手さぐりで眼鏡をみつけ、砂塵治ってきた庭をみると、怒号が入り乱れて、傷の浅い者達であろう右往左往している様子が材木の隙間から何とか見える。先ず自分の所在を知らさなければならない。運良く中隊長の通るのが見えたので、大声をあげると、気がついて私の下敷きになっているのを確認してくれたようである。あとになってわかったのであるが、火の手があがってきて、消火作業に必死になっていたのだ。完全に下敷きになったのは、私と同期の加納君であった。私の足にのったハリは、容赦無くいためつけて、とうとう失神してしまった。どの位時間が経過したであろうか、Y兵長にぶんなぐられて気がついた。「大丈夫だ、足を出せ。」しかし左の下腿部は何の感じも無くなっていた。抱きかかえられて、外に出されて驚いてしまった。もうもうとあがってくる炎、煙。そしてその中に加納君が包まれて、誰もがなす術を知らず、遂に尊い犠牲となってしまったのだ。さて、外に出された私は、勿論、立つ事が出来ない。気がついてみると、頭から出血している、ころがっていた巻脚絆があったので、グルグル巻きにして止血した。あちこちから火の手があがって来ている。最後まで消火作業をしていた人達も、比治山へ退避するという。親切な一人が私を背負ってくれた。狭い道は火の手で歩けない。迂回し乍ら比治山を目指したが、途中助けを求める女の声が倒れた家の下から聞えてきた。誰も助けようとはしない。どうせ不可能事なのだ。二十三年たった今、忘れることが出来ない声だ。忘れようと思えば思うほど…。

比治山は民間人も混じってごった返していた。私の中隊の者も主に四期生が既に到着していた。歩行不能な私は、担架に乗せられて覚悟の眼を閉じた。水を求める者、泣きわめく者等々。まさに生地獄とはこのことだろうか。夜になって敵の飛行機が低空で偵察にやってくる。毛布をかぶって覚悟をきめるが矢張り恐ろしい。助かりたい。冷静さを取戻したのか、空腹を感じて乾麺を噛む。金平糖をより出して一粒かむ。両親兄弟の事が思い出される。もう駄目か、一思いに殺してくれ。あちらで一グループ、こちらで一グループとなって、軽傷者たちが「ピカドン」という言葉で勝手な事をしゃべっている。「ピカドン」なる用語はその日の中に出て来たと思う。翌朝はまたも暑い暑い日であった。歩行できない者を重傷者、以外の者を軽傷者に分けた。重傷者はトラックで宇品の船舶練習部へ収容されることになった。部隊の一台だけではどうにもならない。

長い間待たされたので、外傷のある者は、直射日光で色が変わって黒くなって悪臭がし出した。順番が来たので、人手を借りて乗せて貰う。相当な重傷者が一緒に気の毒に思う。中には気の狂っていた人もいたようである。窓硝子も

無い部屋に収容されたが、中隊ではただ一人であった。

二、三日たって誰かが一室に集めてくれたので、やっと話相手が出来た。広島出身(福山)の同期の松岡候補生、彼は火傷をしていたので、そこに蛆虫が湧いて痛がったのを、私がとってやった。いくらとってもすぐ湧いてくるものである。三期と四期で火傷のひどいのがいたが、元気が無くなったと思うと、何時間もしない中に死んでいった。

死に対する感覚が薄らいで、死人を見ても別に気にしなくなってしまった。板の間に毛布を敷いてのゴロ寝、夜分ともなると蚊の大軍に攻められる。日中は猛暑と、そして蠅と蛆虫。

やがて八月十五日の終戦。勿論ラジオなどはないが、人の口を通して敗戦を知った。空襲警報も無い。もう死と対決しなくてもよくなったのだ。しかし火傷を負った四期は一人、二人と死んでいった。童顔の山本候補生(静岡出身)、芦川候補生等々、私の傍で死んでいった。

もう一人筒井候補生がいた。この三人は私のすぐ隣で死んだのではっきり覚えている。

その頃、私も原因不明の発熱をした。頭痛が激しい。薬などはない。下痢も止まらない約一週間が続いた。この次は自分の番だと覚悟した。妙に冷静であった。死んだら毛布にくるまれて、階下の庭で火葬されるのだ。仕方がないと思った。ありがたいことに同期の大野候補生(東京出身)が、歩けない私を看てくれた。或る時にはブドウ酒をもつて来てくれた。悪運強く、八月の末になると、頭痛は残ったが熱は下ってきた。気持のせいかも知れない。もう死なないぞと思った。十月初旬、迎えにきた父親の肩にすがって復員した。数多くの犠牲者を出したが、私は何とか生きて、故郷の山河を見ることができた。

二十何年か経た今日、平和に対して心から感謝し、その礎となられた先輩戦友に対して、折を見ては護国神社に参詣、永遠に安らげくあれと祈っている。

第十三項広島市段原国民学校…159

(現在・広島市立段原小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市金屋町六六の二
校長 松田 常一
教職員 一三人
児童 概数四〇〇人
校舎 木造二階建・四三教室・延八八〇坪
敷地面積 不詳
爆心地からの距離 約一・八キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十四日	比婆郡山内西村 比婆郡山内東村全口南口北	六人 八	三五九人	不明	

広島市段原国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

出勤なし

四、指定避難先

不明

五、校舎の使用状況

別になし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
授業予定	五人	高等科一学年約三〇人	若干	

七、被爆の惨状

被害状況

（一）校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から東南東約一・八キロメートル離れており、原子爆弾の炸裂と同時に、校舎は一瞬にして全壊した。その後、しばらくして理科室付近から火が出た。また学校付近の民家からも次々と火の手が上り、またたくまに大火災となったので、全校舎の焼失が自然発火によるものか、付近からの延焼によるものかは分明でないが、消火のすべもなく付近の民家もろともすべてが灰燼と化した。

（二）人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	二人	約二〇人	
重軽傷者	二	不明	
行方不明者	〇	不明	
計	四	約二〇（半明分）	

当時、低学年の児童は学区内の寺などに分散して授業を行っていたから、これらの惨状について明らかでない。しかし、地区的に爆心地から近距離にあった関係で、校舎の全壊全焼と同じく、各家庭も、その大部分が大きな被害を受けたから、集団疎開をしなかった児童の中には、多数の被害者が出たものと思われる。

また、被爆当日、ちょうど、登校していた高等科一学年の生徒約三〇人は、倒壊校舎の下敷きとなり、ほとんどの者が脱出できなかった。当時、校舎は防空の意味からも、火災を防ぐために、現在のモルタル建築の如く、金網を張った上にセメント壁をつけていたので、倒壊校舎の下敷きになると、この金網セメント壁のために脱出できなかった生徒が大部分であった。「助けてくれ」「出してくれ」と叫ぶ生徒の声が聞えながらも、降ってわいたような惨禍の中で、救助の手もなく、二、三人自力で脱出した教員も、みずから重傷を受けており、如何ともすることもできなかった。そのうち、理科室付近からの火災発生と、民家方面から上った火の手は、ますます広がり、大火災となってきたため、生存教員も生徒の叫び声を聞きながら避難するほかはなかった。

八、被爆後の混乱

荒狂う猛火に、全校舎は焼失してしまったうえ、教員も児童も被害者が多くて、学校の機能は完全に停止した。被爆直後に、軽傷または無傷の教員二、三人が、焼残った父兄の家に集って、児童の被爆状況調査について相談を重ねたが、何分にも被害が大きく、ほとんどの家庭が焼失して何処へ行ったか、誰れが生きて、誰れが死亡したのやら、皆目わからなかった。教員の中にも、自分の住居の焼失や家族の被害などで、その後も集合できるものは二、三人にすぎなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月一日、第一国民学校において、開校準備を進めるため、児童の受付を開始したが、約八〇人ばかりしか届出がなかった。

校舎を焼失したので、九月十三日に比治山国民学校に編入されることになった。比治山国民学校では、比治山・段原・荒神の三校が一緒になって、授業を開始した。

しかし、十月十三日、当校の集団疎開児童三五九人が帰校してから、父兄のあいだによりやく学校の復興計画の声が強くなりはじめ、ついに教職員と父兄が一体となって学校復興運動を起したのである。

その学校復興対策と経過は、次のとおりである。

年 月 日	対 策 処 置
昭和二十年九月一日	第一国民学校(段原中学校)に於て、開校準備のため、児童受付を開始した結果、約八〇人程度の児童届出があった。
昭和二十年九月十三日	比治山国民学校に、当校も編入される。比治山国民学校は、比治山・段原・荒神及び尾長の四校が一緒となって、開校された。
昭和二十年十月十三日	当校の集団疎開児童が、帰校するにおよび、授業の不便さから、学校復興の声が強くなった。
昭和二十年十月二十二日	学校復興計画を起す。

昭和二十年十一月二十日	父兄の勤労奉仕により、建築資材の一部を、市内大河より運搬し始めた。
昭和二十一年一月十日	牛田町旧工兵隊作業場からも資材を運搬する
昭和二十一年二月十五日	移動製材機を取付けて、四日間製材をした。
昭和二十一年三月二日	旧校地跡を整理して、四教室分の工事を始め、三月二十日に竣工した。
昭和二十一年三月二十三日	四教室の完成により、比治山国民学校から教職員二人、児童四一二人が復帰して、新校舎で授業を開始した。
昭和二十一年三月二十六日	第四八回卒業式を挙げる。

なお、市内の焼失国民学校で、昭和二十一年三月末日までに復興して、卒業式を挙げることであった学校は、この段原国民学校と白島国民学校の二校だけであった。

第十四項 広島市三篠国民学校…165

(現在・広島市立三篠小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市三篠本町一丁目
校長 種田 光登
教職員 六四人
児童 概数二、五〇〇人
校舎 木造二階建・五四教室・延一、四〇〇坪
敷地面積 六、〇〇〇坪
爆心地からの距離 約一・八キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年五月二十日	高田郡本村	一〇人	約二〇〇人	約三〇〇人	
	〃 横田村				
	〃 北村				
	〃 生桑村				
	〃 川根村				

広島市三篠国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事 業 の 区 別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
大芝兵器工場	大芝町	一人	四〇人	兵器の部分品製作	
油谷重工業株式会社	安佐郡祇園町	一	四〇	船舶の部分品製作	
中広航空株式会社	中広町	一	五〇	航空機部分品製作	
日産自動車株式会社	三篠本町三丁目	一	五〇	自動車部分品製作	
日本針工業株式会社	楠木町二丁	一	五〇	針、軍需品製造	
建物疎開作業	土橋付近	五	二五〇	家屋疎開	
合 計		一〇	四八〇		

四、指定避難先と経路

- 一、学校から西口の山手川（現在・放水路）を渡って、山手をめざして進み、三滝山方面に避難する。
- 一、学校から北に、可部街道を進み、安芸郡山本村(祇園町)方面に避難する。

五、校舎の使用状況

校舎の二階東側及び南側教室は、陸軍部隊に貸与されており、当時、編成中の独立工兵第一一六大隊、及び同第一一七大隊の応召兵が約二〇〇人ほど集結していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	

平日授業 (学徒動員、疎開児童を除いた残留児童)	二〇人	約五〇〇人	召集兵約 二〇〇人	当時は残留児童も、学区内で分散授業をしていた関係で、六日朝の朝礼参加児童は少数であった。
-----------------------------	-----	-------	--------------	--

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から北北西約一・八キロメートル離れており、原子爆弾の炸裂と同時に校舎は、一瞬にして倒壊した。また、北側校舎に沿って、東西に連絡する幅約三メートルの道路沿いに立ちならぶ民家もすべて倒壊し、原子爆弾炸裂後、寸時にして、まず、その倒壊民家から発火した。猛火は、たちまち付近一帯の建物をなめつくし、その炎は三メートル幅の道路を這うようにして、大混乱に陥っている学校に延焼し、見る見るうちに大火となった。

全焼したのは、午後三時ごろと推定されるが、余燼は数日にわたってくすぶり続けていた。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	三人	三〇人	()内は学校外(動員先)での被爆者数
重軽傷者	一二	六〇 (一〇二)	
行方不明者	〇	〇	
計	一五	九〇 (一〇二)	

疎開もせず、勤労作業にも出勤しない残留組の児童と教職員は、校庭に集合して、教頭の指示のもと、いつものように朝礼を実施中、原子爆弾が炸裂した。一瞬、全員が吹き飛ばされ、一部の者は校舎玄関まで約一〇メートルも吹き飛ばされていた。何がどうしたのか、さっぱり解らず、いつ時呆然としていた。数分後になって、ことの重大さを感じたが、周囲には、熱線と熱風で着衣をボロボロに焼かれ、引裂かれた者や、顔・手足などの皮膚はツルリと剥げ、頭髮は焼けただれて、面貌が変形した者など、一見して誰が誰だか識別できなくなった児童たちの泣き叫ぶ声が交差していた。

このような中で、けなげにも倒壊した校舎に入って教科書を運び出そうとし、かえって死亡した児童もあり、また体調が悪く教室に残っていて、下敷きとなり、焼け死んだ児童もあった。迫る猛火の熱さに堪えられず、貯水槽に飛び込んで水死する児童もあった。

人心は転倒し、冷静を欠き、混乱をきわめ、なすべきすべもなかった。猛火の荒れ狂う中を救助の応援にかけつける人もなく、ただ歩行に堪える数人の教職員と駐屯兵の手をかりて、逃げ迷う児童を取りまとめて、三滝山方面に誘導避難したのが精いっぱいであった。

避難して行きながらも、幼い児童たちは恐怖におののいて、教職員の指示も耳に入らず、号泣するばかりであった。これら児童を、なだめたり、すかしたり、叱ったりして、ようやく三滝山に避難することができた。しばらくして保護者が引取りに来はじめたので、それぞれ連れ帰らせ、来ない者は家庭を訪ねて渡した。

八、被爆後の混乱

被爆したその夜、赤々と余燼くすぶる中で、種田校長・三光教諭の二人は警備をかねて校庭に野宿したが、余りの惨状に涙も出ず、語るべき言葉もなかった。翌七日朝、校舎の焼失状況を校長と三光教諭が、ありあわせの紙に記述して、外郭だけになった市役所に持参し、黒瀬収人役に手渡した。しかし、市役所も壊滅状態に陥っており、ただ報告をしたというだけのことであった。

再び、学校に引返し、各所からの連絡を待ったが、分教場として使用していた学区内光隆寺・南三篠会館及び打越会館なども、全壊か全焼したという報告ばかりであった。このように、物的にも人的にも大きな被害を受けた当校は、完全にその機能を失い、対策措置のとりようもなかった。

当校は、広島市の防空計画に基づき、災害の場合の学区内救護所として指定されていたが、負傷者を収容する教室も焼失し、受持ちの医師も被爆死亡し、計画は烏有に帰した。

被爆後一〇日ばかりして、学校の跡地に仮設救護所が設けられたが、医薬品が少なく、治療というほどの治療はおこなわれなかった。しかし、この地域には比較的負傷者が多く集結しており、いわば三篠・横川両地区の救護所として、できる限りの治療活動がおこなわれた。

九、学校再開の状況

学校の再開

学区内ほとんど全域の住宅が焼失し、残っているのも全壊・半壊の状態であった。その中に点々と仮居住している児童を、たんねんに探し歩き、父兄との連絡を保ちながら、児童の安否調査に努力した。その結果、九月十五日に、形式的ながら第二学期の授業を開始することができた。当日、集合することのできた教職員は一五人、児童は約五〇〇人であった。

しかし、校舎の無い授業で、集った者が一致協力して、焼跡の整理をおこない、地ふく石を掘り出して、焼失前の各教室の区分をつけ、その中で、校舎があった日のようにならび、ともかく授業を開始した。したがって、教授用具は一物もなく、ただ教職員の手による荒削りの板に墨を塗った代用黒板を使用し、児童にはかき集めた旧教科書などを支給して、いわゆる、青空教室が続けられたのである。

二十年十二月ごろ、教職員と父兄の間で話し続けられてきた校舎復興の熱望が実を結び、大和工業株式会社の請負で、バラック教室一〇教室が完成し、青空教室から解放され、児童の喜びには非常に大きなものがあった。でき上がったバラック教室には、一教室平均約五〇人を収容して授業を始めたが、以後、逐時バラック建てを増築し、本建築のはじまるまで、この仮校舎で授業をした。

なお、学用品・教科書などについての対策としては、教職員・児童及び父兄が一体となって収集につとめたが、一冊しか手に入らない教科書は、教師の手引きとして学習し、また数冊の場合は、児童の中にグループを組み、共有して使用するなど、多くの苦心を要した。市の放出物資も、極力使用を節約して困難をしのぎ、授業を進めたが、勉強よりも焼跡整理に多くの時間をついやさねばならぬというありさまであった。

[第十五項広島市舟入国民学校](#)…172

(現在・広島市立舟人小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市舟入川口町九六六の二
校長 伊藤 康彦
教職員 二七人
児童 三一八人
校舎 木造二階建・二七教室・延一、〇七五坪
敷地面積 四、〇一五坪
爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月末日	安佐郡狩小川村正現寺 順正寺	三人 三 二 二	一八三人	四〇〇人	残留児童 三一八人
	安佐郡福木村安楽寺 西善寺				疎開先児童は町別に編成された。
合 計		一〇人	一八三人	四〇〇人	

広島市舟入国民学校 学校敷地・校舎配置図(略語)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先

町内会が決定している佐伯郡観音村(現在・五日市町)の観音国民学校へ、避難することに決定していた。

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	そ の 他	
職員朝礼 児童朝礼	一〇人	三一八人		運動場の使用は八時十分に終了

七、被爆の惨状

被害状況

（一）校舎の被害状況…小破

当校は、爆心地から南南西約二・ニキロメートル離れていた。爆風により北側校舎が傾き、南側校舎の屋根が持ち上げられ、その一部は落下した。東側校舎も被害を受けたが、爆風におおむね併行していたため、部分的に窓の建具が無傷のまま残されているものがあつた。校具・机・腰かけなどの大部分は、火災にあわなかったもので、そのまま使用できるものが多く、他校からうらやましがられた、講堂・宿直室・倉庫・便所は被害が少なく、当時の建物に修繕を加えて、現在も使用している。

なお、運動場の南側空地に、建物疎開作業による廃材が、給食用の燃料としてたくさん積みあげられており、この廃材が放射熱線により自然着火したので、直ちに消火した。当時、その発火の原因が理解できなかったから、ただ不思議な飛火だと思っていた。

（二）人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	〇人	二人	
重軽傷者	二	一	
計	二	三	

運動場に集合した児童は、八時十分ごろ、朝礼を終った。そのあと、笹村教頭から飲食物についての訓話を聞かため、男女別々になって、柳の大木の陰に集ったときに、原子爆弾が炸裂した。このときの模様を笹村教頭は、次のように語っている。

「私は大きい声で話をするので、飛行機の爆音は、全く耳に入らなかったが、児童にはそれが聞えたのか、あるいは予感があつたのか、なんとなくざわめきが起つて、頭を廻らせ、空を見上げて、心配そうな様子であつた。そこで私が、先生の話の聞くときには、まっすぐ先生を見て聞くものです、と注意を与えようとしたとき、マグネシウムを燃焼させるような青白い閃光がした。」という。

児童が訓話を聞いていた場所は、南校舎と校庭のイモ畑との中間にある僅かな空間で、児童は柳の木をとりまいてならび、先生は、校舎を背にして、児童に対して一列にならんでいた。したがって、南校舎が閃光や爆風を遮蔽して、直接曝されることもなく、校舎の破片も、柳の木があらかた防いでくれて、被害は少なかった。児童たちは、ただちにその場に伏せた。この中の二年生の女兒二人は、おそらくは、自分の先生の立っている方へ、走り寄つたものと推察されるが、爆風によって持ち上げられたそのとき、落下してきた何物かに直撃されて、即死した。

危く難を免れた児童を、その場に坐らせて、父兄が引取りに来るのを待った。少しして、安否を気づかう父兄が尋ねて来て、それぞれ引取つて歸つたが、数人の児童はついに誰も迎えに来なかった。

三年の女兒一人は重傷で、防空壕に収容されたが、三日三晩は仮死の状態で、到底助からないものに思われていた。しかし、その後回復し、一週間ばかり看病して、縁故者に引渡すことができた。この女兒は、一年後全く元気を取り戻し、再び登校するようになり、皆から祝福された。

最後まで引取者のなかった数人の児童は、この日から戦災孤児となり、当時迷子収容所に指定されていた比治山国民学校へ、迷子として収容されていった。

八、被爆後の混乱

比治山国民学校に迷子収容所が開設されるまで、孤児となつた数人の児童たちは、学校に引取つておいて、面倒を見たのであるが、昭和十九年から始められた学校給食用の食糧があつて、大いに役立った。

給食といっても、隔日か、あるときは三日おきに実施するという貧弱なものであつた。しかし、調味料の味噌をはじめ、しょう油・イリコ・塩など、当時としては貴重な食糧が、僅かながらも倉庫に保管されていたから、この急場にあたって、まったく天恵のように思われた。

そのうえ、六日の夜遅く、市外の町村からの炊出しもあつて、握り飯がトラックで配給された。孤児となつた児童

たちは思いがけない握り飯を手にして、はしゃいで食べた。家族を失って、不安と淋しさに打ちひしがれていた顔が、はじめてうれしそうに笑った。

孤児たちは、三度三度握り飯で満腹して、ついに握り飯を食べなくなったから、その握り飯を雑炊にして食べさせたりしたが、これら孤児たちの前途を思うと、心ふさがれるばかりであった。

この大惨事で学校の機能は停止した。伊藤校長は自宅で重傷を負い、転地療養することになり、校務は笹村教頭が代行した。しかし、校務だけにとどまらず、罹災証明の発行や被爆者の収容などを行ない、連日多忙をきわめた。

罹災証明の発行は、早朝から日没まで行ない、連日の如く江波地区・観音地区・その他の地区から発給を求める数千人の罹災者たちが長蛇の列をなしておしかけた。

火災をまぬがれた当校は、応急救護所に指定されていたから、八月六日夕刻、たくさんの避難者が逃れてきた。これら避難者の食糧は、当初は郡部からの炊出しによってまかなわれたが、後には、笹村教頭らが各方面に交渉して、確保しなければならなかった。

また、水道が出なくなって、町民は水不足に悩んだが、学校の防火用水栓を開放して、便宜を与えた。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年九月一日、開校命令が出され、町内各所に張紙をしたり、口伝えに連絡したりして開校を知らせた。舟入学区は、舟入川口町地区以南の川下・川南・川西などは火災を免れていたもので、住民も児童も居住しているように思われたが、大部分が疎開していた。当時の緊迫した食糧事情が、その理由でもあるが、それにデマがデマを呼んだ進駐軍来広の脅威も理由の一つであった。したがって、登校してきた児童は数人に過ぎなかった。

加えて九月の風水害で、南側校舎の屋根が崩れ落ちた。残る北側校舎・東側校舎といえども爆風による被害が大きく、修理しなくては使用不能の状態であった。東京や大阪の空襲の経験から防空体制は常に変更され、被爆前に天井板の取除き命令が出されていた。それは焼夷弾が投下された場合に、天井板に止まって火災が起ると処置に困る、というところから出された命令であった。この作業は教職員の作業とされ、原子爆弾炸裂時には、廊下だけの取除き作業が終っていた。いざ開校となれば、取除いた天井も惜まれてならなかった。登校児童や校舎がこのような状態であったから、開校したとはいえ、授業は事実上不可能で、顔合せ程度であった。雨天には休校した。教職員は雨もりを避けて、机を移動させながら執務する有様であった。

十月末、集団疎開児童が帰広するに至って、登校児童も増加し、漸く学校らしい息吹きをみせ始めた。

しかし教科書については、終戦となるや、ただちに GHQ から修身・地理・歴史は破棄するよう命令が出され、一度は学校に係官が調査に来たりして、これらの教科書は焼却した。これにかわる教科書は支給されるべくもなく、当時の児童は教科書の面からも恵まれていなかった。学用品は学校が火災を受けなかったお蔭で、従前のものが幾分なりとも使用できた。

第十六項広島市皆実国民学校…179

(現在・広島市立皆実小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地	広島市皆実町二丁目二一・二番地
校長	佐々木 哲
教職員	三十六人
児童	概数一、五五一人(男八〇五人 女七四六人)
校舎	木造二階建・三九教室
敷地面積	三、七五三坪
爆心地からの距離	約二・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
第一回昭和二十年四月二十日	安佐郡伴村・戸山村	五人	一五〇人	一、一三〇人	
第二回昭和二十年七月一日	安佐郡伴村・戸山村	五	一五〇		
合 計		一〇人	三〇〇人	一、一三〇人	

広島市皆実国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

爆撃を受けた場合は、運動場中央および県立広島商業学校(元県師範学校)校庭の待避壕に避難する。また、校舎火災の場合は本部を第三国民学校に移す。

五、校舎の使用状況

当校の西側校舎階下三教室には、通信(鳩)部隊約七〇人の兵隊が駐屯していた。また東側新校舎階下二教室は、陸軍暁部隊に貸与しており、常時約三〇人の幹部候補生が講習を受けていた。

なお、当時、空いている教室には机・腰掛などを保管し、また硝子窓は、すべてはずして集めていた。また一部の机・腰掛などは、安芸郡温品国民学校に疎開した。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	一三人	五〇人	七〇人	当時、残留児童のうちで、低学年は、町内の説教所の分教場に行く。 当日の登校児童は、市内皆実町二丁目の低学年児童と高学年児童

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…半壊、一部全壊

当校は爆心地から南々東約二・ニキロメートル離れており、原子爆弾の炸裂によって、当校の西南校舎は一瞬にして全壊したが、東校舎は小破、その他は半壊した。しかし、爆心方向の一面を、北北東から南々西に京橋川が流れており、中心からの延焼はまぬがれた。直接熱線による火災は発生しなかったが、校庭の樹木は変色し、枯草は熱線によって、くすぶっていた。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	二人	一四人	
重軽傷者	八	二〇	
行方不明者	〇	〇	
計	一〇	三四	

始業前で、早く登校した上級生は、それぞれ分担の掃除区域の清掃にとりかかっており、下級生は運動場で遊んでいた。また登校途中にある児童も多数あった。

そこへ突然の炸裂に、校舎の一部は全壊し、一部は半壊程度の被害を受け、登校児童は急ぎ帰宅させたが全壊した教室にいて下敷きとなった児童は、当校駐屯中の兵隊によって、天井および屋根板をはぎ取って救出された。

なお、被爆直後、皆実町一丁目電車停留所通りから京橋川より、火災が発生して、その火は北に延焼して行ったほかは、一般家屋は半壊または小破程度の被害であったため、家庭にいた児童は、無事保護されたようである。

しかし、運動場で遊んでいた児童の内約二三人は炸裂の一瞬、熱線による火傷を負い、その上、爆風に吹きとばされた。結局救護のかいもなく死亡した者もあった。また全壊校舎にいた児童の一人は、強く押しつけられていたため、救出にも手間どったが、まもなく死亡した。

なお、教職員の中で、養護婦は保健室で即死、給食婦は階下家事室で即死した。また一教員は家事室にいて、頭を壁と机の間にはさまれ、重傷を負って救出され、被服廠に運びこみ治療したが、片眼は失明となった。

八、被爆後の混乱

翌七日、疎開先から代表教員が帰広してきたので、ただちに家庭の状況を調査した。その結果、辛い学区が被害程度も軽く、二、三人の死亡者があったほか、大した異状もなかったが、学校はただちに閉鎖して、八月二十日までとりあえず休校とした。

終戦となり、集団疎開児童も、縁故疎開児童も帰ってきたが、学校再開の見通しは全然つかなかった。

校舎の被害は全壊が一部で、他は半壊程度の被害であったが、半壊校舎も天井は落ち、柱は折れ、風が吹くたびにゆれ動くので、片づけも思うにまかせない状態であった。わずかに小破(小破といっても、瓦類はほとんど飛び散り、天井はたれさがり、窓枠一つない状態)の四教室を掃除して、仮りの職員室を作った。なお物資の置場に困ったので、校庭の防空壕と新たに廃材を集めて仮小屋を作って格納した。しかし、全壊校舎などの瓦類が日々に減って行き、体育倉庫・便所・校舎などの材料もつぎつぎに姿を消していった。これは町内や他地区の人々が、バラック建築のため盗んで行ったものであるが、給食調理場にあった薪までも、一夜のうちに大半が姿を消すといった具合であった。

九、学校再開の状況

学校の再開

二学期開始時期は不明であるが、被爆後、当分の間は再開の見通しがたたなかった。しかし、世間の混乱も一段落し、倒壊校舎の一部整備もなし、児童も集団疎開先から帰ってきたので、学校としても、一日も早く授業を再開するため努力した。授業再開当時は、校舎の跡片付けを登校児童全員でやることが日課であった。そのうち、建築業者の手により、一〇教室程度の校舎が使用可能な状態になりはじめたので、自然に作業を授業にきりかえていった。その頃の使用可能な校舎は、東校舎の一〇教室であり、教員数は校長・教頭のほかに教員がわずか六、七人程度および養護教員一人であった。

第十七項広島市荒神町国民学校…185

(現在・広島市立荒神町小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市西蟹屋町三二〇番地
校長 寺田 栄
教職員 二九人
児童 概数八五〇人
校舎 木造二階建三二教室延七二〇坪
鉄骨講堂 一 延一五〇坪
敷地面積 二、八四〇坪
爆心地からの距離 約二、三キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十六日	安佐郡小河南村 安佐郡久地村	七人 七	九〇人 九二	三八九人	小河南村(安楽寺・万福寺) 久地村(西正寺・正法寺・ 甲賀説教所)
合 計		一四人	一八二人	三八九人	

広島市荒神町国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

警戒警報と同時に、校内に設置した防空壕に、緊急避難を行なう。戦争末期に至っては、警戒警報と同時に、緊急

帰宅させた。

五、校舎の使用状況

校庭ならびに校舎は、当時、軍隊関係の施設としては貸与していなかったが、焼夷弾攻撃に備えて廊下の天井を全部はずしていた。したがって教室は空家となっている所が多かった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
五、六年の児童を登校させて、農耕作業を行なう予定であった。（校庭のさつまいも手入れ）	一〇人	四五人 （六年二五人 五年二〇人）	なし	原爆炸裂時はちょうど、職員集合をしようとしたときであった。

七、被爆の惨状

被害状況

（一）校舎の被害状況…全壊

当校は爆心地から東南東約二・三キロメートル離れており、爆心方角には比治山があり、原子爆弾の炸裂による衝撃を緩和する地形であったが、校舎は、鉄筋コンクリート建講堂を除き、他の建物はすべて倒壊し、全壊した。しかし、放射熱線による火災の発生はなかった。また、学校周辺地域にも火災はなかった。

猿猴橋方面から発生した火災が、次第に東方へ移動したが、荒神町付近で消火されたようである。

（二）人的被害

区 別	教職員	児 童
即死者	〇人	〇人
重軽傷者	四	〇
行方不明者	〇	〇
計	四人	〇人

在校の教員四人が、校舎の倒壊で負傷したが、いずれも軽傷であり、応急手当でまにあった。

児童たちは、講堂の渡り廊下の屋根下で、暑さを避けて腰を下ろし、作業開始の合図を待っていたとき、炸裂に遭遇したが、幸いに講堂は倒壊せず、ただの一人も火傷しなかった。また、けが人も出なかった。

このとき、木造校舎の二階に、二人の児童がおり、倒壊物の下敷きになったが、その場所がよく、わずかの隙間から飛びだした。兩人ともに奇跡的に無傷で助かった。

学校では、異常な事態が発生したので、登校児童全員を調べたあと、ただちに帰宅させた。

八、被爆後の混乱

帰宅させた児童たちに対しては、父兄を通じて、学校から何らかの知らせがあるまで、登校しないよう指示した。

疎開先の教師が連絡して来たが、広島市には帰らず、疎開地の児童を掌握するとともに、今後、本校の児童が避難のため疎開地へ行くような状態になるかも知れないから待機するよう指示した。被爆後も引続き、敵の偵察機が飛来していたから、なるべく郊外へ避難するようすすめた。

被爆直後、緊急に職員集合をして人員点呼をしたところ、女教員三人の姿が見えなかったので、倒壊物の下敷きになったのではないかと、急ぎ探索にかかった。

幸い三人とも倒壊校舎の下敷きになりながらも、その隙間に、軽傷程度でうずくまっていたので、急ぎ救出した。それから吉田教頭が市役所に連絡に行ったが、市役所は全滅し、市長も死亡、ちょうど玄関にいた助役に、被災状況を報告して帰った。負傷した教員は、直ちに帰宅して手当をするように命じ、その他の教員は、追って指示するまでは帰宅して、待機するようにした。

このように、被爆後の人的被害については、教員が数人軽傷を負った程度で、その他の教員及び児童は無事であったから、指揮系統には支障なかった。しかし、校舎が倒壊したので、一時対策の立てようがなかった。

校庭の防空壕は、災害の場合の救護所として、施設や薬品の準備がしてあったが、余りにも突然の大惨事のため、これを担当する救護班の組織も破壊されて、計画どおりの態勢が取られず、被爆者は勝手に防空壕に入り、中にあった薬品を持ち出して、勝手に治療をするというありさまであった。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、校舎に火災は発生しなかったが、倒壊して使用できず、校庭の中につくられた防空壕や、校庭の隅で、風の

あたらない場所を選び、授業を始めた。いわゆる青空教室である。この青空教室は九月中旬ごろから始まったが、その後、町内有志の者が相寄って、取りあえず講堂を復旧し、倒壊した資材で仮校舎を建てる運動を展開した。しかし、倒壊した一般校舎の整理に迫われ、バラックの建築さえ遅れて計画は進まず、翌二十一年二月末になっても遂に仮校舎はできなかった。

被爆により負傷した四人の教員は自宅療養中で、当時職員は学校長以下一〇人であった。児童は比治山校に通学し、本校から数人の教員がつき添っていき、比治山校の児童と一緒に学習をさせていた。当時、比治山国民学校では、比治山・段原・荒神の三校の児童が三校の先生のもとに授業を受けていたのである。その時の荒神町国民学校児童は約五〇〇人であった。このような状態のもとに、被爆後の授業は開始されたのであるが、比治山校での、寄合い世帯の学校生活では統制がとれず、授業にも身が入らず、児童にも、また教師にも学習意欲があがらなかった。いろいろ検討のすえ、九月中旬になって、比治山校から当校の児童を引取り、荒神町国民学校の校庭において、青空教室の授業を開始した。寒くなって雪の降る日などには、校庭の防空壕の中で学習を続けた。

教科書や文房具は、各自持っている教科書により学習をすすめ、失ったものは、親類や隣り近所の友達から古いものをゆずり受けたりして、融通しあって使用した、そのころは、まだ進駐軍の教科書に対する統制がないころで、教科書は古いものでもおおびらに使用した。鉛筆・ノートなどはどうにか間にあっていし、用紙はあらゆる使用済みの裏紙を使ったので、不自由ではあるが学習はできた。

あの時

吉田達雄

(当時・荒神町国民学校教頭)

あの町、私は荒神町国民学校一階の職員室で電話をかけていた。安佐郡の学童疎開先へ、畳などを送るトラックの手配についてであった。

一瞬、背後から黄色い光線を浴びたと感じると同時に、バリ・バリッという落雷の音におそわれ、思わず、そばの戸口に出た。上から大きなものが落ちかかる気配を感じたが、戸口の外にしゃがんだ時、背中をひどく打たれた。校舎のハリが落ちたのだが、幸いハリが何かに引かかったかっこうになったので、大したことはなかった。

“空襲”頭にそうひらめいたので、しばらくジッとしていたが、あたりは全く静寂そのものであった。何分たったのか分らないが、そこから出て校庭を見渡して驚いた。全体が薄暗く、ほこりが一ぱい立ちこめている。校舎はない。

完全に倒壊している。すぐ前の講堂は屋根をはがれ、窓は飛び、裸のまま立っている。私の頭上の二階図画教室はこわれて、階下の職員室におおいかぶさり、半倒壊の形である(この上下四室だけ増築したもので、辛うじて、そういう形で残っていたが、八月下旬、風のため完全に倒壊した。)

私は職員室にはいった。誰もいない。机・椅子・戸棚・窓わくなど折り重なって手のつけようがない。やっと必要な整理をすませて外に出た。そうだ、子供がいたはずだと急に思い立って小使室の方へ出かけると、「先生！先生」という悲鳴が聞える。職員室に続く教室のあたりである。

私ひとりではどうにもならない。外を通りかかった人に呼びかけたが、みなだまって通って行く。その町、髪の毛をさかさにした給食婦のAさんが、放心したようにヨロヨロ歩いているのが、妙に印象的であった。

私は子供たちに声をかけながら、救出にかかった。そこへ付近の住宅にいた職員のB君が来てくれたので勢いを得た。そのうち近所の人たちも応援してくれたので、女子職員二人、子供一人を救出することができたのである。

ホッと一息ついていたら、近くの段原校赤川教頭が単身やって来て、「段原は全焼だ、犠牲者も出た、僕も人事不省だったが、やっとここまで逃れた。」といって立去った。

私はこれは大事になったものだとほぞをかんだ。

その頃から往来は人通りが多くなり、学校救護所(校庭の中央地下壕)に負傷者のかつぎ込んだり、医者を探してわめいたり、子供の行方を聞きに来たり、騒々しくなった。

私はふと母のことが気になった。母は朝、宿直の私に弁当を持って来てくれたが、大須賀町の家に帰ったはずである。広島駅の方を見ると大へんな煙だ。火の手も見える。人の話によれば大須賀町あたりは全滅だという。母は駄目かも知れない。そう観念した私は、学校の災害報告のため市役所へ行こうと決心した。時計を見るひまもなかったが、その頃は十二時少し前であったと思う。

大正橋を渡り、盛んに燃えている中を比治山神社の近くまで行ったが、先は行けそうにない。止むを得ずわき道を

登って比治山に上った私は、声をのんで立ちどまった。

市内の大きな建物は盛んに火を噴き、全市火煙の海といってよい。

私は市役所行きをあきらめ、比治山の東側から帰ることにした。あと形もなく倒れた旧御便殿前の広場を通って行ったが、そこで私は、世にも悲惨な光景を目にした。多勢の女の子一殆んど全裸に近い女の子たちが倒れている。然も続々と西側からはい上って来る。来てはくずれるように倒れる。「兵隊さん、水」の悲しい叫びは今でも私の耳底をはなれない。暁部隊が看護に忙しく立働いている間を私は女子商業学校の方へ下りて行った。

人ひとりいない、ひっそりした街をふみわけながら学校へ帰った。

その日から十一日まで、私は母や縁者を探して毎日市内をかけずり廻った。

[第十八項 広島市大芝国民学校…193](#)

(現在・広島市立大芝小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市大芝町江川一、四四七

校長 渡辺徹

教職員 三三人

児童 七〇三人

校舎 木造二階建・二八教室・坪数不明

敷地面積 四、三二〇坪

爆心地からの距離 約二・四キロメートル

広島市大芝国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十日	双三郡三次町 鳳源寺	二人	二五人	約二〇〇人	
	双三郡三次町 妙栄寺	一	一三		
	双三郡三次町 専法寺	一	一五		
	双三郡三次町 浄伝寺	二	二〇		
	比婆郡口北村 浄蓮寺	二	二一		
	比婆郡口北村 正専寺	一	二三		
合 計		九人	一一七人	約二〇〇人	

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先

校庭の防空壕

五、校舎の使用状況

第一八独立鉄道作業隊および独立鉄道第二大隊約六〇〇人が、講堂や校舎に宿営し、運動場では、常時、教練が行われていた。被爆時には、数人を残して野外演習に出ていた。

また、繊維会社が統制品の衣類を集積し、教室を一つ使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
朝会、教育会議、授業	二四人	三一人	兵士 数人 保護者会長 一人	教育会議で教育計画をたて、学校でまたは町別の分散学習所で、授業を行なう予定

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…半壊、一部全壊

当校は爆心地から約二・四キロメートルの所にあったが、被爆と同時に、二階建北校舎二棟・宿直室・給食調理場・講堂などは全壊。二階建新校舎の爆心地に面している方は半倒壊となり、爆心地に対して縦に長く建っている部分は倒壊を免れた。西南隅の二階建倉庫は、体操器具・ピアノ・その他の教具を格納していたが、倒壊後、付近の民家から延焼し焼失した。また、新校舎の西端校長室付近は、熱線により着火して燃えはじめたが、当時宿営していた残留兵士と学校職員が、協力して消火ポンプを操り、消し止めた。

(二) 人的被害

当時、残留児童のうち、四年生以下の児童を数区域に分け、寺院や民家を借りて分散授業を行っていた。学校には五・六年の残留児童が約五〇人通学することになっていた。当日登校していた五・六年児童は三一人、まだ授業開始前で、運動場で遊んでいたとき被爆した。

児童の被害状況は、学校内での即死者はなかった。頭部その他に打撲傷を受けた児童が約五、六人、ガラスなどの破片によって負傷した児童が約五、六人いた。その他、かすり傷を受けた児童が約一〇人いた。

分教場に登校していた児童の負傷者は、約五〇人と推定された。後になって判明したところによれば、登校していた児童と、まだ家庭にいた児童の負傷者の合計は、残留児童二八六人のうち、三五五人であった。

また、職員の被害状況は、保護者会長と要談中の校長が、顔面に裂傷を受け、治療を受けるべくただちに避難したのを初めとして、一般職員の被害は甚だしく、一人は頭部打撲傷のため死亡し、他の職員も火傷・裂傷のため治療を必要とするので、自宅または医療所へ避難したもの一六人、負傷にもかかわらず学校に踏みとどまることのできた者は、わずかに六人であった。

八、被爆後の混乱

学校に踏みとどまった職員は、ただちに児童を防空壕内に退避させ、備えつけの医療品をもって応急手当をしたのち、大芝町北端の竹やぶへ誘導した。歩行困難な児童は職員が背負い、あるいは手を引きつつ、児童たちは助けあって避難した。その後、市内の猛烈な火災を見て、避難場所を新庄町の竹やぶに移し、さらに、祇園町の神社へ移した。こうしてようやく落ち着きを取戻し、重傷児童を付近の民家に預けて休養させ、他の児童を掌握しながら父兄の引取りを待った。正午ごろになって、やっと父兄が探し求めてきたので、全児童を引渡すことができた。

学校には、学区内の罹災老や他地区からの避難者が一ぱいに詰めかけた。そのうえ校舎はほとんど倒壊の憂き目をみていた。翌日十数人の児童が登校してきたが、到底授業はできないありさまで解散させた。その後、職員の一部は、運動場に受付を設けて、区域内居住者に罹災証明書を交付した。こうした状況を市当局へ報告しようとしたが、市役所も被爆全焼していて、連絡がつかなかった。

しかし学校にとどまり得た六人の職員は、協議の結果、毎日定刻に集合することを約し、校舎の被害の調査、および残った校舎の応急措置を講ずることにした。

なお、残存校舎の一部に三篠・大芝両学区の救護所(責任者・長崎五郎)が開設され、外来患者の救護医療に当たったので、一部職員はこれを手伝った。

また残りの教室には、数百人の被災者が収容され宿泊していた。

九、学校再開の状況

学校の再開

十月になって、ようやく人心も落ち着いたので、青空教室で授業を再開した。

十一月中ごろになって、破碎された校舎を応急整備し、そこで授業を続けたが、寒気きびしく、父兄から暖房用の木炭の提供を受けた。

学校の被害を当局に申請して資材を得ると共に保護者会の援助も受けて、屋根の修繕・天井の張替え・渡廊下の修復などをした。しかし教室の不足はいかんともし難く、二部授業を行なった。加えて学用品や教科書の補充はできず、学校内や家庭に残っていたわずかな学用品で間に合せ、教科書はグループで見せあうような有様で、満足な教育はできなかった。

(現在・広島市立牛田小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市牛田町旭区一、一八五

校長 橋坂弘吉

教職員 二二人

児童概数 九一四人

校舎 木造二階建・二一教室・延六七〇坪

敷地面積 四、一一六坪

爆心地からの距離 約二・四五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年五月十二日	高田郡船佐村	一二人	三八三人	二〇人	三年以上の児童高年科を除く
昭和二十年六月二十二日	高田郡粟屋村				
昭和二十年七月十七日	高田郡粟屋村				

広島市牛田国民学校 学校敷地・学校配置図(概略)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	市内富士見町	一人	二六人	疎開跡片づけ	高等科生徒

四、指定避難先と経路

当校は広島市の周辺部にあり、学校としては別に避難先を指定しなかった。

五、校舎の使用状況

(一) 広島市内における建物疎開した家屋のタタミ・フスマなどが、三つの教室に保管されていた。

(二) 陸軍関係の救急薬品・ガーゼ・脱脂綿などが三教室に保管されていた。また食糧として馬鈴薯・甘藷の保管で六教室が使用されていた。

(三) 校庭は食糧増産のため、甘藷・トマトなどを栽培するのに使用した。

(四) 地中に食器類を埋めて保管した。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
職員朝会	一〇人	三七二人		

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…半壊

当校は爆心地から北東約二・四五キロメートル離れており、広島市の周辺部にあるから、物的にはあまり大きな被害はなかったが、それでも校舎の窓ガラス・天井板・屋根瓦などは吹き飛ばされ、柱は傾き、ほとんどが使用不能な状態にまでの被害を受けた(全壊一棟)。

(二) 人的被害

区別	教職員	児童	備考
即死者	〇人	〇人(一六)	() 内外での被爆者数
重軽傷者	一〇 (一)	一〇	
行方不明者	〇	一	
計	一〇 (一)	一一 (一六)	

被爆時、すでに学校に来ていた児童は約三七二人余りと推定されるが、富士見町の建物疎開に出ていた高等科を除く四年生以上の児童は、集団疎開をしており、炸裂時は三年以下の残留児童がちょうど、登校中であった。早く登校した児童は、炎暑のため日陰におり、ほとんど被害を受けなかったが、児童一人は下駄箱の下敷きとなって重傷を受けた。

被爆後、すぐ児童を集め、各担任教師がそれぞれの児童を引率して、各家庭にとどけた。

建物疎開に出動した生徒の記

山下鉄夫

(当町・牛田国民学校教頭)

被爆当日、学校長は学童疎開先、高田郡粟屋付(現在・三次市)に出張中、当局より急に高等科生徒の出動を要請されたので、担任であった女子職員にかわり、二一人(私の記憶)を引率して学校を出た。途中、白島の常葉橋西詰にさしかかった頃、ラジオの警戒警報を聞きながら現地に向った。

午前八時、竹屋国民学校前で指示を受け、鶴見橋西詰付近の建物疎開の跡片付け現場に到着、直ちに作業にとりかかった。国民義勇隊の人も続々と来て、作業を開始したころ、突然、「シューッ」というものすごい爆風、それにまるで火の中に落ち込んだような激痛、辺りは何も見えない闇の中に倒されていた。その暗闇の中をしばらく、はいまわっているうちに、京橋川の堤防にたどりつき、そこではじめて視野がひらけた。

折柄、満潮の水面には、ちょうど水泳をやっているように一ぱい人が浮んでいた。

自分をみると、両手の皮はむけてたれさがり、身体中がとても痛むので、急いで川に入った。すると、そこに引率して行った男の子が一人、ひどくむごたらしい顔をしているので、「いたむだろう。」と言ったら、「僕より先生の方がひどい。」と言う。

ともかく一応学校へ帰ろうと、川からあがって、鶴見橋を渡り、比治山の下、的場町のあたりにさしかかると、母をさがして泣き叫ぶ子、水をほしがる老人、ほとんど裸体に近い傷だらけのからだに、しっかりとわが子を抱く母親、とても想像できない地獄絵図以上の情景がくりひろげられていた。どこまで行っても家は倒れ、くすぶり、燃えている。

駅前から饒津神社横を通りかかると、宏壮な社殿はもの凄い火をふき出し、焼けくずれ落ちていた。

牛田町へ入ってみても、町のいたるところから火が出て、町内会の役員や、警防団の人たちが活動していた。

学校へ帰ってみると校舎はねじれ、柱は裂けており、どうにか立っているだけである「学校には、小使さんだけ残り、あとは裏山に行っているとのことで、裏山に行ってみると、疎開作業につれて行った男生徒は、もう皆帰っていたのに驚いた。しかし、女生徒はまだ数人帰っていないので、帰った者にたずねたが、わからないとのこと、それもまったく無理のないことだった。

このころ、黒い雨が二、三〇分間、夕立のように激しく降った。

自分も傷の手当をしてもらい、校舎の方へ引返してみると、理科室の方から煙が出ているので、近づいてよくみたところ、地下室に置いてあった薬品からの煙とわかった。すぐこれを処置し、ついで重要書類を裏山の安全地帯に運んだ。

学校長が学童疎開先から帰るまで、町内会・警察・警防団・市などとの連絡に当たっていたが、翌七日、学校長に引継いだ後は意識もハッキリせず、運動場内に設けられた防空壕にねて、先生方から手当を受けた。

なお六日夜、自宅に帰らなかった女生徒たちは、あまりの恐ろしさに東練兵場で一夜を過して、あくる日にわが家に帰ったとのことだった。しかし、ただ一人江村さんだけはとうとう帰らなかったのも、即死したものと思われ、まことにかわいそうであり、残念でならない。

自分は八月十二日、意識のしっかりしないまま、家族に連れられ、郷里の高田郡甲立町の自宅に帰って静養した。三か月後、十一月十二日、広島に出て牛田国民学校に出動した。そして聞いたところ、出動した子供のうち、帰ってからもつぎつぎに原爆症状でたおれ、二一人中(二六人?)一一人が死亡したのである。本当に痛ましく、憶い起すたびに断腸の思いがし、ただただ静かに冥福を祈るのみである。

八、被爆後の混乱

校舎は半壊とは、言いながらも、使用不能の危険状態であり、大混乱のなかで、児童の安否も不明のため、学校の

運営は約一五日間停止せざるを得なかった。

しかし、一〇人命の負傷者を除く全教員は、毎日出勤して、校舎の整備や児童の安否調査を行ない、授業再開の準備を進めた。また、校内に保管されている多量の軍用物資の盗難予防にあたった。

被爆直後、町内在住の太田萩枝医師が医薬品を持ってかけつけたときには、負傷者はまだ一人か二人しか来ていなかったが、しばらくすると、続々と負傷者が到着しはじめ、六日の夜は、まったくの修羅場と化し、兵庫県から急ぎ来援した医師二、三人と同校所属の寺岡頼之看護婦は不眠不休の活動を続けた。

七日、臨時救護所に指定され、白島町の自宅で被爆した国友国氏医師が来校するとともに、呉の海兵団派遣の医療救護班が到着し、運動場にテントを張って救護活動を展開した。

当校には、陸軍の救急薬品が多量に保管されていたから、負傷者の治療に大いに役立った。

負傷者は、次々に死んでいき、その屍体は七六〇余に達し、町内の警防団・役員その他の人々の協力を得て、牛田公園(現在)に運び茶毘にふした。このうち三〇〇余柱は身元のわからない人であった。

九、学校再開の状況

学校の再開

負傷教員を除く全教員が出勤して、連日、校舎の修理と整備を行ない、第二学期開始の準備を進めると共に、疎開児童に対する指導と引揚げの準備に着手した。

昭和二十年九月一日、授業再開の準備ができ、三日から、あらためて入学受付を行なった。十二日、高田郡船佐村に集団疎開していた児童を引揚げさせたが、これを含めて、授業再開時の児童数は約六五三人であった。

被爆後、校舎を焼失した白島国民学校と広島女学院に、当校校舎の一部を貸与したので、当校児童の授業を午前中とし、白島校と女学院が午後使用するという二部授業で開校した。

しかし、教室は天井が落ち、ガラス窓は吹き飛ばされたままという状態で、雨天の日は激しい雨もりとなり、まったく授業にならなかった。

牛田学区は、大部分の家屋が火災から免れた関係で、児童の教科書や学用品などについては、焼失した他の学区ほど困難を感じなかった。

[第二十項 広島市尾長国民学校](#)…207
(現在・広島市立尾長小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市尾長町一九一
校長 伊藤四郎
教職員 二五人
児童概数 六〇〇人
校舎 木造二階建・三七教室・延一、一六九・二五坪
鉄骨講堂一・延一三九坪
敷地面積 三、一九四・九五坪
爆心地からの距離約 二・八五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年五月十二日	比婆群小奴可村 比婆群八鉾村	九人	二四〇人	約五〇〇人	小奴可村 三校 八鉾村 二校 寮母・炊事婦を嘱託 する

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

(一) 第一の指定避難先……当校の北西約四〇〇メートル離れた地点の、尾長天満宮。

(二) 第二の指定避難先……当校の南東約六五〇メートル離れた地点の、広島市東隣保館。

五、校舎の使用状況

当校の講堂および校舎約一〇教室(約四一〇坪)に、築城部隊の軍人軍属(線第一三三七七部隊及び師第七四三七部隊)が駐屯していたが、人数は不明である。

なお、軍用の電線・ガラスが集積してあった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
被爆当日は、登校日になっており、児童は授業となっていた。	一四人	〇人	築城部隊が若干人いた。	警戒警報発令で登校していた児童を全部、自宅に帰した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…小破(延焼により全焼)

昼過ぎ、東愛宕町の一角(当校より南約二〇〇メートルの地点)から火の手があがった。当校駐屯中の築城部隊の軍人軍属全員が消火にあたったが、消火ホンプ一台もなかった。また、一般町民も働き盛りの者は疎開作業に出動し、半死半生の重傷で逃げ帰ってきたので、家族は敵機の波状攻撃を恐れ、その重傷者をつれて郊外に避難する者、また、多数の負傷者の看護に当たっていたりして、消火活動に人手がなかった。築城部隊の兵隊も消火には全力を尽したのであるが、その能力は微々たるもので、火はますます広がり、そのうち力つき、延焼をただただ傍観する外なき有様となった。これに先立ち当校構内も次第に危険と思われるに至ったころ、多数の収容患者を、高天原方面に転送した。夕刻に松本工業学校(現在・松本商業学校)からの火の手が、当校に延焼して来たときには、みんな疲労の極に達していて、消火作業にあたる者がまったく無く、重要書類・設備品の搬出もできず、わずかに書類のごく一部を、安全と思われる場所に移しかえただけであった。

学校は火の海と化し、ついに焼失してしまった。そして更に火は、学校の裏手の民家へと移っていった。

(二) 人的被告

区 別	教職員	児 童
即死者	〇人	〇人
重軽傷者	七	〇
行方不明者	〇	二
計	七	二

六日当日、授業予定となっていた五、六年児童のうち、朝早くから登校していた児童がいたが、五日夜から警報発令が続き、六日午前七時過ぎにようやく解除となったような事態であったから、児童をすべて帰宅させた。したがって、原子爆弾の炸裂時には、校内には一人の児童もいなかった。また、学区内数か所にある寺子屋式分散授業所で、授業を受けていた三年以下の児童は、被爆時に二、三人ほど集合していたが、集合途上の者や、未だ家庭にあった者が大部分で、全員無事であった。しかし、教職員は、職員室で当日の行事打合せ中であつたため、炸裂により、大部分の職員はガラスなどの破片で軽傷を負った。そのうちに、一般市民の被爆者が、続々と学校へ避難してきたので、これら被爆者の収容に忙しく、教職員全員が学校を守りつつ、患者の看護にあたり、夕刻近く学校が炎上するまで避難しないで頑張っていた。

八、被爆後の混乱

原子爆弾炸裂後、各担任教員は、ただちに学区内数か所にある分散授業所に行き、児童の安否を調べたところ、児童は一人も残っていなかった。さらに、付近の町内を一巡して、児童がほとんど無事であることを調べた。

当校は被害僅少で、学校の機能には支障なかったが、市中から多数の負傷者が逃げこんで来て大混乱に陥った。引き続き負傷者は増すばかりで収容しきれない状態となり、繁忙を極めた。しかし、当校舎も安全ではなくなり、やがて学区内(東愛宕町方面)からも火災が発生し、火の手は消火活動のかいもなく、広がるばかりであったから、校舎に収容されていた多数の被爆者を、安全な高天原(当校より北北東約五〇〇メートル)方面に全力をあげて転送した。学校

は午後三時過ぎから五時頃までの約二時間で、完全に焼け落ちたので、それ以後は応急救護所としての機能を全く失った。翌七日から、学校プールの東側に仮本部を設けて、教職員が交替で詰め、諸般の連絡にあたった。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、旧陸軍が使用していた近くの東練兵場北山腹の軍用兵舎(バラック建)を借りて、仮校舎とする計画を進めている間に、このバラック兵舎は、一夜か二夜の間に、ほとんどぬすまれてしまった。そこで高天原の旧通信隊バラック兵舎七棟(一二〇坪)を譲り受ける交渉を続けた結果、兵舎の使用を許可されたので、学区内の寺子屋式授業場に分散していた児童用の机・腰掛などを集め、また荒神町国民学校の倒壊した校舎の下敷きとなり、破損している机・腰掛も借用することにした。これら机や腰掛は、教職員と児童が倒壊物の中から掘り出して運び、苦心して修理をほどこし、やっと十月一日から授業を開始することができた。

また、東隣保館幼稚園部の建物を借受け、応急修理をして二学級の授業を開始したが、いずれも二部授業であった。

すなわち、一年生――学級・二年生――学級・三年生――学級・四年生――学級・五年生――学級・六年生――学級の計七学級で、児童総数約三〇〇人、教職員二四人であった。

その後、日を追って疎開先や避難先から復帰する者、転入して来る者などが増加して、教室の不足が深刻な問題となったので、昭和二十一年六月から八月にかけて、譲渡された高天原の兵舎を、旧校地内に移築して、九教室を建て、本格的な再出発を踏み出したのである。

なお、学校は焼失したが、学区内の民家は、その大部分が残った関係で、旧教科書を中心に、家庭から持ち寄って来た学用品で授業を進めていった。

第二十一項 広島市比治山国民学校…221
(現在・広島市立比治山小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町字七の割五五八の二
校長 石田正己
教職員 二八人
児童概数 一、三〇〇人
校舎 木造二階建・四一教室・延、一、四八三坪
敷地面積 三、八七七坪
爆心地からの距離 約二・八キロメートル

広島市比治山国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者概数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十二日	佐伯郡津田町教覚寺	五人	七八人	約七〇〇人	集団疎開した児童はこれら町村の寺院、あるいは国民学校の作法室、青年会館などに宿泊、居住して勉学を続けた。
昭和二十年四月十五日	佐伯郡浅原村(三光寺、青年会館、浅原国民学校)	四	五五		
昭和二十年七月十三日	佐伯郡友和村	二	二一		
昭和二十年七月十三日	佐伯郡栗谷村(小栗青年会館、大栗青年会館)	二	三〇		
昭和二十年七月十四日	佐伯郡津田町教覚寺	-	八		
昭和二十年七月十四日	佐伯郡浅原村	-	五b		
合 計		一三人	一九七人	約七〇〇人	

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

学校正門および裏門を出て、田んぼ道を通り、学校東方(東雲町)のブドウ園に、避難することになっていた。
ここは広い面積を持ち、かつブドウ棚の下は、敵機の視界から遮蔽される恰好の避難場所であった。

五、校舎の使用状況

北校舎の階下七教室は、兵器支廠の兵器貯蔵庫として使用していた。
また、東校舎六教室を使用して、鉄道建設隊が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
一、朝会 午前九時開始予定 二、疎開荷物の運搬 午前七時四十分出発観音町で被爆	一〇人	三〇〇人	鉄道建設隊	前夜来の空襲のため、当日の朝会を一時間遅らす。 教員四人付添い 疎開荷物の運搬

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況……半壊

この学校では総体的に見て、半壊の損傷程度であった。すなわち屋根瓦は飛散し、校舎内の天井は、その半分ぐらいが破壊された。また各室の窓ガラスは全部破壊され、主柱一三本が折損した。校舎は爆心地から東方へ約二・八キロメートル離れており、その間に京橋川や比治山があって、火災発生には至らなかった。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	三人	〇人	
重軽傷者	三	五〇	
行方不明者	〇	〇	
計	六	五〇	

教職員引率のもとに、かねてから定められていたとおり、東雲町のブドウ園に避難し、各児童の家庭の被害状況を視察の上、異状のない児童はすぐに帰宅させ、他の児童は正午頃帰宅させた。炸裂時に室内にいた児童のうち五〇人は、ガラス破片により顔や手足などに負傷し、泣きわめきながら校舎外へ避難した。それらの児童を、一応構内の待避壕内で手当してから、避難場所に誘導した。

八、被爆後の混乱

当日は、負傷児童に対する応急手当の実施、避難場所への誘導、正午ごろまでに全児童を帰宅させるなどの措置をとった。また、校舎の破損が甚だしいので、登校停止の措置をした。この登校停止は、結局、十月上旬まで続けられた。一方、被爆後まもなくのころから、罹災負傷者が続々とこの学校にも殺到し、二〇〇人にも及んだ。

学校では、講堂にジュウタンや暗幕を敷きひろげて、これら罹災者を収容した。歯科医師・薬剤師各一人が急ぎ来校し、救急薬品を使用して学校長の指揮のもと、学校職員と共に手当に従事した。その夜は乾めんぼう、翌日は粥をこれら罹災者に支給し、二日後に青崎国民学校へ送ったのであるが、その間に七人が死亡した。

孤児の世話

また、八月合から戦災孤児(当時迷子)の収容所としても活動し、二〇〇人程度に達した。この子たちを寮母八人と女子職員が、翌年二月十日に佐伯郡五日市町の戦災孤児育成所に移すまで、献身的な世話を続けた。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎・教室に応急的修理を施して、十月上旬に至り、はじめて開校した。
この時の教職員・児童数は左記のとおりである。

教職員 二四人

本校児童 九〇〇人余

段原国民学校、荒神町国民学校児童 約四〇〇人

こうして昭和二十年度第二学期の授業は開始せられ、幸いにも地区ならびに学校が火災炎上を免れたため、教科書や学用品にも大した支障はなく、勉学に就かせることができた。なお、校舎の復旧費として十一月には、比治山学区から約十万円を集めて復旧工事に着手、屋根・建具・壁・折損柱などを補修し、昭和二十一年はじめごろ第一期工事

を完了した。

比治山孤児収容所の記

河元きくの

(当時・広島市保母)

焦土と化した広島をあとにして、故郷に帰り静養していた私は、終戦を聴いた翌十六日に市役所に出向いた。

市役所は外郭だけを残してマル焼けになっていたが、生残りの職員の幾人かの顔があった。

私の顔をみると、被爆以来負傷しながらも庁舎に泊って、救援活動をしておられた谷山源睦部長が、「保母の出勤第一号だ。」と言って褒めてくださった。

そして、比治山国民学校に孤児が六〇人ばかり収容されているが世話をする者がいない、すぐに行ってくれと言われる。

私は矢吹憲道社会課長にともなわれて、トラックに医療品・食糧品・毛布などを積みこんで行った。

学校についたとたん、驚いた。

子どもたちの下痢を始末したボロおむつが、山のように廊下の隅に積んであり、すき間のないほどハエが黒だかりしている。

こどもの全員が血便の下痢である。

まず門の外にあった防火用水槽にクレゾール液を三本流しこんで、ボロおむつの消毒からはじめた。

水道もない、電灯もつかない。窓ガラスは一枚も残っていない教室である。

私は子どもと一緒に泊りこんでいたが、空襲の恐怖で、暗い便所によろ行かない子どもたちを、一人一人連れて行っているあいだに、夜の明けたことも幾日かあった。

子どもたちの食事でも大変なことであった。

食糧不足で、麦と米とサツマ芋の茎を混ぜ、味噌でグダグダと煮たものを、菊の花のようにササラにふちの欠けた茶碗で食べた。

またシラミの発生にも困った。着物のえりにジュズつなぎにくっついているシラミ。着がえ一枚持たない着たきり雀ばかりで、どうすることもできない。

暖い日を選んで、すっ裸にして、日なたぼっこをさせているあいだに、給食用の大きな釜で煮沸消毒して、木切れでまぜては、運動場の柵にかけて、乾いたものから着せた。

最後に釜の底をみると、ゆでイカのようなシラミの死骸が、両手に一杯ぐらいあった。

ある日、黒瀬収入役が乳児を背負って来られた。その子は口が耳まで切れており、乳を吸収することができなかったから、スプーンで一滴ずつ吸わせ、何とかして救ってやりたいと努力してみたが、とうとう生き残ることができなかった。胸をケガしている子どもの手当をしていると、その傷口から麦粒のようなものが、ポロポロとこぼれ落ちるので、よく見るとウジ虫であった。

日がたつにつれて、子どもが高熱にうなされる。背中にブドウ色の斑点が出てくる。頭の毛がまん中からプスプスと抜ける。毎日毎日少しずつ抜けて、しまいにはマル坊主になって、次から次へと死んでいく。

子どもの死体を、誰も処理に来てくれないので、一つの教室に安置しておいたが、夜になると、飼主を失った軍用犬が野良犬化して、狼のように兇暴になって、その死体を狙いにきた。私は積木を投げては、それを幾度か追っばらった。幾日たっても死体処理ができないので、保母の手で葬ることにした。

学校の運動場の片すみを掘って、焼残りの材木を集め、火葬にしたときは、悲しさを通りこして涙さえも出なかった。ただ黙祷して煙を見あげるだけであった。

名前も思い出せないが、三歳ぐらいの女の子が、両親の名前も住所もわからないのに、ただ「田舎へ連れて行って…」とせがむ。「マンマ食べたらね…」と時間をかせぐ。食事がすむとまた「田舎へ連れて行って…」とせがむ。「ネンネして起きてからね…」という、朝起ると「田舎へ連れて行って」と、またせがまれる。何処へ連れて行けばいいのか頭の痛む毎日の会話が続いた。

二か月半の勤務で、十一月の初めから宇品七丁目の軍隊の兵舎跡で、引揚げ孤児の収容がはじまり、職員が二班に分れて、私はその方に出向することになった。十二月になって比治山校の子どもは、佐伯郡五日市町に戦災孤児育成所が開設され、引移って行った。しかし、被爆当時の子どもはほとんどが死んでいき、そこには家族を失った疎開児

童が収容されたようであった。引揚げ孤児収容所は、その翌年基町に新生学園が開設され、そこに移った。

第二十二項 広島市己斐国民学校…221

(現在・広島市立己斐小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市己斐町二、一一七番地
校長 真木賢三
教職員 一七人
児童概数 七〇〇人
校舎 木造二階建・二四教室・延一、一九一坪
敷地面積 三、七九一坪
爆心地からの距離約 二・九キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者概数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年五月	世羅郡大見村	一人	五〇人	不明	
	世羅郡東村	一	五〇		
合 計		二	一〇〇	不明	

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
広島鑄工所	打越町	一人	五〇人	手榴弾製造	生徒二人が被爆のため死亡、引率教員一人は火傷する。

四、指定避難先

警戒警報発令と同時に、児童は各自の家庭に帰宅させていたため、別に避難先は指定しなかった。

五、校舎の使用状況

当時、講堂は陸軍糧秣支廠に貸与されて、常時約二五〇人程度の作業員が仕事をしていた。その後、講堂に接続している教室も貸与された。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	一五人	四〇〇人	糧秣支廠職員約二五〇人	低学年（三年以下）の児童は授業で、被爆当日朝は登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況……小破

当校は爆心地から、西北西約二・九キロメートル離れた山地の一部にあったが、爆心地方向には何の障壁もなかった関係で、爆風によって、屋根瓦・窓ガラス及び窓枠などはほとんど飛散し、壁も大部分落ちた所があった。また一部校舎には柱が折れるなどの被害はあったが倒壊箇所はなく、総体的には小破程度の被害であった。

なお、原子爆弾の炸裂後、まもなく講堂が火災を起したが、教職員一同が消火につとめ、全焼をまぬがれた。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	一人	(二)人	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者	〇	(二)	
行方不明者	〇	〇	
計	一	(四)	

校舎の被害は少なかったが、次に来る危険を考慮して、児童たちをただちに家庭に帰らせ、教職員だけで学校を守

ることにした。

八、被爆後の混乱

被爆によって、校舎は小破程度の損害を受け、教職員一人及び生徒二人(動員出動中の者)が死亡したが、校長以下、他の教職員及び児童は健在であったため、学校機能には何らの支障はなかった。また学区内の家庭も小破程度の被害はあったが、居住には別に支障はなく、児童各自には家庭で待機するよう指示した。

(一) 応急救護所の開設

原子爆弾炸裂後、時間の経過するにつれて、市中から多数の被爆者が当校に殺到し、教室も廊下も避難負傷者で、たちまち一ぱいになった。そこで、講堂と二階の教室を除き、他の教室は全部、仮救護所として解放した。救護は、当時の救護法の規定に基づき、六〇日間の十月五日をもって一応打切られたが、原子爆弾という予期せぬ大惨禍のできごとのため、十分な救護もできず、氏名も住所も判らないまま、死亡した者が多数あった。このような、被爆下の状況について、己斐国民学校収容所を中心に、救護活動に従事した当時の真木賢三校長ほか二人の体験談(広島原爆医療史所載)を次に記載する。

真木賢三

わたしは、あのとき、己斐国民学校に奉職しておりましたが、己斐・古田・草津などの西部の国民学校も救護所になっていましたから、わたしの学校にも救急薬品がたくさんおいてありました。ところが戦局が急迫して参りまして、陸軍の糧秣支廠がわたしの学校に疎開して来ましたから、空襲を予期して薬品類全部を草津国民学校に移しました。ところが、あとで話しますように結果的には移さないほうがよかったんです、そのために被爆後非常に困りました。

原子爆弾が落ちまして後、まもなく講堂が火災をおこしましたので、みんなその防火にかかりまして、やっと火を消しとめたころ気がついたのですが、教室という教室には全部、また、廊下や路面にも避難者がいっぱいころがっているではありませんか。救護所では受付であおしてこうしてと、学務課からいろいろ手順などを指示されていたのですが、とてもそれどころではなかったわけです。

空襲を受けて救護を必要とする際は、学区内の津田先生が救護所の主任医師として来てくださることになっていたんですが、とても来てはもらえませんでした。なぜかと言いますと、学校へ来る途中で道ばたにたおれた患者につかまって、そのほうに手を取られて救護所までこれなかったんです。ですから六日はほとんど医療が受けられず、七日も午前中は医者なしで、結局七日午後になってやっと津田先生に来ていただいたような始末でしたが、薬品は草津へ全部移してしまっている、患者は約一、二〇〇人くらいもいるのに、医師はたった一人という状態ですからどうしようもありません。

そうこうしているうちに、呉から救護班が九日か十日に来てくれ、救護はどうか始まったんですが、死体の処置には困りました。なにしろ、八日ごろから死体にウジがわきだしまして、死体だけでなく生きている患者にもウジがわいていました。臭くもあるし非衛生でもあるので、教師を宇品の暁部隊へ走らせて、死体の処理を計画してもらうことにしました。そこへおりよく世羅郡甲山町から警防団が約三〇人、応援に来てくれました。甲山警察署長が己斐の出身だったのと、己斐国民学校の児童があの方へ疎開していた関係からだろうと思うんですが、その人たちが一間幅に二五メートルくらいの壕を七筋掘りました。この壕で死体を焼いたんですが、タキギは、学校給食のために子どもを己斐の山に行かせて作っていたタキギが約一万把ありましたから、それを使うことにしたんです。

ところが、皆さんご承知のように死体を焼くには警察の検視が必要ですから、そのことを連絡しましたら、警察は、今はとてもそこまで手が廻らない、というんです。運動場で死体を焼くこともかれこれいっておられません。その責任は自分が持つから検視だけは警察で責任を持ってくれるように話し合い、それではと、廿日市署か五日市署からか応援に来ていた巡査さんが検視してくれました。

しかし、死体はほとんど裸体で、顔はふくれあがっていて、年齢もほとんどわからない、氏名はもちろん不明です。受付をして収容したのでないから、どこのだれやらわかりません。もっとも、逃げて来た晩にはそういうことがあってはならんからというので、ものの言える人はみな住所氏名を言わせて紙に書き、それをからだにつけたのです。しかし、これがめい土への鑑札のような気がしたのかどうかは知りませんが、死んだときには、あがいたりして取って捨てていましたから、住所氏名の不明のものが非常に多かったのです。だから、わかっているものはかわらにチョークでそれを書いて、焼くときに頭のところに置きました。

こうしていよいよ焼くために死体を運ぶ段になりましたが、実にいやなにおいがするので、警防団の人たちは口や

鼻をタオルでおおって、遠くからトビ口で担架へ乗せるんです。これでは時間がかかってしょうがないというので、晝部隊へ、死体処理に至急、剛の者を一中隊派遣してくれと使いを出したところ、すぐ中隊長を先頭に一箇中隊来てくれました。それからははかどりました。タキギを壕の底にずっと並べ、その上に死体を頭と足を交互にして並べましたが、そうでもしなければ死体が多くてどうにもならなかったんです。

そのとき、ワラがいると兵隊が言うので、己斐上町のだれもいない家から、無断ではあるが、持って来させて死体の上にかぶせ、軍隊の持って来た石油をかけて焼くことにしました。最初の八日に、中隊からわたしのところに報告に来たときが六一七体でして、すぐに火をつけようかといいましたから、いま火をつけると夜になり、空襲の目印になっても困るから、明日にしてくれといいました。九日の朝、また兵隊が来たので、前の晩に死んだのもいっしょに焼くことにしたら、死体の数がちょうど八〇〇体になりました。ですから一夜のうちに一八〇人もなくなったわけです。その時は、己斐の町一帯非常にくさかったそうです。

一番困ったのは、死体が全部焼けずに頭や手などが焼残るので、夜になると野犬が集ってきて、それらをつつくのです。ものすごい光景でした。死体焼却が一段落ついて、その壕は埋めてしまいましたが、戦後食糧不足の時代に、そこらを畑にしてイモを作りまして、非常によくできたのに、だれも気味悪がって食べないので、わたしがまず食べてみせたら、他の職員もようやく食べだしたという後日談があります。

それから後はぼつぼつ死ぬるし、大竹町などからはトラックを持って来て、自分の町の人の死体を持って帰ったりしました。そのころは、用事があって市内へ出るときにはチョークを持って行きました。そうして、わたしの学校で処理した死体のうちで、住所氏名のわかっている人がありましたから、その町を歩くときには「〇〇氏ハ己斐国民学校デ死亡、遺骨ハ学校ニ保管シアリ」というふうに、道路や焼残りの防火水槽などにチョークで書いておきました。おかげでだいぶん遺骨を取りに来られました。

そうこうしておりますうちに、多分十二日だったと思うんですが、鳥取県から医療救護班が食糧や薬品をもって救護にやって来てくれました。そのときの話に、何でも、以前に鳥取市の大火の際に、広島県から鳥取市へ救護班を派遣したことがあるんだそうで、そういう関係から、そのお礼に救護に来たのだということでした。医師がひとりと看護婦が五、六人でした。

これで救護活動も活気づきましたが、困ったことに、この人たちの泊るところがない。学校は今もお話したように、便所の隅から校庭にいたるまで、患者でいっぱいです。己斐町の人たちは、被爆と同時に山を越えて石内村のほうへ逃げて行ったので、空家同然の家が多かったんですが、だれもいない家では何かにつけてお困りだろうからというわけで、当時町内会長をしていた土井卯一という植木商の家が広いので、土井さんに頼んでその家をお借りして、そうしてそこから救護に通ってもらったのです。

土方頼己

(当時軍医、中国電気通信局保健課長)

わたしは当時、大竹の陸軍病院の軍医として勤めていました。八月六日、下士官がオートバイで、休暇で休んでいたわたくしのところへ連絡に参りまして「広島がたいへんです。車(トラック)の用意がしてありますから、すぐ行って下さい。」というので、さっそくシャツとズボンのすこぶる軽装で下士官二人・看護婦五人を連れて広島へ参りました。

途中、早い患者は五日市あたりまで逃げていました。道路が避難者でいっぱい、車が思うように進まず、二時間ぐらいかかって、十二時前に広島の己斐救護所に着きました。

当時患者が校庭にいっぱいであったので、まず校舎をかたづけて部下の下士官と看護婦を火傷係と創傷係の二班に分けました。わたしは外科が専門でありましたが、原子爆弾がわからなかったので、普通の火傷と判断して、看護婦にその治療をまかせました。

わたしのほうは軍隊関係であったので、衛生材料はたくさんもっていました。六日、七日の二日間は食事もとらず、水もろくろくのまず治療に当たっていましたところ、八日の朝になって下士官が「どうもおかしい。軍医どの。今までの怪我とは全然違います。きのう軍医殿が治療された患者は、つぎつぎ死んでいきます。」というので「そんなばかなことはない。」と申しましたが、非常にたくさんな患者であったため、実はわたくしも自信なく、不思議に思いながらも次から次に来る患者の治療に当たっていました。

そのうち、八日の夕方になりますと材料がなくなりましたので、いったん死者を整理して帰り、また衛生材料を持

って参りました。当時の記憶でトラック一四車輛を使ったと思います。

九日に下士官が調べたところによりますと、治療した患者の数は万を下らないのではないかと申ししていました。火傷は当時治療方針が立たないので、ただチンクオイルのみ塗って治療していたというだけでありました。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎は小破程度の被害を受け、人的には教職員一人が死亡、生徒二人が動員先で死亡したのみで、他の教職員及び児童は健全であったため、第二学期を平常通り開始しても何ら支障はなかった。九月に入ると収容患者の数も減少したので、第二学期を開始する準備をはじめ、教室数二四室の整備(内、特別教室四室)をした。その結果第二学期は、九月二十日ごろ開始したが、当時の出席人数は教職員一六人、児童数は市内の焼失した天満国民学校の児童も含めて約八〇〇人程度集った。

なお、学用品などについては、資材不足の折で入手困難であったが、印刷済の用紙を父兄から提出させ、その紙の裏を利用したり、配給用紙を使用したりして授業を進めていた。また教科書については、その一部を墨で削除することによって旧教科書を使用したり、文部省発行パンフレット型教科書を五、六人一組で一冊を使用するなどで授業をした。

[第二十三項 広島市大河国民学校](#)…231

(現在・広島市立大河小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市旭町一、二六五の二番地
校長 小田信夫
教職員 二人
児童 概数五〇〇人
校舎 木造二階建・三一教室・延一、〇四〇坪
敷地面積 四、〇〇四坪
爆心地からの距離 約三・一キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十二日	比婆郡本田村峯田	五人 (寮母五人)	一五〇人	-	第一次疎開児童 一五〇人
昭和二十年七月十六日	比婆群本田村木村 (現 庄原市)	四 (寮母三人)	一〇〇	-	第二次疎開児童 一〇〇人
合 計		九人	二五〇人		

広島市大河国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
自研自動車修理工場	千田町	一人	五〇人 高等科一・二年生の 男子生徒	自動車修理	被爆当日、朝八時に教員が生徒 を引率して工場に行き作業中。
網本食品工場	旭町	一	五〇人 高等科一・二年生の 女子生徒	糧秣廠の仕事	被爆当日、朝八時に教員が生徒 を引率して工場に行き作業中。
合 計		二人	一〇〇人		

四、指定避難先と経路

(一) 緊急事態の場合は、学校内の防空壕に、学年ごとに避難する。

(二) 登校していない場合は、各町別に、仁保および霞町方面(当校から東南東約一・六キロメートル離れた地域及び北北東約四〇〇メートル離れた地域)に避難して行く。または近くの大河説教場・黄幡神社・稲荷神社などにも避難することになっていた。

(三) 一般的事態の場合は、教員が学年ごとに引率して、状況に応じ安全な道を通して避難することになっていた。

五、校舎の使用状況

校舎二階の全教室が暁部隊に貸与されており、約五〇〇人程度の兵隊が駐屯していた。そのため、講堂は被服庫として使用され、毛布・浮袋、その他、兵隊用物資が集積されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
低学年（一・二年生児童）の平日授業	三人	一五〇人	暁部隊 五〇〇人	六日の朝、登校した一・二年生児童は、原子爆弾炸裂前に教室に入った。

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…半壊

当校は爆心地から南東約三・一キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂による校舎の被害は、半壊程度であった。校舎の窓ガラスなどは、ほとんど破損し、屋根瓦が落下し、教室の柱がところどころ折られた。また、一部の校舎は傾いた所もあった。なお、校舎からも、また、学区内の各家庭からも、幸い火災の発生はなかった。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	(一)人	〇人	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者	〇	〇	
行方不明者	〇	〇	
計	(一)	〇	

六日当日はちょうど、低学年児童(一・二年生)の授業日になっており、登校した児童は、炸裂時には、すでに教室に入っていたが、大きな校舎の被害もなく、全員無事であったから、児童を急ぎ校庭に誘導して避難させた。その後父兄の中には心配して、学校にかけつけたものもあったが、児童には異常なく、学区内の各家庭も大きな被害がなかったから、児童たちを順次、父兄のもとに帰らせた。

なお、千田町の自動車修理工場に出動中の高等科一・二年生の男子約五〇人は、作業中に被爆したが、奇蹟的に全員無事で、学校または家庭に帰ってきた。しかし、動員生徒引率の女子教員一人は、不幸にも放射熱線を浴びて全身に火傷を受け、似島の救護所に収容されたが、三日後に死亡した。

八、被爆後の混乱

炸裂直後、たちまちのうちに当校校舎は一般被爆者の収容所に早替りし、各教室・運動場および防空壕などにはたくさんの方の罹災重傷者がつめかけた。学校では、緊急時の給食用として保管していた油及び医薬品を全部提供し、教職員・近所の医者および薬剤師・兵隊などが一緒になって、被爆者の看護に当たった。しかし、つぎつぎに死亡する者が多く、日夜、運動場の隅々で、死亡者の火葬が兵隊の手によっておこなわれた。学校の小使室では、消防団員や学区内の父兄などによる炊出しが始まり、また、教員室では、県庁と市役所からの関係者が中心になり、教職員、駐屯兵も手伝って罹災証明書作成に多忙をきわめた。このような状態で、学校は一時、教育の場としての機能を完全に停止され、被爆者の仮収容所として、八月六日から九月三十日まで使用されたから、児童は指示のあるまで家庭において学習することとし、教員は時々家庭訪問をすることになっていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月初旬ごろになって、授業を開始する準備ができたが、各教室はほとんど病室として使用されていたため、二学期の授業開始は、大河説教場および翠町の第三国民学校の一部教室を借用してはじめられた。また、九月十三日には、疎開先から集団疎開児童も帰校してきたので、本格的な開校が必要となってきた。当時の教職員は一七人、児童数は約五〇〇人で、人的にはほとんどの者が異状なく、一日も早く当校での授業開始を切望していた。十月五日、当校は

被爆者収容所としての役割が解かれ、残留負傷者は仁保国民学校(日本医療団病院仁保病院)に移されたので、父兄も一緒に学校内の大掃除をやり、中旬ごろから当校での授業が可能となった。幸い、校舎も学区内の各家庭も大きな被害をこうむらなかった関係で、児童用の教科書および学用品については、各自が持参していたのを使用して授業が進められた。

なお、昭和二十一年五月十四日から、破損した校舎の修理が開始された。昭和二十五年九月には、学校復興資金百万円の寄附募集をおこない、これが校舎の修理並びに教育設備品の拡充に大きな役割をはたした。

第二十四項 広島市矢賀国民学校…238

(現在・広島市立矢賀小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市矢賀町八四四番地
校長 田中稔
教職員 八人
児童 概数二三〇人
校舎 木造七教室・延一六二坪
敷地面積 五六〇坪
爆心地からの距離約 三・七キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年七月十六日	佐伯郡河内村	四人	一二〇人	不明	

三、学徒動員状況

なし

広島市矢賀国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

四、指定避難先と経路

避難先は、学校の北方約三〇〇メートル先の覚法寺に指定されていた。

五、校舎の使用状況

学校が災害時の第一救護所に指定されていたから、外傷用医療器具及び医薬品が、少量保管されており、救急措置について、婦人会が日ごろから実習していた。なお、軍隊関係は使用していなかった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
なし	一人	〇人	一人	被爆当日は学校休業中につき、児童の登校はなかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…小破

当校は爆心地から東北東約三・七キロメートル離れており、原子爆弾炸裂による被害は、校舎南側の窓ガラス全部が破損し、階下西端の特別教室の天井が脱落、また、校舎内各所の壁に亀裂を生じた程度のものであった。しかし、幸いにも校舎内からも、また、学区内からも火災の発生はなく、各生徒の家庭も、被害は比較的に少なく、人的被害は無かった。

八、被爆後の混乱

(一)児童に対する緊急措置

被爆後、学校としては、各家庭ごとに児童の異状の有無を調査したところ、被害軽微で異状がなかった。

しかし、父兄の中には、広島市内に出ていて被爆し、重傷または死亡した人もかなりあったから、疎開先にその家庭の児童を連れに行った。なお、集団疎開児童は、九月十日に全員を帰校させた。

大混乱のなかにも、学校の機能は、停止するようなこともなく、全教職員および児童も健在で、疎開先からも無事に帰校した。しかし、学校は一般被爆者の救護所として解放していたため、九月になっても授業を始める教室がなかった。

(二)応急救護所としての役割と概況

被爆当日、全校舎を解放して一般被爆者約一五〇ないし一六〇人を収容した。その後も負傷者が続々と収容されたが、二、三日頃から死亡者が続出、初日は約三〇数体を焼いた。のちに十月六日、医療団矢賀病院を学校内に置き、引続き負傷者の治療がおこなわれた。この頃、各教室に分散していた負傷者を一教室にまとめて収容し、十一月一日からは患者の診療のみとした。昭和二十二年六月十五日までは引続き当校の一教室が治療室にあてられていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

学校は被害も少なく、学区内の家庭も火災を起こした所はなく児童も無事であった。昭和二十年九月十日、疎開地から児童全員が帰校したので、開校はすぐにもできる状態にあったが、全校舎が負傷者の救護所に使用されていたため、教室の使用ができなかった。そこで対策協議の結果、鉄道工機部の寮・覚法寺および中組・下組の青年会館の四か所を借用することができたので、九月二十五日に第二学期として分散授業を開始した。

十一月一日になって、校舎の六教室と職員室一室とが使用できる状態となり、児童は全員学校へ引揚げた。九月二十五日の二学期開始当時の当校教職員は八人で、児童は約二三〇人程度であった。

[第二十五項 広島市江波国民学校](#)…243

(現在・広島市立江波小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市江波町二ノ割九八ノ二
校長 本田亮作
教職員 一四人
児童 概数五五〇人
校舎 木造二階建・二〇教室・延五八四坪
敷地面積 一、六〇四坪
爆心地からの距離約 三・七キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十三日 昭和二十年四月十五日	双三郡吉舎町安田一寮 双三郡吉舎町 三寮 双三郡八幡町 二寮	教員一二人 寮母 七	二五人 一四五	二四八人	疎開地には、その後、 各収容所ごとに、一人 の教職員を増加した。
合 計		一九	一七〇	二四八	

広島市江波国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

特になし

五、校舎の使用状況

若干の軍隊がいたようであるが、確定的なことは不詳である。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
平日授業	八人	五・六年 六一人	三人	学区内において、次のとおり授業所を分散していた。 三・四年生 広島漁業会江波支所…七四人 二年生 長月院…九〇人 一年生 海宝寺…七八人

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…小破(一部は全壊)

当校は爆心地から南々西約三・七キロメートル離れており、原子爆弾炸裂による被害は全体的に小破程度であった。即ち、校舎窓ガラスなどは飛び散り、座板には穴があいて、階上の床からは、階下の見える危険な所がたくさんあった。また、古い教室などで、爆風を受けて、四教室が完全に倒壊したが、幸い火災は発生しなかった。また、学区内からも火災は発生せず、被害も小破か中破程度であった。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	〇人	〇人	
重軽傷者	〇	六(軽傷)	
行方不明者	〇	〇	
計	〇	六	

校舎は軽い被害を受けただけであり、登校していた児童も、数人のものが軽傷を負った程度であった。被爆後、登校していた児童は全員帰宅させたが、教職員は学校に踏みとどまり、万般の警備にあたった。

八、被爆後の混乱

原子爆弾炸裂後、小破程度の被害のみで残った当校には続々と罹災者が集合し、またたくまに講堂および、教室は満員になった。うめく者、死ぬる者などで地獄さながらの状態が毎日続き、広島陸軍病院江波分院から医療班が派遣されて、約七、八〇〇人におよぶ収容負傷者の治療にあたった。しかし、死ぬる者が続出、死体置場に定めた一教室は、たちまちのうちに死体でうずまった。罹災者は、校舎の板壁などをはぎ取って、焚き物にしたり、書類を薪がわりにしたりして、秩序も何もなかった。また、時には運動場の片すみが火葬場になったりしたこともあった。本校校長みずからは学校に泊り、他の教職員もできるかぎり出勤して、校舎の警備と、火災発生のないように精一杯つくした。このような収拾つかない悲惨な末期的な状態が、同年十月六日、日本医療団病院として当校が指定されるまで続いた。

なお、日本医療団病院は、昭和二十二年十一月に解散することになり、翌二十三年三月、広島県へ移管された。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年十月二十一日、ようやく開校する運びとなったが、医療団が校舎の一部を使用している関係で、利用できる教室は八教室であった。そのため、二学級を一学級に圧縮したりして授業を始めた。

しかし、いずれの教室も、窓ガラスなどは全部なく、座板は破れて穴があき、階上の床から階下の教室などが見える状態であったから、各自がガラス戸を持ちよってきたり、応急的な修理をしたりした。酷寒の冬を迎えてからは、始業の時刻をおくらせるなどして、ふるえながら授業をおこなった。当時の教職員数は一四人、児童数は約六五〇人程度であった。

その後、爆圧による校舎建築のゆるみなどで、危険も感じられ、補強の副え柱などがとりつけられた。

なお、当校学区内は焼失地域でないため、古い教科書を使用できたが、用紙などの消耗品類には困った。しかし、他の焼失地区の各学校にくらべれば、全くよかった方である。

(現在・広島市立宇品小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地(本校) 広島市宇品町六丁目四三

(分校) 広島市元宇品町

校長 香川軍二

教職員(本校) 四五人

(分校) 四人

児童(本校) 約一、四〇〇人

(分校) 六〇人

校舎 木造二階建・(本校)四八教室・(分校)四室

敷地面積(本校) 一、〇七四坪

(分校) 七八坪

爆心地からの距離 約三・七キロメートル

広島市宇品国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十三日	双三郡三次町 双三郡布野村 双三郡作木村	約二五人	約四二〇人	約九〇〇人	七月二日および八月 三日に追加疎開を実 施した。
合 計					

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

(一)元宇品町…めがね橋を渡り分教場へ

(二)丹那……丹那橋を渡り丹那穴神社へ

五、校舎の使用状況

講堂は入れ替りたち替り、終始軍隊が使用していた。四棟のうち一棟は、暁部隊が約四〇〇～五〇〇人駐屯し、一部は被服庫として使用した。

昭和二十年五月二十四日、元宇品町の分教場にも軍隊が駐屯した。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
職員朝会、作業	一八人	一〇数人	数百人 (軍隊)	在校児童一〇数人は、作業のため登校した (六年女子)

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況……小破

当校は爆心地から南方へ約三・七キロメートルも離れているが、それでも窓枠やガラス戸が飛散し、屋根瓦の一部は吹き飛ばされ、瓦の一部の配列は乱れて、屋根を葺きかえなくては使用不可能になった。また部分的に柱が折れるという事態も生じた。特に第二校舎にその被害が大きかったが、これは爆心地に面した最も長くて、最も近い建物というところがらであろう。しかし、総体的にみて構造上の被害よりも、造作的な被害が多く、被害が小破の程度にとどまったのは幸いであった。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
重軽傷者	四人	七人	

炸裂当時、登校していた児童は、一〇数人であったから、負傷していない児童は、教師が直接引率して帰宅させ、負傷児童は臨時治療所である現在の宇品学園で応急手当を受けさせた。負傷は、大概爆風によって飛散したガラスの破片を受けたものであった。

八、被爆後の混乱

被爆後は、学校に児童を集めて学習を進めるような余裕もなく、また校舎自体も児童たちを収容できるような状態ではなかったから、児童はすべて家庭に任せ、教師は随時学区内を巡視して児童の指導に当たった。この間、教職員は学校の整備と管理に専念することとした。

また、香川校長は南竹屋町の自宅で被爆し、火傷のため出勤できなくなったが、堀池良雄教頭は、ガラスの破片による負傷程度であったから、校長代理として学校を管理し、教職員を把握した。したがって、通勤可能な教師約一〇人は堀池教頭の指揮下にあって、校舎の整備さえ完成すれば、何時でも開校に応ずることができる態勢にあった。

昭和二十年八月十七日、罹災者四人が第二校舎に宿泊したのをはじめに、病院や救護所を退院した者の第二次収容所となり、約四〇世帯・一三〇人ほどの人々が第二校舎に収容された。この状態は翌年の四月二十八日に、これらの人々が宇品の引揚者寮に移転するまで続いた。

九、学校再開の状況

学校の再開

開校までは、教職員だけがほそぼそと校舎の整備に当たったが、九月一日、開校後は教職員と児童とが、力を合せて校内の整備に当たった。瓦やガラスの破片が取除かれ、柱の補強や屋根の補修などの大仕事もおこなわれ、吹き飛ばされて壊れたガラス戸の代りにベニヤ板や油紙が用意された。

(第二学期授業開始と状況)

昭和二十年九月一日開校

教職員 教頭以下 一一人

児童 四三二人

なお、教室に不足することはなかった。

九月十二日、集団疎開児童二七九人が帰広したのをはじめに、縁故疎開児童も次第に帰ってきたため、学級を再編成する必要に迫られ、同年十月二日、新しい学級を編成し、担任を決定した。

しかし、開校はしたものの、校舎の不備や、食糧の不足などで意の如く授業はおこなえなかった。相当期間は、午前中は学校でおこなえる範囲での授業、自由学習・校庭のイモ畠の手入れなどで過し、午後は家庭において、家庭内の復旧作業に協力することとした。

また、当学区は、火災による被害がなかったので、児童たちは学用品が焼失することもなく、特別の配慮をする必要もなかった。他地区から焼け出されてきた者に対しては、児童間において助け合いをおこなうよう指導した。しかし、教科書については、開校当初は教科書による授業をおこなうことは少なく、そのうちに、占領政策により、既存の教科書はほとんど使用できないことになった。

[第二十七項 広島市古田国民学校…254](#)

(現在・広島市立大古田学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市古田町字古江一二七五の一

校長 宮沢静一

教職員 一二人

児童 概数五〇〇人

校舎 木造二階建・一八教室・延五五八坪
敷地面積 一、一四二坪
爆心地からの距離 約四・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

当校は市周辺の山間部にあり、特別に集団疎開は実施しなかったが、防空壕を作り、空襲時には避難していた。

三、学徒動員状況

なし

広島市古田国民小学校 学校敷地・校舎配置(略図)

四、指定避難先と経路

学校の周辺にある小山に防空壕(入口が二つあり、その間が約二〇メートル・奥行約一〇メートル・中約三メートル・高さ約三メートル)を構築して、それに避難することになっていた。

五、校舎の使用状況

理科教室を市役所に貸与し、物資の集積場として使用された。集積物品には、電球・のこぎり、医薬品などがあった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
児童全員登校して平常通りの授業予定(午前中のみ授業)	一二人	二四〇人	二人	

七、被爆の惨状

被害状況

(一) 校舎の被害状況…小破

当校は爆心地から西南西約四・二キロメートル離れた所の山間に位置していたが、爆心方向には障害物がなく、爆風によって小破程度の被害を受けた。すでに、老朽校舎ではあったが、校舎の柱が二、三本折れ、三つの教室では天井が落ちた。また、窓ガラスなどは、その大部分が破損した。しかし、火災は発生せず、学校機能に支障はなかった。

(二) 人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	〇人	〇人	
重軽傷者	〇	軽傷者 数人	
行方不明者	〇	〇	
計	〇	軽傷者 数人	

原子爆弾の炸裂による人的被害はほとんどなく、ただ二、三人の児童が軽傷を負った程度であったから、全員を急ぎ西側山地にある防空壕に避難させた。その後、時機を見はからって全員帰宅させた。

八、被爆後の混乱

学校としての機能にさしつかえはなかったが、八月九日から県病院救護所となったから、校舎は教育の場としての機能を事実上停止した。収容所となっても、最初の数日は医師はおらず、全くの放任状態であったが、四日目にしてようやく医師一人が来校し、看護にあたった。学校に保管されていた薬品・脱脂綿などを出して、教員も看護にあたっていたが、死んで行く人々が日に増してきた。その死体の処理は、校庭に作られた臨時火葬場でおこなった。

九、学校再開の状況

学校の再開

当校は県病院救護所として、多数負傷者を収容したため、授業を行なうことは不可能であった。そのため、他の場所を探さなければならなかった。当局との交渉の結果、古田町山間にある鬼が城の旧陸軍兵舎・求道寺および氏神社の三か所を借受けて開校した。しかし、極めて不正常なものであり、正規の授業ができないので、毎日作業や遊戯などをしてすごすことが多かった。なお、当時の教職員数および児童数は被爆前と大差はなかった。九月末、当校の収容患者を草津国民学校に移したので、十月から、分散授業をやめて、本来の校舎に帰った。しかし、学用品の支給もなく、家庭にある古い学用品などを使用して授業を進めていき、教科書などについても、プリント教科書を代用に

使用した。

[第二十八項 広島市仁保国民学校](#)…259

(現在・広島市立仁保小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町一〇の割一〇三〇番地
校長 平原沢城
教職員 二一人
児童 概数七四〇人
校舎 木造二階建・二七教室、延一、一七五坪、鉄骨モルタル塗一・延一五四坪
敷地面積 四、四四一坪
爆心地からの距離 約四・二キロメートル

広島市仁保国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開 者概数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年五月二十七日	佐伯郡玖島（二か所）	五人	大町 } 一二〇人	〇人	善教寺ほか一か寺 大福寺ほか三か寺 打尾谷分教場
	佐伯郡上水内（四か所）	八	地方 } 二二〇 本浦 } 作木 }	〇	
合 計		一三	三四〇	〇	

三、学徒動員状況

学徒動員

事 業 の 区 別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
霞町軍用テント工場	広島市霞町	二	一五〇	テント部品制作	
鉄道電修場	広島市蟹屋町	一	五〇	電機関係	
合 計		三	二〇〇		

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

当校の北校舎(一六教室)全部を陸軍砲部隊に貸与し、兵員の宿舎として使用していた。また、理科教室には救命胴衣・毛布などがぎっしり保管してあったが、被爆後にいづこかへ持ち去られた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
八時 教員朝会、八時三十分 学区内の四集合所にて授業開始(一・二年のみ)	八人	二〇〇人	軍人関係の数は不明	当時、学校の三年生以上の児童は疎開地にあったが、一・二年生の児童は親のところに残り、学区内の四集合所で午前中のみ授業を受けていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況……小破

当校は爆心地から東南東約四・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂で、爆風によって小破程度の被害を受けた。すなわち、北側校舎の壁は相当にひどく破壊され、校舎の瓦も大部分がずれた。また、校舎および講堂の窓わく・ガラスあるいは建具類なども破損した。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	○人	○人	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者	(一)	(一)	
行方不明者	○	○	
計	(一)	(一)	

一・二年生児童全員は炸裂時には、いまだ家庭にあったが、児童一人は当日治療のため、比治山本町を通行中に被爆して、重傷を負いながらも帰宅した。また、教職員のうち一人は、登校中に稲荷町付近で被爆し、重傷を受け、のち死亡した。

八、被爆後の混乱

三年生以上の児童は集団疎開をしており、一・二年生児童はおのおの自宅にあって、学区内の集合所(四か所)で分散授業をうけていた。原子爆弾炸裂のとき、一・二年生の児童は、各自が近所の集合所で授業を受けるため、集りつつあったか、または未だ家庭にいた。

被爆後は、各家庭の保護者の監督にまかすと共に、一方では集団疎開児童との連絡にあたった。

当校は、さいわいにも人的には被害も極小であり、校舎も小破程度の被害であったため、機能は停止しなかった。しかし、校舎の過半は、被爆負傷者の収容所に使用され、学区内の各集合所も社会の混乱のため使用もできず、学校としての児童にたいする指導は一時中止された。この指導中止は二学期の開校まで続いたが、中止の期間中に時々教員で学区内の巡視を行ない、児童の状況を知ることに努めた。

また、被爆直後駐屯していた陸軍暁部隊の過半数は移動し、一部は市内の整理に出動した。校舎には、被爆者約四〇〇人が収容されて暁部隊がその治療にあたったが、数少ない教職員も、町の人々と共に可能な限り看護に当たった。その間にも、死亡する者が六〇人以上もあり、氏名の判明している遺体は、かけつけた遺族に渡し、不明の三四体は教職員もその火葬に協力した。火葬は猿猴川の堤防上・本浦火葬場のほか、運動場でも行なったが、死亡する被爆者は、時間がたつにつれて増加するばかりで、臨時火葬場(運動場)は超満員の状況であり、それに必要な燃料がなくなったので、焼夷弾よけに取除いて保管していた天井板まで使用して、火葬作業を続けた。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、児童の保護者と協議の上、修理費を捻出して、主として窓わくを中心に、ずり落ちた屋根瓦を修理したが、工事には約三か月を要し、完成したのは翌年の一月であった。原子爆弾による被害の軽少であった当校においては、収容者の減少により、あいた教室において、九月二十日ごろから、授業を開始した。しかし、十月六日から日本医療団仁保病院に指定され、大河国民学校の残留負傷者を再び収容したが、まもなく閉鎖されて、ようやく、本来の学校の姿を取戻した。

学校の開校は、九月二十日ごろであったが、疎開中の児童で、佐伯郡玖島方面に疎開した者は、九月十四日に引揚げて来たが、他の地区(佐伯郡上水内村)の疎開児童は、水害のため引揚げが困難となり、十月初旬に帰校してきた。当時の教職員数は二十一人、学級数は一八学級であった。

なお、学校も、児童たちの家庭も被害は僅かだったため、教科書は、別に入手のため苦心する必要はなかった。学用品などは各児童家庭で用意していた。

[第二十九項 広島市楠那国民学校](#)…265

(現在・広島市立楠那小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市仁保町字楠那乙三の五

校長 扇畑良雄

教職員 九人

児童 概数三五四人(初等科 二九八人、高等科 五六人)

校舎 木造二階建・一二教室・延五一七・五坪
敷地面積 一、二二三坪
爆心地からの距離約 四・五キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年五月十二日	比婆郡八幡村帝釈	四人	七九人	五人	
昭和二十年七月十八日		二	二五		
合 計		六	一〇四	五人	

広島市楠那国民学校 学校敷地・校舎配置(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
建物疎開作業	鶴見町	一人	一四人	疎開跡片づけ	竹屋国民学校に集って現場へ行く。

四、指定避難先と経路

- (一)学校から丹那に至り、丹那説教場
(二)学校から日宇那に至り、日宇那説教場

五、校舎の使用状況

当校校舎の講堂(七〇坪)・教室五(一〇〇坪)・給食室(六坪)・倉庫(六坪)などの計一八二坪は陸軍暁部隊に貸与されており、常時ではないが約五〇人前後の兵隊が駐屯していた。物資の集積品としてはコーリャン・米・麦・調味料・砂糖・酒・塩・菓子・衣料品・下駄・室内ばき・ボタン類・用紙類・ハサミ・カヤなどの物資が集積されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
高等科生徒は動員出動中であつたが、初等科児童は授業であつた。	七人	七〇人	不明	原子爆弾炸裂時までに登校した児童は、教室の清掃中であつた。

七、被爆の惨状

被害状況

- (一)校舎の被害状況…小破

当校は爆心地から南東約四・五キロメートル離れた市の周辺部に位置していたが、原子爆弾の爆風によって講堂・裁縫室の壁一部が落ち、校舎の窓ガラス約五〇枚が破損した。しかし、倒壊した建物などはなく、幸い校舎からも民家からも火災の発生はなかった。

- (二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	(一)人	〇人	()内は、動員先での被爆者数
重軽傷者	〇	(一)	
行方不明者	〇	〇	
計	(一)	(一)	

原子爆弾炸裂時、登校児童は急ぎ校内の各所の防空壕に避難し、被害は軽微であつた。

八、被爆後の混乱

被爆後は社会的混乱のため学校を八月二十日まで休業としたが、八月二十日から低学年児童(疎開児童を除く一・二年児童)の簡易授業を再開した。

当校は被害も小破程度であつたから、人的には被害もなく、火災も発生せず、学校の機能に支障なかった。しかし、被爆後、臨時救護所として使用された関係で、児童に対する授業は、一時中止せざるをえなかった。

学校は、暁部隊衛生班の臨時救護所となり、理科教室および廊下を治療所として、一般被爆者の応急手当がおこなわれ、階上教室などを仮病室として収容された。当校に収容した被爆者は約二七七人にのぼり、罹災証明書交付手続きなどについても多忙をきわめた。しかし、当校臨時救護所も八月二十一日まで開設されたのみで、その後は大河国民学校へ患者が移された。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月二十日ごろまでは、罹災者のために収容所として開放されており、また、社会混乱のために一時休校していたが、収容所が閉鎖された八月二十一日から、低学年児童のため簡易な授業を開いた。正式に第二学期としての授業開始は、九月三日からであったが、九月十三日、疎開先から児童が帰校して、はじめて、全員が授業態勢に入った。当時の教職員は七人、児童数は約三五四人であった。

第三十項 広島市草津国民学校…270

(現在・広島市立草津小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市草津東町
校長 山下究二
教職員 二三人
児童 概数一、一〇〇人
校舎 木造二階建・三〇教室・延一、二三九坪、鉄筋校舎一・延一四三坪
敷地面積 三、五九四坪
爆心地からの距離 約四・七キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集団疎開概数				縁故疎開者概数	備考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年七月二日	世羅郡吉川村 世羅郡上山村 世羅郡小国村	一六人	一七六人	二四九人	

広島市草津国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
建物疎開作業	市内小網町(土橋)	四人	一六七人	疎開跡片づけ	現場に行く途中(観音町土手付近)で被爆

四、指定避難先と経路

緊急を要する避難先として、当校の北方約三〇〇メートル離れた山の中腹の寺(広島市古田町の行者山海蔵寺)を指定していた。

五、校舎の使用状況

当時、校舎の一部(六教室・約九二坪)は、陸軍暁部隊に貸与されており、日頃は、約九〇人前後の兵隊が駐屯していた。また他の一教室(二〇・三坪)は県庁に貸与されて、県関係の物資(特に用紙類)が集積されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在校者数			備考
	教職員	児童	その他	
平日授業	二二	五一二	暁部隊員約九〇人	高等科男女生徒(一六七人)は、広島市小網町方面の建物疎開作業に出動

当校においては、学校外に四か所(学区内の寺一か所・会館三か所)分散授業所があり、当時、集団疎開をしない児童(三年生以下の低学年と、病気などで疎開をしなかった四年生以上の児童)を、計五か所の分散授業所に分けて学習をしていた。また教員は、本校での朝礼後、各受持の分散所に出張していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…小破

当校は爆心地から西南西約四・七キロメートル離れた市周辺部に位置しており、北側は山に囲まれてはいるが、爆風方向に向って延びた町であり、原子爆弾炸裂と同時に校舎窓ガラスの大半と、屋根瓦の一部が散乱した。また校舎内の壁や天井などの大部分が破損したり、落下したりして、小破程度の被害を受けたが、火災の発生はなく、学区内の家庭からも火災は起らなかったため、登校中の児童には、ただちに安全な措置をとることができた。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	○人	(二)人	()内は学校外(特に動員先)での被爆者数
重軽傷者	(三)	(七一)	
行方不明者	(一)	○	
計	(四)	(七三)	

炸裂による校舎の被害はあったが、登校中の児童(学校を分散授業所として通っていた一部の児童)の中には、幸い負傷者はなく、児童全員は、ただちに学校内の防空壕に避難した。その後、学校にも学区内の各家庭にも異状が見られなかったから、児童は急ぎ帰宅するよう指示した。また、学校以外の各分散所(四か所)の児童にも別段に異状がなかったため帰宅させた。

しかし、被爆当日、小網町付近の建物疎開作業に出動した高等科の男女生徒約一六七人は、作業現場へ急ぐ途中、観音町の土手付近で全員被爆し、約七一人の生徒が重軽傷を負った。そのため、引率教員はただちに、生徒全員を学校につれ帰り、負傷者は、応急手当をしてから帰宅させた。負傷の重い三人については、教員が家庭に送り届けた。

しかし、引率外の生徒(直接作業現場にむかった生徒)二人が即死した。

八、被爆後の混乱

校舎の被害も屋根瓦・窓ガラス・壁および天井などに小破程度の損傷を受けたが、倒壊校舎がなく、使用にはさしつかえなかった。そのため、全校舎はただちに被爆者収容所として開放された。市中から一般被爆者の群れが続々と避難してきて、校舎・講堂などには推定三、〇〇〇人以上の患者が収容され、学校側は校長・教頭および教員数人が毎日出勤して、これらの被爆者救護活動に従事した。当校が救護所として活動した期間中には、約二万人以上の被爆者を受け付けているが、死亡する者も多数にあり、九月末までの約二か月間に校庭において火葬を行なった数は、約二〇七体もあった。

当校は、昭和二十年十月からは広島県病院に指定されて、昭和二十三年三月の移転の日まで、七教室が病室に使用され、付近の医師が交替で患者の治療にあたっていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

第二学期としての授業開始は、平常通り昭和二十年九月一日であったが、集団疎開児童などの帰校も未だなく、また校舎の一部(七教室)は患者救護所として使用中のため、教室は一四教室を整備の上で使用し、教職員二二人、児童数約五四七人程度で授業が始められた。縁故疎開児童の方は、八月中旬ごろから九月初めにかけて帰校したが、集団疎開児童の帰校は、昭和二十年九月二十三日であった。

その後、世情の落ち着くと共に、破損校舎の修理もおこなわれ、授業も軌道に乗ってきた。教科書については、児童のほとんどが持っており、持たない者(約二〇人くらい)には、学校に保管中のものを使用させた。また、学用品などは家庭で各自が整えたり、市からの配給品を受けて学習を進めていった。

第三十一項 広島市青崎国民学校…276

(現在・広島市立青崎小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市仁保町青崎一八八の三番地

校長 佐藤茂
教職員 三〇人
児童 概数一、二〇〇人
校舎 木造二階建・二六教室・延八五〇坪
敷地面積 二、六四六坪
爆心地からの距離 約五・二キロメートル

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十四日	比婆群庄原町	一二人	二五六人	三七七人	四月から逐次疎開していた。
昭和二十年八月一日	比婆郡庄原町	一	一〇〇		
合 計		一三	三五六		

広島市青崎国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	二人	一六一人	機械部品製作	工場内の仕事が漸く減少したので、高等科一年生八六人は、更に市中央部の建物疎開に出動したが、往復の交通困難のため、八月四日で疎開作業を打ち切った。

四、指定避難先と経路

- (一)当校から青崎を経て、西県道を通り、向洋本町広場に避難する。
(二)学校から東青崎を経て、堀越広場に避難する。

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
職員会	一二人	一	一	当日は集団疎開を除く残留職員職員会を開くことになっていた。学徒動員に出動した生徒以外の児童は休日となっていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…小破

当校は爆心地から東南東約五・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂による被害は小破程度であった。しかし、校舎で西側に面した窓枠は半壊し、ガラス窓は全部がこわされた。また、校舎内からも、また学区内からも、火災発生がなかったから、被害も極小ですんだ。

(二)人的被害

原子爆弾の炸裂時、学校には児童はおらず、被害も窓枠・窓ガラスなどがこわれた程度の小さなもので、人的被害も無かった。

ただ、学徒動員により東洋工業株式会社に出勤していた高等科二年生の女子一人が、ガラスの破片で頭部に治療一週間の負傷を受け、すぐ大橋病院に収容し、家庭に連絡した。

八、被爆後の混乱

八月六日は、在校児童はなく、学区内もほとんど被害がなかったから、家庭や児童に対する心配はなかったが、当日、東洋工業株式会社に動員出勤していた生徒は、急ぎ会社から学校に誘導し、諸注意を与えて各家庭に帰らせた。

また、集団疎開児童に対しては、混乱はなかったが、家族調査名簿を調製して、疎開現地に家族の被害状況を連絡した。その後、八月三十一日に疎開地から帰校するように命令をだしたが、配車ができないため、すぐには帰ること

ができず、九月十四日になって帰校してきた。

なお、学校は原子爆弾の炸裂後、まもなく市中から一般被爆者が避難して来て校舎はたちまち収容所に早替りした。その後も負傷者が続々と収容され、各教室が、これら患者のために開放され、診察・治療・看護・給食の役割がほどこされた。当校収容所内での診察・治療および看護には、大橋年見医師(学校医)と看護婦二人、および学校全職員が昼夜兼行して従事し、また給食関係についても、職員が責任をもって、これにあたった。

当校の収容所としての役割は、被爆当日から九月末日までの五五日間であったが、その期間中、収容本部を職員室に設け、校舎の一三教室を開放した。被爆直後、応急収容所開設当初のころ、収容被爆者は約四、五〇〇人程度であったが、一日平均約一〇人くらいが死亡していったため、逐次、収容者は減少した。死亡者の処置については、警防団員がこれにあたり、校庭でつぎつぎ火葬し、納骨には工業教室を安置場所とし、氏名のはっきりした者は親族へ受渡し、氏名・親族などのはっきりしないものは市役所へ移管した。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎の一部は、九月末まで収容所として使用されたが、被爆当日に解放した一三教室も、逐次、収容人員が減少してきたため教室があいた。九月になってから、収容教室の後始末や、西側校舎のガラス窓などの補修を始めた。

九月二十五日から、第二学期としての授業が開始され、教室数は二六教室を整備した。しかし、工業教室だけは残留被爆患者の収容および納骨安置所として使用された。

授業開始期当時の教職員数は三〇人、児童は約八七七人であった。

第三十二項 広島市似島国民学校…281

(現在・広島市立似の島小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市似島字家下
校長 桧垣徳次
教職員 九人
児童 三八七人
校舎 木造二階建・一〇教室
敷地面積 延八五〇坪
爆心地からの距離 約九キロメートル

二、学童疎開状況なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児童	作業内容	備考
陸軍兵器補給廠似島弾薬庫	似島町長谷	一人	五人	弾薬運搬	
高射砲基地	似島町	一	五一	材料運搬	
合 計		二人	五六人		

広島似島国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

四、指定避難先と経路なし

五、校舎の使用状況

陸軍部隊の物資保管所として、理科教室が使用されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児童	その他	
六年以下普通授業	七人	二九〇人	一	高等科五六人は勤労働員で現地で作業、教師

				二人随伴。
--	--	--	--	-------

七、被爆の惨状

被害状況

爆心地の南面約九キロメートルにある当校は、被害は全く軽微で、ガラス窓が数枚飛散した程度であった。これは地形によって救われた点が少なくない。

したがって、児童に負傷した者はなかったが、ともかく急ぎ帰宅せしめた。

八、被爆後の混乱

児童に被害がなかったのは不幸中の幸いであったが、児童たちの家族には被爆者が多かったうえ、市内から来島した多数の避難者救護に奔走したけばならなかったから、授業は一時中止し、混乱も一応治まった十月に授業が再開された。

第三十三項 広島市第一国民学校…284

(現在・広島市段原中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市段原山崎町二八六番地
校長 金谷秀造
教職員 二二人(校長・教頭のほか男一五人・女七人)
生徒 概数六四九人
校舎 鉄筋・五教室・延二一三坪、木造二階建・二八教室・延九三九坪
敷地面積 三、九二五坪
爆心地からの距離 約二・六キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島第一国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
杉原縫製株式会社	広島市出汐町	一人	一五人	テント製作	
広島地方専売局	広島市皆実町	四	約一一〇	煙草製造	
昭和金属工業株式会社	広島市大洲町	二	約六〇	軍需器具の部分品製造	
児玉工業株式会社	広島市大洲町	二	約六〇	軍需器具の部分品製造	
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	二	約五〇	軍需器具の部分品製造	
三星製菓株式会社	広島市西蟹屋町	三	約八〇	軍需用携行食品製造	
駅前郵便局	広島市松原町	一	五五	郵便分配作業	
建物疎開作業	広島市昭和町	五	約一五〇	建物疎開作業跡片づけ	
合 計		二〇	約五八〇		

(註)この他にも出勤があったと思われるが、資料がなく記載せず。

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

当時、校舎の一部(工業教室四教室)にあった旋盤は、軍需工場の下請け作業に使用していた。また、校庭は、耕作用地として野菜・イモ類・カボチャなどの栽培に使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	

一、学校管理 二、勤労働員先の生徒への給食調理	二人	六人	小使い 一人 一人	全校生徒は動員先へ直接出動していた。
----------------------------	----	----	--------------	--------------------

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊(一部全壊)

当校は爆心地から東南東約二・六キロメートル離れたところにあり、原子爆弾の炸裂と同時に、北側木造校舎は東側校庭に全倒壊したが、西側校舎・東側校舎(鉄筋コンクリート造)・講堂などは、窓枠および窓ガラスが全部破壊されたのみで、幸い倒壊はまぬがれた。また、倒壊校舎からも、周囲の民家からも、火災発生はなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	(一)人	一 (四六)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	(九)	(約五〇)	
行方不明者	〇	(二)	
計	(一〇)人	一(約九八)人	

当時、生徒は学徒動員で軍需工場や市内の家屋疎開作業に出動していた関係で、在校生徒はなかったが、学校長・教頭・給食係女教員と給食係手伝い女生徒数人および現業員一人が在校していた。

原子爆弾炸裂の一瞬、北校舎の倒壊により学校長・教頭・現業員の三人は倒壊校舎の下敷きとなり、打撲や切傷を全身に受けたが、自力で脱出した。給食係の女生徒のうち一人は行方不明となったが、約一か月後校舎の倒れた下から発見された。

また、昭和町方面(爆心地から南々東約一・六キロメートル地域)の家屋疎開作業に出動中の教職員および生徒全員は、衣服を裂かれ、火傷したものの、吹きとばされて負傷したもの、或いは比治山橋付近まで逃げ延びて、灼熱の苦しさに川に飛びこんだ者や、流されて溺死する者、逃げ延びる途中で、力つき倒れる者などがあって、凄惨の限りをつくし、その正確な死亡者数はつかめなかった。引率の教員も全身に大火傷を受けた。

教職員のうち七、八人が病床につき、十一月ごろまで加療静養した。

八、被爆後の混乱

被爆直後、急ぎ動員先の状況調査を行なったが、軍需品下請工場に動員されていた生徒は、その動員先が爆心地から約三キロメートル以上離れた比治山より以東の地域の出汐町・大洲町・西蟹屋町方面であった関係上、人的には全員無事であったから、それぞれ帰宅を命じた。

翌七日から、残存の宿直室を仮事務室として、生存教職員で勤務し、被害調査を開始した。前述のとおり市内軍需品下請工場に動員出動中の生徒は被害がなかったが、昭和町の家屋疎開作業に出動していた生徒は、突然の大事態発生で、一瞬にその規律が破壊され、火傷者や負傷者が続出し、各自がチリチリとなって逃げたから、その被害の究明は困難を極めた。校舎内の備品なども使用可能なものはほとんどなく、また、教職員をはじめ、生徒の家庭も多くは無残に破壊されたから、学校としての機能は、まったく一時停止した。

この学校に収容された火傷者の写真が現存するが、幸い当校は、被爆後火災も起らず、焼失しなかったから、一部の校舎(講堂・工業教室)は多数負傷者の救護所として使用され、十月まで収容されていた。また、校地の一部が仮火葬場として使用された。

九、学校再開の状況

学校の再開

残存校舎の講堂・工業教室は、一般の被爆者の救護所として、十月の上旬まで使用されていたが、救護所解散後に教室を整備して、十月中旬ごろから開校した。臨時の仮教室として講堂・工業教室・西校舎を当て、使用し得る机・腰掛を集め、応急措置をほどこして開校することにした。すなわち、一年生、および二年生を各二学級ずつに編成して教員一〇人余りで授業を開始した。生徒は一・二年生全部で約一〇〇人くらいで、教室数は八教室(講堂内を区分した二教室を含む)を使用し、工業教室の一部は職員室・事務室に使用した。

学用品は、各自あり合せのものを使用していたが、後に市から配給されたものを分配して与えた。教科書は、臨時印刷の仮教科書の配給を受けたが、部数が足りないので、数人が共同で使用した。しかも用紙の質が粗悪なため破損しやすくて困った。また、指導も極めて困難で能率もまたあがらず、学力は低下の一途をたどった。

疎開作業隊の惨禍

増田 勉

昭和二十年八月初め、建物疎開の後片づけをするよう動員指令が学校に来了。作業場所は、比治山橋西側のたもとの南一角である。

この頃、二年生の男女生徒と一年生の男子生徒は、すでに各軍需工場に出動していて、学校に残っていたのは、一年生の女子だけであったから、これが作業に出ることになった。

八月六日朝七時ごろ、女教師四人(武田初子・富田富枝・川崎雪・山根ヨシ)及び私の計五人が、女生徒一五〇余人を引率して、目的地に向った。その途中、警戒警報が発令されたため、比治山の多聞院の前の道ばたに、一時避難した。しばらくして解除になったので、列を整えて目的地に到着した。

目的地の作業現場は、すべての建物が取払われたあとで、大きな材木などはすでに一か所に集積されたり、持ち去られていて、その残りの木切れなどが散在していた。その木切れを拾い集めて整地するのが、われわれの作業であった。国民学校高等科の子どもながら、みんな一生懸命に作業にあたった。

作業を開始して、一五分ばかりたったころであった。生徒たちが集めた木切れの山に、火をつけて二、三分したとき、そのゴミの山の中に火薬があったという印象を受ける爆発が生じた。まったく異様な爆発で、反射的に危険を直感した。

「しまった！」と思いながら、すぐ伏せた。しばらくして体を起し、すぐそばの京橋川の土手に上ると、現在の原爆ドーム付近に大きな火の玉が落ちていくのが見られた。そばの川岸につないである筏には、すでに、武田先生と一〇数人の生徒がへばりついていて。周囲を見廻すと、その他には、「自分のそばに爆弾が落ちた。」と言いながら逃げていく市民のほかは、生徒の姿も引率した先生の姿も見あたらない。みんな、バラバラに散ってしまったのであろう。その時、五、六人の生徒が「先生！助けてッ」と叫びながら、南の方から両手をひろげて、私の方へ駆け寄って来た。おカッパの髪はボサボサにさばけ、灰色の埃だらけの顔をしている。一瞬にして、この無残な姿！ 誰が予想し得たであろうか。私は、すぐに比治山橋を渡って、比治山公園の方へ避難するように指示したが、それが精いっぱいのものであった。生徒たちは私の指示どおりに逃げて行ったが、その後どうなったのであろうか。

土手を下りて、私は再び作業していた広場に行き、付近を一巡してみたが、その場に倒れている生徒は一人もいなかった。また、市民の姿も見あたらなかった。

作業現場に五、六本残っていた庭木の下に置いていた看護カバンが、偶然にもそのまま残っているのを見つけたので、カバンから繃帯を取りだして、負傷している足に巻き、ボロボロに裂けたシャツのまま、比治山橋を渡って、なんとなく東の方へ向った。

ついさっきまでたくさんいた生徒が、突然いなくなって、独りぼっちになった私は、ガクッと気が滅入り、わけの判らぬまま、ただトボトボと歩いて行った。無数の避難者の行列の中に私も加わり、安全と思われる段原の方へ出て、尾長へ向い、大内越峠を過ぎ、中山へ出て、太田川沿いに更に北上し、川を西へ渡って、夕方近く安佐郡安村の親類の家に辛うじてたどりついた。家にあがるや否や私は倒れ、そのまま一週間、意識不明であった。その後一か月寝たきりで、二か月日からようやく杖をついて歩きはじめ、三か月たって学校に出ることができた。

後日、判ったことであるが、比治山の防空壕に避難して、そのまま死んでいったであろう生徒や、家にたどりついて、何日かたって死んだものなど四六人の生徒と、三、四日後になって亡くなった富田先生の、ありし日の姿がしのばれてならない。

[第三十四項 広島市第二国民学校](#)…292

(現在・広島市立観音中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南観音町二丁目

校長 橋本千代

教職員 約三五人

生徒 概数一、三〇〇人

校舎 木造二階建・二九教室・延約一、〇〇〇坪、鉄筋・六教室約一〇〇坪

敷地面積 五、〇四四坪

爆心地からの距離 約二・四キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島第二国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備考
大和重工業株式会社	広島市南観音町三丁目	二人	約一〇〇人	鋳物の型ごめ	
昭和金属株式会社	広島市観音本町	一	約五〇	飛行機の部品製作	
広島印刷株式会社	広島市南観音町二丁目	四	約二五〇	印刷	
帝国兵器株式会社	広島市吉島羽衣町	一	五〇	雑役	
広島電鉄株式会社	広島市千田町	一	五〇	修理塗装等	
大木印刷株式会社	広島市古田町古江	一	五〇	タンサン紙製造	
熊野空缶株式会社	広島市舟入南町	二	五〇	空缶の洗浄	
建物疎開作業(県庁の北側)	広島市木挽町	五	約二五〇	疎開跡片付け	
小原製菓株式会社	広島市下水主町	三	一五五	菓子製造	
逓信局	広島市広島駅付近	一	五〇	書類整理	
合 計		二一	約一、〇五五		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
全校二三学級中、五学級は建物疎開作業に出動、他の一八学級は学徒動員として工場に出動中であった。	約八人	三五人	一人	生徒三五人は、満蒙義勇軍候補者で、学校において、農業指導中のもの。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊

当校は爆心地から西南西約二・四キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂によって校舎の二階教室などは、天井が落ちて使用不可能となり、一階の東側教室などには、柱の折れた所も数多くあった。また、ガラス窓は全部こわれた。しかし、火災は発生せず、焼失はまぬがれた。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	(六)人	(約二五〇)人	()は学校外での被爆者数
重軽傷者	(二)	(五)	
行方不明者	〇	〇	
計	(八)	(二五五)	

炸裂時の在校者及び生徒は少数であり、校舎被害も半壊程度で、全員が無事であった。また、学徒動員として市内南観音町の大和重工業株式会社に勤務していた生徒たちも異状はなかった。

しかし、建物疎開作業に出動していた教員および生徒は、大きな被害を受けたが、担任の教員が即死したので動静が不明であった。被爆の翌日、木挽町の作業現場へ急ぎ調査に行ったが、生徒の着ていた衣服は焼け、死体の確認は誰一人できなかった。また、川の石段に生徒が死んでいたことから、大部分の生徒は火傷のまま、川の方角に避難したものと推定された。この調査の結果、生徒約二五〇人のうちで氏名の確認できた者は、被爆後、福島町方面に避難していた三人のみであった。

八、被爆後の混乱

南観音町の大和重工業株式会社に出勤していた生徒は、全員が数メートルないし一〇数メートルも吹き飛ばされた

が、急ぎ人員点呼をして、負傷個所の手当をした。生徒の大部分が住んでいた観音町付近は焼けているので、工場に待機させ、昼食後、預金通帳を渡し、それぞれ帰宅させたが、もしも親と会えない時は、指定の避難先に行くことを指示した。例えば、南観音町の者は佐伯郡の廿日市町へ、その方面に避難した親のもとに行くことをすすめたが、それでも親に会えない時は、工場に帰って来るように指示した。なお、引率の教員は工場の防空壕に連絡所を設置して、生徒の動静や家庭との連絡につとめた。

被爆当時は、全生徒が学徒動員として、工場および家屋疎開作業に出動していたから、学校には校長・教頭・次席教員・女子上席教員・養護教員・小使および生徒三五人(男子・満蒙義勇軍候補者)しか残っていなかった。これら生徒は炸裂時に、一たん防空壕に避難したが全員無事で、教員の指導のもとに、校内に避難してきた一般市民の看護に当たった。その後、当校が仮救護所に指定され、さらに多数の被爆者が収容されたので、教員は、当校の工業教室に収容者の連絡所を設けた。当時、戦時における緊急避難救護所としては、観音国民学校(当時の東北東三五〇メートル)が指定されていたが、全焼したので、代りの救護所として当校が利用された。当校の校舎も被害を相当に受けてはいたが、総体的にみて半壊程度の被害で、火災も起らず、一時的救護所として罹災市民を収容し得る教室は幾つか残っていた。使用された教室は、講堂(約一〇〇坪)・理科室(約二八坪)・教員室(約二八坪)・教室三教室(約六〇坪)・家庭科教室(約二八坪)などである。

九、学校再開の状況

学校の再開

戦時における緊急の場合には、転居先などについては、速やかに学校に連絡するように、日ごろから生徒に指示していたから、被爆後は学校に連絡所を設け、各学級生徒の行方不明者・死者・転居先などの明確な把握に努めた。また、学校としては、急ぎ工業教室を学校側が使えるように整備し、窓枠などには紙をはった。このようにして、学校整備も少しずつ進み、昭和二十一年には木造校舎の半分について改築をはじめ、完全に使用できるようにした。しかし、教員の大部分は住居が焼失したので、九月からの二学期開始にあたり、出勤した者は、学校長・男子教員五人と女子教員二人の計八人であった。生徒の大部分も、親・兄弟および家庭を失った者が多く、田舎に転居した関係で、二学期になって集った生徒は約一〇〇人程度であった。学校としては、これら生徒を四級(高等科一年男子一組・女子一組、高等科二年男子一組・女子一組)に編成して授業をはじめた。

教科書は部数が少なかったから、教員用として使用した。生徒は、広島印刷株式会社が学校に疎開していた用紙を、ノート代用にして使用させてもらった。

第三十五項 広島市第三国民学校…298

(現在・広島市立翠町学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市翠町一七九六番地

校長 迫隆一

教職員 一八人(右のうち、被爆時の在校教職員は校長・教頭・その他職員各一人と、雇員四人。その他は応召中のものと一人は出勤途上、また一人は動員に参加中であつた。)

生徒 約三一〇人(もともと一、一〇〇人定員の学校であつたが、縁故疎開して減少した。被爆時には、流下式塩田を作る作業のため生徒約一〇人が登校、その他はすべて出勤中であつた。)

校舎延面積 本館二階延一、四八三坪・工業教室二二四坪・倉庫三一坪・宿直室三一坪・便所四九坪、
計一、八一八坪(ただし、剣道場を除く)

敷地面積 約五、三〇〇坪

爆心地からの距離 約三・二キロメートル

広島市第三国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学生疎開状況

学生疎開

集団疎開…なし

縁故疎開…約八〇〇人(退学者を含む)

高等科は、義務教育でないから、疎開命令は出なかったが、自発的な疎開や退学した児童が多かった。

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	児 童	作業内容	備 考
建物疎開作業	広島市雑魚場町	八人	二〇九人	疎開跡片づけ	教員六人・児童一四三人死亡
中国配電株式会社	広島市立町	一	二〇	電気工事	教員一人・児童九人死亡
東洋製缶株式会社	広島市広島市天満町	}	}	兵器部品	死亡なし
熊平金庫株式会社	広島市宇品町				
広島瓦斯株式会社	広島市皆実町				
合 計		一二	約二九九人		

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

学校は本館北側一階の教室、および東側工業校舎の南半分を、暁部隊が使用しており、他はすべて空室であった。

ただし、当日、間借していた広島市立第二高等女学校の生徒が、月一回の登校日にあたり、約五～六〇人登校して、本館二階の西側教室にいた。

六、当日朝の学校行事予定

塩田作りのほか、校内では、予定がなかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊

本館をはじめその他の校舎すべて、戸や窓はこなごなになって飛散し、屋根瓦はみな落ち、廊下は浮きあがり、柱などもはずれたところがあった。防災措置として、すでに天井はすべて取りのけられていたが、とにかく校舎の形骸だけは残った。ただ、運動場南側の仮剣道場が全壊した。火災は幸いに発生しなかった。

(二)人的被害

校内にいた者は、建具やガラスの破片で負傷した。第二高等女学校の生徒も大半が負傷し、血を流していたが、即死者はなかった。ただちに、生徒をみんな防空壕に避難させ、一人ずつ負傷の状況を記録し、グループに分けて、それぞれ帰宅するよう指示した。市街地全域が被爆していたことは、後で判ったことであったが、生徒の中には、家に帰れないで学校に引返して来たものが多かった。

一方、建物疎開作業で市役所東側の雑魚場町現場に出動していた生徒二〇九人のうち、その約半数が学校に帰って来たが、生徒たちは、顔面や手足に火傷を受け、頭髮も熱線の直射を浴びた部分は完全になくなり、すでに火ぶくれとなっていた。皮膚は剥げて垂れさがり、両手を胸まで力なくあげ、衣服はボロボロに裂け、まるで幽鬼のような姿であった。フラフラと頼りなく歩き、名前をきいてみてはじめて、それが誰かが判別できた。救護所を求めて歩いて行く者や、車で運ばれて行く者がたくさんいたが、大半はその日のうちか、二、三日のうちに死んだ。その数一四三人に達した。雑魚場町の作業現場で被爆し、恐しさのあまりただ走り続け、江波方面へ向った女子生徒の集団もあった。なかには、気がついたときには、佐伯郡廿日市町まで走っていたという者もいた。

また、中国配電株式会社(立町)に出動していた者は、炸裂直後、チリチリになって上職町の泉邸(現縮景園)方面その他へ逃げたが、ここでの犠牲者は即死者を含め、引率教師一人と生徒九人であった。その他の会社工場に動員中のものも、大半がガラスの破片その他で負傷したり、火傷をおったりした。このほか、行方不明者はいなかった。

人的被害を集計すれば、次のとおりである。ただし、負傷者の数は、厳密に言えば、次表の数をずっと上廻ると言えよう。

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	七人	一五二人	上の数はすべて動員中の犠牲者である。
重軽傷者	重傷 二 軽傷 七	重傷約八〇 軽傷約五〇	
行方不明者	〇	〇	

計	一六	二八二	
---	----	-----	--

八、被爆後の混乱

被爆後、登校可能な生徒はきわめてわずかで、自然休校のかたちとなった。ただ一人、ある生徒は、被爆の日から一日も欠がさず登校し、惨状目にあまる校舎の整理に、教職員らと一緒にずっと働いた。

校舎そのものが使用できる状態でなく、生徒も前記のような状況であったから、被爆後しばらくのあいだは、学校の機能も停止して、校舎の整理だけをしていた。

なお、当校から陸軍共済病院が近く、南側には軍隊が駐屯していたから、救護所にはならなかった。軍隊は、その後もしばらくいて校舎を使用した。

九、学校再開の状況

学校の再開

(一)貼紙により、八月二十三日、生徒に登校させ、生存の確認をおこない、全般の被害状況を調査し、その後の計画をたてた。

(二)九月に入って、第二学期の授業を開始したが、復旧の仕事に追われ、普通の授業を進めることは困難であった。

(三)学用品や教科書は、教職員・生徒ともに手を分けて集めることにつとめた。

[第三十六項 広島県立広島師範学校男子部附属国民学校](#)…304

(現在・広島大学教育学部附属東雲実小学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町一九四六番地
主事 是常正美
教職員 一五人
児童 二五一人
校舎 広島師範学校に併置されていたので同校との合計坪数
木造二階建・三四教案・延三、三四三坪
鉄筋コンクリート建・六教室・延五七九坪
敷地面積 一二、八四〇坪
爆心地からの距離 約三・八～四キロメートル

広島県立広島師範学校男子部付属国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童		
昭和二十年四月十五日	比婆郡敷信村	嘱託医二人		一五五人	延命寮 西林寮 円福寮 成善寮
	〃 大字新庄西光寺	七	四四人		
	〃 大字板橋西林寺	七	四二		
	〃 大字実留円福寺	八	四一		
合 計	〃 大字高門成善寺	五	二三	一五五	
		二九	一五〇		

児童授業校 比婆郡敷信村 敷信第一国民学校
国分教場
敷信第二国民学校

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

不明

五、校舎の使用状況

本校児童・師範学校生徒のほか、昭和二十年六月ごろから、陸軍高射砲部隊(ほぼ一個中隊)が南校舎の一階全部(六教室)を使用していた。この部隊は、戦後の九月七日午後五時撤去した。また、昭和二十年春から雨天体育館を陸軍被服支廠の被服倉庫として使用していたが、内容は極秘にされていた。後に空挺部隊用品であることが判明した。

六、当日朝の学校行事予定

夏休み中、残留児童は地域別に寺子屋式授業をやっており、八月五日(日)が学校に集合する日であったから、六日は代りの休暇としていた。

被爆時の在校者は教官一人・使丁二人であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…小破

本校は爆心地の東南東約三・八～四キロメートルの地点に所在しており、校舎の被害は小破程度であった。しかし屋根は爆風によって、瓦の吹き飛んだ部分が多く、窓ガラスはほとんど破壊され、窓枠も損傷を受けた部分が多く、ほとんどの天井は吹き上った。

(二)人的被害

教官の大多数は集団疎開地にあったが、残留教官のうち登校中であった川崎・上河内・井上訓導は被爆負傷し、たまたま疎開地から連絡のために帰校して、職員室で執務中であった内藤訓導、および是常主事は軽傷を負った。上河内訓導は重傷で兵器支廠に収容されたが、翌日死亡した。川崎訓導は宿直室に収容された。

児童は登校していなかったので、学校においての死傷者はなかったが、各家庭において被爆した者は相当数にのぼるものと思われた。

八、被爆後の混乱

被爆後直ちに学校の警備と共に復旧案を検討したが、人員の不足、校舎の破損、被災者の臨時宿泊、教官の負傷、死亡した教官の収容など、当面の応急事務に追われていた。軽傷の是常主事が登校して指揮をとり、奥村訓導は、学校に宿泊して、警備ならびに諸連絡に当たった。

地域別に開いていた寺子屋式授業も中止せざるを得なくなり、学校の機能は全く停止した。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月二十二日 残留児童登校。一・二年生、家庭調査を行なう。

八月二十三日 残留児童登校。是常主事疎開地へゆく。

九月一日 児童約五〇人登校。

九月四日 河野訓導、疎開地から児童を引率して帰校、それぞれ児童を家庭に送り届ける。

九月五日 工谷訓導、疎開地から児童を引率して帰校、家庭へ送り届ける。

九月七日 児童登校、校舎内外の清掃。軍隊撤去午後五時。

九月十日 児童召集。

九月十一日 新田寮母、児童一人(女子)をつれ帰校、引取人あるまで学校に宿泊させることとする。

九月十五日 登校児童約一〇〇人、六学級に編成し、南校舎を充てる。

学級担任…初一・早志 初二・山本 初三・青木 初四・皆森 初五・奥村 初六・多田

九月十七日 登校日、約七〇人。当分の間雨天の際は雨もりはげしく休校となす。

九月十九日 六〇人登校。第一校時 授業。第二校時 作業。

九月二十日 九〇人登校。第一校時 授業、あとは作業というのがこのところ続けられる。

九月二十七日 広島市校長会開かれる。

九月二十八日 一・二・三と、四・五・六と三か年複式編成とする。

十月十一日 第二学期入調。

十月十二日 担任決定をおこなう。

十月十三日 複式をとぎ、各学年別となる。初一・多田 初二・奥村 初三・河野 初四・山本 初五・安田

初六・工谷 本館階下の修理。

十月十九日 登校者はなはだ少なし、二〇人。

十月二十四日 保護者会および幹事会を開催。

十一月十五日 全学年授業を実施。

十一月十九日 学童の疎開荷物広島駅に到着、保護者に引渡す。

第三十七項 広島陸軍偕行社附属済美国民学校…310

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市基町三番地

校長 井上博

教職員 一九人

生徒 児童概数一五〇人(疎開児童を除く)

園児概数一〇〇人

校舎 木造一八教室・延五五〇坪

敷地面積 一、五〇〇坪

爆心地からの距離 約七〇〇メートル

校史概要

済美学校は、その源を遠く明治五年(一八七二)二月の私立開成舎創設(旧城内・能美円乗創立)に発する。校舎は、中島本町の慈仙寺鼻・播磨屋町と、転々と場所を変えたが、内容は次第に充実をしてきた。

明治二十一年(一八八八)、第五師団長(野津道貫)は、軍人子弟教育のため、この開成舎を選んで、能美円乗校主と交渉の結果、県知事(千田貞暁)の許可を得て、ここにはじめて、軍人子弟教育のために特別科を設置することとなった。特別科の始業式は同年十月二十四日舉行せられ、やがて明治二十四年九月には幼稚園も付設せられて、新しい教育への歩みは着々と進められていった。

明治二十六年十一月二十八日、当校は済美学校と改称され、陸軍偕行社の経営に移った。翌二十七年一月八日の陸軍始めの当日、開校記念式を挙行し、以後、この日をもって開校記念日と定められた。

校舎校地の変遷については、記録が不備で詳細不明であるが、当時播磨屋町にあったものと思われる。その後、旧西練兵場東端、基町の一角に移り、明治三十七年に、ドイツ式の特長ある外廊下の校舎が新築された。

本校の歴史を通じて顕著なことは、皇室から数々の殊遇を得たことであり、その創立の趣旨から考えて広島在住軍人の子弟の就学が主となったことは当然であるが、一般人の入学も許可していた。学級の構成は、各学年の男女を各一学級とし、一学級の児童数は四〇人ないし五〇人程度の編成とした。従って全校児童数は毎学年度だいたい五〇〇人ないし六〇〇人程度で、教職員は嘱託講師やその他を含めて、ほぼ二〇人余りの規模であった。卒業生の進学率は毎年極めて高くほとんど一〇〇パーセントに近かった。

男子卒業生は明治三十四年済々会、女子は同三十六年済美会なる同窓会を組織し、相互の連絡親睦をはかってきた。

昭和二十年十二月十日廃校となったが、昭和三十年八月の原爆十周年記念日を機として、男女卒業生が集り、済美校友会なるものを組織して、原子爆弾によって灰燼となり、ついに廃校になった学校の記念碑を建てた。

広島陸軍偕行社附属済美国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学童疎開状況

学童疎開

集 団 疎 開 概 数	縁故疎開者	備 考
-------------	-------	-----

実施年月日	疎開先地名	教職員	児 童	概 数	
第一次 昭和二十年四月十五日	双三郡君田村及び河内村	九人	三〇〇人	一〇〇人	
第二次 昭和二十年八月五日	双三郡君田村及び河内村	三			

済美国民学校は双三郡の君田村及び河内村の二か村が指定せられ、一・二年生の児童及び特殊の事情ある者を除いて、全児童は父母の膝下を離れ、次の編成による集団疎開を実施した。

(一)福善寺班 君田村東入君福警守

六年生男子児童

主任、右太刀太一訓導と寮母の大林母

(二)善照寺班 君田村西入君善照寺

六年生女子児童約三〇人、四年生女子児童二人の計四三人

主任、正木逸吾・松岡多盛・神尾信子訓導と寮母の橋本しげ子

(三)教念寺班 君田村石原教念寺

五年生女子児童一四人、三年生男子児童二人、三年生女子児童一〇人の計三六人

主任、山岡きわ・竹田文江訓導と寮母梶上久子・井上於多賀

(四)西善寺班 河内村西善寺

五年生男子児童二九人

主任、寺脇広二・江藤千代訓導

(五)真楽寺班 河内村真楽寺

主任、久保田齊・森清子訓導

出発は昭和二十年四月十五日、広島駅前で、父兄の手から児童を受取り、集団編成をおこなったが、遺言状を託する父兄もあり、親子涙を流しながら別離を惜しんだ。

疎開地にては、君田村の三か班は君田国民学校へ、河内村二か班は河内国民学校へ、それぞれ通学し、相当学年に編入せられて学業を継続した。

寮にあっては、朝夕種々の行事を通じて生活訓練を行ない、食糧補給・薪水補給などの労作をした。

村当局者・村民、特に寮にあてられた寺院住職らの好意、または、広島からの父兄の慰問もたびたび行なわれたのではあったが、馴れない山村の生活は疎開児童にとっては決してなまやさしいものではなかった。しかし、児童らはよく主任訓導の指導に従って、春から夏と移り変る疎開生活の不自由を忍び、次第にこの山村の生活になれていった。

昭和二十年八月五日、校長は第二次疎開児童を引率して疎開地に赴き、君田村福善寺に一泊し、翌六日の朝は庫裡の座敷にあって寮職員から疎開生活の状況報告を受けていた。八時過ぎに、かなり強い震動を覚えたが、原子爆弾などとは知る由もなく、どこかでかなりの地震が起ったのだらうと思ったにすぎなかった。しかし、同日の夕刻に至り、同寮の児童が三次町の歯科医へ治療に行って帰り、三次町には広島方面から続々と負傷者が避難しており、ただならぬ状態であるとの報告を受けて、重大事態を察知した。

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

空襲の際は、借行社構内の防空壕に避難することにしていたが、火災発生の際は、西側隣接の旧陸軍西練兵場方面へ避難することにしていた。

五、校舎の使用状況

借行社は陸軍関係の建物であり、当時は陸軍の特設警備第二五一大隊(通称号七一六部隊、隊長・陸軍少将世良孝熊)があった。この部隊の約三〇人くらいが、学童の集団疎開により使用しなくなった北側校舎に駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	児 童	その他	
当日は、残留組児童の実情把握のため招集日を定め、給食実施後に帰宅せしめる予定であった。	五人	約一五〇人	当校北側校舎に駐屯中の兵隊約三〇人	校長は第二次疎開の職員、児童を引率して、被爆前日疎開地に出張した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から東北東約七〇〇メートルの場所にあり、原子爆弾の炸裂の一瞬、全校舎は倒壊し、瞬時にして猛火に包まれたことと思うが、当時の目撃者が現存していないため、実情は不明である。しかし、翌日の状況より推察するに、全壊校舎は強力な熱線により炎上し、瞬時にして猛火に包まれ、完全焼失することによって自然鎮火したと考えられる。被爆当時の火勢がいかに猛烈なものであったかは、花崗岩の礎石と掌大に割れてモザイクの如く変化した屋根瓦のほかは、ほとんど一物も残さず、惨たんたる廢墟と化していたことからでも推察される。

(二)人的被害

区 別	教職員	児 童	備 考
即死者	二人	一〇人	
重軽傷者	二(後一人死亡)	三〇(後二〇人死亡)	
行方不明者	一		
計	五	四〇	

当時の在校教職員中で、上席者は出勤途上で負傷して倒れ、また登校していた教職員も即死したため、被爆直後に児童を指揮して避難するなどの措置はできず、児童の生存者は各自が自宅めざして逃げたものらしく、牛田町方面の児童の一人は、神田橋下流の京橋川を渡ろうとして力つき、川岸でたおれた者もあったという。

生残った児童は自宅めざして逃げて行ったが、ほとんどの者が途中で死亡したものと思われる。校門前の道路に二体の伏した死体があったが、おそらく帰宅しようとして校門を出た後に、遂に力尽きて死に至ったのであろうか。その他に、児童の焼死体が五体発見された。しかし、他に相当数の犠牲者があるが、その児童ちは登校途中においてたおれたものと思われる(井上博校長手記)。

当時、本校児童の大部分は、双三郡君川村及び河内村の二か村に集団疎開をし、教職員の大部分も、その付添いとして同地にあった。市内に残留していたものは疎開を希望しない児童と、低学年児童の大部分及び玉木・石井・難波・長坂の四訓導、それに大島事務職員・坂井給食婦の六人で、校長は前日五日に第二次疎開児童を引率して、双三郡に出張中であった。

あたかも当日は、給食日に相当し、食糧不足の折柄とて、残留児童は、この日を楽しんで早朝から登校していて、被爆した。

翌日、急ぎ出張先から駆け帰った校長の所見によって、その如何に惨憺たるものであったかを想像し得るのみである。

ほとんど原型をとどめぬまでに黒焦げになって、どこが頭か手足かわからず、いわんや氏名など知ることもできない児童の死体が、五、六体散在しているばかり、裏庭とおぼしい場所には、当時校舎の一部に宿泊していた軍人の、これは腕時計をはめたままの死体が一〇体ばかり、まさに鬼気迫る惨状というべき光景であった。残留教職員の状況については、先ず白島長寿園堤防の避難小屋に、負傷の玉木教諭を探しあてた。玉木教諭は登校しようと自宅の玄関を出た瞬間を襲われ、全身に負傷しながら、辛くも一命を取りとめたという。次に、上流川町の街頭に石井教諭のいたましい死体を発見、教諭はいったん登校後、家に残した母の身を案じて、急ぎ帰宅の途上、熱気にたえかねて、路傍にあった防火水槽に入ったまま息絶えたものと推察される。

他の教職員・児童の消息は、全然不明であったから、残留教職員が翌日から焼野が原と化した市内を、焼けた土や瓦を踏みながら、どこかに傷を負って倒れているのではないかと、児童の影は見当たらないかとさまよい歩いた。難波教諭の家は千田町であったが、何一つ心あたりのものを見出すことはできなかった。広島赤十字病院の多くの被爆者も、面相はすっかり変っていて、識別も困難であった。結局、難波教諭・坂井給食婦は出勤途中か、または幼稚園、もしくは給食室で、いたましい殉職をとげたものと推察するほかはない。大島事務員は、一度逃れて可部方面の収容施設に収容されたが、はげしい原爆症のため、日ならずして若い生命を失われたことが、後日判明した。

児童の父兄の中には、わが子の消息を知らせてくれと、しばしば牛田町の井上校長宅を訪れたものもあったが、校長や教職員がいくら探しても一人の児童にも会い得なかった。

八、被爆後の混乱

校長及び集団疎開付添い教職員は元気であったから、疎開地の指揮系統は保たれたが、市中に残留した教職員は、あるいは負傷し、あるいは死亡し、設立者である偕行社側の責任者は全部死亡、または行方不明となったため、学校の機能は完全に空白状態となった。校長は翌七日に急ぎ帰校したが、この惨状になすべきすべもなく、師団司令部に赴き、師団参謀長と打合せをしようとしたが、ここも実に惨憺たる状況で、打合せなどするどころではなかった。そ

こで、先ず教職員及び児童の実情を明らかにしたいものと思って、校舎焼跡に校長の住所を記し、なにぶんの連絡を願う旨の立札を立てた。その後は、廃虚の市内を隅から隅まで歩きまわり、教職員及び児童を探し求めた。

九、被爆後の応急処置

終戦となり、学校の応急対策としては、先ず集団疎開を解いて児童を無事に引取者に返すこと、第二に学校の存廃を決すること、第三に職員の身の振り方を考えることであった。

第一の疎開児童の点については、八月二十三日、君田村教念寺において、疎開担当職員会議を開いて周到な打合せをし、父兄との連絡を十分にしておき、引取人の来訪を待って児童を引渡した。

九月十五日、教念寺において最後の職員会議を催し、疎開寮の閉鎖に関する打合せをしたが、引取者のない児童は、その後も寮に残り、最後に寮を閉鎖したのは十月末であった。

第二の学校の存廃については、何もかもが虚無的に考えられ、七五年間は一草も生えることはできないといわれるばかりでなく、母体になる師団も、偕行社も壊滅に帰した状況下にあつては、学校の復興存続の如きことは全然考慮の余地すらなかった。師団司令部は佐伯郡五日市町、府中町東洋工業株式会社内、日本製鋼所内と転々としていた。終戦前に、校長は疎開先より、たびたび司令部を訪れ、学校の処置につき、または教職員の身分などについて指揮を受け、大要次のように措置した。

(一)学校は廃校のやむないこと。よって九月三十日に関係者一同は校舎焼跡に集り、廃校式を挙げ、互いに将来の無事を祈って解散する。県学務課に廃校の手続きをする。

(二)教職員に対しては、退職金として少額ながら手当を支給し、廃校による自然退職の取扱いをする。このような場合だから他校に転任などの取計らいをする余裕はなく、教職員は、各自が後日の措置を考えるほかになんともすることができなかった。なお、広島県が正式に廃校認可をしたのは、昭和二十年十二月十日である。

[第三十八項 光道国民学校](#)…321

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市猫屋町四六番地

建物の概要 (一)教室数 九室、鉄筋コンクリート建三階、延約三〇〇坪

(二)光道会館 一棟 約四〇坪

(三)光道幼稚園 一棟 約四〇坪

(四)小使室 一棟 約一五坪

敷地面積 約一、〇〇〇坪

教職員数 一〇人

在籍児童数 国民学校児童 約二四〇人

幼稚園園児 約八〇人

代表者 校長 石本豊一

爆心地からの距離 約六五〇メートル

光道国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学校の創設概要

創設概要

明治四年、猫屋町在住の真宗信徒大高十郎という青年が十名講を作り、町内の明教寺において法話会を開くかたわら、法門拡張の資金を得るため、毎夜内職に励んだ。この労益金によって、明治十年、「天名社」を設立、のち特留社と改め、護法報謝・育英報国・国家奉仕を目的とする巡回布教や法話会を行なった。明治十一年に「愛国社」と改名、ついで翌十二年に「闡教部」と改名し、愛国主義から本来の宗教活動に立ち返った。同年、大無量寿經の一節「光闡

道教」という言葉からとった私塾「光道館」を明教寺の末寺万福寺跡地に設立した。これが、原子爆弾の被爆後に廃校となった光道国民学校の前身である。

大正十一年、火災により施設の大半を焼失し、廃校の危機に陥ったが、財閥信徒の出資や一般寄附により、十三年に鉄筋コンクリート建三階の近代的校舎が竣工した。当時、鉄筋ビルは市内にも少なく、市民の目をひいた。ちなみに神戸以西では初めて、全国で十四番目の鉄筋建校舎で、幼稚園も併設した。クラス定員は四〇人で、男女共学。一学年一学級、全校で六クラス、月謝が二円(普通の約一〇倍)という高額であったが、当時としては、スチーム暖房つきという豪華な学校であった。

闍教部は、火葬場「向正館」を経営し、重要な財源としていたが、終戦直前、軍の命令で広島市に買収されたことは、大きな打撃あった。引続き、原子爆弾により闍教部(本部)と学校が壊滅し、財団役員もほとんど被爆死亡した。戦後の不安定な社会情勢の中で、学校再建の見込みが立たないまま、昭和二十年十一月に廃校を決定し、疎開先から帰った児童は、市内の各学校に転校した。爆心地に近く、被災の程度も高かったから、なかには孤児になった者も多数いた。昭和二十六年、学校再建の計画が進められたが、資金繰りが難しく実現しないまま今日に及んでいる。

三、学童疎開状況

学童疎開

実施年月日 昭和二十年四月十九日
集団疎開先 山県郡都谷村 四・五年
山県郡原村 三・六年
疎開児童数 約一〇〇人
引率教師 四人
寮母 六人
縁故疎開児童数 約六〇人

四、学徒動員状況

出動していなかった、

五、校舎の使用状況

校舎・校地とも広島憲兵分隊(隊長・藤井貞利憲兵大尉)が使用していた。

なお、児童疎開後は一・二年生のごく一部が残留していたが、被爆時には校内におらず、猫屋町明教寺で勉強していた。

六、被爆の惨状

被害状況

鉄筋コンクリート建てであったから、外観的にはそれほど壊れているようには見えなかった。また内部も焼けた形跡はなかったが、窓は全部吹き飛んでおり、廊下と教室の境となっている煉瓦積みは、かなりこわれていた。全体として小破程度であった。

人的被害は、明教寺で被爆した石本校長と現業員岩城夫婦二人の計三人が即死した。

当時、校内にいた生存者なく、炸裂下の状況は判っていない。

七、被爆後の混乱

石本校長が被爆死亡したため、元校長の土居愈吉が中心となり、西村清暁首席訓導が新しく校長に就任し、被爆後の一切の校務を推進した。

学校再開のため、多大の努力を払ったが、諸般の状況から、昭和二十年十一月三十日、ついに廃校のやむなきに至った。

学校が爆心地に近かったから、児童の家庭もその多くが破壊され、集団疎開児童のほとんどが、片親あるいは両親などを失った。なかでも榎町付近の家庭の児童がもっとも多数孤児となった。

四年生を例にとれば、疎開児童二七人のうち、まったくの孤児になった者二人、片親を失った者二〇人、両親は失ったが兄姉がいた者一人という惨状であり、両親などそろって生存していた者はわずか四人にすぎなかった。これらの児童は、全員親類その他縁故者に引取られて育てられたから、収容施設に入った者はなかった。

なお、廃校の際、残存していた児童はそれぞれ引取られた先で、その地の学校に転校した。

第三節 各中等学校…326

第一項 県立広島第一中学校…326

(現在・広島県立国泰寺高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市雑魚場町一四七

校長 渡辺豊平

教職員 四九人

生徒 約一、四〇〇人

校舎 木造二階建・三八教室・延一、四〇〇坪

敷地面積 五、四四〇坪

爆心地からの距離 約九〇〇メートル

二、学生疎開状況

なし

広島県立広島第一中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
呉海軍工廠	呉市	二人	卒業生約一〇〇人	兵器弾薬製作	
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	六	三年生約二八〇	兵器製作	
旭製作所	江波町	一	五年生 五〇	兵器製作	
旭製作所 地御前工場	佐伯郡地御前村	一〇	五年生 約 九〇 四年生 約二六〇 二年生 約一七〇	兵器製作	
広島航空株式会社	古田町高須	四	三年生 五九 二年生 約一五〇	航空機部品製作	
建物疎開作業	広島市役所裏	四	一年生 約三〇〇	疎開跡片づけ	
建物疎開作業	土橋附近		三年生 五〇	疎開跡片づけ	
合 計		二七	約一、五〇九		

(備考)卒業生が動員学徒の中に入っているのは、上級学校の理工科・医科および陸海軍へ進学の設定している者はそれぞれ入学し、その他の者は動員事業所に勤務するよう指示があったため、卒業後も継続して動員学徒の形をとっていたのである。

四、指定避難先と経路

火災の際、風向きにより避難先を選ぶ。

南…宇品、東…比治山、北…二葉山、西…己斐

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
一年生 建物疎開作業	八人	約三〇〇人	二人	場所・学校南側(雑魚場町)半数交代制

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から約九〇〇メートルの地点にあり、被爆と共に全建物は倒壊し、まもなく火災を発生、全焼した。

(二)人的被害

(イ)校庭南側(雑魚場町)で建物疎開作業中の一年生奇数学級約一五〇人のうち一部は即死、大部分は火傷・重傷を受け、一時は各自避難したものの、行方不明となったまま、生き残ったものはない。

(ロ)校舎内で待機中の、偶数学級約一五〇人のうち約五〇人は、校舎倒壊により即死、または、脱出不能のため焼死、約一〇〇人は校舎から脱出し、南の御幸橋方面、東方の比治山方面へ避難した。途中で行倒れとなった者、あるいは帰宅した者も、数日内にはほとんど死亡、生存者はきわめてわずかであった。

(ハ)土橋付近で、建物疎開作業中の三年生約五〇人のうち、一部は即死、残りの者は己斐方面に避難したが、行方不明のままで生存者はない。

被爆生徒の苦闘の状況については、校舎内で建物疎開作業の交代を待っていた生徒のうち、九死に一生を得たわずかな生存者によって記録された「校舎脱出中学生の手記」(全国高等学校長協会普通部会第十二回総会資料)によってうかがうことができる。

「その朝も登校した。学校の残留学級は僕ら一年生だけである。七時半朝礼。奇数学級は直ちに作業場へ、偶数学級は教室に入って交代の時間をまっていた。偶数学級の者は各自自習を始めたり、雑談を始めたりしていた。警戒警報は解除になったのに B29 の爆音がする。しかし『またか』といった調子で気にもかけないものもあれば、廊下の方へ出て見ているものもあった。その爆音が遠くなりかけた瞬間、パッと朱色の光、セルロイドを燃やしたような光、いや気味の悪い光がしたと思うと『あっ』という間もなく、我々は校舎の下敷きになっていた。上から落ちかかる赤土・瓦・背中の上の木材、それらを意識しながら、机の下で硫黄を燃やしたような強い臭気をかぐと共に、一時気が遠くなった。しかし、気がたっていたせいか、周囲から聞えるうめき声、断末魔の声を耳に浴びながら、すぐ前方の明かりを目当てに、腹ばいになって抜け出た。友人の岡本・岩宮両君や無事な連中は、僕を見るや否や『軍人勅諭だ』といって悲壮な声でふりしぼるように朗唱しだした。後から脱出してきた者も、これに合わせて朗唱した。

そのうち表現のしようのない臭気が次第に強くなってくる。我々は手拭で口を覆い、ひとまずプールの上までくる。途中校舎の中から『助けてくれ』『畜生！畜生！』『頑張精神だぞ』などという同僚の声をたくさん聞いた。救助を求めるべく『本部へ行ってくるぞ』と言い残し、職員室へ急ぐ。しかし何ということか、ああ本部はおろか一中が――我々の一中が見渡すかぎりペシャンコではないか。プールの上にあがり、わが愛する学校を見渡せばすでに一番北側の歴史教室の方は火の手が上がって、見る見るうちに拡がってゆく。ふと見れば、十四学級の三田村君は上衣やズボンの燃えているのも気がつかないのか、涙を流しながら『万歳』を叫んでいた。僕は、プールの水を手拭に浸ませてその火を素早く消し止めた、十四学級の幼なじみの佐々木一彦君は全身火傷、目はすでに潰れてしまい、皮膚ははがされ着物の袖のようにぶら下がっていた。そして『何も見えない』とつぶやいていた。十四学級の香川君は頭と足に大怪我をして血が吹き出ているが、それにもまけず、ゲートルで頭や足を巻いて出血を防いでいた。

元気な者や、歩ける者はひとまずここを逃れようと、プールの上から裏の墓地の間を通り、比治山橋の方へ走って行った。その途中、作業に出ておられた体操の川本先生と会った。先生もまた全身火傷で上衣もズボンも焼けてぶら下がっていた。同じ作業場で作業していた女学院の生徒も、先生と同じようにひどい火傷を受け、髪も着物も焼かれていた。

途中で先生や他の同僚たちとはぐれてしまい、十三学級の田中・名島両君と一緒に比治山の方へ逃げた。生徒の多くが比治山の方へ逃れていったのは、紙屋町方面・鷹野橋付近が既に炎に包まれていて、比治山の方は焼けていないと思われたからである。

田中・名島両君は全身火傷の上、目が見えないので、僕の肩にとりつかせて比治山橋を渡り、しばらくの間、あてもなく宇品の方向へ足を運んだ。僕はガスを吸っているために気分が非常に悪くなり、しばしば嘔吐し、歩行が苦しかった。その時後方からトラックがやってきて、乗務員から『乗れ』といわれた。三人は天にも昇る心地ですぐさま飛び乗った。トラックの上で皆ぐったりし、僕はまた嘔吐した。運ばれたところは広陵前の陸軍共済病院であった。大火傷の二人はすぐ治療室へ、僕は歩く気力がなくなり、看護婦に助けられて防空壕へ運ばれた。突然うめき声を聞いてその力を見ると、腹が破れて腸がとび出し半死半生の子供がいる。顔の形のわからなくなっている男の人、手がなくなって死んだようになっている女の人、壕の中はこういう人で一ぱいだ。僕は急に友人二人の様子が知りたくなって、杖にすがって壕の外へ出た。上空ではまた B29 の爆音がしていた…」

(二)人的被害

区 別	教 職 員		生 徒		備 考
即死者	一人	(四)人	五〇人	(七〇)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	八	(一〇)	二五〇	(二八〇)	
行方不明者	三	(七)	一〇〇	(一五〇)	
計	一二	(二一)	四〇〇	(五〇〇)	

八、被爆後の混乱

中島秀継教諭は舎監長で、当日翠町の当校寄宿舍にいた。工場に動員中の二年生以上の舎生が、午後帰舎するのをまって救護班を編成し、中島・田中両教諭が陣頭指揮をとり、寄宿舍を応急救護所として、校長と舎生を寄宿舍に収容した。また、夜を徹して、治療を要する生徒を広島赤十字病院に運んだ。

翌日から翠町の校長官舎と、その隣りの寄宿舍を連絡事務所とし、生き残った教職員は毎日出勤した。そして、校舎の焼跡の死体の収容、校庭などにおける負傷者の治療、父兄との連絡などに従事した。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月十五日、次のとおり間借教室にて授業開始。

(一)第三国民学校(現在・翠町中学校)

教職員七人 生徒約一〇〇人

(二)佐伯郡廿日市国民学校

教職員四人 生徒約五〇人

(三)安芸郡船越国民学校

教職員四人 生徒約五〇人

しかし、教科書・学用品を焼失した者が約三分の二もあり、二、三人で一冊の教科書を共用し、紙・ノートを互いに分けあって授業を受けた。

現国泰寺高等学校構内の広島一中追憶の碑には、校章のもとに教職員・生徒合わせて三六四人の犠牲者氏名が刻まれて静かに眠っている。

(付記)

昭和二十年十月末、学校の生き残った教職員や生徒が、学校の焼跡を整理中、当校の南側の煉瓦塀と運動場との間の道において、倒れた煉瓦塀の下から、約二〇〇人の女学校の生徒(広島女学院の生徒か)の死体が発見された。これは、雑魚場町の建物疎開作業に來た生徒と思われ、作業にかかる直前、塀ぞいに整列していたところへ、爆風により煉瓦塀が倒れかかり、全員が下敷きとなって即死したものと思われる。この事実は、当時一中生徒で焼跡の整理作業に参加した湯木良平の目撃談である。

倒壊校舎から脱出

川本義隆

昭和二十年八月六日午前八時、朝会の時 B29 が北に飛んで行くのを見た。白シャツ一枚の自分たちはそれを見て涼しさを感じた。偶数奇数の組が一時間交代の作業で、自分は十二学級だったので交代番をまつことになった。自分は国文の本を取るために立った。その時、室の右側の三人が「B29!!」と叫んだ。私の方へ目を向けた時、青い光が目射した。アッと叫ぶ間もなく教室が倒れた。今聞くと大きな音がしたと言うものもあるが、私は青い光だけは記憶しているが音は記憶にない。どれだけの間か私は気絶した。私が気がついた時には身動きできなかった。四方から校歌やお母さんと叫ぶのを私は聞いた。私も何か叫んだ。自分たちは、ただ一中だけがやられたのだと考え、そのうちに救援が来ると思って待っていた。しかし待っても待っても誰も来ない。私は動かないわが身を一生懸命動かして、身の過りの板や木や竹などを、長い間力の限りヘシ折ったり、のけようともがいた。すると X 君が自分の名を叫んでいるのがかすかに聞えた。私は何辺もそれに答えた。X 君は私の声がわかったのか私の上に来て板をのけてくれた。しかし X 君は「友だちを呼んで来るから」と言ってあちらへ行った。私は身が少し自由になったので一生懸命もがいた。すると頭が少し外に出た。そして助けを待っていた。大きな音がして何か落ちた様に思った。私はそれ以後力が抜けて気分が遠くなった。顔や手の傷は痛み、前歯はとれてシャツは赤くそまっていた。気分をはげましてもがいていると顔が外に出た。私はまた目がクラクラッとした

一中は何もない。煙でおおわれているだけである。北西一帯は火の海、中国配電と思う建物からは、濛々たる煙の中に、何とも言うことの出来ない恐ろしい赤黒い火炎が窓から吹き出ている。私は逃げる道がわからない。誰か遠く叫ぶ「風上に逃げよ」の声。私は逃げようとした時、私の友の顔が浮んで来た。「田中！」と叫んだが、それに答えるものはない。私の耳に聞えるのは、苦しく歌う「君が代」「天皇陛下万歳！」「お母さん！」と泣き叫ぶ友だちの声だけであった。私は X 君の倒れているのを見た。頭が裂け、手はもげ、少し左右に動いていた。私は「オーイ」と叫んだ。それに答える声が四方から聞える。私の立っている下で助けを求める友がいた。私はただ一生懸命その板を剥いだ。すると二人の友が身動きしているのが見えた。二人は漸く出て来たが、一人は胸を押えたままで腰かけている。よく見ると口から何かをはいており、胸のところから血を吹いている。一人は足が折れていた。私は何か大声で叫んではげましたが、倒れたままであった。「この板をのけてくれ！苦しい」と叫ぶ者がある。私は一生懸命板をのけると、三人の友の顔が出て来た。しかし二人は頭の肉がさけており、目は開いて口の中で何か一生懸命つぶやいている。私はもう一人の元気な友の顔を見た。頭や顔はただ血で真赤になっており、私を見ると「K 君！」と叫んでいたが、私には誰かわからない。私は手を引っばってやった。「はしる！いたい！」と言って泣き叫ぶ。周りの板をできるだけのけてやった。A 君は足を大きな木と木の間にはさまれて、出る事ができない。私が逃げようと思ったときは四方が黒い煙で包まれ、時々火の焼け落ちるのを見た。私が逃げようすると、「お母さん！K 君！」と叫び、「仇を打ってやる」と叫ぶ。私は逃げた。「K 君！K 君！」と叫ぶ声が遠くなる。私は墓場のところまで来ると「一中生徒万歳！お母さん！」と叫ぶのが聞えた。そこで前田君と会った。前田君は墓の上に立っていた。言葉をかわして、私は声のする方に逃げた。その時、桑田先生に出会った。先生は手足を縄でしばり、車に生徒をのせて引いておられた。私も先生と一緒に逃げた。私は手足を水で洗って逃げたため先生とはおくれた。一人で歩いているとクラスの木村君と出会った。木村君は福島町の者であった。私を見て K 君と言うので、私はよく見ると木村君なのでびっくりした。身体全部が火傷していた。私はすぐ手拭で憲兵の置いて行ったヒマシ油を木村君につけてやった。木村君は家を見に帰ると言って私と別れた。私は呼吸が苦しくなり嘔吐した。今までの元気はなくなり、気分が遠くなって、後は、自動車に乗ったことより他、何も記憶がない。気のついたときは宇品におり、夕方、坂町の「鯛尾」に送られた。そこに四日おり母が五日めに私をつれに来た。

第二項 県立広島第二中学校…337

(現在・広島県立観音高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市西観音町二丁目

校長 古田貞衛

教職員 約四〇人(ただし、応召中の者約一〇人?を含む)

生徒 約一、二〇〇人

校舎 木造二階建・四四教室(特別教室一二・普通教室三二)・延九七五坪。鉄筋講堂二二八坪。木造本館一四一・五坪。武道場二二八坪。寄宿舎三二九坪。その他三七三坪。合計延二、二七四・五坪

敷地面積 一一四・四一〇坪

爆心地からの距離 約一・八キロメートル

二、学生疎開状況

なし

県立広島第二中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
-------	-----	-----	----	------	----

三菱造船株式会社	南観音町	一〇人	約五〇〇人	鑄鉄	
建物疎開作業	中島本町	八	三四三	疎開跡片づけ	六クラス全員
食料増産作業	二葉の里東練兵場	六	約二五〇	開墾・除草・整地作業	被爆時集合中
合 計		二四	一、〇九三		

四、指定避難先と経路

全校生徒動員のため、それぞれの作業場で決めていた。

五、校舎の使用状況

別になし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
動員と作業	不明	不明	不明	被爆当日は工場出勤中(三年生以上)以外の生徒は、市内中島本町の建物疎開作業、および東練兵場に出動して食糧増産作業に従事した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…大半が全壊・全焼

当校は爆心地から西南西約一・八キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂の一瞬に校舎の大部分は押しつぶされたが、校長官舎・講堂および寄宿舍などは半壊程度の被害で倒壊するまでにはいたらなかった。しかし、倒壊校舎の中で校舎南棟にあった保健室と小使室方面から、瞬時にして火災が発生し、火の手は、周囲の民家から発生した火災をも伴って、猛火と変じたが、消火する人手のないままに校舎の大部分が焼失した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(八)人	(三四三)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	(一二)	(不明)	
行方不明者	不明	(七)	
計	(二〇)	(約三五〇)	ただし不明分含まず

中島本町方面の家屋疎開作業に出動した一年生三四三人は、本川河岸で整列して先生の訓示を聞いているときに、全員まともに被爆した模様である。その作業場が、爆心直下といってよい程の近距離にあったため、炸裂の一瞬、ほとんどの生徒および引率教員八人は、その場で即死した。このとき、一人の先生は「国のために死のう、泳げる者は向う岸まで泳げ、泳げぬ者は君が代を歌って死ぬんだ。」と叫んで倒れたという。現在なお、ほとんどの殉難者が、遺骨の判別も、拾い集めもできない状態のままである。

八、被爆後の混乱

被爆によって校舎の大半は焼失し、動員出勤中の教員および生徒(特に一年生は全滅の状態であった)は、その大多数が即死、または行方不明になった。また、学校も大被害を受け、機能も運営も完全に停止したが、生き残った教職員と生徒は、校長を中心に一丸となって、友の生存確認や遺体収容に全力をつくした、被爆後の学校施設は、プールおよび半壊の校長官舎・講堂および寄宿舍などを残すのみとなった。そこで、校長官舎と寄宿舍を学校本部に指定すると共に、半壊の講堂や寄宿舍に集った重軽傷者の手当てにも努力した。しかし、屋根瓦は飛び散り、天井も破れていて、雨もりもはげしく、危険も大きいので、他の収容所に移した。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、生き残った教職員および一部の生徒は、即死、または行方不明となった者の遺体確認や生存調査に全力をつくしたが、八月十五日の終戦日から九月上旬までの約一か月間は、生徒各自の家庭に帰休するように指示した。動員先が爆心地から遠距離にあって、被災がまぬがれた生徒も、終戦と同時に出勤も自然消滅の状態となり、各自、家庭に帰休した。その間、学校としては校長を中心に、教職員は学校再開につき協議し、外部にも働きかけて授業開始場所の探索に努めた結果、安佐部可部町・佐伯郡廿日市町および安芸郡海田町の三か所に分散授業所を開設することができた。生徒は交通・寄宿所・食糧などの関係で、各自が最も便利な分散場に所属することを認め、九月十三日に授業が開始された。その後、昭和二十一年十月末まで、約一か年の間、困難をのりこえて、この分散授業所で教育していたが、昭和二十一年十一月三日に、県立第二中学校の焼跡に、仮校舎が完成したのでようやく復帰した。

慰霊碑

昭和三十六年八月六日、若くして逝った多数の霊をしのんで、殉難の地、本川河岸に慰霊碑を建立した。

追悼の歌

なぐさめの
言葉しらねば
ただ泣かむ
汝がおもかげと
いさを
しのびて

第三項 県立広島師範学校…343
(現在・広島大学教育学部東分校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町一、九四六番地
校長 山下直平
教職員 一〇三人
生徒 概数七四六人
校舎 木造二階建・三四教室・延三、三四三坪、鉄筋六教室・延五七九坪
敷地面積 一二、八四〇坪
爆心地からの距離 約四キロメートル

二、学生疎開状況

なし

県立広島師範学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
金輪島暁部隊補給部 呉海軍工廠 農業実習	安芸郡 呉市 安芸郡奥海田		本科一年生 本科二・三年生 予科二年生	梱包作業 運搬作業 農業実習	
合計					

四、指定避難先と経路

空襲時の負傷者は、当校の西北西約一キロメートル離れた比治山国民学校救護所、あるいは学校内宿泊の、高射砲隊衛生部で治療をすることになっていた。また、当校本科の一年生は本科寮に、予科一年生は学校内剣道場に、予科二年生は柔道場に、おのおの収容するよう指導していた。

五、校舎の使用状況

学校は、市内東雲町一、九四六番地の現在地にあり、本科生は校内の寄宿舍にあり、予科生は市内皆実町の予科寄宿舍に宿泊していた(当時は全員寄宿舍に入れる制度であった)。皆実町の旧校舎には、江波町の県立広島商業学校が昭和十九年五月十七日から移転して来ていると共に、部隊名は不明であるが、陸軍部隊が校舎を接収して常時駐屯しており、また、東雲町校舎にも、一部校舎を使用して陸軍暁部隊(高射砲隊)が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
予科寮警備	一人	二〇人		
本科警備	一	二〇		
家屋疎開作業	一	二〇		

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊(一部全壊)

当校は爆心地から東南東約四キロメートル離れた市周辺部にあったから、本科寄宿舍(東雲町の当校内)は、倒壊することは免れたものの、全棟の屋根瓦は飛散し、硝子戸および板戸は全然形なく、天井・壁などは落下し、倒壊寸前であった。また、皆実町の予科寄宿舍は、炸裂の一瞬、全壊したが、半壊校舎の東雲寮も、皆実町の予科寮からも火災は発生しなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	六(一)人	四(三)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	一八(一)	四六	
行方不明者	一		
計	二五(二)	五〇(三)	

予科寮(市内皆実町)の警備員については、東雲町の本校に集結するよう指示したが、充分徹底を期することが困難であり、約半数のものが集っただけである。この予科寮は、全校舎が倒壊し、警備員の中には、その時建物の下敷きとなり、重傷を負った者もあったが、電信隊の協力で救出し、東雲町の本校に運んで手当てをした。

八、被爆後の混乱

学生は被爆後には、できるかぎり本校(東雲町)に集結させて、負傷生徒の手当てや破壊した物件の取片付けなどを行なったが、その後、八月の終りまでは郷里に帰省を命じた。なお、家のない者については学校に収容した。

学校は被爆後、一時閉鎖し、第二学期から授業を開始できるようにと、校舎の整備作業・復旧作業をはじめ、八月二十二日まででにだいたい終了した。その後、教職員および生徒に対し、一〇日間の休養を与えたが、その期間中も、学生五〇人・教官四人ずつ交代で動員し、学校の徹夜警備に当らせ、盗難・火災などの防止、あわせて整備作業を行なった。

また、負傷生徒に対しては応急手当をして、教官引率のもとに、比治山救護所において治療を受け、また学校に駐屯中の高射砲隊衛生部の厚意によって治療を受けた。その後、負傷者は本科寮および附属北側校舎に収容して治療看護した。その時三原市の師範学校女子部から急ぎ救護隊の派遣があって、直ちに負傷者の看護および炊飯に従事した。

九、学校再開の状況

学校の再開

本科寮(東雲町)は危険を感じずる程の被害(半壊)で、各教室は雨もりがはなはだしく、応急対策として鉄筋コンクリート建物内に校長室・生徒課を移し、同建物内の教室と講堂を寮舎に充てて生徒を収容した。一方、資材は全く無く、入手困難な状態であったが、陸軍晩部隊金輪島補給部の厚意で、ベニヤ板六〇〇枚と釘二樽、兵器廠から天幕四〇枚の分与を受けて、整理作業・復旧作業に努めた結果、八月二十二日まででにだいたい終了した。その後は、生徒五〇人・教官四人ずつが交代で学校の警備や復旧にあたった。

九月五月、第二学期始業式を挙行し、五日から十月二十二日までは、予科および本科一・二年生は午前中授業、または校内整備および食糧増産作業をした。本科の三年生で応召しなかった者(一三人)は、九月六日から十月九日まで、本科附属および地方実習指定校で教育実習をはじめ、応召していた者(一六九人)も九月十五日から十月十八日まで、同じく教育実習をはじめた。

十月二十一日から十一月二十日まで、全校生徒の三分の二は農繁期で帰農し、残留組の三分の一は交代で本校警備にあたった。全学生に対する授業開始は十一月二十一日からであった。

なお、十月二十二日には、九月三十日付けの卒業証書による卒業式を挙行した。

第四項 県立広島工業学校…349

(現在・広島県立広島工業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市千田町三丁目九七二の一番地

校長 大蘭平吉

教職員 五六人

生徒 概数一、二五五人

校舎 鉄筋・六教室・延六〇四坪

木造二階建・四〇教室・延三、五五四坪

敷地面積 一〇、七二六・七七坪

爆心地からの距離 約二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

県立広島工業学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生 徒	作業内容	備 考
呉海軍工廠	呉市	二人	電気四年 四一人 第二本科 電気三年 三四	電気に関する諸作業、電気溶接	
呉海軍施設部	呉市	三	建築三年 四五 土木四年 五一 土木三年 五〇	呉海軍施設工事監督、設計助手、測量	上記教職員とは別に土木課職員三人が現場を廻り巡回指導に当った。
日本製鋼所広島製作所	安芸郡船越町	四	機械二年甲 五五 電気二年 五三 土木二年 五八 第二本科 電気二年 四一	機械加工	
日本製鋼所西蟹屋町分所	蟹屋町	一	機械二年乙 五七	機械加工	
三菱造船所造機部	南観音町	三	機械二年乙甲 一〇一 電気三年 四四	機械加工、電気作業	
電気試験場	横川町	一	電気科四年 八	計量関係電気作業	職員は陸軍暁六一四〇部隊と兼務(二人被爆死)
第十一海軍航空廠	山口県岩国市	二	機械四年 四四 第二本科 機械三年 一四	機械加工	
帝国兵器株式会社	吉島町	一	第二本科 機械科三年 二〇	機械加工	
陸軍暁六一四〇部隊修理部	金輪島	一	電気四年 四 第二本科 電気三年 二	電気作業	
丸二木工業株式会社	佐伯郡廿日市市	一	建築二年 五二	木製兵器製作	
倉敷航空機製作所県立広島工業学校工場	千田町県立広島工業学校	一	機械四年 三 第二本科 機械二年 二 機械三年 八	鑄造作業	
日本製鋼所広島製作所県立広島工業学校工場	千田町県立広島工業学校	二	第二本科 機械二年 四七	機械加工(弾頭製作)	
倉敷航空機製作所吉島工場	吉島本町二丁目	三	第二本科 機械科三年 約四〇	機械加工	
中国配電株式会社大洲製作所	大洲町		第二本科 電気科三年 一〇	機械工作	
建物疎開作業(県庁附近)	中島新町	三	機械一年甲乙 七五 電気一年 四〇 第二本科 機械一年 三三	疎開跡片づけ	出勤中の職員生徒全員は作業現場付近で死亡
荻野鉄工株式会社	大洲町	一	建築四年 二〇	機械加工	

旭兵器株式会社	吉島町	一	建築四年 二〇	兵器製作	
合	計	三〇	約一、一一一		

四、指定避難先と経路

各動員先において、その指示に従う。

五、校舎の使用状況

(一)校舎五棟(六九七坪)と運動場の一部(約二〇〇坪)は、呉海軍工廠造船実験部が使用していたが、当時の部員数および集積物資などについては不明である。

(二)学校工場として、倉敷航空機製作所(鑄造作業)および日本製鋼所(弾頭製造)が、校舎の一部を使用しており、当校生徒の一部動員学徒は、この学校工場に勤務していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
当校一年生一八七人(勤労報国隊)は、中島新町地区の建物疎開作業に出動。その他の生徒は全員が動員学徒として工場関係に出動中。	約一〇人	一人 その他 約六〇人	呉海軍工廠部員 若干人 倉敷航空・日本製 鋼所関係若干人	在校生徒数のその他約六〇人は、校舎内に倉敷航空機製作所と日本製鋼所の二工場が、学校工場として使用中の校舎があり、この学校工場に動員中の生徒が登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊

当校は、爆心地の南方約二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、全校舎は一瞬にして倒壊した。当日の当直職員や登校生徒(特に動員学徒生)は、倒壊校舎の下敷きとなって、この大惨劇に、一時は呆然自失していたが、倒壊物の下から自力で脱出した軽傷程度の職員は、事の重大さを知り、微力ではあるが救助作業をはじめた。

校舎倒壊の直後、熱線による自然着火と思われる火災が、本館の柱の一部に起ったが、生残った少数の職員の手によって、これを消しとめた。また、校舎北側に道路(約二メートル幅)をへだてて民家の密集があり、その大部分は倒壊直後に火災となって、火の手は急速に広まっていったが、少数職員の消火活動で、校舎への延焼を防止することができた。

(二)人的被害

当時、二年生以上の生徒全員は、学徒動員として各地の工場へ出動中であり、また動員に参加しない一年生も、建物疎開作業隊として、市内中島新町地区の現場に直接集合することになっていたため、六日当日の登校指示はなかったが、所用で登校してきた生徒一人が倒壊校舎の下敷きで即死した。また、当校舎の一部は学校工場として、呉海軍工廠造船実験部と日本製鋼所の各工場が使用しており、この工場へ生徒約六〇人が出動することになっていて、炸裂時までに登校していた生徒の中には、即死した者や重軽傷を負った者が多数あったようであるが、詳細は不明。また、横川町の電気試験所へ出動中の生徒二人も被爆、死亡した。

なお、炸裂時が出勤時刻前のため、在校職員は約一〇人くらいであったが、全員が重軽傷を負った。その中には、前日の防空当直者(香川教諭)で、建物の下敷きとなり、共に名前を呼び合っているながらも脱出することも、救助することもできず死亡した職員もあった。一方、建物疎開作業の勤労のため、当校一年生一八七人が三教諭(野間茂己・兼本静衛・藤井正各教諭)引率のもとに、中島新町(県庁北側)に集合していたが、現場は爆心地から約六〇〇メートルの至近距離にあり、炸裂の一瞬に全員が即死するという非業の最期をとげた。現場に、あるいは川の中や堤防上に、無数に横たわる全裸の死骸からは、生徒の一人一人を識別することはできなかった。辛うじて物陰に整然と整頓し置かれたと思われるわが子の衣服や、弁当箱の焼けた断片を見つけだし、涙と共に持ち帰る父兄の姿は痛ましい限りであった。また、引率教諭の一人は、死骸の片方の足に残っていた靴から本人であることが確認されたが、眼球は飛び出し、全身は焼けただれ、手を曲げ足を折り、エビのように曲った死骸からは、生前の端正な姿を求めることは不可能であった。

区 別	教職員	生 徒
即死者	四人(三)人	不明(一八九)人
重軽傷者		
行方不明者	即死者の死体を確認したものはないので即死すなわち行方不明でもある	
計	一四(三)	(一八九)ただし判明分のみ

()内は動員先での被爆者数

八、被爆後の混乱

被爆後は、特に人的被害の大きかった一年生を中心に、生徒の安否や死骸の確認、遺留品蒐集などに全力をあげると共に、市内在住生徒の疎開先などについても調査をした。その結果、一年生の生残った者について、学級編成替えを次のとおりおこなった。

(一)一年生機械科二組と電気科を併合して機械科一組とした。

(二)建築科一組と土木科一組とを併合して建築科一組とした。

(三)第二本科の一年生を併合して電気科一組とした。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、学校の指揮系統は失われなかったが、当時の広島市には約七五年間は居住不能の流説があり、学校も膨大な施設や設備を必要とするだけに、その去就につき賀茂郡八本松にするか、安芸郡祇園町方面にするかで迷ったが、昭和二十年秋に、現地復興と決定した。現地復興の決定と共に、学校長を中心に生残った全職員が協力一致して、復興計画のため東奔西走した。生徒も愛校心が強く、復興作業に専念した。戦災直後は、屋根や窓のない校舎工場と、運動場の一角に応急の露天教室を設備して、週三日程は午前中三時間の授業で、午後の時間と残り三日は、終日が復興作業に充当された。このような復興作業の結果、昭和二十一年二月から、生徒の手によってできたバラック教室や、露天教室において、晴天の日だけの授業が再開された。

第二学期開始当時の職員数は約五二人、生徒数は約一、〇〇〇人程度であった。そして、授業内容も学校機能も不完全ではあったが、学校復興の熱情は大なるものがあった。学校の復興作業は全員の努力で継続され、その後の復旧と対策は次のとおり押し進められた。

(一)昭和二十一年八月に、機械実習場・手仕上げ実習場とを県費一四万四、八〇〇円で応急修理した。

(二)昭和二十一年十二月に、保護者会寄付金二七万円で十一教室の校舎建築を行ない、初めて室内授業が可能となった。

(三)昭和二十二年四月に、県費と保護者会・校友会などか寄付金(一九万円)を合わせた一四六円で、特別教室および普通教室七教室を増築した。

(四)昭和二十二年八月二は、鑄造実習場・電気科本館・弱電実験室・ボイラー室・倉庫・小使室などが竣工して、ついに完成した。

学校復興は、戦後の窮乏生活の中でも全員の血のにじむ努力で、一步一步前進していったが、戦後の学校教育行政の再編成によって、昭和二十四年四月には、広島県立工業学校としての校舎も名称もなくなり、新しく生れた広島県皆実高等学校の中の工業科として新発足した。しかし、その後の社会情勢の発展から工業高等学校としての独立した教育の必要性が考えられるようになり、昭和二十八年に皆実高等学校から独立し、県立広島工業高等学校となった。

[第五項 県立広島商業学校](#)…358

(現在・広島県立広島商業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市皆実町一丁目(元県立広島師範学校跡)

校長 福岡銑二

教職員 六〇人

生徒 一、一五〇人

校舎 木造平家建および二階建・約三〇教室・建坪不明

敷地面積 不明

爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	雑魚場町方面	約一三人	約四四〇人	疎開跡片付け	被爆当日、学校内で出動準備
三菱造船株式会社	江波町	一	なし		六日当日休暇
日本製鋼所広島工場	西蟹屋町	なし	なし		六日当日休暇
石田兵機所	中広町	一	二年一組 約四五		六日、土橋付近の建物疎開作業に出動中
亀田製砥所	大洲町	一	三年一組 約四五		六日、雑魚町長付近の建物疎開作業に出動中
合 計		約一六	約五三〇		

四、指定避難先と経路

万一の場合の避難先として比治山公園を指定していたが、被爆時には、千田町の広島赤十字病院や宇品町の陸軍共済病院(現在・県病院)へ避難した者が多かった。

五、校舎の使用状況

軍隊の駐屯・宿泊はなかった。また、官公庁の使用もなかった。

六、当日朝の学校行事予定

被爆二週間ぐらい前に、県の教育課から建物疎開作業に出動命令があった。六日は出動実施三日目であった。福岡校長以下教職員約一三人、および生徒四四〇人が雑魚場町の建物疎開作業に、校庭で出動の準備をしていた。一方、動員工場先からは雑魚場町付近、および土橋付近に引率教師二人、生徒約九〇人がすでに出勤して作業をはじめていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊

昭和十九年五月十七日、江波町の本校舎が陸軍兵器学校広島分教所として使用されることになり、皆実町の旧県立広島師範学校校舎に移転して、教育業務を続けていたが、八月六日被爆全壊した。

江波町の本校校舎も相当な被害であったが、倒壊はまぬがれた。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	(三)人	(九〇)人	但し、当日は校内で、出動準備中に被爆
重軽傷者	(一三)	(四四〇)	
行方不明者	〇	〇	
計	(一六)	(五三〇)	()内は動員先での被爆者数

八、被爆後の混乱

福岡校長以下教職員の被害がはなはだしく、指揮命令の系統が崩れ、大混乱の中で、負傷した生徒は、広島赤十字病院や陸軍共済病院に多数運ばれた。

軽傷の教員三、四人だけが、当日学校に踏みとどまり、午後八時ごろまで、生徒の安否をたずねて来る父兄らに対応した。

学校の機能は完全に停止し、九月開校まで、校庭の防空壕に、福岡校長と三、四人の教員が起居し続けて、郡部出身の重傷生徒一〇数人の看護にあたった。

即死者は行方不明者であったから、遺体の搜索や確認・連絡など、その父兄縁故者の対応に忙殺された。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月上旬、一応開校したが、軍隊の解散にともない、陸軍兵器学校に貸与していた江波町の本校舎が使用できることになったので、生き残った教職員や生徒たちの手で移転作業をおこない、昭和二十年十一月十日、なつかしい江波町校舎に復帰を完了し、授業を続けることができた。しかし、教科書・学用品などは入手困難で、もっぱら板書による。プリントを使用するようになったのは、半年以上もたってからのことであった。

第六項 県立広島第一高等女学校…363

(現在・広島県立広島皆実高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市下中町

校長 岡猪真二

教職員 約五〇人

生徒 約一、三〇〇人

校舎 木造二階建・延一、九四七坪本校舎並びに講堂一部二階建

敷地面積 四、七八〇坪

爆心地からの距離 約六〇〇メートル

二、学生疎開状況

学生疎開

昭和二十年六月ごろ、千田町にあった寄宿舍を安佐郡八木町に疎開し、修練道場とした。

舎監 一人

生徒 四〇人

県立広島第一高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
広航空廠	呉市広町	六人	約三〇〇人	部品作業	五年生
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	六	約三〇〇	部品作業	四年生
被服支廠分所	安佐郡 河内国民学校	二	約一〇〇	部品作業	四、三、二年生の一部
広島印刷会社	南観音町	六	約三〇〇	部品作業	三、二年生の一部
広島航空会社	古田町	六	約三〇〇	部品作業	四、三、二年生の一部
建物疎開作業	土橋付近	六	二二〇	疎開跡片づけ	一年生
第二総軍 第一県女救護班	第一県女内	一一	約五〇	看護実習	四年生
合 計		四三	約一、五七〇		

四、指定避難先と経路

指定避難先はなかった。在校生徒が少数であったから、防空壕が四、五か所に造られており、空襲警報時にはそれらに退避していた。

五、校舎の使用状況

南側校舎二階の一教室は、第二総軍司令部に動員された第四学年生徒の一部約五〇人の看護講習に使用されていた。

また同校舎二階の一教室は、軍人遺家族婦人の講習会場(参加者二〇人余)になっていた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
第四学年の生徒一部看護講習日	約一〇	約五〇	校医一人	学校には、事務職員数人常勤し、他の職員は動員先より交互に帰校していた。
軍人遺家族婦人学級の講習	不明		受講生約二〇	

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から南東約六〇〇メートルの所にあった。炸裂当時の在校者中に一人も生存者がいないため詳細は不明

であるが、爆風により全校舎は倒壊し、西方の校舎が自然着火した。そして同窓会館と、講堂の東南の一部とを残して焼失し、午後四時ごろ、火災が終息したという。

(二)人的被害

土橋付近の建物疎開作業に出動していた第一学年生徒全員と、引率の佐々木教諭ほか数人が全滅した。一部の者は己斐国民学校に避難したということであるが、やはり全員死亡している。

被爆時に在校していた生徒五〇人も、爆心地に近距離のため、全滅のありさまで、そのうち、落下した天井を破り、火災をくぐって辛うじて脱出した生徒二人(四年生中川波瑠美ほか一人)も旬余のうちに死去した。運動場には、手足を吹きとばされ、胴体だけの女生徒の死体がたくさん転がっていた(中山楽器店主人談)。

区 別	教 職 員	生 徒
即死・直後死・被爆死	一四(約六)人	六〇(約二二〇)人

()内は、土橋付近の建物疎開作業に出動して被爆した学徒数

八、被爆後の混乱

八月七日、生存職員は校内奉安殿焼跡を事務所として、父兄や家族との応接に当たるとともに、八月十日ごろから牛田町木村次席教諭宅を仮事務所として、死亡者の遺族、または、生存者との連絡にあたった。なお、八月二十五日ごろまで、校舎の焼跡に仮小屋を建て連絡所を設けた。なお、木村教諭は山口町東警察署内に仮設された県庁に出頭し、県知事に対して学校の状況報告を行なった。

八月二十日、東警察署から東洋工業株式会社内に再び移転した県庁において、各校の残存責任者が召集され、学校復旧会議が開かれた。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月末、広島県立呉第一高等女学校校長土橋幸之助が、校長事務取扱いを命ぜられて着任した。

九月二日、残存教員を草津町小泉邸に集めて、第一回職員会議を開き、続いて、安佐郡八木町の修練道場において、第二回職員会議を催し、開校に関する協議をした。その時、参加した職員は一四、五人である。

九月も終わろうとするころ、やっと開校にふみきることに決定し、とりあえず、安佐郡八木町の修練道場を仮校舎として開校することになった。

九月三十日、校舎の焼跡に残存生徒を集め、翌日から、八木町の修練道場において開校することを指示した。その後、草津町にある母子寮を校舎に当て、十二月末まで、ここと八木町の両所において授業を行なった。

昭和二十一年一月、旭町陸軍被服支廠倉庫の転用を受け、はじめて学校の体裁を保つに至った。これが昭和二十三年四月に有朋高等学校、昭和二十四年四月に皆実高等学校へと引継がれたのである。

[第七項 県立広島第二高等女学校…369](#)

(現在・広島県立広島皆実高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市宇品町(広島女子専門学校内)

校長 津山三郎(広島女子専門学校校長併任)

教職員 二〇人

生徒 約四〇〇人

校舎 木造二階建・二九〇坪

敷地面積 広島女子専門学校敷地七、〇六二・二坪の内

爆心地からの距離 約三・三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	雑魚場町	三	二年生一組 四一人	疎開跡片づけ	一人のみ生存
第二総軍作業場	東練兵場	一七	一・二年・三組 三年二組 四年二組 五年二組	疎開跡片づけおよび農耕作業	一人死亡
陸軍作業場	三輪島			造船作業	
広島地方専売局	皆実町			巻上包装作業	二人死亡
広島地方専売局	皆実町			巻上包装作業	
合 計		二〇	約二九一		

四、指定避難先と経路

とくに避難先は指定せず、校庭に防空壕を四、五か所設置していた。

五、校舎の使用状況

県立女子専門学校と共用の講堂を、陸軍部隊が、時々使用していた。軍隊は多いときは一〇〇人くらい泊ったこともある。

六、当日朝の学校行事予定

在校生はなく、動員先で毎朝朝礼を行なうのが例であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊

本校は爆心地から約三・三キロメートルの地点にあって、校舎は半壊したが、焼失はしなかった。

(二)人的被害

生徒は直接各作業現場に集合し、すべて行事は現場で行なわれていたので、学校内で被爆した者はなかった。

しかしながら、爆心地から約一・一キロメートルの雑魚場町において、建物疎開作業に従事していた生徒、および教職員は悲惨であった。引率教職員三人全員、二年一組四一人中、実に四〇人が死亡した。

また、東練兵場で、農耕作業に従事していた生徒のうちでは、一人が死亡、広島地方専売局でタバコ巻上包装作業に従事していた生徒は二人が死亡した。

全滅に近い憂目に会った雑魚場作業班の、唯一の生存者である平田節子(旧姓坂本、国泰寺中学校に奉職中、昭和四十三年に死亡。)の次の回想記によって、当時の模様を知ることができよう。

ピカッと光ったと思ったが、その後の記憶はない。おそらく、爆風に吹き飛ばされて意識を失っていたのでしょう。しばらくして起き上がってみますと、私の周囲には誰一人見えず、急に一人ぼっちの世界に置かれたような気持ちで突立っていました。「これはやられた。」と気付くや、先生に教わったように口を開け、両掌を耳に当てて、地に伏せました。一〇分ばかりはそうしていたでしょう。再び立上がってみますと、暗闇の中に真赤な火の手が上がっていました。炎は見るまに広がり、あたり一面火の海になったようでした。この明るさに、チラホラ人影が見え始めたので、近寄ってゆきましたが、その異様な姿には全く驚きました。垂れ下がった皮膚、水ぶくれした顔、はれあがった唇、何物かの化身としか思えませんでした。慣れぬ地理に、この天変地異、全く方角のわからぬまま、たださまようだけでしたが、そのうち先生が見つかりました。既に数人の生徒が、両脇にしがみついていたが、先生もまた同じ被害をうけながら両手を広げ、ひなどりを抱きかかえるようにして立っておられました。私は自分の名前を告げて、先生にうなずいて頂いたものの、私にはすでに先生は生きている人のように見えませんでした。ただ、生徒のために責任感と精神力で突立っていらっしゃったのではないかと思います。

うろたえている私は、いつの間にか、先生にもはぐれていました。面相のほとんど変っていない私が、友人の目にとまったらしく、私を呼びながら走ってきました。そして自分には見えぬ、変り果てた我が顔を気にしながら漏らした、必勝を誓う言葉に、私は胸をつかれ、「今や友と一緒に地獄の道を切り開かん」、そんな気持ちが湧きあがってくるのを覚えました。三、四人が手に手をとって、一列横隊になり必死になって、逃げ路を探しました。全身油ぎり、素足の痛さを呪いながら走り回るうちに、北小路さんと二人だけになっていました。炎の熱気はますます激しく、ついには服に火がつき、二人は貯水槽にとび込む程でした。こうして、人の流れに混って右往左往するうち、ふと、皆

とは反対の方向に逃げる気になり、北小路さんの手を引っ張りながら走りましたが、幸いにも、やがて小さい石橋に出ました。二人は目をくっ着けるようにして橋の名を読み、今朝通ってきた橋であることを確認して、比治山橋目指して駆け戻りました。

比治山橋を渡りきると、友人はもはや一步も歩けないほど疲労していて、私に背負ってくれと頼むのです。私は、途中何度も休みながら、出汐町まで背負って帰りました。

比治山南端のハゲ山の麓に、臨時の救護所があるということを、兵隊から聞き、友人を連れて行くことにしました。その途中、また飛行機の来襲を受け、私たちはあわてて笹の茂みに逃げ込みました。そして二人は、暫くそのまま転がっていましたが、救護所の人が、私たちを防空壕に収容して下さいました。

後日、私の作業班で生き残ったのは私一人であることを知り、どうしようもない孤独感に襲われたことを今も忘れません。

この手記のように、そのほかの現場で焼死した者も、同じような生地獄であったに違いない。

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(三)人	(四三)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	(三)ほか若干人	(一)ほか多数	
行方不明者	○	○	
計	(六)ほか若干人	(四四)ほか多数	

八、学校再開の状況

学校の再開

広島県女子専門学校の校舎の一部を借受け、残存教諭により復旧を計った。

八月末、教職員が召集され、九月五日ごろ、生徒は第一回の登校をおこなったが、授業には至らなかった。

十月初旬、生徒約二五〇人、教職員一二、三人により授業が再開された。

第八項 広島県豊学校…375

(現在・広島県広島ろう学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市吉島本町五七七

校長 末広賀治

教職員 二五人

生徒 一六三人

校舎 木造二階建・延四三五坪

敷地面積 一、九四八坪

爆心地からの距離 約二・七キロメートル

二、学生疎開状況

学生疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	生徒数		
昭和二十年四月五日	高田郡吉田町広島県広島農学校	一八人	九八人	六五人	応召中の教員四人

広島県ろう学校 校舎敷地・校舎配置図(略図)

昭和二十年二月十日、県学事課から疎開するようにとの指示を受けた。学校側では疎開先の選定を急ぐと同時に、保護者に連絡して、集団疎開希望者を調査したところ、九八人が参加することになった。他の六五人の中には、農村出身者が多くて、家庭に引取られる者、または、縁故先に疎開するものであった。

二月下旬には、疎開地物色のため、佐伯郡に中迫教頭、賀茂郡に妻沢教諭、高田郡に谷田教諭が出張し、それぞれ

の土地で交渉にあたった結果、高田郡吉田町に疎開することに決定した。職員は疎開地にする荷物の整理を始めるとともに、トラックの配車の交渉にあたり、六台を借受けた。四月になり、教具類・重要書類・寄宿舎の食料品・疎開児童生徒などを運んで、五日を最後に疎開を完了した。吉田町では法専寺・浄円寺・蓮華寺の三か寺に分散し、法事寺に疎開本部をおき、隣家に居を移した末広賀治校長が全体の指揮をとった。法専寺には中迫教頭が寮長となり、初等部三年と中等部が、浄円寺には妻沢教諭が寮長となり、初等部四年・五年・六年が、また、蓮華寺には谷口教諭が寮長となり、初等部一年・二年の児童たちが宿泊した。授業は県立吉田農学校の教室を間借りして開始した。薄気味悪い空襲警報も、広島を六〇キロメートル離れたこの田舎町では、緊迫感もなく、日々おちついた学習や生活がおこなわれるようになった。しかし、一面ひっぱくした食糧事情の中で、配給される物資だけでは、児童生徒の胃袋を満たすことができず、その補給には苦労が多かった。職員は放課後を利用し、荷車をひっぱって、隣の村々への食糧の買出しに行くのが日課となった。

中等部や初等部上級生は、農学校の野菜畑の手伝いにでかけ、その代りに野菜をわけてもらった。長期戦のかまえにはいつてからは、五畝ばかりのたんぼを借り、また、山を開墾して畑にし、イモや野菜を作り、食糧補給の一助とした。このように、疎開地での生活は、文字通り困苦欠乏の日々であった。衣服その他の不足も、また甚だしく、洗たくも十分にできず、シラミなどの副産物までだした。しかし、そうしたうちに生徒たちは、下駄や草履など自分で作ることを学びとり、その生活に順応し、その生活の中から生きる知恵を見だし、力強く生き、多くの苦しみに耐えた。こうした生活の中であって、唯一の楽しみは、遠く離れた両親や兄弟が、時折り訪れてくることであった。そして、そのひと時をお互いに元気であることを喜びあい、戦争の早く終ることを願い、次に会える日のあることを祈りつつ別れを惜しんだ。

三、学徒動員状況

学徒動員

昭和十六年八月にはすべての中等学校に学校報国隊が組織されたが、本校においてもこうした情勢にしたがって、学校報国隊を組織し、すべてが戦時下の教育に入ることとなった。日々の学習も、身体の鍛錬に大きなウェイトがかけられ、遠足行軍は毎月おこなわれた。一方、中等部生徒の勤労作業への参加もたびたびおこなわれた。浅野泉邸での草刈りや清掃作業、佐伯郡石内村での植林作業、陸軍病院での傷病兵の慰問などがそれである。

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

学校が集団疎開するや、まもなく東洋工業株式会社の下請会社である倉敷工場が校舎を借受け、飛行機の部分品の製造工場として作業を始めた。各教室や講堂にはいろんな機械が取り付けられ、天井には電線がクモの巣の如くはられ、たちまちにして工場にか変わった。

六、当日朝の学校行事予定

疎開中であつたから記録することなし。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊

当校は爆心地から約二・七キロメートル離れていたが、屋根瓦が落ち、校舎は約三〇度傾き、柱の折れた部分が多く使用できなくなった。被爆前、大水害があつて基礎が不均一になっていた関係もあつて、講堂は脆くも倒壊した。教具・重要書類は疎開させていたから、被害はなかった。また熱線による火災の発生はなく、類焼もなかった。

こうした中であつて生徒・教職員に一人の被害者もでなかったのは不幸中の幸いであつた。生徒のうち九八人は集団疎開しており、残り六五人は郡部の出身者であるから郷里にあつた。教職員は集団疎開者の教育に従事して、被爆当日在広していた者はいなかった。

八、被爆後の混乱

校舎の復旧修理の見通しは全くたたず、ただ教職員が疎開先から交代で帰広し、警備に當つた。しかしこうした教職員の努力も、僅かな人員では行届かず、一部の不心得者のために、校具・その他の諸材料が盗まれ、手の施しようがなかった。そこで一部の生徒を帰校させ、一室を修理して教職員も起居を共にすることによって、一般の人に、廃棄された校舎ではたいことを知らしめ、盗難への対策としなければならなかつた。二十年九月末、永浦教諭は、校舎

の留守番役として、海田町の自宅から、校内(浴場の隣室)に家族を連れて引越して来た。空地に野菜を植えたり、防空壕の取こわしをしたり、木工室の工具の移動もした。進駐軍の命令だと言われて戦時中の図書を風呂に焚いたりした。また、盗難も多く、倒壊した講堂下のパイプをはずして持ち帰るものもいた。失ったために持たざる苦勞をする学校もあれば、当校のごとく焼け残ったがためにまた別の苦勞を味わうなど、不安な世情であった。それでも教職員と生徒は跡片づけを始めたが、到底、学校を復旧するなど望むべくもなく、県当局に対して早急に復旧工事に取掛るよう陳情を繰返した。

また被爆直後、校内の寄宿舍の一部を避難者が使用した。寄宿舍には畳敷きの部屋が二〇室あったが、一棟は雨もりがひどく、他の一棟は倉庫にしていたので使用できる部分は僅かであった。しかし、避難者はそこへつめかけた。救護所となるような建物の少ないときであるから、できる限りの人員が収容され、足を踏み入れる場所もない有様であった。その中には、広島女学院の生徒たちもまじっていた。これらの避難者はつぎつぎと死んでいった。生き残った患者の中には、火傷のため、ただれた皮膚からウジ虫が出てくるものもあった。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十一年五月五日、校舎の第一期復旧工事が始められ、同年十二月に完了した。終戦後も引続いて集団疎開を続行し、疎開地の吉田町吉田農学校において授業を行っていたが、昭和二十一年十二月十六日、校舎の復旧とともに帰校した。いよいよ開校の運びとなったが、校庭は野菜畑と防空壕の残骸で使用不能、校舎は復旧工事とは名ばかりで、雨露を凌ぐ程度であった。だが幸いにも昭和二十二年五月から第二期工事が始められることになった。しかし修理に着手するとなれば、授業に支障をきたすことになる。在校生については何んとか授業を続けることができて、四月入学の新入生の受入れは現状では不可能と断定し、第二期復旧工事の完了を待って入学させるという非常手段を採ることにした。従って在校生の実質授業は不足し、新入生の授業は遅れるという結果を招来したのもやむを得ないことであった。

第九項 広島県盲学校…382

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市尾長町片河七五七番地
校長 八尋樹蒼
教職員 二七人
生徒 一五一人
校舎 木造二階建(本館)、その他平家建・建坪九三三・三坪
敷地面積 約五、〇〇〇坪(うち校舎敷地六五〇坪)
爆心地からの距離 約三キロメートル

広島県盲学校 学校敷地・校舎及び寮配置図(略図)

二、学生疎開状況

学生疎開

昭和二十年になり、戦局が日増しに苛烈になるころ、盲学校では職員会議をひらいて、集団疎開を急ぐ協議をした。会議の結果、八尋校長は疎開を断行することに意を決し、県学務課と折衝した。同年三月下旬から四月初めにかけて、双三郡田幸村の双三実業学校へ疎開することに決定し、教職員はその準備に忙殺された。準備は、ある限りのテーブル掛で袋を作り、重要書類を入れ、学習と集団生活に必要な最少限度の物を運び、あとは一まとめにして特別教室に釘づけするという作業であった。

四月一日、全校生徒の一行は、芸備線を北へ三時間塩町駅に下車し、双三実業学校の生徒や職員に温かく迎えられて、いよいよ疎開先での生活がはじまった。

盲学校が借りた校舎は、学校の東側にある女子部の三教室と家庭科の調理室隣の教室で部屋一つ、昼間は教室に、夜は初等部と女子の居室にあてるといふ全く不自由な状況であった。

男生徒は二班に分れて、光行寺と竜専寺に合宿した。

この頃、農村も食糧は窮乏していたから、高学年の生徒は、学習のかたわら職員と協力して米作り・芋植え・農家の手伝いなど、食糧増産に励まなければならなかった。

木の芽を掻きに山へ、シジミ貝を拾いに川へ、半盲生が荷車の梶をとり、全盲生が後押しをして農協へと、食糧確保のための苦労をかさねた。そしてまた空襲の危険を避けるため、夏休みも、できるだけ疎開地にとどまるようにしたが、広島市に帰った者もあり、クボマサオ・ヤマモトアサコ・コウダタカシなどがたまたま帰省していて被爆の犠牲者となった。

三、被爆の災害と復旧

尾長町の学校は、爆心地から約三キロメートルも離れていたもので、幸いに火災からはまぬがれた。しかし、校舎本館は爆風によってひどく傾いた状態で、寄宿舎の一部別館・食堂は全壊という被害であった。

疎開中、校舎は県労務課・動員課・通信講習所の一部が使用していたが、終戦と同時に、これらは立去り、留守番役として小使いの原田静夫夫婦と県労務課長松浦万年の一家が校長官舎にいた。

昭和二十年十二月、疎開地の双三郡から中等部三年一〇数人を連れて、本川元文教頭以下、福永・山本・熊野・中垣・西原各教諭及び山県炊事婦が先発隊として帰校し、被害の比軽的軽少であった中寮を教室と寄宿舎に、宿直室を職員室にあてた。そして学習をおこなう片わら、手近なところから整備することにした。

暴徒の侵入

こうして、一致協力して復旧に努力を重ねていたやさき、昭和二十一年一月のある夜、この努力を踏みにじって暴徒の一団が校舎に侵入、懐中電灯をかざして破壊した木材を持ち去った。

宿直の熊野教諭は、これを制止して生徒に危害が及ぶことをおそれ、その夜は暴徒のするにまかせた。しかも翌朝も昨夜にまさる集団で来襲した。バールやハンマー、金棒などの道具をたずさえ、荷車を引いて来た。通用門には凶器をかまえた四、五人が張りこみ、見知らぬ者の出入りは一切できなかった。

電話も不通、一か所しかない通用門をふさがれて警察へ連絡のしようもなかった。目新しいものはどんどん持ち去られていく。生徒たちは恐怖におびえている。松浦万年労務課長は思案の末、木の葉隠れに裏山の崖道を降りて、やつのことで東警察署に連絡した。

東警察署から二〇人あまりの警官がトラックでかけつけたときには、暴徒たちは警邏中の尾長派出所警官に追われて人影もなかった。

目ぼしいものの持ち去られたあとには、ピアノ一台が残されていた。ただ、生徒には一人のけが人もなかったのが、不幸中の幸いであった。

復旧工事に着手

以上のようなことがあったが、八尋校長の尽力によって、盲学校はいちはやく校舎の復旧工事を実施されることになり、二十一年四月、工事に着手した。

工事が進むにつれて、倒れかかった本館も立直り、塗装もされて見違えるようになった。しかし予算の関係上、講堂および全壊した建物の再建はできなかった。さしあたり食堂には雨天体操場をあてることにした。

講堂の再建には、八尋校長を先頭に、教職員は手分けして、同窓生や父兄にと、方々へ寄付を頼んで涙ぐましい努力の結果、約五万円が集って、ついに目的を達したのであった。残されたステージはもと大工で、中途失明者の生徒岡丸勇三の献身的作業によって立派にできあがった。

砂糖休暇

昭和二十一年六月一日、一四か月ぶりに、疎開地から生徒約一〇〇人、教職員約一〇人の全員が帰校して来た。

なつかしい校舎に帰り、心は落ちついたが、教材・教具は一物もなく、その上食糧事情は窮迫の一途をたどり、戦時中にもましての苦難が横たわっていた。そのため、やむなく幾度か臨時休暇をおこない、生徒の体力保持のため帰省をさせた。これは誰いうこともなく「砂糖休暇」とも呼ばれていた。

(現在・広島県広島基町高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市中広町
校長 富永勇男
教職員 三二人
生徒 概数九七五人
校舎 木造二階建・二二教室・延八〇〇坪
敷地面積 七、〇〇〇坪
開校 昭和十七年四月
爆心地からの距離 約一・四キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島市立中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員，

事業の区別	所在地	教職員	生 徒	作業内容	備 考
建物疎開作業	小網町	七人	一、二年生 三五三人	疎開跡片づけ	
三菱重工業株式会社	南観音町	七	三年生 三〇〇	工場勤務	
合 計		一四	六五三		

四、指定避難先と経路

当時の生徒は、登校前に警報の出た時は家庭において待機することとし、登校後において警報の出た場合は、その時の状況に応じて帰宅を命ずるとか、その他の方法で適当な避難処置を指示することになっていた。また、学徒動員で出動中の生徒は、工場側の指示のもとに、帰宅するなり、その他、状況に応じた適当な行動をすることになっていた。

五、校舎の使用状況

校舎の中で、六教室は陸軍部隊が使用しており、常時、独立鉄道第二大隊(約六〇人)が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
授業予定 一年生、二年生の各一組のみは当日授業予定となっていた。その他の組は、市内疎開作業で出動する。	六人	一四七人	陸軍部隊約六〇人	疎開作業や工場勤務の者は、直接現場に集合することになっていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は、爆心地から北西約一・四キロメートル離れた所にあり、原子爆弾炸裂の一瞬、校舎は押しつぶされた。当日が登校日となっていた生徒の中から、校舎の全壊で、多数の犠牲者が出た。炸裂の約二時間後(十時ごろ)に、南側(向西館方面)に火災が発生し、みるみるうちに火勢が強くなって、四方の民家に延焼した。当校が延焼で焼けはじめたころは、一面が火の海で、その猛火は約一時間のあいだに全校舎を灰にしてしまった。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(二)人	(一四〇)人	()内は学校外(特に動員先)での被爆者数
重軽傷者	六	九〇	
行方不明者	(二)	(二二五)	
計	六(四)	九〇(三六五)	

六日当日がちょうど授業日となっていた一・二年生の一部(一・二年生の各一組の生徒)は、朝礼のため運動場に出

ており、職員も教員室で職員朝礼を開始しようとした。その瞬間の炸裂で、瞬時にして一命を捨てた者もあり、辛うじて倒壊物の下敷きから這い出た職員や生徒もあったが、誰れもが重軽傷で、逃げる方向や措置などについては考える余地すらなかったという。

助かった職員の話によれば、その人が倒壊物の下から這い出た時は、すでに運動場の生徒は少数であったが、誰れもが歩行もできぬまでに大やけどをし、生死の境をさまよい歩いている者ばかりであった。できるかぎりの救助をしようと思い、これらの重傷者を付近の河原に仮の収容所をつくって収容した。夕方近くから、父兄や親戚の者が、生徒捜索のため来校したので、運よく、その生徒がおれば引渡した。残った数人の生徒は、その後広島赤十字病院の指示で安佐郡可部町の治療所に移された。また、その他の登校生徒の大半は、焼傷を受けながらも、各自が思い思いの方向に、逃げのびていったものと思われる。なかには顔貌もわからぬ重傷の身で、猛炎の中をくぐって己斐町の自宅までたどりつき、母に状況の一端を語って絶命した生徒(三上某)もあった。

生徒は一樣に、帽子から露出した部分の頭髪をきれいに焼き、半袖シャツはボロボロとなり、手足は腫れあがっていた。生き残っている生徒は、夕方近くに収容されたが、全身の焼傷とむくみで人相を確かめることが、ほとんど不可能な状態であった。これら生徒たちの、痛い痛いと呼ぶ声と、水を求める苦痛の声々が交錯して凄惨をきわめた。

八、被爆後の混乱

行方不明の職員二人と生徒二〇〇人余りの動静を確認するため、異常のなかった教員および工場出勤の三年生(市内南観音町 三菱重工業株式会社の工場に出勤していた生徒)は、手分けしてその行方を探し求めた。しかし、その後の調査で、死体の確認できなかった者は、死亡した者と認め、市内己斐町の蓮照寺において慰霊祭を催し、同時に遺族父兄会に相談して、年若く散っていった生徒たちの慰霊碑を、市内小網町三光寺内に建立した。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎が焼失して、開校するにも非常に困ったが、さしあたって比治山国民学校の校舎一棟(八教室)を借用する交渉が成立したので、昭和二十年十月一日から第二学期としての授業が開始された。授業再開当初の教員数は一五人で、生徒数約一九七人程度であったが、借校舎のなやみに加えて、学用品および教科書などの入手にも、非常に困難をした。職員の持参する教科書をプリントしたり、また、生徒は所有する教材を共有することによって、急場をしのいだ。

その後、社会不安の解消と共に生徒数が、日々に増加していったので、教室の不足や授業内容の問題が大きくなやみとなってきた。教室不足については、さらに講堂を借用することになったが、このままの状態では学校運営を継続することはできず、教員一五人は、各自の役割をきめて運営準備をなし、また、校舎再建運動も強力に押し進められた。

校舎再建についての対外的交渉で、旧陸軍幼年学校跡(市内基町)の敷地が、市立中学校校地として定められたので、再建資材として、安芸郡奥海田村の旧第十一空廠施設の払下げを受けた。被爆後、苦難の道をたどりながらも、ここに学校再建の道も開け、学校運営の基礎がきざかれた。

第十一項 広島市立第一工業学校…393

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東雲町六五三番地

校長 勝盛豊一

教職員 三〇人

生徒 概数六〇〇人

校舎 木造二階建・三一教室・延一、五七八坪

敷地面積 九、四五一坪

爆心地からの距離 約三・一キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
東洋工業株式会社 (当日、出勤中の二部生徒は、左記の二つの地区の疎開作業に従事)	安芸君府中町	四	一四四	工作機械、小銃の部分品製造	
建物疎開作業	水主町	一	一四	疎開跡片づけ	東洋工業株式会社へ出勤中の一部生徒
建物疎開作業	鶴見橋	一	一二	疎開跡片づけ	東洋工業株式会社へ出勤中の一部生徒
呉海軍工廠	呉市	四	九九	電気溶接旋盤作業	
広島市役所	国泰寺町	一	五	事務手伝い	
富田製油株式会社	舟入町	二	五〇	油の精製	
中国配電大洲製作所	大洲町	二	五〇	モーター分解洗い	
建物疎開作業	皆実町	四	二〇〇	倉庫納品の整理と疎開跡片づけ	
本校機械科工場	東雲町本校舎	二	三〇	弾丸の部品製造	油谷重工業株式会社からの依頼製造
油谷重工株式会社	安佐郡祇園町		二〇	兵器製造	
合 計		二一	六二四		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

当校の本館二階一二〇坪には、陸軍砲部隊の通信隊約五〇人が駐屯して、講堂(一五〇坪)が通信隊の馬具および天幕などの物資集積場となった。その他、普通教室(六坪)には、火薬を入れる絹製袋が保管してあり、また、北側電気実習室の一部(五五坪)には通信器材があり、中央電気書室(一四〇坪)には、通信隊輸送材料とその箱類が保管してあった。運動場には野砲三門、連絡用自動車三台、トラック二台があり、中庭には通信機関係の発動機八台があって、校舎の内外は軍事物資の保管場所としても使用されていた。

なお、当校舎内の機械実習工場では、油谷重工業株式会社からの依頼で、砲弾の部分品製造をしており、その仕事には当校機械科四年生(約三〇人)が従事していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業予定なし		約三〇人 (油谷重工業に動員中の生徒)	約五〇人 (砲部隊)	全員学徒動員に出勤中であつたが、四年生約三〇人は学校内の工場に勤務していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…小破

当校は爆心地から東南東約三・一キロメートル離れた所にあり、爆心地方向には比治山公園があって、爆風からは保護されている状態にあった。また、比較的遠距離にあった関係で、窓ガラスおよび屋根瓦などが散乱したのみで、小破程度の被害であった。また、被爆後の火災発生は、校舎からも周囲の民家からも起らなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	(三)人	(五〇)人	()内は学校外(特に動員先)での被爆者数
重軽傷者	(四)	(二四四)	
行方不明者	〇	〇	
計	(七)	(二九四)	

東洋工業株式会社に、出勤中の生徒の中で、一部の者は市内家屋疎開作業の援助のため、当日その現場(水主町付近一引率教員一人と生徒一四人、鶴見橋付近一引率教員一人と生徒一二人)に動員されて、不幸にも二四人が被爆死した。

建物疎開へ行かなかった残余の生徒は、被爆後、他校の生徒と共に、各町別の班を作り、班長には工場寄宿舎にい

た高等師範学校の学生を選出して、その引率のもとに帰宅することにしたが、不幸にして家が焼け父兄との連絡がつかない生徒は、工場につれかえり、寄宿舎へ収容した。その後、約一週間のあいだは父兄を探し連絡することにつとめた。

(中国配電大洲製作所へ出勤した引率教師の手記)

市内大洲町の中国配電大洲製作所においては、工場建物の平家建事務所を除き、他の建物全てが破壊された。炸裂直後の混乱の中で、生徒を集め点呼してみると、モーター工場内で作業中の生徒一人が、屋根の合掌のボルトが落下して頭蓋骨折で重傷を受けており、また、その他に一人の負傷者があったほかは、重軽傷者が比較的少数にとどまった。それは生徒の大半が屋外作業場にいたためである。

無傷あるいは軽傷の生徒は、早々に帰宅させたが、残った負傷者については、手持ちの薬剤を使って治療した。午後三時、呉海軍病院に連絡して来た救援隊の病院車で、重傷者七、八人を呉へ送った。

一方、父兄との連絡がなかなかつかなかった。どうにかして連絡をしてみようと元気な生徒を連絡に出したが、夜になっても音信がなかった。その夜はついに一睡もせず夜を明かした。うす明かりの中で、はじめて自分自身も負傷していることに気がついた。すでに重傷者は鼻息状態になっていたが、わずかな配給の乾パンを水にとき、患者の口に流入しながら、生きていてくれることを心より願ったが、まだ父兄の誰れ一人も訪れがなかった。市内の火災は、天をこがす勢いで焼け広がっているのが見られたが、私としても、この重傷生徒を父兄に引渡さないうちは、帰宅も、学校への連絡も不可能と思い、いたずらに焦慮するのみであった。午後四時過ぎ、ようやく連絡ができたのか、重傷者の父が荷車を曳き工場に着いた。そこで、はじめて生徒を引渡し、学校への道を急いだ。

八、被爆後の混乱

炸裂の直後、出勤中の教職員および生徒(負傷者も含む)約七〇人か帰校してきた。学校はただちに、教室や廊下に柔道用の畳を敷き、また、宿直室も解放して患者の看護に当った。傷口の応急手当のみで、帰宅のできる者は帰したが、残った二六人の生徒については、家庭との連絡がとれず、またその自宅の焼失によって、帰宅するところもない生徒なので、学校に居残ることを指示した。これらの生徒は、約二〇日間から三〇日間位は学校で生活し、米の配給も受けていたが、その後、次第に父兄とも連絡がとれて、全員帰宅していった。

九、学校再開の状況

学校の再開

原子爆弾による被害は、窓ガラス・屋根瓦などが散乱したのみで、火災も起らず、小破程度のものであり、また、教職員も動員引率者三人が死亡したにすぎなかったのも、学校機能および指揮系統についても失われることはなかった。ただ、生徒多数が犠牲となり、その対策が重大問題となった。また、大混乱による社会不安や学校の設備および備品についての盗難が多くて、その対策に苦勞した。このような状態の中で、家庭やわが身に異常のなかった教職員と生徒により、修理可能な校舎の破損箇所を、応急的に修理して、第二学期の授業を、予定通り九月一日に開始した。その後は、漸進的に校舎の補修が進められていったが、昭和二十三年四月三十日、学制改革により廃校となった。

第十二項 広島市立第二工業学校(夜間制)…400

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市千田町三丁目 広島工業専門学校内(現在は広島大学工学部)

校長 北沢忠男

教職員 一二人(専任のみ)

生徒 概数五二六人

校舎 木造三教室・延一九二坪

爆心地からの距離 約二・一キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

なし

広島市立第二工業学校(夜間制) 学校敷地・校舎配置図(略図)

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

当校は夜間制の工業学校であり、また被爆当時は夏期休暇中のため、特別な行事予定はなかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊

当校(広島工業専門学校の教室三教室を借用して開校された夜間制工業学校)は爆心地から南約二・一キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に屋根瓦・窓ガラスなどは吹き飛び、校舎全体が半壊よりも大破に近い被害を受けた。しかし、火災は発生しなかった。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	○人	(五一)人	()内は学校外での被爆者数
重軽傷者	(三)	(六五)	
行方不明者	○	○	
計	(三)	(一一六)	

六日当日には、学校は夏期休暇中であり、また当校は夜間制工業学校であるから生徒の登校もなく、教職員についても夜間の宿直はあったが、朝となって自宅に帰る途中であったから、校内での人的被害はなく、教職員も生徒も大半が家庭において被爆したのである。

八、被爆後の混乱

校長は広島工業専門学校(現在は広島大学工学部)との兼任であり、また主事職員も工専からの人が任命されていた関係で、被爆後の措置についても当校のみに考慮が払われていたのではない。全体的な調査が、物的なものにも人的なものについてもおこなわれたようである。あの惨禍の中で、専任教員も、各自が戦災にあって混乱中であり、早急には立ちあがる気力もなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

当校は広島工業専門学校の敷地や教室を借用して開校した学校であり、また校長も工専と兼任であり、まさに他力本願の姿であった。したがって、原子爆弾による被害で使用不能となった工専校舎での授業再開は、工専側と同じく当校も再開できぬ状態となったが、当校独自の立場で復旧対策を考えることは、どうていできず、どこまでも広島工業専門学校の去就によって当校の運命は左右される状態にあった。

昭和二十年九月一日に平常通り第二学期としての始業式が、工専校内で挙行され、本校専任教職員約一〇人余り(一人は被爆死亡)が登校し、生徒も約一六〇人が集ってきたが、始業式といっても教室の使用可能なものは皆無の状態であったため、まず跡片付けの作業をおこなった。その後、登校日は全員が校舎整備の作業をやり、また建築科生徒は実習を兼ねて、倒壊校舎の材料で仮小屋・職員室および事務室などを造った。しかしその後の学校対策運動の結果、広島工業専門学校は呉市広町に移転することが決定したので、当校はやむなく独自の立場において学校を再開をしなければならぬ方向に追いやられた。しかし、この倒壊校舎を目前にしては早急にはいかんともなしがたい有様であったから、当時、市内東雲町にあった第一工業高校の借用交渉をはじめて、これを借受け、はじめて授業を再開することができた。その後、次第に生徒の出席率もよくなっていったが、第一工業学校は理知的にも交通上からも非常に不

便なところにあり、これからの授業継続が困難と思われた。そのため、いろいろ考えられたすえ、結局市内千田町の旧校舎跡に再び帰ることとなった。当分の間は教室が不足し、生徒にも青空教室で苦しい授業を続けていたが、その後工業専門学校も移転した呉市広町から帰ってくることになり、千田町の旧校舎について復旧工事が始まった。当校もこれによって次第に充実した。

昭和二十三年四月三十日、学制改革により廃校となる。

第十三項 広島市立造船工業学校…405
(現在・広島市商業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南観音町
校長 檜山琢三
教職員 四五人
生徒 一、一一五人
校舎 木造二階建・普通教室二三・特別教室八・その他校長室・職員室・当直室など
建坪・一般校舎約一、〇〇〇坪・講堂一八〇坪・柔道場一八〇坪、計一、三六〇坪
敷地面積 九、二八一坪
爆心地からの距離 約二・三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島市立造船工業学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	材木町	五人	一年生 一九五人	誓願寺付近の瀬川倉庫疎開跡片づけ	教職員 全滅 生徒 一九四人死亡
三菱観音工場作業現場	観音町	約一三	二、三、四学年及び専攻科 約四〇〇	ボイラー製造など各種機械工作(昼夜三交替制)	戦争末期、佐伯郡廿日市町平良及び己斐町山ノ手に旋盤分工場疎開したため、生徒が出向した。
三菱江波工場作業現場	江波町	約七	二、三、四学年及び専攻科 三〇〇	リベット打ち、木工、溶接など各種作業	生徒 重傷者 三〇人 軽傷者 五〇人
呉海軍工廠	呉市	約七	二年生約二〇〇	軍事機密につき不明のまま	
広瀬国民学校	広瀬町	〇	専攻科 三〇	防空要員(軍の下手間)	防衛召集により、三菱観音工場出勤生徒が行く。一五人死亡
合 計		約三二	約一、一二五		

四、指定避難先と経路

病弱者を除く大部分の教職員・生徒は動員により現地にあり、すべて動員先の指示に従うことになっていた。従って、学校自体の避難計画はなかった。

五、校舎の使用状況

出征兵士約一〇〇人ばかりが、宇品港から出陣するまでのあいだ、常時校舎を利用して宿泊していた。

また、学校の西南の隅にある木造武器庫に広島中央放送局が設置されており、アメリカ側電波の妨害放送をおこなっていた。なお、兵器庫の兵器(三八銃・ゴボウ剣など)は、敗戦直後、海田市町の兵器補給廠にすべて納入した。

六、当日朝の学校行事予定

授業の予定はなかった。しかし、前夜、空襲警報の発令により出動した学校近辺の生徒と、学校防空要員として宿直した教師一人と、登校して来たばかりの事務職員三人、および小使一人が校内にいた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊後、自然発火によって全焼した。

被爆直後、校舎の窓ガラスなどは、一瞬に破碎され、二階建ての校舎の階上が半壊した。爆心に面する北側の理科教室が放射能熱線によって、まず自然発火した。水は出ず、消火の方法もなくたちまち全校舎に延焼、倉庫・武器庫を残して、他の建物は、完全に焼失した。

八月一日から十日まで、海田市町の日本製鋼所内で、学徒動員幹部講習会(一般軍事教練)があり、五日の夜は、東観音町二丁目三七一番地の自宅に帰って一泊した上枝有元教諭は、動員先の三菱観音工場へ連絡に出かけようと準備しているときに被爆した。気づいた時はすでに家が吹っ飛んでいたが、家族三人は全く不思議にも、びよこんと取残されて傷も受けず、その場にいた。すぐに歩いて、二五〇メートルばかり先の学校へ行ってみると、学校はすでに焼けていた。

校舎は、自然着火して全体に延焼するまでに、ものの三、四〇分もかからなかった。完全に焼け落ちたのは、十一時ごろであった。

(二)人的被害

前夜から宿直の石崎・黒川・松田三教諭は交替者の登校するのを待っていた。松田教諭は、千田町の自宅が建物疎開になるため休暇をとり、午前八時ごろ帰宅した。

また、黒川教諭は材木町の疎開作業に生徒を引率して行っていて、その現場で被爆死亡した。石崎教諭は防空要員の生徒を玄関受付の階下のたまり場に集め、人員点呼を取っていたとき被爆した。二階の棟木が玄関に落下して来て、土煙があがった。とっさに伏せの姿勢を取った。周囲が真っ暗になった。みんな、直撃弾を受けたように感じた。生徒には負傷者はなかったが、事務職員三人は頭や顔に軽傷を受けて、そのうちに室内から脱出して来た。まず最初は運動場に避難した。ついで、防空要員で登校していた生徒はすぐに帰宅させた。

当校のもっとも大きな犠牲は、当日早朝から材木町の誓願寺付近にある瀬川倉庫の建物疎開作業跡片づけに出動していた引率教師五人(箱田教頭ほか黒川・岡本・青・森)と、生徒一九五人であった。作業中に気分が悪くなり、県病院へ診察を受けに行って、治療を受け、病院の玄関口に出たところで被爆した生徒一人が助かったほかは、引率教師も生徒一九四人も全滅した。

三菱観音工場に出動していた引率教師一二、三人と生徒約四〇〇人は、無事であったが、遅刻して出勤途上の生徒と、平良村および己斐分工場へ食糧運搬当番の生徒ら二、三人が行く途上で死亡した。

また、三菱江波工場に出動中の、引率教師六、七人と生徒約三〇〇人のうち、重傷者約三〇人、軽傷者約五〇人を出した。さらに、三菱観音工場に出動中の生徒のうち、当日、広瀬国民学校の防空要員として応召していた専攻科の生徒一五人が被爆死亡した。

午後五時過ぎ、三菱江波工場に引率教師として出動していた門田宏教諭が、同僚と協力して工場内の重軽傷生徒たちを一応救護し、動員生徒全体に、その後の行動などについて注意を与えてから、学校に駆けつけてみると、松山校長がただ一人、校庭の防空壕の入口に横たわっているのを発見した。

松山校長は、翠町の自宅から自転車に登校中に被爆、舟入本町の電車道のところで、失神して倒れていたが、自分の服に火がつき、その熱さで意識を回復した。ひどい火傷の重態であったが、押して登校してみると、学校はすでに焼けていたのであった。学校では治療もできないため、門田教諭が校長を三菱江波工場内の診療所に連れて行った。松山校長は二十三、四日まで病院で看護を受けたのち、自宅で療養し一命を助かった。なお、六日の学校防空要員として、登校途中の約一〇人の生徒(三・四年生)が被爆死亡した。

(人的被害状況表)

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	(五)人	(二四六)人	建物疎開・一九九人(教師五・生徒一九四) 動員生徒・五二人(広瀬校一五・登校中一〇・その他二七)
重軽傷者	(重 六 軽 二)	(重 三〇 軽 五〇)	教師六人のうち三人は八月末から十月中旬にかけて死亡した

行方不明者	不明	不明	
計	(一三)	(三二六)	上記数は、行方不明者含まず。

()内の数字は、動員先での被爆者数

なお、炸裂時、校内にいた宿直教員一人と、防空要員生徒約一〇人、小使一人は軽傷で助かった。

八、被爆後の混乱

学校が焼失したため、何らなすすべもなかったうえ、松山校長も重傷で動けず、学校の機能は、まったく停止した。

三菱江波工場に動員中であった門田教諭は、校長を三菱の診療所に運んだあと、翌七日から学校の焼跡に行き、鉄扉が爆風でネジまがったまま、焼失をまぬがれた鉄筋建倉庫を仮事務所とし、焼残りのボロ机二、三をおいて、出勤した教師ら五、六人と、連日、教職員の安否や生徒の死亡者・生存者の確認・各家庭との連絡事務をはじめ、学校の復旧などについて協議をかさねた。

当校は、防空計画では救護所に指定されていたが、校舎焼失のため、その役に立たなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月二十日過ぎ、安芸郡府中町の東洋工業株式会社内に避難していた県庁が、市内各学校の責任者を召集した。当校から校長代理として上枝教諭が出席したところ、県知事は「この場合、県はどうにもできないから、各学校の責任で、適当な場所をさがし、生徒を集めよ。」と、命令した。

そこで、種々協議し、折衝を重ねた結果、翠町の第三国民学校を借用して再開することに決定した。

昭和二十年九月二十四日、第三国民学校において第二学期の授業を開始した。

松山校長は体力が回復して、十月初めから出勤するようになった。

さらに、昭和二十一年五月一日、丹那の元暁部隊兵舎へ移転したが、昭和二十二年三月三十一日をもって、私立造船工業学校が廃止されると同時に、広島市立第一商業学校として生徒募集が認可された。

昭和二十三年五月三日、学制改革により、広島市商業高等学校として開校し、同年七月十四日に南観音町の新校舎に移転した。のち、高等学校再編成で廃校になったが、さらに昭和三十四年四月一日、復活された。昭和三十六年五月十三日に創立四十周年記念式を挙行し、昭和四十年、牛田新町浅野山に近代的な新校舎が建設されてここに移り、現在に及んでいる。

[第十四項 広島市立第二商業学校\(夜間制\)・・・413](#)

(現在・広島大手町商業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市鍛冶屋町三九番地(本川国民学校校舎を商業高等学校)

校長 藤原勘太郎

教職員 専任教官九人(内応召中の者三人)

生徒 概数四二〇人(内本科生徒二八〇人、専修科生徒一四〇人)

校舎 借用使用教室一六教室(本川国民学校の鉄筋三階建校舎の二・三階教室を借用し、当校校舎として使用していた)

爆心地からの距離 約三五〇メートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

なし

四、指定避難先と経路

当校は夜間商業学校として開校された学校であり、避難地などについては指示していなかったが、警戒警報発令と同時に下校させていた。

五、校舎の使用状況

広島市第二商業学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

六、当日朝の学校行事予定

夜間授業のためなし

七、被爆の惨状

被害状況

当校(本川国民学校)は爆心地から西北西約三五〇メートル離れた所に位置した学校で、爆心直下というべき近距離にあったから、炸裂の一瞬、校舎内外の附属物や備品類は吹き飛び、大火災となって全焼した。しかし、当校校舎は鉄筋建造物であり、外郭のみは残った。

当校は夜間制の商業学校であり、また、当時は夏季休暇のため、職員も生徒も幸い、登校者がなかった。しかし、市内在住者の中には、職場または家庭において、この大惨害を受けた者があった。

八、被爆後の混乱

市内舟入町に自宅のあった藤原校長は、家も家具類もすべてを焼失したが、幸い命は助かった。このように、在任教員の中には焼失によって家を失った者も多数にあり、また不幸にも二人の死亡者があった。これら被爆者は住む場所もなく、その上、夏季休暇中のできごとゆえ、職員間の連絡もつかないままに避難していったため、おたがいが消息不明の有様であり、校舎も全焼し、学校の機能は完全に停止した。被爆後、学校対策がたてられたのは、当校職員下縄教諭が、九月三日に復員してからである。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆による学校施設の焼失、または交通機関の混乱、社会情勢の不安などで、校長も夜間学校としての学校復旧には迷っていたが、九月三日に下縄教諭が復員するにおよび、市学務課との連絡をとり、復旧対策の協議をはじめた。生徒に対しては、とりあえず、市内の東・西・南・北と、中心部に「二商生徒は十月五日午後一時、市女裏門前(電車通り)に集合すること」と書いた貼紙をして告示したが、指定の十月五日に集合した者は、校長と下縄教諭二人と生徒一四人だけであった。集合生徒の大半は疎開した遠距離の者ばかりであったが、共に再会を喜び、罹災状況を語り合い、また、次の会合(十月十五日)を約束して別れた。十月十五日の集合日には、校長および教職員四人、生徒数一五人となり、次回の集合から授業再開する旨を申合わせて解散した。

第二学期としての授業開始は、第三回目の集合日でもあった十月二十五日からであるが、広島市立高等女学校(市内舟入町、現在舟入高等学校)の裏に集合したあと、舟入国民学校寄りの電車線路西側に倒れている電柱などに腰かけて、青空の下に教材を開き、各科目ごとに約二〇分間の学習をした。このような授業は、十二月の初旬まで晴天の日のみ続いていたが、十二月になって、市内己斐国民学校講堂を教室として、借用する交渉が成立して、解消された。その後、復員による教員の帰校や疎開していた生徒の登校も次第に多くなり、授業内容も日一日と充実していき、二学期末には、生徒数も三七人(一年生四人、二年生七人、三年生十一人、四年生一五人)程度となった。

昭和二十二年三月二十八日、終戦後第一回の卒業生二九人を送り出した。

[第十五項 広島市立第一高等女学校](#)…417

(現在・広島市立舟入高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市舟入川口町八三二番地

校長 宮川造六

教職員 四三人

生徒 概数一、四二六人

校舎 木造二階建・四一教室・延一、九八三坪、鉄骨校舎一一四坪
敷地面積 六、三八七坪
爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学生疎開状況
なし

広島市立第一高等女学校 後者敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況
学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	材木町	八人	五四四人	疎開跡片づけ	県庁北(現在の平和記念資料館前一带)
大東亜食糧工業株式会社	西観音町一丁目	一	四五	缶詰の製造	
西部被服株式会社	舟入川口町	一	四〇	軍服裁縫	
関西工作所	舟入川口町	当日 電休日		小銃弾の製造	関西工作所も日本製鋼所も当日は電休日のため、工場は休業であった。しかし生徒の中で当番の者数人が出動した。途中で一人が死亡。
日本製鋼広島工場	西蟹屋町				
呉工廠広島工場	呉市広	一	専攻科 四〇		
合 計		一一	六六九		

四、指定避難先と経路

災害時の避難先として、近くの江波国民学校、または陸軍の江波射撃場が指定されていた。

五、校舎の使用状況

当校は軍隊関係による校舎接収はなかったが、当時の戦時非常措置方策にもとづき、男女学徒は工場などにどしどし狩り出されていった。しかし、女子学徒の工場勤務には、いろいろと問題となる点が多く、学校としては、その対策について非常に困っていた。最も良策として考え出されたのが、学校工場化ということであった。学徒の勤労は、たとえ学問はしなくても学校において勤労に従事することが最も大切であるという見解から、陸軍被服廠に赴き、学校工場化の希望実現のため、交渉を重ねた結果、許可となり、昭和十九年八月一日、学校において入廠式が行なわれた。校舎の一部(坪数二三〇坪)が工場となり、それに従事する当校生徒約三二〇人(三年生を主体)は、軍属として任命され、講習が八月二日と三日にわたり行なわれ、四日から作業開始となった。しかし、戦局は緊迫して、軍部から「軍服より弾丸の生産が第一である」と命令されるに至り、学校としても、その事態に即応し、学校工場における軍服生産を中止して、急ぎ軍需生産工場へ出動した。そのため、昭和二十年三月末に、良策と考えられた学校工場も閉鎖され、大半の生徒が日本製鋼所で、昼夜四交替の弾丸生産に努力したのであった。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業なし	一二人	〇人	〇人	当校一、二年生徒全員は、市内林木町の建物疎開作業に出動(引率教師八人)午前七時、西福院土堀の南側へ全員整列して、朝礼後、直ちに作業開始した。その他の生徒については、大東亜食料工場に出動した生徒をのぞいては、電休日のため休んでいた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…一部全壊と一部半壊

当校は爆心地から南南西約二・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に校舎の一部は倒壊したが、大半の校舎は半壊程度の被害で、窓ガラスや屋根瓦などは飛散し、天井・廊下および建具類が破壊された。

なお、本館中央部二階の屋根にある手摺付近が、放射能熱線で自然着火し、煙を出していたが、発見が早く燃えあがる以前に消し止めた。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒
即死者	(七)人	(五四四)人

重軽傷者 行方不明者	一〇	(二)
計	一〇(七)	(五四六)

()内は学校外(特に動員先)での被爆者数

六日の朝、市内材木町付近の建物疎開作業に出動した一、二年生たちは、原子爆弾が炸裂した一瞬、その熾烈な放射能熱線と、爆風圧をもろに受けて、地面に叩きつけられたり、吹きとばされたりした。まだ一三、四歳の少女五四四人が、突然、いけにえにされたのである。即死者と重傷者が折り重なっている中を、どうにか歩ける者は、近くの元安川や本川に逃げようとしたが、逃げる途中で倒れる者が多かった。荒れ狂う火炎に追われて、川の中に飛び込む者、灼けつく熱さに喘ぎながら、近くの水槽に入る者など、逃げまどったすえに全員が死亡した。ごく僅かの生徒が川べりにたどりつき、救援に来た軍の舟艇に収容され、似ノ島に運ばれたが、この生徒も生きることではできなかった。

炸裂後は全市が火の海と化し、夕方になっても、なお、火炎・熱風はおとろえず、救助しようにも近づけない状態であった。ついに救助の人も来ず、到底助かることのできない自身を悟った生徒の中には、「天皇陛下万歳」を三唱し、また、「君が代」を静かに歌いつつ絶命した者もあったと伝えられている。

二年生山崎仁子の父山崎益太郎の手記(流燈掲載)に、次のとおり惨状が述べてある。

「…私が元安川畔の現場に辿りついたのは、あの日の昼過ぎであった。…元安川に架けられていた仮新橋は、その時既に半分落ちていた。ちょうど腰の辺まで水があったが、川を歩いて渡った。ああ何たる悲惨。河原一面、砂洲寄りに無残にも、何十何百の少女らが、或いは傷つき、或いは眠り、実は既に事切れしか、また斃れ、あちこちに僅かに蠢動し、かすかにウメキ声が聞える。

驚くことには、どれもこれも素はだかである。シュミーズもスカートも焼け、身体はユデ蛸のように赤黒色になっている。…私は漸く仁子を見い出した。勿論、身体は焼けただれ、僅かに腰のあたりに手拭の切れ端と、名札と腰下げが残っている。膚は黄色となり、顔はうずばれていた。

『おとうさん、咽喉が痛い。』

私は早速川の水を掌ですくって飲ませた。私の家もこの土手の上(天神町)にあった。勿論、焼け落ちている。牛田の親戚に長女孝子を預けてあり、その安否も気にかかり、仁子を背負い牛田へ行くことにした。子供を負って、水の中に入って行ったものの、水が腰のあたりまであり、私自身(中国配電会社で被爆負傷)も相当弱っているとみえて、ともすると倒れそうになる。

幸いこの時、川下から、船舶部隊の兵隊さんが、舟で救援に来てくれたので、大手町側の岸に渡してもらう。こうして、やがて西練兵場紙屋町入口まで来た。西練兵場では多勢の人が休んでいた。会社(中国配電)の人も四、五人見あたった。ここで暫く休憩し、再び子供を背負うて立つ。急に重くなったので、会社の人竹本君に少し上げてもらう。すると、竹本君がチョットおろして見なさいというので、何か異状を予感して、思わずハッとする。そのとき吾が子は、こときれていたのである。何とも譬えようのない思いであった。

それから骸を負って、八丁堀から常葉橋を経て、牛田町の二重堤防の奥まで行く。途中一〇〇メートル歩いて五分休み、一五〇メートル行ったら一〇分休み、自分も倒れそうになり、夢で遠い旅をしているような感じであった。

やっと牛田の親戚に辿りついた。長女の無事な姿を見て、まず安心。何時かと問うと、六時半という。紙屋町から牛田まで(約三キロメートル)、五時間余りかかった。」

このように絶命寸前の少女たちは、肉親が探しに来てくれることを、ひたすら願いながら、生涯で最も永くつらい時間に堪えていた。助けを求める声やうめき声が、余燼くすぶるなかで、あちらからも、こちらからもかすかに聞えていたが、多くは助けられず死んでいった。

なお、宮川校長は、生徒たちを建物疎開作業現場に引率したあと、尾長町の盲学校に疎開していた県学務課へ人事のことで出張するよう言われていたもので、教師にあとを頼み、生徒たちと別れた。

電車で広島駅まで行き、そこから徒歩で学務課へむかう途中、松原町の路上で被爆した。意識もうろうとして、そこから大正橋へむかった。大正橋を渡ると、日本製鋼所広島工場(もと日本綿花紡績工場)があり、市立高等女学校の生徒三、四、五年全員が、その工場に動員され、寮に泊っていたからである。

工場に入ると、すぐ指導員(引率教師)が宮川校長を見つけ、負傷している頭を洗い応急処置をした。しかし、疎開作業の生徒たちが心配になり、工場を出て大正橋を渡ったとき、西から逃げてくる避難者の群れの中で、生徒の親と

出あい、到底行かれないことを知らされた。その生徒の親が比治山公園へ逃げようと言うので、一緒に逃げていき、比治山の防空壕のなかに横たわった。防空壕の中には、負傷した電信隊の将兵が幾人もかつぎこまれて来たとし、一般の負傷者もつぎつぎと逃げこんで来た。これがちょうど正午ごろであったが、大混乱の壕内に夜になるまで寝ころんでいた。

そこから皆実町の自宅(電信隊横)まで近かったので、夜になってからトボトボと歩いて帰った。家は大破していたが幸い焼けてはいなかった。

七日、舟入町の学校へ状況を見に出かけたが、フラフラとまた倒れそうになり、そばにいた教師に支えられて、校庭の防空壕に横になった。それから当分のあいだ動くことができなくなった。

爆風で吹き飛ばされ、右手くび・顔などに火傷した宮川校長は、その後、比較的被害の少なかった牛田町の知人宅に逃れて、八月末日まで臥床療養し、起きあがったのは九月になってからであった。

八、被爆後の混乱

八月六日、建物疎開作業に出動した引率教員および一・二年生全員の殉死の情報が入ってきた。また、校舎は使用不能なまでに破壊されたが、同日夕刻には、早くも校庭の防空壕内に受付所を設けて、生徒の安否確認、家庭との連絡など、惨禍の実状把握につとめた。

翌七日、本館を整理して、ここを仮本部とし、生存教員が手分けして、全市に生徒の姿を求めて搜索を開始した。

九、学校再開の状況

学校の再開

強烈な爆風により、校舎は全壊・半壊の被害を蒙った。窓は破れ、壁は落下し、柱は折れ、備品は散乱破損して、惨状は全く手のつけようもない有様であった。しかし、生存教員と生徒は一致協力して、校舎や校庭の清掃と整備を、たんねんに行なった。また安佐郡可部町から屋根修理の職人をやとって、本館一部の屋根を修理したり、海田市町の大工に、窓わくなどの修理を依頼したりして、ようやく六教室を整理することができた。

被爆直後から第二学期開始までの復旧状況は次の通りである。

八月六日 校舎南側の防空壕にて、生徒搜索の事務をとる。

八月七日 校長室・事務室・職員室・応接室を取片づけて、学校本部を開設、本日から被爆生徒の搜索を全面的に実施する。

八月十日 校舎および附属建物の倒壊や破損状況を、市役所や県内政部長あてに報告、学校長は市役所に出頭のうえで、修繕復旧方を請願する。

八月十一日 被爆後、はじめての職員会議を開く。

八月二十九日～三十一日 全職員は九時に登校し、復旧作業にあたる。

九月五日 有志生徒が登校して、復旧作業を行なう。

九月十七日 講堂および本館の教室を職員と生徒の手で修理する。

こうして、二十年九月十九日から第二学期の授業が開始された。しかし、登校は晴天の日のみとし、四年生・三年生および少数の一・二年生の生存生徒で三編成の組を作って、合併授業と復旧作業を行なった。雨天の時は家庭修練とし、また日曜日はもちろん休日であるが、雨天多き週には、つぎの日曜日を授業日とした。

第二学期開始当時の出席教員数は約三二人で、生徒数は約四一六人(一年生二〇人・二年生二二人・三年生一七八人・四年生一九六人くらい)であった。

登校して来る生徒の大半は、被爆による焼失をまぬがれた家庭や、被害を受けても軽い家庭の者であったから、学用品・教科書などはわりかた持っていた。また、学校も焼失をまぬがれたから、図書関係も無事であり、生徒に必要な書籍は貸与もして学習を進めた。また、日本製鋼所に動員していた関係で、ノートや鉛筆類は払下げがあり、その品物を生徒に交付するなどのやり方で、苦難をのりこえてきた。

本校は、広島市内各学校のなかでも、被爆による人的被害が最も大きかった学校であり、現在、平和大橋西側のたもとに、広島市立第一高女職員生徒慰霊碑が建立されている。この慰霊碑のほかに、戸坂町持明院内にある慰霊碑の碑陰に記された宮川校長の「教え子を水槽に入れ自らは掩ひとなりて逝きし師のあり」の短歌は、杳木良之教諭が被爆翌日、材木町西福院の所の水槽に、森政夫教諭が生徒を水槽につけて、自分の体でかばったまま死亡していたのを発見して、校長に報告したのが、作因となった。

幸恵の言葉

森本トキ子(動員学徒故・森本幸恵の母)

…以下は幸恵の言葉のままです。

一時間作業し、八時休憩になり、誓願寺の大手の側で腰をかけ、友だち三人で休んでいると、ああ落下傘が三つ、きれいきれいと言騒がれるので、自分も見ようと思い、一歩前に出て上を向くと同時に、ぴかりと光ったので、目をおさえ耳に親指を入れて伏せたら、その上に一尺はばもある大手が倒れ、腰から下が下敷きになり、頭の麦わら帽子は火がつき焼けていました。

長いことかかり、大手の下から出ることができ、あたりの友だちを見れば、皆、目の玉が飛び出し、頭の髪や服はぼうっと焼けて、お父ちゃん助けて、お母ちゃん助けて、先生助けてと、口々に叫んでおりました。その時目を抑えた者が三人だけでした。「どうせ生きられないんだから、みんな一緒に死にましょう。皆さん舌をかみなさい。」と言って、貴女は誰、貴女は誰と名前を呼びあい手をつないで、そこへ屈んでおりましたが、暑くてとてもいられませんので、目のある者だけ三人逃げられるだけ逃げましょうと、転びながら県庁の橋のところまで来たら、一人の友だちが、私死ぬると言って倒れたので、二人は離れまいねと言って手をつないで、ヒョロヒョロしながら川まで下りました。

その友だちも死ぬると言って、水の中へズブズブと倒れましたので、背中の服を捉えて水の無い橋の下へ引ずって行きました。

しばらくすると、大きな真黒い雨が降り出しました。初めは飛行機が油をまいたのかと思いましたが、咽喉が乾いてたまらないので、両手で受け、一口くらいたまったので、それを飲みました。

川に水があっても死人で埋まり、それに人が、があがあ吐きますので飲まれません。

そのうち私はたくさんの血を吐きました。それきり気を失い、夕方寒いので目が覚めて隣りの友だちを見れば虫の息でした。この人も、もうだめだと思い、こそこそ這いながら逃げようとしたら、兵隊さんが来て、此所に生きた子がおるぞ、と言って、舟に乗せられ、またそのまま気を失いました。

二日後に気がついたとき、兵隊さんが、気がついたか、と言って親切に世話して下さいそうです。

その時、幸恵の傷はほとんど無く、額と右手を焼き、それに大手の下から出るのに足の膝を、両方ともくると皮が取れて、赤身が出ておった程度でした。(以下略)

[第十六項 広島市立第二高等女学校](#)…429

(現在・広島市舟入高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市翠町七ノ割一、七九七番地

校長 迫隆一

教職員 一一人

生徒 四一七人

校舎 当時、第三国民学校(現在翠町中学校)の校舎を間借した。

創立年月日 昭和十八年四月一日

註・昭和十七年開校の広島市立実科学学校を引継ぐ

爆心地からの距離 約三・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島市立第二高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
巢守金属工業株式会社	水主町一五二	一人	四九人	航空機エンジンの部品製造	

四、指定避難先と経路

別に定めなかった。

五、校舎の使用状況

第三国民学校の項を参照

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
平日授業	二人	二〇〇人		巢守金属工業株式会社へ学徒動員で出勤した生徒四九人を除き、他の生徒は登校した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊

当校は爆心地から南南東約三・二キロメートル離れた所にあり、炸裂と同時に屋根瓦は飛散し、天井や廊下は破損し、建具などの大半も破壊されたが、校舎は倒壊せず、出火もなかった。

(二)人的被害

原子爆弾炸裂の一瞬、その衝撃による校舎内の飛散物その他で、在校生徒の大半が負傷した。幸い死亡者はなかったが、学校はただちに地区別・班別に生徒の点呼をしたうえで、生徒数人を一組に編成し、全員の帰宅を命じた。

生徒は学校から出て行ったが、市中はさらに被害甚大で、いずこも猛火に包まれていたため、帰宅しようにもできず、また、逃げ場もわからず、その大部分が途中から逆戻りしてくる状態であった。

学校はいちじ、生徒収容所となったが、夕方ごろには、それぞれつてを求めて、その行先きに向うか、または自宅に帰っていった。

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	〇人	(七)人	()内は動員先における被爆者数
重軽傷者	二(一)	二〇〇(一二)	
行方不明者	〇	〇	
計	二(一)	二〇〇(一九)	

八、被爆後の混乱

在校の教職員や生徒たちが、爆風によるガラスの破片で負傷したけれども、在校者にも登校中であった生徒にも、死亡者が出なかったことは幸いであった。

最も心配であったのは、当日、市内水主町の巢守金属工業株式会社に出動中の生徒四九人の安否であった。

この工場は、爆心地から約一・二キロメートルの距離という近い場所にあったから、その被害も甚大なものと思われたが、全市的な惨状のなかでは、調査手段もまったくなかった。ただ、幾日かのち、登校して来た生徒の話を頼って、調査を進めていき、だいたいの動静をつかむことができたような状況であった。

校舎は半壊し、幾つかの教室は外郭だけを残すに過ぎないというあわれなありさまとなったうえ、生徒もまた、その家庭が破壊されて郊外へ移住した者が多かった。このほか死亡者もあり、重軽傷で床につく者などあって、学校の機能は、完全に停止状態となった。

しかも社会秩序の壊滅から、残存校舎についても資材の盗難が毎夜続き、その警備対策にすら困ったほどで、学校の復興措置など早急には思いもよらぬことであった。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、各教師は死亡者の調査を押し進めると共に、重傷者や遠地避難などによる特別事情のある生徒以外は、ただちに登校するか、出勤工場への復帰を命じて、戦災後の処理や生産について敢闘するよう促した。

八月十五日、戦争が終結するところとなり、当局側の指示にしたがい、農家の生徒は即時帰農させ、その他の生徒には特別の事情のある者を除き、なるべく登校を促して校舎復興作業にあたらせた。

八月二十三日、全生徒集合の事を街頭に公告して、生徒の掌握につとめるとともに、この日を授業開始の日とした。

公告によって集って来た生徒たちは、食糧増産と復旧作業などを主とする授業を開始したが、公告の伝達も思うよ

うに徹底せず、また遠地居住生徒の通信連絡も十分にできず、生徒の動向ははっきりとつかめなかった。

そこで学校としては、生徒動静確認のための調査状を作成し、九月十三日に再度これを発送したのであった。

九月から第二学期授業開始期における当校教職員は校長ほか一四人で、生徒数は一年生一〇二人、二年生九九人の合計約二〇一人程度であった。

第十七項 修道中学校、修道第二中学校、修道学校…435

(現在・修道高等学校・修道中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南千田町一、一九九番地

校長 国崎登(当時出征中)

校長代理 戸田貫一

教職員 四五人

生徒 概数一、〇一五人

校舎 木造二階建・四九教室・延一、九五二坪、寄宿舍二六七坪

敷地面積 九、二三〇坪

爆心地からの距離 約二・四キロメートル

修道中学校 修道第二中学校 修道学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
合同製鋼所	三篠町	一人	三年生 三三人	旋盤作業 製品運搬	被爆による死亡者三人
日本製鋼所広島工場	安芸郡船越町	三	五年生 一八〇	兵器製造作業 製品運搬	一、工場の一部は、加茂郡西高屋村に疎開するにつき教諭一人と生徒三〇人がこの地に出動した。 二、被爆による死亡者四人
兵器補給廠	霞町	五	三年生 実講科生 三〇六	弾薬製造 兵器整備	一、弾薬製造部は、佐伯郡宮島町包ヶ浦にあり、上記のうち教諭二人と生徒八〇人はこの地に配属された。 二、被爆による死亡生徒三人。 三、教諭一人は中国五県報国隊特別軍事講習のため十日まで安芸郡船越国民学校に出張中。
三菱広島造船所	南観音町	四	四年生 二三五	造船作業	一、出動途中電車内で教諭一人死亡。二、生徒軽傷二〇人で死亡者なし。
呉海軍工廠	呉市	三	五年生 実務科生 一二〇	運搬作業 一般事務	一、教諭一人出勤途中で死亡。 二、出勤制途中日曜日帰宅し、出勤前に罹災死亡したもの五人。
建物疎開作業	雑魚場町 市役所南側	八 助手二	一年生 二年生 一八三	公会堂疎開跡 片づけ	一、ほとんど全生徒が被爆死亡。 死亡者 一八三 教諭 八 助手 二
合計		二六	一、〇五七		

四、指定避難先と経路

工場関係に出動していた生徒(三年生以上)は、各出動先の実状に応じて、避難先をきめていた。学校残留組の生徒(一・二年生)は、緊急の場合には、第一に運動場へ集結し、その後の状況に応じて帰宅させるなり、または、緊急避

難を指示していた。

五、校舎の使用状況

被爆前には、軍隊関係による校舎使用や物資集積などについては何もなかったが、被爆後の八月九日から十一日まで三日間は、陸軍砲第一九八四一部隊約一〇〇人に校庭使用を許可した。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
家屋疎開作業(一・二年生)	三人 (外に理事一人)	九人		在校者八人は、登校日を間違えて登校してきた一年生。一人は疎開作業隊から連絡に帰ってきた二年生。

当時、中学校三年生以上の生徒は、学徒動員で各工場に出動していた関係から、各自は直接工場に集合していた。中学校一・二年生は、当時、勤労学徒隊として市内の家屋疎開作業に出動していたが、一年生と二年生は交替の隔日出動で、一日は休養日ということになっていた。しかし、交通や、その他の社会事情で事実は一・二年生の混成で作業をする状態が多くなっていた。八月六日は、三年生を主体として、一部の一年生を加えた混成で、作業に従事した。従って大部分の一年生は休養日として家庭にあったが、登校の日を間違えて八人の生徒(一年生)が登校していた。そのため、八人のうち、一人は倒壊物の下敷きとなり即死した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊と一部全壊

当校は爆心地から南方約二・四キロメートル離れた所に位置しており、炸裂と同時に、校舎の大半は完全に倒壊したが、一部校舎は屋根瓦や窓ガラスなどが吹き飛び、壁および天井にも破壊された所が何か所もあって、半壊程度の被害を受けた。炸裂による火災の発生はなかったが、当校隣接の帝国人絹工場に火災が発生し、火の手は急速に広まって大火となった。その火の粉が猛烈に校内にふりかかって来て、倒壊した東校舎四組の屋根や、校庭に集積中の防空資材に延焼した。一時は火勢が非常に強くて、手のほどこしようもなかったが、当直中の浜本書記・夜学生の名越某および近隣の人(二人)が必死の防火活動を行なって火災を消し止めた。

この防火活動は、火災から学校を守ったのみならず、町全体を守った行動として一般市民からも非常に感謝された。なお、当校校舎の被害実状は、次のとおりである。

全壊校舎	半壊校舎	備考
本館二階建 職員室・図書室・校長室・応接室・ 博物室・博物準備室・普通教室四	新校舎二階建 一 普通教室 四 工作室 一 事務所(二階建)	原子爆弾による校舎の被害で、全壊は五棟と寄 宿舍および倉庫などで、その面積は、五、〇二 六平方メートルにおよぶ。
講堂式道場平屋 柔道場 剣道場	敬道館(二階建四室) 宿直室 舎監室	
中校舎平屋 理科関係 七室 普通教室 六室 南校舎平屋 普通教室 十一室 寄宿舍(二六室) 倉庫		

(二)人的被害

区 別	教 職 員	生 徒	備 考
即死者	三(一〇)人 即死者三人は財団役員、動員 中の即死者一〇人中八人は教 職員で二人助手	七(一八三)人 建物疎開作業出動中の生徒死亡者一八 三人の中で、一年生は三二入、二年生は 一三六入、工場動員中一五人である。七 人はその他	()内は動員先の被爆者数 ()以外はおおむね自宅で の被害数
重軽傷者	若干人	若干人	
行方不明者	〇	〇	
計	三(一〇) ただし判明分のみ	七(一八三) ただし、判明分のみ	

六日当日には、大部分の教職員および生徒は勤労働員、または緊急動員作業に出動中で、学校には玉川教諭・夜学

生名越助手などの数人が残留組として在校中であった。校舎の倒壊により、玉川教諭は頭部を負傷し、入江理事は負傷と骨折の重傷であったが、残留組で生き残った者は、まず第一に御真影の避難を考え、負傷した玉川教諭は浜本書記の助けをかりて、御真影避難の任務をはたした。次いで校内の防火につとめて、隣接の帝国人絹工場からの飛火を防いだ。

登校日を間違えて登校してきた生徒八人(一年生)の中の一人は運悪く、倒壊した校舎の下敷きとなって圧死した。また、公会堂の疎開跡片づけに出動して、連絡のため学校へ派遣された二年生四竈揚は、校舎倒壊と共に頭部に深い傷を受けた。その他の生徒たちは浜本書記や、被爆直後、急ぎ動員先から帰校してきた白石・妹尾両教諭、また、軍事講習で出張中の景山教諭などが必死となって助け出し、半壊の敬道館内に収容し、ただちに生徒の家庭に連絡をとった。

また、学徒動員で出動中の生徒(三年生以上)は、その出動場所が市内でも段原町・観音町・三篠町・船越町、または呉市などの、爆心地からは、比較的離れた場所であったから、人的被害は僅かなものであったが、雑魚場町方面の家屋疎開作業に出動した生徒(一・二年生の混成)は、甚大な被害を受けた。ちょうど生徒たちが作業に取りかかった時に被爆し、全員がはげしい熱痛と強烈な衝撃を受けて吹き飛ばされたという。被爆直後、引率教員は事の重大さを知ると同時に、我身の重傷もかえりみず、生徒の統率と収容に全力をつくしたが、何程のこともできず、生残った生徒は、大混乱のなかで、ちりぢりになった。

被爆直後、動員先の工場から急ぎ帰校してきた景山・丹生谷・白石の各教諭は、生徒の安否について直ちに調査活動をはじめたが、ただ避難中の生徒の口から得た話をたよりに、その家族との連絡を保つように努めるのが精いっぱいであった。また、三教諭は、広島赤十字病院・県病院などの市内各収容所をたずねてまわったり、陸軍運輸部の舟艇で、似島や金輪島の収容所をめぐる生徒を調べた。

似島検疫所では、検疫所に入ると、通路といわず、コンクリートの土間といわず、焼けぶくれた人々が、赤チンを塗られて、雑然と倒れうめいていた。うめき声を出している者はまだよいが、うめき声すら出ず、意識も失いかけて、ただうごめくだけの者、何か声細く呼んでいる者など、凄惨な光景であった。

「修道中学の生徒はいないか、修道の生徒は返事をしてくれ」と、叫び続けて、生徒を求めた結果、一〇数人の生徒を発見したが、その中で、土間に横たわっていた生徒(一年生)は半身を起して、「先生、僕はさっき先生に会いましたよ。八丁堀の所ですよ、よく来てくれましたね。また来たのですか、うれしいですよ、僕の名前ですかー」という。この生徒は意識が混乱しているのだろう。当時、動員に出ていた教員を知るべくもない生徒が、生死の境をさ迷いながら、学校のことを夢見ているのであった。明日たずねて来る時には、この世にいないだろうこの生徒に、教諭らは言うべき言葉もなく、ただただ涙を流すのみであった。このような生徒たちを、その後、二回、三回とたずねて、ちくいち父兄に報告した。

八、被爆後の混乱

一年生および二年生に対しては、休校のままの状態、行方不明生徒の所在調査に終始した。三年生以上の動員生徒(各工場関係方面に出動)の職場は、各自により多少の相違はあるが、作業場が大被害を受けた所は休業となり、また、その他の現場も事態のショックで、半休業の状態のまま終戦を迎えた。学徒動員も終戦とともに消滅してしまった。

生徒の家庭は県下一円にわたっていたが、郡部の生徒の家庭は無事で、食糧や勉学のゆとりもあったが、市内在住の生徒の家庭は全てを失って、生計の手段さえなくなった者が多数あり、授業再開というような事は、全く不可能な状態に陥った。何よりもまず第一に家庭の落ち着きを待つ必要があったから、学校としては一定の期間中、社会状況の正常化を待って、家庭事情の調査を中心に、それに学校再建の寄付金募集をかねて、教員および父兄役員とで巡回することに決定した。また一年生・二年生については、八月末までを休校とし、九月一日を登校日に指定し、生徒情報を極力集めることに努力した。

九、学校再開の状況

学校の再開

当時、広島市には七五年くらいは人が住めないだろうという流説が盛んに話されていたため、学校再建についてもずいぶん評議された。その一案として、海田市町にあった旧呉十一空廠支所の建物が残っていたので、ここを一時授業所にしてはという考えがきまり、当局と交渉して、建物の視察に行くなどしたが、徒労に終わった。結局、現在地で残存校舎を修理し、九月一日から、一応授業を再開しようということになり、とりあえず四教室を作って生徒を集め、

九月十五日、第二学期の授業を始めた。授業再開当初の教職員は二三人、生徒数は約九〇五人(一年生二九七人・二年生九八人・三年生二六五人・四年生二四五人)程度であり、一年生および二年生は一週に四日(月火水木)の登校で、一日約四時間の勉強を続けた。また、三年生および四年生も一週に四日(水木金土)の登校で、一日約四時間の勉強といった変則授業であり、また、各学年は二学級を一組にした合併授業でもあった。このような授業内容で、被爆後の授業は再開されたが、校舎の屋根などがひどく破損しており、雨天の日などは休校といった不便さと、危険なことから、一日も早く校舎再建が望まれた。

昭和二十年十一月、学校関係者並びに父兄や同窓生などによって、修道中学校復興後援会が組織され、昭和二十一年一月十三日に、その発会式をあげたが、その計画書は次の通りである。

仮校舎の建築並びに破損校舎の修理

(一)建築並びに修理の総経費

一、〇七四、五一二円五〇銭

内訳 第一期 一、一一九、五三七円五〇銭

第二期 七五四、九七五円

このうち倒壊資材利用見込額

八〇〇、〇〇〇円

差引必要経費 一、〇七四、五一二円五〇銭

(二)経費調達予定は別途寄付金募集による。

調達目標額 一、一〇〇、〇〇〇円

内 訳

在校生徒父兄 六〇〇、〇〇〇円

同窓会有志 五〇〇、〇〇〇円

このように復興後援会のもとに、逐次校舎の再建は進められていった。また、当校生徒の中には遠隔地の者も多くいたが、被爆後の市内には、下宿生を置くゆとりのある家もなかったから、生徒の動員先であった小破程度の兵器廠の独身寮の払下げを交渉し、所有地主とも借地料などの話し合いを解決して、これを寄宿舍として使用することにした。

当校夜間部については、校長代理の高橋弥一ほか三人(教員は昼間部と兼務)をもって、十月一日より開校された。夜間部(修道学校・修道第二中学校)の生徒に対する授業内容は、修道学校の四年生と修道第二中学校の三年生とを合わせて約五〇人を一学級に編入し、午後五時から八時までの三時間を授業としたが、修道第二中学校の一・二年生は、生徒数も少ないため、希望者は昼間部の適当学年に編入した。

学用品や教科書などについての入手対策は全くなかったが、生徒の持合わせの旧教科書を共用し、できるだけ紙や鉛筆を、家庭から調達してくるといった状態で授業が開始された。昭和二十年も末に近づくころから、悪質ながら紙も出はじめ、物資なども出廻って来るし、生徒の日常もほぼ安定してきたので、授業も当初より一段と充実したものとなった。しかし、教科書や参考書などが比較的容易に得られるようになるのは、まだ後のことであった。

なお、学園構内、講堂の前の緑に包まれた修道中学校慰霊碑には、原子爆弾に散った先生・生徒合わせて二〇三人の霊がまつられている。

第十八項 山陽中学校、山陽商業学校、山陽工業学校、山陽中学校附設広島中学校…446

(現在・石田学園)山陽高等学校、山陽商業高等学校、山陽工業高等学校

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市宝町三五二ノ一番地

校長 石田賢一

教職員 概数九五人

生徒 概数二、〇〇〇人

校舎 木造二階建・五〇教室・延二、一八八坪・鉄筋三三五坪

敷地面積 五、四七一坪

爆心地からの距離 約一・二キロメートル

山陽中学校・山陽商業高校・山陽工業高校・山陽中学校付設広島中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
市内建物疎開作業	雑魚場町	六人	約四一〇人	疎開跡片づけ	
	天満町	一			
東洋製缶株式会社	天満町	一	約一〇〇	缶詰	
桐原容器工場	舟入本町	二	約一二〇	諸容器製作	
三菱重工広島製作所	南観音町	三	約二〇〇	造船船体修理	
呉海軍工廠	呉市広町	三	約二〇〇	砲弾製作	
旭兵器工場	佐伯郡地御前村	一	約一〇〇	兵器製作	
日本製鋼広島製作所	安芸郡船越町	一	約一五〇	兵器製作	
大東兵器株式会社	中広町	二	約九〇	兵器製作	
大竹三菱化成工場	佐伯郡大竹町	二	約七〇	有機硝子製作	
中国塗料株式会社	吉島本町	一	約六〇	酸素発生塗料製作	
中本鉄工所	大洲町	二	約五〇		
宇品造船所	宇品町	二	約五〇	造船修理	
宮本航機工場	皆実町	一	約五〇	信管製作	
合 計		二八	約一、六五〇		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

校舎の一部(約一〇〇坪)は、陸軍部隊に貸与されており、常時約五〇人程度の通信技術練習生が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
職員および生徒は全員が学徒動員中であった。	六人	五人	(小使い)三人 陸軍部隊五〇	当日、在校していた者は、きわめて少数であり、事務員の中には登校中に被爆した者が数人あった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から南東約一・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に校舎は一瞬にして倒壊し、約一五分後には西側寄りの倒壊建物あたりに、熱線によって自然着火したが、消火の手もなく、火勢は急速に広まっていた。猛火に包まれた倒壊校舎は、約一時間半で完全に灰になったが、奉安庫と予備校校舎の一部は、焼失をかわりてまぬがれた。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	四(一一)人	四(四七五)人	()内は動員先での被爆者数行方不明者
重軽傷者	二(五〇)	一五(二〇〇)	
行方不明者	〇	〇	
計	六(六一)	一九(六七五)	

当時、二年生以上の生徒は、全員が学徒動員隊として、各工場などに分散配置されて勤労していたが、一年生も昭和二十年七月からは授業を離れ、作業命令により、市内建物疎開作業に動員されていたから、学校は文字通り空家に等しく、被爆当日は、校長以下残留組の教員および生徒数人と小使三人が在校していたにすぎなかった。これら在校者の大半は、校舎倒壊で即死したが、生徒の中には、下敷きになりながら奇跡的に軽傷程度の負傷で助かり、宇品方面に避難した者もあった。

二年生以上の工場勤務生徒は、各工場が爆心地から比較的遠距離にあった関係で、重傷者や死亡者などは極めて少数であった。しかし、雑魚場町方面や天神町方面の家屋疎開作業に出動していた一年生は、大惨害をこうむった。

一年生の出動場所は爆心地に近く、炸裂の瞬間、あっというまに即死した者もあり、また中には、作業前のいっときを上衣を脱いでラジオ体操中の者もあって、凄惨をきわめた。生徒のほとんどが着衣は焼け、顔・手・足などの皮膚が火傷で剥げて、たれさがったままの姿で、逃げ迷い、さまよい歩いた末に、両親の名を呼びながら息絶えた者、やっと家に辿りつくや息を引取った者、水を飲もうとして川に落ちて死んだ者もあって、その悲惨な状態は言語に絶した。

八、被爆後の混乱

家屋疎開作業に出動した一年生の大半が全滅し、その他の生存生徒も、市内在住者のほとんどが、家庭や家族を失って四散したため、連絡の取りようもなかった。また、校舎も全焼してしまい、いちじは手のほどこしようもない状態であったが、生存教職員もようやく自失の状態から立ち上がり、まず、生徒の安否の調査から始めた。被爆後、延焼をまぬがれ、僅かに形をとどめた予備校校舎が、その後の連絡場所に使用されて、誰が立てたか、山陽中学校本部の旗がひるがえり、壁面は生徒をさがしたり、お互いの安否を知らせる貼紙で埋った。

幸い、学籍簿は奉安庫に保存されていたため焼失をまぬがれ、教職員はこの学籍簿をたよりに、調査の手を四方にのばしていった。九月十二日、「東練兵場の東照宮前に集合」の貼紙を市内各所に掲示したところ、当日集った教職員は六人、生徒数は約八〇人くらいであった。共に健在を祝し、一週間に一回の集合を申合わせて解散した。第二回目の集合を九月二十日にし、集合の便宜を考えて、集合場所を二か所に分けた。この日、東照宮には約一五〇人くらい、横川駅前には約五〇人くらいが集ってきた。このようにして生徒の動向を知ると共に、停止状態にある学校機能の回復が望まれるところとなり、生存教職員は、学校復興のための協議をたびたび重ね、当局との交渉も始められた。さしあたり、佐伯郡廿日市町の山陽女学校の校舎一部使用が認められたため、十月初旬ごろから、授業再開の見通しができた。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、学校再建に乗り出し、対外的交渉も行なわれていたが、暫定的な措置として、佐伯郡廿日市町の山陽女学校校舎の一部を借用する話し合いがつき、十月初旬ごろから第二学期の授業を開始することができた。石田賢一校長、ならびに谷元坂一教頭の被爆死によって、村上教諭を校長代理に選任し、教職員一二人、生徒数約二〇〇人程度で授業が再開された。借用教室が四教室のため、授業は隔日に午前中のみとした。また、教科書などについては、旧教科書の持ちあわせを共同使用することとし、文部省および進駐軍関係からの指示勧告によって、旧教科書の訂正したものを使った。入手困難のものはプリント印刷のものを応急的に使用した。

その後、生徒も次第に増加して、学校再建の声も日一日と高まり、復旧のための交渉がたびたび重ねられた結果、昭和二十一年四月に、市内向宇品の旧陸軍高射砲隊兵舎の借用がきまったので、昭和二十八年末までに、校舎復興事業計画を次のとおり計画した。

(一)普通教室九〇〇坪・講堂一六五坪・特別教室一四一坪・その他、宿直・物置・浴室四〇坪などの建造を予定。

(二)その建造に必要な資金は、借入金と父兄および卒業生の寄付金によってまかなうこととした。

このように、山陽女学校での不自由な隔日授業(約二か年間)も昭和二十二年の秋で終り、向宇品の旧兵舎に移転してきたが、まだバラック建ての小屋が山上に点在するのみであり、また、交通上からも、これからの学校運営に多大の支障が起り得ることが予想された。このような状態から、旧校地への新校舎建設が、全校あげて熱望する声となり、復興事業計画の練り直しをした。石田専務は学校再建の資金調達に奔走すると共に、他の職員もまた、調達に協力することによって、復興事業計画も着々と進行し、旧校地(市内宝町)に、昭和二十三年三月初旬、復興第一期工事として延三二〇余坪の校舎が落成し、三月十二日に移転することができた。その後の復興事業工事は次の通り遂行された。

第二期工事 昭和二十三年十一月十日に竣工、木造二階建校舎延二三三坪の建築

第三期工事 昭和二十五年十月十日に竣工、木造二階建モルタル塗装校舎延三五一坪の建築

第四期工事 昭和二十六年十月二十日に竣工、木造平屋建(一部二階)モルタル塗装校舎と総合研究室一六五坪の建築

第五期工事 昭和二十七年十一月一日に竣工、木造二階建モルタル塗装の特別室延一四一坪の建築

第六期工事 昭和二十八年八月十日に竣工、木造平屋建宿直および小使室三六坪の建築

このようにして、校舎復興事業も順調かつ迅速に運び、今日の石田学園を作り上げたのであるが、その裏面には教職員・生徒および父兄などの涙ぐましい努力があった。

第十九項 崇徳中学校…454

(現在・崇徳高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市楠木町四丁目三八番地

校長 竹野恵真

教職員 三七人

生徒 一、一七三人

校舎 木造・二六教室・延一、六五九坪鉄筋・五教室・延四六七坪

敷地面積 五、五二三坪

爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

崇徳中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	八丁堀	七人	五一四人	疎開跡片づけ	
水田金剛砥石工場	楠木町三丁目	一	四〇		
三菱重工業機械製作所から小網町建物疎開	安佐郡祇園町		一九七	疎開跡片づけ	
三菱重工業機械製作所	江波町		二一一	製缶工場の熔接	
兵器支廠	出汐町	一	六〇		
油谷重工業株式会社より水主町に建物疎開	安佐郡祇園町	一	六二	疎開跡片づけ	
海軍工廠	呉市	一	四五		
学校防衛隊	本校楠木町四丁目	三	四四		
合 計		一八	一、一七三		

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

当時、鉄道第二大隊(第一三三五二部隊)が校舎の一部(第一校舎・道場・売店・小使室・宿直室・本館など)を使用しており、常時約二〇〇人くらい駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業なし、全員動員で出動中	三人	四四人	鉄道第二大隊 約二〇〇人	当日・学校防衛隊として教職員三人・生徒四四人が登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から北北東約二・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に木造校舎は一瞬にして押しつぶされてしまった。その後、約一時間くらい後に、南側の倒壊寄宿舍付近に火災が発生し、次第に倒壊校舎に延焼していった。本館の焼け始めたのは、炸裂後、約一時間半ぐらいあとであったが、鉄筋コンクリート造りの講堂

は、外郭のみを残して焼けた。夕刻近い五時ごろには、ほとんどの校舎は焼け落ちていたが、講堂内部には未だ所々に悪魔のような赤い火が出ていた。

原子爆弾炸裂後、駐屯中の鉄道部隊とともに、被害状況につき、軍部へ連絡したところ、校舎延焼は防止せよ、との返事であったが、学校の周囲は猛火で近づくことができぬ状況にあり、また駐屯兵や防衛隊・本校の職員および生徒の大半が火傷したり、負傷している者ばかりで、防火活動も十分なことができない状態にあった。そのため、校舎延焼に対しては手の施す術もなく、ただ元氣な者が重要書類などの搬出を手伝い、負傷者には応急処置を施すことが、やっとできたというありさまであった。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(一〇)人 (三) 〇	(五一〇)人 四四(四六) 〇	()内は、動員先での被爆者数
計	(一三)	四四(五五六)	

炸裂後まもなく、空には入道雲が一面に出て、雲は雨を呼び、煤を含んだ雨がパラパラと降りはじめた。

本校関係で最も悲惨をきわめたのは、一・二年の生徒たちであって、当日市内八丁堀・白島線方面(爆心地から東方約八〇〇メートル)に出動し、家屋疎開作業に従事中であった。生徒五一四人と教師七人は、全員が重傷を負い、即死する者もいたが、大部分の者は火傷を負い、衣服は焼け、ボロボロに破れたまま、白島方面から常葉橋を経て、東練兵場方面へ、また、一部は北上して、牛田町・戸坂方面へと逃れていった模様である。

しばらく生存していた生徒引率の一教師の話によると、炸裂と同時に「わしについて来い。」と言いながら、無我夢中で走り続けたが、二葉山麓に辿りついて気づいた時には、周囲にわずか数人の生徒がいたに過ぎなかったという。またこの方面の生徒捜索にあたった父兄などの体験によると、国道至る所に、生徒がたおれて、すでに絶命した者、あるいは息たえだえに水を求め、救いを呼んでいたが、面相などによる識別もほとんど不可能な生徒ばかりであった。かろうじて着衣の破片や革バンドなどによる判別で、ごく少数の者が父兄などの手によって収容されたに過ぎなかった。

なお、当時この方面に出動していて、生存が確認されている者は二、三人に過ぎず、引率教師も生存者が無くて、今もって当時の実状を把握することは困難である。

八、被爆後の混乱

校舎焼跡の一隅に、天幕舎を作り、罹災者搜索本部を置いて各所からの情報収集にあたった。

竹野恵真校長は、当日約四〇人の生徒とともに、当校の南方約七〇〇メートル離れた水田砥石工場に出動中であった。炸裂と同時に倒壊物の下敷きとなって頭部に負傷したのもかえりみず、ただちに帰校して、集まった少数の教職員とともにテントを張って対策本部とし、各方面の情報収集にのりだした。また、被爆後、かけつけた生徒父兄の応待に当たるとともに、学校の北方約三〇〇メートル離れた大芝堤に、救護本部を置いて、避難して来る生徒および一般罹災者の救護にも全力をつくした。

被爆前は、一、〇〇〇人余の生徒を収容し、施設の完備を誇っていた学校であるが、校舎附属建物・樹木など一切を、一瞬にして焼失し、今は見る影もなく、ただ鉄筋コンクリート造りの講堂が、その外郭をとどめているのみであった。人的被害も、教員一〇人余が被爆死し、一、二年生のほとんどの生徒が全滅するという大惨事を受けたほか、生き残っている教員や生徒も火傷者や外傷者が多く、登校に堪えられない者がたくさんいた。生徒の中には、家族とともに通学不可能な地域に疎開した者もあったが、それより被爆後の社会混乱と、交通機関などの不調から、十分な連絡ができなかったことも大きな理由で、学校機能は完全に停止した。しかし、幸いにして重要校務書類は罹災をまぬがれ、また、安佐郡祇園町油谷工業株式会社の好意により、会社の一室が借用できたので、ここを仮事務所として徐々にではあるが、再起の方策を立てていった。生徒は、当分の間は自宅療養ということにして、学校としては極力諸情報の収集と連絡に務めた。

九、学校再開の状況

学校の再開

学校再開については、まず関係者が仮校舎の選定と交渉に東奔西走して、市内猫屋町の光道学校(戦時中は広島憲兵分隊となっていたものであるが被爆により鉄筋コンクリート二階建ての外郭のみを残す)借用の交渉が成立したので、九月下旬、一部教職員と生徒を召集して、これを整備した。その結果、十月一日から、整備のできた六教室に、教職

員一〇人と生徒約三〇五人程度で、第二学期として開校された。しかし、授業再開といっても当初は机もなく、白墨さえ手に入らぬ状態であったから、郡部の生徒たちが文具店を探し歩いて求めてきた数本のチョークをたよりに、壁や板片を利用して学習を進めるという有様であった。このような設備不足の状態、日々が過ぎてゆき、なやみもだんだんと大きくなってきたが、学校当局は、校舎復旧の基本方針を、どこまでも原地復旧と定めていたから、一時的ななやみを全員でがまんするものとして、種々、対外的(進駐軍関係および県当局)な折衝を進めた。対外交渉の結果、旧陸軍工兵隊の牛田作業場に集積されていた木材の一部を譲渡された。この資材の運搬と原地焼跡の整理作業は、登校生徒が日々交替で、これにあたった。このような作業が生徒の日課ともなったが、全焼した校舎の中で、ただ一つ外郭を残していた講堂を利用しての応急的建築がはじまり、昭和二十一年十一月二十日に完成した。できあがった新校舎は、講堂の内部に木造二階建ての一二教室で、生徒の喜びは非常に大きなものであった。さっそく同年の十一月二十八日に光道学校を引払って、新校舎に入った。原地復帰しての再出発は、被爆後一年四か月ぶりに実現し、生徒数も約六〇〇人程度になっていたから、これを一二学級に編成した。以後、生徒数もだんだんと増加して来たので、木造校舎を、逐次増築して復旧を進めたのである。

第二十項 広陵中学校…462

(現在・広陵高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市宇品町二一七の一番地
校長 大阪竹治
教職員 一二人
生徒 概数九六四人
校舎 木造二階建・一九教室・延九一〇坪
敷地面積 五、八〇二坪
爆心地からの距離 約三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広陵中学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	雑魚場町より鶴見橋まで	四人	四〇〇人	疎開跡片づけ	
広島陸軍糧秣支廠	宇品町	二	一五〇	缶詰・穀類の手入れ	
広島鉄道保線区	大須賀町	一	五〇	鉄道保線工事	
広島鉄道第一機関区	西蟹屋町	一	一〇七	機関車関係雑事	
呉海軍工廠	呉市	二	九〇	製銅雑事	
	吉島町	二	一二〇	航空機に関する雑事	
合 計		一二	九一七		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

当時、学校には、常時、陸軍暁部隊が駐屯し、講堂(一六七坪)と三教室(六〇坪)を使用していたが、兵隊の交替もはげしくて正確な数はつかめない。しかし、常に平均一〇〇人程度が駐屯していた模様である。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	

なし	-	-	暁部隊兵士 一〇〇人	当時、生徒は工場関係や建物疎開作業に出動しており、学校での授業はなくて、各々、生徒は出動先に集合していた。
----	---	---	---------------	---

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊(一部全壊)

当校は爆心地から南南東約三キロメートル離れた所にあり、原子爆弾炸裂と同時に、爆風と校舎のむきによって、一部校舎は倒壊したが、大部分の校舎は半壊程度の被害であった。

すなわち、講堂と北校舎(八教室)は炸裂の一瞬に倒壊したが、本館(校長室・事務室・九教室)は窓ガラスや屋根瓦などが散乱し、校舎自体も傾斜したので使用不能となった。なお、倒壊校舎からも、また、周囲の民家からも火災の発生がなくて、傾斜校舎ながらも残った。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(二)人 (六)	(三八)人 (四五〇)	()内は動員先での被爆者数
計	(八)	(四八八)	

学徒動員によって出動中の生徒たちは、炸裂後は、各自がその出動先でちりぢりに避難した模様である。市内鶴見橋付近(爆心地の南東約一・ハメートル)の家屋疎開作業に出動した一、二年生の生徒の一部が、被爆して帰校してきたが、帰校できた生徒のほとんどは、軽傷の者ばかりであり、一同を陸軍共済病院(現在・県病院)で応急手当をさせた。しかし、避難途上で死亡した生徒が二二人もあり、また引率職員一人がが死亡してしる。

その他、出動先での死亡者数は陸軍糧秣支廠七人、吉島航空機械工場三人、広島第一機関区三人、広島鉄道保線区三人である。

八、被爆後の混乱

校舎の被害は、雨天体操場・講堂・南校舎二階建及び北校舎八教室が倒壊し、また、本館は傾斜して使用不能となるなど、校舎の大部分に大きな被害を受けたが、倉庫・宿直室・小使室、それに三教室が使用できる状態に残っていた。人的被害については、生徒に大きな被害を受けたが、教職員関係の犠牲者は二人にすぎなかったので、被爆後一週間目に、校長は緊急職員会議を宿直室で開き、緊急措置などについて協議した。その結果、生徒の消息を調査するため、一度生徒を集めることが必要となった。九月一日を全生徒召集日と定め、その伝達などについては、被爆後一〇日ぐらいしてから、学校の安否を気づかって登校する生徒たちによって、伝達させることにした。すなわち、登校して来る生徒たちを通じて、動員先の状況や級友関係の消息について、できるだけ正確な資料を得ることにつとめ、死亡のうわさのある者は、教職員が自宅を訪問して、これを確認することにつとめたが、当分の間は、死亡のうわさのある者の、三分の一くらいが調査先さえ不明であった。

なお、九月一日の登校指定日に集った生徒は、約二〇〇人前後であった。

また、負傷して動員先から帰校した負傷生徒を、前記のとおり、一時は、陸軍共済病院において応急手当を受けさせたが、その後、学校の使用可能な教室を、救護所として収容し、尋ねて来るそれぞれの家族に引渡した。

九、学校再開の状況

学校の再開

九月一日を登校日としたが、授業のできる教室などもないため、被爆倒壊した校舎の跡片付けや、使用可能な教室などの整備作業に、約一か月間をついやした。その結果、第二学期として、ようやく十月の中旬ごろから教室で授業がおこなえる状態となったが、一教室に約一〇〇人というスシ詰授業であった。昭和二十年の末まではこの状態で過ぎてゆき、昭和二十一年一月早々になって、ようやく本館の整備に取りかかった。工事は約一か月間で、普通教室一〇と校長室および職員室の整備を完了したが、窓ガラスなどはなく、ハترون紙をはって寒風をしのぐ有様であった。当時の出席者は教職員一三人、生徒約三八九人(四年生一〇七人・三年生三九人・二年生九三人・一年生一五〇人)程度であったが、生徒のほとんどは教科書その他を持っておらず、授業もプリントを用いたり、図書室の図書(被爆後も完全に残った)を利用したりして、辛うじて各学年別の授業を続けた。しかし、スシ詰授業と教材不足などで、授業実態は大へん困難なものであった。昭和二十一年の四月になって、普通教室四教室の新築にとりかかり、五月の末には完成した。このころから社会状況なども一段落してきたし、新校舎の完成もあり、授業内容をはじめて充実したものとなった。

(現在・広島県松本商業高等学校 広島県松本商業中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市尾長町二五五番地の一

校長 松本豊次

教職員 二五人

生徒概数 五八〇人

校舎 木造一五教室・延三〇〇坪

敷地面積 三、八五〇坪

爆心地からの距離 約二・八キロメートル

二、学生疎開状況

なし

松本工業学校 学校敷地・学校配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
藤川製作所から建物疎開作業出動	大洲町	四人	七〇	兵器部分品の作成と家屋疎開作業	家屋疎開の現場としては一、皆実町電信隊付近。二、水主町県庁付近
広島駅電気工事区	大須賀町	一	二〇	駅構内の作業	
陸軍(暁部隊)	宇品町金輪島	一	五〇	兵器部分品の製作	
佐伯鋼業株式会社	舟入幸町	四	一一五	兵器部分品の製作	
三菱造船株式会社	江波町	四	一一五	兵器部分品の製作	
三菱重工業株式会社	南観音町	三	一〇〇	兵器部分品の製作	
東洋製罐株式会社	天満町	四	一〇〇	兵器部分品の製作	
合 計		二一	五七〇		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

当時、校舎の一部と校庭の一部が陸軍部隊(中部一三三七七部隊 森川隊)に貸与されていたため、常時、一〇人程度の兵隊が駐屯しており、また、校庭の一部には、軍需物資の建築用木材が置かれていた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業予定なし(職員の連絡会議を実施する)	数人	なし	兵隊 約一〇人	連絡会議…各々動員出動先から職員一人が本校に登校し、行事の打合せをする

当時、生徒は学徒動員で、工場および家屋疎開作業に出動しており、学校への登校はなかったが、引率教職員一人は、出動先から登校し、出動先の報告と、日々の行事の打合せをするため、連絡会議をもうけていた。

なお、藤川製鋼所(大洲町)に出動中の一年生約七〇人は、工場作業の関係で、当日は皆実町方面(電信隊付近)と水主町方面(県庁付近)の二手に別れて、家屋疎開作業に出動した。原子爆弾炸裂時には、ちょうど集合して朝会を開催中であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…半壊、後に約九割程度が焼失

当校は爆心地から東北東約二・八キロメートル離れた所にあり、原子爆弾炸裂と同時に、多大の被害を受けた。炸裂直後、当校の西南にあたる陸軍東練兵場方面に火災が発生し、その猛火は一瞬にして周囲を焼きつくしていった。消火する者もないまま、その後も火勢はますます強くなるばかりで、ついに当校へ延焼した。校舎の焼けはじめたのは、午後四時ごろであったが、それから六時ごろまでの約二時間くらいの間に、校舎の九割程度にあたる講堂・教室(一三教室)、職員室及び事務室などの大半が焼失した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(一)人 (四) 不明	(五四)人 (一〇〇) 不明	()内は学校外(特に動員先)での被爆者数
計	(五) 行方不明含まず。	(一五四) 行方不明含まず。	

八、被爆後の混乱

原子爆弾炸裂時には、校内に生徒はいなく、全員が動員命令によって出動中であつた。動員中の生徒の中にも、特に当日、県庁付近の家屋疎開作業に出動した一年生が甚大な被害を受けた。他の爆心地から距離的に遠く、比較的被害が少なかった出動先の工場では、一応生徒を帰宅させて、その後は学校からの指示を待っていること(主に郡部からの通学生)とした。市内の生徒で自宅を失ったり、家族が生死不明な者は、再び出動先の工場に帰って来ることを申合わせて、帰宅させたが、再び出動先に帰ってきた者がたくさんいた。そこで、全員を陸軍暁部隊に依頼して、当分の間、日々の生活保護をお願いした。学校としては、その期間に極力生徒保護者の安否を調査して、生徒の引渡しに努めたが、これらの生徒全員が、保護者のもとに帰るまでには約一週間を要した。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎の九割程度が焼失したが、幸い五教室(工業科作業室を含む)は、焼失をまぬがれ、整備すれば使用できる状態にあった。学校としては、被爆生徒の捜索が一段落したところから授業再開のため、五教室の整備にとりかかったが、交通の混乱や戦後の社会不安などで、生徒への伝達が思うようにはゆかなかつた。しかし、残存五教室の使用がどうか可能となつたので、十月から第二学期として授業を開始したが、教職員八人で生徒数約一〇〇人ぐらゐであつた。その後、社会混乱が次第に回復するにつれ、登校人員も増加し、授業内容の充実と、校舎機能の完備が、強く望まれるようになってくると共に、校舎の新築や増築をおこなつていった。

第二十二項 安田高等女学校…474

(現在・安田学園)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市西白島町一四一番地

校長 安田リョウ

教職員 二八人

生徒 概数一、〇二八人

校舎 木造二階建・二四教室・延五二九・二九坪

寄宿舍 所在地 市内白島東中町

木造 約二〇室・延約三〇〇坪

敷地面積 一、〇八五・八五坪

爆心地からの距離 約一・四キロメートル

二、学生疎開状況

なし

安田高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	中島町	五人	二五六人	疎開跡片づけ	県庁北側
誉航空工場	楠木町三丁目	三	一六五	航空部品加工	
大橋製靴工場	三篠本町三丁目	二	一六四	軍靴製造	
興亜ミシン工場	横川町	三	九五	ミシン針製作	
広島軽金属(高密度機械工場)	三篠本町三丁目	二	一二九	飛行機部品製作	
合 計		一五	八〇九		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

校舎一棟は通信隊兵舎として使用され、常時、陸軍通信隊(部隊名および兵数不明)が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

在校者数

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
平属授業(残留生徒の授業)	九人	約一五〇人	駐屯兵数不明	当時、大部分の生徒は学徒動員で工場及び市内疎開作業に出動中であつたため、学校には一部の先生と生徒が残留しており、残留組は教室で朝礼中に被爆した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から、北北東約一・四キロメートルの所にあつた。爆発と同時に、校舎も寄宿舎も一瞬にして倒壊した。そのうち、あちこちから火の手が上がり、遂には、あたり一面大火災となり、あとかたもなく焼失した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	六(七)人	三(三〇八)人	()内は、動員先での被爆者数
重軽傷者	五(一)	一九(三七一)	
行方不明者	〇	〇	
計	一一(八)	二二(六七九)	

生徒の大半は、学徒動員でそれぞれの作業場に出動中であつたが、たまたま、当日非番になっていた一部生徒約一五〇人が、学校において授業を行なうことになっていて、登校した。

原子爆弾が投下された時刻には、役付職員は校長室で会議中であり、登校生徒は教室で朝礼をおこなっていた。だから逃げ出す余裕もなく、職員も生徒も全員校舎とともに倒され、しかもその下敷きになった。下敷きになって圧死した者、身動きできず、救いを求めて泣き叫んでいる者、声をあげて脱出する者、降ってわいたようなこの大惨事に、たちまちにして学校は修羅場と化した。

幸いにして、下敷きから助け出された者や、自力ではい出した者は、教師も生徒も、何処に避難するという目当てもなく、たださまよいながら離散していった。これらの者は、避難者の流れにしたがつて、その大部分が北部戸坂村方面、祇園町方面に避難していった。不幸にも、下敷きになって圧死した者と、脱出できなかった者は、その後襲いかかった火災に吞まれた。また、動員先で、わけでも中島町及び天神町方面の家屋疎開作業に出動していた全生徒のうち、白島の学校跡へ帰って来た者は一人もなかった。

(生徒日誌の前文から)

当日朝八時十五分ごろ、北方より B29 と思われる飛行機の爆音を聞くと、間もなく異様な、しかも天地を震撼するような怪音と橙紫色の閃光の波打つようなゆらめきが空にも地にもして、一瞬覆いかぶさってきたと思う瞬間、校庭で、空を仰いで機影を捜していた私たちは、何メートルかあちこちに投げ飛ばされて失神した。何分かの後、ふと気がついてみると、校舎はあとかたもなく押しつぶされ、瓦やガラスは四方に飛散し、樹木は裂けて倒れ、友だちは血だるまとなって倒れて泣き叫び、はるか南の空には、入道雲の黄黒色の汚れたような毒々しい煙の塊が、数一〇〇メートルに立ち昇っているのを見て、あの閃光と何か関係があるのだろうかと思った。そのうち、四方八方から火の手

が上がり、熱風に耐えられなく、苦悶の叫び声はますます激しく、見るもの聞くもの全て恐怖のどん底に陥り、まさに地獄絵図の展開であった。

八、被爆後の混乱

原子爆弾炸裂直後の呆然自失の瞬間は去り、ようやく気を取直した生存職員は、事態の重大さを悟り、倒壊物の下で救いを求めている者の救助に全力を上げたが、火のまわりも早く、少数の力ではどうすることもできない現状であった。また、生存職員は重軽傷の生徒のために、避難場所を捜し求め、倒壊したがしばらくの間は火のまわらなかつた寄宿舎の壕内に、重傷者を収容して、そこを仮救護所とし、応急措置に当ることとした。しかし、医薬品といえば、衛生袋のきず薬だけで、とても全負傷者の治療を施すわけにはゆかず、大方は創口をふいてやるだけであった。そのうち、ここも間もなく火災に包まれる状態となり、再び逃げなければならなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎は全壊全焼した上に、教職員および生徒の全般に、多大の犠牲者を出し、学校機能は完全に停止した。しかし、奇蹟的に無傷または軽傷程度の負傷で助かった六人の教職員を中心に、八月九日、戦災対策の仮事務所を寄宿舎の壕内に設けて、各方面との連絡を開始した。その後、八月二十日には、入院中の校長を中心とする学校再建問題を宇品町川瀬病院内で開き、仮事務所は校舎焼跡に置くこと、貼紙などによる伝達方法で、八月二十五日を生徒召集日にするなどを決定した。しかし、交通や社会不安の関係で伝達も不十分のため、八月二十五日に集合した者は、教職員五人、生徒八九人であった。なお、その場において、九月一日をもって各工場に出動中の動員生徒は一たん解散とし、生徒は家庭修業期間として、九月三日から二十四日までを休校する旨通告した。

その休校のあいだにも、学校としては授業再開の場所を求めて、運動を展開すると共に、復旧対策についても努力した。その結果、安芸郡船越国民学校講堂と附属建物三教室の借用がきまり、九月十三日、開校のための会議が開かれ、九月十七日に仮事務所を安芸郡船越国民学校に移し、二十五日から第二学期の授業を開始する旨、通知や貼紙などによる告示をした。当日出席した教職員は一〇人で生徒数は約一六五人程度であったが、ここによりやく、戦災後の授業が再開されたのである。また、翌日には教職員二人、生徒一一六人参加のもと、原爆死没者合同葬儀を挙行し、不幸にして原子爆弾の犠牲となった幾多の生徒の霊にめい福を祈った。

学校の復旧対策については、土地や建物を求めて各方面と交渉を重ねていたが、十二月になって、市内白島中町にあった旧陸軍工兵隊跡の建物を使用する許可を得た。この兵舎は被爆によって木材・瓦などは飛散しており、当校女生徒の手で、できるかぎりの跡片づけ作業をしたが、到底、使用に耐え得る状態の建物ではなく、学校としての使用には不適当なものであった。しかし、この建物を一日も早く本格的工事を施して、使用可能な状態にしようと、関係方面との交渉が再三重ねられた結果、昭和二十一年一月五日より、校舎および寄宿舎などの復旧工事に着手した。また、二月二十一日には、この旧軍事施設を学校として使用する正式認可を得たので、校舎復旧計画も本格的に進められていった。

また、灰燼となった広島市においては、教科書は全然なく、被害を受けなかった家庭の生徒が持っている教科書を共用して学習したり、そのつど、教師のガリ版印刷物などを使用していた。用紙なども各自が家庭から持ちよった紙の裏面を利用することにおいて、その場をしのいでいたが、昭和二十一年四月ごろから国語・英語・物理などに関する教材は、粗薄ではあるが入手することができるようになってきた。しかし、その他の科目については依然としてガリ版教科書による授業が続いた。

なお、昭和二十三年六月、現学園構内に自然石の学園慰霊碑が建立されて、原子爆弾に散った数多い霊を祀った。

[第二十三項 進徳高等女学校](#)…481

(現在・進徳女子高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南竹屋町

校長 永井龍淵
教職員 約五〇人
生徒 概数一、六五〇人
校舎 木造二階建・延一、一五〇坪
敷地面積 約四、七〇〇坪
爆心地からの距離 約一・四キロメートル

被爆後、現在の地、広島市比治山本町(現在・皆実町一丁目)の元暁部隊跡に再建した。

二、学生疎開状況

なし

進徳高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員*

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	鶴見町	一〇人	二年生 三三九人	疎開跡片づけ	
電話局	下中町	二	三年生 一七〇		
貯金局	千田町	三	三年生 一七五		
東洋製缶株式会社	天満町	三	五年生 八〇		
中国塗料株式会社	吉島本町	一	五年生 二〇 四年生 六〇		
日本製鋼所	安芸郡海田市町	八	四年生 二〇〇 五年生 一一七		
小川工業株式会社	出汐町	一	四年生 六〇		
市役所(軍人援護局)	雑魚場町	一	五年生 二〇 四年生 六三		竹屋町の当校で作業をする
合 計		二九	一、三〇四		

四、指定避難先と経路

なし

五、校舎の使用状況

なし

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
(イ)三年生以上それぞれ職場へ出動 (ロ)二年生、今日から出動	一一人	二年生 三三九人 四年生 六三 五年生 二〇		一年生全員(三六〇人)は、当日家庭待機の日で家庭にいた。

三年生以上の生徒は、女子動員学徒(報国隊)として各事業所(工場・役所など)の仕事に従事していたから、被爆当日も、各人が出動先において指示を受けることになっていた。ただし、二年生全員(約三三九人)は、一度登校してから指示を受け、鶴見町付近の建物疎開現場に出動することになっていた。そのため二年生全員は学校に登校しており、また、市役所関係(軍人援護局)の仕事をしていた五年生と四年生(約八三人)の生徒も、市の分室としてその仕事を本校内でやっていた関係から、当日、登校していたものと思われる。

なお、一年生については、被爆当日が家庭待機日となっていたため、幸い家庭にあったが、市内在住の生徒は、家庭において被爆した。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から南々東約一・四キロメートル離れた所にあり、原子爆弾炸裂により、全校舎が壊滅し、約一時間半後には、隣接の民家と同様に大火災となり焼失した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	(一〇)人	(約三九八)人	()は動員先での被爆者数

重軽傷者 行方不明者	(八) 不明	(三六二) 不明	
計	(一八) ただし、行方不明者含まず	(七六〇) ただし、行方不明者含まず	

六日の朝、登校中であった二年生は、疎開場所や、作業に関する割当て、注意事項などを聞いてから、作業場へ出発する予定であった。原子爆弾炸裂時には、ちょうど生徒たちが校庭に集合しつつあった時で、強烈な熱線と爆風によって、全身を火傷した者、吹きとばされた者、倒壊校舎の下敷きとなって死んだ者、あるいは、救いを求める声などで、一瞬、阿鼻叫喚の地獄と化した。

当日の責任教官は一〇人であったが、八人が即死し、二人は重傷のまま動けず、生徒たちを救出したり、避難の指示を与えたりすることなどは、まったくできなかった。

この絶望的な惨劇の中から、自力により、数人の者が、辛うじて脱出できたのみである。

八、被爆後の混乱

校舎は二つの防火壁だけを残して跡形もなくなり、登校中の職員及び生徒はほとんど全滅という状態で、その上、市中は大混乱となり、職員の家庭も生徒の家庭も、甚大な被害を受けた。

学校は、生徒に連絡する手段も、機能も完全に失い、ただ瓦礫の廃坑を残すのみとなった。

被爆当日、学校におらず生き残った教職員は、廃墟の市中を探し歩いて、連日、熱心に搜索の手を抜げていき、ようやく即死者・行方不明者、および重軽傷者などの概数がつかめるようになった。

九、学校再開の状況

学校の再開

被爆後、学校の機能は完全に停止状態であったが、生徒の安否に対する調査と校舎復旧の対策について、学校長を中心に努力が続けられていった。

昭和二十年十一月十一日に、広島県佐伯郡地御前国民学校の校舎一部を借用する交渉がまとまり、授業が開始できるはこびとなった。十一月十二日、はじめて生徒を集め、第二学期としての授業が開かれたが、一同の喜びは非常に大きなものがあった、この学校再開の知らせば、市内各所における掲示その他生徒から生徒への伝達などによっておこなわれたが、当日の出席生徒数は八二三人であり、その後も伝え聞いて集る者が漸く増加していった。翌二十一年三月二十八日、戦後第一回目の卒業式が施行され、困苦に充ちた青春の日々を思い出に、生徒たちは巣立っていった。引きつづき、四月二十七日に入学式がおこなわれ、新入生二三〇人が入学した。

同年五月十日、広島市比治山本町にあった旧陸軍砲隊用地と兵舎の転用が許可されるにいたり、これを修築して、ここを本拠に学校復興にのり出したのである。その後、学制改革もあって、道徳高等女学校は、進徳女子中学校と進徳女子高等学校となり、校舎も逐次増築せられ、施設・設備も次第に整い今日に至っている。

校庭南隅の進徳高女慰霊碑には、原子爆弾に散華した先生・生徒の霊をまつり、香華が絶えない。

[第二十四項 広島女学院高等学校…488](#)

(現在・広島女学院高等学校、広島女学院中学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市上流川町三〇番地

校長 松本卓夫

教職員 三三人

生徒 概数八二六人

校舎 木造二階建・二九教室・延一、七七四坪

敷地面積 四、二一〇坪

爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	五人	二八〇人	兵器の部品製作と事務	
第十一航空廠	呉市広町	一	五〇	航空機部分品製作	
第二総軍司令部	二葉の里	一	四〇	暗号翻訳	
広島鉄道局審査部 用品庫 印刷所	上流川町 西蟹屋町 松原町	一	七二	事務	
建物疎開作業	雑魚場町	一二	三五〇	疎開跡片づけ	
師団司令部	基町		五	事務	
財務局・税務署	八丁堀	一	二九	事務	
合 計		二一	八二六		

四、指定避難先と経路

当校の北側約一〇〇メートル離れた場所に、泉邸があり、これを第一の避難所としていた。

第二の避難場所としては、当校から北の方向へ、市内電車の白島線づたいに上って、常葉橋を渡り、牛田町に通じている饒津(にぎつ)神社裏から、牛田町のふたまた土手に沿って東へ進み、牛田町東区の山間にある広島女学院修練道場および農業作業場が指定されていた。

五、校舎の使用状況

校舎の西側一部(木造二階建延三二〇坪)を、広島鉄道局審査課に貸与していた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
生徒は全員、学徒動員により出勤中	三人	数人 その他、広島鉄道局審査かに出勤中の生徒約四〇人が貸与された校舎で事務をしていた。	鉄道局関係 若干人	当日、学校では授業も特別行事もなく、校長以下数人の教員が登校し、事務の連絡整理と学校警備に当たっていた。当日、他へ出勤しなかった数人の生徒が登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から東北東約一・二キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、全校舎は一瞬にして押しつぶされた。その後、瞬時にして校地内にあった幼稚園と、寄宿舎の倒壊個所に火災が発生し、急速に広がった。その猛火は、午前中で全校舎を焼きつくした。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	二(一六)人	三(二八一)人	()内は動員先での被爆者数
重軽傷者	一(六)	一(四三)	
行方不明者	〇	〇	
計	三(二二)	四(三二四)	

六日の朝は、数人の教員と生徒が残留するのみで、その他の教員および生徒全員は、動員出勤中であった。ただ、鉄道局審査課(学校西側一部校舎を貸与していた)に出勤中の生徒約四〇人が登校していた。原子爆弾の炸裂と同時に、登校者全員は、押し潰された校舎の下敷きとなった。瞬時にして即死した者、あるいは自力で脱出した者もあったが、ほとんどの者は、重軽傷のままの姿で身動きもできず、助けを求める叫び声などが交錯し、校内は一瞬、大混乱におちいった。軽傷程度で生き残った職員や鉄道局員たちが、必死の救出作業を続けたが、火のまわりが早く、約半数は火炎の中に没した。救助された残りの約二〇人は、職員の誘導で泉邸に避難していったが、一部生徒の中には、自宅めざして避難していった者もいた。その後、泉邸も猛火につつまれはじめたので、避難中の生徒たちは、さらに泉邸の裏側から、京橋川を渡り、学院本部の避難場所に指定されていた牛田町東区の農業作業場へと避難した者が多かった。教員の中には牛田農業作業場に近い元吉宅(元学校職員)で手当てを受けた者もあった。

当日、当直教員三人のうち、二人は倒壊物の下敷きとなって即死した。炸裂時、窓際で誰かと話し中の田中教諭は、

一声の叫びをあげただけで、松本院長が何度も呼びかけたがすでに応答がなかった。また、生徒数人は、教室や講堂にいて、そのうち三人が即死した。二階図書室にいた生徒は、炸裂の一瞬、吹き飛ばされたものか、気づいた時には道路に立っていたという。しかし、この生徒も数日後には死亡した。そのほか助かった一人は、自宅に帰るつもりか、比治山公園方向に避難していった。

松本院長は、職員室(二階校舎)で執務中に被爆したが、押しつぶされた校舎の下敷きとなりながら、奇跡的に軽傷で脱出し、救助された生徒を泉邸に誘導し、引続き隣接の専門部の生徒の救出にあたった。

なお、当日、家屋疎開作業(市内雑魚場町方面)に出動した生徒たちは、大半の者が死亡したり、重軽傷を負った。その時の大惨状について、二年生村本節子は次のように手記をしたためている。

「広島県立第一中学校(現在国泰寺高等学校)の南庭に持物を置き、現場について作業を始めた一瞬、原子爆弾が炸裂した。何ら遮蔽物のない現場では、教職員および生徒は、まともに熱線を浴びた。一瞬、何が起ったのかわからない。私の眼に映じたものは、猛烈な光と恐ろしい煙、私はそのまま呼吸ができなくなって死ぬのだと思った。同時に非常な大音響と共に、大きな石のようなものが身体の周りに落ちてきた、胸がそれにはさまって呼吸がせつなく、全身が八ツざきにされたように疼いた。その時、近くで聞きなれた声で、多くの友だちの死の叫びをきいた。」

八、被爆後の混乱

生徒動員で出動した生徒(三年生以上)および家屋疎開作業に出動した生徒(一・二年生)の中には、多数の被爆犠牲者が出た。また、校舎内で被爆した一部の生徒が牛田農場へ避難したほかは、大半の生徒が、炸裂と同時に死傷し、動ける者は各自ばらばらに逃れていったので、本部(牛田農場)との連絡がつかず、被爆生徒の足取りはまったく不明であった。また、校舎全焼により、記録類が焼失したため、生徒の出動先やその生徒数などについても不明で、生徒に対する措置については何らの施しようがない状態であった。しかし、被爆後、ようやく逃れてきた数人の生徒たちの報告により、出動場所と現地生徒の惨状が、おおよそ判明したので、生き残った教職員によって生徒の搜索を開始した。搜索は、現場方面を中心にして、できるかぎり広く、また、各地の収容所にも足を運んで、生徒の行方を捜し求めた。市内、及びその近郊の各収容所をたずねた結果を本校焼跡の門前に、探索する父兄のために掲示し、さらに、本部や父兄とも広く連絡を保ちながら、つとめて行方不明生徒の安否について搜索が続けられた。

生き残りの生徒については、毎週一回の定時登校を指示していたが、九月からは、登校を週二回として、情報交換と合同指導をおこなった。

九月二十日、生徒搜索も一段落したので、学校は第一回合同慰霊祭を行なって、遺骨の遺族引渡しをした。

当校の全施設が全壊全焼したため、学院本部と共に、救護所も牛田町の当校農場に移された。ここは地形上の関係で、誘導された被爆生徒のほかには、一般市民の避難はなかったが、軍人関係の避難者が多数にあり、被爆生徒の収容が一部できないほどであった。学校は、これらの避難軍人に対して、農場小屋の一部を解放したが、被爆生徒・被爆軍人の看護に必要な医薬品類が少なく、十分な手当てをすることは、とうていできなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年九月から、週二回の定期登校日が定められ、牛田農場での合同指導を開始した。十月下旬になって、牛田国民学校の校舎(四教室)使用が許可されたのをきっかけに、生徒の再編成をなし、専門部および高等部とによる隔日午後授業を開始した。出席人員も、当初の合同指導のころは、教職員が二人ないし五人、生徒数も二〇人ないし五〇人程度であった。しかし、国民学校で授業を開始したころには、教員数も七人ないし一〇人くらいとなり、生徒数は八〇人ないし二〇〇人程度に増加していった。

被爆後、約二か月たってようやく授業らしい態勢も整っていくと同時に、一方では、学校復興運動も、職員と父兄が一致協力して、強力に押し進められた。学校と父兄の代表とで、学校復興委員会を組織して、官庁連絡および進駐軍関係との交渉をたびたび重ねた結果、江田島大原にあった旧海軍倉庫資材の払下げや、江田島旧海軍兵学校および大竹町の旧海軍潜水学校の机・腰掛などの払下げが許可となったので、牛田農場の一部に仮校舎二六〇坪(普通教室九・職員室一)を建築することができた。仮校舎ではあるが、再出発の基礎が、ここに力強く築かれ、昭和二十一年二月一日から、この新校舎で授業が開始された。その後、増築工事も着々と進行し、三月には二三〇坪(普通教室四・特別教室・講堂一)の増築が完成した。八月には、更に仮本部本館(五二坪)が完成し、校舎合計坪数も五四二坪となり、

教職員は一〇人ないし一三人と増加し、生徒数も約四〇〇人で、授業内容も一段と充実したものになった。

学校と父兄の一致協力で、学校再建は着々と進み、内容も充実していったが、牛田校舎は場所的に交通便も悪く、また、新入生徒を迎えて、専門部と高等部の発展からも、一日も早く旧校地(市内上流川町)に復帰することがのぞまれ、昭和二十二年八月、ついに高等女学校跡地(市内上流川町)に第二仮校舎が完成した。この新校舎には、当校の新制中学校と旧制高等女学校の生徒が移転し、牛田校舎は専門部だけが使用することにした。また、昭和二十三年八月には、元専門部校地(市内上流川町)を新制高等学校用の敷地として整理拡張し、新しい校舎の建設が進められた。

なお、昭和二十八年、牛田山の中腹、現大学構内に「女学院犠牲者の碑」が完成し、原爆死没学園犠牲者の霊をまつている。

第二十五項 比治山高等女学校…496

(現在・比治山女子中学校、比治山女子高等学校・比治山女子短期大学)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市霞町一丁目八一
校長 国信玉三
教職員 二十八人(ほか講師八人)
生徒 八〇六人
校舎 木造二階建・二〇教室・延七六六坪
敷地面積 三、九七四坪
爆心地からの距離 約二・九キロメートル

二、学生疎開状況

なし

比治山高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
十一空廠	呉市広町	二人	専攻科 一一〇人	事務・穿孔(飛行機製作)	
中国軍管区司令部	基町	二	三年生 九〇	通信(飛行機情報の受信発信と連絡に従事)	
陸軍需品廠	江波集積所 小姓町町集積所 安芸郡海田市町	一	専攻科 三 専攻科 一 専攻科 三九	事務	
第二総軍司令部	二葉の里	一	四年生 四〇	暗号通信教育	
広島鉄道管理部	大須賀町	一	専攻科 四〇	列車清掃及び看護学	
中国配電大洲製作所	大洲町	三	専攻科 四〇 四年生 一〇〇 三年生 四三	電池製作、ハンダ付作業	
合 計		一〇	五〇六		

四、指定避難先と経路

黄金山の霞町側森林地帯、及び大河稲荷社の森林地帯を災害の避難先に指定していた。

五、校舎の使用状況

昭和十九年十一月二十二日から、二十年六月三十日まで、学校の南校舎の二階四教室を陸軍偕行社の「将校軍服縫工場」として使用。当校四年生四〇人が、この作業に従事したが、二十年七月解除された。以後、使用されなかった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
一、二年生全員・引率教職員八人、午前七時より学校に集合七	八人	三〇〇人	なし	

時半出発、八時から鶴見町家屋疎開作業に従事する予定				
---------------------------	--	--	--	--

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…小破・一部大破

当校は爆心地の東南約二・九キロメートルの地点に所在し、校舎の一部は、ひどく破壊され、柱は全部折れて南方へ一〇度くらい傾斜したが、倒壊は免れた。南校舎は、屋根・ガラス戸・天井を破壊され、柱が四本折れたが、傾斜することはなかった。しかし、南校舎は北校舎と違って、大河の山で反射された爆風を強く受けたため、南側の窓ガラスが破れ、その破片で、室内にいた者は負傷した。

火災の発生はなかったが、北に面して、墨で書かれた張紙の黒い字の部分だけが、放射熱線により焼け落ちて穴があいた。炸裂の閃光後、まもなく、校舎南方の蓮田の葉面上を、西南方から東北方に向って、黄褐色にみえる空気の波(カゲロウ)が進むのを見た。このカゲロウは、大河の山で反射された熱線によるものであろうかと思われるが、ともかく、一種の焼夷弾かと危懼の念をいだきながら見守っていると、間もなく大音響が起り、天井は落ち、ガラス戸は吹き飛び、教室の内外は土煙のために薄暗くなった。

(二)人的被害

北校舎からは、三〇〇人に近い生徒(一、二年生)が悲鳴をあげながら出てきた。その中に、多数の負傷者・出血者を認めたので、これを南側運動場の防空壕に集めて治療にあたった。その中の二人は動脈出血(一人は腕他の一人はふくらはぎ)の重傷であった。すぐに中国軍管区司令部から軍医の派遣を要請するべく、男教師を自転車で連絡に出したが、五分にもならないうちに、それが帰ってきて、「市中は大変です。」という。それまでは、学校内に爆弾が投下されたものと思っていたが、連絡員の報告で、初めて治療の手を休めて、市中の方を見ると、まるで大きなポプラの並木のように、空高く煙がのぼっていた。

校内における負傷者は、主としてガラスの破片による負傷で、重傷者四人(うち一人はついに左眼失明)、軽傷者一人を数えた。負傷しなかった生徒は、ひとまず大河稲荷社の境内に避難させ、人員を点呼し、非常食糧を支給して帰宅させた。帰宅できない生徒四〇人・一般罹災者三五人・教職員八人は、校内に宿泊、非常炊出しをおこなって支給した。夕刻に至って、軍のトラックが非常食(乾パン)を配給して廻ってきたのを機会に、軍管区司令部の様子を尋ねてみると、「秘密であるがほとんど全滅だ。」という事であった。動員中の三年生約九〇人の安否が気遣われたが、火の海と化した市中へ入って行くすべはなかった。

また、学校から五〇メートル北側の路上を、登校中の女子商業学校の生徒は、爆心から約三キロメートルも離れていたのであるが、直接熱線をあびて、顔面および上膊部を一面に火傷し、当校へ避難して来たので収容し、治療を施した。後ほど、応急救護所に指定された大河国民学校に、担架で運んだが、殆んど生徒が死亡した。教職員は学校に八人とどまり、生徒と共に廊下に休み、一部は運動場に持出した椅子に腰をおろしたまま、六日の夜を明かしたのである。

翌七日、午前六時ごろ、当校の動員学徒二〇余人が、東練兵場北方、東照宮東側山ろくに避難しているとの報に接し、ただちに自転車で急行した。やはり中国軍管区司令部に動員中の生徒たちであった。生徒たち約二〇人は、厚さ約二〇センチメートルの鉄筋コンクリート建物の地下室で、通信事務に従事中であったから、生命をとりとめ、けなげにも「広島壊滅の第一報」を沈着に行なった(第五巻参照)。一方、外の広場で竹槍訓練中の七〇数人は、直接被爆した。歩くことのできる生徒たちは、広島城の裏御門から東方に向って避難し、泉邸まで逃れた。しかし、火災が迫って来たので、なおも牛田方面へ避難しようと川を渡りかけたところ、突風に吹き倒されて四人が水死した。こうして避難してきた生徒たちが、精根のつき果てた姿で、東照宮の石段下に寄りそっていたのである。火傷を受けて横臥していたが、被服はボロボロになり、殊にモンペイは黒色であるから、吸熱して無残に破損し、見るに忍びなかった。ただちに引返し、パンツの類をかき集めて持っていき、着用させた。

これらの生徒たちを、軍の担架運搬に託して、白島の陸軍幼年学校跡の収容所に送った。更に東練兵場の壕の中で一人、常葉橋下の河原で一人の生徒を発見し、これも幼年学校跡の校庭に収容した。こうして運び込んだ同校庭は収容所とは名ばかりで、日よけとして板が張ってあるだけであった。ここには、六、七〇人の負傷兵士も収容されていた。

七日午後三時ごろ、大阪赤十字病院から医師一人と看護婦数人の医療班が到着したが、その医師の語るところによ

れば、収容者の八〇%くらいは絶望とのことであった(しかし実際には、全員死亡したものと思われる)。

つぎつぎと死亡者が出るため、校庭の一角に穴を掘り、火葬に付された。火葬を待つ死体の、焼けただれた皮膚には、砂礫がまぶれつき、あまつさえ蟻がたかって、そのただれた皮膚に食いついており、悲惨この上もなく、目をそむけた。

生存者は口々に渴きを訴え、異口同音に、「水を下さい。」と叫び続けた。その悲痛な叫びは、聴くに忍びず、「ふた口だけですよ。」と、言い含めて水を与えた。ふた口の水を、「ああ、おいしい。ありがとうございました。」と、満足そうに飲みほした負傷者が、つぎつぎと息を引取っていった。

八月九日、幼年学校跡を引払い、生き残った患者は、全部似島収容所に移されることになった。

なお、学徒動員で出勤中被爆した死亡者は次のとおりである。

出勤先名	教職員	生徒	備考
中国軍管区司令部	二人	六四人	三年生
第二総軍司令部	〇	一	四年生
陸軍需品廠	〇	三	四年生
広島鉄道管理部	〇	一	四年生
出勤の途中にて	〇	二	一年生
計	二	七一	

すなわち、九日までに、幼年学校校庭で死亡した生徒八人、十四日までに似島収容所で死亡した生徒七人、自宅に引取られたのち死亡した生徒三三人、水死者四人、行方不明者二人、計七三人(うち二人教師)の犠牲者をだした。

八、被爆後の混乱

倒壊しなかった学校には、八月七日、なお帰宅できない生徒および一部の父兄約三〇人、一般罹災者約三〇人が校舎に宿泊していた。

八月八日、生徒はほとんど帰宅したが、一般罹災者の中、一〇数人は八月十五日まで宿泊した。

八月十八日、中国軍管区司令部の解散式が挙行され、この日までこの職域を守り続けた生存動員生徒も帰校した。

九、学校再開の状況

学校の再開

八月十八日から二十一日まで、教職員一〇余人・生徒五五人ないし七五人が登校して慰霊祭の準備をした。

翌二十二日午前九時から、校庭において、生徒七三人・教職員二人の慰霊祭をおこなった。来賓に軍管区司令部から参謀安永少佐ほか一人、県庁から一人、谷中將、遺族二〇人、教職員二〇人、生徒二〇〇余人参列。校長並びに谷中將の弔辞、生徒代表弔辞があり、焼香ののち、ほぼ一時間で閉式した。

被爆後、教職員は一日も休むことなく出勤し、罹災生徒の家庭との連絡、ならびに罹災状況調査、動員学徒引受け側との引揚げ交渉、学校の備品整備などの事務をとった。九月十五日、職員会議を開き、各自の調査事項について報告がおこなわれた。

九月十七日、午後九時ごろから翌朝四時ごろに至る大暴風雨の来襲により、おびただしい被害を受けた。

九月二十一日、職人の少ない折から屋根職人を雇うことは容易ではなかったが、どうにか屋根の修理をおこなった。

十月八日、再び暴風雨来襲、同八日から屋根職五人を入れて修理した。

十月十五日、始業式。教職員一五人・生徒二〇九人。式終了後、教室内外の整理をおこなった。

十月十六日、生徒は学年・組別に交替で登校し、一時間の授業を受けたあと、兵器支廠跡から、瓦や材木を譲り受け、校舎の復興材料の確保にあたった。

十一月十三日、授業三時間、作業一時間とした。

十二月、建具に紙を張り、天井も吹き飛んだままの教室で、次第に増す寒波を凌いでいたが、十二月も半ば過ぎたころ、授業は不可能となり、休校。十二月末から翌年二月七日まで、大工・左官を入れて修理をおこなった。それも天井にはボール紙を張り、建具はガラスの代用として金網にゼラチンを張ったものを使用する程度のものであった。

昭和二十一年一月三十一日、県教学課においてロウソク・鉛筆の配給を受けた。

二月一日、一応校舎の修理成って開校。授業は二時間、後は清掃作業を行なった。

二月十一日、紀元節の式を挙行了した。

二月十二日、はじめて五時間授業を開始し、次第に正常な姿にかえていった。

生徒数	一年	一三八人	三年	九三人
	二年	一一三人	四年	一五七人

(三年生が少ないのは、動員中死亡した者が多いため)

第二十六項 広島女子商業学校…505

(現在・広島女子商業高等学校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市南段原町六七八番地

校長 山内常雄

教職員 三二人

生徒 概数一、一六五人

校舎 木造二階建・二〇教室・延一、五五二坪

敷地面積 四、七〇六坪

爆心地からの距離 約二・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島女子商業学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	鶴見町	一〇人	五〇〇人	疎開跡片付け	
広島通信局電気工作所	宇品町十三丁目	一	五五	現場作業	
広島県木材株式会社	猿楽町	一	五五	現場作業	
野村生命広島支店	横町	一	二〇	机上事務	
広島貯金支局分室	八丁堀	一	一〇	机上事務	
広島貯金支局	千田町		一一〇	机上事務	
中国塗料株式会社	吉島町		一一〇	現場作業	
広瀬軍需品会社	霞町	一	五五	現場作業	
網本食品会社	旭町	一	五五	現場作業	
東洋工業株式会社	安芸郡府中町		一一〇	現場作業	
連合紙器糞会社	大洲町	一	五五	現場作業	
広島税務署	雑魚場町	一	一〇	机上事務	
合 計		二四	一、一四五		

四、指定避難先と経路

当校校地の西北側に接する比治山山麓は松林におおわれ、敵機の視界をさえぎり、また多数の防空壕のある絶好の避難場所、学校としては、状況に応じて同所に避難することになっていた。

五、校舎の使用状況

当校の北側校舎二階の五教室(一三〇坪)には、常時陸軍船舶砲兵团(第六一八〇部隊)衛生教育隊(隊長・指田吾一大尉)約一五〇人が駐屯していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業予定なし	数人	少数	駐屯中の兵隊 約一五〇人	当日、当直職員と身体の弱い者などの動員できないもの 少数が登校していた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…大部分全壊・一部小破

当校の位置する南段原地区は、爆心地から東南約二・二キロメートルの距離にある。その間に横たわる比治山公園によって遮蔽されていたため、爆風によって教室・講堂は倒壊したが、屋内体操場と白鳩記念館は、小破程度の被害

にとどまった。そのうえ、駐屯中の衛生隊の活動で辛うじて発火を消し止めたから、重要書類などは助かった。

(二)人的被害

被爆当日は、一部の教職員と病弱生徒が学校に残留していたほか、大部分の教職員・生徒は勤労学徒隊として、各所に分散出動中であつた。炸裂の一瞬、出動中のものほとんどが、それぞれの作業現場で即死または重軽傷を負つた。

しかし、当時の混乱した情勢下、的確な被害状況をつかむことは困難で、現在においてもなお不明の点が多い。信用しうる資料による人的被害は、別表のとおりであるが、このうち市内鶴見橋付近の建物疎開跡片づけ作業に出動中の学徒隊が、もっとも大きな被害をうけ、強烈な放射熱線と、爆風圧による即死二六二人、重軽傷者約二〇〇人の犠牲者を出した。

また、広島貯金局分室(八丁堀福屋百貨店内)と野村生命広島支店(横町)においては、作業中の生徒三〇人が、一瞬にして、ほとんど全員即死した。

区 別	教 職 員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(九)人 不明 不明	(三二九)人 約五〇 不明	()内は、動員先における被爆者数
計	(九) 判明分のみ	約五〇〇(三二九) 判明分のみ	

八、被爆後の混乱

校長以下職員に多数の被災者を出し、校舎のほとんどが壊滅したため、学校の機能は一時完全に停止したが、呆然自失の状態から立ちなおった学校当局は、ただちに残留職員全員を、各動員先に派遣し、被災者の救援や調査などに全力をつくす一方、壊滅校舎の整理、屋内体操場・白鳩記念館の応急修理などをおこなって、開校のための作業を進めていった。

九、学校再開の状況

学校の再開

早急に開校するため、応急措置として一時的に校舎を移転することとなり、残存建物の整備作業に併行して、市内仁保町向洋丘上の、旧軍兵舎への移転のための作業が続けられた。

昭和二十年十一月、諸般の準備が完了し、向洋仮校舎において、ようやく授業を開始することができた。施設その他、最悪の条件下での授業であつたが、再開のよろこびは非常に大きなものであつた。

ついで、昭和二十一年九月、現位置に復帰した。急造の仮校舎ながら教職員二三人・生徒八三七人を一四学級に編成して開校、次第に教育の正常化と充実がはかられていった。

[第二十七項 安芸高等女学校…511](#)

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市打越町六三三番地
校長 青原慶哉
教職員 約二〇人
生徒 四八〇人
校舎 木造二階建・延四八〇坪
敷地面積 二、三一八坪
爆心地からの距離 約一・七キロメートル

二、学生疎開状況

なし

安芸高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	小網町	五人	一、二年生 二〇三人	疎開跡片づけ	
山陽工業株式会社	上天満町	一	三年生約八〇余	航空機部品の製造	
東洋製罐株式会社	天満町	二	四年生約八〇	軍需機械部品の製造	
日本工業株式会社	広瀬町	一	補修科約四〇	軍需機械部品の製造	
海軍の工場	佐伯郡五日市町	一	補修科数人	軍需機械部品の製造	
合 計		一〇	約四〇三余		

四、指定避難先と経路

市の防衛計画に基づいて、安佐郡安村字大洲の大洲国民学校を指定していた。

五、校舎の使用状況

校舎四教室に、広島県庁耕地課、および調査課の各一部が疎開して、事務をとっていた。

また、運動場には高射砲隊がおり、高射砲六門を据えていた。もっともそのうち五門は木製で擬装用、他の一門は本物とはいえ旧式の練習用のものであった。

六、当日朝の学校行事予定

授業の予定はなかった。したがって、教職員が四、五人だけで、生徒はほとんど出動していて校内にいなかった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊

爆風によって、校舎は全壊したが、火災には至らなかった。

(二)人的被害

校内にいた教職員のうち、青原校長は校門近くの御真影奉安殿の近くを歩いているとき、炸裂に遭遇し、校舎倒壊の際の飛来物によるものと思われるが、大腿部と頭部を打撲裂傷という重傷を受けた。

ただちに川向うの打越町字山手の菅原教信教頭宅に、元気な教員によって担送され、看護を受けたが、十日ばかりのち、ついに他界した。

もっとも悲慘をきわめたのは、動員学徒であって、建物疎開作業のため小網町付近に、松村富士雄(31歳)、松木田好子(21歳)、青原郁子(22歳)、橋本幸枝(25歳)の四教師に引率されて出動していた学徒報国隊員二三七人は総員全滅であった。松村教師は、小網町の現場に到着してから、再び連絡のため学校に帰って来たそのとき、原子爆弾が炸裂、倒壊する校舎の下敷きになって絶命した。何秒か何分か到着が遅れていれば、あるいは助かっていたであろう。

昼過ぎから、晩方にかけて三々五々と、天満町の東洋製罐工場や広瀬町の日本工業株式会社に出勤していた生徒たち約八〇人が、ふた目とは見られない無残なすがたになって、学校へ帰って来た。外傷者あり、火傷者ありで、そのうち、六、七人が死んでいった。

医薬品はなく、単に消毒程度の治療をほどこして、安否を心配して訪れた父兄に、それぞれ引渡したが、家に帰った生徒もほとんどが、死んでいったのである。

区 別	教職員	生徒	備 考(場所別)
即死者	(四)人	(二六三)人	小網町・教師四人・生徒二三七人・東洋製罐・生徒一七人・日本工業・生徒九人 東洋製罐及び日本工業において 約八〇人
重軽傷者		(約八〇)	
行方不明者		〇	
計	一(四)	(三四三)	

()内は、学校外での被爆者数

八、学校再開の状況

学校の再開

六日以後、ずっと教師五、六人が交替で登校し、生徒の情報の蒐集や連絡をおこなうと共に、学校の復旧について協議したが、被害があまりに甚大であり、社会不安もつのるばかりで暗中模索の状態が続いた。そのうえ重傷の青原

校長がついに再起できず死去するに至り、学校としての機能は完全に停止した。

十一月一日、生存者の努力によって、やっと旧校舎あとにバラック建てながら、一部校舎を復興して、第二学期の授業を開始した。教師一人・生徒約八〇人くらいが集った。

当校敷地は、戦前からおこなわれていた太田川改修工事用地として、当局の土地収用にかかっていたため、学校元地に復興することが許可にならず、折衝を種々重ねて、昭和二十二年三月、比治山本町の船舶通信隊(元電信隊)跡にやっと移転することができた。

廃校に決定

しかし、昭和十四年三月二十四日に開学した当校は、そもそも「真宗安芸婦人会」を基盤にして設立された関係上、県下一円にわたる地方出身の生徒が多かったから、戦後の社会事情の急変と、学制改革の影響などにより、通学生徒がいちじるしく減少した。

これに加えて、打越町の学校元地を使用することができなかった痛手は大きく、ついに、昭和二十七年三月、廃校に決した。

現在、皆実町に学校法人安芸学園幼稚園(園長・多賀谷景尚)として、その名をとどめている。

なお、被爆歌人正田篠枝は同校の第四回卒業生で、通信隊跡の移転に関しては、陰になって大いに協力した。また、多賀谷園長には、短歌のことも批判を仰いだようで、その歌稿を同園長が所持している。広島平和記念資料館には正田篠枝真跡の「三十万名号」が寄贈された。

第二十八項 西高等女学校…517

(現在・廃校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市東観音町二丁目

校長 佐々木佐市

教職員 一六人

生徒 約四〇〇人

校舎 木造二階建・約四五〇坪

敷地面積 約一、〇〇〇坪

設立者 (校主)藤原力

註・昭和二年創立常盤高等女学校(創立者浮気モト)を引継いで改名した。

爆心地からの距離 約一・三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島西高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
建物疎開作業	土橋近辺	不明 (うち校主一)	約一五〇	疎開跡片づけ	当日は臨時登校の予定であった。
昭和金属工業株式会社	西観音町	二	一〇〇	航空機部品製造	
帝国兵器工場	吉島町	二	一〇〇		
旭兵器製作所	南観音町	一	四年一組 六二	兵器、主として大砲の弾丸製造	
合計		五 (判明分の)	約四一二		

	み)			
--	----	--	--	--

四、指定避難先と経路

不明

五、校舎の使用状況

校舎を他に貸与使用させたことはない。生徒の登校日のため何時でも使える状態にあった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
臨時登校	三人	約一〇〇人	なし	

七、被爆の惨状

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

被害状況

爆心地の西北約一・三キロメートルに位置し、爆風により校舎全壊、北西からの延焼により全焼した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	(三)人 一三	(二一七)人 多数 不明	()内は、すべて動員先での被爆者数
計	一三(三)	(二一七) 判明分のみ	

勤労働員生徒のうち、昭和金属工場への出勤組は、当日が臨時登校日になっており、集合時間前に被爆したため、その実態がつかめないまま、混乱状態に陥った。生存者から聴取した話によると、登校していた生徒はおおむね二階にいた模様で、倒壊した校舎から大部分脱出できたものと考えられる。脱出する生徒の中に、眼に大きな棒切れが突立っているのを見かけた者もいる。また、音楽室にいた一生徒の話では、「自分は校舎に閉じこめられたものの苦心のすえ這い出すことができたが、他の数人の学友は脱出不可能であった。」という。

教師三人は階下にいたので、脱出は困難を極め、うち一人が脱出したときには、校舎の大半が猛火に包まれ、火が眼前に迫っていた。辛うじて、付近の防空壕に避難し、壕内で自然鎮火を待つのみであった。

南観音町の旭兵器製作所に勤労働員されていた四年一組約六二人は、胡子唯夫教諭指揮のもとに、この日も出勤していた。そして、半数は作業現場へ向う途中、半数は更衣室で着替え中に被爆した。爆心地から約三・四キロメートル以上離れていたため、ガラスの破片などで軽傷を負った程度で、全員無事であった。胡子教諭は隊伍を整え、全生徒を引率して、市内電車江波終点まで出たが、すでに市内への通行は止められていた。やむなく引返して様子を見ていたが、市中の猛火は拡大する一方であったから、生徒各自の、自家のある地域によって組を作り、帰宅するよう指示した。恐怖におののいて、教師のもとを離れようとししない生徒を、叱咤激励して、ともかく作業隊を解いた。

また、藤原校主は、当日、生徒約一五〇人を引率して、土橋付近の建物疎開作業に出動し、小高い所に立ち、生徒を指揮しているときに被爆、重傷を受けて、翌七日に他界した。作業中の生徒もほとんど全滅であった。現在(昭和四十四年十月)、西高等女学校の遺品として、卒業生名簿と、古びた人絹の国旗が、岡山県小田郡美里町藤原保乃(校主夫人)方に保存されている。

動員生徒被爆記

第四学年東組担任 教諭 胡子唯夫

広島西高等女学校第四学年東組在籍六二人は、動員学徒として、広島市南観音町にある旭兵器工場に出動して、兵器製作の作業に従事した。

同工場には、広島県立広島第一中学校第三学年の一組の生徒も、学徒動員として出動し、同じく、兵器の製作の作業に従事していた。

(一)原子爆弾炸裂の当日は、生徒集合の定刻に我が動員生徒は、工場の講堂二階に集合し、例により生徒朝礼を行ない、出席者の点呼をなし、出席および欠席者の確認をなしたる後、本日の諸注意事項について訓話をする。後、全学徒ば作業服に着替え、まさに作業に行かんとして、生徒の約半数が二階階段から降り、残りの半数は、講堂の二階に居た。その時、遙か東方、市の中央に、もの凄い閃光と爆発音がしたと思う瞬間、窓ガラスは、全部絹を引裂くが如き音と共に、こっぴみじんに、講堂内に飛散した。その爆発音と閃光と共に、生徒は机間に伏した。私は左手と右

股とに破傷を受け、鮮血は凜々と股を流れ、服は一瞬にして血染めとなる。しばらくして、階上に居た半数の生徒を誘導して、校庭に下り、全生徒を集合させた。

この時、生徒出席簿(血染めの出席簿として原爆資料保存会に提出)が講堂の二階に置いてあったので、四年東組副級長青木幸枝さんに出席簿を持ち来るよう命じた。彼女は少しも臆ずる事なく、走って階上に駆け上がり、出席簿を持ち出して来る。この出席簿によりて、二度生徒の安否を点呼し調査した。幸いに、朝礼時における人員点呼と異状なく、全員無事であることを確認し、先ず安堵の胸をなでおろした。

全生徒は更に服装を整え、鉢巻姿に、防空頭巾を背負い、隊伍を整え、江波電車線に進行した。市内は一面火の海火の波で覆われている。この辺りからは市中に入ることを禁止されていたので、やむなく折返して南観音町方面に向った。畑の中の小道を通り、市の西端を迂回した。市中のここかしこから、頻繁に時限爆弾の如き爆発音がする(火薬庫の爆破?)。その爆発音のするたびに、生徒と共にトウモロコシの中に伏す。畑の中、草むらの中、畑中の小道の、ここかしこから母を呼ぶ声、友を呼ぶ声、水を求める声、うわ言の声、これらの人々には、どうしてあげることもできなかった。実に悲惨の極地であった。しかし、わが学徒は、少しの号泣の声を出す者もなく、沈着にして、不動心に燃え、落着いていた。当時の生徒は、実に忍耐強く、勇気に満ち、堅忍不拔、持久力が旺盛であったと思う。

にわかに、一天かき曇り、豆粒大の豪雨が降り始めた。この大雨をさけるに場所なく、傷口からほとばしる血は手拭で覆い、雨水の傷口に入るのは靴で覆い防ぐ。出席簿は鮮血で染まる。学徒に関する諸調査簿も、雨水と鮮血で波状の紋形に染まる。

爆発音の止む間合に、わが学徒を、地域別非常時班別編成表に依り、小隊を造り、各地域別に隊を作り、東西南北に班別で帰るよう指示した。しかし、わが学徒は、なかなかその指示に従わなかった。彼女らは教師を思い、学友を思い、班別で帰らない。色々と身の安全なるを説き聞かせたあげく、やっと納得してくれた。各地域編成隊で別れた。原爆雲で覆われた大陽も、西山に没しかけた。この時、ただ一人の学徒は私につき添っていた。己斐の山手を迂回し、三篠付近に出たが、地面は熱く焼け、靴を通して来る熱気は強く、足の裏まで熱くなった。三篠の鉄橋を渡り、自宅のある長寿園の入口まで帰った。

ここで、私につき添っていた一人の学徒と別れた。いろいろと注意を与えた。彼女は汽車線路を、広島駅方面に向って足を運んだ。そのうしろ姿が、今に私の眼底から消えない。彼女ははたして無事で母のもとに帰ってくれたか、案ぜられた。

(二)廃校

校主藤原先生は、当日、一学年の学徒を引率して、市内土橋付近の家屋疎開後の片づけ作業に出動して従事していた由。

先生は少し小高い所に立たれて、あれこれと学徒を指揮して居られたが、爆弾投下と共に高く飛ばされて、傷を受けられて、翌七日、遂に他界せられた由。先生は覇気に満ち、教育愛に燃えられた方で、西高等女学校を設立せられ、生徒数も著しく増し、創立以来、幾多の苦難を忍ばれ、苦心惨憺の結果、校運は日増しに隆盛を見るに至った時、古今未曾有の原子爆弾に見舞われ、遂に他界せられた。諸帳簿並びに校舎などは灰燼となり、学校の支柱を失い、物資不足の折り、再興不可能。遂に、廃校の悲しみを見るに至った。生き残れる生徒から、母校の無い悲しみにつき、たびたび音信を受く。

被災後、時の教頭らと集り、いろいろと後始末をした。

昨年、生存者(卒業生・当時の在校生)が集い、二葉の里に会場を求めて、同窓会を開催し、故人の冥福を祈り、いろいろと思い出話にふけた。

付記

わが住家(広島市白島北町長寿園下)は被爆のため倒壊したので、住むに家なく、長寿園の川辺に三日三晩野宿した。わが子は、広島県立広島第一高等女学校一学年に在学。学徒動員として疎開作業のため、土橋付近に出動す(担任生成、栗田先生。栗田静子先生の御尊父は当時広島文理科大学教授として在任)。原子爆弾投下により行方不明。捜すこと数日遂に見当らず。栗田静子先生は土橋付近にて学徒引率作業中被爆せられる。最後まで、生徒の安全避難にご尽力。生徒を激励せられる由、涙ぐまじきものあり。

郡部からの応援の医者や、長寿園・三樹園などに案内し、被爆者の治療に回る。

友人二人の子供さん(約三歳ぐらい)被爆死亡す。野花を供え、めい福を祈る。

第一項 広島女学院専門学校…525

(現在・広島女学院大学、広島女学院短期大学)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市上流川町四六番地
校長 松本卓夫
教職員 一九人
生徒 概数三一三人
校舎 木造三階建・一五教室・延一、〇八四坪
敷地面積 一、五〇七坪
爆心地からの距離 約一・二キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島女学院専門学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
東洋工業株式会社	安芸郡府中町	四人	二七八	兵器の部品と製造の事務	八月六日当日は、東洋工業株式会社へ出動中の一年生四四人は、職場配置転換指導のために市内上流川町の本校に登校していた。
広島財務局 広島税務署	八丁堀	一	二五	事務	
師団司令部	基町		一	事務	
合 計		五	三一三		

四、指定避難先と経路

当校の北側約一〇〇メートル離れた場所に、泉邸(縮景園)があり、これを第一の避難場所として指定していた。第二の避難場所として、当校から北方の牛田町の山間にある広島女学院修練道場、及び農業作業場が指定されていた。避難経路は、白島線(電車)づたいに北上し、常葉橋を渡り、饒津神社西側の川べりの道を通り、ふたまた土手に出て、東に上る。

五、校舎の使用状況

当時、専門学校としては、軍隊関係や一般への校舎貸与はしていなかったが、校地内にあるゲインズホールの一部が陸軍将校の宿舎として使用された。また、国鉄本厨の審査課が疎開して来て、校舎の一部を使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
学徒動員中	一一人	一四四人	陸軍将校および国鉄関係 若干人	各課の一年生全員は被爆当日に学校に登録し、学徒動員先(東洋工業)へ出動準備のため、職場配置指導を受けることになっていた。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は爆心地から東北東約一・二キロメートルのところにあり、原子爆弾の炸裂と同時に、一瞬にして校舎は倒壊した。

その後、約三〇分してから当校の東・西に隣接する民家から火災が発生した。その火は寸時にして猛火となり、周

囲を焼きつくして、倒壊校舎に飛火が降りかかってきた、しかし、突然の大惨禍の中では、重軽傷を負った者同志が助け合い、下敷きになっている者を救出しようとする努力が精一杯であり、消火にまでは手が出なかった。

そのため、火災は大きくなるばかりで、正午過ぎまで燃え続け、学校は完全に灰燼に帰した。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	二(四)人	二五(四四)人	()内は学校外(動員先など)での被爆者数
重軽傷者	七(九)	一〇〇(一二〇)	
行方不明者	〇	一四(一九)	
計	九(一三)	一三九(一八三)	

八月六日、各科の一年生(一四四人)は、学徒動員先に指定された東洋工業株式会社(安芸郡府中町)への出動準備のため、いったん、学校へ登校して各人の職場配置と、職場に関する注意事項につき、指導を受けることになっていた。

八時十五分、全員が講堂で礼拝をすませ、次の行事に移るため、退場している時、原子爆弾が炸裂した。同時に校舎は倒壊、一瞬、下敷きとなり即死した者、ケタやハリの下敷きのまま自由を失っている者、戸外へはねとばされた者、または人相の区別すらできない重傷で、助けを呼び求めている者、奇跡的に壁土を被っただけで、大怪我もせず脱出できた者などで、大混乱となり、神聖であるべき礼拝場は、瞬時にして地獄と化した。

この大惨状の中で、比較的に軽傷であった者や、幸いに救出された者は、誘導されて泉邸と、一部は栄橋を渡り、東練兵場方面(二葉山のふもと)に避難したが、泉邸に避難した生徒は、ここも火災による危険が迫ったので、泉邸の裏側から、京橋川を舟で渡り、学院本部の避難場所に指定されていた牛田町東区の農場へと避難した。その後、一部の生徒は、さらに中山村方面の農家へ分散収容された。

隣接の学院高等女学校の方において、危く命拾いした松本院長が駆けつけた時、被服が裂け、血にまみれた重軽傷の教員が、校舎の下敷きになった生徒の救出に一生懸命になっていた。講堂内にはなお、数十人の生徒が下敷きになったままである模様で、院長も一緒になって救出にあたった。しかし、人手もなく、救出用具もなく、救出作業はかどらず、遂に猛火に包まれてしまった。

数日後、焼けた校舎の跡にたたずむと、廊下から講堂まで、点々と死者が続き、講堂には腰掛けたままの生徒たちが梁に圧せられたか、身動きもできず焼死した白骨が、一列に並んでいた。

市内八丁堀の財務局、および税務署に出動していた生徒約二五人は、その半数が助かったが、当日、日本銀行支店へ使いに出た生徒一人は、途中で被爆し、行方不明となった。なお、基町の師団司令部に出動中の生徒一〇人は全滅した。

八、被爆後の混乱

負傷しながらも歩行のできる教職員や、生徒の中には、直接、自宅や知人宅をめざして逃げのびるか、あるいは東練兵場方面に避難していったほか、大半の生徒は、牛田町の学院農場に避難していったが、この農場には軍人の避難者も多くて、生徒全員は収容しきれない状態となり、一部生徒はさらに山を越え、中山村方面の農家に依頼して分散収容をした。

被爆直後、学院本部は牛田農場に移されて、翌七日には、学院長を中心に、東洋工業株式会社出動中の生存教員数人が集り、生徒に対する緊急対策を協議し、次のような措置をとることに決定した。

すなわち、独自で行動できる軽傷者は、各家庭の避難先を十分調査の上で帰らせ、重傷者は応急手当をなし、家族を探して、連絡することに努める。また行方不明生徒の搜索を開始して、その生徒の家庭と連絡を保つよう、できるかぎりの努力をする。しかし、校舎の焼失による学籍簿および名簿類の焼失、または被爆当日の登校生徒の大部分が、新しい一年生(合同指導は約一週間にすぎず、それ以前は前の高等女学校から学徒隊として、各工場へ出動しており、各人の職場が違っていた)であったため、名前も顔も記憶が明瞭でなく、搜索や連絡にはなはだ困難があった。

なお、東洋工業株式会社に学徒隊として出動していた生徒は、市内から送られて来る負傷者の看護を六日夕刻近くまでやっていたが、その後、生徒は各方面ごとに分隊を組織し、教職員や同工場に出動中の、広島文理科大学の学生を隊長にして帰宅をはかった。しかし、郊外および市周辺部に在住する生徒以外は火災のため帰宅できず、再び工場に引返してきたので、工場の青年学校寮に収容した。翌七日に「以後、各人は避難先がきまれば本部(牛田農場)の方に連絡するよう」指示を与えてから、一たん、分隊組織を解散した。

また、校舎の全焼で、避難先に指定されていた牛田農場を、応急救護所として使用したが、当場所は、地形上の関係から、誘導された被爆生徒のほかには、一般市民の避難はなかったけれど、軍人関係の避難者が多く、学校として

は、これらの避難軍人に対して、農場小屋の一部を解放して収容所とした。しかし看護に必要な医薬品が少なく、十分な手当てをするにいたらなかった。

九、学校再開の状況

学校の再開

上流川町の校舎は焼失し、その日登校した教員および生徒の大半と、市中心部に動員中の生徒のほとんどが死傷するという、物的にも人的にも多大の被害を出したので、一時、学校機能は完全に停止の状態に陥った。しかし、学院本部が牛田修練道場に移され、松本学院長を中心として、動員中の生存教員も加わり、生徒に対する緊急対策と共に、学校再建についても、その努力が日夜重ねられていった結果、牛田農場に仮校舎を建築することとなった。

生徒に対しては、九月から週二回の昼校日を定め、農場で合同指導を実施したが、当時は出席者も少なく、教員は一〜三人程度、生徒数は約一〇人前後という状態であった。十月の下旬ごろから、牛田国民学校の校舎使用(四教室)の許可を得て、高女部と専門部とで、交替に変則授業を開始したが、そのころには出席教員も二〜五人となり、生徒数も三〇〜五〇人程度に増加してきた。

このように学校再開の道が着々と進んでいく一方、校舎再建の努力もはらわれ、大破している修練道場の一部を、応急的な修理をして教職員および生徒の合宿所とし、学校復興の足場にした。そして、学校および父兄の代表をもって、学校復興委員会が組織され、側面的な運動も強力に押し進められた結果、江田島の旧海軍倉庫の払下げを受けて、建築資材とし、また、海軍兵学校および大竹市の海軍潜水学校から机・腰掛などの資材の払下げを受けて仮校舎に運んだのであるが、これらの資材をもとに、牛田農場の一部を整地して、仮校舎二六〇坪(普通教室九・職員室一)の建築にとりかかり、昭和二十一年二月に完成した。

その後も、校舎増築の仕事は続けられ、同年三月に、二三〇坪(普通教室四・特別教室二・講堂)の増築工事が完了した。被爆の日から約六か月後に、はじめて校舎復興計画の夢が実現した。新校舎での授業も、高女部と専門部とが交替という、今までどおりの二部授業ではあるが、間借り教室での苦しい授業を続けてきた生徒たちにとって、新校舎完成の喜びは非常に大きなものであった。なお、同年八月、仮本部本館(五二坪)もできあがり、学校としての体面も内容も充実して、出席教員も四、五人となり、生徒数は一〇〇〜一五〇人くらいに増加してきた。

その後、昭和二十二年八月に、市内上流川町の女学院本校の焼跡を整備して、ここに第二仮校舎の建設が完成したので、新しい学校制度による新制中学校および高等女学校は、この地で再出発することになり、牛田校舎は専門学校専用として使用されるにいった。

なお、学用品や教科書など、開校当初は、軍の廃品用紙やごく僅かな配給ノートなどでしのいだ。教科書は、焼残りの戦前のものを基とし、もっぱらノートによる授業であって、まともな充実した学問はなかなか望めそうになかった。

第二項 広島女子専門学校…534

(現在・広島女子大学)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市宇品町十三丁目

校長 津山三郎

教職員 約三〇人

生徒 約四五〇人

校舎 木造二階建・一部平屋・一七教室・延二、〇六八坪

敷地面積 七、〇六二・二坪

爆心地からの距離 約三・三キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島女子専門学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
陸軍運輸部	宇品町	五人	一一五人	縫製・事務・その他軍衣補修	責任者 中村良策教授 十九年九月一日より動員
水島航空機製作工場	倉敷市	五	九五	航空機部品組立	責任者 後藤陽一、津島赴 両教授 二十年一月八日より動員
広島郵便局	細工町		五	事務	
広島師団司令部	基町		一	事務	
合 計		一〇	二一六		

四、指定避難先と経路

運動場に、五〇人収容能力の防空壕が二か所に構築してあり、空襲警報発令に際しては、ここに待避することになっていた。

当時、教職員、および生徒はほとんど学徒奉国隊として出動しており、病弱その他の理由で常時校内にいるものは約一〇〇人程度であったから、この防空壕でまにあった。

その他の避難対策については、東千田町の寄宿舍生の避難用として、二教室をあてていたほかは、学校が市中心部から離れていたことなどもあって、特別なことは考えていなかった。

五、校舎の使用状況

六日当日は校舎の一部(四教室くらい)に暁部隊の兵士約六〇人が、宇品港の乗船をまって、宿泊していた。時には約一〇〇人も兵隊が宿泊することもあった。

また、二十年三月に入学試験を終えながらも、高等女学校時代の動員令が解除にならず、遅れて同年七月二十三日(月曜日)に入学した当年度の一年生約一六〇人が登校していた。これら新入生は八月六日の原子爆弾炸裂の日まで、午前中は普通の学科を受け、午後は一般教練をおこない竹槍やナギナタの訓練をしたが、これが講堂・四教室、および運動場を使用していた。もっとも運動場の大半は、サツマ芋などが耕作されていた。

二年生・三年生の病弱者約二〇人も二、三教室を使用し、このほか、防空および避難のための臨時寄宿舍として二教室(舎生半数ずつ交替)を使用、さらに職員約一〇人ずつ(一日交替)が、夜間の防空・警備要員として勤務するために一室を使用していた。

六、当日朝の学校行事予定

行事予定＊在校者数(教職員＊生徒＊その他)＊備考

朝礼(国民儀礼)校長訓話のあと、一年生は各級ごとに動員準備の予定＊約二〇＊一八〇＊陸軍暁部隊の兵士約六〇人＊生徒一八〇人のうち 一年生一六〇人、病弱者 二〇人(二、三年生)

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況

講堂…全壊

その他、大破または小破全校に及ぶ。

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	〇人	一人	()内は校外(動員先)での被爆者数
重軽傷者	三	五	
行方不明者	二	七(六)	
計	五	一三(六)	

毎朝、八時から八時十分まで講堂で朝礼がおこなわれていたが、六日も同じように教職員、および生徒全員が集り、朝礼(国民儀礼)ののち、校長の訓話をきいた。講堂で朝礼をするようになったのは一年生が入学してからのことで、それまでは先生と生徒を併せても三〇人くらいの少数であったから、雨の降らないかぎり玄関前ですませていた。

津山校長は訓話を終え、講堂を出て、校長室に帰ろうとしていた。

校内の取締りは、学徒奉国隊大隊長早川甚三教授兼教頭(学年単位を中隊・組単位を小隊とする)が受持っていたが、七月に応召・出征してからのちは、第三中隊長園田均教授および第二小隊長縄田二郎教授が主としてこれにあたって

いた。

縄田教授は講堂の東南側の窓ぎわにたって、訓話のあとすぐ各副小隊長(生徒)を集め、出席点呼を命令副小隊長が出席をとりつつあるそのときであった。

生徒たちが、突然、長椅子のあいだに全員一斉にピタッと伏せた。あとで聞くと、大きな妖しい光りがしたので、訓練どおり、瞬間的に全員が伏せたわけであったが、縄田教授は、その一瞬を、まばたいて目をとじていたのかも知れないが、光りを感じなかった。どうして伏せたのか、命令もしないのに…と、思いながら、何気なく窓から外の方をみると、異様な火の球がガラガラと光っていた。

その火の球は直径五〇メートルないし一〇〇メートルはあったが、虹を溶かしたようなガラギラの球で、横に幅ひろく・つい二、三〇〇メートルばかり離れたところあたり(現在の広大附属校辺)のように、瞬間的に見えた。まだ煙という段階ではなく、異様なその火球は実にエネルギーに奔騰していた。顔が痛いほどに熱かった。

「これは焼けるゾ。」と思った。

何秒かのち、縄田教授は、立っている窓ぎわから二、三メートル離れた長椅子のあいだに飛ばされていた。意識をとりもどしたのは何分のちであったか、二、三分くらいとも思われるが、倒壊した講堂の下敷きになりながらも、長椅子が落下物を支えていた。周囲がまっ暗のなかで、「わしは死んでしまった」という意識で、気がついた。

気がついてみると、講堂の反対側の方は倒れながらも柱が立っていて、外の明りが見えたから、それを頼ってガムシャラに外に這い出た。

もう、そこには誰もいなかった。

そこへ一人の生徒がやって来て、「先生こちらへ…」と、防空壕の方へさそったが、空を仰ぐと、すでに飛行機のすがたは見えなかった。

「みんな防空壕から出ろ。」と、縄田教授は大声で言った。

ガス弾か焼夷弾かわからないが、とにかく敵機はすでにいないし、校舎に火災が発生してはいけないと、まず考え、壕から出て来たものに、各校舎を四区分し、各小隊ごとに火もと点検にまわらせた。

三田喜代教授は、自己の受持ちの化学実験室にいき、アルコール・ランプがとぼっているのをみて、いち早く消した。

四個小隊から「火の気なし」の報告を受けてはじめて、出火のおそれなしとひとまず安堵した。炸裂後三〇分ぐらいたっていたであろう。

生徒のなかには、かなり流血の者もいたが数は少なく、ガラスの破片による負傷者四、五人ばかりを作法室に収容した。重傷の生徒一人には、大坪サキ教授がずっとそばについて看護した。

そして、校門をはじめ一切の門をとじて、しばらく警戒体制をとっていた。

津山校長は、訓話のあと校長室へ帰る途中、コンクリート壁になっている生徒昇降口にさしかかったときに被爆したが、壁が落下物をささえたので一命をとりとめた。

一方、東千田町の当校寄宿舎に病気のため寝ていた者、二人のうち一人村田静江は即死したらしく、もう一人杉原豊子は、学校まで這うようにして辛うじて避難して来たが、発熱とひどい下痢症状が起り、二〇時間後に他界した。

その他、学校に登校途中で被爆した者、師団司令部および広島郵便局に出動中のもの六人が行方不明となり、その後、死亡したものと判断された。

爆心地至近の広島郵便局に出動中の生徒の一人堤洋子は、当日、通勤途上、乗っていた電車が十日市停留所にさしかかったとき被爆、辛うじて電車から脱出し、猛火をさけようと、相生橋付近の川で水をかぶったのち、経路不明だがその日の夕刻、安佐郡祇園町西の原放送局舎宅の自家にたどりついたまま臥床、出血多量で八月十七日ついに死亡した。

岡山県の水島に出動していた生徒稲毛恒子は、肉親が病気で、たまたま上柳町の自宅に帰っていて被爆、行方不明となった。

同じく水島に出動していた生徒望月登美子は、塩屋町一丁目の自宅が被爆し、一挙に両親を失い、昨日に変わる悲境に立ちむかわねばならなくなった。また、学校にいて被爆した浅井和子は、同時に水主町四八六番地の自宅も被爆し、前者と同じように両親を失った。

このほか、音楽担当の長橋ヤエコ講師は自宅で被爆死亡し、園芸係雇員一人が行方不明となった。

なお、宇品町の陸軍運輸部に出動中の生徒も、爆心地からかなり離れていたにもかかわらず、数人が軽傷を受けた。

このように原子爆弾の一閃は、営造物や人命のみならず、社会秩序も家庭生活も、それを彩る人間関係や文化も、その都市もろともに破滅させたのであった。

八、被爆後の混乱

被爆直後、火気の手締り、負傷者の収容手当などをして、校門をとじ、警戒体制をとっていたが、学校のまわりをゾロゾロと避難者が通るので、門をあけて通行者に「どこに爆弾が落ちたか、皆実町辺か?」と問うと、「みなやられている。ここら辺が一番軽い。」という。

縄田教授が二階のバルコニーに出てみると、全市が深々と黒煙につつまれていた。

これが十時ごろのことで、東千田町の寄宿舎の状況視察に、女の先生が出ていったが、御幸橋以西は火災にさえぎられて前進できず、引返して来ての報告で、自分たちの学校より外の方が大変だと知り、さっそく門をあけた。

このころ、隣の陸軍共済病院はすでに避難者で一杯になっていて、避難する場所も救護する人手もないありさまであったから、あふれた避難者がゾロゾロと校内に入って来た。

これら一般罹災者のうち、元気なものは、学校から再び、火災になっていない宇品海岸の方や、丹那の方へ避難して行った。あとに残った者は重傷者で、初めは一五〇人くらいであった。そのうち、暁部隊が来てこれらの人たちを似島や金輪島へ運んだ。

あとの負傷者はみな教室に収容した。重傷者二、三〇人だけは物理教室の大きな机をベッドがわりにして寝かせたが、このため机がベトベトになるほど淋巴液が流れたまり、剥げた皮膚が机上にへばりついていた。

これらの負傷者約二〇〇人の治療には、校内に駐屯していた暁部隊本部付の佐伯貢衛生兵長があたり、当校教職員・生徒の献身的な看護活動が続けられた。なお、校内駐屯部隊は、九日ごろ引揚げたが、佐伯兵長は一人踏みとどまって、八月二十九日までのあいだ救護活動を続けた。そのためか本人も原爆症状に苦しむ体となった。

避難者たちのうちから、最初の日に四、五人死亡し、続いて毎日四、五人ずつ死んでいき、一週間くらいのあいだに、身元不明者がほぼ二〇人くらい死んでいった。死亡する者は、重傷者よりもむしろ軽傷か無傷の人が多く死んでいき、明日はわが身かもしれぬという恐怖感におそわれた。

これらの死体は、学校事務室で被爆し、頭部にガラス片による軽傷を受けた事務職員池田実書記(元特務曹長明治三年生れ)が、もっぱらその処理にあたった。その遺骨が小高い山を作るほどになったが、池田書記は、死体の残留放射能の影響からか、下痢をしはじめ、十月十三日、南千田町三丁目の自宅でついに不帰の客となったのである。

校内に避難して来た者のうち、重傷者ほぼ二〇人ばかり以外の避難者約一〇〇人は、行先がなくて途方にくれていた人々であったが、八月十五日の終戦の玉音放送を聞いてから、どこへともなく四散した。

このように、被爆後、残存校舎は自然的に応急救護所としての役割をはたし、約三週間、職員家族その他身寄りのない生徒や外来避難者の救護と宿泊に使用された。

当初は二、三〇〇人にも達し、終りごろでも数十人の者がまだ残っていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

津山校長を中心として、職員・生徒一同が協力一致し、校内の秩序は一応保つことができたし、校舎も火災をまぬがれたので、もっぱら校外の状況を知ることに全力をつくした。

突発的な大惨事のさなか、正常な授業は到底できず、学校としての機能は停止した。

しかし、校舎が応急救護所としての役割を一応終えたあと、職員・生徒のうち、宿泊する場所がない者は校内に起居して、校舎の整理や業務連絡につとめた。

十一月五日、ようやく第二学期の授業を開始したが、十二月の休校になるまでずっと、登校者はわずかに数十人に過ぎなかった。授業はほとんどおこなわれず、校舎の応急修理や飢餓対策としての食糧生産などの作業に励んだ。

教室は、当時三年生は、終戦により動員解除になって自宅に帰ったまま、卒業式をせず、九月末付卒業証書をそれぞれに郵送したからおらず、一、二年生だけで、そのうえ登校者が少なかったので、教室不足の問題はなかったが、破壊がひどく雨や風の吹きさらしであったから、その対策に苦心した。

その冬、特に寒気きびしく、破壊された校舎では堪えきれなかったうえ、交通機関も整わず不便をきわめ、食糧不足も深刻になるばかりという悪条件が重なって、やむなく十二月十五日から翌二十一年二月十日まで臨時休校とした。

第三学期を迎えてから、登校者も漸増し、教師約三〇人、生徒約二三〇人となり、一七教室を使用するようになった。

生徒も中途退学する者が多かった。

なお、学用品や教科書は、校舎が焼けなかったのでさほど不便を感じなかった。また、海軍兵学校その他軍関係の放出・払下げなどがあったので、化学実験用資材などは、担任の三田教授がトラックに乗って呉海軍工廠へ受取りに行ったこともあった。

焦土と化した広島市内には、今や広島文理科大学なく、高等師範学校なく、高等学校なく、焼失をまぬがれた当校のみが、被爆後二か年くらい、広島市の文化センター的な役目をした。復興しようとする市民は食糧難のうちにも、文化的なものを求めたし、また、進駐軍の将校らも原子爆弾のことを尋ねに來たりして、文化面にたずさわる多くの人々が入り出した。

一〇、その他

その他

(イ)原子爆弾の熱線による現象として、運動場に耕作していたサツマ芋その他の作物や校内の樹木の葉が、北々西の方の側、つまり炸裂した方向にむいていた側だけが焼け焦げて赤茶色になった。

(ロ)八月末か九月初めごろ、宇品に上陸した占領軍は、何隊かに分散して各方面から入市した。当校へも、丹那の方から幾分隊にもわかれて一列縦隊になり、銃を前にかまえた警戒体制をとって進入して來た。

その隊長は、いあわせた教授を案内役にして先頭に立て、市内のあちらこちらを視察した。

(ハ)終戦以後、半年間くらいアメリカ軍海兵隊が盛んに學校に來て、校内の様子をさぐった。兵隊らは勝手に占領記念物を物色し、ラジオや物理教室のちょっとした機械類とか、使っているマイクなどを持ち去った。倉庫から日章旗を見つけ出したときは、争って取りあつた。

(ニ)終戦で軍隊の解散となり、宇品の曙部隊から復興資材提供の通知があつたので、教職員一同が協力して、大八車で何度も、曙部隊使用の木材やタタミ・ツルハシその他を多量に運んだが、運ぶはしから盗まれてしまうありさまで、手のほどこしようもなかつた。

第三項 広島工業専門学校…547

(現在・広島大学工学部)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市千田町三丁目

校長 北沢忠男

教職員 一三五人

生徒概数 一、六五〇人

校舎 鉄筋教室三〇教室・延三九五坪。レンガ造教室四教室・延一二〇坪。木造二階建・一三五教室・延四、二八三坪

敷地面積 一七、一四〇坪

爆心地からの距離 約二・一キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島工業専門学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
海軍監督所 東洋工業株式会社 三菱機械工場	大手町 安芸郡府中町＊ 安佐郡祇園町＊		全員七二九人		

日本製鋼所 中国配電大洲製作所 坂発電所 三菱化成工場 帝人三原工場 帝染福山工場 三菱電気工場 三菱車輛工場 ソノ田工場 新居浜化学工業株式会社新居浜工場 日本酒類門司工場 日東門司工場 東芝余部工場 東芝電気工場 川西機械大久保工場	安芸郡向洋＊ 大洲町＊ 安芸郡坂町＊ 大竹市＊ 三原市＊ 福山市＊ 福山市＊ 三原中 徳山市 愛媛県新居浜 福岡県大里市＊ 福岡県大里市＊ 兵庫県余部＊ 兵庫県網子＊ 兵庫県大久保				
--	--	--	--	--	--

四、指定避難先と経路

別になし

五、校舎の使用状況

校舎の一部に、海軍技術研究所研究分室(電波兵器・水測兵器の研究)が置かれ、研究員として本校の教官五人が依頼されていた。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
残留学生の平日授業。残留中の一年生を中心にして、前項学生の約半数が登校した。		概数九二一		一年生は、四月に入学したが、八月一日が初登校であった。 三年生は九月卒業までの仕上げ教育を実施中で、一部学生は授業中であった。

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊(一部大破)

当校は、爆心地から南約二・一キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、木造校舎の大部分は一瞬にして倒壊し、また、鉄筋校舎およびレンガ建校舎などの内部は、半壊、あるいは大破の被害を受けた。そのため、当日登校中であった一年生を中心とした全校学生の約半数は、この大惨状に遭遇し、甚大な被害をこうむった。

なお、倒壊物からの大火災はなく、電気科屋上のアンテナ塔などに発火箇所もあったが、学生の消火作業により鎮火し、建築物の焼失だけはまぬがれた。

(二)人的被害

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者	一八人	六二人	
重軽傷者	六一	四五八	
行方不明者	三	五	
計	八二	五二五	

原子爆弾の炸裂時が、ちょうど授業を開始した直後のことであったから、大半の学生は、飛散した窓ガラスや木片で負傷し、また、熱線の直射をうけた学生は火傷を負い、鮮血にまみれた。また、押しつぶされた屋根や天井の下敷きとなり、助けを求める声があちらこちらから聞え、一瞬、凄惨な地獄と化した。しかし、比較的軽傷者はこの重大さを悟り、鮮血を流しながらも、共に力をあわせて、救出作業に従事した。

重傷者は、奉安殿(現在の守衛所裏側)付近に収容し、また、歩行できる比較的軽傷者は、最寄りの赤十字病院で手当てを受けるように指示したが、同病院も被害甚大で治療するなどの余裕がないため、当校の配属将校が、陸軍共済病院(現在の県病院)に連絡をとって、随意に同病院へ赴かせた。

また、重傷者を何時までも校内に、収容しておくわけにもいかず、宇品の暁部隊に連絡し、トラック数台を借受けて広島港に運び、一般負傷者と一緒に、軍用舟艇で似島収容所に送った。

八、被爆後の混乱

この大惨禍の中では、救出作業だけがやっとのことで、他には何もできず、ましてや即死した者および重軽傷者の、名簿作成など考える暇すらなかった、そのため、学生の所在は消息不明となっていたので、八月七日早朝、受付所を急設し、学生の顔を見るたびに、本人および知る限りの同級生や、友人関係について聞きただし、その消息を記録して、父兄の照会にこたえた。

市内および近郊の工場に動員中であった学生は、かねての指令どおり、消息を連絡してきたため、死亡者や重傷者以外は、意外に早く連絡がとれて、大半が八月十二日ごろまでに所在が判明した。しかし、一年生は四月に入学し、八月一日に初登校したので、授業を開始後、まだ一週間もたっていなかったから、学生相互に面識も薄く、被爆後は一緒に行動しながらもはっきりしないことが多く、連絡もむづかしかった。上級生の中にも、勝手に知りすぎて随意に行動した者もあり、若干人が消息不明者の方にいられていた。

九、学校再開の状況

学校の再開

校舎は倒壊したり、大破して使用不能な状態となったため、学校再開の見通しがつかないまま、その移転などの問題について、いろいろ協議された。

そのうち、倒壊校舎の整備を行ない、倒壊材料による仮小屋の建造がおこなわれて、どうにか使用のできる状態の教室ができあがり、三年生の授業が開始された。しかし、学生全員の授業再開は、とうてい不可能なため、他の施設がいろいろ物色された結果、呉市長の斡旋により同市広町の旧海軍第十、航空廠第二工員養成所の施設が目にとまり、借用の交渉が成立したので、昭和二十年十一月一日に当校一・二年生の学生が、この地において授業を始めた。しかし、この工員養成所施設には、教室が四教室、実習室が一教室と事務室があるだけで十分な教育もできないため、呉市の第三中学校の校舎一部と、呉港中学校の校舎一部を借用して、急場をしのいだ。当時の出席教職員は約一一人、学生数は約一、五二九人程度であったが、施設の不十分なことや、教育内容の不備のため、苦難な毎日が続き、一日も早く校舎の完成と内容の充実が望まれていた。その後、混乱状況も一段落ついて、人々が正常な姿になりはじめたころ、呉市広町仮校舎が進駐軍に接收された。そのうちに広島市の本校復興事業がようやく活発なとなり、昭和二十二年一月、念願であった本校での授業が再開された。

[第四項 広島医学専門学校](#)…554

(現在・広島大学医学部)

一、被爆当時の概要

当時の概要

(一)所在地 広島市皆実町一丁目(元県立広島師範学校)

(二)校歴の概要

本校は広島県立として、当時の岡山医科大学清水学長が、岡山医科大学のメンバーで設立するよう文部省から委託されて、元県立広島師範学校跡の一部を校舎にし、県立広島病院を県立医学専門学校附属病院とし、修業年限は四か年・学生定員四一八八人、初年度募集人員二二〇人で、入学試験は三月下旬に広島県立第一中学校でおこない、答案は岡山に持ち帰って採点した。

昭和二十年四月開校予定のところ、戦局の急迫により遅延して、同年八月五日(被爆前日)に開校式をおこなった。のち、県立医科大学に昇格、更に広島文理科大学・広島工業専門学校・広島高等学校などと共に、国立広島大学に移管昇格し、現在に至る。

科目は、当時の医学専門学校設置基準に従って設けられ、教授数・職員数も同様の内容であった。

(三)教授陣容

校長 林道倫(精神科)

教授 山崎義節(事務長兼公衆衛生学)・西田勇(生理学)・玉川忠太(病理学)・数野太郎(生化学)原爆症で昭和二十年死亡・稲田万作(解剖学)・北村直次(細菌学)・岡村岩男(衛生学)

(四)生徒数 約一六〇人

(五)爆心地からの距離約二・二キロメートル

二、疎開状況

疎開状況

八月五日午前十時、林校長以下全教職員および新入生約一六〇人が集合して、開校式を挙行了たあと、山崎・西田・北村三教授らと共に、学生全員により学校の集団疎開をおこなった。

机・椅子などを馬車に積んで広島貨物駅へ運び、貨車三輛に積みこんだ。午後四時に作業終了。高田郡小田村高田原の高林坊(住職・福岡最勝)へ発送する手続きをとった。

北村教授の手記「原爆日記」によれば、「丁度、同時刻にその貨物駅事務所に来合せていた砲兵大尉が、『明日、広島市に新兵器による大空襲があるとの情報が入っているから、現在、この駅に着いている野砲を、今夜中に貨車から下してくれ。』と交渉中。切迫したただならぬ空気がただよう。」とある。

午後五時、西田・山崎両教授は学生全員と広島駅に出て、学校疎開先の高林坊へ出発した。北村教授は広島に残り、五日夜は寺町の真行寺に宿泊した。

三、被爆の惨状

被害状況

皆実町の学校は、被爆により全壊したが、直前に学校ぐるみの疎開をしていたから、実害はあまりなかった。五日に広島貨物駅へ運んだ学校備品も、まだ発送されていたかったが、火災にあわず、そのまま無事に残った。

寺町の真行寺に泊っていた北村教授は同寺で被爆し、爆風で吹き飛ばされたが外傷少なく脱出、夕方牛田町ふたまた土手に到着し、多くの避難者らと共にその場に野宿。七日、広見貨物駅で学校用品の無事を確認してから、疎開先の高林坊に行った。

しかし、六日当日、残務整理のため、学校に残っていた事務職員は、すべて圧死したものである。

四、学校再開の状況

学校の再開

高林坊に疎開していた林校長以下の教職員や学生たちは、危く被爆から免れ、寺の本堂で授業を続けていた。七日に帰って来た北村教授も、八日から細菌学の講義をおこなった。

九月になって、本格的に学校再建にとり組み、林校長以下各教職員ら種々の対策を進め、広島医学専門学校の基礎を固めた。しかし、高林坊の食事は悪く、かつ原因不明の下痢(恐らく赤痢)に悩まされ、九月中旬、高林坊での授業は一応休校となり、職員・学生共に、それぞれ自宅に帰った。

県当局は、創立直後に被爆して内容極めて貧弱なままになっている当校の復旧を計り、昭利二十一年九月の県会に改善費七十万四千三百二十八円を提案し、設備の改善と共に職員の経費増嵩をはかったが、国の方針として大学に昇格しなければ廃止されるということになったので、直ちに医科大学建設委員会を組織し、これが実現を期した。

大学設置の当初計画は、賀茂郡安浦町の元海兵団兵舎を工事費約一二八万円で模様替えし、予科教室および寄宿舎として充当、更に学校本部学部および附属病院については、呉市民病院および阿賀伝染病院を、財産負債そのまま譲り受け、これに経費約二一四万円を投じて整備することとして、文部省との折衝を進めた。これが、現在の広島大学医学部となった。

なお、病理学の玉川忠太教授は、被爆負傷者の多数収容されている通信病院において、昭利二十年八月二十八日から十月十三日までの間、二九体の屍体解剖をおこない、原爆症に関する貴重な研究資料を得た。

第五項 広島女子高等師範学校および附属山中高等女学校…558

(現在・広島大学教育学部福山分校)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市千田町六六六番地

校長 松尾長造 附属山中高等女学校主事 広幸亮三

教職員 五四人

生徒 広島女子高等師範学校 一二〇人

附属山中高等女学校 一、四三二人

校舎 木造二階建・延二、八二五・六〇坪

(内訳)

教室四〇 九五五・五〇坪 木造

講堂 一 一四三坪 木造
体育館 一 一八九坪鉄筋コンクリート建
その他 九一九・一〇坪
寄宿舍 四五二坪
記念館 一六七坪
敷地面積 七、九七七・七七坪(道路改修により減ず)
爆心地からの距離 約一・七キロメートル

広島女子高等師範学校・附属山中高等女学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

二、沿革概要

沿革概要

明治二十年十月二十七日、千田貞暁県知事など官民有志が発起人となって、広島高等女学校(本科三年・予科一年半)の設立発起人会が開かれ、校主に山中正雄・校長に千田県知事夫人蘇茂(そも)が推薦され、同年十二月六日、設立認可を受けた。

校主山中正雄は「嘉永元年六月八日、本県佐伯郡五日市海老塩浜に生る。家世々里正を職とす。明治初年東都に遊び、英漢法律の学を修め、後、広島に帰って弁護士を業とす。夙に女子教育の必要を感じ、明治二十年十二月本校を創設、爾來是が経営に努力し、校運の進展を図る云々(山中正雄翁頌徳碑正三位男爵浅野養長選書)」と、あるとおり、早くから女子教育の必要を感じ、千田知事に対して、県立の教育機関を設けるよう進言した。知事は、当時、宇品港築港の大事業に取り組んでいたから、山中正雄個人が設立を進めるようにすすめ、県は協力をおしまないと激励した(山中二雄未亡人トシ談・八九歳)。

当校は当時、広島における高等女学校の嚆矢であるとともに、全国を通じて第三番目に設立された女子学校であった。

明治二十一年一月十一日、広島市天神町の民家を仮校舎とし、開校式を挙行。生徒定員二五〇人、入学生七〇余人、松岡ミチが学監に就任。

同年二月十五日、広島市新川場町正清院に移転。

明治二十二年四月十日、初めて専任教員をおく。

明治二十三年一月五日、千田知事が新潟県知事に転任となったので、校長千田蘇茂が辞任、松岡ミチが校長事務代行。このころ、世間は欧化主義の風潮に流れ、入学志願者が激減し、登校生も二十数人という不振をまねいた。

明治二十七年四月一日、学則を改正し、本科(四年)、予科(二年)、別科(二年)、小学教員必須科(六か月)の課程を置く。小学教員必須科の設置は、師範学校女子部が廃止され、小学教員養成の道が絶えたから、県当局の勧めによって兼設された。

明治二十八年、高等女学校令発令により、学則を改正、小学教員必須科を廃し、補習科(一年)別科を廃し、技芸専修科(二年)と改める。

明治二十九年、卒業生をもって校友会を組織し、春秋二回会同、年一回会報を発行することとなった。三十七年に橘香会と改称。

この年、県費補助を得て、広島市小町に敷地六〇〇坪を買収、校舎二棟、寄宿舍一棟を新築。

明治三十年四月一日、新築校舎に移転し、六月二十七日に落成式を挙行。十一月に小学校裁縫科教員講習科(六か月)を設置して成果をあげた。

明治三十二年四月一日、高等女学校令に準拠して学則を改正、本科(四年)、補修科(八か月)、技芸専修科(二年)とする。生徒定員四〇〇人となる。

明治三十四年四月一日、高等女学校令施行規則により学則を改正、裁縫教員講習科と技芸専修科を合併(年限二年)する。

同年五月二日、校名を私立広島高等女学校と改称(この年、県立広島高等女学校が創設される)。

なお、県費補助を得て、校地三、〇〇〇余坪を国泰寺村(現千田町)に買収し、校舎増築を決定した。

明治三十五年四月一日、新築校舎に移転、生徒定員六〇〇人に増員。

同年六月十五日、松岡ミチが校長に就任、職員生徒をもって学友会を組織する。

明治三十六年一月四日、本年度から三十八年度にわたり、広島市費補助を受け、校舎新築拡張にともなう財政難を緩和した。

明治四十二年十月二日、山中校主、および松岡校長が教育功労者として藍綬褒章を受けた。

大正二年四月一日、実科を廃し、本科補習科のみとする。十月二十一日、定員八〇〇人増加が認可される。

大正六年四月一日、校歌を制定。

大正八年九月五日、校名に私立の冠用文字を削除し、山中高等女学校と改める。

同年十一月十五日、校主校長山中正雄が死去、同月二十一日に誓願寺で校葬を執行、同年十二月十六日、校主に山中二雄が就任する。

大正九年七月五日、梅林寺勝三が校長に就任。

大正十年一月十七日、生徒定員一、〇〇〇人増加が認可される。

同年十月十三日、財団法人山中高等女学校の設立が認可になり、山中二雄が理事長に就任。

大正十一年十月十日、洋式制服、および校章を制定。

大正十二年一月三十日、前校主夫人山中サキが死去、校葬。

大正十三年三月十五日、生徒定員一、二〇〇人増員認可される。

大正十五年一月二十八日、梅林寺校長退職し、同年九月九日、東原信之助校長に就任。

昭和三年十月十八日、天皇陛下御真影を仮に下賜される。

昭和五年十月二十六日、生徒管絃楽部が創設され、公開初演をおこなう。

同年十一月一日、校歌を制定。

昭和六年二月十日、天皇皇后両陛下御真影を下賜される。

同年十一月四日、明治神宮競技大会において、生徒石津光恵が円盤投げの日本新記録を樹立。

昭和七年三月十一日、教育勅語を下賜される。同年六月十七日、石津光恵が第十回オリンピック・サンフランシスコ大会に出発。

昭和八年一月八日、卓球部が全国大会で優勝。

昭和十二年十一月十五日、創立者山中正雄先生頌徳碑の除幕式をおこなう。題字従一位侯爵浅野長勲書。

昭和十三年十一月二十日、理事長山中二雄が死去、二十二日講堂で校葬を執行。

昭和十四年一月十八日、山中トシが理事長に就任。同年十二月二十六日、東原校長が退職。

昭和十五年二月九日、山中トシが校長事務取扱いとなる。同年十一月一日、佐々木信次が校長に就任。

昭和十六年五月二十二日、生徒勤労報国隊を結成、同年七月には学友会を橘報国団と改組。

昭和十七年三月、学則全条を改正。

昭和十八年四月一日、新たに高等女学校令が発令せられ、全教授要目を改正する。補習科を専攻科と改称。生徒数一、四一四人。

昭和十九年十月、本校の校地・校舎・校具をすべて国家に寄付する申請をし、同年十二月十五日、内閣閣議において受理が決定される。同時に、広島女子高等師範学校の創設を決定。

昭和二十年三月三十一日、山中高等女学校を廃止、五七年の光輝ある私学の歴史は、ここに幕をとじた。

開学以来、その教育方針として「柔而剛」の精神を貫き、日本女性の資質の向上につとめ、卒業生は実に一万三、〇〇〇余人に達し、国内はもとより、世界各地において広く活躍している。

廃校に際し、在校生はすべて、広島女子高等師範学校附属山中高等女学校に、勤労働員のまま移籍すると共に、同年五月二十日、初めて一学年一二〇人を募集、入学が決定された。

同年七月二十一日、入学式。ただし鉄道寸断されて、新入生の登校はかどらず、毎日の授業ができなかった。

八月五日、日曜日に厳島神社前で報国団結成式を挙行。

翌六日は、最初の授業をする予定であった。

なお、全学あげての滅私奉公であり、教員、生徒ともに疎開などすることはなく、また、学校自体の避難先など考えられず、避難対策はもっぱら、各人の動員先の指示に従うことになっていた。

なお、校内に軍隊が駐屯することはなかった。

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
第二総軍司令部	本校校庭	約一五人	約一〇〇人	暗号班訓練	
日本製鋼所広島工場	安芸郡海田市町		約一〇〇	疎開跡片づけ	責任者 中村道枝 田中懋徳 平井栄一郎 } 各教官
建物疎開作業	雑魚場町	三	一年生一二〇 二年生二四〇		
三菱重工業広島工場	南観音町		不明※		
三宅製針株式会社	天満町	一	約一九(推定)	信管製作・六日は 防空壕を構築中	責任者 林やす子教官
倉敷航空機吉島工場	吉島町		約二一〇	旋盤・仕上げ	研磨など各種作業
山陽工作所	皆実町		約五〇		
陸軍糧秣支廠	宇品町		約二二〇		
合 計		約一九	約一、〇五五		

四、最初の授業の日

「原爆記千代紙の小箱」(星野春雄著)には、緊迫した当時の状況を次のように伝えている。

「(その前夜)

私は、コツコツと靴の音をたてながら、灯火管制されている暗い街を鷹野橋から、己斐の方―西方―へ歩いていた。その晩は、本年四月創設せられたばかりの広島女子高等師範学校の教授たち六人を、同校の土地建物の寄進者山中トシ女史が、学校将来の発展を祝福して、豪華な宴を催して饗応してくれたのであった。最早や、夜も更けて、市電もなくなったため、私は、三里の道をこれから歩いて、一睡の安眠を求めて帰ろうというのである。

住吉橋のたもとにさしかかると、橋の向うに人声がする。私が、そこへ着いた頃には、その人声は、更に前方―西方―へ進んでいた。

突然闇の中から男の声

『どこへ行く』

見ると夜警の者らしい。

『家へ帰るんです。』

『どこへ勤めている。』

『広島女子高等師範学校』

『はあ、さようですか。どうも此頃ね、家を留守にして郊外で野宿するものがふえてね。それこそ焼夷弾一発落ちても、もう…』

『そうですが。困ったことです。ご苦労様で…』

私は、急ぎ足で進んで行った。そして、すぐ前に行く人群に近づいた。見ると、まるで荷物のかたまりが動いているようだ。二、三人のおかみさんと、その子供たちの一団だ。子供は子供なりに、それぞれの荷物を背負って、トボトボと歩いている。

『ねむいよう……お母ちゃん』

『さっさとお歩きよ。この子ったら…』

『…』

私は、歩度を早めて、追越して行った。

街のあちこちから、十二時を報ずる時計の音が、静かに流れてくる。

(地獄行きの電車)

朝は五時に起きた。一時半頃帰ったので、漸く三時間半の睡眠をとったわけだ。まだ眠気が体中に満ちてはいたが、今日は広島女高師創設最初の授業をするというので、相当緊張をしていた―私は、実践女学校前停留所で、宮島電車に後方から乗った。電車は、超満員であった。左は山、右は海、絵のような景色が、毎日ベールをとりかえて現れる。山際には、暁部隊の兵士たちが、洞窟陣地を作っている。この付近は、海と川とが迫っていて、漸く幅一〇〇メートルしかない。そこへ、山陽線と、この宮島電車線と、国道の新旧二線が通っている。その上に洞窟陣地を作っている。恐らくこの狭いことが、一ノ谷にも比すべき要衝なんだろう。出てきた岩石の量から考えて、相当人規模のものらしい。

右の海には、安芸の小富士と呼ばれている似島が、コバルト色の靄をたなびかせて、そのきれいな姿を見せている。広島街は、褐色に包まれて、三菱造船所のクレンの頭が、その中から見える。鏡のような静かな海には、白いカモメが五つ六つ、羽ゆるやかに飛んでいる。

超満員電車は、運命の神の嘲笑も知らぬげに西広島駅へすべり込むように入っていく。私は、ここで市電に乗りかえて三〇分、電鉄前(千田町)で下車して学校へ急ぐ。

『お早う』

附属女学校の可愛い一年生たちが、雑魚場町の疎開作業へ行くのに会う。私は、教授法研究のため、数時間授業をしたことがあったので、よく生徒たちを知っていた。私が、激励してやると、ニコニコとして、はにかみながら通っていく…という、いつもと同じの朝の風景であった。」

五、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
一、学校創設最初の授業日。教室は二階裁縫室で各科合併授業。 二、県から動員学徒のことについて協議のため来校予定。	約一五人	八一人	第二総軍暗号係兵士・人員不明	勤労働員に行きたくない生徒を、事務室で二、三人使う。

六、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況…全壊全焼

当校は、爆心地から約一・七キロメートル離れたところに位置している。

六日朝、校庭に整列した生徒八一人は、いつものように軽い体操をし、立花達子教官の指揮のもとに、簡単な朝会をすませた。生徒らはサッサッと二階へ上がって行った。

第一時間は、広島女子高等師範学校創立最初の授業だから、多人数が収容できる二階の裁縫室が使われ、各科合併で学校長が授業することになっていた。附属山中高等女学校の生徒は、階下の調理室にいたが、料理の手伝いをする者や、哨空係の生徒たちは、まだ校庭にいる者もあった。

運動場では、第二総軍の暗号係として、内地戦にそなえ、近く動員される附属高等女学校の四年生約一〇〇人が、朝会のあと、訓練がはじまる前の数分の時間を惜しんで、元気にはしゃいでいた。

教職員約一五人は、朝会を終るとそれぞれの自室に入り、汗を拭く者もあったし、仕事に取りかかろうとしている者もあった。

そのとき、原子爆弾が投下された。

この一瞬の惨状は、星野教授の原爆記(前出)によると、次のようであった。

「突然、ピカッ！と光った。

この時、微かな衣ずれのような音を感じた。一羽目板の焦げる音?—

窓から外を見ると、楠木が光っている。あの葉一枚一枚が、ガラガラと光る。玄関の側面にぬってあるコンクリートが、青白く照らし出されている。玄関の屋根裏まで、皎々と光っている。目がくらむ程だ。

来た！焼夷弾！

エレクトロン焼夷弾が、窓のすぐ外側に落されたと誤解した私は、反対側へ逃げる。そこには、あたかも私をはばむが如く机と椅子が、行手を塞いでいた。思わずたじろぐ。光る窓を振り返りざま、更に新しい方向に、一步をふみ出そうとしたその一瞬、非常なショックと共に真暗になってしまった。と同時に、バリッとこの部屋の北の方の天井付近に、何か強い破裂音の幻覚を感じた…。

炸裂の一瞬、校舎の屋根組はほとんど壊れないで、合掌造りのままで倒壊した。

つい今まで目前に整然と建っていた校舎が、完膚ないまでに打ちのめされていた。校内は古材の山と化し、飛散した瓦やガラスの破片が運動場一面をおおった。明治以来、わが国の子女薫陶に多大の功績を積んだ由緒深い学校の痛ましい終焉であった。」と、伝えている。

(二)人的被害

(在校者の状況)

山中トシ前理事長は、寄宿舎の土間で舎監や看護婦などと、病気になった炊事委員の交替の件について相談してい

るときであった。理科教室か裁縫室が光ったと直感した瞬間、建物の下敷きになったが、傍にいた女中に助けられて運動場に脱出することができた。

二階にいた女子高等師範学校の生徒も、階下にいた附属高等女学校の生徒も、倒壊した校舎の中で、木材や壁土、屋根瓦の間にうつ伏せ、あるいは横向きになって全身をおさえられ、ガラスの破片や木片で負傷し、血まみれになった。助けを求め叫び続ける声々。その声もいつしか出なくなり、そのまま死んだ生徒もいた。しかし、星野教授や幾人かの生徒は、自力で脱出することができた。ある生徒の体験(前出書)では、

「ビカーッ異常な光りが目をかすめる。私は、腰掛の上を素早く通り越して、机の下へ入ろうとしたが、腰掛が思うように動かない。もどかしいと思った瞬間、ガラガラガンと音がして、たちまち真暗になってしまった。

気がついた時は、私は、身動き一つできない体でした。木切れ・板切れ・土・瓦・あらゆるものがしっかり私を埋めつくしている。鼻の先・口もと・すべて瓦の割れと泥、幸いに呼吸だけが、僅かにできるのです。

あっ。そうだ。火！きっと来る。焼け死ぬ。いやだ。たとえここで今、もがき苦しんで死のうとも、ゆっくりシワリジワリと焼かれて死んで行くのはいやだ。私は、渾身の力をこめて、もがいて見た。右手の小指と、左手の手頸が、ほんの少し動くことがわかる。動かそうとすると、左手の手頸は、たまらないほど痛む。私は右手の小指を、全力をこめて動かして、次第に泥にゆとりをつけ、くすり指・中指・人さし指と順に動けるようにして、ついに右手の手頸の自由を得たのです。この時間はわからない。—おおよそ二時間か—左手の救出にとりかかる。右手で次第に掘ってゆくと、左の手頸にあたった。ぬらりとする、血だ。ほとんど直角に曲げられている。まもなく両手の自由を勝ち得た私は、体の横・下・背と順に木片を抜きとって、ついに這い出ることに成功したのでした。待避所に行き休んでいると、油断をしたらしく、ついに意識を失ってしまった。」

と、その様子を記している。

しかし、雑然と積み重なった倒壊物の下敷きになったままの生徒が、まだたくさんいた。脱出した教職員がそれぞれ力をつくして、救出作業にあたった。

このころ周囲の状況は「風は次第に強くなって、ついに五メートルから七メートルぐらいの強風となってきたのであった。普通の風と違って、息がない。吸い込むようにスーッと吹く。空には、積乱雲が、ムクムクと、うごめきながら昇って行く。青空との境目が、目の痛いほどクッキリしている。市の中央部は、紅蓮の炎が、高く昇って、どす黒い毒血が、たぎり立つようである。すぐ手前の広島赤十字病院が、純白の壁をくっきり浮び出している。窓は、鉄くもろとも、こちら側にぶら下がっている。風上三〇〇メートルほどの所にも、火が出たらしき煙が立ちのぼっている。思わず身振いする。これは致命的な火だ。この強風に乗ったら、すぐ焼けてくる。西の方の河岸にも火が出た。必死の努力をしている人が、手にとるように見える。風音にまじって、パチパチと柱の燃える音が聞えて来る…。」というせっぱつまった最悪の事態が迫っていた。

それに救出作業は思うにまかせず、星野教授は、非常の際、女子高等師範学校へは、広島文理科大学から、兵隊が派遣されることになっていたもので、急いで救援を求めに行ったが、大学はすでに一面火の海であった。軍人は居そうになく市役所へまわったが、惨害はさらにひどく救援どころではなかった。手あたり次第に学生・巡査・若者などに救援を依頼した。学生や巡査は一応色よい返事をしたが、すぐには来なかった。それぞれのつびきならぬ立場にいて、来られなかったのである。

もはや、学内のことは学内のものでやるほかなかったから、助けられるだけ助けだそうと全力をあげた。

脱出した教職員らは、わが身の負傷もかえりみず、死力をつくして救出作業にあたったが、救出機具もなく困難をきわめた。その状況を星野教授は続けて、次のように記述している。

『おい、どこにいる？』

奥の方で、黒いものが動いている。私としては、目的物と、通路の幅を、十分見くらべておく必要があるのだ。

『おい、どうした』

暗さになって、気がついて見ると、眼だけギョロリと光っている。

『出て、もいいですか』

『待て待て』

私は、十分検討してから、テコの応用をした。

『さあ出よ』

ゴソゴソと、音がして来る。途中で左へ曲ったらしい。出る側から見れば、こちらが明るいから、よく分るのだろう。漸く出る。

今度は頭からだ。足からは、コリゴリだ。泥のかたまりに毛の生えたような頭が、次第に上がってくる。私は、たまらなく嬉しい気持ちであった。しめ、しめ、この調子、この調子。救助法の発見の嬉しさが、助けを呼ぶ声々に結びつくのだ。

生徒は、頭を出し、順調に出られるかに見えたが、急に出られなくなってしまった。

『オヤ！変だな？』

水平なトンネルから垂直な出穴への曲りを考えなかったのかな？また失敗か？

『おい出よ、出よ』

やがて腰のあたりまで出た所で、全く出られなくなってしまった。

『どうした？』

私は、暗い、イライラした気持ちで促すように尋ねる。どこか痛いらしい。よごれた顔をしかめている。

「頑張れ！どうした」

私は、抱えるようにして引出した。

『えッ！』

驚いた。太股の筋肉が、斜に切れて、大腿骨が白く見えているではないか。柱の角で切ったものらしく、つぶしたような切れ方だ。

片輪になるのかな、気の毒にも。

つと頭をそんな感じがかすめる。更に引用すと、その脚には、足先がない。

『オヤ！変だな』

そこには、白いスリコギ型の骨が、二〇センチメートルほど出ている。よく見ると、私からはちょうど見えない下側の方へ、足先だけがブラ下がっているのだ。かがとから、ふくらはぎのところまで皮膚が破れて、白い骨がにゅっと出て、その皮や筋肉で、かがとから先の部分が、ブラさげられ、その足先の部分が、私のズボンのところへ、軽くバサバサと触っている…。

まったくこのような正視に堪えられない悲惨な光景が、各所で繰りひろげられた。

小泉正雄教官は、他の地方で戦災に遭い、教職をやめて本校に来任し、手続き中の人であったが、ピカッと光ったときに生徒課から飛び出したところへ、裁縫教室が倒れかかって来て下敷きとなった。そのため骨盤破壊、尿道切断という重傷を受けた。

すなわち閃光があってから、爆風が校舎を吹き倒すまでの二秒ほどの間に、小泉教官は約一二メートル走ったのであった。小泉教官を押しつけている柱を、原・有馬などが必死で取りのぞくと、女子高等師範学校新入生であった杉山滋子が背負って校外へ脱出し、似島の収容所へ送った。

杉山滋子は体格がよく、健康優良児の候補になったほどであったから、小柄の小泉教官を背負うことができたのであったが、翌二十一年ついに原爆症により死亡した。

小泉教官は、被爆二年後に全快して教職に復すことができ、今(四十三年)も健在である。

動員学徒の惨状

(動員学徒の状況)

市内雑魚場町付近では、早朝から建物疎開作業がおこなわれていた。一年生一二〇人、二年生約二四〇人も出勤してこれに参加、約六万坪といわれる防空用地を作る整地作業をしていた。生徒は一割ぐらい欠席していたようである。七時五十分ごろ、出席者を調べて、一斉に作業に取りかかった。倒された家屋のあちこちに、生徒たちは一列にならんで、掛声をかけながら、瓦の手送りに励んだ。

白い短袖シャツに、白っぽい腕をむき出しにして、兵隊がロープで曳き倒した家屋の、あと片づけの作業に取りかかったところであった。

突如、パッと光った。

たった今、元気に掛声をかけあって作業していた生徒たちは、一瞬、灼熱の放射能線によって打ちのめされた。続いて強烈な爆風が襲来した。作業場は一転して残忍きあまりない修羅場と化した。

引率者の田中懋徳・平井朶一郎・中村道枝の三教官と、生徒は約三六〇人のうち鎌田律子一人を残して全員が生命をうばわれた。

鎌田律子の体験

私が、潰れた屋根に上がって、瓦運びをしていると、急にパッと光りました。私は、急いで伏せました。私は、どうしてこんなに早く伏せたのか自分にも不思議なほど素早く木と木の間に伏せていました。空には、星のようなものがやや斜に降りました。急に何か匂うたので、手で鼻と口とを押えて、息をとめていると、爆風と共に、真暗になってしまいました。

クラスの人たちは、泣いたり叫んだりしていて、大分様子が変わったから、私は立ち上がりました。そして、友だちと一緒に逃げてました。

私は、急に太陽が無くなったのだと思いました。途中には、倒れた家もあり、その他いろいろの物があるので、友だちは、それにつまづいたり、たおれたりして、途中で一緒に来られない人も沢山ありました。皆、大声で泣きながら走りました。

ほんの少し明るくなったので、他の人を見ると、他の人は裸になってしまっていました。皆、着物は焼けおちてしまって、ブルーマーだけになっていました。下を見ると、電車のレールが見えたので、私は、此处でクラスの人と別れて、宇品の方へ逃げました。

他の人は、少し明るい方へ、逃げて行きました。鷹野橋のところで、初めて太陽を見ました。貯金局の前には、沢山の貯金通帳が落ちていました。ここで星野先生に会いました。途中、馬の倒れているのも見ました。男の人が、腹を潰して倒れていました。(以下略)

引率者中村道枝教官は、「五、六歩歩いて倒れられた」「いや七、八歩だそうさ」「生徒が、両側から先生を助けて、東の方へ逃げたそうさ」「いや先生が、生徒を二人抱えて東の方へ逃げた」という噂のほかは全く不明である。

同じく田中懋徳教官は、作業場の被害と、生徒の避難状況報告のため、学校へ到着してから、次第に視力を失い、体力も衰えて、五日後に、佐伯郡廿日市町の収容所で死んだ。

また、平井朶一郎教官は、数人の負傷した生徒を引きつれて、南方に脱出、のち陸軍共済病院の土間に倒れていたのを、他の工場に出動中であった生徒に見つけられ、宇品の陸軍糧秣廠に収容されたが、翌晩ついにこの世を去った。

灼熱のルツボの中から脱出しようとする生徒の一部は、泣き叫び、苦しみ走り、暗黒の中で、声を頼りに寄り集って、みずから一隊を作って西に進み、白神社のやや南方の電車通りに出ることができたが、そこは、不幸にも、爆心地へより近い地点であった。

この時、宇品の方へただ一人別れて逃げた鎌田律子のみが生き残って、唯一の証言者となった。

屍体の位置から考えて、近所の県立広島第一中学校のプールへ向った生徒もあったようである。中には、そのプールに達しないで、求める水も口にしないまま、途中で息絶えた生徒もあった。その後、広島赤十字病院・似島などで数人の生徒が見つけれただけである。

一方、己斐上町の三菱重工業広島工場の疎開先に出動していた生徒たち(人員不明)は、六日は男子工員や県立広島第一中学校の三年生たちが、工場を休んで土橋の建物疎開作業に参加したので、女子生徒も休みとなり、草津の海岸へ水泳に行くことになっていた。

一同は防空壕付近に集って、昨日工場から配給でもらった千代紙の小箱一千代紙を貼ったきれいな小箱、あけると中から次々に小さな小箱が、いくつも出る一を開けてみたり、頬ずりしたりして、広島のを眺めながら、引率者の教師の来るのを待っていた。

その時、一瞬の閃光におそわれた。同時にグワンと強い衝撃を受けた。思わず伏さるもの、防空壕に逃げこむもの、あるいは、裏山のビワの木の下の方へ逃げていった者もあった。

裏山へは道一面に落ちているスレートや瓦のあいだに、ガラスの破片が無数に光っていた。見ると太陽の形相が変わっており、ちょうど、日蝕のときのように毒血のドス黒い塊となって、底気味悪い光りを放っていた。

あたふたと坂道を力いっぱいあえいで登って行くと、重油のような黒い雨が降り出し、白いシャツの上に、はっき

りとあとをつけた。

冷静なある生徒は、持っていた水筒の水の上に、雨つぶを落してみても油でないことを知り、「油をかけて焼くのじゃないか」という、みんなの恐怖を打ち消した。

この裏山へ逃げて来た生徒たちのほとんどは、ガラスや瓦の破片で、ひどい負傷をしていた。山の横穴防空壕にもたくさんの者が避難したが、火傷でむごい形相の人々が、坐ったり、横になったり、仰向けになったりしてたくさん並んでいた。

また、天満町の三宅製針株式会社に出動していた生徒約一五人(推定)は、信管のようなものを作っていた。

近く、三菱工場の方へ動員の切替えがあるということで、引率責任者の林やす子教官は、工場内を一巡して生徒たちを励ましてから、階上の控室で鉛筆を削っていたという。一部の生徒は、防空壕を掘っていた。

ピカッと光った。青白い不気味な強い光線であった。何だろうと思う瞬間、もの凄い音響と共に、猛烈な爆風がすべてを吹きとばした。窓ガラスが木の葉のように破れて襲いかかった。工場は倒壊し、みんなその下敷きになった。周囲はまっ暗のなかで、友人の名を呼びあい、必死で脱出しようともがいた。

助けてーと下から叫ぶ声がきこえる。火があちらこちらにチョロチョロと燃えはじめ、異常な早さで拡がっていく。

辛うじて脱出した生徒益旧ミツエは、二、三人の友人と一緒にその場を逃げだす。どこをどう逃げたかわからない、福島橋にたどりつき、満潮の川のなかへザブンと飛びこんで泳ぎわたる。陸へたどりついて一目散に逃げ続け、己斐の山まで辿りついたとき、大粒の重油のような雨が降りはじめた。寒くて仕方がなかった。

しかし、この工場に出動していたほとんどの生徒は死んだのであった。引率者林教官は後日、焼跡から遺骨が発見された。肩の一方が上がっていたので、骨格も特徴があって確認された。

区 別	教職員	生 徒	備 考
即死者 重軽傷者 行方不明者	五(四)人 不詳 ○	三九九(三七八)人 不詳 ○	(動員関係の被爆死亡者内訳) 第二総軍司令部 二二 倉敷航空機吉島工場 九 日本製鋼所広島工場 七 三菱工業広島工場 一二 陸軍糧秣支廠 二 山陽工作所 二 三宅製針株式会社 一八 建物疎開作業 三三三 ()内は動員先での被爆者数
計	五(四) 判明分のみ	三九九(三七八) 判明分のみ	教職員および生徒計 四〇四人

七、被爆後の混乱

倒壊校舎の下敷きになった生徒は、すでに下半身は押しつぶされて死んでいるのに、上半身だけ生きていて助けを呼んでいたのか、やっと助け出されると死んでいく生徒もいた。火の来ないうちに助けようと、何人めかの生徒に取りかかっているとき、救援の兵隊五、六人と、広島高等師範学校の元気な生徒が来た。兵士たちは女子高等師範学校の生徒を救出し、広島高等師範学校の生徒は附属山中高等女学校の生徒のところを救出した。

校庭の待避所付近には、町内の人々も避難して来たが、負傷者を軍のトラックが来て他へ運んで行った。救出された生徒は、出ると急に血色を失って、待避所に収容されると、まもなく死ぬる者が多かった。

教官や救援隊(兵士・広島高等師範学校生徒)の必死の作業により、横倒しの防火壁の圧死者を残し、午後四時ごろ、一応救出作業を打ち切った。

火災発生

今までの南風が南西風になり、風速五～一〇メートルの西風になると共に、火災が押し寄せて来た。爆風で敷地西方堤防に二メートルの高さに積まれていた綿ようのものに、夜になって火がついた。二、三人で約二〇メートル離れた川の中へ、何度も着火した部分を取っては捨てたが、小さい綿毛は再び赤くなり、風にあふられてポツと火になった。遂に防ぎきれず火事となった。火は大破した寄宿舍をなめつくし、体育館に移り、つぎつぎ全校舎を火炎につつんでいき、翌朝まで燃え続けたが、炎上して灰になっていく校舎を、じっと見守って立つ山中トシ前理事長の黒い影が、神々しく思われた。

受付所設置

翌七日、運動場のまん中に積んであって、火災からまぬがれた配給の生徒用機の材料を利用し、トタン板・焼釘・電線などを拾い集めて、バラックの受付を建てた。

まだ、完成しないうちに、雑魚場町で疎開作業をしていた附属山中高等女学校の一年生・二年生の父兄たちが多く訪ねて来た。

しかし、引率教官は行方不明(後死亡)であるし、話しようがなくて応接に困った。そこへ附属山中高等女学校の広幸主事が新任されて来着し、ただちに活動したが、後日、同主事も原爆症に罹り、生死の間を彷徨する身となった。

被爆した生徒たちは、いったん収容された所から、さらに他へ転送されたりして、その分布区域は、十里・二十里・あるいは瀬戸内海の島々へひろがって行き、到底連絡のできないものとなった。屍体も、氏名不詳のまま処理されるので、行方不明の生徒の出たのもやむを得なかった。

死体処理

なお、この日兵隊が来て、死体を収容し、寄宿舎跡の向う側の防空壕を利用して、火葬をはじめた。夜も昼もなく約二週間ぐらい続けたが、夜はその火炎が皎々として周囲を照らした。

一方、安全地帯へ避難していた女子高等師範学校の生徒たちの一部が、バラックに帰って来て、中には親もとへ帰らず残って、応接や連絡の仕事を手伝うものもいた。

こうして、一兩日が過ぎるうち、焼跡に散乱している白骨を、できるかぎり集めて、防空壕のなかに安置した。

防空壕には、無残な姿となった生徒が、他の収容所から、バラックを訪れて来て一泊したり、休憩したりして、それぞれの郷里へ帰っていった。

数日後には、収容していた負傷者の数も減ったが、三阪看護婦は最後の一人まで、われを忘れて救護につくした。

なお、六日当日、生徒が避難していった主な場所の一つ吉島飛行場では、元気な生徒はその日のうちに帰った者もあり、翌朝、己斐行きのトラックに便乗して帰った者などがあったが、重傷者は、二十日ごろまでここで治療を受けた。

もう一か所似島へも多数避難していったが、ここからさらに宮島・金輪島・小屋浦・大竹などへ転送されたから、似島には長くいなかった。

八、学校再開の状況

学校の再開

八月十五日、終戦となったが、バラックで被爆後の処理にあたっている教職員には、目前の生徒たちの治療と、新しい校舎を得ることが急務で、そのほかのことは考えられなかった。

附属山中高等女学校の教官は、四八人必要であったが、退職者や被爆死亡者で、わずか一人となり、授業の再開などおぼつかないありさまであった。

その後、広島女子高等師範学校は、県下の高田郡吉田町へ移転した。吉田小学校の一部と、小田村の広島高等師範学校の修練道場の一部を借入れて応急校舎としたが、同年十二月、さらに呉市の東方安浦へ再度移転した。

しかし、ここが火災にあったため、福山の現在地に三たび移転した。

のち学制改革により、広島大学の発足と共に、男子の師範学校と合併して、広島大学福山分校となり現在に及んでいる。

第六項 広島高等学校…582

(現在・広島大学教養部)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地 広島市皆実町三丁目

校長 安藤祐専

教職員 三二人

生徒 概数六八九人

校舎 木造二階建・四五教室および木造寄宿寮四八室・延五、三五一・〇九七坪、鉄筋教室一と鉄筋講堂・延三〇八・〇五〇坪

敷地面積 二〇、〇四八・九八〇坪

爆心地からの距離 約二・七キロメートル

二、学生疎開状況

なし

広島高等学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生徒	作業内容	備考
日本製鋼所広島工場	安芸郡海田町	一〇人	約一二〇人	12 cm二連装高角砲の組立 25 mm機関砲弾の製作 15 cm砲弾の弾体製作	引率者・生徒主事 森義考教授
東洋鋼板下松工場	山口県下松市	一	約二八〇	高熱の鉄板をガラス炉から 引出し、圧延ローラーにかけ る作業 Cold millにするジュラルミ ン圧延作業	引率者 真鍋義雄教授
呉海軍工廠	広島県呉市	一	約一三〇	高角砲の組立、水雷部におけ る人間魚雷の胴体削り作業	引率者 教官が交替で勤務
合 計		一二	約六二〇		

四、指定避難先と経路

広島高等学校の運動場

五、校舎の使用状況

陸軍安芸部隊の通信連絡班約二〇人が、寮の一部に駐屯して、隊長岩田中尉指揮のもとに、本隊(高知県)との連絡を任務としていた、なお、軍用物資などの集積はなかった。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生徒	その他	
授業実施せず。学生全員が動員出動中であつたが、身体故障で出動しない学生は、校内作業に従事していた。	二人	約六〇人	陸軍通信部隊 約二〇人	教官二人が交替で学校に宿泊し、 防衛警備に当たっていた。原爆炸裂 時には朝礼をおこなっていた。

七、被爆の惨状

(一)校舎の被害状況…一部全壊、その他大破・半壊

被害状況

当校は爆心地から南々東約二・七キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、校舎の一部には全壊したところや、大破または半壊などの被害を受けたところがあった。

炸裂後、化学実験室の実験台にあったアルコール瓶から流れ出た液が発火して、室内備品などに延焼したが、発見が早く消火することができた。校舎の被害内容はつぎのとおりである。

全壊校舎＝雨天体操場・銃器庫・柔剣道場・生物教室・学生ホール・生徒控所・寄宿寮(六棟の中で五棟全壊)。

半壊校舎＝校舎本館・別館・図書閲覧室・炊事場・食堂・弓道場

大破校舎＝音楽堂・物理教室・化学教室・寮事務室・宿直室・寄宿寮一棟

(二)人的被害

区 別	教職員	生徒	備 考
即死者	(四)人	(約二四)人	()内は学校外特に動員先での被爆者数
重軽傷者	(五)	(約二〇)	
行方不明者	〇	(約一六)	
計	(九)	(約六〇)	

学徒動員により出動中の学生で、日本製鋼所で勤務していた一部学生(約二〇人)は、六日当日、工場の電休日で作業休止のため、工場寮(安芸郡海田市町)から皆実町の本校へむかう途中の、広島駅付近や紙屋町付近において、炸裂に遭遇し、多数の犠牲者を出した。学生の中には、重傷の身でありながら、学校にたどりついた者もあったが、帰りつかずいずれかに逃げのびた者も多数にあった。学校にむかって逃げて来た者の中には、校門を入ると倒れる者、皮膚を焼き、裸体同然の姿で校内を彷徨する者もあって、凄惨な状況を呈した。学校は重軽傷者のために、大破した寄宿寮の第一寮の一部を応急救護所に切替え、生徒主事ほか数人の職員が火傷者に鯨油を塗って手当てをした。また死

亡者は、ゴザに巻き、穴を掘って火葬にしたが、負傷や火傷で姓名不詳の者もあった。また、教職員の家族の中で死亡した者も多く、学校に収容した後に、火葬にするなど混乱をきわめた。

八、被爆後の混乱

校舎のほとんどが使用不能な状態になったので、一時学校の機能は麻痺状態となった。しかし、学校としての指揮系統関係には、支障がなかったから、即時、混乱状態からの回復を待って開校準備をはじめた。

九、学校再開の状況

学校の再開

昭和二十年九月上旬、日本製鋼所広島工場の補習学校(安芸郡海田市町)を借用し、第二学期としての授業開始をした。このとき、文部省から「軍用施設の転用を受け、至急に開校するよう」指令があったので、県下の軍用施設を物色した結果、賀茂郡黒瀬町の旧海軍衛生学校跡の全施設を学校とするよう運動を始めた。しかし、交通事情・食糧事情などから、この施設を学校として運用できるか否かに不安の意見もあったので、この運動は取りやめとなり、他の施設として、佐伯郡大竹町の旧海軍潜水学校校舎の転用を決定した。学校としては緊急の時であり、転用許可の出る以前から、すなわち、日本製鋼所の補習学校で授業を開始してから約二週間後には、この潜水学校施設で授業を始めていたのであった。その後、昭和二十一年二月に、転用許可がおりたので、ここに移転し、第三学期として本格的授業を開始したが、教室などについては、かならずしも十分とはいえなかった。しかし、教職員三〇人と学生約五〇〇人の授業進行には、別段支障となるようなこともなかった。

このように、苦難の道をたどりながらも授業は開かれ、内容も社会混乱の解消につれ、充実したものとなっていった。この間、本校再建運動も盛んとなり「復興後援会」が設立された。教職員および学生も、こぞって復興運動に参加して、募金運動(目標額三五〇万円)を開始したが、その熱心な努力もみのり、ここに、本館・別館の修築と寄宿寮二棟の新築が完成し、昭和二十三年八月下旬に、皆実町の本校への復帰がかなえられた。

[第七項 広島文理科大学、広島高等師範学校、附属中学校、附属国民学校…588](#)

(現在・広島大学文学部、理学部、教育学部、付属高等学校、附属中学校、附属小学校)

広島文理科大学、広島高等師範学校、附属中学校、附属国民学校 学校敷地・校舎配置図(略図)

一、被爆当時の概要

当時の概要

所在地別建物概要					敷地面積 (坪)	在籍者数		校長または代表者
所 在 地 (学部名)	構造別教室数(室)		構造別後者延床面積 (坪)			教職員 (人)	生 徒 (人)	氏 名
	鉄筋 鉄骨	木 造	鉄筋鉄骨	木造				
広島市東千田町及び千田町一丁目					二三、三五三			
広島文理科大学			三、三〇三	六、〇九〇		三三三	三八〇	学長 近藤寿治
広島高等師範学校						九〇	一、四〇〇	校長 近藤寿治
附属図書館						一五		館長 三村剛昂
附属理論物理学 研究所						六		所長 三村剛昂
附属中学校				一、二五四		二五	六〇〇	主事 河野通匡
附属国民学校	二六		一、一七八	二八四		三〇	四五〇	主事 森岡文策
臨時教員養成所							二五〇	管理者 近藤寿治
広島市 平野町運動場				一〇二	六、七五八			
広島市千田町 三丁目農芸実習場				一九	七五九			
御調郡向島西村 臨海実験所				三六一	六、九八四	四		所長 安部余四男
豊田郡大乘村 臨界教育場				一九八	一、〇六六	二		

爆心地からの距離 約一・五キロメートル(東千田町・広島文理科大学)

二、学童疎開状況(広島文理科大学附属国民学校)

学童疎開

集 団 疎 開 概 数				縁故疎開者 概 数	備 考
実施年月日	疎開先地名	教職員	児童		
昭和二十年四月十二日	比婆郡西城町 神宮寺 極楽寺 全政寺 西願寺 妙善寺 蓮照寺 能楽寺 浄久寺	二六人 (うち、九 人は寮母)	二七〇人	一六〇人	縁故疎開一六〇人といっても 厳密なものではなく、自宅と 疎開地を往復していた者もか なりあり、そのため原爆を受 けて直接死亡した者が一人 もあった。

三、学徒動員状況

学徒動員

事業の区別	所在地	教職員	生 徒	作業内容	備 考
(広島文理科大学関係)					
日本製鋼所 (隊長 山本幹夫)	安芸郡向洋町	一〇人	一五〇人	工員の教育、工場の 作業行程の組織化 など	文理科系学生、終戦当 時は愛知県に出動の も帰広して合流して いた。
海軍砲煩研究部	東千田町大学 内		数人	研究補助	
学内動員	東千田町	応召外の理 科系教官	一〇〇	科学振興の為各専 門分野について研 究	理科系学生
学内動員 (高師を含む)	東千田町	八〇	三〇	学校建物の防衛	文理科系学生と高師 生徒のうち、他の作業 に動員不向きの者(病 弱者)
(広島高等師範学校関係)					
三菱造船所	江波町	一〇	二、三、四年生 の学生大部分	船底の鋳打ならび に一般作業	第一派遣隊(四年生) 隊長 大槻正一
三菱機械製作所	観音町				第二派遣隊(二、三年 生)隊長 森滝市郎
東洋工業株式会 社	安芸郡向洋町		一年生		隊長 晴山省吾
運輸部(暁部隊)	宇品町		文理科系の学 生一部		隊長 辻
被服支廠	旭町	四	一四	物資輸送(自動車 班)	物理二年B組隊長 長倉
軍需管理部	皆実町(旧広 高内)	五	三一	物資輸送(自動車 班)	物理二年A組隊長 長倉
機甲訓練所	宇品町		一四	物資輸送(自動車 班)	物理二年C組隊長 中野
糧秣廠	宇品町		一一	物資輸送(自動車 班)	物理三、四年隊長 中野
(臨時教員養成所関係)					
航空機工場	愛媛県		二五〇		
(附属中学校関係)					
農村動員	賀茂郡原村	四	一年生一二〇	農耕	
農村動員	豊田郡戸野村	三	二年生一二〇	農耕および貯水池 造成	
三菱精機株式会 社	安佐郡祇園町	五	一年生一一〇	航空機部品製作補 助	
被服廠	旭町	三	四年生一二〇	運搬作業	
(附属国民学校関 係)	比婆群西城町	一	高等科 一八	松根掘り作業	
合 計		一二五 (判明分の み)	一、一二五 (判明分のみ)		

四、指定避難先と経路

当時学校内には、少数の女子職員がいただけで、国民学校児童はいなかったから、空襲時は全員防護活動に当ることとし、救急医薬器具などは、鉄筋建物や防空壕に整備した。また、避難先は別に指定していなかった。ただし、附属中学校の科学学級四年生は、学校において授業を継続していたから、避難先を比治山(当校より東北東約一キロメートル離れた場所)としていた。

五、校舎の使用状況

広島文理科大学および高等師範学校共用建物(鉄筋三、三〇三坪・木造六、〇九〇坪)のうち、大学本館(鉄筋三階建

二、四九〇坪)の三階全部・二階の大部分約一、四〇〇坪を中国地方総監府に貸与。

鉄筋平家建五〇坪は呉海軍砲煩研究部に貸与し、学生集会所(木造)の一部を第二〇五特設警備工兵隊(通称号二七八四部隊・隊長は陸軍大尉陰山稔)に仮兵舎として、一時貸与した。

木造渡廊下は延焼防止のため、取壊し作業中。木造建物は一棟おきに疎開計画を立てて一部実施中。

附属中学校用木造建物一、二五四坪のうち渡廊下および小建物は取壊し、または疎開作業中。

附属国民学校木造建物二八四坪は、疎開作業中。鉄筋三階建一、一七八坪は、一階を大学事務室に、二階および三階は図書、および重要物品の格納庫に使用し、官舎二戸(木造)一〇二坪は本来の目的に使用。

運動場の木造建物一〇二坪は、倉庫および便所であったから、本来の目的に使用。運動場は食糧増産のため、畑地として耕作した。また、農業実習場建物(木造)一九坪は農具庫および便所であったから、本来の目的に使用した。

富士見町官舎(木造)八〇坪は学長官舎、吉島本町官舎(木造)四六坪は臨時寄宿舍として使用し、艇庫(木造)三二坪は本来の目的に使用した。

六、当日朝の学校行事予定

行 事 予 定	在 校 者 数			備 考
	教職員	生 徒	その他	
広島文理科大学 平常どおりで別に集会の企画なし	二〇〇人	理件系 五〇人	三〇人	文科系、理科系学生は、ほとんど動員出動で教官の大半も付添いとして出動中
広島高等師範学校	三〇	病弱者二〇		学生の大部分は動員出動中
附属中学校	八	五七		一、二年残留組一五人・三年生一五人・科学学級四年二四人。 その他大部分は動員出動中。別に科学学級一、二、三年は比婆群東城町に疎開し、県立東城高等女学校で授業
附属国民学校	一〇			疎開中
広島臨時教員養成所		五		
傷痍軍人中等学校 広島教員養成所		一〇		

七、被爆の惨状

被害状況

(一)校舎の被害状況

大学は爆心地から南々東約一・五キロメートル離れた所にあり、原子爆弾の炸裂と同時に、校舎は一瞬にして全壊・大破などの被害を受け、さらに、火災発生によって、その大部分は焼けてしまった。校舎の被害は次のとおりである。

被害程度	建物延坪数		被害の細部
	鉄筋・鉄骨	木 造	
大学及び高師建物 (鉄筋)小破 (鉄骨・ガラス張)半壊 (煉瓦)全壊 (木造)全壊	(三、三〇三) 三、一〇四 八二 一一七	(六、〇九〇) 六、〇九〇	窓、出入口など破損、内部焼失。 温室、鉄骨曲り、ガラス完全に破損 南側に倒壊完全焼失
附属中学校 (木造)全壊	(一、二五四) 一、二五四		南側に倒壊後焼失
附属国民学校 (木造)半壊 (鉄筋)小破	(一、一七八) 一、一七八	(二八四) 二八四	南側に傾斜半壊後焼失 窓、出入口など破損、内部焼失
官舎全壊		一〇二	南側に倒壊後焼失
運動場建物全壊		一〇二	南側に倒壊後に解体処分
実習場建物全壊		一九	全壊、完全焼失
学長官舎全壊		八〇	全壊、完全焼失
吉島本町官舎半壊		四六	軸組傾斜、屋根大破
艇庫全壊		三二	倒壊後流失

本表のほか、上地・建物・定着工作物(門、電気、給排水など設備)も人部分損壊

被爆直後、木造建物の大部分は南側に傾斜倒壊し、特に二階建物の破壊状況ははなはだしかった。鉄筋建物も出入口・窓ガラスなど全部破壊し、内蔵物品のほとんどと共に四散した。このために死傷したもののも少なくなかった。状況判断のため高層建物の屋上に出て、市内の一般状況を望見したところ、市内諸所に火災が発生しているのを認めた。また、校内の木造部分数か所からも煙の上がるのを認めた。そのため、さしあたり必要な重要書類を格納して、消火の手配のため、人員の集結を計ったが、皆、重軽傷を負い、働き得る者は数人のみであった。その少数の者で消火ポ

ンプ(ガソリンポンプ・自動車ポンプ＝市消防隊用)の引出しにかかったが、いずれも倒壊した木造建物または防空壕の下敷きとなり、使用できないまま、午前九時ごろ、木造部分は全面的な火災となった。

南西風が強く、火のついたかたまりが風に乗り、破壊された鉄筋建物の窓の中へ盛んに飛び込み、延焼の危険にさらされたので、これが防止に努めたが、人員少数のため、手のほどこしようもなく、午前十時ごろには、鉄筋建物内部も、随所に火が拡がりはじめた。

やむなく、消火活動を一時放棄、待避を決心して、負傷者に避難の指示を与え、働き得るものの数人は御真影を奉じて、平野町の運動場から御幸橋を経て、東雲町の広島師範学校へ到着した。その後、一部要員を残し、学校(東千田町)の様子を見るため引返した。途中、日本製鋼所に出動していた高師学生隊の救援隊と出会ったが、市街の火災にはばまれ、学校に到着した午後二時ごろには、木造建物は大部分焼失、鉄筋建物の内部も大部分が焼失していた。

鉄筋建物には、焼夷弾攻撃に備えて蔵書その他重要物品を格納していたが、これが数日後まで燃え続けた。

(二)人的被害

区 別	即死者		重軽傷者		行方不明者		計	
	教職員	生 徒	教職員	生 徒	教職員	生 徒	教職員	生 徒
広島文理科大学	一六人	二〇人	五六人	一五人	一人	人	七三人	三五人
広島高等師範学生	九	一四	二一	一〇	一		三一	二四
附属中学校	六	一五	五	六			一一	五一
附属国民学校	一	九	一	四			二	一三
広島臨時教員養成所		四						四
(含傷疾軍人養成所)		(一)						(一)
合 計	三二	六二	八三	三五	二	〇	一一七	九七

(学校外での被爆者も含む)

被爆と同時に全在校者は、多少とも負傷し、無傷の者はほとんどいなかった。校内で即死者が出たが、重軽傷者の大部分は、各自指示に従い、平野町の本学運動場を経て、宇品方面へ避難し、それぞれ応急救護隊に収容された。また縁故者をたどり避難した者もあった。避難救護にあたって、集団的措置はとりえなかったが、翌日になって、校内に負傷者がいなかったことと、後日の状況から判断して、ほとんど避難し得たと思われる。なお、少数の職員は、少々負傷にもかかわらず、学校にふもとどまって、大学本館前に残存器具を集めて、午後四時ごろ、テント張りを完成し、大学本部を開設、職員・学生の状況把握に努めた。

勤労働員で出ていたため、学校内には、学生および生徒が僅かしかいなかったから、死傷者は割合に少なかった。しかし、職員には多く、とくに女子職員の負傷者は、ほとんど一時的とはいえ放心状態にあった。

当日死亡した者の大部分は、ガラスの破片その他の飛散物による外傷、または、木造建物の下敷きとなったもので、前者は特に目につき、凄惨を極めた。また、在校者の大部分が負傷し、皆多少とも血を流していて、異様な空気をもした。翌日は死体の収容を行なったが、何分にも、夏季高温の時点で、容貌が変わっており、氏名確認に困難した。八日には、遺体を校内で火葬に付したが、遺族とも充分の連絡がつかなかった。

なお、六日朝、教室において、大東亜共栄圏文化交流学生が授業中に被爆し、多数の死傷者を出した。この被害状況については、第一巻総説(一七三ページ、一八〇ページ)に記述するとおりである。

八、被爆後の混乱

(一)学生・生徒に対する緊急措置

(イ)広島文理科大学

動員出動中の学生は、そのまま動員を継続し、その他の学生は当分休校として居所を明らかにし、待機するよう校内に掲示した。

(ロ)広島高等師範学校・附属中学校・広島臨時教員養成所

文理科大学と同じく、動員学徒はそのまま動員を継続し、その他の学生は居所を明らかにして、待機するよう指示した。

(ハ)附属国民学校

集団疎開中の児童はそのまま継続し、その他の児童は、居所を明らかにして待機するよう校内に掲示した。

(二)傷夷軍人中等学校教員広島養成所

当分休校とし、居所を明らかにして待機するよう指示した。

以上のごとく措置したが、本人たちにはなかなか徹底しなかったようである。

(二)学校の機能停止と対策措置

(イ)人的被害＝学長をはじめ、幹部職員に異状なく、教職員に一〇数人の死亡者、および多少の傷病者を出したが、学校の機能が全く停止するほどの損害ではなかった。

(ロ)物的被害＝校舎延一二、〇〇〇坪が被害を受け、これに伴い学生机などの校具を全部焼失し、この面より学校本来の機能は停止した。

学長をはじめ幹部職員は、何らかの手段で、校舎および校具などの確保に努力したが、当時は、まだ戦争継続中で、早急の措置が不可能であった。職員・学生および生徒の状況把握に努力しているうち、終戦を迎えたので、世相は一層の混乱を来し、八月中は、いかになるべきものかの見透しもつきかねる状況であった。九月に入り、学徒動員もおおかた解除されたので、学校は本来の使命である教育を再開すべき事態となった。本学では、応急の措置として、旧軍施設を利用して再開する方針を次のように決定した。広島文理科大学本部事務室を、市内東千田町旧校地焼跡に置き、元大学本館一階の一部を整理、応急修理して事務室にあて、ここを本拠として全般の指揮統括を計った。

(三)応急救護所としての役割

東千田町所在校舎は木造全焼、鉄筋は外形を残して内部完全焼失という惨憺たる状況であったから、応急救護所として使用することは全く不可能であった。ただし、その後の九月台風時には、避難所として有効に使用された。

九、学校再開の状況

学校の再開

(一)広島文理科大学

昭和二十年九月十三日

教授会＝学園再開について議し、その場所決定については原村農場・仁方寮・竜王寮などがあげられ、卒業生も決定(九月二十九日卒業式挙行)した。

昭和二十年十月二十九日

教授会＝学徒審査二件(国体学科改称改組の件については十一月五日委員任命)

昭和二十年十一月十四日

教授会＝学科課程改正

昭和二十年十一月十九日

教授会＝学科課程創設(公民学専攻)

昭和二十年十一月三十日

市内宇品町千暁寺において合同慰霊祭を挙行

昭和二十年十二月五日

学長近藤寿治退官につき、学長事務取扱教授は鈴木敏也(十二月九日死亡)

昭和二十年十二月九日

学長事務取扱教授は古賀行義

昭和二十年十二月十九日

教授会＝学長選挙

昭和二十年十二月二十六日

学長長田新任命

昭和二十一年一月

江田島津久茂国民学校において大学三年の授業開始

昭和二十一年一月二十一日

協議会＝授業措置決定、文科は江田島の津久茂、理科は乃美尾とする。津久茂で授業中の三年は一月で一・二年と交替し、その召集日は二月十七日とする。

昭和二十一年一月二十八日

協議会＝学校復興方針決定。復興を三段階として、(イ)本復興(ロ)応急復興(ハ)暫定措置とする。

(イ)本復興＝終局の復興位置(市内東千田町)は現位置とする。

(ロ)応急復興＝大学は現位置、高師養成所は大原分校、付属中学校は西条、附属国民学校は現在位置

(ハ)暫定措置＝大学文科は津久茂国民学校(なるべく早く大原分校へ)。大学理科は乃美尾衛生学校・高師養

成所は乃美尾衛生学校(なるべく早く大原分校へ)、附属中学校四年は三菱青年学校、他は原村旧陸軍兵舎、附属国民学校は大乗臨海教育場。

東千田町本校において理科実験を認める。その間、化学科学生は倉敷市において授業

昭和二十一年三月四日

教授会＝戦災死亡教授の後任教授の大部分補充。

以上は、文理科大学が被爆後、学校の対策措置として歩んだ概略であるが、被爆直後の昭和二十年十月ごろから、早くも理科の一部には、被災校舎を整理して実験再開を計る研究室もあった。昭和二十一年一月には江田島の津久茂国民学校において大学三年の授業が開始され、続いて一、二年もこの地に召集されて授業再開養った。また、まもなく化学科は倉敷市(倉敷レーヨン)に移動し、授業を再開した。続いて昭和二十一年四月に、理科が市内東千田町に復帰した。このように戦後の混乱の中にも、授業はようやく軌道に乗りはじめた。昭和二十一年九月に、東千田町の校舎の一部が仮修理でき、全学生の授業が再開されるにあたって、本格的復旧に努め、各室がどうにか使用できるようになったのは、昭和三十五年である。しかし外壁にはいまだにその当時の傷痕が残っている。

(二)広島高等師範学校・臨時教員養成所

昭和二十一年二月十二日

広島県賀茂郡乃美尾村の旧海軍衛生学校跡で授業再開

昭和二十二年八月十二日

乃美尾校舎出火し大部分を焼失

昭和二十二年十月六日

三・四年を広島市出汐町の元陸軍被服廠跡に収容して授業再開

昭和二十二年十二月

二年生を被服廠跡に収容

昭和二十三年三月

一年生を被服廠跡に収容

昭和二十三年三月三十一日

広島臨時教員養成所を廃止

昭和二十四年五月三十一日

国立学校設置法公布、広島大学の包括学校となる(教育学部の母体となる)

昭和二十七年三月三十一日

広島高等師範学校廃止

昭和二十八年四月

教育学部校舎新築(市内東千田町)し復帰

(三)附属中学校

昭和二十一年一月

広島県賀茂郡原村の旧陸軍南部廠舎跡で授業再開

昭和二十一年四月

西条町吉土美小学校に移転

昭和二十二年一月

校舎新築(東千田町)し復帰

(四)附属国民学校

昭和二十年九月三十日

比婆郡西城町西城国民学校で実施中の学童集団疎開を閉鎖して各家庭に復帰

昭和二十年十一月一日

豊田郡大乗村臨海教育場施設(敷地一、〇〇〇余坪、建物約二〇〇坪)を使用して授業開始

昭和二十一年五月

市内東千田町の残存鉄筋校舎の仮修理がなり、ここに復帰して授業開始。

以上、学校の復旧とその対策措置については、いろいろ努力して来たが、戦後の国費復旧はなかなか捗らず、十数

年を経過した今日でも、なお復旧には至らないという状況である。附属学校にいたっては、復旧経費の大部分は、生徒・児童の父兄の負担に待つという状況であった。

授業開始については前記したとおり、第二学期においては、その準備施策の時期で本格的授業はおこなわれなかった。ようやく始つた授業も校舎の不足、校具の不足などで困難を極めた。その上、遠路通学している学生は食糧不足を補う手段がなく、寄宿舎などの設備も不十分で、健康を保つ上に困難を感じ、しばしば休校とせねばならぬ実状であった。

また、戦災により、かねて準備していた消耗品その他器材を全部失ったので、学校の事務用紙類入手にも困難をきたした。この対策として、学校事務機構を改めて、学用品確保のための専任係を置き、各方面との折衝に当らせ、別に厚生課を全国大学にさがけて設置して、職員・学生・生徒の学用品・生活必需品の斡旋に当らせた。何分、当時は物資が極度に不足していたから、その成果は十分とはいえなかったが、かなりの効果はあった。

なお、生徒・児童用の教科書はプリントを作成して使用した。

出陣学徒の回想

安丸一郎

(昭和二十二年広島文理科大学卒業。現在・福井大学学芸部助教授)

広島への原爆投下の報を、私が知ったのは、四国の宇和島海軍航空隊に所属して、土佐沖に予想されたアメリカ軍上陸作戦に備え、高知県境に近く陣地構築中のできごとであった。

もとより、当時は特殊爆弾であることは報告されても、これが原子爆弾であることを知ったのは、もっとあとになってからであった。

当時、戦局の逼迫は、国民一般には十分に知らされていなかったが、長期の戦争による極度の物資欠乏は、航空機生産や飛行燃料の上にも枯渇を生じ、ついには友軍飛行機は、往路のための片道燃料だけを積みこんで出撃するという常識を絶した悲劇にまで立ち至ったのである。消費経済のゆたかな(?)戦後の今日の状況下では、到底想像され得ない環境のもとで、背水の陣をしいていたのであり、われわれの部隊もまた、“鳥が変じてモグラとなる”の類に化していた。

私は終戦の直前に、海軍省から佐世保への転勤命令を受け、終戦時のひどい混乱期に現地へ赴任、沖縄経由で上陸したアメリカ軍に対する連絡武官の仕事をしねばならぬことになり、さまざまな苦勞の体験をなめた。その後ようやく解任されるや、ふたたび母校の教室へもどってきた。

想えば、私は広島文理科大学教育学科在学中、第三期海軍予備学生の一員として、昭和十八年十月、江田島の海軍兵学校へ召集を命ぜられ、ここで短期教育をうけて、激戦下の部署についたわけである。当時の海軍予備学生は、それぞれの職種に応じ、旅順・青島・館山・土浦・江田島に分散して入隊したが、われわれ江田島組は武官教官として、多くは練習航空隊に配属されたのである。南方の戦線に配属されていたら、おそらく友人の多くと共に、すでに地上から消えていたであろうと考えると、そぞろに戦争のもつ機械的暴圧に抵抗を新たにせざるを得ない。

私は、海軍兵学校で訓練をうけていた当時、寸暇を利用して、母校の教育学研究室を訪れた。物資窮乏の戦時下の情勢にあってもなお、アカデミックな面影を宿している大学内の重々しい空気の中を、無量の気持ちで階段をのぼった当時の模様が忘れられない。

突然の訪問のこととて、学友があわてて連絡してくれたとみえ、研究室のスタッフや友人たちとしばらく歓談できたことはよく憶えているが、同席された方々がはっきりしていないことは、残念の至りで何とも申訳がない。ただ、私の出身の福井中学の関係で、親しくしていただいた西洋史の渡辺教授がおられて、お話した印象が強く残っている。

当時、空爆による災禍を予想して、研究室の図書文献を田舎へ疎開させるという計画、国家総力戦に協力を要請される大学の研究陣の話題(特に自然科学分野)、勤労働員の状況、陸軍や海軍への学徒出陣や徴兵延期短縮化の話などは、時の話題によくのぼった。

また一面、リベラリストとしての教授連も健在で、永遠の真理を説いて時局の動向を偏見なくとらえるあたり、内面ひそかにたのもしさを覚えたことも事実である。

当時の学徒のなかには、一般論ではあるが、きびしい戦火のさ中にあってもなお、学問と芸術を愛する心情を失わない態度を高しとするムードが底に流れており、戦線の長期化にともない、陣中へひそかに文庫本などをたずさえる学友も多かった。

やはりこの基盤には、死生観とか世界観、国家観などを、各人各様の形で調えたいとする根本衝動のあせりでもあったろうか。

私は昭和十四年四月に、広島高等師範学校英語課に入学したが、太平洋戦争勃発は、千田町(みやこ通り)の下宿先武田さん宅の二階で、この劇的なラジオ放送を耳にした。

昭和期にはじまった満州事変は、やがて日支事変にまで拡大し、ついに米英などの民主陣営を向うにまわして、第二次世界大戦への突入である。大変なことになるぞと実感したところである。

当時の広島は、われわれ学徒にとっては、軍都としてよりは、はるかに、海をのぞむ水都として、また、城下町として、広島弁と共にユニークな薫りを放つ学都であった。瀬戸内の微風が街なみをつつんで、そよ吹くあたり、街路樹と散歩道にこと欠かなかった広島は、さわやかなたたずまいが、たまらなくなつかしい。

特に、大学に近い鷹野橋の交叉点付近は、広々として清潔な明るさを漂わせていたが、戦後、この付近一帯が狭く立てこんできて、かつての面影を失った感じは何とも惜しい気がしてならない。

しかも当時の学園には、さまざまな有志活動が行なわれていたように思う。とりわけ印象の強く残っているものに、西晋一郎先生を招いての大乘起信論などの講読会、白井教授や福島教授を中心とする仏教研究会、平塚教授や村上教授を中心とする原始キリスト教研究会、岡本教授を中心とする言霊短歌会、その他禅学会、聖書研究会など、多彩に咲き乱れていた。

第二の故郷ともいべき広島の姿も、あののろわしい原爆投下と共に、一瞬にして廃墟と化し、お上品で親切だった広島の知人たちも、ピカドンで倒れあるいは傷ついた。

英文学の竹中教授も、心理学の高橋教授も、生物学の井上君たちも、大学で倒れたとのこと、何とも無念の至りで筆舌につくしがたい。

恩師の長田新教授も、あのとき重傷を負われた由である。昨今の広島の復興状況を見て、今浦島のごとく茫然として、今昔の感にたえない。「パンタ・レイ(万物流転)」とは夙にヘラクレイトスの言葉であるが、まさにこのことではあるまいかと疑う、

過ぎし日の、広島での青春の思い出はつきないが、他方では、戦後たくましい新生を実現した不死鳥広島が羽ばたく平和都市への構想に、心からの期待と拍手をおくってやまない。(四四・一・七記)

警備隊員被爆記

田原正人(談)

(被爆地・千田町高師校内、当時・宇品造船所勤務・二七歳)

八月三日、私は一定期間だけの臨時の警備召集を受けて、第二〇五特設警備隊工兵隊(通称号・二七八四大隊長・陰山稔大尉)の小原中隊に入隊した。

中隊本部は、当時学徒動員で空室になっていた東千田町の広島高等師範学校の寄宿舎に駐屯しており、そこに私は所属した。

六日の朝、いつもの点呼がすみ、臨時召集兵約一五〇人が急いで朝めしを終ると、私は各小隊の作業班に、円匙やノコ・トビグチを分配した。作業班が、市役所裏側(富士見町)の建物疎開作業現場に出動していったあと、校舎階下の小隊本部事務室に入り、曹長ら四、五人と事務をとりながら話しているときであった。

ピカッ！と怪しく光った。白昼の明るいなかで、電車の架線がスパークしたような青白い閃光であった。

一瞬、みな起ちあがった。

急いで廊下まで出た。

と、見ると校舎と校舎とのあいだの空間に、白い煙が、ボンベから洩れる高圧ガスのようなシューッという音と共に、降下して来た。危い！と、反射的に、また室内にとびこんだ。とたんに、ガラカラと物の崩壊する音がした。

何分たっていたのかわからないが、意識を取りもどしたとき、私は、落下した建物のハリとハリの交叉したところに横たわっていた。腰が何かにはさまれて抜けない。

私はもがいた。手をあげると、そこには落ちて来た二階の屋根があった。こっばに破れた屋根の上に、やっと追い出してみると、向う側の崩れた科学教室らしいところに、チョロチョロと、赤い火が舌を出していた。

焼けるぞ、と逃げようとしたが、足が動かない。腰をひどく打っている。腰がたたない。必死で、起きあがろうとしているところへ、坂本炊事軍曹(庚午の人)が通りかかって、私をかつぎあげてくれ、学校の東門を出たところ、大

学のま裏にあたる場所で、防火用水槽の傍に私はおろされた。「火が来たら、その水をかぶれよ。」と言いおいて、坂本軍曹は、再び救出作業のために校内に入っていった。

市の中心部は、すでに大火災になっていたであろう。火勢は、次第に私の方にむかって襲って来るように感じられた。

そのとき、風速四〇メートルもあろうかと思われる荒々しい風が、吹いて来た。身体を深く斜にしなければ、どうい歩きまわることのできないほどの風であった。私は、動けないまま、坂本軍曹がもどって来てくれるのを待つほかなかった。

燃えあがる火災はボールのように千切れて、ポッと空間を飛んでは、あちらこちらの燻っている倒壊物に移った。

このようにして火勢は、ドンドンと市中一面に拡がって行ったようである。

私が救けだされてから、ほぼ一時間ばかり経っていたであろう、傷を受けなかった者らが、馬車を見つけて来た。馬は生きていたが、ひどい火傷でピフテキのようになっていて使えなかった。私をかかえてその馬車に乗せると、元気な者たちが手で引っぱり、後から押して、御幸橋まで脱出することができた。

御幸橋の上は、すでに負傷者や避難者でいっぱいであった。そこへ暁部隊が来て、私はみんなと一緒に安芸郡坂町鯛尾の収容所へ送られた。すでに夕方であったが、収容所内には、もう声すら出なくなった重傷者や息たえだえに呻吟する少年、発狂して輾転反復している若い裸体の女性など、悲惨このうえもなかった。

私は、移動演劇さくら隊の俳優丸山定夫と同室であった。彼は背すじから腰にひどい打撲を受けたらしく、横たわっているのさえ苦痛のようであった。「兵隊さん、起してください」、「兵隊さん、寝かせてください」と、幾度も力のない小さな声でたのんでいた。人手を借りなければ、自分の身体を動かすことができなかったが、私が去るまでは、生きていた。

この鯛尾の収容所に、私は八日までいた。草津の自宅との連絡もつかず、心配であったことよりも、死人の続出する収容所に寝ていることが苦痛で、脱け出したかったのである。やっと、どうにかこうにか歩けるようになったので、八日の朝九時ごろ、便船を得て宇品に上陸した。そこからずっと宇品十三丁目の広陵中学校前まで、約一・八キロメートルの道程を約八時間もかけた午後三時ごろに、痛む腰をひきずりながらようやくたどりついた。

広陵中学校前には、臨時の衛兵所ができていた。私はそこに行って頼み、ちょうど草津の方へ行くトラックに便乗させてもらった。

トラックには佐官級の軍属が乗っていたが、彼は「これは原子爆弾という爆弾だ。」と、説明してくれた。それまではみんな、新型爆弾という名しか知らなかった。こうして、八日の夕刻に、やっと自宅についたが、妻も被爆していた。

妻は、その朝、市役所へ妊産婦用の特別配給ミルクを受取りに出て、途中、電車が国泰寺に差しかかったとき被爆し、一たん日本銀行内に収容され、さらに富国ビル内に転送されていたところを、収容者名簿により、近所の人が発見し、連絡してくれたので、家族が引取って帰ったところであった。

ちょうど、私と同じ日に家に帰って来たのであったが、顔面いっぱい黒焦げの火傷を受けた身は、生き抜くことができず、十日、ついに不帰の客となった。

燃えはじめた高等師範学校のところから私を馬車に乗せて、引っぱってくれた人々は、その後、みんな死んだようである。

また、私と同じく警備召集兵で、富士見町疎開作業隊長をしていた津田さん(津田ポンプ社長の長男)は元気で、十二、三日ごろ、私の状態を確認かたがた見舞いに来られたが、これも二十日ごろに死なれた。惨害の処理に焼跡を歩きまわり、残留放射能を受けたためであろう。

第一節 序説…612

神社

毛利輝元の広島城築城以前から存在した神社は、安芸国神名帳(豊田郡本郷町楽音寺所蔵)に記された衣羽明神(羽衣神社)・白島明神(碇神社)・仁保姫神社のほかに、白神社(小町)・明星院八幡宮(のち鶴羽根神社)・神田神社(牛田村)・太宰原天満宮・(明星院村)尾長天満宮(尾長村)などがあったと言われる。

その後、毛利・福島・浅野の各時代ごとに、多くの神社が創建され、それぞれ民衆の崇敬を受けた。また、稲荷社・愛宕社・金毘羅社なども多く勧請され、それぞれ深い民俗信仰を集めた。

これら由緒深い神社も、原子爆弾の炸裂によって、市の周辺部を除き、すべて壊滅したのであるが、戦後の復興は、占領軍による宗教団体法の廃止・氏子制度の廃止など、一連の宗教政策により比治山神社・鶴羽根神社など二、三の神社を除いて、非常に困難をきわめた。特に稲荷社など民衆に親しまれてきた小祠などは、消滅したり、その影の薄くなったものが多い。

被爆直後、全焼した比治山神社(黄幡大明神)跡において、第二総軍司令官畑大将ほか、宇品の曙部隊司令官佐伯中将、呉の海軍鎮守府派遣救援隊長山崎大尉、県・市当局代表、警察署長らが集合して、広島市の復旧対策・罹災者救護対策などを協議した。また、二葉ノ里の鶴羽根神社境内には、第二総軍司令部がバラック兵舎を五棟建設して入居し、半壊の同社参集殿には、同隊の負傷将兵や一般の負傷者を収容した。このほか被爆直後、住吉神社・饒津神社・東照宮石段下・早稲田神社・神田神社など市周辺部の神社には負傷者が雲集したため、それぞれ臨時救護所、あるいは収容所となった。

寺院

広島城開府以前から存在したと伝えられる寺院は、曹洞宗の瑞川寺(尾長村)・海蔵寺(佐伯郡後田村)・真言宗の正観寺(白島九軒町)・光明院(白島九軒町)・明星院(明星院村)・日蓮宗の本運寺(白神五丁目)・慈光寺(古江村)、浄土宗の福蔵寺(古江村)、真宗の広寂寺(比治山町)・海宝寺(江波村)・光円寺(牛田村)などであるという。

神社と同じく毛利・福島・浅野の各時代を通じて多くの寺院が建立されたが、被爆前の市内には、曹洞宗一四・臨済宗五・真言宗一三・浄土宗一九・真宗六七・日蓮宗一一の寺院があって、大半が原子爆弾により全壊全焼した。

これら寺院のなかには、疎開しなかった国民学校の低学年(一・二年生)児童の、分散授業場に使用されていた所もあり、三川町の円隆寺(爆心地から約九五〇メートル)では、竹屋及び袋町両国民学校の児童約三〇人が、本堂で授業中、被爆して下敷きとなり、負傷者二人が生き残ったほかは全員死亡した。

また、舟入南町の唯信寺(爆心地から約二・六キロメートル)のように、防空計画であらかじめ負傷者収容所に指定されていた寺院が、焼け残ったために負傷者が殺到して阿鼻叫喚の地獄を出現、大混乱に陥った。このように、三滝寺(爆心寺から三・二キロメートル)・国前寺(爆心地から三キロメートル)・不動院(爆心地から約三・九キロメートル)・千暁寺(爆心地から四・三キロメートル)などの周辺部に所在した寺院には、多数の負傷者が逃げこんで、自然に救護所・収容所となった所も多い。

比治山公園西麓の多聞院(爆心地から一・七キロメートル)は、中国地方総監府・県庁の緊急避難先に指定されていたため、被爆当日の夕がた、負傷した服部副総監・石原県警察部長、及び備後に出張していた高野県知事らが集合して、ここに仮の県防空本部を開設し、中央への惨状報告、県下各地への救援隊出動命令などを出したのであった。

被爆後の復興は、神社ほどではなかったが、檀信徒の死亡、あるいは四散により、財源も乏しく、また資材の入手も困難であったから、遅々として進まず、二十三年ごろからようやく復興の緒についたと言えよう。戦後、都市計画により、中心部の寺院の多くは、他への移転を余儀なくされ、墓地の整理・移転などが次々におこなわれた。

教会

戦前、広島のキリスト教は、一三の各派教会があったが、流川教会・幟町カトリック教会・広島教会などをはじめ、多くの教会が原子爆弾によって全壊・全焼、あるいは大きな損傷を受けて壊滅状態に陥った。

戦争中、一部国粋主義者などからは白眼視されるような事もあったが、日曜日の礼拝やクリスマスなどの集会は、細々ながら続けて信仰を守る一方、神父(牧師)も一市民として、広島市の防衛に参加し、それぞれの部署で働いた者が多かった。

流川教会は、その日曜学校の建物が陸軍被服廠関係の軍服製造工場となり、ミシン数十台を置いて、連日作業を続

けていた。同教会の谷本牧師は町内会の防衛部長に就任し、被爆当日は避難者の殺到した泉邸(縮景園)において、その後三日間、邸内に野宿しつつ救援活動をおこなった。

広島教会は、広島市警防団本部に指定され、常時一二人～一五人くらい団員が詰めており、自動車ポンプ四台が設置されていた。なお、四竈牧師は、広島県盲学校の教師となって奉仕した。

この二つの教会の例に見るように、他の教会もそれぞれ戦争遂行の態勢にしたがい、永い苦難の日々を送ったのであった。

戦後、占領軍の民主化政策による宗教界の大改革がおこなわれ、宗教界は混乱状態に陥ったが、その中で最も早く活動を開始したのは、キリスト教であった。その復興にあたっては、占領軍の自然的な理解と援助が大きな原動力となったことは言うまでもないが、海外の欧米諸国民の積極的な救援もまた見のがせないものがあった。加えて、各教会が、伝統的な街頭での宗教活動を、いち早く実施して信者の獲得に努力したことは、あずかって大きな力となったと言えよう。

神社・寺院と同様な打撃の中において、二十二年春から早くも幟町カトリック教会・流川教会・広島教会など、次々に復活し、二十三年には、各派を集めてキリスト教連盟が発足し、市民クリスマス合同集会在盛大に開催された。年月を経ると共に、ますます教勢は拡張していき、各教会とも敷地の拡大・建物の増改築を次々に実施し、幼稚園・英語学校・料理学校・洋裁学校・音楽学校などの教育施設や社会福祉施設を開設した。

宗教連盟発足

被爆一周年を迎えた二十一年八月六日は、市内各宗派とも個々に慰霊祭を執行したが、第二周年の二十二年八月六日を迎えるにあたって、仏教・キリスト教・神道の各宗派が集り、「広島県宗教連盟」を結成し、中島町慈仙寺鼻の焼跡の仮堂において、合同慰霊式典をおこなうことを決定した。以後、毎年続けられて現在に及んでいる。

第二節 神社…617

広島護国神社

①広島護国神社

当時、広島市基町一番地(現在広島城跡内)・爆央から社殿まで約二〇〇メートル・社司足立達(厳島神社兼務)。

神殿一〇坪二三、拝殿一六坪、渡殿一〇坪五、参列所四四坪六、神饌所八坪、祭器庫八坪、社務所五五坪、番舎一五坪五、倉庫六〇坪、厠一坪の建物のほか、社標・鳥居・神灯・制札・狛犬・手水舎・瑞垣、その他があり、植樹築庭も美しく荘厳をきわめていた。

被爆当時、足立社司は厳島神社にあり、社掌青祇章一家三人が居住していて全員死亡した。従って、当社の倒壊炎上などの状況は不明であるが、鎮火後に立っていた物は、社標一基・石造の狛犬一対・青銅製の唐獅子一対と、電車通りに面した石造大鳥居(爆源から一二〇メートル)だけであった。爆源直下という所にありながら、この大鳥居が何事も無かったかのように立っており、鳥居の真中に掛けられた「広島神社」の扁額も、内側のは、昭和十八年に、落下しかけたため取りはずしたままになっていたが、爆源に向いた外側の扁額は、少し傾いただけで、吹きとばされもせず奇蹟的にそのまま掛っていた。

なお、青銅製の唐獅子(向かって左のものは、頭上耳裏の部分に放射熱線による焼痕を、風雪に薄らぎながら現在も残しており、境内に敷きつめられた玉石(第一巻写真集)にも、その焼痕が多く見られた。

この付近は、文字どおり灰燼に帰し、人畜すべて圧死または焼死し、草木もことごとく枯死、焼失したが、被爆後(九月下旬以降)の調査(岡田要報告)によると、護国神社の鳥居の脇において、ミミズ・ナミゴミムシ・エンマコオロギ・コガネムシ幼虫・名称不詳の蛾のサナギ・ナメクジなどを得た。これらは、構造や生態ともにまったく正常であり、地下に棲息する下等動物は放射能線の影響をあまり受けなかったという実例として示された。

被爆後二日目(八日)、厳島の神職が焼跡に来て、御霊代を厳島の千畳閣に奉遷した。その後、昭和二十一年二月には、河本和昌が称宜として就任した。

昭和二十二年八月四日、焼跡を整地して仮神殿を造営、厳島から御霊代を奉迎し、八月六日、第一回原子爆弾犠牲者及び戦没者の慰霊祭を執行した。八日、名称を「広島神社」に変更(三十五年、宗教法人広島護国神社と再び改称)、二十二日に足立宮司が辞任した。後任に速谷神社宮司山田厲が就任し、三十二年病没まで勤めた。

この間、昭和三十年、広島城跡に神社復興をはかり、文化財保護委員会の認可を受け、三十一年六月に立柱祭執行、三十三年一月十四日、社務所造営工事を完了、同年四月五日、称宜河本和昌が宮司代務者に任命された。同年五月、広島護国神社復興奉賛会小谷伝一会長が、社殿以下一切を奉献した。

昭和三十四年九月十五日、横井時常宮司が就任、四十一年三月一日辞任し、厳島神社宮司森安忠が後を継ぎ現在に至る。

白神社

②白神社

当時、広島市小町六番地(現在・中町七ノ二四)・爆心地から約〇・六キロメートル・社司野上克彦。

白神巖山上に神殿(七・五坪)があり、その前南方に幣殿(一二・〇坪)あり、更に前方に拝殿(二七・五坪)があった。拝殿の西方に社務所(三〇坪)があった。

重要書類及び神事装束類の大部分を、安芸郡海田市町奥海田の出崎森神社社務所及び牛田・井口などの民家へ疎開した。なお、白神社境内地東方の森林中に地下防空壕を作り、その中にも収納していた。

境内の鳥居横の住吉社側に防空壕を作り、参拝者などの待避場所とした。社司は、東方森林中の地下壕へ、非常の場合ご神体を移すことができるように決めていた。

市内中央に所在する当社は、境内に地下壕があっても、最悪の場合に備えて、前記奥海田出崎森神社に避難することとしていた。出崎森神社社掌宗像久男が、白神社社掌を兼務していたからである。

八月五日の夜は、常のごとく戦勝祈願の参拝者が三々五々と続いていたが、午後九時過ぎの警報発令後は、まばらとなった。

六日の朝、また参拝者がひっきりなしに続き、午前七時過ぎの警報発令のときは、社前の二か所の防空壕に入り切れないほどの人がいて、なかには二か所を अच्छに行きこっちに行きして、あわてている人もあった。野上社司は、神前にぬかづいたままであった(社司の義妹田中房子談)。

午前七時三十一分の警報解除後は、家に帰る者、あらためて参拝する者などあったが、野上社司の義妹田中房子は、壕内の奥の方に他の二、三人の人々と共にいて、原子爆弾の炸裂下にも一命を拾った。

原子爆弾の炸裂により、神社の各建物は東南方位にむかってペシャンコに倒れ、瞬時に炎上した。

野上社司及び家族は、社務所茶の間でその遺骨が発見された。境内における被害は、即死者五人・負傷者三人であった。被爆後、最初に参拝した大手町五丁目某の話によれば、社前に一人軍人風の焼死体があり、更に石畳中央に一焼死体があったという。被爆直後も参拝者があり、人々は露出した白神巨巖を拝した。

海田市町にいて被爆を免れた同社社掌宗像久男は、被爆後ただちに篠竹を立てて、縄を張り、霊域を標して境内を取りかたづけた。野上社司及び家族の全滅により、宗像久男(現在・宮司)及び家族(五人)が引継ぎ、昭和二十年十月二十九日、早くも仮殿を組んで祭事を執行したが、ボロボロの着物をきたある参拝者は、祭事やみこ舞などを見ながら、祭事の仮台の丸太棒にしがみつ、感きわまって泣いたという。

天満宮

③天満宮(現在・天満神社)

当時、広島市天神町一二〇番地(現在・中島町六ノ一)・爆心地から約〇・六キロメートル・社掌坂本潔。

境内地は二〇四坪六合、社殿約八〇坪は寺院風の木造瓦葺、明治二年の神仏分離まで満松院という寺院であった。

防空設備としては、境内に大型防火水槽一個を置くだけで、防空壕その他は無かった。社掌の自宅が舟入本町にあり、常時居住していなかったからであろうか、社殿の電線も軍用に接収されたため、無灯火となったので、夜間必要な場合はロウソクで過していた。

この地域一帯は、第六次建物疎開作業が実施されたが、天満宮のみは、由緒深い故を以って解体されず、付近町民の家財の疎開場所となり、境内も狭くなるほど積まれていた。また、疎開作業隊の休憩所、炊事場などにも使われた。

神社の古文書その他は疎開しないまま、すべて焼失したが、ご神体のみは、被爆五日前に佐伯郡五日市町の信者杉田宅に疎開していて、被爆を免れた。

被爆による炎上の状況は不明であるが、爆心地に至近のため、瞬時に倒壊し、火災を発したと考えられる。坂本社掌の父虎雄は行方不明となり、遺骨も発見されないままである。坂本社掌は、前記自宅で被爆し、江波へ避難して助

かったが、自宅は延焼により焼失した。

被爆後、神社の復興をはかったが、資材の入手困難と資金不足のため、計画が実現せず現在に至っている。

現在、被爆前の石造門柱と、天満宮一千年祭に建立された石造記念碑が残っているだけである。

空鞘神社

[④空鞘神社](#)

当時、広島市空鞘町六五番地(現在・本川町三丁目三ノ一)・爆心地から約〇・六キロメートル・社掌内田克雄。社殿は木造瓦葺、約四八坪で、境内地の北側に約二〇人収容できる防空壕が作ってあったという。物資疎開は有無不明である。

避難先は、安佐郡古市町方面に指定されていたが、内田社掌ほか家族四人は、被爆により死亡した。

ある被爆者が被爆直後、対岸(輜重隊)へ避難して、空鞘町を振りかえってみたとき、広瀬町・西引御堂町方面(当神社からは西方に当る)から延焼して来たようであったが、被爆したその日夕方に避難先から帰ってみたときは、すでに社殿は灰燼に帰しており、火も消えていたという。なお、六日朝、本川国民学校児童約二〇人と教師一人が戦勝祈願に参拝していて、全員即死したといわれる。

昭和二十一年一月、戦地から内田克雄が復員し、あとを継いで宮司となり、昭和二十八年十月、現在の神社を復興した。

広瀬神社

[⑤広瀬神社](#)

当時、広島市広瀬元町一五〇番地(現在・広瀬町一ノ一九)・爆心地から約〇・八キロメートル・社司山崎颯男。

境内地一、一五五坪、社殿は木造瓦葺七〇・七五坪、なお、境内西側には末社、稻荷神社・恵美須神社・天満宮及び清陽社の四社があった。

神器・古文書その他物資の疎開状況は不明であり、社殿は、避難者が被爆の夕方に帰ってみたところ、すでにまったく焼失していたという。

被爆当日、社司ただ一人が神社内にいたが、安佐郡新庄山下方面に脱出して助かり、昭和二十二年九月に焼跡に復帰し、引続き同年十月、本殿及び拝殿を復興した。

昭和三十一年に内田社司が死亡したため、野上正徳宮司がこれを引続き、昭和三十二年十月十九日、終戦後はじめて例祭を執行した。

胡子神社

[⑥胡子神社](#)

当時・広島市胡町四一五番地(現在・胡町五ノ一四)・爆心地から約〇・八七キロメートル・社掌新延佳一。

社殿は、木造瓦葺本殿及び拝殿一三坪、その他神官居間二〇坪、往昔から商売繁盛の神社として栄え、現在に及んでいる。

焼失状況は不明であるが、延焼により焼失したものと考えられる。被爆当日、社掌一人が社内にあり死亡した。のち家族三人も死亡した。

一望の焼野原のなかに、昭和二十年十一月、社殿一坪・拝殿一二坪を復興し、引続き十一月二十日に、町内生存者二〇余人が集り、戦後最初の祭典(第二巻二九二ページ写真。但し説明の昭和二十二年は誤植)をおこなった。神官は生き残った新見金司(昭和二十一年死亡)一人だけであった。当分のあいだ焼野原の中に、この新社殿ただ一つがボンと立っていて人目をひいた。

住吉神社

[⑦住吉神社](#)

当時、広島市水主町五五番地(現在・加古町)・爆心地から約一・三キロメートル・社掌内田末雄。

神殿・祝詞殿・拝殿・渡廊下など木造平家建約四〇坪の建物があった。浅野藩時代に水軍の守護神として祭られ、戦後も崇敬者多く毎年六月十四、五両日(旧暦)の祭典は盛大である。

原子爆弾の炸裂により、社殿はじめ社宝・重要文書などすべて焼失し、境内に茂っていた老松もほとんど枯死したが、ただ一本、川べりの松が現在まで残っている。被爆当日、境内に罹災者が雲集し、臨時救護所が設置された。また、ここから暁部隊の舟艇によって多数の負傷者が似ノ島その他へ運ばれていった。

昭和二十年六月十五日、社掌内田末雄が戦死(フィリピン)したので、内田熙雄(昭和四十五年一月二十七日死亡)が昭和二十三年十月六日宮司に就任し、復興対策を進めた。

昭和二十三年、バラック建てながら神殿と社務所を再建し、同年六月、戦後最初の例祭を執行した。しかし、世情なお不安で参拝者はなかった。

三篠神社

⑧三篠神社

当時、広島市三篠町一丁目一番地ノ五(現在も同じ)・爆心地から約一・七キロメートル・社掌野上敏鷹。

境内地八一二坪、社殿は六五坪、社務所六二坪その他倉庫一〇坪などがあった。

被爆一週間前に、御笑代を神社境内の防空壕内に移し、神具及び調度品の大半を安佐郡佐東町川内の中調子八幡神社に疎開していた。

八月六日朝・野上社掌(現在・宮司)一人のほか、三篠青年学校の小迫一二三校長及び同校生徒が神社境内において授業中に被爆したが被害状況は不明である。野上社掌は健在であった。

社殿は半倒壊し、社務所は倒壊した。鳥居三基も爆風により崩壊し、引続き火災により全焼した。建物がほとんど焼けつくした六日夕方の五時頃、大雨が降って火を消した。被爆直後、数人ここへ避難して来た者があったが、重傷者であったためか再び逃げられず皆焼死した。また、樹齢三〇〇年におよぶ境内の樹木がことごとく枯死した。

被爆から約一か月のちの九月十日、疎開地から神社焼跡に出張し、防空壕内の御笑代を現在大宮町の当社御旅所に奉遷した。しかし、この御旅所も爆風によって破壊されており、辛うじて使用できる程度であったから、応急修理をおこなった。

昭和二十三年四月から十月までの間に、社殿及び社務所を復興し、ついで昭和三十一年に拝殿を建立した。

現在の境内樹木は数本を除くほか、すべて苗木または種子をまいて育成したものである。

比治山神社

⑨比治山神社

当時・広島市桐木町九二七番地ノ一(現在・比治山町五ノ一〇)・爆心地から約一・八キロメートル・社掌大己正晴。

本殿拝殿の木造瓦葺流れ造り四二坪、社務所六五坪、手水舎三坪その他稲荷杜一坪その他があった。

神社の背部が比治山公園であるから、山腹に小さな横穴を掘り、ご神体及び重要書類をその横穴へ疎開し、本殿の板壁を抜き取り、拝礼に妨げないように造作した。その他の建物はそのままにしていた。

神社そのものの防衛態勢はとっていなかったが、地域の防衛組織と連絡を取り、災害発生に備えていた。

万一の場合には、神社のうしろ比治山公園参道横に防空壕(社務所から約五〇メートル)があったから、これに避難することになっていたが、原子爆弾の被爆に際しては災害があまりにも大きく、安芸郡府中町へ避難した。

被爆により、社務所の二階東端付近から、放射熱線による自然発火で、本殿拝殿へ延焼し、ついに全焼するに至った。なお、境内の樹木も樹齢三〇〇年以上のもの数十本を含めてすべて焼失し、焼跡にはわずかに石鳥居・石唐獅子・石灯籠・玉垣を残すだけとなった。火災は自然鎮火したようである。

社掌は応召して外地にあり、代理社掌及び出仕職員が留守を預っていたが、八月六日はちょうど江波(羽衣)神社の祭典奉仕のため出張途中、被爆して行方不明となった。代理社掌妻は、神社付近で倒壊建物の下敷きとなり、脱出できず焼死した。また、社掌妻は、社務所内にいて手足を負傷したが、子一人を連れてすぐに安芸郡府中町へ避難して助かった。

昭和二十年十二月、社掌大己正晴(現在・宮司)が野戦から帰還し、ただちに復興に着手した。翌二十一年七月、佐伯郡大野町の親類の山林から木材を伐採購入の上、仮建築ながら本殿及び拝殿二五坪を建築、続いて二十二年三月に本建築で社務所四五坪を完成し、祭祀を奉仕した。以後、着々と復興工事をおこない、現在の建物約一、〇〇〇余坪に及んでいる。

なお、被爆直後、第二総軍司令部の主催により、陸海軍部隊・残存官公署の各代表らが、この比治山神社境内にお

いて、応急救護対策・復旧対策など、炎天にさらされながら会議をおこなった。この時、海軍救護隊代表は死傷者約二〇余万人と報告した。

饒津神社

⑩ 饒津神社

当時、広島市二葉ノ里一番地(現在も同じ)・爆心地から約一・八キロメートル・社司男爵上田宗雄。常は東照宮の神官久保田幸重夫妻が居住。

本殿は木造松皮葺流れ造り四坪、拝殿三〇坪、渡廊下三〇坪、及び能舞台・楽屋五〇坪、社務所五〇坪、神馬舎三坪、神輿舎八坪、神饌所八坪、宝庫一〇坪、中門瑞垣一五坪などの建物があった。天保六年藩主浅野斉肃(あさのなりたか)の創建にたるもので、宏壮な構えであった。また、萩の名所として親しまれた。

神社は市の中心部から離れた二葉山麓にあり、境内には老松林立して、一般市民の避難場所に指定されていたほどであったから、安全性高いものと考えられ、社宝その他一切のものを疎開しないでいた。

境内の能舞台は、白島国民学校の林間学校として解放され、被爆当時、すでに数人の児童が来ていた。

神社では、午前七時過ぎに警報解除となっても、神官夫妻と使丁夫妻計四人が警戒態勢をとっていた。

原子爆弾の炸裂により、本殿及び唐門が一瞬に倒壊し、その他の建物も大破傾斜した。放射熱線により、まず本殿から出火、火勢猛烈をきわめ、つぎつぎ延焼してついにすべて灰燼に帰した。消火のすべなく自然鎮火したが、老松は無残に吹き倒され、参道にならぶ藩士寄進になる一〇〇余基の石灯籠は、頂上のギボシを吹きとばされたり、倒れたりしていた。被爆後、この境内に多数の市民が避難してきて修羅場と化し、臨時救護所が設置された。

久保田夫妻は、被爆直後、隣りの明星院が出火したとき、火傷した子どもが逃げて来たので、その子を少し先の鶴羽根神社に預けに行き、引返してみると、社殿は炎上中でどうすることもできず、約五〇〇メートル東寄りの東照宮下の国鉄の防空壕へ避難した。使丁夫妻も脱出して助かった。

久保田神官は顔面・両手・両足を火傷し、一時生死の境をさまよったが、大破した東照宮の一室で治療に当り、八月二十四日に広島赤十字病院に入院して、ようやく回復した。

昭和二十一年四月、神社焼跡に半坪ほどの拝所を建てたが、すでに参拝者があり、崇敬者の協力により、二十四年から神殿の再建に着工した。本殿再建工事は安芸郡矢野町の峠尻大工棟梁によるもので、建築資材も当人が運搬した。昭和二十四年、久保田神官は東照宮に帰り、社司上田宗雄も辞任し、後任に浅野柴門が官司となり現在に及ぶ。

鶴羽根神社

⑪ 鶴羽根神社

当時、広島市二葉ノ里三七番地ノ一(現在も同じ)・爆心地から約一・八キロメートル・社司石井博光。

本殿は木造瓦葺流れ造り、その他祝詞殿・神饌所・参集殿・手水舎・社務所・祭器倉庫など建坪約二六〇坪があった。

この地帯は二葉山麓にあたり、樹木密生し、別に防衛態勢をとることなく、疎開もしていなかった。ただ、万一の場合には、本殿裏の二葉山に防空壕があり、そこへ避難することになっていた。

原子爆弾の炸裂下、本殿・祝詞殿・拝殿・参集殿・社務所・倉庫・手水舎・神職宅を除き、その他の建物はすべて爆風により倒壊した。しかし、自然発火もなく、また境内が広いため他からの類焼もなかった。

神社前が第二総軍司令部(旧騎兵第五聯隊)であったから、半倒壊の参集殿(一〇〇坪余)に同隊の将兵や一般の負傷者を多数収容した。また、本殿裏の防空壕にも同様に収容した。

ご神体はすぐに二葉山防空壕に移したが、祭事は一時停止のやむなきに至った。

被爆から数日後、第二総軍が境内にバラック建兵舎を五棟建設して入居したほか、被災市民や兵隊が境内に充満して凄惨をきわめた。

参集殿は収容者がいなくなったあと、引続き宿泊施設として利用され、被爆により焼野原となった市内では、大いに役立った。

石井社掌(現在・官司)は、負傷していたが、被爆後、一か年を出ずして自力で本殿を再建し、御遷祭を執行した。引続き現在参集殿に使用している建物を再建した。

碓神社

⑫ 碓神社

当時、広島市白島九軒町一六二番地(現在も同じ)・爆心地から約一・八キロメートル・社掌稲井鉄操。ただし、稲井社掌の応召により、饒津神社勤務中の久保田幸重が祭事を行なう。

建物は、本殿一坪・幣殿三坪・拝殿一〇坪五八・社務所一七坪があったが、被爆当日全焼した。同時に、重要書類および諸記録をすべて焼失した。ただ、石造鳥居三基のうち、一基は爆風により折損倒壊したが、他の二基は無事であった。また、稲井社掌夫人は、辛うじて脱出し助かった。

なお、応召中の稲井社掌は、第五師団司令部付陸軍曹長として勤務中に被爆し、遺体は行方不明となった。

昭和二十一年三月、元工兵隊広場に祭祀されていた小祠を移転して、社殿再建の基礎とし、二十三年に拝殿を建設した。

昭和三十六年以後、鉄筋コンクリート造りで再建に着手、四十年四月に完成した。現在、東照宮の久保田宮司が兼務している。

東照宮

⑬ 東照宮

当時、広島市二葉ノ里六番地(現在も同じ)・爆心地から約二・二キロメートル・社司久保田主令。

本殿四坪、拝殿一〇坪、瑞垣二四間は権現造り、幣殿一二坪、神馬舎四坪など、慶安元年領主浅野光晟(あさのみつあきら)の創建になるもので、祭神は徳川家康、二葉山の中腹よりやや下った高所に、青丹塗りの社殿を構えていた。参道から高い石段を登って社殿に入るのは、現在も変わっていない。

被爆前、境内の回廊を利用して、第二総軍通信隊が無電機数台を備え、通信兵約二〇人が常駐していた。

地域的に安全性高く、なんら疎開しなかったため、社宝の大部分を焼失した。防衛態勢としては、当局の指示どおり防火用水槽の設置、バケツ・梯子の備えつけなど行なっていた。このほか、境内西側に通信隊用防空壕(一個所八坪位)が二か所あり、また石段下に鉄道局用の防空壕(一〇坪位)が一か所設けられていた。

原子爆弾の炸裂下、爆風により本殿・幣殿・拝殿・瑞垣・神馬舎が倒壊し、まず拝殿が放射熱線によって出火、ついで瑞垣・本殿へ延焼していった。神馬舎も焼失した。神輿舎・手水舎も大破したが、通信兵の活躍によって延焼だけはまぬがれた。しかし、これら残存建物も、六寸角材の柱が至るところ裂け、吹きとび、瓦が散乱し、天井も吹きとび、屋内の家財道具や土壁も吹きとばされ、ただ焼失をまぬがれたというだけの惨状に陥った。

社司夫妻と孫娘一人は、石段下の鉄道局の防空壕に避難したが、翌七日は境内の残存建物内に帰って負傷を治療した。しかし社司妻チエは同年十月十八日に死亡し、ついで翌二十一年一月十二日に社司も死亡した。久保田主令の子息久保田幸重は、居住していた饒津神社が焼失したため、被爆の八月六日から東照宮に帰り、広島赤十字病院へ入院などして、治療を続け、ようやく元気を取りもどした。

東照宮の境内及び石段下は、被爆当日、市中からの避難者で大混乱をきわめた。石段下には、臨時救護所が天幕を張って設けられ、境内に駐屯していた通信兵や、急遽来援した陸海軍救護隊や郡部医師会派遣の医療救護班などによって、当分のあいだ治療活動がおこなわれた。

久保田幸重が亡父の跡を継ぎ宮司となったが、被爆後体調すぐれず、翌二十一年三月ごろからようやく境内の飛散瓦の取除きなどを始め、境内の山林の半焼松材や市中の半焼電柱を入手して製材し、形ばかりの拝所を設けることがやっとであった。

その後、境内山林に松喰虫が発生したため、これを払下げた資金により、徐々に修理整備を進め、昭和四十年東照公三百五十年祭を期し、ようやく社殿を再建するに至った。

なお、東照宮裏山に昔から金光稲荷神社があり、信者多く、昭和二十年十月ごろからすでに参拝者があり、現在に及んでいる。

早稲田神社

⑭ 早稲田神社

当時、広島市牛田町八八三番地(現在も同じ)・爆心地から約二・二キロメートル・社掌池田喜代登。

本殿は木造瓦葺一・八坪、拝殿三〇坪、その他境内に金比羅神社・稲生神社があり、いずれも木造トタン葺一・五

坪の建物であった。

市の北端に位置し、通称早稲田山の山中の独立建物であったから、神具などの疎開もせず、万一の場合は牛田町内会の指示によって避難することになっていた。

原子爆弾の炸裂に際しては、神社の本殿及び拝殿が山上にあったため、爆風を強く受け、屋根瓦はほとんど落下し、天井は全壊、壁は二割程度剥落した。また、金比羅神社・稲生神社が全壊した。屋内の神具なども半壊の被害であった。

幸い火災は発生せず、居住者も二人のうち一人池田久雄がガラスの破片によって負傷しただけであった。

神社が牛田町内会の避難場所に指定されていたため、被爆直後、境内は避難者が充満し大混乱に陥った。

ただちに町内の太田萩枝医師や疎開していた深川喜久雄医師が駆けつけ、社務所前に応急救護所を開設して、負傷者の救護にあたった。日をたつに従って死亡者が続出し、池田社掌その他二、三人の者が死体を荷車に積んで、何度も牛田公園に運び、そこに急設された火葬場で焼いた。

応急救護所は十一、二日まで開設されていたが、社掌本宅も負傷者を多数収容していた。この神社へ来た避難者は、軍人と中学生が半々くらいで一般町民は少なかった。中学生たちは建物疎開作業に従事していて被爆し、ようやく神社まで逃げて来たのであったが、いずれも口もきけぬほどの重傷で、「おかあさん、おかあさん」と、つぶやくように呼び続けながら、つぎつぎと死んでいった。中に上流川町の広島女学院の生徒が二、三人いたが、この女学生たちは、学校から電車の白島線に出て、常葉橋を渡り、焼津神社の横を通り、牛田のふたまた土手に出て、早稲田神社にたどりついたと語った。

社殿や神具の被害は意外に大きく、建具はまったく用をなさず、神具も破損して使えない状況であったが、多くの氏子崇敬者の努力で、次第に復旧されていった。まず、氏子の手によって屋根瓦が復旧され、逐次、神具が整えられ、被爆後一か月余りにして、もとどおりの神事が行なわれる状態になった。

昭和三十二年二月十七日、池田久雄が亡父のあとを継いで宮司となり現在に至る。

旭山神社

⑮ 旭山神社

当時、広島市己斐町一一二番地・(現在も同じ)爆心地から約二・八キロメートル・社掌内川末雄。

建物は、流し造り社殿約四〇坪・絵馬堂九坪で、被爆時には居住者が無かった。

爆風によって社殿(本殿を除く)の屋根が吹き飛ばされ、押しつぶされた。絵馬堂は若干傾いた程度であった。

神社の所在する旭山が、放射熱線によって、爆心地方向東側の三か所に火災が起き、山頂に向って火勢が伸びたが、地元の消防団の活躍と、急に激しく降りはじめた黒い雨によって鎮火し、神社も焼けなかった。

市中からの避難者は山火事のため、この神社付近に避難せず、ずっと奥の己斐国民学校や学校裏の山腹に築かれた三か所の大きな防空壕に避難した。内田末雄社掌は応召中戦死し、内田達雄が後任宮司となる。

神田神社

⑯ 神田神社

当時、広島市宇品町三一三番地(現在・宇品御幸四丁目一ノ一五)・爆心地から約三・九キロメートル・社掌池田公司。

境内地総面積五四五坪のうち、東側広場、西側幼稚園(宇品学園)、南側神社境内、北側空地で、社殿及び社務所は同一場所にあり、神社は南向きで本殿は北側にある。本殿は木造銅板葺二・六坪、社殿は木造流し造り四七坪、社務所は木造二階建瓦葺延三〇坪の建物があった。

神具などの疎開はしていなかったが、万一の場合に備えて、本殿地下に家族用の待避壕を作り、東側広場にタコつぼを掘り、簡単な遮蔽をしていた。緊急避難先としては東側広場及び西方約一〇〇メートル先の宇品国民学校に指定していた。

原子爆弾の炸裂による爆風で、本殿の屋根が吹きとばされ、拝殿は天井が落下し、釣屋のガラス窓は全壊し、座が落下、屋根瓦も多数破損した。総じて建物全体が若干傾斜した。被爆時、屋内に家族五人と親類の婦人一人がいたが、この婦人がガラスの破片により負傷し、すぐ全員で待避壕に入った。

この日正午ごろ、市中から続々と負傷者が境内に避難して来はじめ、神社前の川瀬外科病院にも負傷者が押しかけ

たが、家族のつきそった者、単身の者など種々雑多で拝殿で休養、応急手当をほどこした。重傷者で見込みのない者は、西隣りの宇品学園に収容した。

しばらく休養し、応急手当を受けたあと負傷者たちは、また繰り返されるかも知れない空襲をおそれ、宇品港から船で似ノ島その他へ渡って行った。

負傷者は次々とあとを絶たず約一か月間収容が続いたが、その数約一六〇人に達した。この間、多数の死亡者が出たので、宇品学園裏の空地で火葬にふした。

拝殿が収容所のようになっていたので、その間、全然神事がおこなわれなかった。

神社の復旧について、同年十月ごろに信者の総代会を開き、対策を講じたが、世の中がなお混乱していて寄付も集らずどうすることもできなかった。

しかし、雨漏りがひどく、放置できない状態に陥ったので、池田社掌の私有地約一〇〇余坪を売却して応急の修理をおこない、翌二十一年正月からなんとか神事ができるようになった。昭和三十三年五月二十日、池田公明が父の死亡のあとを継いで宮司となり現在に至る。

第三節 寺院…636

慈仙寺

⑰慈仙寺

当時・広島市中島本町三八番地(現在・中町五ノ一五)・爆心地から約〇・二キロメートル・住職梶山仙令。

境内総坪数一、一〇〇坪のうち墓地約三〇〇坪、本堂約一〇〇坪、座敷・庫裡約一〇〇坪、倉庫六〇坪、貸家約一〇〇坪の建物があった。

本尊の阿弥陀如来像及び歴代過去帳、什器などを郡部へ疎開し、座敷の裏庭に約五坪の防空壕を掘っていたが、万一の場合には安芸郡中野村の父方実家に避難するよう決めていた。

原子爆弾の炸裂下、爆心直下とも言えるこの寺は、一瞬に壊滅し、全焼した。このとき、住職は墓地の入口の門のところで清掃しており、妻は浴室で洗濯中で、ほかに二人の者が本堂の掃除をしていたが、住職と本堂の二人は即死した。住職の妻は、重傷で動くこともできず、当日の夜は焼跡に野宿して明かし、翌七日、親類の者が探索に来て見つけ、田舎へ護送中に絶命した。

結局、寺院内にいた全員が死亡したわけで、寺務は完全に停止した。

焼跡は、足の踏み場もないくらいに焼けた瓦が散乱し、墓石もほとんど倒壊しており、炸裂の強大な威力をまざまざと示していた。

即死した住職の後継者梶山仙順は、このとき応召中で野戦にいたから、早急な復興対策はできなかった。翌二十一年四月に仙順が復員し、ようやくもとの寺のあとに仮設住宅を建てて、復旧作業に着手した。

しかし、職員も仙順住職ただ一人きりであり、檀家や信徒もほとんど死亡、あるいは負傷し、生き残った者は遠くへ四散したため、連絡のつけようがなく、復興は遅々として進まなかった。一応の形の整ったのは、被爆から約五年後であった。

浄宝寺

⑱浄宝寺

当時、広島市中島本町六九番地(現在・大手町三丁目一ノ二)・爆心地から約〇・三キロメートル・住職諏訪了海。

境内地総坪数三〇〇坪(墓地を含む)、木造平家建ての本堂及び庫裡は、被爆前の昭和二十年一月、火事により焼失していた。従って被爆時には新庫裡の木造二階建て及び茶室約五坪があった。

本尊の聖徳太子像・親鸞聖人像・蓮如上人絵像、及び門徒過去帳を安佐郡佐東町緑井の専蔵坊へ疎開していた。また、親鸞聖人絵伝図は安芸郡熊野町の西光寺に疎開していたが、その他はほとんど焼失した。

五日後、己斐町の増田宅に泊り、六日早朝に帰院した了海住職は、法事のため出かけねばならぬと、その朝七時過ぎに浄宝寺に行った安佐郡緑井の清水某に言っており、原子爆弾の炸裂時には、まだ在院していたか、すでに出かけていたか詳細不明で、遺体も未確認のままとなった。なお、清水某は警報発令中であつたから急ぎ用件を済ませて帰

る途中、新庄(市の北端)の付近で被爆し、数年後に死亡した。

妻クニと長女玲子は、前夜安佐郡緑井の美浦宅(妻の実家)に泊り、六日早朝、クニは帰院したが、炸裂時にすでに浄宝寺に到着していたか、途中であったか不明で、これも遺体未確認のままとなった。女学校四年生の玲子は、天満町の東洋製罐工場に出動中に被爆し、当日正午前についに死亡し、遺体が確認された。なお、四男了我は、中島国民学校六年生で双三郡三良坂町に学童疎開中で、同年九月十六日に帰広したが、両親も姉玲子も死亡しており、親類の世話になった。

これら住職の家族のほか、浄宝寺役僧の津川豊水(東洋工業勤務)が、五日夜から浄宝寺に宿泊していたと言われるが、詳細は不明である。また、天満町の教念寺が建物疎開になったため、住職夫人と娘一人が、境内の茶室に仮住いをしていて、ここで被爆し、その遺体は確認されたようである。

浄宝寺は爆心直下に近く、まったく一瞬の惨劇であったと思われるが、住職もその妻もまた他の居住者も、寺のなかで被爆したのであったならば、もちろん即死であったに違いない。

寺の焼跡には、ただ放射熱線によって焼けただれた瓦が崩れ落ちており、多くの墓石が無残に焼けて倒れているだけで、他には何ものも見あたらなかった。

親類の世話になった了我は、父令海のあとを継ぐことになり、翌二十一年から、学校から帰ると、消息の判った門信徒の家を訪ねてまわって、寺院の復興をはかった。

諏訪了我が年少のため、昭和二十五年になって島根県から奥野真成師を招き、代務住職を依頼して寺の運営を進めた。昭和二十七年、都市計画事業の進捗により、所在地中島本町が平和公園になったため、現在地に換地を受け、翌二十八年に本堂を再建した。昭和三十五年、諏訪了我が新たに浄宝寺第十六世住職となり現在に及ぶ。

浄岡寺

⑭ 浄圓寺

当時、広島市材木町四番地(現在・中島町三ノ二五)、爆心地から約〇・四キロメートル・住職上園志巖。

本堂は慶応元年(一八六五)頃建立された木造瓦葺の寝殿造り約一〇〇坪、庫裡は木造瓦葺九七坪であった。

本尊の阿弥陀如来像は、安佐郡高陽町玖村の圓正寺に疎開しており、難をのがれた。また、重要書類や過去帳などは、墓石の地下に埋蔵していて助かった。

寺院の防衛態勢としては、簡易消火器数本を備えつけ、本堂向拝の軒下に一間四方の穴を掘り、板切れを渡して土を覆う程度の防空壕を作っていた。

万一の場合は己斐町の蓮照寺に避難することに決めていたが、住職自身は、“死ぬるときが来れば死ぬるがよし、避難できればこの上もなし”という心境であった。

爆心地に至近距離で、本堂も山門も、また庫裡も一瞬に炎上し、墓石もすべて倒された。建物近くにあった墓石は特にひどく焼けただれて、赤い皮をかむった丸いタマネギ状になった。

周囲二メートル余もあった樹齢一五〇年の松の大木も、全部枝が焼け落ち、四、五メートルばかりの丸太棒のようになって立っていたが、四、五か月のち自然に倒れた。

火災が完全に自然鎮火したのは、一昼夜後であったが、焼けるものはすべて焼きつくされ、寺の跡には瓦礫の小山が散乱しているだけであった。

院内で被爆した住職夫妻は即死した。被災直後、嗣子上園志水が郡部から帰って来たが、ただの焼野原ではどうすることもできず、坊守の里方である島根県赤名町の西藏寺にひとまず寄留することにし、八月から十月まで行っていた。しかし、浄岡寺の復興を計るため、同年十月から広島市仁保市湊崎の西福寺内に、浄圓寺仮寺務所を設け、毎日、そこから焼跡を訪れ、門信徒との連絡につとめた。門信徒は被爆した墓碑の安否を気づかって、次々に浄圓寺の焼跡に参詣したから“浄圓寺後継者は健在である”と、それらの人々に告げると共に、お互い命のあることをよろこび、励ましあった。

昭和二十一年三月初旬住宅営団の罹災者用の組立家屋(二四メートル四方)一式を購入して、焼跡に仮寺務所建て、仁保町から移り住んだ。

昭和二十二年五月、似ノ島の門徒中の寄付協力により二八坪の仮本堂を浜田組の請負工事で建立した。

昭和二十五年春、所在地一帯が平和公園となることになったので、その換地を受けて、同年九月に墓碑の移転を開始し、十月に完成した。またこの十月に、建物一切を曳き移転方式で木挽町十番地に移した。

翌二十六年九月、本堂(六五坪)・庫裡(三八坪)の建立に着手し、二十七年三月に完成した。続いて二十七年に保育所を建設した。

しかし、昭和三十五年七月二十九日、失火により庫裡全焼、本堂半焼の災難にあったので、同年十月、再び復興工事に着手し、翌三十六年三月に完成して現在に至る。

妙法寺

②⑩ 妙法寺

当時、広島市材木町四番地(現在・中島町三ノ六)・爆心地から約〇・四キロメートル・住職関根龍雄。

本堂は木造瓦葺平家五六・五坪、庫裡木造瓦葺平家八二坪、山門木造瓦葺四坪、及び境内に瘡守堂二〇坪、稲荷堂四坪、及び墓地があった。

本尊の日蓮聖人像及び壇家各家別過去帳、瘡守本尊は、宮島の縁故宅に疎開しており、被爆から免れたが、年別過去帳をはじめ仏具・什器などはすべて焼失した。

寺の境内に三坪ほどの防空壕を掘り、防火用水槽二、三箇備えていた。非常の場合は町内会指定の場所に避難することになっていたようである。

爆心地に至近距離であったため、原子爆弾の炸裂下、瞬時に全壊全焼し、寺内にいた者四人は即死した。檀家の生存者より聞くとところによると、この日は某家の法要の準備をしていたようである。

墓石はほとんど倒れ、建物に近い墓碑は特にひどく焼けて、ボロボロになって崩れていた。焼失した家屋の下から二人分くらいの遺骨が発見された。住職は応召中であつたが、復員後、焼跡に行ってみると、長いコンクリート塀はすべて倒され、倒れた墓石の中でも、熱線を受けた墓石は、皮をはいだように崩れ落ちていた。また、家族が土中深く埋めていた什器・陶器類も、爆圧によるものと思われるが、ほとんど壊れていた。

復興対策は住職が応召中であつたため、復員するまで何ら講ずるところなく、寺務も停止した。関根住職が復員して、復興対策を進め、約半年後に焼跡にソギ葺の木造平家(二六坪)を建て、ここによりやく宗教行事を復活することができた。

寺の再開にあたって、住職ほか一人が荒廃した境内の墓碑の整理・復元、あるいは檀家の死亡者の確認や連絡などを進めた。

広島市の平和公園建設により、旧来の材木町四番地(現在・公会堂の付近)から現在地へ、昭和二十六年から二十七年にかけて換地移転して現在に至る。

誓願寺

②⑩ 誓願寺

当時・広島市材木町一〇二番地(現在・三滝町三二二)・爆心地から約〇・四五キロメートル・住職成田準弘。

境内地は広く、本堂・庫裡・書院・位牌堂・鐘楼・経蔵・明神堂・廻廊・茶室などの諸堂宇があつたが、建坪は不明である。山門は殊に堂々としていたから“大きいのは誓願寺の門”という比喩があつたほどである。池には無数のカメがおり、家バトもたくさんいて、人々に親しまれた。

爆心地に近く建物は全壊全焼、住職その他居住者の消息もいまだに不明である。寺内で被爆したとすれば即死したものと推察される。

住職はじめ寺族関係者全滅により、本山当局から昭和二十一年六月に後任住職広瀬準隆が着任し、復興対策を進めることになったが、この寺院の跡地が平和公園になることになったので、広島市復興事務所の建築許可が出ず、換地先の中島新町に一部寺院を再建した。

しかし、墓地を三滝墓苑に移転改葬した関係上、寺を墓苑近くに移転することにし、敷地を得て本堂・庫裡・書院・客殿・茶室・山門などの諸堂宇を再建した。

国泰寺

(22) 国泰寺

当時、広島市小町(現在・中町七一一七)・爆心地から約〇・六キロメートル・住職西沢天海。

広島藩主浅野氏の菩提寺で、紀州から入城した浅野長晟(あさのながあきら)をはじめ、その他一門の墓碑が広く閑

静な敷地に幾基も並んでいた。このほか境内には豊臣秀吉遺髪塚・赤穂義士大石氏の墓、ならびに赤穂義士追遠塔などがあり、一般藩士の墓も多く、頼家はじめ藩儒者などの筆になる碑銘も数多く、好事家の心を惹いていた。

境内に旧仏閣造りの堂塔一二棟三八〇坪が建てられてあり、堂々とした構えであった。

陸軍船舶部隊(暁部隊)約八〇〇人くらいが常時駐屯していたので、防衛態勢は充分と考えられ、重要書類その他も疎開しないでいた。しかし、万一の場合には、草津町(海蔵寺)の山に避難するよう決めていた。

爆心地に近く、原子爆弾の炸裂と共に、一瞬に堂塔ごとく倒壊し、炎上したものと思われるが、天海住職ほか修行僧五人が全滅したため、炎上の状況についてはつまびらかにしない。

境内に駐屯していた将兵の被害は不明であるが、寺族及び疎開して来ていた者ら即死四〇余人、負傷者一人(三日目死亡)を出した。

被爆の翌七日朝、草津の海蔵寺住職らが焼跡を調査したが、なお、所々に残火がくすぶっており、足を踏み入れることもできなかった。

天海住職死亡のため、昭和二十年十一月、宗規により法類福原英巖(海蔵寺住職)が、その跡を継いで国泰寺住職に就任し、復興対策を進めた。翌二十一年二月十日、本堂の焼跡にトタン小屋を建て、手弁当で毎日草津から通い、瓦礫や焼残りの廃材の整理に着手した。

昭和二十八年秋から、境内地を処分して復興資金を得、以後十か年余にわたって、鉄筋コンクリート建てによる本格的な堂塔の再建を進め、現在、総建坪四三〇坪(工費一億一千万円)に及び、なお続行中である。

本覚寺

(23)本覚寺

当時、広島市左官町一五番地(現在・十日市町一丁目四一〇)・爆心地から約〇・六キロメートル。住職金川龍洗。

本堂木造平家四二坪、庫裡三〇坪、客殿四〇坪、門八坪、妙見堂一二坪いずれも木造瓦葺の建物があった。妙見堂の祭事は、市の西地域の人々に親しまれ、西部ではこの祭りの日から浴衣を着はじめるという習いがあった。

本尊は安佐郡八木村の辻家に疎開し、重要文書は寺内の井戸の中に入れていた。防空態勢としては、境内に防火用水槽を設けており、戦後の現在も町内用水として活用されている。

万一の場合の避難先としての指定場所は不明であるが、被爆直後、龍洗住職は佐伯郡宮内村に避難して、九日に死亡、また住職妻は安佐郡古市の中本家(実家の疎開先)において十一日に死亡した。

住職夫妻と家族の五人(二人屋内死亡)がすべて死亡し、また寺院付近の人々も皆死亡したから、現在では被爆時の惨状を知るべくもない。寺院が爆心地に近く所在していたから、原子爆弾の炸裂下、堂宇はすべて倒壊し、放射熱線による自然着火で全焼したものと考えられる。

昭和二十一年三月から、渡部正康が郡部から資材を入手し、焼跡にバラック建て一三坪の仮本堂を建てて復旧に着手した。同年十月、正式に渡部正康が本山から招待状を受けて入山し、家族四人と共に復興対策に従うことになった。

昭和二十二年七月一日から、四散した檀信徒の連絡を開始し、盆会を修行するとともに、境内の整理をおこなった。

昭和二十九年、都市計画事業により、墓地の改葬移転を実施、換地問題も解決した。

昭和三十三年十二月、現本堂を建立、翌三十四年八月に庫裡を建立し、続いて三十四年に妙見堂を建立した。ただし、鳥居と石造の獅子は戦前のままである。

円隆寺

(24)円隆寺

当時、広島市三川町二九番地(現在・同町八九)・爆心地から約〇・九五キロメートル・住職中谷慈経。

本堂木造平家建七〇坪、庫裡五五坪のほか、稲荷堂三〇坪、日一堂一〇坪いずれも木造平家の建物があった。古くから“とうかさ”と呼ばれて親しまれ、この宵宮の日から浴衣を着初める習俗があり、戦後、さらに全市的な民俗行事として隆盛を続けている。

重要書類・寺宝などを境内の防空壕の中に入れていたが、水に浸ったため八月六日の朝、本堂の縁側に出して乾かしていたところを被爆し全焼した。しかし過去帳だけは佐伯郡廿日市町の常国寺に疎開していて難を免れた。

境内の防空壕は、町内会の人々の緊急避難場所と指定されていたが、原子爆弾の炸裂下では何ら役に立たなかった。

強烈な爆風により、堂宇は一瞬に倒壊し、放射熱線により自然着火、たちまち大火災となって全焼した。

この朝、竹屋及び袋町両国民学校の児童約三〇人が、本堂で授業していたが、皆下敷きとなり負傷者二人が生き残ったほか、他は全員即死した。この二人の児童は奇蹟的に助かり、現在も健在である。このほか留守番の中村イワが台所で即死した。

中谷住職は、ちょうど比治山の墓地に出向き、読経中に被爆して負傷した。

昭和二十年九月、すなわち被爆一か月後、焼跡にとりあえず仮設の本堂(三坪)と庫裡(二坪)を建て、復旧に着手した。更に翌二十一年三月、三五坪の小屋を建てて復興対策にあたった。

昭和二十六年十一月十九日、原子爆弾症により慈経住職が遷化したので、戦地から復員していた中谷善行が、そのあとを継いで住職となり、更に復興対策を進め、昭和四十年、鉄筋コンクリート建ての堂宇一三〇坪を建立して現在に至る。

広島別院

(25)本願寺派広島別院

当時、広島市寺町一番地ノ一九(現在も同じ)・爆心地から約一・一キロメートル・輪番榎藤哲蔵。

建物は、本堂を中心として、対面所・庫裡・茶室・会館・山門など木造平家建四〇坪があった。

本尊及び法宝は、安佐郡安佐町後山に本願寺の工員養成所として設備した後山道場へ疎開し、その他のものは郡部の各寺院へ疎開していた。

境内に完備した防空壕を作ったほか、防空対策も一般と合わせて実施し、万一の場合には前記の後山道場あるいは郡部の寺院へ避難することになっていた。

八月六日は例日のとおり午前六時勤行をおこない、七時過ぎの警報解除後は輪番室において要談中、被爆した。本堂及び他の建物も全壊に近い被害であった。

原子爆弾の炸裂下、まず放射熱線により中庭の樹木が燃えはじめたので、職員が棒ぞうきんに水を浸して消火しようとしたが、ぞうきんの方が燃えだし、こちらを消せば他が燃えはじめるという状況で、ついに本堂に延焼し、次々と燃え移っていった。火の粉をさけようと、ふとんをとり室内に入ってみると、爆風で天井は吹きとばされており、そこにふとんが舞いあがって、ひっかかっていた。

火勢は急激に高まり、各自無我夢中で近くの本川に逃げるのが精一杯であった。夕方になってようやく自然鎮火したが、榎藤輪番と職員一人、雇員の老爺一人及び参詣者二人計五人が即死し、一〇人が負傷した。

寺内にいた職員の猪原俊成(現在・品龍寺住職)は、落下物の下敷きとなって気絶し、三、四〇分して気がついてみると、大本堂がなくなっており呆然としたという。

林副輪番は、ちょうど本山に出張中で難を免れ、八月十日帰広し、生き残った職員を集めて戦災処理の対策を協議し、とりあえず安芸郡坂町の西林寺に教務所を移した。

さらに同年十二月、坂町の西林寺から、己斐町の善法寺に教務所を移し、仮堂の建築を企画し、翌二十一年一月ごろから、林副輪番と職員一〇人により教務所態勢を整え、復旧対策に取組み、同年五月、復旧資材など門信徒の寄付や勤労奉仕によって、もとの焼跡に仮堂を完成した。

なお、境内には現在、被爆しながらも奇蹟的に枯れなかった蘇鉄樹が残っており、また、納骨所石碑が一部欠けたまま立っている。

多聞院

(26)多聞院

当時、広島市段原町(現在・比治山町一〇五一)・爆心地から約一・七キロメートル・住職亀尾有賢。

本堂木造瓦葺平家一六坪庫裡七〇坪、客殿五〇坪倉庫(土蔵)一〇坪、本門三坪の建物があった。

多聞院は比治山公園の西側山麓にあって樹木にかこまれており、比較的に安全と思われていたから、寺物は何も疎開せず、むしろ木挽町の福寿院の仏堂荘厳具を預かっていた。境内に防空壕を二か所掘っていたほか、別に防空設備はしていなかった。万一の場合には、町内会が指定した安芸郡温品村へ避難することにしていた。

原子爆弾の炸裂にともなう爆風によって、諸堂宇の瓦が全部剥げて落下し、約三〇センチメートルばかり、建物全体が傾斜した。また堂内の建具が破損し、諸器具が飛散した。山門は倒壊し、居合せた身元不明の母子二人が圧死していた。

院内から火災は起らなかったが、寺の下で電車道西側の民家から発火し、つぎつぎと延焼すると共に、午前十時ごろ、桐木町から段原町へむかって火勢が南下し、危機に陥ったが、午後一時ごろ、呉海軍鎮守府の救援隊によって、ようやく延焼が食い止められ、多聞院以下一〇数戸は辛うじて焼失を免れることができた。

院内の居住者五人及び合宿者の警察警備隊三〇人は無事で、それぞれ避難した。また、町民も全員避難したが、町内会長の亀尾住職はただ一人踏みとどまり、町内を巡視して、倒壊物の下敷きになっている者を救出し、数人の負傷者の応急手当をおこなった。

六日夕刻、中国地方総監府の服部副総監、県警察部の石原部長、高野県知事などが多聞院に集合し、「仮総監府」と掲示すると共に、ここに「県防空本部」が設けられ、広島被爆の報を内務省に通報するとともに、県下各機関あるいは隣県に対して救護班の出動命令が出された。七日早朝、これらは山口町の東警察署に移転したが、この間、多聞院は県下各地からの救援物資の受付所となり、比治山に逃げて来た多数の被爆者や付近の焼跡にとどまっている人々に“にぎりめし”の配給をおこなった。

被爆後、二、三日たって、避難先から帰って来た町民約五〇人近くを、ひとまず寺に収容したが、十日ごろ、臨時配線により電灯がつくようになったので、収容町民に対し、バラック小屋の建設をすすめた。その資材は、焼け残った倒壊木材を利用し、屋根にするトタンは、一枚一円で焼トタンを買い集めて、それぞれに配分した。また、寺の持つ畳を一世帯につき二枚ずつ、布切れ、土びん、茶わんなどの生活用品もあるだけ配分して急場をしのいだ。

寺の復旧は、檀信徒の被害も甚大でその方途も立たず、屋根も焼トタンや古ダタミを載せてつくろう有様であったから、雨もり激しく、雨降りの日は眠る場所もないという状態であった。

しかし、寺務だけは続けて、昭和二十年九月の彼岸に、第一回原爆死者合同法要をおこない、昭和二十一年から、拡声器二個を購入して、市内の焼跡各地を巡回し、多数死没者の読経供養を実施した。

昭和二十四年、平和の鐘（一六〇貫）を作製し、毎朝八時十五分に追善供養と平和祈願のため鐘をついて現在に至った。

この平和の鐘の「鐘楼」は被爆前からの木造建物で、その天井は爆風のため破損したまま現存している。柱は熱線によって焼けていたが、二五年間を経過した今日では、風雨にあたって残痕を認めがなくなっている。

本堂その他建物の本格的修理は、昭和二十六年秋からようやく着手したが、昭和三十一年失火により焼失、昭和三十五年に再建して現在に至った。

唯信寺

(27) 唯信寺

当時、広島市舟入南町三丁目八番地ノ二二（現在・舟入南町四ノ六三）、爆心地から約二・六キロメートル、住職大内義直。

本堂木造平家建六五坪、庫裡一五〇坪、茶室二〇坪いずれも木造の建物があった。

本尊阿弥陀仏像ならびに諸仏像・重要書類・過去帳などを、安佐郡狩留家の知人宅へ疎開していたが、寺が市の中心部よりはずれ、周囲に田畑多く、広島市防空計画により災害時の重傷者収容所に指定されていたから、薬品類や医療器材をはじめ、民間人も種々な物資を本堂の中へ疎開していた。

境内には防空壕・貯水槽など設置して防衛態勢を整えており、また、万一の場合に備えて、江波港町の元県立広島商業学校へ避難することになっていた。

大内住職は、舟入連合町内会長兼国民義勇隊舟入大隊長であり、この日午前七時半から雑魚場町の建物疎開作業に出動する町民約二〇〇人を、電車道（江波線）の東側の歩道に集合させ、三分間ほど激励の言葉をのべて帰院し、次男と長女を連れて散策中、B29一機が上空にあらわれたので、眺めながら話していて被爆した。

長女は全身に火傷を受け、庫裡にいた者は、轟音とともに凄い上下震動を感じて庭に飛び出した。

諸堂宇は八割損壊の状態、寺の周囲の板垣が熱線により自然着火したが、みんなで消し止め、建物への延焼は免れた。

そこへ、乳母車に幼児をのせて出動した若妻もいた舟入学区一〇か町の国民義勇隊員をはじめ、同じく雑魚場町付近の疎開作業に出動していた県立第二中学校の生徒、進徳高等女学校その他各学校の女生徒たち、また土橋一帯の重傷者が、電車道づたいに唯信寺に殺到しはじめ、ついに本堂から庫裡・境内・墓地にいたるまで約七三〇人余の負傷者でいっぱいになった。

大内住職ら家族七人総がかりで、もっぱら救護につとめたが、生徒たちの親を呼ぶ叫び声、死を自覚して「君が代」を絶唱する声、また断末魔の苦悶の声など、唯信寺は一挙に生地獄と化した。こんな大混乱の中で重傷の二人の妊婦が出産した。しかし、水道管が用をなさないため、寺の古井戸の水を汲んで産湯を使わせねばならなかった。大内住職がその名づけ親になった。

収容者が、連日五人ないし一五人くらいずつ死んでいくので、野戦の経験者の指導により、寺の西側の農地に、南北の溝を堀り、離散した寺の縁側の板を上置き、五人か一〇人の死体をならべ、溝の底にタキ木を入れ、風上から火を放って一度に焼いた。一体ずつ横に名札を立てて目じるしとし、遺骨は白布に包んで整理した。作業は二か月半に及んだが、その間、収容者のうち自力で歩けない者はほとんど死亡した。たとえ歩いて家族の所へ帰った者も、二、三か月のうちには死亡したようである。

大内住職は、神崎学区の西村幸蔵連合町内会長が被爆死亡したので、とりあえずこれを兼務し、同時に避難者の殺到で大混乱中の江波地区の食糧配給業務をも担当することになった。

被爆後も敵機がしばしば飛来し、再度の攻撃におびえる市民は、郊外へ続々と避難したが、大内住職とその家族は踏みとどまざるを得なかった。多数の負傷者の救護と死亡者の処理・読経供養・遺骨の整理など約二か月半のあいだわが身を忘れた日々であったが、舟入学区その他の被爆町民に対する配給業務も加わり、境内に配給所を仮設し、一色匠を事務主任、加藤カズ子を職員に決めて生活物資の確保に万全を期したのであった。

九月十七日夜半からの枕崎台風の襲来により、ひどく傾斜していた本堂その他の建物が完全に倒壊したので、ただちに五坪の仮設住宅を建て、すべての業務を続行したが、この打撃は大きかった。市内の各寺院が壊滅したので、唯信寺は一層寺院としての活動も発揮しなければならぬところへ、不慮の災害に遭遇して途方にくれた。

幸い信徒の建築業者により、倒壊した寺の廃材や郡部から新資材を入手し、昭和二十二年四月、本堂と庫裡を建立した。更に昭和二十四年に、庫裡を二階建てとし、一階に幼稚園舎と事務所を設けた。翌二十五年には新たに二階建ての幼稚園舎を新築し、三十九年には新様式の庫裡を再建立して、現在に至る。

瑞川寺

(28) 瑞川寺

当時、広島市尾長町天神谷(現在・山根町)・爆心地から約二・七キロメートル・住職(代)曾根田恵明尼。

本堂及び庫裡木造ワラ葺六五坪、鎮守金比羅堂銅板葺一五坪、稲荷堂瓦葺一〇坪、山門三坪、土造倉庫六坪があった。防衛態勢の詳細は不明であるが、一応の施設はととのえていたと思われる。

原子爆弾の炸裂直後、放射熱線により本堂のワラ葺屋根に着火し、瞬時に全焼した。本堂から約五〇メートル離れていた金比羅堂・稲荷堂・土蔵などは焼失をまぬがれたが、爆風により倒壊寸前の被害を受けた。少し東寄りの国前寺は火災にならず、被爆直後、臨時救護所となり軍人や一般市民の負傷者が多数治療を受けたが、放射熱線にムラがあるという一例であろう。

田中哲翁住職が、昭和十三年九月から同二十七年九月まで、アメリカ合衆国ハワイ曹洞宗教師として渡米していたため、小町の聖光寺住職下野大展が兼務住職となり、その代替者として曾根田恵明尼が居住管理していて、被爆負傷した。

恵明尼は八二歳の老齢のうえ、負傷も相当ひどく、復旧対策もなかなかはかどらなかったが、焼失しなかった鎮守稲荷堂を本堂代用として、一応宗教行事を続けた。約五〇軒の檀信徒も、ほとんど被爆者であり、生活にも追われて早急な協力は望むべくもなかったから、檀信徒及び付近住民の協力によって、寺有の山林を伐採し、その資材により応急措置をおこなった。

兼務住職下野大展は、昭和二十年九月四日、原爆症によって死亡し、恵明尼はしばらくして下関に転居し、昭和三十年ごろ老衰により死亡した。

昭和二十七年九月、アメリカから田中哲翁が帰朝し、二十八年三月瑞川寺に入り、復興対策を進めた。昭和四十年から寺有地約一万坪を整備し、現在宅地造成中である。

三瀧寺

(29) 三瀧寺

当時、広島市三滝町四一一番地(現在も同じ)・爆心地から約三・二キロメートル、住職佐藤要憲。

寺は広島市の北辺山腹に所在し、三つの滝があって四季美しく、市民遊行の所でもある。山中に諸堂宇が散在し、観音本堂三〇坪、庫裡三五坪、離れの庫裡一二坪、天神堂五坪、三鬼堂一二坪のほか、一〇坪から二〇坪の参詣者休憩所が三、四か所に分散して建っていた。登道の各所には石造の供養仏が、古色蒼然として多数立ちならんでいる。

山中の寺ゆえ、三滝町その他周辺地区の避難先として指定されていたほどで、市立中学校の理科実験用具や縁故者の重要物品が寺内にたくさん疎開されていた。万一の場合に備え、防空壕を作っているときに被爆した。防火用には、滝の水量が豊富であったからこれを利用することにしていた。

また、市内から檀信徒の矢島(四人)・高(四人)・斉藤(三人)ほか一人が疎開居住していた。

原子爆弾の炸裂のとき、住職は三鬼堂に参堂して勤行をしていたが、爆風により落下した木材で首を負傷した。寺内にいた他の二人の者も負傷した。

諸堂宇は半倒壊し、屋根瓦は吹きとばされ、ガラスは木端微塵に破砕、床板やタタミは跳ねあがり、壁は半分崩れ落ちた。寺は火災から免れたが、山中にあったワラ葺の家が放射熱線により着火、全焼し、山の立木の一部が焼失した。また、山中の各所に火災が起きたが、炸裂の一時間後に大粒の黒い雨が降って来て自然に消火した。

山中の木々には、爆風によって吹きとばされたトタン板や焼けてボロボロになった洋服などが、高いところに引っかかっていた。

建物の中は、足の踏み場もないほど乱れていたが、市中から避難者が押し寄せて来て、諸堂・休憩所すべて身動きができない状態に陥った。

六日七日は、寺で炊出しをし、三日目に、はじめてムスビの配給があった。しかし、真夏の暑さに腐りやすく、また炊き直して避難者にくばった。寺が保有する食糧も衣類もすべて提供したが、あまりにも多数の避難者で、すぐ品切れとなった。

山したの三滝橋付近に臨時救護所が設けられたが、薬品とぼしく赤チンキを塗る程度のことであった。避難者が次々と死亡したので、参道途中の鐘つき堂付近が火葬場となった。

避難者は一週間くらいして、それぞれ縁故者をたより、次第に下山していったが、どこへも行くところのない人も多く、長いあいだ残っていた。

天神堂・三鬼堂・観音堂は、廃材やトタン板を使って被爆一年以内にはほぼ修復し、庫裡は昭和二十六年に新築した。観音本堂は損傷ひどく危険になったため、解体して現在、再建中である。

昭和二十二年、佐藤天俊が戦地から復員し、佐藤要憲のあとを継いで住職となり、現在に至る。

法雲寺

(30) 法雲寺

当時、広島市宇品御幸通三丁目六四番地(現在・宇品町二九七)・爆心地から約三・六キロメートル・住職山本正念。

本堂木造瓦葺七六坪、納骨堂レンガ造二坪半、仮庫裡一五坪の建物があった。

昭和二十年三月、宇品地区を南北に火みちを切るため、疎開命令が出て一三二号の札を貼られ、陸軍運輸部の労務者約一〇人と門徒婦人会一四、五人が、五月中旬から二か月余かかって、本堂と納骨堂を約二〇メートル奥(現在地)へ引き移した。

本尊及び宗祖・七高僧・聖徳太子木像・及び重要書類を安佐郡へ疎開し、大蔵経その他の仏書は、寺内の建物から離れた場所にトタン屋根の小屋を建てて、そこへ移し、火災にかからないようにしていた。

防衛態勢としては、一〇数個のバケツに常時水をたくわえ、七、八個の砂袋、手提げポンプなどを整備し、防空壕は、宇品地区は一メートルも掘れば水が出て掘れないから、酒造りの大樽を矢野町から求めて地下に埋め、材木で蓋をして代用にした。万一の場合には、安佐郡口田村小田の教円寺講師部屋を避難先に決めていた。

六日朝、住職が聞きなれないカランカランと聞える飛行機の音を聞いて、北方を見ているうち、青紫の波のような電光を感じたとき、大音響が起った。

このとき、法雲寺の境内は静寂であったが、筋向いの家一〇戸ばかりは、疎開で引き倒すことになっていたのも、四、五人の者が集りかけていたところであった。

原子爆弾の炸裂直後、強烈な爆風が襲来し、本堂の屋根の棟瓦と共に、南側の瓦が三メートルほどずれ落ち、北側の柱(五寸角)が一本途中で折れ、本堂の建物全体が若干東へ傾斜した。天井板はほとんど吹き飛び、納骨堂の棚から数個の骨が転げ落ち、水屋は転覆した。しかし、火災は発生しなかった。住職は午後二時、燃えさかる広島市内を北

へ進み、安佐郡口田村の教円寺に避難したが、翌七日早朝、被爆死亡者の葬儀をおこなうため、まだ煙り続けている市内を通過して法雲寺に帰着した。同日昼頃、山県郡から来た救援隊の宿舎に指定され、その夜から本堂に四、五日間泊めた。

なお、被爆当日、宇品地区から雑魚場町付近の建物疎開作業に出動していた人々が、多数死亡し、現在、寺に残っている過去帳には、二〇八人が記録されている。

破損した本堂は雨もりがひどく、韓国人の屋根職人二、三人が一週間かかって修理し、また、県庁からガラスの配給を受けて、本堂の障子をととのえることができた。

不動院

(31) 不動院

当時、広島市牛田町七八番地(現在も同じ)、爆心地から約三・九キロメートル、住職関龍暁。

金堂木造こけら葺、山門木造二階建瓦葺、鐘楼木造二階建ワラ葺、不動堂木造瓦葺、庫裡木造平家瓦葺など五棟の建物があった。いずれも国宝で現存する。

市の中心部からかなり離れた山麓に位置し、すでに郊外とも言える環境であったから、重要書類その他の疎開もしなかった。防衛態勢としては、寺院近辺の人々約三〇人による防火隊が組織されていた程度である。

八月五日夜から六日朝にかけても、特に変わったことはなく、住職夫妻と子供一人が住んでいたが、原子爆弾による負傷者も出ず、火災も発生しなかった。

爆風による被害は次のとおりである。

- 一、金堂 大柱四本が折損した程度で、仏像などの被害はなかった。
- 一、鐘楼 ワラ葺屋根のため、雨漏りが激しくなり、白壁がほとんど落ちた。
- 一、不動堂 瓦屋根の破損があった程度で、仏像などの被害はなかった。
- 一、山門 瓦屋根が破損した程度。
- 一、庫裡 瓦屋根・天井・建具などが破損した程度。

被爆後、市中から親類縁故者及び信徒関係の人々をはじめ、一般の罹災者が避難して来て、庫裡・不動堂に充満し、ついに境内にはみ出し、しばらくのあいだ起居していたが、中には、広島陸軍病院関係の軍医なども負傷して避難して来ていた。

被爆後の復旧状況については、次のとおりである。

- 一、金堂 昭和二十五年改修
- 一、鐘楼 昭和三十一年改修
- 一、山門 昭和三十五年改修
- 一、不動堂 被爆後三年めぐらに修理
- 一、庫裡 昭和三十五年四月再建

なお、関住職は昭和三十年一月十二日に死亡し、後任として昭和三十二年一月、脇坂善暁が住職となり、現在に至る。

千暁寺

(32) 千暁寺

当時、広島市宇品海岸二丁目三番地ノ一(現在も同じ)、爆心地から約四・三キロメートル、住職日下教護。

境内地五〇〇坪に、東に面して本堂木造平家一〇〇坪があり、南側に庫裡木造二階建七〇坪があった。その南及び西は建物疎開により空地となっていた。

この寺は宇品港に近く、陸軍船舶司令部の戦死者の遺骨安置所として使用されていたので、常に兵隊が駐屯していた。兵隊は防衛の任にもあたっていた。

防火対策としては、境内の地下に水槽を掘って備えていたが、本尊や重要書類の疎開などは別におこなわなかった。

被爆時、住職は檀家の法事に行っていて無事であり、坊守は裏の空地にいて負傷した。

原子爆弾の炸裂による爆風で、本堂の屋根が浮き上がり、周囲の壁・建具が落ちたり飛散したりした。庫裡も同じような状況で天井が落下した。

被害は全体としては半壊程度で、すぐにバラック式の修理をして、被爆死亡者の葬儀その他寺の活動をおこなった。

七日、他の寺で修業していた長男早善暁(現住職)が帰宅し、寺内に殺到した避難者の救護や、死亡者の供養をおこなった。

第四節 教会…662

流川教会

(33) 日本基督教団広島流川教会

当時、広島市上流川町八番地(現在・上幟町八の三三)、爆心地から約〇・九キロメートル、牧師谷本清。

礼拝堂は鉄筋コンクリート造一〇〇坪・日曜学校は木造二階建二〇〇坪(以上、流川町)、牧師館三〇坪、婦人伝道師住宅二〇坪、婦人会集会所一〇坪、木造平家建(以上、幟町上組一三四)の建物があった。

礼拝堂は日曜日朝と夕方、水曜日夕方の三回以外は集会なく閑静であったが、日曜学校は、階下は陸軍被服廠関係により徴用され、軍服製造の工場となり、小集会室・教室(五部屋)にミシン数十台を置いて軍服を作っていた。また、階上は講堂であり、広島中央放送局の合唱団練習所として使用されていた。これらに使用されている場所に出入りする人数については、教会側は関知するところではなかった。

礼拝堂には、堂守高島能一夫妻が居住しており、牧師館には谷本牧師夫妻と娘計三人、婦人伝道師住宅には独身の草間千世一人が住んでいた。婦人会集会所には居住者がなかった。

教会の重要書類は牧師館の庭に防空壕を掘り、火災にあっても焼けないように大型火鉢などを利用して地下に埋蔵した。ピアノ・オルガン・聖壇用のテーブル・椅子など重要道具(礼拝用聖餐式・洗礼盤)は、牛田町東区多田宅と江淵宅に、更に、牧師館の家具・衣類・書籍などは郊外の緑井中田勘市宅に疎開した。

防火態勢としては、礼拝堂は堂守夫妻が防空・防火の責任者となり、日曜学校は使用する軍隊が担当していた。この二つの建物で囲まれた庭に、二〇人収容の防空壕が作られた。また、牧師館と婦人伝道師住宅の庭にもそれぞれ防空壕を掘り、双方が使用することになっていた。なお、谷本牧師は町内会の防衛部長として、町民の防空・防火指導をおこなった。

鉄筋コンクリート建ての礼拝堂は、上流川町の臨時避難場所として指定され、牧師館や婦人伝道師住宅では、近くの泉邸を避難場所に決めていた。教会員は全市内外に散在していて、それぞれの地域の指示にしたがって避難することになっていた。

五日の夜、警戒警報発令と共に、谷本牧師は妻子を牛田町の多田宅に避難させ、自分は町内の防衛指導にあたった。

六日夜半の空襲警報発令に応じて町内巡視をおこない、一晩中警戒にあたった。

六日午前七時過ぎの警報解除で、高島夫妻が守っていた教会も、日常の生活に立ちもどった。礼拝堂は人の気配もなかったが、日曜学校校舎ではすでに軍服工場の作業が始っていた。牧師館の谷本牧師は急ぎ朝食をすますと、家具の疎開を手伝うため、町内会副会長(松尾馨蔵)と荷車を曳いて、己斐町の佐藤宅に行った。その目的地に到着した瞬間に被爆した。

牛田町に避難していた妻谷本チサと幼女紘子は、牧師館に帰って来てから、隣家の高木敏子と玄関で用談した直後に被爆した。

焼夷弾や普通爆弾に対する防衛態勢ではひとたまりもなく、礼拝堂は全焼し、鉄筋コンクリートの壁だけが辛うじて残った。

日曜学校は全壊全焼、牧師館も婦人伝道師館も全壊全焼したほか、防空壕も役にたたず、収納していた重要書類も全焼した。

礼拝堂には人はいなかったが、堂守部屋にいた若夫婦二人は倒壊建物の下敷きになり、辛うじて脱出した。牧師館の牧師夫人と幼女も、草間伝道師も家の下敷きになったが、脱出することができた。

軍服工場の状況は不明であるが、相当の被害であったことは察せられる。

ともかく、居住者が生理め状態の中から脱出したときには、すでに火がつき燃えはじめていた。放射熱線による自然着火ではなく、周囲からの延焼と思われた。

教会員四〇〇人は、軍に徴用される人、老人の疎開などで、被爆前すでに人数が半減していたが、このうち七五人

はそれぞれの職場や居住地で死亡した。他はことごとく傷つき、郷里に帰る者、県外に移住する者など多数あり、終戦後、会員は広島市の近郊に住む者三五人ばかりしかいなかった。

谷本牧師は、己斐町で被爆してからただちに己斐街道を東へむかって進み、大混乱の市内に進入した。全裸で火傷裂傷を受けた避難者の行列を掻きわけるようにして、己斐から第一の橋と第二の橋を渡ったが、それ以上前進は不可能であった。全市は崩壊し、各所から火が噴き出していた。二番目の川土手を伝い、上流へ上流へと出て、横川駅構内にたどりついた。そこから大芝公園に到り、太田川に飛びこんだ。川を泳いで渡り対岸牛田町につき、そこから南下して饒津神社前を通り、町内会の指定避難場所である泉邸に入った。

幟町一帯は猛烈な火炎に包まれていて近寄ることができず、牧師館やその他の住宅の様子は見ることもできなかった。ましてや更に市中心部の教会へ行くことなどは不可能であった。泉邸は幟町や流川町の町民はもちろん、他町の人々が立錫の余地もないほど逃げこんで来ており、まったくの修羅場と化していたが、谷本牧師はその中を歩きまわり、幟町上組の人々を泉邸内のもっとも奥まった川べりの一定場所に集合させた。防衛部長としての責任感から、ここで町内の人々を守り抜こうとしたが、午後三時と思われるころ、泉邸内の森林に火炎が移り、木や竹のはじけ裂ける音、ゴウゴウと燃えあがる凄まじい音がおそって来た。邸内に逃げこんでいた避難着たちが、この猛火に追われて、ドッと奥(川べり)へ押し寄せて来た。そのためそれまで川べりにいた人々は、押されて川の中に転落し、そのまま溺れて死ぬる人もたくさんあった。

川べりには、以前から緊急避難用のテンマ船が繫留してあったから、谷本牧師はその竹竿を持ち、何度も対岸(大須賀町)の砂地に人々を運び、安全と思われる牛田町方面へ避難するよう指示した。こうして夕方を迎えたが、邸内にはなおたくさんの避難者がうずくまり、よこたわって呻吟していたから、これらの人々の食事を考えねばならなかった。ようやく鎮火した町内へ出て行き、余熱のこもる防空壕をあさって、焼残りの備蓄米を持ち帰り、川土手で炊き、にぎりめしを配って歩いた。まだ余力のある避難者がこれを手伝った。

谷本牧師は被爆当日は泉邸内ですごし、翌朝はじめて教会の焼跡に行った。礼拝堂は無人であったから探す必要もなかったが、堂守の高畠夫妻の姿は見えなかった。また日曜学校の工場の人々についてはどうなったか判らなかった。しかし、大きな被害であったに違いない。

八日から、焼野原となった市中をここかしこ歩いて、信徒の消息を集めたが、泉邸の土手で野宿して以来、血便が続いていたうえ、炎天下の焼野原を歩きまわったため、数日後ついに動けなくなった。

そのうち妻子が、無事に牛田町に避難していることが判り、大破状態の家屋を借りて住むことにした。十日間四〇度の発熱が続き、回復しはじめてからも二か月間病床に伏した。

牛田国民学校裏の佐藤家が、被爆後、香川県坂出市に帰郷したので、谷本牧師一家はそのあとを借り受け、住宅兼仮集会所としたが、教会員はほとんど被爆負傷者であって、集会を開くことができなかった、また、婦人伝道師草間千世は、広島には医師もおらず、負傷の治療もできず、宗教活動もできないため、郷里栃木県へ帰っていった。

被爆の年の十二月二十五日夜、クリスマス祝会を数人の信徒と共に、大破したままの家で催したが、終生忘れられないほどの感銘深いクリスマスであった。

教会の建物は、全部火災保険(十五万円)をつけていたが、金融凍結で使用できず、教会員も献金能力を失っていたから、広島駅頭に出て街頭伝道を開始した。しかし、それは風に向って種を蒔くようなものであった。教会堂は是非とも復興しなければならず、翌二十一年三月から、もとの焼跡に少人数の集会を移して礼拝を守り、その間、教会の再建に取りかかった。一つは、教会堂焼跡でバザーを開いた。もちろん教会員が品物を出せるわけではないので、闇市の商人の委託販売である。二つは、旧陸海軍の建物などの転用を受けて建築資材を確保すること。以上の二つに全力を集中してようやく成果があり、いち早く教会堂の屋根を葺くことができ、荒涼たる焼野原の中での、一偉観となった。以後、谷本牧師はアメリカに渡って、各地の教会や大学などで広島教会復興の運動を精力的に推進し、昭和二十三年(一九四八)から昭和二十五年にわたり、数度の工事をおこなって、ついに復旧完成を見るに至った。

なお、復興状況は次のとおりである。

一、昭和二十一年秋、礼拝堂の焼壁を利用して、その上に屋根を作った。

二、昭和二十二年、礼拝堂の窓・床を作る。その隣りに教育館(木造二階建二〇〇坪)を建てた。アメリカ募金を目当てにして借金。

三、昭和二十三年～二十五年、アメリカ募金で借金返済、土地を購入して敷地を増加した。その間、英語学級(約一、〇〇〇人二部制)・幼稚園(二〇〇人)を開設、教師(各一〇人)は教会員の奉仕により、当初は幟町小学校の校舎を借り、

教会の建物ができるようにしたがって、自前経営とし、この益金で教会堂の整備充実を進めた。

天主公教会

(34) 幟町天主公教会(現在・世界平和記念聖堂)

当時、広島市幟町一四九番地(現在・幟町四ノ三九)・爆心地から約一・二キロメートル・司祭フーゴ・ラ・サール(帰化名・愛宮真備)。

建物は、すべて木造で聖堂八〇坪・司祭館約五〇坪・伝道師宅及び家政婦宅約二〇坪があり、被爆時には、ラ・サール神父ほか神学生その他八人が居住していた。

防空対策としては、庭に防空壕を一か所掘り、その他防火用水槽を設置し、バケツを備えていた。また、ピアノ一台を郊外へ疎開していた。万一の災害時には、栄橋を経て東練兵場へ避難することになっていた。

八月六日の朝、ミサのあと、ラ・サール神父は食事をすませて、司祭館にいたときに被爆した。

ほとんどの建物は倒壊したが、司祭館だけは壁・瓦・窓ガラスなど破壊されただけで倒壊せず、ラ・サール神父をはじめ神学生は負傷しながらも、すぐ外に出ることができた。星島伝道師の家族は、倒壊建物の下敷きになったが、クラインゾルゲ神父が救出した。しかし、その後混乱にまぎれて行方不明となった。神父・神学生は、栄橋まで避難して行ったが、東練兵場に行かず、安佐郡長束の修練院に避難した。深井秘書は、栄橋から再び町なかに引き返した後、火炎に包囲されたのであろうか、そのまま行方不明となった。

教会は、他からの延焼により完全に焼失し、二十年十二月、長束修練院から資材を運んでバラック小屋を建てるまで、祭事ができなかったが、この月神父二人で再開した。二十一年三月、住宅営団から三棟分の資材を得て、十二月に司祭館を建設した。

私の、見たもの(原文英語、小倉馨訳)

司祭 フーゴ・ラッサール(帰化名・愛宮真備)

日本での最初の空襲は、昭和十九年十一月、東京を襲ったものである。神田周辺が、大半燃えた。そして、ほぼ八、〇〇〇人が死んだ。以来、首都めがけての空襲は、頻々と続いた。大阪・名古屋、その他の大都市も攻撃を受け、大損害を蒙った。同時に九州もいたるところ爆撃された。

広島でも、いずれ順が来ると考えていた。実際、昭和二十年三月十九日には約一三〇機が、広島上空に現われたが、二、三発落としたのと、機銃掃射を少し受けただけで、別に何も起こらなかった。損害も無かった。

数日後、神戸の住宅地区が爆撃されて、市街の大半が焼け、逃げおくれた者が、何千と炎の中で命を失った。広島でも、何度か警戒警報が発令された。時には何百という飛行機の編隊が、市近辺を通過するのを見たが、広島市は素通りで、わずかに一度四、五発爆弾を落とし、二、三人死んだ。人々はだんだんと、何故広島が爆撃されないのか不思議に思いはじめた。いろんな噂が流れた。敵機の落とした宣伝ビラによると、広島は洪水で破壊されるのだという。その洪水も、山の中の水源池の土手をこわして、大洪水を引起すのだという。わずか二年前、この種の洪水が、豪雨のために起って、広島地方の多くの人を殺し、大損害を与えている。中には、もし洪水となれば、全市是水浸しになって、二、三の建物が残し、人間の大半は海に流されて死ぬるものと信じていた。これは、勿論誇大な言い方ではある。中には、多くの者がスパイとして、敵陣に奉仕してきているから、広島は決して爆撃されることはない考える人もいた。

こういう噂は、私たち外国人にとっては危険であった。あるとき、私たちと親しくしていた人が、もしそのような空襲で広島が破壊されたならば、教会にとっては、噂を消す意味において、かえっていいと言った。また、他の説明では、敵側で、広島・京都など二、三の大都市に手をつけない理由は、日本に上陸した場合に必要なからとも言っていた。また、ある楽観論者などによると、広島には爆撃しても、それほど価値のあるものがないからと言う者もあった。

これらの噂も七月二十九日に岡山市が爆撃されてからは立ち消えた。岡山は広島の東約一六〇キロメートルの所にある。しかし、その注目すべき点は、地理的に近いというより、不意を衝かれたということである。真夜中の出来事で、警戒のサイレンも鳴らず、起きてみれば、岡山市はすでに燃えていた。九五パーセントの家屋を焼失したが、幸いに人的損失は少なかった。人々は、いよいよ広島の順番が近づいたと感じ、不意を衝かれないよう、ほとんどの人々が毎夜市中を離れ、市外の何処かの寺院とか野天で夜を過した。そして、夜が明けてから自分の家に帰っていった。

ほとんどの人が火災とたたかうことに望みを失っていた。が、二、三週間経過しても、警報こそたびたび出たが、広島島の爆撃は無かった。だんだんと人々は自信を回復しはじめ、毎夜毎夜うろついて、外で夜を過ごすことに疲れてきて、再び自分の家で夜を過ごすようになった。家はやはり火災の場合守らなければならぬと考えたのである。

実際、ずっと前から(戦争開始時から)、日本人は消火訓練を繰り返してきた。焼夷弾が落ちた時は、どうすれば良いかということをほとんどの人が知っていた。訓練の警報は日夜鳴らされた。小学校の生徒を疎開させ、何千もの家屋が、防火・防空用地を確保するために取り壊された。水槽も用意された。また、川が市内に七本も流れているので、緊急の場合には、そこに逃げようと、何らかの望みももっていた。

あの近づく最後の日々、その週のころは、警報がほとんど毎晩発せられた。ラジオは敵機の行動ニュースを放送していた。しばしば大編隊が広島湾沖に集結したと聴かされた。そのたびに今度ははいよいよ市の攻撃がはじまると思ったが、また何回も何回も何処か他の方に向うのであった。

いうまでもなく、これはみな人の神経をひどく疲れさせ、市民も、いつそのこと爆撃されて、すべてが済んでしまえばいいとすら考えた。これが八月初めの状況であった。

そして、八月六日がやって来た。美しい朝であった。空には一点の雲もない。七時九分に警報が鳴った。二、三機市の上空に現われた。私を含めて市民の多くはいっこうに構わなかった。こんなことは今まで何度となくあった。半時間後、警報解除となった。

その間、私は自室に入り、日常の仕事に取りかかった。八時少し過ぎ、またプロペラの音が聴えてきたけれども、警報は鳴らなかった。私は飛行機の様子が見たくて、階下に降りて外へ出ようと思い、立ちあがった。机の傍に立って、部屋を出ようとした瞬間は、ちょうど八時十五分であった。

この瞬間、まったく突如、不思議な光りが家の内と外で光った。それは稲妻にもたとえられるが、実はまったく同じものではない。私も稲光りとは思わなかった。しかも、その朝は雷の来るような大気現象でもなかった。

私には一体何だろうと、瞬間的に自問するだけの時間があつた。一秒ぐらいのものであった。

次の瞬間は、説明するのがむづかしい。

建物全体が、大音響と共に崩壊してゆくようであった。たちまち部屋は真暗になった。光線は音波よりも速く、爆発音の聞える以前に、すでにその効果は届いていたのである。暗闇は決して光線のために眼がくらんだのではなく、周囲に落下してきたものの埃のために、視野が遮られたか、あるいは爆発の煙のためかとも考えられる。窓・ガラス・柱・壁・天井・家具など、それこそ建物の骨格以外のすべてが、衝撃で壊れ、大半が崩壊した。何だか、あらゆるものが起爆力を持ったようであった。後に判ったことであるが、錠のかかっていたトランクも、爆風圧のために弾き開かれ、錠は潰され、中のものは一部吹きとんでいた。ガラスも粉々に割れて飛散し、トランクや物入れの箱の下にまでくい込んでいた。私のポケットの中からも、ガラスの破片が見つかった。

しかし、私は失神もせず、倒れもしなかった。戸の方を目ざして飛び出した。部屋を走り出る間にも、ものの破片が降ってきた。炎暑の最中、私はしのぎよいように、シャツとズボンしかはいていなくて、傷や打ち身だらけになった。ともかく外に出るまでのあいだ、今にも家が倒壊するのではないかと、不安にかられた。幸い、私の住んでいた司祭館は、木造ながらも非常に頑丈な枠組みであった。材木は、何百という頑丈なボルトでつながれていたから、骨組みがバラバラにならなかった。耐震用に造られていたから、下敷きになることもなく、どうにか階段を降りて、外に飛び出すことができたのである。私は生命は助かったが、全身血まみれの負傷をしていた。周囲を見ましたが、なお薄暗くて、何一つ見えない。チャペルも見えない。しばらくして塵埃がおさまリ、明るさを取りもどしてみると、チャペルは完全に地上に叩きつけられていた。この建物は、付近の民家と同様の建て方であったから、ひとたまりも無く倒壊したのであろう。それにしても、その中に住んでいた三人の神父は、どうなったのであろうか。死んだか！と、頭をかすめる。外に出たのは私が最初であったから…。ややして、神父の一人が、血まみれの顔をして出て来た。そして次、そして最後の一人が出て来たが、最後の神父がもっとも重傷であった。這い出ることはできたが、出血激しく顔面蒼白、まったく死人の顔である。

このとき、私は、「運が悪かった！最初の爆弾が家の近くに落ちたのだ。」と考えた。そして、防空計画でかねてから定められた所へ急いで救護を受けに行こうと思い、道路に出てみると、いずこも同じように倒壊していた。壊れた家屋の破片が、道路の上に散乱し、歩くことさえ困難なほどで、救護所に行けるような状況ではなかった。

火の手が、あちらこちらに上っていたが、まだ私たちの所までには達していなかった。

私は裏庭に出てみた。すると、学生に声をかけられた。幼稚園の保母二人が、建物の下敷きになっているという。

すぐ救出作業にかかった。二人は生きていたが、動くことができないで、救出は困難をきわめたが、相当の時間をかけて、ようやく引っぱり出すことができた。そのとき、他にも二人、伝道にたずさわっている人を救出した。

そこで、引続き、火のついた幼稚園の消火にあたろうとしたが、消防ポンプも無く、火は急速に拡がり、不可能な状態であった。

私は、二階の自室に駆けあがった。何も取り出さずに飛び出していたからである。しかし、その室内を見て驚いた。壁に面していた大机は、前向きになって倒れており、机の上にあった本棚の姿が見えない。扉は蝶つがいの所から引き千切られている。

私は左脚に大きな裂傷を受けており、塞がった入口を這いあがることができない。周囲を見廻わしたが、何一つとして助かっている物が無い。過去何週間か、毎夜、万一に備えて小さな小包に必要なものを入れて用意しておいたのに、それも無い。何一つとして残っていない。

ふと、助けてくれという声がした。神父の一人が、下敷きになった近所の婦人を救出するのに、手助けを求めたのである。この婦人も救出して、また、建物の方へ帰った。

この間に、みんな一応この場を離れ、神父の一人と、クラインゾルゲ神父と、司祭館の秘書である六〇歳の日本人の方(深井)と、私が居残ることにした。

火災は刻々と迫って来て、立ち去らねばならなかった。が、私は今一度、部屋に帰ってみた。何も持って出るものがないとは、信じられなかった。しかし、やはりムダであった。

引返して私は、階下にあった半壊のトランクを二つ三つ取り出して、防空壕の中に投げこみ、ありあわせの物で壕の入口を閉めた。

これが、襲い来る猛火の中での、精一ぱいの行動であった。

こうして、私たち三人の神父は、そこを立ち去ったが、老人の秘書は、負傷しているにもかかわらず、私たちと一緒に行くことを拒否した。地面に坐りこんで、行きたくないと言った。私たちは無理に外の道路に連れ出して歩きはじめた。そのとき、向うから子供を背負った婦人が寄って来て、夫を助けて欲しいと懇願した。秘書は、自分の事をかまわずにその婦人を助けてあげてくれと言った。しかし、婦人の家が何処かわからないうえ、大火の中では不可能なことであった。私たちは婦人に、一緒に逃げましょうとすすめたが、婦人はきかず、荒れ狂う火炎の中へ向って入っていった。

火炎は、すっかり私たちの四方を取り巻いた。脱出口を探したが、時すでに遅く、逃げようがなかった。ただ一つ、川沿いの道(上柳町側)を他の人々が逃げていたので、それらと一緒に公園(縮景園)に向った。勿論、ここですら安全というわけではなく、園内の樹木に火が燃え移るようになったら、公園の裏の川に飛びこもうと考えた。

ここに入る前に、私たちは老秘書を置いて行くことになった。彼は私たちと一緒に行くことを頑として拒んだ。言葉や力づくで連れて行けるようなものではなかった。

後日、聞いた話であるが、秘書が二、三日前に洩らした言葉で、「日本帝国が亡びる姿を見るよりは、広島爆撃で死んだ方がましだ。」と、語っていたそうである。また、これも聞いた話であるが、彼はその前日、郊外の親戚を訪れ、その晩泊のように言われたのを、断って市内に帰り、被爆したのである。

私たちは多数の避難者と一緒に、園内に入った。そこには、教会でいつも会っているような人もいた。前に述べた重傷の神父も来ていた。まだ出血が続いていて、止まりそうもなかった。今日のうちに死ぬるのではないかと心配した。園内のもっとも奥の、河岸に坐って、川向うの町(大須賀町付近)が、盛んに炎上しているのを眺めた。それは凄惨な火炎であった。幸いに風はこちらに向って吹いて来なかった。もし吹いていたら樹々は大火災となったであろう。実際には少し燃え移ったが、避難者が小さいうちに消しとめた。

その時、雨が降りはじめた。同時に颱風が私たちの方に向かって吹きはじめた。五〇メートル先の樹々の折れるのが見えた。枝々は千切れて川の中に飛ばされた。川岸に避難している人まで、風の力に耐え切れず、川の中に吹き飛ばされた。私たちのいた所から、さほど遠くない所では、病院全体が川の中にほうり込まれた。非常に危険が迫っていたが、幸いに颱風は他の方向に移動した。もし舟がたくさんあったら、難をのがれることのできた人があったかも知れない。舟は一隻しかなかった。それを見つけた人(流川教会谷本牧師)は、精一ぱいできるだけの人を乗せて対岸へ、何度も繰り返し運んだ。が、大半の人は、私らを含めて火災が自然に終るのを待つほかなかった。

午後四時ごろ、火災はほとんど下火となった。私たちは教会がどうなったか、帰ってみることにした。帰る途中、余燼なお熱く、一か所に二分以上は立って居れなかった。防火水槽で衣服を濡らし、焼けないようにしながら行った

が、教会は完全に灰燼に帰していた。作っていた野菜は、地面の上できれいに煮えて料理のようにでき上っていたので、夕食がわりにそれを食べた。

私は脚の負傷のため、もう歩くことができなかった。そこでグループの三人が、三マイル離れた市外(安佐郡長束)のジュズイト修練道場に住んでいる友人を呼びに出かけた。そこにはほとんどが外人で、一〇人ばかり屈強な先生が揃っていた。

夜八時ごろ、彼らは軽食をもってやって来た。速やかに二つの担架が造られた。

そのうち日本人たちは、ご飯を炊いたが、それは、逃げるとき持って出たものであった。私たちは、皆一家族のような気がした。グループのなかに行きわたった非常に温い思いやりがあった。

何時のまにか集った人々は、何人いたかは知らないが、六、七〇人くらい居たのであろう。このうち二〇人以上は重傷で、ほとんど動くことができない。これらの人の多くは二四時間以内に死んだ。

人々は、知人の話や助けることのできなかった人たちのことについて語りあった。一人の婦人は、倒壊物の下敷きになった夫の話をした。彼女はのし掛かった大きな木材を持ち上げることができず、生きたままの夫を、火炎のまっただ中に置いて、立ち去らねばならなかった。しかし、誰一人として不平の言葉を洩らす者はいなかった。

時は戦争中であつた。国のためには、あらゆる艱難に堪える覚悟があつた。後に聞いたことであるが、ある婦人が愚痴をこぼしはじめたら、他の者たちがそれを制したという。

日本人は不運に直面したとき、それを耐え忍ぶことに雄々しさを感じる国民である。

今一人の神父と私の二人がもっとも重傷であつたから、舟に助け入れられ、次の橋(常葉橋)の所まで行った。この橋の近くで川が大きく曲っていた。遠くからそちらを見ると、たくさんの人がいて、皆火事の鎮まるのを待っているように思われた。近づくにつれ、私たちの方に向って助けを求めて叫んだ。あまりにもひどい傷を負っているため、そこから動かせない人ばかりであつた。しかし、私たちは何もしてあげることができず、そのまま舟を進めていった。

午後二時ごろであつたか、長束の修練道場に到着し、院長のアルペ神父に傷の手当を受けた。アルペ神父は、僧職につく以前に医学の勉強をしていたのが役立った。しかし、負傷者は私たち二人だけではなく、神父や修業僧に助けられた者とか、自力でたどりついた者など、総数八〇人以上の負傷者が収容されていた。

この修練道場と礼拝堂は、共に爆心地から四マイルほど離れているが、ひどく損害を受け、広島市の中心に向っている側の窓は全部壊れた。ガラスだけでなく、木製の窓枠も壊れた。礼拝堂の外壁の三本の柱が折れ、内部の扉もほとんど潰れ、天井はわん曲して形を変えた。ガラスの破片が到る所に飛散しており、天井のタイルは爆風圧のために吹き飛ばされていた。ここが、そのまま病院として変つたのである。

市内で社会福祉事業に従事していた修道尼は、その居宅を焼失し、ここに避難して来たが、その日から収容負傷者の看護に力をつくした。私はここで、これら院長・先生・修道尼たちが、近所の貧しい人々、別に信者でもない人々のために、懸命に救助の仕事をしたことを詳細に述べることはしない。ただ、言えることは、これらの多くの人々が、キリスト教が何であるかについて、眼を開いたということである。

翌日、私たちは、たった一発の原子爆弾が、あれだけの惨禍を招いたということを知った。二、三日後に聞いたことであるが、憲兵隊が言うのでは、多分二〇万人から二五万人の生命を奪ったと推測したという。

戦争はまだ続いていた。毎夜、そして時には、同じ晩に何度も、警戒警報が鳴らされ、そのつど窓の破れた家は、すべて灯を消した。負傷者はすべて防空壕に運ばれねばならなかったが、私は部屋から動かなかった。が、爆弾が落ちれば、すぐ窓から飛び出せるように用意していた。勿論、死ぬる覚悟もできていた。

長崎に原子爆弾が落とされたこと、他の都市が焼夷弾攻撃を受けたことが報道されたが、原子爆弾被爆の結果、戦争は終結すべきだという声は、一つも聞かなかった。それがたとえ如何なる条件であっても、私の判断するところ、日本人はまだ最後まで闘う決心をしていて、日本が降伏することはないとかたく信じていた。八月十五日、天皇陛下が全国民にラジオを通じて話をすると思えられた。このような事は、いまだかつて一度もなかったことである。中には、これで戦争も終結するのではないかと考える者もいた。歩ける者は、ラジオのある部屋に、メッセージが何であろうかと聞きに行った。

日本が敵国に降伏したと発表されたとき、中には泣く者がいた。原子爆弾のあの恐ろしい威力を見た者が、戦争の終わったのを悲しむとは、まったく驚かざるを得なかった。

彼らの祖国が、天皇を中心にして過去から現在まで、榮譽に満ちていたことが、日本人の心の中に壮大な建造物として聳えていたのである。勿論、彼らとしても、原子爆弾が使用される以前から、戦争の局面が危機に瀕しているこ

と、そして、戦争に勝つ望みは、も早少なくなったこと、また、たとえ平和条約が結ばれるとしても、日本の条件は、戦争開始のときと比較して、程遠いものであることは判っていた。が、この降伏は、今一つの原子爆弾が落ちたようなもので、古い日本の壮大な建物が、まさしく地に叩きつけられたようなものであった。それは、広島原子爆弾よりも強烈なものであった。原子爆弾の悲惨さに、涙もこぼさなかった人たちでさえ、降伏が発表された時には泣いた。

私の知っている一人の若いキリスト教徒の婦人が、友だちのキリスト教徒でない者と一緒に、祖国の名誉のために、自殺しようと考えていた。キリスト教徒の彼女は、神父の一人に、どうするべきかを尋ねた。神父は、「天皇陛下が降伏を決断されたご意志は、国民の生命を救うためにあったのであって、決して自殺して欲しいためのものではなかった。」と、彼女に答えた。それでその事はケリがついた。

この降伏が、日本人にとって、どういう意味であったかは、戦時中、彼らと生活を共にした者でないと、理解できないであろう。

陸海軍共に、降伏は毛頭考えていなかったから、素直に陸海軍が、天皇の言葉に服従したとは、信じられないことであつた。国民すべてが天皇の命に従うように教育されていた。天皇以外の権威である全智全能の神とか、法皇のようなものを認めた上で、天皇というものに、何故、何ら抵抗なく従うことができるのであろうか？

すべての試練を、カトリックの神父は経験しなければならないが、多く発せられる質問は、「あなたの信じる神は、天皇より優位なるものなのか？」である。また、時々キリスト教徒は、次の質問を受ける。「もし法皇が政敵となった場合、カトリック教徒はどうするか？天皇に向かって戦うのか？」これは、私たちににとって難問ではあつた。

八月十五日、日本国民が天皇の命に従わなければならなかったことは、神の恵みであつた。何故なら、天皇自身にとっても、また自分の親愛な国民のためにも、降伏声明は、英雄的な自己犠牲であつた。天皇は、国家を完全な崩壊から救ったのである。

(註)

このフーゴ・ラッサール神父の手記は、「広島で被爆－爆心地から六〇〇ヤード離れた所で、自ら視ての証言－」の中の一部である。即ち、目次…一、原子爆弾・1、私の見たもの、2、私の聞いたこと、3、私の考えたこと、の中の最初の一節全文である。()内は、編者註記

広島教会

(35)日本基督教団広島教会

当時、広島市国泰寺町四八番地(現在・大手町一丁目四ノ一)・爆心地から約一・四キロメートル・牧師四竈一郎。

教会堂は木造モルタル塗り二階建六八坪、牧師館は木造平家建二五・五坪の建物があった。なお、この教会は明治十六年十一月二十八日に創立(牧師・中島留吉)された広島最初の教会である。

教会堂は、昭和十八年一月から町内会の総会や常会などに随時使用されていたが、二十年四月二十九日から、広島市警防団本部に指定され、常時一二人～一五人くらい団員が詰めており、自動車ポンプ四台が設置されていた。

教会の集会は、特に聖日礼拝及び祈祷会は原子爆弾の炸裂に遭う前日の日曜日まで、ずっと牧師館の座敷において守り続けられた。

教会堂が警防団本部になったため、防衛措置は充分で、焼夷弾攻撃には全建物を焼失から守るという約束があり、会党内の一切の物資はなんら疎開を要しなかった。従って夢想だにしなかった原子爆弾によって、すべて烏有に帰した。

四竈牧師は、戦時中の奉公として、みずから望み広島県盲学校(尾長町)の教師となり、昭和十九年九月から勤務し、日曜日だけ教会の任務についていた。

万一の場合の避難場所は、己斐(西方)を経て佐伯郡観音村(宮島沿線)へ避難するよう町内会で指定されていた。

四竈牧師と妻子(妻わくり・長男揚、修道中学校二年・長女佑子、広島女学院四年)四人は、五日(日曜日)夜からの警報続出で防空着のまま、牧師館の縁側で仮眠をとり一夜を明かした。この頃、県盲学校は双三郡塩町の双三実業学校に疎開しており、そのあとに宇品から広島通信講習所が移っていたが、四竈牧師は毎週月曜日午前八時半から二時間精神講和をすることになっていた。六日朝七時半に牧師館を出て尾長町に行き、原子爆弾の炸裂時には、盲学校の職員室にいた。夫人は牧師館で被爆したが、玄関にいたため頭部を負傷しただけで脱出し、吉島町の蓮池付近に避難した。長女は上流川町の広島女学院で被爆し、三か所負傷したが、矢賀国民学校の臨時救護所に辿りつき、そこで応急手当を受けた。長男は市役所隣の公会堂が解体されたあとの片づけに出動中、南千田町の修道中学校に連絡

に派遣されて被爆、校舎倒壊と共に頭部に深い傷を受けた。

教会堂も牧師館も、強烈な爆風によって倒壊した、教会堂の隣りの広島県農業信用組合連合会の二階建家屋が発火し、みるみるうちに延焼、その日午後二時ごろまで燃えつづけてようやく自然鎮火した。

教会堂に詰めていた警防団木部職員は、倒壊家屋の下敷きとなって八人即死、四人が負傷した。一瞬の出来事で消火にあたり得る者が誰もなく、消防自動車四台も焼失した。

四竈牧師は、教会の様子を見るため尾長町片河の県盲学校から、避難者で大混乱の愛宕町を通り、猿猴橋に出たが、橋のたもとに警官が二人立っていて入市することを禁じていた。また、市内も炎上中で、このままで入って行けなく思われたから、猿猴川に降りて川水に上衣を浸し、頭からそれをかぶって電車比治山線沿いに南下し、比治山橋東詰めにとどりついた。橋の付近は、三〇〇～四〇〇人の死者や負傷者がたむろしていて、橋も渡れそうになかったから、引き返して比治山公園の共同墓地に登って行った。そこから市中を見渡したが黒煙もうもうとして遠くは見えなかった。これが午前十一時過ぎごろであつたろうか。周囲には兵隊や一般市民が多数逃げて来っていて、惨禍の激甚さをますます感じ、ほぼ一時間ばかり呆としてなすところなかった。再び比治山橋へ行くと消防車と軍のトラック二台が橋を渡って入ったので“これなら行ける”と、死者や負傷者の間にできていた通路を渡っていった。倒れた電柱や電線その他の飛散物を踏みこえて、昭和町一宝町一富士見町と前進した。広島文理科大学や県教育会館が猛炎を高く噴きあげて燃えている最中であつた。

鷹野橋に到着したのは午後二時ごろであつたが、電車交叉点の前の防空壕から出て来た二人の警官に出あつた。警官二人は、外廻りして被爆したと語ったが、その一人は肩のところから右腕が千切れていた。この二人から、四竈牧師は、教会堂焼滅炎上の模様を聞くことができた。家族の様子は判らなかつたが、どうすることもできないので、いったん尾長の盲学校へ引きかえした。

七日午後一時半ごろ、再び教会堂の焼跡へ行ってみると、ボツンと立っている教会の石門に、焼け墨で「母無事、吉島蓮池にいる」と書いてあり、その下に「揚無事、大河にいる」と書いてあつた。四竈牧師は、更にその下に「父無事、盲学校にいる」と続けて書いて、尾長へ引きあげた。その夕方六時ごろ、石門の連絡書きを読んだ長男揚がスコップをかついで盲学校へ来たので、二人で早速、吉島へ向い、午後七時過ぎごろようやく家族三人が出あつた。しかし、長女佑子の行方は、なお判らなかつた。

修道中学校で被爆した長男は、六日夜は大河に避難して、大破した民家に泊めてもらい、七日朝、教会堂跡に行ったのであつた。とにかく三人は、当分、盲学校の半壊の寮に泊り、長女を探すことにした。そして五日めの朝、四竈牧師が広島女学院の焼跡に行くと、石の門柱に貼紙してあり、長女は負傷したが生存していることがわかり、考えたすえ、やっと矢賀町の知人宅に避難していることを突きとめた。八月十日の朝、家族四人そろつたので芸備線に乗って双三郡和田村向江田の知人の家に、更に避難したが、九月四日、長女は家人に見守られながら、ついに神に召された。

教会員は、被爆時には市内に四五人くらい疎開もせずに踏みとどまっていたが、このうち死亡した者二四人、負傷者一八人を出し、教会の活動も一時停止のやむなきに至つた。九月初めごろ、四竈牧師は双三郡和田村の避難先から広島に出向いて、教会員の仮宅を訪ね、被爆死亡した教会員の霊を慰める初めての記念会を催した。

翌二十一年五月、佐伯郡五日市町楽々園に住む教会員玉垣宅で、日曜日の聖日礼拝を守って、ここによりやく教会の行事を回復することができた。しかし、集つた教会員はわずかに七人に過ぎなかつた。

昭和二十三年(一九四八)八月、旧教会堂敷地の鷹野橋(国泰寺町六八)に、教団本部を通じてアメリカ進駐軍のジュラルミン組立家屋(一〇万円)を入手して、仮教会堂を建設し、聖日礼拝を守つた。このとき、県盲学校を辞任し、家族も仮教会堂に移住したから、教会の復興再建に専念することができるようになった。同年八月六日の被爆死亡者の追悼集会には、遠近より旧新の教会員が相集つて五六人に及んだ。その後、教勢が発展し、毎日曜日の礼拝出席者が常時一〇〇人を越えるようになったので、仮教会堂の狭隘を感じずようになり、大手町五丁目一六―二三に新敷地を求め、ここに本建築の教会堂を再建した。

第一節 序説…682

緊密な連繫

戦争の苛烈化にともない、広島市と県下各市町村との関係は、急速に緊密化し、広島市を取りかこむ安芸・安佐・佐伯三郡下の各町村は、特に広島市の防衛計画上に重要な役割をはたした。

食糧の増産

まず、各町村とも戦時下の重要な食糧生産地であり、軍隊および軍需工場の多い広島市への供給源として寸暇もない増産活動が続ける一方、農村にあつては、木材の伐採・供出、松根油の採取・製造など、漁村にあつては、魚貝類は勿論、塩の大増産運動などを強く要請され、それぞれ戦力増強の大きな基盤となった。

しかし、農村も漁村も青年がほとんど出征して、労働力がいちじるしく低減していたため、当局が必要とする増産目標達成のためには、なみなみならぬ努力と創意工夫が必要であった。

疎開受入れ

このような県下各市町村を背景にして、他都市に比類なしと言われた広島市の防衛計画が立てられ、常に機能的な組織的連繫が取られていたのである。広島県下のこれら市町村は、焼夷弾攻撃による火災の延焼防止と避難空地を作るための、建物強制疎開による立退者の受入れをはじめ、災害回避のための人員・物資の両疎開先となった。すなわち、軍関係では聯隊区司令部や陸軍病院・被服廠・糧秣廠・兵器補給廠などが安佐郡可部町はじめ県下の各市町村へ分散疎開を実施し、官公庁も主体はその性格上郊外への疎開はできなかったが、用紙など文具類や帳簿などを疎開し、一般市民も、留守番一人を残して家族や物資の疎開を行なった者が多かった。市民の任意疎開は、戦争末期になると、市内の防空要員確保のため禁止となったが、それでも空襲の多い夜間だけ郊外へ行って泊り、翌朝帰って来る者も多数という状況で、昭和十七年に約四二万であった人口が、昭和二十年六月調査では半分に近い約二四万人という人口の激減をまねいた。

防空計画に基づき、市内各町内会は万一の災害の場合の緊急避難先として、近郊各町村を前もって指定し、所によっては、食糧品・医薬品、その他の救急物資を備蓄していた。例えば、本通り商店街付近各町内会は、第一次避難先を西練兵場・袋町国民学校、第二次避難先を安佐那可部町に指定し、ここの民家の倉庫を借用して、常に二〇〇人分の食糧品・薪炭・塩などの調味料、及び薬品と町籍簿の写本・文具などを保管していたし被爆後の九月十五日、本通りの播磨屋町町内会は、被爆を免れた町籍簿により各自の疎開先に連絡して、可部町に近い八木村に疎開中の町民の家で、戦後第一回の播磨屋町町内会を開催した。

疎開児童受入れ

昭和二十年四月から七月にかけて、市内国民学校児童三年生以上約一万人・引率教師約四六〇人が、比婆・山県・双三・高田・世羅・安佐・佐伯の七郡下各町村に集団疎開を行なったほか、各自の縁故疎開児童約一三、〇〇〇人が県下各町村に疎開し、危うく原子爆弾の惨禍からまぬがれることができたしこれら児童を各町村は心温く迎え入れ、多くの支援と激励を惜しまなかったから、被爆後の九月から十月にかけて広島市へ復帰するまで、児童たちは窮乏生活の中ながらも、比較的に安穩に過ごすことができたのである。

例えば、竹屋国民学校は、山県郡の加計町・安野村・戸河内町・筒賀村・殿賀村に、引率教師一五人・児童三〇〇人が集団疎開を行なったが、加計町香草の正念寺に疎開した高井正文訓導の話にも、辻の川原部落の富樫山次部落長の家に児童が疎開の挨拶に行ったとき、富樫部落長は、「よく来られた。なんでもお困りのときは、いつでも遠慮せずに相談に来なさい。」と、一同を励まし、皆は白い粉のふいた甘いつるし柿を一つずつもらって大喜びした。また、夏になって蚊が多くなったときには大きな蚊帳の提供を受けるなど、いろいろと温情あるもてなしを受けた。また、他の農家の人々も、麦刈や田植、あるいは麻の収穫などの手伝いをするという事にかこつけて、たびたび児童を招き、ムスビを腹一杯食べさすという深い思いやりに感謝したという。この一例のように、農村各地に疎開した児童たちは、人々の厚い人情に守られて、親から離れている淋しさをまぎらすことができたのであった。

救援出動組織

広島市が空襲され、非常事態に陥った場合に備えて、地域内の医師・看護婦その他医療関係者による救援医療班、あるいは警防団・国民義勇隊の出動態勢も取られており、婦人会はムスビの炊出しなど、いざというときにただちに

手配できるよう準備されていた。

広島壊滅の報が、警察電話その他によって県下各市町村に伝わるや、これら救援出動組織は、ただちに行動をおこし、トラックや汽車、あるいは船によって、続々と入市し、山口町の東警察署内に設けられた仮県庁の指示に従い、修羅場と化した焼跡の各所において、必死の救護活動を展開した。当時、豊田地方事務所所長であった竹内喜三郎の日記に「八月六日、午前九時半より専売局竹原出張所において、塩増産蹴起大会あり。この頃、広島市空襲の報あり。電子爆雷使用のため、全市潰滅死者算なしとの情報に接す。夜、広島市に救援物資急送手配をなす。」と、ある。

国民義勇隊の犠牲

また、この日、多数の国民義勇隊が広島市内の建物疎開作業に出動していて、次表のとおり多大の犠牲者を出した。これらの安否を気づかって、広島市に出ていく者も多く、特に市周辺の町村は、広島市から流れこんだ避難者をも含めて、上を下への大混乱を惹起したのであった。

市周辺の各町村では、負傷して逃げ帰った国民義勇隊員や殺到した避難者の収容・救護作業に、全住民が起ちあがって奉仕したため、広島市に救援隊を出動させるという余裕は、まったく無かった。

建物疎開作業に出動した地域国民義勇隊の被爆状況表

地域名	被爆場所	出動者総数	被爆による被害者数			備 考
			即死者	負傷者	行方不明者	
1. 大竹市	小網町、土橋、十日市、福島町	九五三人	一五九人	一二二人	七八二人	
2. 安芸郡瀬野川町	比治山橋付近、鶴見橋西側	一五二人	〇人	一三八人	一人	帰村後死亡者 一二人
3. 安芸郡船越町	不明	不明人	不明	不明	不明	
4. 安芸郡矢野町	鶴見橋付近	九四人	一人	九一人	〇人	
5. 安芸郡坂町	鶴見橋付近	一八〇人	〇人	一六〇人	〇人	帰村後死亡者 一五人
6. 佐伯郡廿日市町	榎町	五七人	二九人	二八人	〇人	
7. 佐伯郡能美町	袋町付近	三人	二人	〇人	一人	
8. 佐伯郡大柿町	不明	五人	一人	四人	〇人	
9. 安佐郡安古市町	水主町県庁付近	六六人	三〇人	一人	三二人	
10. 安佐郡佐東町	中島新町付近	五〇〇人	二五〇人	二〇〇人	〇人	
11. 高田郡甲田町	横川橋付近	七人	〇人	〇人	〇人	土木工作隊として 小田村より
合 計		約二、〇一七人	約四七二人	約六三四人	約八一六人	

〔註〕一、この被爆状況表は、広島原爆戦災誌資料表の提出された四三か市町村のうち、出動した一市一〇か町のみによる集計であって、実数はこの数以上と考えられる。

二、行方不明者は死亡者で、遺体の確認できなかったものである。

三、市町村名は戦後の町村合併による新しい市町村名である。

炸裂時の状況

広島市の北東約六二キロメートルへだたる三次市では、原子爆弾の炸裂時に、遠い爆発音と閃光、そして僅かであったが人体に震動を感じたという。また、同市の巴橋の上で爆風を感じた人もあり、広瀬国民学校の児童が疎開していた源光寺(当時・双三郡酒河村)は、炸裂の衝撃で建物がグザグザと揺れたと引率教師が語っている。また、七六キロメートル離れた庄原市でも、閃光が見られたという。

佐伯郡能美島の南部にある大柿町は、広島市から約二六・二キロメートル離れているが、ここでは、なま温かい風と電光のような強い光が感じられ、しばらくして鈍い爆発音が聞え、少し遅れて人体に感ずる爆風があった、炸裂後約五分ぐらいして広島方面を見ると白煙の上がるのが見られ、やがて白煙が雲のように拡っていき、それが上昇し、次第にあざやかなキノコ雲となっていくのが、はっきり見られた。初めは、江田島の火薬庫の爆発かと思うほど近く感じたともいう。

佐伯県五日市町、および廿日市町は、爆心地から八～九キロメートル離れているが、海岸線に沿う地域では、乗っていた自転車もろとも爆風に吹きとばされ、意識不明になった者もあり、家々の瓦は落ち、窓ガラスや障子が破損し、

土壁も落ちるという被害があり、負傷者も多数あった。

単に家だけでなく、広島市に面する山腹は、多数草木が折られ、衝撃波により、大きく山崩れした場所も各所にあった。特殊な現象としては、一山へだてた裏側にあたる場所(佐伯郡)の家屋が爆風によって損傷した。

降雨

原子爆弾の炸裂直後、早い地域は二〇分後から、遅い地域では二時間もたってから、降雨現象(五〇^{ミリ}から一〇〇^{ミリ})があったが、爆心地から北西部の地域、特に北部が著しく、安佐郡安佐町では、午前十一時ごろから午後二時ごろまで、凄い勢いで黒い雨が降り、濡れたシャツが乾くと黒い斑点が無数に附着していた、爆心地から西方にあたる佐伯郡五日市町では、炸裂後、二・三時間たって、白い普通の雨が降りはじめ、かなり長時間降り続いたと報告されている。

飛散降下物

爆心地から北西部の山間に、降雨の少し前から降雨中にかけて、焼トタン板・屋根のソギ板・蚊帳やふとんその他の布切れ、名刺・紙幣などが、広島市内から吹き飛ばされて来た。

降下物の中で最も多かったのは紙片で、佐伯郡水内村(爆心地から二二キロメートルの地点)付近では、午前十時ごろから十一時ごろにかけて、夕やみのように薄暗くなった空から、広島通信局の文書らしい紙片や通信済みの郵便葉書・商店の伝票などが広島市の方から多数飛んで来た。

山県郡加計町(爆心地から五五キロメートルの地点)一帯にわたって種々な物が多数飛来したが、吉水園付近で、炸裂後二、三時間たったころ、広島商工会議所会頭藤田定市名入りの未交付賞状が、少し角の所が焦げたまま飛来したり、茶色に汚れた伝票などが名数落下して来たが、その文字によって広島市から飛来したことを知り、人々は大変事が広島市に勃発したことを推察した。

連絡拠点

全市壊滅状態に陥った広島市は、交通も途絶し、電信・電話も不通となったので、市外の機関を使用しなければ、中央への報告も、県下、及び隣県への救援隊出動要請もできなかった。この大混乱の最中、生き残った関係者が連絡や報告のため、それぞれの立場からその拠点とした所は、東部方面では安芸郡海田市町、北部方面では安佐郡可部町、西部方面では佐伯郡五日市町・廿日市町で、南部方面では、比較的被害の少なかった市内宇品町の広島港に沿う陸軍船舶部隊であった。

備後に出張中であった高野知事は、急ぎ帰広し、まず海田市町警察署に寄って状況報告を受け、六月午後六時半ごろ、市内比治山の多聞院(予定避難場所)に入り、その夜、中国地方総監府の服部副総監、石原県警察部長らと協議し、内務省への報告、近県へ応援要請、県下各警察署及び地方事務所に対し救援隊出動を指令した。これらの連絡に伝令が徒歩やオートバイなどで、海田市町・可部町・五日市町にと急いで行った。宇品の船舶司令部は、軍として独自の立場から大本営へ報告すると共に、呉の海軍鎮守府にも連絡して、いち早く被爆者の救援活動を展開したのであった。

救援隊出動

広島市救援の命令を受けた県下各市町村は、多数の避難者が殺到した近郊町村をのぞき、かねてからの医療救護班・警防団などの組織を動員し、トラックや汽車、あるいは船によって続々と出動した。

例えば、甲奴郡上下町(爆心地から約七〇キロメートル)は、被爆日ただちに出動し、約二〇日間、延二五人の医療救護班がトラックで入市し、警防団は、翌七日から約一か月間、実人員約一二〇人、延約四〇〇人が市内一円で、東・西両警察署の指揮に従い、救援作業に従事した。

海をへだてた因島市(爆心地から約六〇キロメートル)は、八日午後になって因島警察署の命令で、医療救護班一四人・警防団九〇人が、日立造船所の北斗丸で尾道に到着、尾道市から海田市まで汽車を使用し、そこから徒歩で入市し、警察の指示により横川駅付近で救援に当たった。

避難者受入れ

地獄と化した広島市から、安芸・安佐・佐伯三郡下その他の各町村へ、自力で脱出した市民、あるいは軍のトラックや汽車で送りこまれた負傷者は約一五万人に達したが、たどりつくと共にその約二〇パーセント強が死亡し、その後も引き続き多数死んでいった。

一五万人に近い避難者は、その三分の二以上の一十一万人が、広島市を取りかこむ安芸・安佐・佐伯三郡下へののがれたが、これは、広島市の避難計画により、あらかじめ市内各町内会の避難先として、これら佐伯・安佐・安芸三郡下の近郊町村が指定されていたことと、三郡下出身の市民が多く、その親類縁故を頼って行ったからである。しかし、

広島市が復興すると共に、次々と復帰し、避難したままでその町村に定着居住した者は少なかった。

避難者郡町村別内訳表

なお、県下へ避難した市民の郡町村別内訳は次表のとおりである。

避難者郡町村別内訳表

安芸郡	四五、〇八六人	中山村	六、〇〇〇	矢野村	一、〇五〇	江田島村	一、五〇〇
		府中町	五、四〇〇	倉橋島村	一、〇〇〇	下蒲刈島村	五〇〇
		海田市町	五、一五〇	畑賀村	六四六	上蒲刈島村	五〇〇
		温品村	四、五〇〇	戸坂村	三、三〇〇	大屋村	四一〇
		船越町	三、九〇〇	奥海田村	二、八三〇	熊野町	四〇〇
		音戸町	一、五〇〇	中野村	二、五〇〇	昭和町	二〇〇
		瀬野村	一、三〇〇	坂村	二、五〇〇		
佐伯郡	一九、七五五人	五日市町	五、一八五	厳島町	五二四	水内村	八五六
		地御前村	四、〇三九	大竹町	四九二	原村	一二〇
		宮内村	一、五〇六	砂谷村	四八五	四和村	九四
		八幡村	一、三三〇	沖村	四五七	河内村	二〇一
		廿日市町	一、三〇〇	友和村	四五〇	木野村	五一
		観音村	一、一〇九	高田村	二八八		
		平良村	一、〇六三	浅原村	二〇五		
安佐郡	五一、八七五人	祇園町	八、六〇〇	伴村	二、五〇〇	日浦村	七七四
		安村	七、〇〇〇	深川村	二、五〇〇	久地付	五八二
		古市町	六、〇〇〇	緑井村	二、〇〇〇	戸山村	五五二
		福木村	五、〇〇〇	八木村	一、八〇〇	鈴張村	五〇七
		可部町	三、七〇〇	飯室村	一、六九八	小河内村	二四〇
		狩小川村	三、〇〇〇	川内村	一、四〇〇	大林村	二一五
		口田村	二、五〇〇	亀山付	一、二一五	三入村	九二
双三郡	八、三〇〇人	山県郡	五、七〇〇人		比婆郡	四、〇〇〇人	
高田郡	五、九七二人	豊田郡	五、〇〇〇人		賀茂郡	三、五〇〇人	

(昭和二十一年版市勢要覧)

第二節 各市町村…690

第一項 呉市…690

地区の概要

呉市は、明治十八年(一八八五)以来、海軍の軍港として繁栄を続けた都市で、広島市の東南、爆心地から約二〇キロメートルへだたったところに位置している。

第二次世界大戦中は、日本海軍の大根拠地として、軍令・軍需・造艦の中心地となり、人口が急激に膨脹し、昭和十八年には、ついに四〇万人余に達した。

戦争末期、呉市に対する敵機の空襲は、日増しに激化し、昭和二十年六月二十二日に大空襲を受け、その被害は甚大なものがあつた。同年七月一日午後十一時五十分ごろから、二日午前二時半ごろまでにわたる深夜の大空襲は、呉市全域にわたって B29 延約八〇機の攻撃で、焼夷弾約八〇、一一〇個を投下し、罹災者一二二、〇〇〇人余に達し、市の中心部はほとんど焼野原と化した。このとき、まだ無傷であつた広島市から、救援隊が呉市へ出動した。

呉市は、明治三十五年市制施行以来、昭和三年に吉浦・警固屋・阿賀の三か町を編入合併し、昭和十六年に仁方町・広村の編入合併をおこなって、市域を拡大した。

戦争中に人口四〇万人余にも達していたが、昭和二十年に入ってから、戦災と終戦による海軍の解体、これにもなう軍需産業の閉鎖などにより、必然的に住民の大量分散を招き、一挙に人口一五万人に激減した。

その後、呉市の人口はあまり伸長せず、昭和三十一年十月一日、安芸郡天応町・昭和村、ならびに賀茂郡郷原村を編入合併して、ようやく人口二一万九九六六、市域面積一四三・九五平方キロメートル(昭和三十六年刊・広島県自治名鑑)となった。昭和四十年十号一日の国勢調査では、六三、七〇二世帯・人口二二五、〇一二二人となっていて、人口の伸びはあまり良くない。

一、八月六日の状況

侵入機目撃

呉市警防団第五分団班長平田操(東辰川町八)は、六日朝、対空警戒にあたっていて、広島市へ侵入する敵機を発見、爆弾の投下までつぶさに目撃した。

すなわち、B 29 二機が野呂山南寄りから灰が峯→焼山→広島と侵入し、一方、厳島(宮島)上空方面からは、別の B 29 二機が前後にならんで、広島市の上空に侵入するとともに、その先頭の一機が黒いものを投下したのを確認した。

「爆弾をおとした！」と、その瞬間・叫んだ。急ぎ自宅へ帰ろうとすると、その間二秒くらいであったか、パッと明るくなったように感じた。自宅に入ると同時に、衝撃動揺を感じ戸が倒れた。敵機の爆弾投下を見てから、自宅に入るまでの時間は、約一七秒くらいであったという。

炸裂の影響

このような原子爆弾の炸裂による衝撃は、呉市内の各地点で多く見られた。三十一年に呉市と合併した賀茂郡郷原村では、衝撃により戸のはずれた家が三戸あり、異様な閃光に、瞬間目をとじた。そのときわずかながら熱さを感じられた。そして、ちょうど西方の山上に、奇怪な形をした煙雲が、たかだかと立ち昇り、長いあいだ消えないでいた。

海岸通りの家では、爆風によって庭前の砂が、室内にパッと飛びこんで来た。この砂は、関東地方でみるような黒くねばっこい灰様の土ではなく、瀬戸内海沿岸特有の白く光るサラサラした微粒で、軽く美しい砂である。そして、ここから小屋浦方面の山の上方に、キノコ型の巨大な雲の上昇するのが望見された。その雲は最初は白く、ついで五色に変わった。

天応駅では、異様な熱風が吹きつけて来たとし、海軍軍需部では、閉じてあった鉄扉に、グワンと衝撃音があり、地震のような震動が感じられ、空遠く桃色の積乱雲のような噴煙が見られた。阿賀町冠崎では、窓の建具が約一〇秒間コトコトと揺れつづけた。

第十一航空廠では、微温と爆風を感じ、魚見山隧道内でも、爆風が感じられた。また、鍋港栈橋では、顔に微温を感じ、爆風で身体が少し揺れた。

吉浦駅では、頬に微温を感じると共に、ピンク色の綿菓子のように輝くキノコ雲が見られた。

宮原通りからは、立ち昇る煙雲の柱のなかから、さらにまた、モクモクと雲が湧き出て、拡ってゆくのが望見された。

警固屋町からは、宇品の方向に異様な雲柱の立ち昇るのが望見せられ、二河公園からは、金立火葬場の上空に、火山の爆発を思わせるような白・黒・灰色の噴煙が湧きあがり、凄まじく上昇するのが望見された。

辰川町では、衝撃と動揺を感じてから、三〇秒ないし四〇秒経過して、広島上空に小さく白い雲状のものが認められ、それが次第に柱状に盛り上り、モクモクと湧き立って、上部の方は、なんと名状しがたいほど美しいピンク色の雲が、エネルギーに奔騰上昇するのが望見された。また、市内中心部からは、二河峡の方向に、巨大なキノコ雲の上部が認められた。

このように市内の各地点において、相当な影響があったが、風向きの関係からか、爆発による広島市からの飛来物は何も無かった。なお、広島市内の建物疎開作業には出勤しておらず、その方の被害は無かったが、七月一日から二日深夜にわたる空襲のあと、広島市の防衛力強化のため、呉消防署から消防自動車八台と、消防隊員四八人が広島市へ派遣されていたため、即死者九人を出し、消防自動車五台を焼失した。

また、警察警備隊呉小隊も広島市へ派遣され、比治山の多聞院に駐屯していて、被爆した。

二、避難者の状況

避難者殺到

被爆直後、電話など通信機関が一斉に不通となり、広島に何事が勃発したのか、まったく判らなかった。

この朝、呉の市場で青果物を仕入れ、トラックで広島市に向っていた一市民(平本某)が、途中の向洋付近から引返して来て、「広島が大変なことになっている。市内には入れない。」と、人々に語ったのが午前十時過ぎごろであったが、このころ初めて、一般の人々は惨状を聞き知ったようである。

午前十一時ごろになって、広島市から無残な姿の負傷者が、続々と到着しはじめた。火炎地獄の広島から脱出し、海田市町を経て、大屋村に四〇〇～五〇〇人の人々が、担架にかつがれたり、トラックに積みこまれたり、あるいはトボトボと歩いたりして、命からがらたどりついた。これらの人々を大屋橋で止めて、同所の国民学校に収容し、応急的に食用油の塗布をほどこした。

避難者たちは、すでに息絶え絶えの状態に陥っており、身体一面に、あるいは身体のどこか一部に繃帯を巻いた者、血ウミにまみれた者、ボロボロに裂けた衣服の切れ端を垂れさがらせ、半裸の身体は皮膚がズルリと剥けており、直

径五センチメートル以上もあるような大きな水泡を生じている者など、この世の人間とは思われなかった。

汽車に乗って逃げて来た人々が、呉駅前に多数出て来たが、これらは、さらに郷原村や仁方町以東、あるいは昭和村などへと脱れていく人が多かった。昭和村だけでも約二〇〇人が逃げて来た。

臨時収容所

このような避難者の群れは、八月十日の夕方午後五時ごろまで続いたが、次のとおり臨時収容所が設けられた。

(イ)坂町小屋浦 日勝温泉

坂町小屋浦 小屋浦海水浴場

(ロ)東二河通り一丁目 海仁会病院(現在・呉市民病院)

東二河通り四丁目 呉共済病院

(ハ)広町 広警察署

(ニ)その他、天応町などにも急設された。

収容者・死亡者

これらの収容者の治療には、海軍の医療救護隊が大いに活躍した。的確な資料がないため、収容人数などははっきりしないが、相当な数字になるものと思われる。坂町付近のみの被爆死亡者に関して、昭和二十七年七月三十一日付中国新聞紙上に、「安芸郡坂町に散在する原爆遺骨の発掘は、町当局の手で去る二十八日(昭和二十七年)から始められ、三十日までに小屋浦小只谷など五ヶ所から二百十九柱が発掘された。このうちすでに供養塔をたてて葬り、遺骨数の判っていたものは百五十六柱で、残り六十五柱は被爆後七年間野ざらしになっていたもの。また火葬ののち埋められたものは三十六柱で、百八十三柱が死体のまま土葬されていた。同町役場では、八月二日までこれら五ヶ所の発掘作業を続けるほか、確認されているニヶ所も発掘するが、三日には全町あげて丁重な法要を営んだのち、遺骨の一部を広島市へ引き渡し、中島慈仙寺鼻の供養塔に合祭し、残りは同町内の適当な場所に集め、供養塔を建てて永久に葬る。」と報ぜられているところからみても、当時、如何に多数の負傷者が収容せられたか推察できよう。

このほか、収容後死亡した人たちは、火葬して、遺骨を関係者に引渡したものもかなりあった。現在、小屋浦駅の西方第一隧道西口付近に、広島原爆罹災者の納骨無縁塔がある。

定住者

呉地域に避難した罹災者たちのうち、そのままこの土地に定着居住するようになった人々は、当初かなり多かったが、結局、一〇〇世帯程度に落ちついた模様である。呉市も空襲により焼野原とたっていたため、住みつくかに見えた人々も、その後、つぎつぎに広島市へ復帰した。

三、広島市救援状況

救護班出動

六日、被爆直後に海軍の救援隊が、いち早く出動し、医療をはじめ食糧配給などの救護活動を積極的に行なった。呉市役所の救護班も、連日、トラックで通い、約一週間、広島市役所をはじめ、広島赤十字病院その他で大いに活躍した。その他、第十一航空廠救護班・呉共済病院救護班なども出動した。

なお、呉市役所は、翌七日に溝辺速雄助役の引率する呉市吏員約三〇人が出動して、壊滅的打撃を受けた広島市役所に到着、同庁舎前の広場で、罹災証明書の発行や尋ね人の相談などの緊急用務を、全力をあげて応援した。

また、呉市警防団は、トラック四台に約一〇〇人が分乗して出動し、住吉橋や県庁付近、その他で活動した。勿論、警察署員も出動した。

郷原村からは警防団が出動し、己斐国民学校において、食糧の運搬や死体処理にあたった。

[第二項 大竹市](#)…697

地区の概要

大竹市は、県西部の県境に位置し、広島市からは西南にあたり、爆心地から約三〇キロメートル離れている。

昭和二十九年九月、大竹町・小方村・玖波町・栗谷村・友和村松ヶ原地区が合併して、あらたに大竹市として発足した。

江戸時代は、浅野藩家老職上田氏の知行地として栄えたが、飛躍的發展をとげたのは、第二次世界大戦中、海軍潜

水学校に続く大竹地区新開地に海兵団などが設置され、海軍の重要な基地となってからである。

戦後は、瀬戸内海臨海工業都市として発展し、大工業地帯を形成、県西部の重要な経済的中心都市となり、隆盛の一途をたどっている。ただし、公害問題も多い。市域面積は七七・三五平方キロメートル、世帯数九、四〇四世帯、人口三八、一四五人(昭和四十年度国勢調査)である。

一、八月六日の状況

国民義勇隊の惨状

八月六日は、早朝からよく晴れていたが、幾分涼しさを覚えるような日であった。午前六時、大竹地区の国民義勇隊員は、最寄りの駅に集まり、上り列車で、広島市の建物疎開作業に出動した。すなわち玖波隊一〇五人(隊長・田丸清助役)は玖波駅から、小方隊(隊長・谷保次郎村長)は八六人のうち、主として三ッ石地区の二〇余人が玖波駅から、残りの立戸地区約六〇人が大竹駅から、また、大竹隊(隊長・沖本誠二助役)は七九九人のうち、約三〇〇人(責任者・長門春一)が大竹駅から出動した。残る大竹隊約五〇〇人(責任者・日野義隆)は後続隊として、次便の列車で出動した。

玖波・小方・大竹の各先発隊は、己斐駅に到着後、それぞれ四列縦隊を組み、玖波隊は小網町へ、小方隊は土橋・十日市町付近へ、大竹先発隊は天満町・榎町付近に到着した。さらに大竹後続隊は小網町に向って出発、己斐橋を渡って、福島町に差しかけようとしたとき、原子爆弾の炸裂に遭遇した。強烈な爆風を受けて、全員はなぎ倒され、無残な姿に一変した。

この日、佐伯地方事務所を通じて、出動命令を受けたとき、玖波・小方両義勇隊はもっと多人数の出動予定であったが、五日夕がた、減員の命令変更があり、町村役場は連絡可能な近辺の隊員だけ取消してから、編成替えを行なった出動したのであった。連絡を受けて出動しなかった人々は命拾いをした。

被爆により、玖波隊は即死者は無かったが、負傷者九五五人、行方不明一〇人を出した。しかし、負傷者は旬日のうちに九〇数人が死亡し、結局全滅した。小方隊は、大半の者が行方不明となった。その他の者は路傍または救護所において死亡し、帰って来た者一〇余人も一兩日中に死亡し、これも全滅に近い状態に陥った。大竹隊は、即死者八人、負傷者不明という状況であったが、九月十日までに八四人が死亡した。死亡者の中には、無傷で帰って来た者も多く含まれている。

動員学徒の惨状

また、当地出身の動員学徒も多大な被害を受けた。大竹地域の中学生(旧制)以上の学生は、ほとんど広島市の学校に通い、大部分が学徒動員令によって、広島市内で作業に従事していたから、その惨禍は大きかった。

動員学徒の犠牲者を地区別に見ると、大竹町六二人、玖波町二九人、小方村二九人で、いずれも即日または被爆後二週間以内に死亡した。ただし、そのほとんどは二、三日以内に死亡したのである。

また、学徒の行方不明者が玖波町・大竹町で、義勇隊員のそれをはるかに超えていることは、それだけこれら学徒の被爆地が、爆心に近かったことを物語るものといえよう(大竹町医師会史)。

地元の状況

一方、地元では、そのとき一瞬ピカッと光る青白い閃光を感じ、五、六分たってドドーンという重苦しい轟音を聴いた。

小方村では、役場の窓ガラスが、爆風によって四、五枚壊れ、民家の戸障子のガラスも壊れて飛び散ったが、いずれも広島市の方向(東側)にむかった所であった。また、鏡台のカガミが落ちて割れた家もあった(役場末岡書記談)。

小方村の浜への製塩場にいた岡田盛三郎の談によれば、閃光のあと、キノコ型の雲が上っているのが望見され、不思議に思っていると、ドーンという爆発音を聴いたという。

大竹駅では、窓ガラスがビリビリとひびいたが、壊れはしなかった。しかし、列車の乗客はほとんど驚いて下車し、近くの防空壕へ退避した。このとき駅にいた平藤虎幸は、閃光のあと、まもなく宮島の山上に、雲型でなく炎状のものが大きく昇ったのを見、それからドーンという音を耳にしたと語っている。

このように住民の多くは、広島方面の閃光を認め、そのあと重圧を感じる轟音を聴き、入道雲状の白雲が上昇するのを認めたが、それが何ものか判らないまま、不吉な予感をいだいていた(太田慶長医師会史)。なお、広島市に侵入する原子爆弾搭載機を見た者はいなかった。

二、救援状況

救援隊出動

小方村役場の末岡書記が、この変事に、すぐ佐伯地方事務所に電話で様子を問い糺したが、「広島市において相当の

被害があったけれども、他言してはいけない。」と、あとの電話で知らせてきた。これは容易ならぬ事態が発生したのだと考え、村内の担架を急いで集め、万に備えた。今朝出動した国民義勇隊員が負傷して帰ってくるかも判らないと、不安にかられ、村民を各所に配置して待機していると、午前十時ごろ、大竹駅に小方村出動隊員の一人が、傷だらけになって帰って来たので、村役場へ収容して治療を行なった。

昼前ごろ、出動隊員救援のため、米二石を炊きムスビを作り、トラックに積んで、警防団員約一五人が出発した。己斐町・小網町・広島赤十字病院など各所を、四、五回まわって隊員を探し、負傷者や死亡者を小方村に連れて帰った。

大竹町でも、午前十時ごろ、同町高杉医院前に、トラックで上半身ならびに顔面に熱傷を受けた裸体の、大竹町義勇隊員男女各一人が運ばれて来て、初めて広島市の全滅したことが知らされた。同町役場は、ただちに役場二階を救護所にあてると共に、警察署が召集したトラックに乗って、まず隊員の関係者が救援に出発した。また、大竹国民学校も救護所にした。

玖波町も、同じころ負傷者が送られて来て、重大事態の発生を知り、ただちにトラックや汽車、あるいは船などを利用して、救援隊を派遣した。

これら救援隊は、ほぼ十一時過ぎに広島市へ到着したが、市中は火の海で、義勇隊の作業現場に乗りこめるような状況ではなかった。むしろ逆に、避難する群衆が続々と宮島沿線の五日市町や廿日市町方面に向って、逃げて行くありさまであった。その群衆の中に、地元出身者もまじっていたが、いずれも容貌が崩れており、一見して誰か見当のつかない者が多かった。救援隊は次々に出発し、町村別の救護標識を持って、負傷者のたまり場や救護所を、血まなこで探しまわった。

正午過ぎごろから、義勇隊員・動員学徒、その他の負傷者がトラック・汽車(廿日市駅折返し)・船などで、続々と自力で帰って来だした。

玖波町は玖波国民学校を、大竹町は前記のとおり役場二階や国民学校に負傷者を収容し、応急手当をおこなった。小方村からの出動者は、もっとも被害が大きく、帰って来た者はごくわずかであった。これらの状況については大竹医師会史(大竹医師会編)に詳述するところであるが、この地域は、広島市から相当な距離があるため、地元出身者以外の避難者が殺到するということはあまり無かった。

地元からの出動者の搜索や救護作業に精いっぱい、広島市への救護班派遣はできなかったが、混乱の最中、十一日に金輪島に収容されていた地元以外の負傷者が、軍用船によって次表のとおり送りこまれて来て、さらに町や村をあげての悲愴な救護活動が展開された。

収容所名	所在地	開設月日	八月十一日以降の収容者数	死体処理数	埋火葬場所	閉鎖月日
小方国民学校	小方村	八月六日	一一三	約半数	不明	不明。九月十七日の水害時に一〇人位残っていた。
小方避病院	小方村	八月六日	二〇	二〇	不明	
大竹国民学校	大竹町	八月六日	二六三	不明	大竹火葬場	
玖波国民学校	玖波村	八月六日	七八	不明	不明	

なお、これらの収容者のほかに、小方村の海岸に死体が漂着したので、これを引揚げて火葬したこともあった(大竹市役所新出収入役談)。

収容者の看護は、各地区とも婦人会など町村民から看護要員が出て、昼夜をわかたぬ努力が続けられたが、地元出身の負傷者にさえも治療薬剤が無いほどで、手のほどこしようも無かったから、毎日のように、五日市町の楽々園に駐屯していた暁部隊や大竹海軍病院に、油薬その他を受取りに出かけた。また、収容設備がととのっておらず、ふとんその他の必要器材が無かったから、町村民が拠出してこれをおぎなった。

収容した人々が次々に死んでいき、玖波町だけでも、七八人中二一人が八月中に死亡するというありさまで、それを火葬する人手もたらないほどであった。

八月十五日、日本敗戦の報に接し、住民の張りつめた心もゆるみ、一時は虚脱したかの感もあったが、ふたたび気持ちを取りもどして看護活動を続けたのであった。

三、その他
生存者僅少

建物疎開作業のため出動した大竹国民義勇隊十箇中隊の隊長および責任者の数は一二人であったが、このうち現在

(昭和四十一年)まで生き残っている者は、左記の五人である。また、他の先発男子隊の現存者藪人に過ぎない。もつとも、後続の男女部隊の第十中隊長は五年後に、第八中隊長は一八年後に死亡したのである(吉川房太郎資料)。

後続部隊責任者 日野義隆(僧侶・五八歳)

第四中隊長 長門春一(会社社長・五四歳)

第五中隊長 二階堂哲朗(大竹市長・五二歳)

第六中隊長 田渕郡一(会社重役・八〇歳)

第九中隊長 吉川房太郎(元公民館長・七六歳)

(註・第九中隊男子隊員九四人中、現存者は吉川房太郎一人である。)

国民義勇隊大竹隊の惨状

吉川房太郎

(当時・国民義勇隊第九中隊長)

昭和二十年八月六日晴

土用明けもあと二、三日。晴れてはいたが、真に秋をしをしのばせて、今朝は幾分涼しさを覚えた。

去る六月、国家非常時における本土防衛は国民の義務とあって、県よりの指令に基づいて編成された「国民義勇隊大竹隊」は、広島市の要請により、建物疎開作業に奉仕するため、全隊員のうち男女合計約八〇〇人に対して、動員令が発せられ、六日の午前六時に大竹駅集合の白色召集令状が、各自に交付された。第九中隊長の私は、定刻約一〇分前に到着したが、もう全員集合しており、大隊長(望戸町長)代理の本日出動部隊の責任者沖本誠二助役の訓辞を受けていた。

…かくて約三〇〇人の先発男子部隊(責任者・第四中隊長 長門春一)は、午前六時十分発の上り列車で出発した。わが第九中隊は、残された男女部隊とともに、第二陣として後続する予定であったのであるが、第一小隊長(相川嘉三)をはじめ各小隊長は、こころはやって相談した結果、男子部隊九四人だけ先発隊に加わって出発した。

私は残った女子隊員四四人を引率して、後続部隊の男女約四五〇人と共に、午前六時五十分発の列車で出発して、午前七時三十分己斐駅着、ただちに駅前広場において、後続部隊長(責任者・日野義隆)の点呼を受け、暫時休憩ののち、四列縦隊の徒歩で指定地区小網町の本隊に合流するよう、おもむろに出発した。

わが女子部隊は、この隊列の約中央部であったが、やがて己斐橋を渡り、先頭部隊が約三〇〇メートルほどの地点、福島橋との中間、舗装道路の両側は土地が低く、所々に水たまりがあり、アシが茂り、野菜畑が点在するあたりへ差ししかかったと思われるころ、真夏の晴れわたって澄みきっている碧空から、爆音が聴えた。見ると B29 らしい飛行機がただ一機悠々と飛んでいた。当時、警戒警報が発令されていたそうであるが、まったく通報されていなかったから、われわれは何らの不安をいだかず、日本の哨戒機なのであらうと軽く考えて行進していた。

ところが、全員は突如砂塵を交えた旋風のごとき強風にあふられて、一挙になぎ倒された。私は、とっさに両腕で頭を抱えて、うつ伏した。同時に一発の轟音がひびき渡った。私は掌で顔をおおっていたから、閃光は見なかった。

…私は、身体に異状がないように思われたから、すぐに起ちあがったのであるが、爆弾の投下か焼夷弾の投下か、いずれにしても、未だに飛行機の爆音が聞えていたから、全員に大声で退避命令を下しながら、一緒に道路脇のくぼ地に飛び降り、畑のあぜのかげに身を潜めていた。しばらくして、爆音も聞えなくなり、何故か無気味な静寂が付近を閉じこめているのに気がついた。一沫の不安が、ひしと身に迫る思いに、不吉な予感におそわれたが、このままの状態を、責任者として見過すこともできなかったから、身を起して路上に駆け上り、周囲を見廻して愕然とした。私が立っている道路は、初めて踏んだ土地であったが、先刻までは決してこのような場所ではなかったはずである。いつのまにこのように変わってしまったのか、どのような間違いから、このような所へ迷いこんで来たのか、まったく不思議である。と言って夢でもなさそうである。やはり、このとおおり先程歩いていた所に相違なく、意識もたしかに取り戻している。それなのに、この変り果てた視界の様相はどうなったのか、見わたす広島空は、寸前まで晴れていたはずなのに、一面灰色のモヤにとざされたばかりか、今まで確かに建ちならんでいた市街地はもとより、周辺の家屋はすべて消え失せて、あとは一望何ものも見えず、模糊として、ただ所々から細い黒煙が立ち昇っているのみであった。先ほど渡って来たばかりの橋向うの己斐の町並みもすっかり倒壊して、所々に火災が起きているのが見られただけにとどまり、あたかも茫漠たる荒野に独りたたずむ思いであった。言いしれぬ孤独感と悲愁の気が、ひしひしと身にせまり、これは大変な事態が生じたと思った。ただちに隊員たちを呼び集めたが、路上に立ちもどって私の周辺

を取りかこんだ彼女たちの哀れというか無残というか、異様をきわめた姿態を見て驚いた。いずれも顔面や手足に火傷を受け、帽子は飛ばされて髪は乱れ、衣服は裂けて、中には全裸に近い者さえもいた。口々に狂気じみた大声で、「どうしよう。」「どうしたらいいのか。」と言いたてて、「痛い、痛い。」と泣き叫ぶありさまである。何ら手のほどこしようもなく、ただただ呆然として、まったく途方にくれた。しかし責任者としてできるだけことはしなければならず、この際、引き揚げるべきが当然の処置と考えたから、本部からの指令を待たず独断で、各自随意に、取りあえず古江電車停留所(宮島線)まで引揚げるよう指示を与えた。

私一人はともかくとどまって、先発の本隊からいずれ連絡があるだろうと考えて、そのまま路上に突っ立っていた。この時まで、私はあまりに突然であったこの事態に対する驚きと緊張、その上に応急処置に専念していたためと、先発隊の安否も気づかわれて、みずからをかえりみる暇もなかったが、幾分気持ちに余裕ができ、落ち着きを取り戻すと両手首から指先へかけて多少の痛さを覚え、水泡のできているのに気がついた。

その間、どれ程の時間が経過したか判ってはいないが、暫くして市街中央部の方面から、異様な形相をした群衆が、人通りも途絶えて荒涼としている路上を、こちらへ向って来はじめた。彼らは老若男女の別なく、いずれも半裸か全裸で、頭から顔から、胴体から足から、血潮の流れでるがままに任して、親は子を、子は親を、妻は夫を、夫は妻の名を呼びかわして、助けあいながら、氣息えんえん、倒れたかと思えば起ち上り、起ち上ったと思えば、また倒れ、あたかも幽鬼に愚かれてさまようがごとく、フラフラと正気を失って歩いた。中には、路傍に倒れて起きあがれない者もあれば、くぼ地にたまっている水を求めて頭を突っ込み、そのままになっている者もあった。わけても十歳たらずの男の子が、全身に火傷を受け、皮膚は焼けただれて垂れさがり、黒褐色に変った体は、いたるところから流れる血に染り、自由のきかなくなった手を差しのべて、「おじさん、痛いよう。どうにかしてよう。」と、泣き叫び、私にすがりついて来たのには、ほとんど困ってしまった。その子の悲痛な叫びが、今も耳底に残っていて、胸を刺す思いになやまされることがある。

このように生死の境を彷徨しながら、流れるように死の行進を続けている人々の数は、刻々と多くなっていった。そのうちに安否の気づかわれた先発隊員の、無事な姿が見られて、小隊長の相川氏も現われた。相川氏は不思議にも火傷は受けておらず、元気に両手を差しあげて、お互いの健在をよろこび合い、足早やに通り返って行った。他の隊員も案外元氣らしく、続々と引揚げて来たから、各自に声をかけてよろこび合った。この間、どれ程の時間が経過したか知らないが、ほぼ全員引揚げたものと見きわめがついたから、私も二、三人の隊員と共に、人の流れに交り、己斐の山すそぞいに歩いて、指定の集合場所古江電車停留所付近にたどりついたが、わが隊員たちの姿は一人も見られなかった。

そのとき、これまで晴れていた空が、にわかに暗雲にとざされ、大粒の雨が烈しく降りはじめた。雷鳴もともなっていたようであるから、また敵機の来襲かと怖れおののき、とにかく一歩でも前進しようと思い、電車の線路づたいに、いつのまにか独りになりながら、トボトボと歩きつづけて、次の草津停留所まで来たが、ここにも隊員の姿はなかった。

途中、己斐に一か所、草津辺りに一か所、救護所が開設されていたが、いづこも満員で混雑をきわめていた。私はそれほど火傷の痛みを覚えなかったから、そのまま通り過ぎて井ノ口病院についた。ここで、一応の手当を受けてから、近くの停留所へ行くと、そこにはわが中隊数人と他の中隊員たちを交えた一〇数人が、電車の来るのを待っていた。大混乱の最中で電車もなかなか来ず、イライラしていると、折よく一台のトラックが通りかかった。それを呼びとめて乗せて貰い、廿日市駅へようようの思いで到着した。駅前広場には先着の隊員たちが大勢集って混雑をきわめ、救援列車の来るのを待っていた。みんな生命に別条がなかったことを喜びあいながらも、重傷の人、軽傷の人、あるいは無傷の人たちなどみんな憔悴しきって、一刻も早く大竹に帰りがついていた。たびたび駅長に対して、強硬に交渉したが、駅長の意のままになるわけはなく、列車はなかなか来なかった。ここでもどれほどの時間が経過したか知らないが、その間に、婦人会や地方事務所の職員から火傷に油を塗ってもらったり、氷水を振舞われたり、至れりつくせりの看護をうけた。

待ちわびていた列車がようやく到着したが、重傷者は歩行困難に陥り、担架で運びこまれた。また、軽傷者のうちにも顔面がひどく腫れあがって、盲目同様となり、手をひかれて乗車する者もあらわれた。この列車には、大竹地区から出ていた動員学徒や一般の人たちもいて、お互いの無事をよろこびあい、超満員の混雑ぶりであった。

この救援列車が到着するまでに、駅前に集合していた人達のうち、何人かは通りがかりのトラックに便乗して帰ったようで、一応これで全部隊員が引揚げたものと考えられた。

これより先、大竹では午前十時ごろ、トラックで帰着した二人の被爆者によって、広島市の全滅と、隊員全部が大惨事に遭遇したことが知らされたため、町は大騒動になった。たしかな情報を得ようにも通信杜絶で果せず、不安のあまり大竹駅へ駆け集った人々で、駅は混雑をきわめたようである。

列車が駅に到着すると同時に、心急ぐままに、反対側に飛び降りて、駅裏手近くのわが家に帰った。妻は心配して皆と一緒に駅へ迎えに行ったものか留守であったから、近所の人に無事であったことを伝言するよう依頼して、自転車をとばし、海兵団の医務室に勤務中の知人薬学士堀内実氏を訪ねて、軍医の診察を受けた。しかし、当時は、まだ原爆そのものに対する知識などなく、人体に与える影響も判らず、ただ火傷の手当を受けただけであった。手当よりも、広島の被害状況や爆破の原因は何であったかを、多くの海兵たちや将校に取りかこまれて、しつこく聴かれて当惑した。

わが家に帰っていると、駅に行っていた妻も帰って来たので、町内会事務所に行って、会長に広島市の状況や九中隊は現地においては一人の死者もなく、全員無事に引揚げたことを報告した。午後五時ごろであった。

昼食はとっていなかったが、疲労のためか、あまり食欲がなく、軽く夕食をすませると、すぐ床を延べて体を横たえた。しかし、極度の興奮のためと、両手の火傷の痛みが烈しくて眠られず、朝の明けるのを待ちわびた。

八月七日晴

今日も晴れて暑さには変りがなかったが、午後、炎天下を海兵団へ治療を受けにいった。昨日とは違い身心ともに疲れがはなはだしかった。それと、昨夜から火傷を受けた顔の左半面に痛みを覚えて、徐々に脹れあがり、左の臉を開くことも困難な状況で、熱もあるようであったから、終日、床に伏せていた。

こうして旬日、火傷の痛みは変わらず、熱も下らず、悶々のうちに過していた。その間、六日に一緒に被爆した人々のなかで、火傷もせず、無傷であったことをよろこびあった人たちが、帰ってから数日中に頭髮が抜けはじめ、歯ぐきから血がにじみ出るようになり、先ず小隊長の相川氏、引続いてわが九中隊の男子二人、その他全町にわたって六〇数人の急逝が伝えられたのには、まったくおどろいた。今にも死の魔手がわが身に襲いかかってくるのではなからうかと、不安にかられ、極度の恐怖感に堪えられぬまま、眠られぬ夜が続いた。

もっとも、これら亡くなった人たちは、原爆症の恐ろしさを知らず、安静にすべきが最も大切であることも知らなかったから、折りから迎えた終戦により、海兵団や潜水学校が閉鎖され、貯蔵物資が無償で放出されたから、炎天下を運び出しに行き、重労働に従事したための過労が大きな原因になったとも思える。

[第三項 三次市](#)…710

地区の概要

三次市は、広島市の北東約六二キロメートルを距る位置にあり、単に広島県下ばかりでなく、中国地方全体からみても、岡山県下の津山地方と共に、中国山系中の古い文化地帯として、東西の双壁である。

この地方の人間生活の歴史は、はるか数千年前の原始時代に始り、その後も連綿として中絶することなく、古代・中世・近世・近代と、各時代の貴重な史料を豊富に残している。

昭和二十九年三月末、町村合併促進法にもとづいて新しく三次市が生まれた。初め三次・十日市両町と、酒河・神杉・田幸・和田・河内・粟屋村の八か町村が合併し、ついで川地・川西の二村も加わり、地域面積二五二・三四平方キロメートル、人口三七、八七一(昭和四十年十月一日国勢調査)の田園都市となった。

なお、三次市には、次表のとおり広島市内の国民学校児童が集団疎開していた。

収容場所		所在地	学校名	収容者数		期 間（昭和二十年）
寺院名	住 職			教師	児 童	
西光寺	深水晃範	双三郡酒河村 大字青河	広島通信学校	四	四〇	五月～九月
浄泉寺	寺瑛精	双三郡酒河村 大字西酒屋	広瀬国民学校	二	(二年～四年) 二三	四月十三日～十月三日
源光寺	福間玄英	双三郡酒河村 大字西酒屋	広瀬国民学校	一	(二年～四年) 二〇	四月～九月
長円寺	佐々木良忍	双三郡酒河村 大字西酒屋	広瀬国民学校	一	(二年～四年) 一〇	四月～九月
覚善寺	常光純乗	双三郡十日市 町大字十日市	本川国民学校	二	六〇	五月～九月

善立寺	桑名 静樹	高田郡栗屋村	牛田国民学校	二	六五	四月～九月
照善坊	福間 廊象	双三郡田幸村 大字糸井	袋町国民学校	三	三〇	四月五日～十月三十一日、 一部分十二月二十日
専正寺	深水 正道	双三郡川地付 大字上志和地	広瀬国民学校	教師 一 寮母 二	二〇	四月～十一月
円勝寺	薮 晃隆	双三郡川地村 大字下川立	広瀬国民学校	教師 一 寮母 一	(一年～六年) 三〇	七月～十二月
善徳寺	長谷川 実範	双三郡神杉村 大字廻神	袋町国民学校	教師 一 炊事婦 寮母 三	五三	四月～十一月
専法寺	梵宝 英	双三郡三次町	大芝国民学校	二	六〇	五月十日～九月三十日
妙栄寺	小山 広秀	双三郡三次町	大芝国民学校	二	四〇	五月十日～九月三十日
常順寺	高樋 憲隆	双三郡三次町	宇品国民学校	四	四〇	四月十二日～八月三十一日
浄念寺	泰増 博愛	双三郡三次町	宇品国民学校	三	四〇	四月十二日～八月三十一日
浄伝寺	福万 鉄円	双三郡三次町	大芝国民学校	二	七〇～八〇	四月十六日～九月三十日
照林坊	秋山 晃赫	双三郡三次町	大芝国民学校	六	九〇	四月十二日～八月三十一日

(註)右の表は、三次市から提出された資料によるものであるが、本川国民学校のことなど学校当局から提出された資料と相違するものがあり、なお、調査を要する。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市へ侵入した原子爆弾搭載機とは別の飛行機と思われるが、六日午前七時五十分ころ、三次町の上空を B29 二機が、北西に向って飛行するのが目撃された。しかし、相当な高度であったから、これに気づかない者が多かったようだという。

原子爆弾が炸裂したとき、三次町では遠い爆発音とともに、わずかに人体に震動を感じた。広瀬国民学校の児童が疎開していた酒河村の源光寺は、炸裂の衝撃でグサグサと揺れたという(当時引率者後藤琢三談)。

十日市町役場では、爆発音は不明であったが、役場内にいて庁舎南側の窓ガラスの、その内側が金色にピカッと光った。

また、三次町と十日市町を結ぶ巴橋(ともえばし)の橋上を通行している人が、ハッとするような爆風圧を感じた。

三次町の比熊山の山頂付近で、炸裂当時に草刈りをしていた人の体験では、異様な閃光を感じると共に、広島市方面の空に、ゆるくキノコの形をした雲が、立ちのぼるのを望見した。それから二、三分くらいあと鈍い爆発音を聞いた。

広島市から遠隔の地であり、風向きも別方向であったから、被爆地広島からいろいろな物が飛来するというようなことはなかった。

広島市被災の報は、一般の通信施設(電話)は全部不通となったが、午後二時ごろになって、ようやく鉄道電話によって、備後十日市駅(現在の三次駅)に広島全滅の報が入った。

なお、遠隔地のことで、この日、三次地方からは広島市の建物疎開作業には出動していなかった。

二、避難者の状況

六日、午後になってから、国鉄芸備線によって、広島市から避難者が続々と殺到しはじめた。避難者らは、矢賀駅や戸坂駅から鈴なりになって列車に乗りこんだ人たちであったが、皆、どす黒く汚れほとんど半裸体の姿で、備後十日市駅にドッと下車して来た。

特に第一回の列車に乗って来た避難者には、広島県以外の人たちも、多勢入りまじっており、ともかく山間部に脱出することにより救われるという心理状態から、逃れて来た者が多かったようである。

罹災者の群れは、連日続いて到着し、結局八月十日の夕方五時ごろになって、ほぼ一段落した。

殊に翌七日からの避難者には、むごい重傷患者が増加し、悲惨をきわめた。これらの人々を、大八車やリヤカーに乗せて、三次町・十日市町の両国民学校に設けられた応急収容所へ運びこんだ。さしもの広い講堂もたちまち一ぱいとなった。

これらの罹災者らは、地元の医師・婦人会・青年団・警防団および中部第三二〇六一部隊の隊員(在郷軍人によって編成された特殊警備隊で二十年四月、双三郡を単位として編成)によって、応急手当をうけた。

なお、警防団は八月九日から八月十五日まで延人員約一二〇人、基町を中心に本川・元安川の死体処理に出動した。

十日市国民学校に収容された重傷の被爆者小坂千世子(当時・女学生鉄砲町で被爆)は「原爆の記」のなかで、当時の

状況を次のように伝えている。

「(前略)一駅行っでは時間をすごし、一駅行っでは予想のたたぬ鉄道…ようやく備後十日市についたのは、もう夕方です。それも、もうこれから先は明日でないと通らぬとのこと、仕方なく汽車をおりて、一まず病院にかかるため、その避難者収容所となっている十日市国民学校へ収容されましたが、リヤカーに乗って着いて見て、おどろくではありませんか。この田舎に、広島をのがれて来た負傷者が、広い講堂を一杯にうずめているのです。一人一畳の割であてがわれた畳の上に、泣きわめき、うめいているのです。重傷者の来るたびに医者が集まり、手配して治療にあたっていました。またしても光るメス・消毒薬・白衣の人々…。

(中略)近郷の婦人会や、青年団の人々の厚い手当は、一人一人の顔はおぼえてませんが、今でも頭がさがります。毎日のたき出し、負傷者への看護と他人の世話を良くして下さいました。モンペ姿で、国防婦人会のタスキが、今日でも目にうかびます。

からだ全身大火傷に苦しむ人、前半身の火傷に泣く女の子、家の下敷きになって打撲傷に苦しむ老人、ガラスの破片を全身に受け苦しみ泣く私など…、片田舎の講堂に、そのうめき声が、人々の苦しむ声が満ちているのです。

いったん、火の都から命からがらにげて、この片田舎に来て、ともかくにも医者の看護を受けつつ、今度は死を目の前に迎えるのです。今日は何人、明日は何人と枕もとを通っていく人、もう二度ともどって来ないのです。先程まで、うめき声をとぎれとぎれに生死の間をさまよっていた人、昨日まで同じ市内で負傷し、親しくしていたのに、夜なかに急転してつめたくなった人々…。

来る日も来る日も、四、五日の間に三分の一くらいの人々が、重い負傷と激闘のすえ、はかなく死の国へ行くのです。

今日は人の身、明日は我が身とは、この事でしょうか。ところどころに畳のあいているところの空虚なこと、夜が明けると自分の番ではないか、朝が来るとあたりを見まわす。

こんな気持ちの明け暮れは、精神的にやりきれないことです。同じ死んでゆくなら、傷の痛さを毎日味わわないうちにと願うようでした。(後略)。」

このように六日当日、避難者第一陣の到着により、直ちに収容所開設の手配をおこない、三次町では、三次国民学校をそれにあてて収容をはじめた。ここに約一〇〇人余を収容したが、力つきて死ぬる者が多く、約五〇体を寺戸の火葬場で荼毘にふし、遺骨を安置した。

また、十日市町の十日市国民学校にも多数の罹災避難者を収容したが、苦悶する声々がその講堂に充満した。また、三次高等女学校(現・十日市中学校)にも収容したが、ここでも修羅場を現出した。

なお、十日市町南畑敷の県立三次中学校(現・三次高校)には、戦争末期の昭和二十年六月二十五日から、広島第二陸軍病院三次分院が開設されていたが、ここに、五〇〇余人の被爆軍人・軍属が収容された。同病院が閉鎖される同年九月末までに、ここで一八〇余人が死亡した(昭和三十九年八月十日付 中国新聞・三次旧陸軍病院慰霊式 記事)。なお、避難者でそのまま三次市内に定住した者が約一五〇世帯であった。

三、広島市救援状況

救護活動

広島市被爆の惨状が判って、ただちに三次町から医師・看護婦六人ずつ計一二人の救護班が出動し、実日数一〇日間ほど救援活動をおこなった。

また、広島県立双三実業学校(双三郡田幸村大字塩町)の女子生徒一年・二年生約六〇人、若鳥鉄男教諭に引率されて広島市被爆の翌日、翌々日から救護隊として、塩町駅を出発した。

男子生徒も、実業学校の野菜などを持って広島へ出動、さらに双三実業学校より五、六日おくれて、広島県立三次高等女学校(双三郡十日市町)の生徒も動員されて出発した。

四、疎開学童の状況

被爆後、疎開学童たちは、その父兄保護者あるいは縁故者の生存している者は、逐次それらに引取られていった。父兄の安否がまったく不明の者や、縁故者の引受けも得られない学童たちは、三次町と双三郡三良坂町に集められた。ついに、最後まで引取手のなかった三〇数人は、佐伯郡五日市町の戦災孤児収容所に収容された。

地区の概要

庄原市は、広島市の北東約七六キロメートルの地点にあり、中国山脈の麓の山間盆地である。北部に勝光山(九四七メートル)、北東部に大黒目山(八〇二メートル)があり、南および西にむかって傾斜している。両地を切り北東から流れて来て中央低地をうるおす西城川があり、中心集落は西城川の河岸段丘上に市場町として発達した。

昭和二十九年三月三十一日、比婆郡庄原町と高村・本田村・敷信村・山内東村・山内西村・山内北村の六村が合併し、新しく庄原市として発足した。

備北の政治・経済・文化の中心地で、国鉄芸備線・国道一八三号線が市のほぼ中央を斜断し、四方に通ずる県道もここに集り、交通の中心地でもある。しかし、全体的には農村都市で良質の米を産し、古くから酒造もおこなわれている。また、付近一帯は比婆牛の産地で家畜市場もあり、南部の七塚原牧場は殊に名高い。

さらに、名勝帝釈峡の西の入口であり、観光客が多く訪れる。

市域は二四五平方キロメートルで、三次市につぎ県下第二位の広さであるが、人口は少なく二六、五一五人(昭和四十年度国勢調査)である。

一、疎開児童受入れ状況

広島市の国民学校児童を、昭和二十年四月から同年十月ごろまで、地域内の各寺院・集会場に次のとおり受入れていた。

収容場所	所在地	児童数	学校名	備 考		
妙延寺	比婆郡山内西村	一五〇 (教師六)	段原国民学校	各収容所とも、昭和二十年四月に開設、同年十月に閉鎖した。		
光徳寺						
薬師寺						
永明寺	比婆郡山内東村	二〇〇 (教師八)				
勝光寺						
正中院						
西楽寺	比婆郡庄原町	七〇	青崎国民学校			
雲龍寺		五〇				
金福寺		二五				
説教場		一五				
常林寺		五〇				
観音寺		五〇				
宝蔵寺		五〇				
西明寺		二五 (教師一三)				
公会場		比婆郡高村			一一四 (教師五)	大手町国民学校
世尊寺						
龍福寺						
西念寺						
光縁寺	比婆郡北村	八八 (教師四)				
瑞泉寺						
八谷太郎宅						
滝口一三宅	比婆郡本田村	二五〇 (教師九)	大河国民学校			
仲蔵寺						
丘音寺						
明見健一宅						
宝住院						

二、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市から相当離れているこの地区においても、原子爆弾の炸裂の閃光が見られた。

同日夕方七時ごろ、戸坂から芸備線で続々と負傷者が送られて来はじめ、十日ごろまで続いて、庄原国民学校(広島赤十字病院)に六八〇人、山内西国民学校に二八〇人を収容したが、その惨状は言語に絶した。全員といってもよいほど高熱と下痢で苦しみ、発狂状態になる人もたくさんいた。

死亡一、二日前ごろになると、きまって肉親の名を呼び、また肉親の姿が目前に見えるかのように、急に立ちあがって走ろうとする者など、断末魔の修羅場を出現したのである。

頭髮の抜ける者、傷ぐちの膿にウジがわいている者などほとんどであったが、治療といっても単純な対症療法であって、高熱に対しては解熱剤、下痢に対しては下痢止め、衰弱にはブドウ糖・ビタミン、外傷にはマキーロクローム・ヨーチン・リバノールガーゼなどを使用した。

広島第一陸軍病院庄原分院藤高茂明院長以下全職員は、不眠不休の治療活動が続けたが、死亡者が続出、同年十二月中旬、収容所を閉鎖するまでに、山内西国民学校では八八人、庄原国民学校(庄原分院)では二〇〇人が不帰の客となった。

収容者は、地元とは関係のない者が多く、全国各地から応召した軍人・軍属で、戸坂国民学校(陸軍病院分院)で収容しきれなくなった負傷者などが転送されたのである。

死体の埋葬は山内西村字大歳の葛城山でおこなったが、その跡地に大歳部落の婦人会が発起人となり、昭和三十三年三月、「原爆犠牲者の碑」を建立し、死亡者八八柱をとむらった。以後毎年、春分・秋分の日、および原爆記念日には、地元婦人会が中心となり、各寺院の協力を得て法要をおこなっている。

庄原国民学校における死亡者は、軍において処理したため、地元では不明である。

三、広島市救援状況

救援隊出動

六日、広島市救援の出動命令を受け、ただちに医師・看護婦・保健婦などによって数班の医療救護班を編成し、交互に九月十五日まで広島市に出動した。広島市では、大芝・江波・己斐・戸坂の各国民学校、被服廠・通信病院・東洋工業株式会社などの各臨時救護所において治療活動をおこなった。

また、庄原町・山内東村・山内西村その他各町村から警防団(庄原町六〇人・山内東村五〇人・同西村三〇人・その他不明)が、六日夜、出動し、約一四日間にわたり、庄原町・山内西村両警防団は楠木町・福島町付近で、山内東村警防団は東練兵場付近及び尾長町一帯で、それぞれ救護活動を展開した。警防団はトラックに分乗し、庄原から三次・戸坂をへて入市し、帰途は戸坂から汽車芸備線を利用した。

更に、庄原実業学校(庄原本町)の生徒約三〇〇人(三、四年生及び別科生徒)は、八月十四日から一週間(第一班一五〇人)、及び八月十七日から一週間(第二班一五〇人)が、教師五人に引率されて、広島市救援に出動し、白島町の通信病院および三篠町の竹藪のなかの応急救護所において、負傷者の救護に従事した。しかし、多数の生徒が下痢になやまされたので、第二班をもって出動を打ち切った。出動当時の記録は、県庁からの指示により、焼却処分にしたため現在残っていない(当時、引率教師藤原恵談)。

四、その他

被爆当時、この地に避難して来た多数の人々は、終戦後、次第に広島市内あるいはその近郊に復帰をはかり、庄原町その他に定着居住した者はごく少数であった。例えば山内東村においても、一〇世帯ばかりが定着しただけである。

[第五項 因島市](#)…721

地区の概要

因島(いんのしま)市は、広島市の東方、約六八キロメートル離れた瀬戸内海上の島である。本土の三原市・尾道市に近く、古来、造船工業が発達し、現在も日立造船所因島工場では優秀な船舶が次々に建造されている。

なお、因島には因生部隊が駐屯し、日立造船所でエスピーという軍用船舶の修理をしていた。

昭和二十八年五月一日、御調郡重井村・大浜村・中庄村・三庄村・田熊町・土生町、および豊田郡東生口村が対等合併して一市を形成した。面積は五〇・二五平方キロメートルで、世帯一万二九一世帯・人口四五、一二八人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市が被爆し、大事態が発生しているらしいということが判ったのは、八日、因島警察署に救援隊出動命令が下ったときであった。それまでは海上遠く離れた因島市では、直接的な状況を知るべくもなかった。

広島市が焦土と化し、無残な容相の死体や負傷者が数多く出ているという詳細がわかったのは四、五日もたってからであったという。

二、救護活動状況

救援隊出動

八月八日午後、因島警察署の命令で、医師三人・薬剤師二人・看護婦四人・産婆二人、その他三人の医療救護班と、警防団九〇人が広島市救援のため急ぎ出動した。

日立造船所因島工場の「北斗丸」で、尾道市まで行き、広島市の東の入口である安芸郡海田市町まで汽車で往った。そこから徒歩で市内を通過し、広島市北の入口である横川駅付近の農業会事務所(洋館二階建)に到着し、そこを活動の拠点とした。これは、海田市警察署において指示された場所であったと思われるが、横川町に着いたときは、まだ、そこらの倉庫や焼け残りの電柱などが燃えていた。

農業会事務所は臨時救護所になっていて、到着するとただちに赤チン・リバノール・チンク油を使って治療活動を開始した。予想外の惨状で、その夜遅く救護隊一同はその農業会事務所の二階や、外に張ってあった天幕の中で眠った。天幕は負傷者を治療した場所である。

九日朝、救援隊長から「死体の収容にあたって手掻きを使用してはならない。丁重に扱うよう」指示があった。

農業会事務所における収容者は約五〇〇人に達したが、そのうち半数の二五〇人は死亡した。続々と死亡者が出るので、救援隊を三班(一班二〇人)に分け、一班と二班は事務所内の死体の処理にあたり、三班は外部の瓦礫や材木などの清掃にあたった。

死亡者は、一〇メートル先の場所に爆弾によってできたと思われる大きな穴(直径約一〇メートル、深さ約四メートル)があったので、そこへトタンの担架で運びこんだ。

九日の午後になって、負傷者をムシロの担架で屋外に運び出し、三滝陸軍病院分院横の竹ヤブを切りひらいて収容所を作り、そこへ収容した。治療には、下関から来援した看護兵四人がかいがかいしく働いた。また、食糧は、山県郡加計町方面からムスビが送られて来て、患者に配給された。

十二日に因島救援隊は引揚げたが、九日午後からこの日までに収容した負傷者は、約二〇〇人で、そのうち三〇人が死亡した。

負傷者は口々に「兵隊さん、水をくれ」と叫んでいた。ある負傷者は全身が水ぶくれとなっており、またある人は、自分の手の火傷部分に里芋の皮を張っていたが、その下からウジ虫がわいていた。そして、ほとんどの負傷者は配られたムスビを食べる力を持っていなかった。

十二日朝、後続の救援隊と交替して帰路についたが、因島救援隊の一人織田兼市は、帰った翌日の十三日から一週間ほど下痢をわずらった。

なお、昭和四十三年十二月三十一日現在、因島市における原爆手帳発行状況は、次のとおりである。

特別手帳 一六四通

普通手帳 四九通

計 二一三通

[第六項 佐伯郡五日市町](#)…724

地区の概要

五日市町は広島市の西に位置し、爆心地からの距離は約七・六キロメートルである。

昭和三十年四月一日、五日市町・観音村・八幡村・石内村・河内村の五か町村が合併して、現在の五日市町となった。

東・北・西の三方は山に囲まれ、南は広島湾に臨んでいる。

西は極楽寺山の尾根で廿日市町に接し、北には窓山(七一・八メートル)・向山(六六五・六メートル)などあり、東には鈴ヶ峯(三二〇・六メートル)・鬼ヶ城山(二七八メートル)など、美しい山々が連なり、清流八幡川および岡の下川が縦貫している。

海岸沿い一帯の平地は、昔から健康保養地と称され、高名な歌人中村憲吉もかつてこの海沿いの家で療養した記録

があるが、現在は広島市の衛星地区として、急速に発展しつつある。

五日市町域の総面積は五九・八平方キロメートルで、人口三一、九九三人(昭和四十年度国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日の朝、隣町の廿日市町で、午前九時から在郷軍人の会合が開かれるので、自転車に乗り国道二号線(観光道路)を西へ急いでいた同町農協理事木村貞夫が、ちょうど町の西端「西隅の浜」にさしかかったとき、突然、東方の空、仰角四〇度に B29 一機が、東南から北面にむかって侵入しているのが見られた。この侵入敵機は、同町役場の西北約三〇〇メートルの路上にいた主婦加藤清子も認めており、他にも気づいた者があったと思われる。

そのとたん、突如、ピカッと青白い閃光をみた。しばらく意識を失っていたが、気がついてみると、自転車もろとも爆風によって、路上に投げ出されていた。

周囲は、何も異状はなかったが、見ると東方の広島市方面に白い雲状のものが、ムラムラと昇っていた。

爆風の衝撃は相当強く、五日市町全般にわたってその被害を出した。家々の屋根瓦は落ち、窓ガラスや障子が破損し、壁の落ちた家も多く、中には天井が吹きあげられたり、家が傾いたりしたものもあった。

このため、負傷者も多数出たが、とくに北側の石垣を背にした家々は、窓ガラス・障子・天井が大破した。

午前十時半ごろから、約一時間にわたって紙や布の破片が、龍巻のあとのように、灰や塵と一緒に、町全域に降って来た。

また、二、三時間後、雨が強く降りはじめ、かなり長く降り続いた。

五日市町は、この六日には広島市の建物疎開作業(榎町付近)に出動する予定であったが、前日に大竹町・小方町と交替することになったため出動せず、被爆から免れた。なお、広島市内の国民学校児童の疎開は受入れていなかった。

二、避難者の状況

この日、午前九時過ぎ、広島市から罹災者の大群が、国道づたいにドッと町内になだれこんで来た。ほとんどの人が徒歩で、命からがらという状態であった。

トラックで運ばれて来る者もあったが、みんな素足で、全身をまつ黒に火傷し、あるいは全身ガラスの破片が刺さり、肉が千切れ、脹れあがっていた。

中には、赤チンを顔中に塗った者や帽子をかぶっていた者は、帽子でかくれていた部分だけ頭髮が残り、クッキリと剃ったように露出部分が焼けてしまっている者もあった。

着物の形はなく、ボロボロに裂けた布ぎれを垂れさがらせているだけであった。

これら罹災者らの大部分は、被爆の衝撃にただ茫然としており、「どうなったのか」と聴きただしても、「わからない…」の一語だけで、何も語ろうとしなかった。

この異常な状況から、広島市に重大事態が発生したらしいということは直感された。

町ではすぐに、役場前にテントを張り、医師・看護婦を召集した。当初は医者四人・看護婦二人で治療にあたったが、負傷者は時々刻々と増加するばかりで、治療がまにあわないありさまであった。暁部隊も出動して治療活動を開始したが、それでも捌ききれず、五日市役場では、急いで町内会長、警防団・婦人会・看護婦などの非常召集をおこない、役場・学校・寺院に負傷者を収容した。しかしすぐ満員となったので、協議の結果、避難者を各隣保班に割当て、各民家(一戸に三、四人)に収容することとした。

収容者は約六、〇〇〇人以上に及んだが、当時五日市町(現在の五日市地区)の人口は約八、〇〇〇人であったから、町の人口は一挙に約二倍になったのであった。

役場吏員はほとんど徹夜で看護にあたり、火葬から罹災証明書の発行、それに消毒・防疫作業までおこなった。

また、楽々園に駐屯していた暁部隊二〇人は、昼夜交替で、主に役場や学校にテントを張って収容中の者の治療や看護にあたった。

避難者には重傷の者が多く、収容当日から毎日平均七、八人の死亡者が出て、その数は三〇〇体を超えた。

各民家に収容中の負傷者を、当初は地元の医師が巡回診療していたが、不便この上もないので、四、五日後に国民学校と町役場の二階、および寺などに全員収容した。これらの負傷者は四、五日のあいだに髪がほとんど抜け、一週間ぐらいで体中にウジやシラミがわいた。

町内の光禅寺にも十時ごろから、罹災者が殺到した。光禅寺には、以前から暁部隊が約五〇人ばかり駐屯していたが、翌七日ごろ、寺へ軍の医療団七、八人が来て治療をほどこした。寺の庫裡は避難者でたちまち満員になり、境内

にムシロを敷いて寝かせなければならなかった。全部で約一〇〇人ぐらいいた。

光禪寺は、広島市内にも多くの門徒がいたから、ここに来た避難者は門徒の関係者が多かったようである。このため毎日縁故者が探しに来て混雑した。一日に三〇人もたずねて来たこともあり、八月十二日ごろには、ほとんど引きとられていった。

観音村では、国民学校や地区の会館に約四〇〇人収容したが、その半数が死亡した。

八幡村では、己斐峠を越えて殺到した避難者を国民学校に収容し、村民こぞって救護にあたった。八幡公民館の野村慶一館長の報告によれば、四十三年八月に八幡村役場の罹災者収容名簿が発見され、六日午後一時から収容を開始し、合計一、三四二人に達している。

石内村でも、己斐峠を通して来る避難者を浄土寺に収容し、村民総出で救護活動をおこなった。

これら避難者に対して、翌七日から炊出しをおこなった。炊出しは婦人会が中心になってやり、警防団が運搬にあたった。しかし、多くの罹災者は、配給された一個のにぎりめしもノドを通らないありさまであった。また看護にあたった者の中にも、一週間ばかりろくに食事のできない者があった。

当時、軍隊が五日市町に米を何千俵も疎開し、民間にあずけていたが、炊出し用の米はそれを使用せず、加配米によった。炊出しは米のほかトウモロコシのムスビ・梅ぼし・ナスの漬物などであった。

八日には、広島市内の罹災者の救援にムスビを作って送ったが、トラックがなかったので消防自動車を使い、十五日ごろまで約一週間続けた。

なお、各地区の収容者の状況は、つぎのとおりである。

収容所名	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
各民家	八月六日	約二、七〇〇	不明	五日市火葬場	不明
五日市国民学校	八月六日	約九〇〇	三〇〇	五日市火葬場	九月末日
光禪寺	八月六日	約一〇〇	三五	五日市火葬場	九月末日
楽々園遊園地	八月六日	約八〇〇	不明	五日市火葬場	九月末日
五日市隔離病舎	八月六日	約三六	三三	五日市火葬場	九月末日
石内浄土寺	八月六日	約六〇	一五	石内火葬場	九月末日
八幡国民学校	八月六日	一、三四二	一〇〇	八幡火葬場	九月末日
観音国民学校及び地区会館	八月六日	約四〇〇	二〇〇	観音仮火葬場	九月末日
五日市町役場	八月六日	約一、一〇〇	二〇〇	五日市火葬場	九月末日

ただし、各民家の収容者、光禪寺などの収容者は、八月十二日から五日市役場へさらに二〇〇人、五日市国民学校へも四〇〇人ほど移したが、これらのうち約半数が死亡し、五日市火葬場で荼毘にふした。

五日市地域全般の収容者総数約六、〇〇〇人のうち、身元判明者はわずかに五五〇人であったという。

九月以降は、これら身元不明の負傷者は、全員を廿日市工業学校(現廿日市高等学校)に収容した。九月の末、避難者の救護作業に努力した役場の職員二人が、過労のためか、あるいは避難者のおびていた残留放射能による障害か、ついに病床にふした。

三、広島市救援状況

救援隊出動

被爆当日は、町内になだれこんで来た避難者の収容と救護に、地域全員が努力を傾注したが、翌七日からは約一週間、広島市内の救援に警防団が出動した。

五日市班五〇人…九日間出動で延三五〇人、観音班四〇人…延二八〇人、八幡班三〇人…延二一〇人、石内班および河内班各二〇人…延各一四〇人が、炊出しのムスビを積んで、広島市の西部地区の救護や清掃作業に連日出動した。各班とも出動にはトラックや消防自動車を使った。

医療救護班は、町内収容の負傷者の治療だけで手一ぱいで、出動は思いもよらなかった。

被爆のその日

佐久間作一郎

五日市の磯の香の匂う海岸地帯の、夏の夜の星空は清く、海から吹きよせる冷めたくて涼しい夜風、岸边に打ちよせる小波の音も静かに聞える。

完全なる灯火管制をして、枕頭のラジオを聞きながら、久しぶりに体の疲れ癒える思いがする。

警報が鳴っても飛び出る必要もない。人家もまばらな、こんな郊外の海岸地帯に敵が爆弾を投下する心配はない。ただ、灯火管制を完全に行えば、ここばかりは極楽である。

すでに岩国・呉も戦禍をうけた。広島は今日まで小型機で二、三回小型爆弾を投下せられたに過ぎない。大型 B29 は、広島の上空を数回通過するばかりで、爆弾はおとされない。今日はやられるか、明日はやられるか、どうも広島ばかり残されているので、疑問でさえあった。

夜になると、空襲警報のサイレンが鳴りわたった。ラジオに聞き耳をたてている。近くの人家には、誰一人として騒ぎたてる人もない。

海上遠くの島の山頂に、防空サーチライトが交差しているが、敵機らしいものは見当らない。しかし、一万メートル以上の上空を通過しているらしい無気味な爆音が聞える。臨時ニュースが、「敵の B29 数機は広島湾の上空に集結して、広島市の上空を北進し、山陰地方に向うものの如し。」と、伝えていた。

今夜も迎えざる客は来なかった。やっと警報解除となって、ほっと一息ついたが、召集中の長男博は、司令部兵務部で警備の体制についたであろう。次女の久子は、司令部の地下室で敵機の来襲を、各室に放送しているであろう。

広島横川町本宅で、今夜私と交代して、ただ一人いる妻は、今の警報で町内の人たちと、指定の場所に退避したであろうか、または防空警備についたであろうか。妻のことが何となく気にかかる。何ともいえない気味の悪い夜は更け、いつのまにか深い眠りに入った。

短い夜は明けた。八月六日である。黒いカーテンの隙間から、まばゆい朝の光がさしこむ。今日も爽々としたよい天気である。トンビの群れが海上を飛びかう。ここばかりは何事もない平和境のような朝である。

七時を過ぎて、出勤(日本通運広島支店副長)のため畑道を、五日市駅に急いだ。朝の静けさを破って、空襲警報のサイレンが、あの嫌なブーブーの響きが無気味に鳴りわたった。

突如として、南方海上からロッキード二機が、低空で真一文字に、私を襲うかのように突進して来た。とっさに、横に積み重ねてあった麦ワラの中に這いこむようにうずくまった。頭上をかすめた機は、左に旋回して西の方向に飛び去ってしまった。畑の中で私一人で生きた気はしなかった。今日は何となく不吉を感じる日である。

遅延した満員の列車に乗って、広島駅に着いたが、土用の朝の太陽はアスファルト道路に反射して暑い。すでに出勤の時刻に近かった。

午前八時、恒例の朝礼は形のごとく行なわれた。支店長の、陛下から賜った勅語の奉読、訓示、諸種の伝達と注意事項があって、みな各自の持場に散ってしまった。

私は自席の前の柱に取りつけてある直通電話で、妻に急ぎ疎開先に帰るよう連絡のため、自宅の電話を呼んだ。電話の呼出音は、ブープ!と耳に反応するが、応答がない。そのまま二、三分待ったが、多分帰ったのではないかと、ガチリと受話機を下して、左に体を向けた。

八時十五分、まさに世界的一瞬であった。西の窓からピカリと、眼もくらむフラッシュのような、電車のスパークの如くもの凄い光がきらめいた。アラッと思う間もなく、何とも言えない地鳴りとともに、事務所を押し破るような爆風がドスンと来た。

本能的に電話機の下に身を伏せたが、すぐ身の危険を感じて、無我夢中で外に飛び出した。大勢の人の叫ぶ声が聞えたと思ったら物の落ちる音に消されてしまった。

何処をどうして、どんなにして出たか、支社の前を通ったか、皆目記憶がない。もとより原爆の炸裂音などは知らなかった。

何分くらい時がたったか、他の幾人ものものと酒樽防空壕(醸造用の木製型樽の利用壕)のなかで、恐怖におののきながら入っていることを知った。一時的に気を失っていたらしい。我にかえり、恐る恐るハシゴをのぼって、壕の入口から首を出して、四囲を見わたすと、支社の建物は倒れかかって土煙が渦巻いている。二階事務所は凄い音をたてて、崩れかけていた。線路向いの人家は、屋根瓦が飛び散り、板やアエン板が空に舞い上っている。目の前が暗くなったようで、何も見えなくなり、気が遠くなる思いがする。

私は脚が痛く、自由を失って立ち上ることができない。私の顔面に温かいものが流れている。血潮であった。

西の空は爆風で砂塵が巻きあがり、キノコ型の雲が高く大きく広がっていた。すでに防空壕のあたりには、数人の見なれた者が倒れていた。細川副長は顔面に大きな傷をうけ血に染って、何事か叫びながら出てきた。藤原一二三支店長は机の下に伏して、奇蹟的に無傷である。二階経理室は完全に倒壊している。「助けて…助けて!」と、泣き叫ぶ声、女子事務員の悲痛な叫び声、阿鼻叫喚の巷と化してしまった。森広経理課長は事務所の倒壊する瞬間に、奇蹟的に脱出したが、階上にはなお数人が残っている。

急遽、作業員の一団が駆けつけてきた。作業監督の波多野秀男氏も参加して、必死の救援活動が開始された。梁や

柱の下敷きになった重軽傷者が救い出されたが、ついに死者、重傷者一〇数名の犠牲者を出した。

大手町六丁目付近で被爆したらしい支店長専属の自動車運転手が、顔面を火傷し、血に染って、息せき切って帰ってきた。彼は震えながら容易に発言をしない。多数の人が集って来てから広島全滅の第一報をようやく語ってくれた。

皆のものは、この付近に限られた爆撃であると思っていて、他所の事まで気にする余裕は持たなかったのである。刻々と情報が流れてくる。火炎と煙は風に吹きまくられて火炎は荒神町から西蟹屋町の一部に延焼しつつありとの情報が来た。私は経理課長に命じて、経理書類の搬出をはじめさせた。負傷の軽い元気なもの一〇数人が勇ましく活躍する。また、作業員は懸命に什器書類を持ち出している。

私は膝関節のひどい脱臼で、歩行の自由を失い、何となく頭が痛い。耳鳴りがする。口が開かない。顎関節が脱臼したのである。茫然として線路わきの石に腰を下して、皆の緊急作業を眺めているばかりである。声が出ない。無理に声を出そうとすれば、「アア」ばかりで発言できない。支店長から話しかけられても、ただ頭を上下にするばかりで返事ができない。皆は気が狂ったと思ったであろう。誰れが手当をしてくれたか、頭の傷に三角布が巻いてあった。

階下の机の上に、大金庫の鍵を置いたまま飛びでたことを思いだした。何としても持ち出さねばならない。痛い足を引いて事務所に入ると、机の上に天井がおおいかぶさり、柱が傾き、壁土は崩れ、こま竹が錯綜して、足の踏み場もない。自席の机で金庫の鍵は見つかったが、机の上に置いた腕時計がない。懐中物を入れた上着は、爆風で何処にとんだか見つからない。

またも警報のサイレンが鳴る。また退避しなければならない。空には無気味な爆音がする。火災は西蟹屋町の西部を焼き、東に延焼して、会社の一五〇メートル先くらいに近づいてきた。鉄道構内から退避命令が出た。「タイヒ、タイヒ」と、矢つぎ早やに叫びながら伝令が来た。駅構内には強力な火薬を積載した貨車が七、八輛ある。これに引火または爆撃をうけると、付近一帯は木端微塵になって吹きとんでしまう。即時に全員退避せよとの命令である。

出勤の途中で、鉄道線路から爆風で下に突きおとされた小方部長、無傷の横須賀部長、顔面に大きな怪我をした細川副長、無傷の藤原支店長などと緊急協議の結果、ひとまず全員退避することになった。

線路向いの愛宕町の間あたりから、火の手が上って盛んに燃えだした。荒神町・西蟹屋町は旋風にあおられ、黒い煙、赤い炎が猛烈に渦巻いている。私有の自転車を持ち出した。支社の津田君と同道するように小方部長が頼んでくれた。彼と私の居住地が同じ方向であるからである。

駅前から白島町を経て、横川町に至る道をえらんだ。それは横川町の本宅に妻がいるはずであるからであった。

荒神町の広島荷造工業・浄光寺が盛んに燃える。真紅の炎と黒煙が立ちのぼり、逃げまどう人、火傷でもう息の絶えた子どもを、堅く抱きしめて狂気のごとく叫びながら走って行く母親、逃げのびることに懸命で、火を消すところではない。隣組の、玩具みたような手押ポンプなんか、何の役にもたたないで各所に放り投げてある。

火災は突風でますます拡がり、火炎と人間の波が渦巻いて、さながら火炎地獄である。

東練兵場から牛田の方面へ抜けることにした。牛田に出たが、太田川は満潮で渡れない。饒津公園に出て、大須賀踏切りを渡り、栄橋を経て、泉邸前を通り、白島に出た。三篠橋は不通らしく、どうしても太田川鉄橋を渡らねばならない。厄介な古自転車は、津田君がかついでくれ、横川にたどりついた。横川も荒涼たる廃墟で、津田君に自転車を托し、五日市への連絡を頼んだ。

一方、この日の五日市では、私の出勤後、長男の嫁は、八時前に妹の美津江を学校に送り出して、台所であと片づけをしていた。東の力から凄い光がした。裏口から屋外に出ようとする時、地震のような地響きがした瞬間に、大音響とともに家が倒れるように揺れ、爆風はもの凄いい音をたてて戸障子を破り、家の中に入り、裏側の小窓を破壊し、庭の石灯籠を倒した。大地震であろうと思った。近所の家に叫びながら、隣組の人が集った。恐怖を話しあっている。まったく生きた気持もしなかった。広島に爆弾が投下せられたと叫びながら駆けまわっている人がいた。

「大変だ、大変だ。」と、叫びながら提防の土手に、多数の人がかけあがりだした。広島空には、無気味な大きな黒雲が立ちのぼり、紙や板らしいものが空に舞いあがっている。見る見る全市に火の手があがり、広島は黒い煙におおわれ、赤い炎に包まれてしまった。

この辺の人は広島に通勤する者が大部分で、家族の身の上を案じ、提防から駆け降りる人、提防に上るもの、一瞬に部落は大混乱となってしまった。

間もなく広島全滅の情報があり、正午を過ぎるころとなると、広島から火傷を受けた家族が帰りだした。みな顔面・手・足にひどい火傷をうけている者ばかりである。どの家にも罹災者のいないうちはない。やれ薬だ、やれ医者だと駆けずりまわって、狂人のように、この部落は上へ下への大狼狽となった。夜に至るも帰って来ない人も多数あり、

どの家にも、知人や親戚の罹災者、または避難民でごったがえしていた。

五日市国道は、罹災者の西へ向う行列がつづき、顔面が腫れあがり、両手足はゾウキンのようにぶらりと垂れ下がり、男も女もほとんど全裸、または破れた衣類を着ている。女は下の方を隠そうとはしないで、気もうつろの夢遊病者のように、低い声で「アア」といつている。何をきいても返事はしない。何処から来たかと言っても「アッチ」、何処に行くかと聞いても「アッチ」…。

こんなむごたらしい人の群れが、一晩中続いた。みな底知れない恐怖におそわれてしまった。広島にいる家族四人の者も、あんな姿で、あのおそろしい傷を受けて、死んでしまったのではあるまいかと心配し、嫁と娘は終日泣きながら抱きあって「ドウスル」、「姉さん、どうしたらよいの…みんな死んだらどうすれば良いの…」と、繰り返していた。

その夕ぐれ近く、日通の津田さんが立寄って、お父さんは無事である、お母さんは火傷をうけて救護所に収容せられたと、嫁たちに告げた。この夜は、妻の姉婿の兼本金次郎氏と、軍医で召集せられた秋本(的場町 秋本外科医院)の奥さんが子供を連れて避難して来て、夜の明けるまで恐ろしい話が続いた。長男の博と妹の久子の消息は二日間も判らなかった。

[第七項 佐伯郡廿日市町](#)…735

地区の概要

廿日市町は、広島市の西にあたり、爆心地から約一〇・八キロメートル離れた地点である。

昭和三十一年、廿日市町・平良村・原村・宮内村・地御前村が合併し、翌三十二年・五日市町の一部(佐方)が編入されて、現在の廿日市町に発展した。

廿日市町は古来、宮島との交流深く「宮島杓子」などの郷土工芸品の製造から始まり、現在の木材加工業の隆盛をみるに至った。

国立公園極楽寺山(主峯六七四メートル)は原始林に包まれ、山頂にある古刹極楽寺からは、内海が一望せられ、眼下に宮島が眺められる。

また地域内には、安芸国総鎮守の速谷神社・桜尾城址、あるいは毛利氏と陶氏との合戦地として知られる折敷畑古戦場がある。

地域の面積は四五・七四平方キロメートルで、人口二四、五二八人(昭和四十年十月一日国勢調査)で、近時ますます開発が進んでいる。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日の朝、海面もおだやかでよい風であった。

宮島と地御前(ちのござん)村のあいだの沖に、上空高く白けむりを長蛇のように曳きながら、敵機二機が広島市へむかって侵入して来た。廿日市町役場にいた吉田勇・林竹佐一、宮島にいた広藤鼎、地御前の漁港側にいた吉岡浅太郎など、その侵入機をはっきり目撃した。吉岡浅太郎は、ちょうどそのとき地御前港近くの空地で夫婦一緒に、通称つば網という漁網を干し、網の修理をしていた。

ふと、宮島上空遥かにゴロゴロ、ゴウゴウとかすかに音がするので空を仰ぐと、B29が銀翼を輝かし、白煙を長くえがいて、広島方面へ侵入していた。

いちじ爆音がやんだと思うと、江波山の上空に千切れ雲のような白黒の雲ならぬ爆煙があがった。それが次第にヒョウタンをさかさまにしたような、いわゆるキノコ型の大きな入道雲になり、その最下部から青白色の閃光を発した。とたんにドンドンと物凄い音を響かせた。

吉岡夫婦は、まるで達磨のように投げとばされ、腹が裂けたかのように感じた。体が投げとばされるとき火をあてられたように感じた。仰天してそのまま草原にしばらく転んでいたが、「こうしてはいけない」と立ちあがって、広島市の方を眺めると、各所にモウモウと白煙・黒煙・火煙が立っており、時々、物凄い爆発音もきこえて来た。

同時に、今まで穏やかに風いでいた海面は、江波方面からどす黒い猛烈な嵐が、白波をともなうて押し寄せて来て、異様な海面と化した。

炸裂時、町域の沿岸部の宮内村や地御前村では爆風のため、四五パーセント以上の家屋が、戸障子がとび、壊れ、ガラス窓はこな微塵に砕けた。原村や平良村でもこれと同様で、壁などが落ちた。

八時二十五分ごろ、警防団員林竹佐一は、自動車で広島市に急ぎ向う途中、セメント袋のようなものが一個空中を飛んで廿日市町の岩戸山(山陽高等女学校)付近に落下するのを目撃した。それは敵機からの落下物のように思われたという。

廿日市町からこの日、広島市内へ建物疎開作業のため、五七人出動していたが、被爆により即死者二九人、負傷者二八人を出した。

なお、市内の国民学校の疎開児童は、この町にはいなかった。

二、避難者の状況

六日正午ごろ、広島市から一級国道二号線を伝って、徒歩で避難者がぞくぞくと廿日市町にはいつて来た。

かねて防衛計画により、市の近郊町村への戦災者収容割当ができており、観音町は地御前村へ、天満町は宮内村へというように、受持ちがそれぞれ決められていたが、避難者の行列はあとを絶たず、後にはトラックで輸送されて来たので、予定計画も何もない大混乱をひきおこした。

避難者の大群はみな異様なすがたであり、三〇歳前後の女性は楽々園までトラックで運ばれて来たと言っていたが、頭髮は赤土まみれ、顔面は血みどろ、着物はワカメのように破れて恥部も曝け出し、息もたえだえに走って来た。

この様な避難者が次々と血まみれになって走り来る者その数を知らず、中には、重傷者を軽傷の人が肩に寄せ、あるいは背負って来た。

廿日市国民学校はたちまち収容者で埋ったから、地御前・平良・宮内・原の各国民学校、および串戸会館をも収容所にした。学校の教室や講堂にムシロを敷き、毛布を敷いたところもあったが、ほとんど町民からムシロ・ゴザ・毛布を徴収してこれを敷き、その上に寝かせた。

夕方ごろから、町民の家庭から着物が集められて収容者に一枚ずつ渡された。しかし、それも間に合わないで死んでいく人が続出した。火葬場もすぐ一ぱいとなり、死体の収容ができなくなったので、国民学校の校庭の隅に臨時火葬場を設けて茶毘にふした。

各家から救護に出た婦人たちは、あまりにもひどい姿や臭気のなかながら、多数の収容者のために黙々と立ち働いた。応急手当といっても赤チンキを塗布するくらいのことであった。収容者は口々に、水を水をと叫び声をあげたが、水をのむとそのまま倒れていった。

しばらくして婦人防衛隊の炊出しのにぎり飯が送られて来たが、食器がないので有合せの物にのせて、重傷者には枕べに置いた。軽傷者には各自手で取ってもらい急場をしのいだ。時間が経つに従い食器も毛布もふとも集められ、充分ではなかったが、かなりの措置が取られるようになった。

重態の避難者のなかには、一緒に逃げて来た近親の者から、念仏をとねえ聴かされているという最期の光景も各所にながめられた。

また、精神異常を起した避難者もあり、あちらこちらとまどい歩き、所定の場所に坐っておれず、「私はどうすれば良いのですか」と、絡みつくように救護班の者にたずねたりなどする人も数あった。

ある中年の女性は、すっ裸になって走りまわり、大声で何か言いながら、錯乱状態をむきだしの姿であった。これら精神異常の人々は、多くはまもなく死んでいった。

父母を失った幼い兄弟二人がいたが、兄は一〇歳くらいで重傷であった。弟は七歳くらいで軽傷で、名をケンジと言うらしく、兄はしきりに「ケンジ！水をくれーや」と、喚き叫び苦しんでいるのに、弟のケンジは何もわからず、ただ無邪気に、物珍らしげに走り廻りはしゃいでいた。見る者、その幼い兄弟の姿になみだを流した。

大政翼賛会地御前支部の吉岡浅太郎班長も涙を流しながら、その兄に水を与えようとしたが、医師に注意されて与えることができなかったという。

このような凄惨な状況を繰りひろげながら、八月六日もようやく夜となった。夜は苦しむ被爆者のためにせめてもの蚊遣りを焚き、重傷者にはおかゆの用意もできた。

翌七日、各組の役員は交替で収容所に出て救護活動にあたることになった。

海岸に出てみると、焼けた柱・家具、その他いろいろな残骸が、漁網の張り場もないほど海面を埋めていた。そのあいだにゴム人形のように脹れあがった死体が無数に浮流しており、大きな木材には必ず一、二の学生や男女の死体が抱きついていてた。

地御前港内にも、丸はだかの学生らしい死体やその他男女の死体が五体ほど、岸辺に打ちあげられていた。七日以後も、広島湾沿岸一帯の浜には、かなり永いあいだ遺体が漂流して来て、浜の上に点々と打ちあげられていたが、その遺体の収容をする者がなかった。

地御前の臨時収容所では、被爆直後から数日間は、一日に一〇数人の死亡者がでたが、死体を納める棺は四、五個しかなかったのも、この四、五個をもって火葬場まで運んでは棺をあけて持ち帰り、また遺体を納めて運んだ。これを数回繰返してやっと全遺体を葬ることができた。

吉岡浅太郎・世良六一両名が死体を棺に納める役にあたったが、棺に納めるとき、死体はおおむね火傷のため皮膚が破れ、臭気もはなはだしく納棺の作業は困難をきわめた。思わず顔をそむけることもあったが、とにかく冥福を祈りながら作業を進めた。

この地御前以外の各収容所も同じような悲惨な状況を展開した。殊に海面の惨状も陸上に劣らないほどのありさまであった。なお、市内からの収容者の地区別状況は次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日	備考
廿日市町	廿日市国民学校	八月六日	二、九七九	三五一	廿日市火葬場	九月末日	八月六日に広島市から舟に乗り、重傷者六一人、串戸港に運ばれて来た。
平良村	平良国民学校	八月六日	不明	一七八	平良火葬場	九月末日	
原村	原国民学校	八月六日	三七	八	原火葬場	九月末日	
宮内村	宮内国民学校	八月六日	七一二	一六九	六本松火葬場	九月末日	
地御前村	地御前国民学校	八月六日	一、九四八	二二六	地御前火葬場	九月末日	
宮内村	串戸会館及び増井工場倉庫	八月六日	九一	四二	串戸火葬場	九月末日	

三、広島市救援状況

救援隊出動

町内では多数の避難者の収容作業に全力をあげて努力する一方、各地区の警防団員は救護班を編成して広島市の救援に出動したのであった。まず、廿日市町は、当日から十三日まで八日間、実人員四二人・延三一人が、廿日市町から紙屋町までトラックで乗りこみ、主として大手町一丁目から同町八丁目、紙屋町から鷹野橋までの電車道路の清掃に従事した。

翌七日からは、平良村・原村・宮内村・地御前村の各警防団員が出動し、同じく十三日まで七日間活動した。

平良村は実人員六一人＝延三七九人、原村は実人員三七人＝延二一人、宮内村は実人員五七人＝延三四四人、地御前村は実人員四〇人＝延二三二人であった。

平良村班は、廿日市町から己斐まで電車を利用、そこから徒歩で行き、広瀬町・小網町付近に、原村および宮内村両班は、その村から天満町までトラックで行き、天満町の一帯から小網町付近に、また、地御前村班はトラックで入市し、土橋の電車停留所から相生橋付近にかけての清掃作業に活躍した。ただ、各地区とも避難者を多数かかえていたので、医療救護班は広島市へ出動する余力がなかった。

なお、廿日市町地域に避難した市民が、そのまま地域内に定着居住した状況は、次のとおりであった。

地区名	概数	説明	備考	
廿日市町	五二一人	被爆から昭和二十五年までの世帯数	昭和二十六年以降、広島市の復興するに伴って、次第に、広島市へ復帰する者が出て来て、昭和三十七年十月現在では以下のとおりである。	四一人
平良村	三二五			二七六
原村	二七			二六
宮内村	二〇一			一七七
地御前村	二九二			二一九
佐方	三九			

第八項 [佐伯郡沖美町](#)…742

地区の概要

沖美町は、広島市の臨海地から、南方約二二キロメートルへだたった西能美島に所在する町で、広島湾のほぼ中心地点におたる。

同島能美町・東能美島の大柿町、ならびに東方江田島湾をへだてた江田島町とは、陸続きとなっている。

現在の沖美町は、広島市被爆当時は、佐伯郡三高村と同郡沖村の二か村であったが、昭和三十一年九月三十日、この両村が合併して沖美町となった。同町の美能がんね・絵の島は海水浴場で、また奈沙美は釣場で名高い。

町域面積は、二七・五四平方キロメートル、人口は六、五八四人(昭和四十年国勢調査)で、爆心地からの距離は、至近距離約一五キロメートル、最遠長距離は約二三キロメートルである。

被爆当日、当町から広島市へ通学していた生徒たちは、学徒動員で市内各所の建物疎開作業に出動していた。また、女子挺身隊が舟入町方面、および吉島町方面へ出動していた。

なお、当時は広島市からの集団疎開児童は受入れていなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市へ侵入する敵機の爆音を、かすかに聴いたという住民がいるが、その機影を見た者はほとんどいない。

爆音がきこえても、あまりに毎度のことなので、馴れっ子になり、上空をそのたびに仰いでみるようなことはしなかった。

三高村北岸の、三吉の今田俊造の語るところによれば、相当の高度で、一機南から北に向って飛行するのを見たという。

敵機からの投下物は、何もなかった。

原子爆弾の炸裂時、ピカッと閃光がきて、電力線がショートした事故かと直感された。

閃光後、しばらくしてドーンとかなり大きな爆発音がひびいて来た。爆発音の程度は、往年、毎日正午に当島へきこえて来ていた比治山の午砲(ドン)よりも余程大きな音であったという。

広島市側に面した窓ワクや窓ガラスが、かなり壊れた。しかし、海岸部でも向きによっては、窓ガラス一枚が壊れたという程度のところもあった。

例えば、三高村高祖(こうそ)海岸の耐火煉瓦工場では、工場内に何ら異状なく作業を続けた。

しかし、広島市に面した海岸線道路を、自転車で走っていて、衝撃で身体がハンドルの前に飛んだという人もある。

小高い山畑で、農作業をしていた人は、炸裂時に、広島市に面するがわの片頬が、チカッと少し熱かったと語っているが、樹木や農作物には何らの影響も見られなかった。

三高の海岸からは、日常は似島の山影によって、広島市の東部望見がさえぎられるほかは、広島市の過半が海を距てて展望される。

その日、突然の爆発音・衝撃によって、広島市に何事が起ったかと、海上を望見すると、市の上空に巨大な煙柱がモクモクと立ち昇り、すぐにキノコ型の雲となって湧きあがった。その形のまま雲はかなりの時間を持続し、だいぶ経過してから流れはじめた。

目のあたりにキノコ雲の全容を、住民の誰もがはっきりと眺めたが、みんな皆実町のガスタンクの爆発だろうかと話があった。なかには、その方角がガスタンクよりやや西寄りであると、指摘した人々もあった。

広島市の被爆による当町への飛来物は何もなかった。

なお、この日動員令による建物疎開作業には両村とも出動していなかったが、疎開跡の廃材を持ち帰るために出向いていて被爆した者が若干いた。

二、避難者の状況

六日午後二時ごろ、広島市へ出ていた島の者が戻って来はじめた。

これらは宇品の県営栈橋・市営栈橋からの定期船によって、続々と帰って来たが、中には、自家用船で広島市の本川に碇泊中に被爆し、その帆柱を焼かれて、ホウホウの態でもどって来た者もあった。

炸裂時にちょうど三高村から宇品に向っていた一隻の定期船が、似島付近の海上で、爆撃を見て驚きあわて、そのまま三高栈橋へ引きかえして来た。

翌七日になると、広島市内から続々と避難者が、親類や縁故をたよって来島しはじめた。次々に上陸して来るこれらの避難者は、火傷や負傷の身体にボロボロの衣服をまとい、実にむごい姿であった。

その数は、ほぼ四、五〇〇人に達した。

なお、両村出身者で広島市に居住していた人たちは、その大部分が死亡した。

島の者で、広島へ出向いていて被爆帰島した者も、市内から縁故をたよって来て、各家庭に収容された者も、共にかなりの人数が死亡した。

当地の火葬場は完備していたから、死亡者の火葬には何も支障なかったし、その遺骨はそれぞれの家庭や縁故先の家が引取って安置した。

また、海岸の砂浜には、被爆死体をはじめ雑多な物が打ちあげられた。その状況について、当時、学童疎開で行っていた桧和田紀久子の手記に、「翌日から、島の海岸には、大きな丸太、荒々しい木片、燃え残りの塵、それらに混じって、男や女、またそのいずれさえ分らぬ死体が、水脹れの姿で浮遊し、岸べに打ち上げられた。子どもたちは、『あれ、あれ、ここに、あそこに』と、この異様なさまを見つけしだい大人たちに告げ歩いた。死体には、何時しれず薙がかけられていき、子どもたちのいない遠くの砂場で、石油をぶっかけぶっかけ焼かれた。

島には、連日連夜ヤケドを負った人々が運びこまれ、医者はテンテコ舞いで、垂れ下がったり、脹れあがった火傷の皮をバリバリと剥ぎ、その上に、赤チンキとチンク油を色あざやかにぬった。手も足もズルズルになった火傷患者は、みるみる白い繃帯に包まれ、重病人の姿で、縁者の家々に運ばれた。」とある。

三、広島市救援状況

救援隊出動

翌七日から、連日、警防団員約三〇〇人が、広島市へ出動し、焼跡の各所で多数の死体処理にあたった。

これら救援隊員は、毎朝の定期船によって出動したが、連日、死体処理にたずさわったため、まったく気持ちがヘンになってしまい、身心ともに弱りきった。しかし、現在では健康を取りもどし、異状はない。

四、避難者の定住状況

広島市から渡島避難して来た人々の、相当多数の世帯が、一、二年間は島内に定着居住したが、その後、社会が一応安定しはじめると共に、次第にまた広島へ復帰し、今ではまったく稀となった。

現在、沖美町の被爆手帳交付状況は、特別手帳六二〇人・一般手帳一〇人、計六三〇人となっている。

[第九項 佐伯郡宮島町](#)…746

地区の概要

宮島町は、広島市の西南にあたり、爆心地から約一六・七キロメートル離れた島で、昭和二十五年十一月、厳島町を宮島町と町名をあらためた。全島が特別史跡及び特別名勝都市計画風致地区に指定され、瀬戸内海国立公園に編入されている。島内には一基の墓もない清浄の地とされており、また島の山地は、天然記念物「弥山原始林」として植物生態研究上、貴重な価値があり、民俗学的にも興味深い伝統遺跡が多く、厳島神社の宝物は、平氏の栄華を伝える国宝や重要文化財を網羅している。

町域は、宮島一島で、周囲三〇・九キロメートル、面積三〇・一七平方キロメートル、人口四、二四一人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

宮島の東北岸部、包が浦(つつみがうら)付近から広島市上空に高く立ち昇ったキノコ雲が望見された。

炸裂の閃光と、音響の衝撃を相当ひどく受けたが、当時、包が浦に広島兵器補給廠の分廠があったので、町民はそこが爆撃されたものと思った。

爆風によって、鉄道栈橋付近の民家五、六か所の屋根瓦が少し壊れた。

広島市へ侵入する敵機の目撃者有無については、今では判っていない。

なお、国民学校児童の疎開受入れはおこなわず、この日、広島市内の建物疎開作業にも出動していなかった。宮島町は、八月四日に出動して任務を果たしていたからであるが、学徒はその通学する学校から、それぞれ動員学徒として出動していて、被爆した者があった。

二、避難者の状況

六日午後四時ごろ、己斐方面から徒歩で宮島口にたどりつき、漁船によって、三人五人と罹災した者が島へ帰って来た。翌七日からは、佐伯郡廿日市駅から電車を利用し、宮島口から船に乗って宮島に渡って来た。

八日、似島から船で二回にわたって約三五〇人の罹災者を町内の寺院に収容した。

避難者収容所の状況は、次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の 埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
大願寺 大聖寺 光明寺 存光寺 徳寿寺 宝寿寺 真光寺	厳島町 (現宮島町)	八月八日	五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇 五〇	三三五	佐伯郡大野 町赤崎	八月末日
以上七ヶ寺			三五〇	三三五		

八月末日、収容所を閉鎖後、生存者は広島市へ送り、死亡者の遺骨も引取人のないものは広島市へ渡した。なお、移動演劇さくら隊の丸山定夫が、十六日、存光寺で死亡した(第二巻 二九九ページ)。

広島市からの避難者で、そのまま宮島町へ定着居住したものはおおむね三〇人ほどであった。

なお、宮島町から救護班や警防団員の出動はせず、もっぱら地元で活躍した。

なお、本町出身の動員学徒の死亡者内訳はつぎのとおりである。

動員学徒死亡者数 四六人

(内訳)

崇徳中学校	九	広島市立中学校	四
県立広島工業学校	一	県立広島第二中学校	四
広島高等師範学校	一	山陽中学校	二
県立広島第一中学校	一	県立広島商業学校	一
山中高等女学校	四	西高等女学校	七
広島女子商業学校	五	県立広島第一高等女学校	二
広島市立高等女学校	三	安芸高等女学校	二

三、厳島神社の被害

厳島神社本社などの国宝建造物に対しては被害はなかった。しかし、末社のうち一、二社は被害があったようであるが、記録がないのではっきりしない。

広島市に面した場所、すなわち杉の浦、包が浦各社や今伊勢神社には、多少の損害がみられ、原子爆弾によるものであることが確認されている。

また、長浜神社の社宅の戸障子がはずれたり、屋根瓦が一部飛んだりした。

広島市からの避難者が、神社内に来たということはなかった。被爆三日目、罹災者が多数運ばれて来たが、これも厳島神社ではなく、島内各寺院に収容された(厳島神社野坂元定宮司の報告)。

[第一〇項 佐伯郡大野町](#)…750

地区の概要

大野町は広島市の西南にあり、爆心地から約二〇キロメートル離れたところにある。

昭和二十五年四月、町制を施行して新発足した。大野村時代から地域面積の八割以上を占める山岳地帯に、山林の保護・育成を行いたい、立木や副産物による収益を大きくあげている。

町の東南は大野瀬戸をへだてて、景勝地宮島に相對し、平地部は海岸、および永慶寺川の細長い帯状の流域一帯に沿って、町がひらけている。

林産物農産物のほか、水産業も盛んで「広島かき」・「あさり貝」は特産として名高い。

戦後、生産工場が発達し、各種工場の誘致がおこなわれ、町の近代化を進めている。

観光では宮島口(山陽本線宮島駅)として賑わうほか、地域内に「妹背の滝」があり、天然記念物ベニマンサクの群生地は有名である。

地域の総面積は七〇・三平方キロメートルで、世帯数三、六五八世帯、合一三、一九七人(昭和四十年十月一日国勢

調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

原子爆弾の炸裂のとき、大野町では異様な光線を感じ、続いて強烈な爆風を受けた。戸・障子をたおし、ガラス窓をこわし、激動を身に覚えた(広島県大野町誌)。

大野町字深江の大西栄太郎の体験談によれば、その朝、広島市役所へ退職挨拶に行くため準備をしていたとき、八時のラジオが、広島県内に敵機がいるから警戒を要するというのを放送した。それを聞いて家を出て国道まで行ったとき、ピカッと光った。二、三分後に音がきこえた。

通りかかった道で両側の家のガラス戸のガラスが壊れた。異変を感じて海岸まで出て見ると、広島方面に雲のような煙がのぼっていた。すぐ家に帰ったところ、戸が内側に向って倒れ、タタミの上には煤がたくさん散在していた。前夜、陸軍が火薬実験をおこなうとラジオ放送があったので、多分そのためだろうと思った、という。

また、宮島口駅長の談(原子爆弾災害調査書広島気象台調査報告)によれば、パーッと光ったので、室外に出てみると、白雲がまんまるい火の玉のまっ赤になったのを中心に、渦巻き拡がりだしており、その中心の火の玉の部分は白雲になり、天上高く昇った。三分も経ったかと思うころ爆風が来た。

窓ガラスは三割程度以下の破損である。戸外で爆発に直面した人は、パッと顔面の熱くなったような僅かな熱さを感じた。

炸裂後、火の玉部分のまわりの白い煙状の雲は、高度三、〇〇〇メートルくらいを急速に波状をなして拡がると見るまに爆風を受けた。のち暫くして市の中央に火災の煙昇る。その後数個所に火の手がのぼり、一晚中燃えつづいた。

また、大野浦付近の住人の談(前同書)では、光った瞬間、海上で顔面が温かった。爆風が来て大野駅裏付近の家屋、および工場のガラスが壊れたが、丸石の陸軍病院付近は壊れなかった。広島の方に真黒い煙が立ち、相当高く昇り、段々白くなったという。

なお、この日、大野町の義勇隊は建物疎開作業には出動していなかった。七日が出動予定日となっていて命拾いをした。

二、広島市救援状況

救護状況

広島市被爆の報を受けて、当日すぐ大野町からも救援の手をのぼしたが、市内は己斐以東に進むこともできず、救援隊はむなしく雨に打たれて帰って来た。

それから毎日負傷者が大野下国民学校に運ばれ、一六教室を収容所にあてて、医師四人・軍医四人と女子青年団員・婦人会員、その他僅かに残る男子の地元奉仕者によって介抱したが、その惨状は筆舌につくしがたいものであった。

ゆでダコのように焼けただれた皮膚からは、ウジがわき、腫れた身体は、男女のけじめさえたためという有様で、日々数十人ずつ、トラックに乗せられては、当時夏休み中の大野下校の救護所に運ばれ、日に数人ずつ死んでいった(広島県大野町誌)。茶毘に付した死体は約二五〇体と見られる。

収容所としては、前記大野下国民学校のほかにチチヤス牧場・大野病院・大野西国民学校・西教寺などにも急設された。チチヤス牧場には、暁部隊の病弱者が駐屯していて、そこへも多数の負傷者が収容されたが、ここでも、ずいぶんの死者があつて、つぎつぎに火葬がおこなわれた。そして引取人不明の遺骨は後に広島市へ移送した。

広島原爆医療史に、広島市に隣接する佐伯・安佐・安芸などの各郡の医療関係者は、被爆とともに避難を始めた市民の長い行列が続き、街道にも農家の軒下にも、あふれるような始末であったから、医療班の広島市への出動はおろか、自宅や近辺の国民学校などで、救護に従事するのさえ人手不足で意のごとくならなかった、と記載されているが、この大野町も例外ではなく、地元における救護活動で動きがとれず、広島市救援の医療団は出動しなかったようである。

国民学校へ収容された人々は、軍人・軍属並びに民間罹災者多数の混合であり、九月下旬までは、これら学校も国民学校ではなくて、陸軍病院の分院といった性格のものになっていた。

地区の概要

湯来町は、広島市の西北に位置し、爆心地からの距離は約二二キロメートルである。昭和三十一年九月三十日、砂谷(さごたに)・上水内(かみみのち)・水内(みのち)の三村が合併して町制をしいた。

太田川の支流水内川の流域、および八幡川の上流域を占め、水内川は岩魚と鮎のすぐれた産地であり、わさび・椎たけ・こんにやくなど山菜や酪農産物でも名高い。

湯来および湯の山温泉はずっと古い時代から親しまれて来たところで、厚生省国民保養温泉として現在でも県下唯一を誇っている。

町の総面積は一六一・三三平方キロメートル、人口は七、四八六八(昭和三十九年十月一日国勢調査)で将来、高原地帯の開発と共に、広島市の郊外休養地として発展する可能性がある。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日の朝、突然、一大音響が聴こえてきた。砂谷地区からは、山合いの関係で視野がきかず、炸裂のキノコ雲は見えなかったが、村民らは、火薬庫の大爆発か、よほど大きな砲撃かと感じた。わずかに雨が降ってきた。

村役場の障子が、音響と同時に倒れた。午前十時ごろ、相当ひどく焼けた紙片が飛来したが、それはどこかの事務所の伝票の破片のようであった。

水内村役場付近では、稲妻のような光と共に大音響がきこえ、役場の窓ガラスなども軽震程度の音をたてた。被害は別になかったが、村民は互いに戸外に飛び出し、広島方面が爆撃されたのではないかと話しあった。

高さ五〇メートルばかりの山林で、木材の伐採に従事していた人のいうところによれば、大きな立木が爆風にあって倒れんばかりであったのにおどろき、大事がおこったと思い、おそろしくなったので、仕事をやめて帰って来たと話している。

爆発後、数分たって東北方面、祇園町方面の空かと思われる山頂から入道雲のような雲がムクムクとのぼり、次第に空一面をおおい、大粒の雨がパラパラと降って来た。

十時、ころから十一時ごろにかけて、広島通信局の文書らしいものが、夕やみのようにうす暗くなった空から、黒焦げになってたくさん飛んで来た。

上水内村では、山林などで作業中の者が、人体に何かサァーとあたる風と青光りを感じた。草木も風でなびいたが、別に被害はなかった。

爆発音と共に黒煙が東の方向の上空に立ち昇り、たちまちにして日蝕のように太陽も見えず、薄暗やみとなった。

正午前後、東方上空から薄暗やみの中を、小風に乗じて通信済みの郵便葉書、商店の伝票、その他広島市内からの紙片が、多数飛来した。

当時、各村には、次のように天満国民学校児童が疎開していた。

所在地	収容場所	児童数	収容年月日	閉鎖年月日
砂谷村	大通寺	四五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
砂谷村	西光寺	四五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
砂谷村	最広寺	四五	昭和二十年四月十九日	昭和二十年八月二十日
砂谷村	正楽寺	四五	昭和二十年四月十九日	昭和二十年八月二十日
水内村	明法寺	四六	昭和二十年四月十九日	昭和二十年九月二十日
水内村	妙安寺	二五	昭和二十年四月十九日	昭和二十年九月二十日
水内村		二五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年九月二十日
水内村	常福寺	二〇	昭和二十年四月十日	昭和二十年九月十五日
水内村	一松寺	二五	昭和二十年四月十日	昭和二十年九月十五日

校名不詳であるが、上水内村の各寺院にも国民学校児童が疎開していた。

所在地	収容場所	児童数	収容年月日	閉鎖年月日
上水内村	万正寺	三五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	西法寺	二五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	善福寺	五〇	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	正円寺	三五	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	内尾谷分校及び八幡神社	三〇	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日
上水内村	大福寺	四〇	昭和二十年四月二十日	昭和二十年八月二十日

二、避難者の状況

広島市内から避難者が押し寄せるといことはなかったが、村民で広島市へ出ていて被爆した者や、村内の親類を頼って来た者が無残な姿でたどりついた。

六日当日は、一応五日市町や観音村の収容所へ運ばれたり、休み休みただ自力で、海岸の鉄道線路、電車線路を伝って歩いたりして、翌七日になって、砂谷へは午前十時ごろ、水内へは午後五時ごろ、やっと辿りついたのであった。

ひどい者は着物などほとんどまわず、ただパンツだけ、その他はボロボロに裂けた布ぎれをひっつけた姿で、顔・手・足など血にまみれていた。これが八月十五、六日ごろまで続いたが、到着してまもなく死んだ者も多い。

なお、六日当日、各村とも広島市内の建物疎開作業へは出動していなかった。

三、広島市救援状況

救援隊出動

水内村では、六日ただちに広島市救援のため、警防団・防衛隊を召集し、徒歩でその夜出発した。水内から砂谷を通り、楽々園に出て五日市町を経て、草津で佐伯郡防衛隊と合流したのは七日の昼ごろであった。草津の寺で休んで市内へ入ろうとしたが入れず、そこで解散した。

八日また徒歩で警防団員二五〇人、家庭防衛隊員一〇〇人が出動、市の西部地区で活動した。

上水内村では、七日、村から玖島・廿日市町經由徒歩による者、あるいは砂谷村經由で自転車やトラック便乗などの方法で、警防団一八〇人、義勇隊員三六〇人が出動し、市内己斐町方面から天満町・紙屋町・宇品方面にかけて、地方事務所長の指揮により、食糧配達その他の任務に活動し、午後八時ごろ帰村した。

砂谷村では、七日から十日まで四日間出動した。警防団員一五〇人、家庭防衛隊員四五〇人が毎日、砂谷村から原村・平良村をへて廿日市町に出、徒歩あるいは電車で市内に入り、消火作業や死体の処理、負傷者の救護にあたった。

なお、親類など頼って来た避難者で、そのままその場所に定着居住した者が、砂谷村一二世帯、水内村一五世帯、上水内村四五世帯あった。

[第一二項 佐伯郡能美町](#)…758

地区の概要

能美町は、広島市の南、爆心地からの距離は約二三キロメートルの地点にあり、広島湾上にうかぶ島の一つ能美島三か町の中央に位置している。

昭和三十年四月一日、高田村・中村・鹿川町(かのかわちょう)を合併して新しく発足した町である。

高田・中村は風光温かな江田島湾に面し、鹿川は鹿川湾から安芸灘を距てて遠く大島を望む。水産業が盛んで、特にイワシは煮干鰯として各市場に出荷され、その名が高い。近年はカキ養殖も発展し、東京方面にも進出している。

中村(現在中町)の港に近い崖上にある廻船問屋下田屋敷は明治三十八年、鈴木三重吉が学生時代に訪れ、処女作「千鳥」を執筆したゆかりの家である。

町の総面積は一六・五四平方キロメートル、人口は八、二二九人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日の朝、この町でも、突然、強烈な閃光と熱を感じ、そのあと爆発音と共に強い爆風を受けた。

広島市に最も近い高田地区では、警防団の山本久市団長の語るのによれば、ガス会社のガスタンクが爆発したかのように直感し、広島市の上空にはモクモクと黒煙が昇っているのをはっきり望見したという。

道を歩いている人が爆風によって身体ごとよろめいたし、窓ガラスの破損した家も一部にはあった。しかし、農作物には被害がなかった。

市内へ侵入する敵機を目撃した者はなかったが、原子爆弾炸裂後に爆発音だけきいたという者がある。

この日、鹿川村から、広島市の建物疎開作業に三人出動していたが、被爆によりそのうち二人が即死、一人が行方不明となった。

なお、当時鹿川村においては、都市から疎開による人口流入のため、学校では教室が不足する状況となり、県(佐伯地方事務所)より広島市内国民学校の建物疎開した建材が必要なら無償で払下げする旨の通知に接し、五日に大島助役が広島市の現地に赴き建材を受取った。翌六日、当村の港から貨物船の出航を依頼し、広島市の本川に入航、荷役の準備中被爆し、船長・荷役人夫及び船長の子供(二人)が即死し、助役は行方不明(死亡)となった。

なお、能美町には、広島市の国民学校児童の疎開はなかった。

七日になって、被爆者が親を求めて、また肉親を求めて帰って来た。この年は赤痢の発生があったが、その患者の多くは被爆者であった。患者数は確かでないが、鹿川村で七、八人ほどいた。

広島市に島から出ていた世帯で、被爆後、引きあげて来て、そのまま定着居住した世帯が、鹿川村四〇世帯、中村三〇世帯、高田村二〇世帯ほどあった。

二、広島市救援状況

救援隊出動

医療救護班として、鹿川村から医師・看護婦など五人が、六日当日から九日まで四日間連日、別船を仕立てて出動した。鹿川港から宇品港に上陸し、徒歩で爆心地一帯に行き、救護活動にあたった。

一方、警防団は、江田島警察署から、応援協定に基づく、非常出動の要請があり、鹿川村は六日当日から、高田・中村両村は七日から十三日まで救援に出動した。

鹿川村出動員数一〇人延七〇へ高田村二〇人延一四〇人、中村一八人延九〇人(この村は五日間)で、医療団と同じく別船仕立てにより宇品港に上陸、徒歩で爆心地に行き、半径三キロメートル以内の各地区で救援活動に挺身した。

[第一三項 佐伯郡大柿町](#)…760

地区の概要

大柿町は、広島湾と安芸灘に横たわる能美島の南部に位置し、広島市の南にあたり、爆心地からの距離は約二六・二キロメートルである。

昭和二十九年十一月三日、深江村・大柿町・飛渡瀬村(ひとのせむら)の三か町村を合併して新発足した町で、能美島の政治・経済・文化・教育などの中心地である。

北東は江田島と隣接し、北部の一部は江田島湾に、東南部は倉橋島と接する。また西部は大黒神島を見通して、遠く山口県岩国市と相対している。

地形はほとんどが丘陵山嶺地帯で、陀峰山(四三二・六メートル)はもっとも高い。沖積作用ないしは人工埋立てによる平坦地や傾斜地に集落が発達し、段々畑は山頂まで続いている。

町の総面積二六・二七平方キロメートル、人口一四、二〇七人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機を、大柿町役場の職員中本浅夫ほか一人が、大柿町と深江村の出張先で目撃した。

建物内の廊下で、サッというなま温かい風が吹いて来たあと、しばらくして爆発音をきいた。

また一人は室内にいて、電光のような強い光を感じ、屋外に出てみると、約一四、五秒後ににぶい爆発音をきいた。さらに五秒後に人体に感ずる爆風があったという。深江村では、爆発音をきくと同時に、家に地響きによる振動のようなものがあった。

広島方面を見ると、炸裂後五分くらいであったろうか、遠くの山の上空に白煙のあがるのが見えはじめた。初めは江田島の火薬庫の爆発かと思われるほど近く感じたが、やがて、白煙は雲のように拡がっていき、それが上昇し、次第にあざやかなキノコ雲となっていくのが、はっきりと望見された。

なお、広島市から爆風に乗って紙ぎれなどが飛来するということは別になかった。

この日、広島市の建物疎開作業に各地区から出動していたが、大柿町では出動者五人のうち一人は即死、四人は負傷した。深江・飛渡瀬地区の出動者の状況は不明である。

この町へ広島市の被爆者は直接には避難して来なかったが、八日ごろから、町出身者が被爆して生活の場を失ったため、帰郷して来はじめた。これらは宇品港から船で小用へ上陸して帰町した。しかし、そのまま定着居住するということはなく、広島市が復興すると共に、また出ていったようである。

二、広島市救援状況

救護活動

医療救護班は出動しなかったが、警防団が六日当日から七日夕方まで出動して、救護活動をおこなった。

深江村五人延一〇人・飛渡瀬村五人延一〇人・大柿町二〇人延四〇人が、六日午前十一時ごろ、江田島警察署から

連絡あり、車で迎えに来たのでそれに乗車、江田島へ出て、そこから船で宇品港に上陸し、徒歩で入市、袋町・紙屋町・相生橋間の被爆死体の処理にあたった。

[第一四項 安佐郡祇園町…762](#)

地区の概要

祇園町は広島市の北方に隣接し、爆心地からの最短距離は約三・二キロメートル、最遠長距離は約六・七キロメートル、総面積一五・〇七平方キロメートル、人口二五、八一二人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。当時は農耕地帯で、広島市の野菜の供給源として重要な役割を占めていた。また一面、三菱重工業株式会社第二〇製作所と油谷重工業株式会社とが、軍需品を生産し、軍需工場としての意味も大きかった。したがって、平穏な農村ならば格別空襲を恐れることも少ないが、軍需工場がある以上、当町への空襲は必至と思われていた。各会社には職域救護班が編成され、町内にも防空体制が強力に敷かれるなど、あわただしい日常であった。

なお、広島市内国民学校学童の疎開の受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日、敵機が広島市牛田山の方向、約一万メートルの上空から、高度を下げながら侵入し、反転するかのように方向を転じて呉方面へ飛び去る機影が見られた。この機影は、爆撃直前、気象偵察飛行にきたものと考えられる。

原子爆弾の炸裂時には、爆心地から四キロメートル以内の家屋は、屋根瓦を吹きとばされ、天井もまた吹き破られ、壁は用をなさない程度に破壊され、建具のガラスで破壊されなかったものはほとんどない。建物の開口部が爆心地に面している家では、内部もかき廻されたようになり、タンスは倒れ、棚の品物が散乱して足の踏み場もない有様であった。四キロメートル以上の地域では、被害程度も次第に減少しているが、なお爆風のすさまじさを示すいくつかの事例があった。

建物内にいた者の中には、家財道具と共に倒されたり、場所によっては倒れた壁の下敷きになった者もあった。建物の外にいた者が、数メートルも吹きとばされたことがいつまでも話題になった。

当町では、熱線によって火傷したという人は聞いてはいないが、長束地区(三・五キロメートル以内)の藁葺の屋根は、熱線によって自然着火し炎上した。長束の山や、牛田町の山に、火の手が上っているのが望見された。

炸裂直後の雲はたちまち傘のような雲になった。しかも急速に巨大な「キノコ雲」に発達し、天を覆う感があった。

閃光後約一時間ぐらいたったころ、雨が降ってきた。広島市に近い所では土砂降りが二時間以上も続いたが、遠い地区ではパラパラの雨であった。

なお当日朝、動員令による建物疎開作業のため出動していて多大の犠牲を出したが、その出動状況は、つぎのとおりである。

出動先	出動者	即死者	負傷者	行方不明	備 考	
天満町・小網町	二三六	二一九	一七	〇	三菱重工業株式会社第二〇製作所	両社編成の職域義勇隊として出動
水主町・天神町	一六一	一二八	〇	三三	油谷重工業株式会	

即死者数は、被爆後数日間における死亡者数を含む。

二、避難者の状況

当町へ、広島市中から被爆者が避難したのは、六日午前九時ごろから始まり、翌七日夕刻まで間断なく続き、その数は恐らく三、〇〇〇人を超えたものと推定される。被爆者は新庄橋、大芝町からきた者、己斐町、戸坂村を迂回してきた者もあって、その経路は一定しておらず、また、必ずしも祇園町を目標に避難してきた人たちではない。火災のない安全な地を求めたり、危険だという噂の地区を避けて逃れてきたところが祇園町であったというのが実情であろう。したがって、他に頼るべき縁故のある人や、当町にもなお安心して居れない人は、可部町方面へさらに北上していった。

これらの人々は、交通が途絶していたので、そのほとんどが徒歩であったが、少数の人は川舟に乘せられてきた人もあった。それにしても避難者の形相はこの世の人とは思えない空恐ろしいものであった。引き千切れた衣服、物凄く大火傷、その上黒いゴム状になって垂れ下がった焦げた皮膚、死線をさまよう歩きぶりなど、再びこの世で見ることのできないものであった。

避難者の収容所の開設ならびに埋火葬状況はつぎのとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
油谷重工救護所	祇園町南下安	八月六日	二六〇	二〇〇	工場から百米離れた畠の中	八月二十日
祇園青年学校	祇園町北下安	八月六日	八〇〇	一〇〇	北下安安川の豊島橋河畔	八月二十日
三菱重工臨時救護所(会社診療所及び寮に収容)	祇園町南下安	八月六日	一、〇〇〇	二〇〇	北下安町立火葬所及びその付近	八月末日

ほのぐらき収容所の廊下　生きながら死体と共に寝てうめけるも　栗原貞子(短歌)

引取人のない遺骨は無縁墓地に合祀されている。墓地の所在地は祇園町南下安。

なお、避難者がそのまま定着居住した世帯は、三五世帯である。

三、広島市救援状況

救援隊出動

救護班出動人員概数

町内にある三菱重工業株式会社第二〇製作所及び油谷重工業株式会社の職域救護班が、トラック、川舟または徒歩で入市して、材木町及び天神町で、多数犠牲者の救護に当たった。

三菱重工業(株)の救護班

	実人員	期間	日数	延人員
医師	一	八月六日～八月十二日	七	七
助手	二	八月六日～八月十二日	七	一四
看護婦	一五	八月六日～八月十二日	七	一〇五
その他	三五〇 二〇〇		四 三	一、四〇〇 六〇〇

油谷重工業(株)の救護班

	実人員	期間	日数	延人員
職員	一三〇	八月六日～八月十一日	六	七八〇

なお、被爆当日早朝から、広島市内の家屋疎開作業に多数の町民が、それぞれの職場から、職域義勇隊として出動していて、そのほとんどが被爆死したし、また市内から負傷者が町内に殺到して来たため、その救護にあたらねばならず、警防団・国民義勇隊・婦人会・一般住民などが、市内に出動する余地はなかった。

[第一五項　安佐郡安古市町](#)…767

地区の概要

安古市町は、昭和三十年七月一日古市町と安村が合体して、安古市町として誕生した。当町は広島市の北方にあって、爆心地から最短距離が約六・二キロメートル、最遠長距離が約一一・二キロメートル、面積一九・二五平方キロメートル、人口一三、四〇〇人(昭和四十年十月一日国勢調査)の農村である。

なお、広島市内国民学校学童の疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機を目撃した者がいたかどうかは、はっきりわかっていない。

原子爆弾の炸裂の影響は、戸をたてきった家が開け放しの家よりも被害が大きかった。戸をたてきった家の戸や障子は大破したうえ、飛散したガラスの破片が柱や家具に深く突き刺さり、容易に取り除くことができない程であったし、天井は全体が吹き上げられた。屋根瓦も魚のウロコを逆立てたように配列が乱れ、一部破損した。修復も意の如くならず、その後雨漏りに悩まされ続けた。幸運にも被害らしい被害を受けなかったわずかな家屋を除いて、被害家屋は約一、七三〇戸、九五パーセントにものぼった。

野外にいた人は、爆風と同時に地に伏せたが、一様に口中に多量の砂を吸い込んでいた。これは激しい爆風のショックで吸い込んだものであろうが、当時は、何とも説明のつかないことであった。

凄絶なキノコ雲の状況を、古市町のカンダ橋たもとから、松重三男(レントゲン技師)が、正確に写真にとらえている(第二巻に所載)。また、正午には、黒煙のもうもうと立つ状況も撮影した。

なお、当日午前九時ごろ、広島市方面から、多数の紙片や焼けた布切れが降ってきた。

建物疎開作業隊の出動状況は次のとおりである。

当時の行政区域名	出動者数	被爆による被害者数			備 考
		即死者	負傷者	行方不明	
中州地区義勇隊	五一	二五		二六	出動場所 水主町県庁付近
安地区職域義勇隊	一七	八		九	
安(小瀬)地区地域義勇隊	一五	五	一	六	
古市地区職域義勇隊	一七	七		一〇	
古市地区動員学徒	七七	三〇	三	三五	
安地区動員学徒	五五	二〇	二	二三	

古市義勇隊は一日違いで出動しなかった。

二、避難者の状況

六日の午前九時ごろから避難者が殺到しはじめ、十二時ごろから重傷者が数を増した。こうして八日まで避難者が絶えなかった。

避難者は炎熱の中を歩いて避難してきた。途中の祇園町の救護所に収容しきれなかったり、なお先へ逃れたい気持ちから当町までやってきた人々や、やっとの思いで縁故先に辿りついた人々であるが、いずれも見るにたえない悲惨な姿であった。

広島市の広瀬地区のものは古市へ、三篠、三滝地区のものは安村と避難先が直ちに決められた。古市櫻鳴国民学校に開設した収容所には、午前九時を過ぎたころから正午ごろまでの間に、実に一、五六〇人の避難者を受けつけた。

当日、身元引受人に引き渡した人員は八五〇人で、翌七日、一二五人を引渡し、引受けのない残りの避難者五八五人は、青年会館及び学校の一一教室を応急収容所として収容した。

大須国民学校に殺到した避難者は約二四〇人であった。付近の住民は総出で救護・炊出しにあたった。避難者は、ひとまず教室に六五人を収容し、残りは付近の民家に分散収容した。

翌七日、重傷者は安国民学校に移した。一部の人は、親せき縁故を頼って散って行ったから、収容者数は次第に減少した。

収容所の開設ならびに埋・火葬状況

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
櫻鳴国民学校	古市町大字古市	八月六日	五八五	一一五	古川河原	九月三十日
大須国民学校	安村大字中須	八月六日	六二	一八	山中火葬場	八月十三日
安国民学校	安村大字上安	八月六日	五〇	四〇	山中火葬場	十月二十七日
正伝寺	安村大字相田	八月六日	三八	一二	山中火葬場	八月二十九日

なお避難して来てそのまま定住した世帯はなかった。

三、広島市救援状況

救援状況

(1)医療救護班は地域内で活動したため、出動できなかった。

(2)警防団出動状況

古市町

イ、期 間 八月六日～十五日 延六二〇人

川舟によって入市

ロ、作業場所 上柳町防空本部

常葉橋付近

袋町国民学校付近

宇品町～十日市町

宇品町～海田市町

安村

イ、期 間 八月六日～十三日 延四二〇人

川舟により入市

ロ、作業場 三篠町、三滝町、水主町 各二日間ずつ

地区の概要

佐東町は、広島市から北方にあたり、昭和三十年七月一日、八木村・緑井村・川内村が合併して、新しく発足した町である。

地域面積は一六・〇四平方キロメートル、人口は一一、五四〇人(昭和四十年国勢調査)である。

爆心地からの距離は、最短距離約七・二キロメートル、最遠長距離約一三・七キロメートルへだたっている。

広島市からの国民学校児童の疎開は受入れていなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日朝、東南の上空約八、〇〇〇メートルの高度に、敵機二機を発見した。しかし、ことの重大さを知る由もない村民は、ただ機影を見たというだけの印象であつたにすぎなかった。

原子爆弾搭載機の随伴機から投下された落下傘が、安佐郡亀山村方面に落下するのを認めた人は多い。

爆弾の炸裂時、爆風が襲いかかって来ると同時に、激しい音をたてて窓ガラスが破壊され、ほとんどの民家は、天井が二、三寸吹きあげられ、屋根瓦が飛ぶやらして、見るかげもないありさまとなった。村民には、まるで降って湧いたような事態の発生で、みんな驚きあわてた。

爆風は熱風のようにあつたが、農作物には何らの異状もなかった。

南方まじかに、奇怪な煙の柱が、モクモクと発達しながら上昇し続けるのを見て、やはり広島市の方に、何か大へんなことが起つたに違いないと、人々の不安はつのるばかりであつた。

この日、広島市内の建物疎開作業のため、川内村から義勇隊約五〇〇人が出動していた。作業場所は、中島新町、およびその付近であつた。

五〇〇人のうち、先発隊約二五〇人は、炸裂時までに、すでに現場に到着しており、作業に着手していたと考えられるが、隊員は全滅という惨劇であつた。これは一挙に未亡人世帯の発生となり、多数の家庭を破壊した。後続の二五〇人は、行く途中で被爆し、約二〇〇人が負傷、残り五〇人は無傷で帰って来た。

緑井村は、前日の五日に出動しており、この日は非番で出動しなかった。

八木村は、高田郡の飛行場の作業の方へ出動していたから被害皆無であつた。

炸裂下の広島市から、爆風によって当地域へ飛来したものが、あつたかどうかについてははっきりしない。

二、避難者の状況

六日午前十時前ごろから同日午後八時ごろまでにかけて、避難者が陸続として絶えなかった。

夕がた、トラックで運ばれて来た負傷者のほかは、ほとんど徒歩でやって来たが、その異様な風態を見て村民一同、初めはあつけにとられていた。避難者から広島の惨状をつぶさに聴くにおよんで、事態のただならぬことを知り、急ぎ収容所の設置に取りかかったのであつた。

当地区に設置した収容所の受入れ状況は、つぎのとおりである。

収容所名	所在地	収容者数	死体の 埋火葬数	埋火葬場所	収容所開設期間
八木国民学校	八木村	八〇	一五	太田川の河原	八月六日から八月末日まで
浄楽寺	八木村	三〇			
民家(割当)	八木村	二〇〇	六〇		
緑井国民学校	緑井村	三〇〇	一〇〇		
民家(割当)	緑井村	二〇〇	五〇		
今井病院	緑井村	三〇〇	八〇		
川内国民学校	川内村	一五〇	三〇		
川内公民館	川内村	一〇〇	二〇		

なお、この地域に避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、川内村一〇世帯・緑井村一八世帯・八木村二一世帯である。

三、広島市救援状況

救護状況

この地域は、広島市内から安全地域に脱出する主要避難路の一つにあたつたから、避難者がひきもきらず流入した

ので、住民はあげて救護活動を展開した。

地域内に集った負傷者の救護に手いっぱい、広島市内へ直ちに、救護班が出動するということはできなかった。ただし、警防団員三〇人が、八月八日に出動し、被服支廠・兵器支廠・広島市役所などの臨時救護所において救護作業に従事した。

出動するにあたっては、電車で八木から三滝町まで行き、そこから歩いて作業現場まで行った。

第一七項 安佐郡安佐町…774

地区の概要

安佐町は、昭和三十年三月三十一日町村合併により、久地村・日浦村・小河内村・鈴張村・飯室村が合体したもので、人口九、一五〇人(昭和四十年年度国勢調査)、面積一〇七・九三平方キロメートルである。爆心地から最短距離は約一〇・二キロメートル、最遠長距離は約二四キロメートルある。広島市の北方にあって、原子爆弾投下機は当町の上空を通過して飛び去ったといわれている。

なお、広島市内からの疎開児童の受入れ状況は、次表のとおりである。

受入れ場所	所在地	児童数	受入れ年月日	閉鎖年月日
長覚寺	鈴張村	三六	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月六日
称名寺	鈴張村	五五	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月二十日
妙法寺	鈴張村	三〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月六日
万福寺	小河内村	一〇〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月十日
安楽寺	小河内村	七〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月十日
正法寺	久地村	二〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月十日
西正寺	久地村	*五〇	昭利二十年五月一日	昭和二十年八月十日

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市襲撃の敵機を目撃した者はいなかった。

閃光に驚いて屋外に飛び出し、どうした閃光だろうかと取り沙汰しているうちに、広島市の方角から白い布切れが落下して来るのを発見した。その白いものは、亀山村の山林に姿を消した。当時、飯室村に滞在していた広島兵器支廠八田隊の軍事任務についていた憲兵隊の話だと、爆発物をつけた落下傘だということであった。

閃光があつて何秒か過ぎると、突然強烈な爆発音と共に、爆風がたたきつけるように吹きつけた。爆風は小さな砂を巻きあげて、顔や手足の露出部分に突き刺すように吹きつけた。飯室村毛水部落の者で、身を隠すべく家へ向かって走りながら振り向くと、広島の方から村の方へ、白い綿のような大きな雲が凄い勢いで移動してくるのが見られたという。想像に絶する強烈な爆風に見舞われて、誰も気が転倒してしまった。

建物の被害は、日浦村筒瀬付近に、建具・窓ガラスの破損が相当数あり、天井の落下が若干あったほか、他の地区ではなかった。また農作物の収穫も例年と変るところなく、樹木にも異状は認められなかった。

爆発音を聞いて五分も経過したころであろうか、幕の内峠と森山の間(この方角は広島市に当る)に、鮮明な白雲があたかも「松タケ」の型で立ち昇った。

およそ三〇分近くたったころと思うが、この「松タケ型」の白雲は、黒紅色に変わった。その方角に、砥園町の三菱精機株式会社があるので、住民は三菱がやられたと思っていた。それからしばらくすると、白雲が立ち昇った地点の上空は、一面黒い煙に覆われた。そのうちに、当地区の上空もまた黒煙に覆われ、辺りは夕暮同様の薄暗さになった。

午前十一時ごろから午後二時ごろまでの三時間、凄い勢いの雨が降ってきた。それは黒い雨で、濡れたシャツを乾かすと無数の黒い斑点が付着していた。

なおこの日、動員令による広島市内の建物疎開作業へは出動しなかった。ただし、五か村とも、高田郡郷野村飛行場に出動した。

六日午後四時、広島市から、避難者が来はじめ、八月十一日まで、トラックで続々運ばれてきた。被爆者の身なりは、切れ切れになった衣服をそのまま着用して見る影もなかったが、負傷個所は簡単な手当を受けていた。手当といってもまことに粗末なかざりで、顔を火傷した人には目、鼻、口だけ開けてガーゼを巻きつけた程度、手足を火傷した人には、油または赤チンを塗った程度の手当がしてあったが、それは治療という概念にはほど遠いものであった。

避難者収容所ならびに収容中の死者数

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の 埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
長覚寺	鈴張村	八月八日	一五〇	九〇	鈴張村字市火葬場	九月七日
飯室国民学校講堂	飯室村	八月六日	八〇	三五	幕の内峠県道付近	九月十日
養専寺	飯室村	八月六日	六〇	四〇	幕の内峠県道付近	九月十日
教雲寺	日浦村	八月六日	一〇〇	六〇	教雲寺付近の畠	九月十日
久地国民学校教室	久地村	八月六日	三〇〇	一八〇	久地村本郷火葬場	九月十日
小河内国民学校教室	小河内村	八月六日	一五〇	一〇〇	学校近くの山林	九月十日

なお、昭和二十一年三月、飯室村と亀山村との村境にある竹坂部落で、耕作中の農夫が、長さ二五センチメートル、直径一〇センチメートルぐらいの円筒を発見した。それは軽金属製で、塗ってあったブルーの塗料もほとんど剥げかかっており、かすかに U・S・A の文字が判読できるぐらい古びたものであった。中にコイルが僅かに覗かれた。

被爆以来、爆発物に対して、極度に恐怖を抱いていた村民は、その地点になわを張り巡らして近寄らなかった。部落の代表者が役場に届け出たので、役場ではアメリカ軍の兵器だろうということで警察に引き渡した。後に警察からアメリカ空軍の信号器だと知らされた。

二、広島市救援状況

救援状況

(1) 救護班は出動しなかった。

(2) 警防団出動状況

村名	出動期間	出動日数	延人員	作業場所	出動方法
鈴張村	八月七日～九日	三	一八〇	相生橋一帯及び中広町中央橋	トラック
久地村	八月七日～十日	四	二八〇	相生橋一帯	トラック
小河内村	八月七日～十日	三	二七〇	横川町・十日市一帯	トラック
日浦村	八月七日～十日	四	二〇〇	横川町・十日市一帯	トラック
飯室村	八月七日～十日	四	三二〇	横川町・十日市・相生橋一帯	トラック

鈴張村の警防団が、中広町中央橋付近に罹災者収容のためのバラックを建てたほか、他は何れも罹災者の収容と死体の処理が主な仕事であった。

なお当地区の避難者の定着世帯は、つぎのとおりである。

鈴張村	一〇世帯	久地村	一五世帯
飯室村	二〇世帯	小河内村	一〇世帯
日浦村	二〇世帯		

[第一八項 安佐郡沼田町](#)…779

地区の概要

沼田町は、広島市の西北に位置し、爆心地からの距離は約一一・八キロメートルである。

昭和三十年四月一日、伴村と戸山村が合併し、沼田町として発足した。

町の四周に標高三〇〇ないし六〇〇メートルの連山をめぐらし、さらにその中央をほぼ東西に走る山脈によって、町内が大きく二つの地区に分かれている。その北の地区には、吉山川、南の地区には安川が東に流れて、太田川にそそいでいる。

町の総面積は六七・〇九平方キロメートルで、人口は六、一二〇人(昭和四十年度国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

伴村の川崎義男は、役場から侵入敵機を目撃した。

突然、閃光が走り、巨大な爆発音が聞こえ、しばらくすると、広島市の上空に、実に巨大なキノコ雲が昇るのを望見した。それが次第に大きくなっていくので、ただごとではない事態が勃発したことを直感した。

字名大塚の市本秀子(当時二〇歳)は、自宅の中座敷に病気で臥床していて、炸裂の閃光を感じた。朝から非常に暑く、部屋の障子を全部あけて、遠くをボンヤリ眺めていたところ、ちょうど、その時、警戒警報のサイレンが鳴り出した。ああ、また B29 が来たかと、空を見ていると、向うの山の上の方に白い雲のようなものが、フワッと湧いた。

次の瞬間、大きな火炎がグワッと立った。紅蓮の炎というか、美しいハスの花が咲いたような型というか、緑の山の上で美しく、黄色とも桃色とも赤ともつかず、入りまじった色彩で、それは巨大なロウソクの炎を集めたように見えた。言いかえれば、満開のレンゲ草の花のような型であった。

何の火であろうかと、一生懸命考えているうちに、家中がガタッガタッと地震のように揺れ、大きな音をたてたという。

このとき戸外にいた者は、爆発音を聴くや地面に伏して、難を避けた。

南向きの家屋は、爆風の衝撃によって五ないし一〇センチメートルも天井が破れ、窓ガラスはほとんど破損し、障子の棧は折れ、建具も表側がはずれたり、破損したりした。

ふとんで急に押さえつけられたように爆風を感じたが、樹木もその青葉が一挙に吹きとばされた。農作物も、勿論一様に倒伏したが、日が経つにしたがい元どおりに回復していった。

キノコ雲は、ムクムクと遅しく拡がり、ついに村の上の空一杯になった。炸裂から二〇分くらい経っていたと思われるが、まっ黒い雨が降りはじめた。約二〇分間降り続けたが、その雨で池や川の水が黒くにがり、鯉やその他の小魚が死んで浮いた。

午前九時ごろから夕方にかけて、焼け残りの新聞紙・屋根のソギ板・ボロ切れ・トタン板の切れ端などが、たくさん村内に落下して来た。

この日、戸山村と伴村から、高田郡の飛行場作業に出動していたが、広島市の建物疎開作業には出ていなかった。午前十時ごろ、防衛召集が発令されたので、飛行場作業に出動していた全員に、急ぎ帰村するよう伝達、全員は当日夜十二時ごろから七日未明にかけて、徒歩で帰って来た。

なお、戸山村の浄宝寺・正善寺・法隆寺、及び伴村の専念寺・願行寺には、広島市の国民学校児童が疎開して来ていたが、特別に動揺は見られなかった。

二、避難者の状況

被爆当日午前十一時ごろから、無残な姿の避難者が続々と、村内に入って来た。みんな、頭・顔・背なか・腹・腕・足などに火傷、あるいは負傷しており、トボトボと今にもぶっ倒れそうになりながら、徒歩でたどりついた。中には、自転車に乗って来た者もあったが、いずれも命からがらの状態で、コモを身体に巻いたり、布の切れ端で前をかくしたりしている人が多く、裸体に近い姿であった。

避難者たちは、安佐郡の祇園・古市・安・細坂経由の県道を伝って来た者、長束・山本を通り、炎天下、山道の権化峠を越えて来た者、あるいは己斐町から己斐峠・畑峠の山道を越えて来た者が多かった。午後三時ごろから五時ごろまでが、最も多く、夕方からは、軍のトラックなどで負傷者が大量に運びこまれ、混乱は夜どおし続いた。

このような状況から、広島市に大変な事態が発生したということが解ったが、ただ一発の原子爆弾の惨劇とは、誰一人、気づくものはいなかった。避難者は翌七日夜(午後九時ごろ)まで続き、それぞれ次表のように収容されたが、その約三分の二は死んでいった。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
隔離病舎	戸山村	八月六日	三六	二二	村営火葬場	九月十日
寺院	戸山村	八月六日	一一〇	七六	村営火葬場	八月三十日
民家	戸山村	八月六日	一四六	一三〇	村営火葬場	八月三十日
学校	戸山村	八月六日	七四	六〇	村営火葬場	八月三十日
隔離病舎	伴村	八月六日	六〇	五四	村営火葬場	九月十日
寺院	伴村	八月六日	三〇	二一	村営火葬場	八月三十日
民家	伴村	八月六日	三五〇	二八〇	部落火葬場	八月二十日
学校	伴村	八月六日	一一〇	九三	村営火葬場	八月二十日

すなわち収容者総数九一六人、このうち死亡者総数七三六人に達し、悲惨限りない修羅場を出現したのである。辛うじて生き残った人々の中には、そのまま戸山村に二五戸、伴村に六五戸が定着居住した。

三、広島市救援状況

救援隊出動

医療救護班は、村内に殺到した負傷者の治療活動で精いっぱいであったが、警防団は、七日から連日二十日まで、トラックにより細坂・安・古市経由で入市し、横川町・寺町・八丁堀・大手町・猿猴橋一帯などにおいて、負傷者の救護活動、あるいは清掃作業に従事した。戸山村・伴村両警防団とも出動日数一四日間で、出動者は、戸山村一四〇人延一、九六〇人、伴村二〇〇人延二、八〇〇人に及んだ。

地区の概要

可部町(かべ)は、広島市の北にあたり、爆心地からの距離は約一五・四キロメートルである。

昭和三十年三月、可部町・亀山村・三入村・大林村の四か町村が合併して新発足した。

安佐郡の中部に位置し、古来から陰陽を結ぶ交通の要地であり、文化・産業・交通・経済の一中心をなし、近時、広島市の衛星都市として急激に発展している。

健全なレクリエーションの場として、南原峡・福王寺・柳瀬など、四季を通じてにぎわっている。殊に福王寺は、海拔五〇〇メートルの金亀山の頂上、うっそうたる密林に囲まれ、西の高野山とも称せられている。

町の総面積は九一・七四平方キロメートルで、人口は二〇、九四四人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

快晴のおだやかな朝のしじま、一瞬、ピカッと光った。おやっと感じたとき、ダーンと何か大爆発音と震動があり、なま温い不気味な風圧がドッと吹き寄せて来た。

屋内にいるものでも、家がぐらつき微震を感じ、熱風を感じた。

亀山村大畑の綾西国民学校分校は、やや高台にあったが、ピカッと光ったので「何ごとか？」と、教師が窓のところへ出ていったとたん、衝撃波ではねかえった扉に、その首をはさまれたという。

閃光後、しばらくして広島上空にモクモクと雲のような煙が湧きあがっており、燃料タンクに爆弾が落下したのかと思われた。

可部町大毛寺あたりから南方を見ると、太田川下流右岸にそびえる阿生山(あぶざん)の頂上の、少し南西寄りの空に、白味がかった異様なキノコ型入道雲がモクモクと湧きあがっているのが望見された。キノコ雲は見守るうちに、ダイダイ色―赤色―黒色を帯びた雲に変わり、つぎつぎに奔騰した。

見ていたものは我にかえると共に「これは広島に何か大ごとが起きたのだ！」と、期せずして叫びかわした。

それから僅か数分、可部上空を敵の大型飛行機が通過、まもなく三つの大きな落下傘が、風にゆれてキラキラと輝きながら、だんだん落下しはじめた。落下傘は、その下に長い物体を吊っていた。

時刻は、午前九時十五分ごろであった。

消防団員は、急遽出動。サイレンは激しく鳴りわたり、「時限爆弾だから二〇〇メートル以上は逃げるように…」との警報が出た。

住民はそれぞれ、散り散りバラバラになって一生懸命走って逃げた。

それから数時間、不安な時間がたったが、何にも起る様子がなかった。

三個の落下傘は、亀山村大字大毛寺福王寺山麓の若藤丈太郎宅から三〇〇メートル離れた山林中に一個、同じく福王寺山麓で、上記のものより約六〇〇メートル離れた上大毛寺山林中に一個、もう一つは大毛寺の報恩寺裏から五〇メートルばかり離れた田の中に、それぞれ落下していた。

安佐部隊(安佐郡三入・大林・亀山・久地・日浦各村一〇〇人の防衛隊。隊長熊谷予備准尉)も、非常召集された。亀山村今井田の隊員神田実(当時一九歳)は、畦の草を刈っていて閃光を感受した。そのあと役場吏員が自転車で連絡に来て、直ちに出動し、大毛寺に落下した落下傘についている円筒の警備にあたった。円筒の周囲にアゼを作って水を引き、遠まわりから注意していた。そのうちに軍人が来て、その命令で馬車に恐る恐る乗せ、可部の地方事務所へ運び、そこの廊下に置いた。これを第二総軍司令部が持ち帰った。

落下傘の大きさは、いずれも八畳(五二・八平方メートル)くらいで、下に長さ四、五尺(約一・五メートル)、丸さ直径約五寸(約一五センチメートル)くらいの円筒がついており、ちょうどラジオの真空管と同型で、中に種々な電線のあることが、まるい穴から見えた。

落下傘の紐は、現在、願船坊と広島平和記念資料館に保管されている。住民の中にも幾らか拾って記念に所持している者もあるという。

炸裂後、朝の快晴はどこへやら、昼からはどんより曇って今にも雨が降り出しそうな空模様となった。この日、可部地区から広島市の建物疎開作業には出動していなかったが、広島市から白島国民学校児童が、次のとおり疎開して

いた。(第一巻六五ページ)

収容場所	所在地	収容者数	収容年月日	閉鎖年月日
大林説教場	大柿村	六〇	昭和二十年四月十四日	昭和二十年九月十日
報恩寺本堂	亀山村	五〇	昭和二十年四月十六日	昭和二十年九月一日
行森説教場	亀山村	三〇	昭和二十年四月十六日	昭和二十年九月一日

二、避難者の状況

六日午前九時ごろ、全身黒く汚れ、火傷で火ぶくれとなり、たくさん血を流した裸同然の避難者が、広島市から可部街道を伝って殺到しはじめた。

衣服はボロぎれのように裂けて焦げていたし、頭髮は乱れ、裸足のままの姿であった。

避難者はみんな呆然自失のありさまで、ゾロゾロと力なく歩いて来た。

男も女も判別しがたい無残な形相であったが、中には顔面・背・手など露出部に直接閃光を受けたと思われる部分は、いちように火傷し、何かの蔭になっていたと思われる部分は火傷していなかった。ひどい負傷で、腕がぶら下がっている人も歩いて来た。

初めのうちは軽傷者が多く、徒歩で逃げのびて来たが、午後二時ごろから重傷の兵隊や市民がトラックや荷馬車によって、はこばれて来はじめた。

避難者は九日の昼すぎごろまで続いたが、これらは次のように収容された。死亡者も続々と出て火葬にされた。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の 埋火葬数	埋・火葬場所	閉鎖月日
大林国民学校	大林村	八月六日	一五〇	二〇	遠ヶ滝火葬場 姥ヶ迫火葬場	昭和二十年十二月初旬
三人国民学校	三入村	八月六日	二三〇	三五	根谷川河原	昭和二十年十二月初旬
亀山国民学校	亀山村	八月六日	一五〇	三七	原ヶ迫火葬場	昭和二十年十月下旬
亀山農協	亀山村	八月六日	二〇	六	原ヶ迫火葬場	昭和二十年十月下旬
超円寺	可部町	八月六日	一〇〇	二〇	中島火葬場	昭和二十年九月下旬
勝円寺	可部町	八月六日	一二八	八七	根谷川河原	昭和二十年十一月初旬
顧船坊	可部町	八月六日	八〇	三五	可部町火葬場	昭和二十年十一月初旬
可部国民学校	可部町	八月六日	一〇〇	二六	根谷川河原	昭和二十年十一月初旬
品窮寺	可部町	八月六日	一〇八	三二	根谷川河原	昭和二十年十一月初旬

この町に避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、大林村二〇、三入村二一、亀山村一三、可部町三八であったが、避難先での生活を続けた人々は、食糧や物資の配給の少なさに極度になやまされたという。

三、広島市救援状況

救護状況

医療救護班として、七日から十四日まで、大林村四五人延一二〇人、三入村一六〇人延二四〇人、可部町二〇〇人延三六五人、亀山村一七五人延二八〇人が出動した。これらは三入村の医師一人を除いて、すべて一般町民で市内での医療活動を補佐した人々である。

また、警防団も出動した。大林村は十二日から十四日まで、連日一五人延四五人が牛田町方面で、三入村は十一日から十三日まで、連日三〇人延八〇人が三篠・中島・十日市・紙屋町一帯で、亀山村は八日から十三日まで、五〇人延一二〇人が三篠・中島・福島・白島各町一帯で、可部町は八日から十三日まで、七五人延一八五人が三篠・十日市・中島・紙屋・福島各町一帯で、それぞれ救援活動にあたった。これら警防団員はみんな徒歩で出動した。延人員が実人員と出動日数の倍数になっていないのは、日によって出動者数が違ったからであろう。

更に、安佐部隊も十日昼ごろ、救援に出動した。白島の常葉橋たもとの交番所跡に本部を置き、負傷者約五〇人を天幕に収容して看護すると共に、死者約一〇人を、近くの時計店跡で焼き、遺骨を瓦の上に置いて、縁故者が少しでもわかるようにした。隊員は皆、野宿で、一週間任務についた。

[第二〇項 安佐郡高陽町](#)…788

地区の概要

高陽町は広島市の東北に位置し、爆心地から約一五・〇キロメートルの距離にある。

昭和三十年三月三十一日、深川村・狩小川村・落合村・口田村の四か村が合併して新発足した町で、町の西部は広島市に直結している。

東南部は山岳が連なり、西南部は太田川、北部は三篠川に沿って展げているが、河川に沿う流域は一般に肥沃なため、蔬菜園芸が盛んで郊外園芸地帯として、急速に発展している。

町の中央を国鉄芸備線が横断し、町内には六か所の駅があり、県道も四方に貫通して交通も比較的便利である。

総面積は五一・五五平方キロメートルであるが、耕地はそのうち一三・九パーセントに過ぎない。人口は九、五三六人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

町内で、もっとも広島市に近い口田地区では、広島市へ侵入する敵機一機が、北方から一万メートル以上の高度を保って入市し、やがて北西に向って逃げていくのが見られた。

また、広島被爆直前にやってきた気象観測の一機と思われるが、深川地区の高下郡作もやはり一機を目撃したと語り、狩小川地区の花本陸蔵は侵入敵機は二機であったとも語っている。

口田地区では、爆風によって家の屋根が一部破損し、天井は三、四メートルはねあがった。建具もほとんど破損した。

深川地区では、役場庁舎の軒や天井が破損し、民家では一〇数戸の戸障子が吹きとばされたが破損程度はさほどでもなかった。爆風や熱線を少しばかり感じたが、樹木や農作物には被害は認められなかった。

しかし、屋外にいたものは突発的な異変に、おどろきあわてて屋内に急ぎ入ったもの、あるいは物かげに逃げてひそむものなどさまざな姿が見られた。

狩小川地区では暴風のような衝撃を受けたが、ガラス窓が飛ぶというほどではなかった。爆風におどろき表に出て見ると、広島市の上空に血のような赤いキノコ型の雲がムクムクと立ち昇っていた。それが昇るにつれて次第に大きくなり、数分間消えなかったという。

深川地区からでは、爆発音を聞いた直後、南方の空に巨大なキノコ型の黒雲が生じ、雲の中央に赤・黄・紫色の閃光が望見された。

燃えあがった広島市から、高陽町域に飛来落下したものはなかった。

広島市へ侵入した敵機は、落下傘のようなものを落としたが、西北方へ流れ去るのが、深川地区から認められた。

また、狩小川地区では、白色の落下傘二個が、狩小川村方向へ飛来するように思われたが、北方へむかって落ちたのが見られたという。

なお、この六日は、動員令による広島市の家屋疎開作業には、各村とも出動していなかった。

また、広島市から国民学校児童が口田村一円に、二〇〇人ほど昭和十九年八月に縁故疎開をして来ていた。これらは翌二十一年七月にそれぞれ復帰した。

狩小川村には、舟入国民学校児童が集団疎開し、同村狩留家に八〇人、同村小河原に八〇人がいた。疎開して来たのは昭和二十年五月で、同年九月に広島市へ復帰した。

深川村にも個人的な縁故疎開で児童が来ていたが、集団疎開はなかった。人数その他は不明である。

二、避難者の状況

広島市に近い口田村には、六日の午前九時ごろから、狩小川村には正午、深川村には午後一時ごろから、翌七日の夕がた六、七時ごろまでにかけて、多数の負傷者が逃げて来た。

避難者らはいずれも被服はボロボロに破れ、中には素裸のまま、顔は俗にいう乞食風のようにみにくくふくれあがり、腫れあがった手を力なくぶらさげて、男女の別も分らぬあわれな姿であった。

避難途中に息絶えた子どもや負傷者を背負ったいたましい姿もまじって、底知れぬ惨禍をまざまざと見せつけられた。

口田村へは、広島市から県道あるいは鉄道線路沿いに、または山道を通して北へ北へと上って来た。口田村の国民学校や農協事務所の二階は避難者でうずまったから、隣村の落合村へ残りの人々は上っていった。

狩小川村へは、大部分の避難民が温品福木線によって入って来たが、中には太田川沿いに深川村を経て入村したものもあった。

深川村へは、牛田町あるいは中山村を経て戸坂一口田一落合村を通り、入村したものが多かった。

これら多数の避難者は、ほとんどが徒歩であった。七日、狩小川村にトラックで運ばれた重傷者約三〇人中半数は途中で死んでいた。

各村における避難者の収容状況は、次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の 埋火葬数	火葬場所	閉鎖月日
口田国民学校	口田村	八月六日	三〇〇	五五	矢口火葬場	九月十日
口田農協事務所	口田村	八月六日	八〇	一五	矢口火葬場、小田火葬場	九月十日
小河原説教所	狩小川	八月六日	五〇		不詳	八月十日
狩小川国民学校	狩小川	八月六日	七五〇	二〇	国民学校の裏の河原	八月三十日
狩小川隔離所	狩小川	八月十日	二〇	六	右同所又は火葬場	九月十五日
深川国民学校	中深川	八月六日	一三〇	約二六	中深川、中堂火葬場ほか	十一月五日頃
(落合村)不明						

なお、深川国民学校に収容した負傷者は、九月以降、隔離病舎に移したが、縁故者不明の遺骨一体は明光寺に預けた。

また、市から避難してそのまま土地に定着居住した世帯が、口田村では一八〇世帯もあった。

三、広島市救援状況

救援隊出動

広島市の大惨禍が伝えられ、救援命令を受けた狩小川村では、医療救護班として医師三人・薬剤師三人・看護婦一〇人が、六日当日から八日まで三日間、狩小川村から温品を経て汽車で連日出動した。

また、同村の警防団員九〇人(延二三〇人)も七日から九日まで三日間、連日トラックで福木・温品経由で広島に出動、主として白島町および土橋付近で救護その他整理などの作業に活動した。

口田村からも警防団員五〇人(延五、〇〇〇人)が、六日当日から十五日までの十日間、連日出動して救護活動を展開した。

第二一項 安芸郡府中町…793

地区の概要

府中町は、古代、律令制度の国府の所在地であったと言われ、その遺構も発掘されている。広島市の東方に隣接して位置し、最短距離は東方約四・二キロメートル、最遠長距離東北東約八・二キロメートル、面積一〇・二三平方キロメートル、人口二九、一六七人(昭和四十年十月一日国勢調査)で、広島市とは地理的にも行政的にも密接な関係をもって現在に至っている。

広島市内国民学校の学童疎開の受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

爆風によって主として西側、すなわち爆心地の側の窓ガラスはほとんどが破壊され、窓枠には損傷を生じたものがあつた。天井は吹き上げられ、壁が落ちたり、剥離した家も相当数あり、中には畳がはね起された家もあつた。炸裂後、挨が視界をさえぎり、自然に挨がおさまるまでの数分間は、周囲の状況が如何なるものか全くわからなかった。

田の草取りをしていた老婆は、爆心地の側の皮膚に熱さを感じたと話しているが、熱線で火傷を負ったという話は聞かない。また農作物に対する被害はなかったようである。

府中国民学校では、当日児童が登校していたが、飛散するガラスの破片で負傷した者が多数あつた。

だれもが閃光や爆発音に驚いて、とっさに地に伏せたから、その瞬間を些細に観察する事ができなかった。しかし、広島市の西部上空に、ムクムクと盛り上がる雲が、七色に変化しているのを望見した(第一巻に写真掲載)。

二、避難者の状況

六日の午前八時半を過ぎたころから、当町に流入する避難者を見はじめた。この人たちは、矢賀町を経て府中大橋に至り、そこから各方面に向つたもので、府中町に避難した者は、主として府中国民学校を目指して集り、時間が経過するに従つて、その数は増す一方であつた。顔や手足の露出部分はひどい火傷を受け、皮膚は千切れたようにぶら下り、ボロボロになった被服のまま、必死の形相で逃げてくる様は、生地獄さながらの感があつた。

この中には、府中在住の者で広島市内で被爆した者もいたが、ある者は、町に逃げ帰つたという安心感から気が緩んだのか、または精魂つき果てたのか、わが家にたどり着く途中で倒れるものもあつた。

学校では、机類を片付けた教室や講堂に収容したが、次第に増加する避難者のために、応急措置として、校庭にテ

ントを張って休養所とした。しかし、医療を施そうにも医師がいなければ薬もない有様で、全くお手上げの状態であった。被爆者は、ただ暑さを凌ぐため、ボール紙や薄板を扇子代りに涼を求めるだけであった。

町役場による炊出しが実施されたが、食糧のたくわえが充分でなかったので、支給は困難をきわめた。

翌七日ごろから、死亡者が続出しはじめ、義勇隊員が薪や藁を集め、死体搬送用に荷車を準備し、警防団員は府中大川堤防で死体を火葬した。義勇隊員は昼夜も分たず看護に尽力したのであるが、死亡する者は後を絶たなかった。

こうした被爆者の実体を目のあたりに見た町民の恐怖は、はなはだしいもので、何時襲われるかも知れない爆撃を恐れて、竹藪や河原などに仮住いをする者まで現われ、その起居は、非常事態に際しての用意のために、着のみ着のみであったが、それが不自然に思われないほど町民が受けたショックは大きなものであった。

当時、国民義勇隊員として、負傷者の輸送や避難所の設置に従事していた田村繁信が、六日午後帰宅中、西方上空に敵機らしいものが飛来したので、国道下の暗渠に退避した際、そこで広島赤十字病院の重藤文夫医師に出会った。重藤医師は猛火に包まれている広島市内を見ながら、「どうしても病院に帰らねばならないのだが」と思案していたが、その時「原子爆弾が投下されたのではないだろうか」と語った。しかし、それが如何たる内容をもつ爆弾か、町民は知る由もなかったという。

昭和二十八年、広島市から避難してきた被爆者で、死亡して引取りのないまま当町の龍仙寺に安置してあった遺骨八〇柱を、広島市平和公園内の、原爆犠牲者供養塔へ合祀のため広島市社会課へ引渡した。被爆者が府中町へ避難して、その後定着居住したものは一五〇世帯あった。

被爆者手帳発行状況

特別 二、四五五通 一般 四一九通(昭和四十年十月一日末現在)

[第二二項 安芸郡船越町](#)…796

地区の概要

船越町は広島市の東方約七キロメートルの地点にあり、海田湾に面している。町域の東は海田町、西は広島市、南は海田湾をへだてて矢野・坂両町と相対し、北は畑賀・府中町に接し、面積三・三平方キロメートル、世帯数三、六三六世帯・人口一三、六四七人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

幹線道路は船越峠を経て、府中町・広島市に通ずる旧国道と鉄道線路に沼って新国道(一級国道二号線)呉―広島間が通じている。

大正九年に日本製鋼所が来るに及んで、逐年発展し、耕地は急激に住宅・工場用地となり、昭和時代に入って飛躍的に人口増加をみた。

隣町に軍需工場東洋工業株式会社があり、軍都広島市の街星都市として重要な地位を占めていたから、戦争中は空襲の災害を覚悟していた。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市襲撃の敵機影を、船越町竹浦の三沢税元町助役は、自宅の裏に出ていて目撃したが、一機であったようであるという。

ある目撃者は、北方面から南方へ黒い影が飛んでいくのを見たといい、ある目撃者は、広島市付近の上空を北方面へ、一機飛んでいたかと思うと、ピカッと光って、ドカーンという猛烈に激しい音が聴こえ、そのため一瞬前に突っこみそうになったという。

また、ピカッと光る数分前に、落下傘が二個ほど風に流されて、落下しているのを見た者もあった。異様な閃光と爆発音で地面に伏せた人もあり、起ちあがって見ると、巨大な雲がモクモクと回転しながら拡がり、後光の射すような光線が眺められたという。

炸裂の衝動で、家の西側(広島市方面)の壁が落ち、障子や襖などの建具がはずれた。また、爆風で天井も吹きあげられ、屋根瓦も少しずれた。

しかし、樹木や農作物には被害がみとめられなかった。また、広島市から爆風で品物が飛んで来るということもなかった。

この日午前九時ごろから、新国道(呉街道)づたいに大洲町を経由して、多くの負傷者がゾロゾロと裸足で歩いて来はじめた。

衣服はボロボロに焼け、裂けていた。身体は水ぶくれになり、アゴと胸がくっついているような人もあった。

続々となだれこんで来る避難者に対して、同町字二場の日本製鋼寮(現在・船越アパート)で、各地区の婦人たちが炊出しをおこなった。また、負傷者は日本製鋼所の病院をはじめ、船越国民学校・正明寺・正専寺などの臨時救護所に収容した。六日当日の収容者数は約三〇〇人から三五〇人くらいであった。

治療は薬品がなく、ただ油薬を塗ることだけであった。

負傷者は収容するはしから死亡していき、死体を何度も大八車で、瀬野川の堤防内側に運んで焼いた。その数は、現在では概数さえ不明であるが、かなりの数であった。

なお、町内の住民で、当日朝から広島市内へ出勤していた者、学校が広島市内であった中学生、あるいは、建物疎開あとの廃材を取りに広島市へ出かけて行った者などが、いずれも被爆し、死亡者も重傷者も出たが、その数は不明である。

二、広島市救援状況

救援状況

六日当日は、広島市から町内に流入する多数の避難者の救護や治療活動で精いっぱいであったため、広島市内の救援には出動しなかったが、七日から十日ごろまで、広島市役所方面へトラックでムスビを送った。

また、警防団は、吉から九月十五日までの間に約一〇回(一回につき五〇人)ほど、船越から船越峠を通る旧国道を歩いて広島市に出動し、市内各地で罹災者の救護や死体の処理その他の作業にあたった。

[第二三項 安芸郡安芸町](#)…799

地区の概要

安芸町は昭和三十一年三月三十一日、温品村(ぬくしな)と福木村とが合併して安芸町となった。

広島市の北東にあり、爆心地からの距離は最短距離約五キロメートル、最遠長鹿離約一一・五キロメートルである。面積二二・六六平方メートル、人口七、三九七人(昭和四十年十月一日国勢調査)で呉姿々宇山の裾野において農耕を主とする農村である。

なお、広島市内国民学校学童の疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

温品国民学校前で、向洋上空から市中へ侵入する敵機二機を確認した(篠原次子談)。高度についての正確な記憶はないが、相当上空を飛んでいたという。

物凄い炸裂音に驚いて屋内に逃げ込んだので、敵機の行動をずっと視てはいなかったが、炸裂音と爆風の混乱から静寂に戻ってきたとき、家から出て空を見上げると、福木村の方面に大風船が一個流れていた。敵機二機もまたその方向に飛び去っていた。

温品地区は爆風による衝撃が大きく、ほとんどの家屋は建具が倒壊していた。とくに、地区によっては天井が五・六寸吹き上げられ、屋根が大破し、棟木が狂ったほか、床にもひずみを生じたところもあった。

立木や農作物には、さほどの被害はなかったが、田で作業中、身体に熱線を感じた者もあった。

福木地区は、地形や距離の関係上、温品地区と比較して、被害は少なかったが、大字馬木地区では爆風により建具・屋根の被害があった。

キノコ雲は、灰黒色で凄まじい勢いで発達しながら上昇していった。そしてその煙の中にすごく赤い炎を見たという者もいる。

この爆発による広島市からの物件飛来はなかった。

またこの日、広島市の建物疎開作業隊の出動はなかった。

二、避難者の状況

避難者は午前九時過ぎから来はじめ、この人たちは中山の大内越峠、矢賀町を経て徒歩で到着した。最初に来たの

は婦人で、乳呑児を抱き、身体の各所にひどい火傷を負っていた。真黒い顔で馬木方面へ行く道を尋ねてきたが、先ず温品国民学校で治療を受けるよう勧めて案内した。総じて避難者の容貌は衣服と皮膚が識別も困難な状態で垂れさがり、奇怪というはかなかった。重傷者は精根も尽き果てて、ここまで辿りつくのがやつのことであった。中には路傍に行き倒れる人もあり、しきりに「水、水。」と、苦しみ訴えた。しかし、その声に末期の水を与えるだけで、治療などなす術がなかった。

収容所の開設ならびに埋葬・火葬状況

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の 埋火葬数	埋・火葬場所	閉鎖月日
温品国民学校	温品村	八月六日	約一四〇	約五〇	室釜火葬場、鶴江付近堤防	九月五日
福木国民学校	福木村	八月六日	約一二〇	約四	大原演習場	九月七日
陸軍馬木大原演習場兵舎	福木村	八月六日	約二五〇	約七	大原演習場	九月七日

なお、広島市から避難して定着居住した世帯数は、つぎのとおりである。

温品村 二〇世帯

福木村 三〇世帯

両地区とも戦後一〇年ぐらい居住して、また出て行った。

[第二四項 安芸郡海田町](#)…801

地区の概要

海田町は、広島・呉両市の中間にあり、広島市の東南東に位置し、爆心地からの距離は、最短距離が約六・二キロメートル、最長距離が約一一・七キロメートルである。町域の一部は広島市に近接し、被爆時には大混乱を起している広島市と、東部一帯地域との中継地的な役割をはたした。

山陽本線は海田市駅から、呉線を分岐し、これらに沿うて新旧国道が並走している。

町北部を西流する瀬野川は海田湾に注ぎ、宇品港は指呼の間にある。

昭和三十一年九月三十日、海田市町と東海田町が合併して、海田町となったが、海田市町は、歴史的に古くからひらけた場所で、物資の集散地として繁栄し、安芸郡における重要な地区の一つである。

地域の総面積は、一三・九二平方キロメートルで、人口一八、九八〇人(昭和四十年年度国勢調査)である。

被爆当時、海田町域に所在した陸海軍諸部隊や集団は、次のとおりである。

軍隊名	所在地	人員	備考
陸軍需品廠	海田市町	約七〇	
第十一航空廠	東海田町	約二〇〇	この他朝鮮の志願兵が六〇〇人いた。
陸軍松根油製造班	東海田町	－	男女挺身隊
陸軍松根油製造班	東海田町畝	－	
陸軍軍隊宿舎	東海田町畝	約三〇	八月十五日夕刻、陸軍軍隊宿舎を去る。

なお、海田町は、広島市内の国民学校児童の疎開は受入れていなかった。

ちなみに、現在、海田町の被爆者健康手帳の受給者数は、一般手帳一六三人・特別手帳一、四五六人となっている。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

海田市駅の仲岡助役の談(原子爆弾災害調査報告集記載)によれば、「ピカッと光って、ドーンと音が出るまで一〇秒ないし一二秒あるかなし。西北側の窓ガラス上方がみな破れ、枠も折れた。屋根は波型となる。柱時計が下に落ちた。

戸外で熱感はあるが火傷しなかった。屋根を吹きあげ、障子を内側に吹きこみ、屋外灯の電灯笠も破れた。雷を聴いた。」という。

改札係の若山知は、五日から夜どおしの勤務を終り、六日は非番で宮島の自宅へ帰ろうとしたとき、敵機の爆音をきいた。直後、閃光を感受し、そばのホームに作られた防空壕にサッと飛びこんだ。壕の入口に坐って広島の方をみると、落下傘が二個、北の方へ落ちていくのがみられた。同時に、広島駅付近の上空にお碗のような白雲が昇っていた。

事務室に入っていくと、天井から煤が一面に落下していた。何気なく、ラジオにスイッチを入れると、泣くような声で、「大阪放送局、大阪放送局…こちら広島放送局…」と、大阪の放送局を必死に呼び出そうとしているアナウンサ

ーの声を聞いた。

何か変事が発生したと直感され、心配になったので、ちょうど発車する貨物用の機関車に乗って、広島駅に向った。しかし、その機関車が途中で停車したので、やむなくそこから歩いて入市した。

また、水木俊之の談によると、爆風におどろいて地面に伏せ、掌に突き刺さったガラス片を抜きとり、駅前広場に出て、空を見あげると、はるか北の空を B29 が北上していた。そして、落下傘がその下をゆっくりと、落下しているのが見られたという。

炸裂後、白いハスの花べんの無数に重なったような煙が、もくもくと発達して、天に沖する巨大な柱となった。その後、小雨らしいものが少し降ったが、それもわずかであった(木下イサミ・千柄吉郎談)。

海田市駅のプラットホームで、上り列車を待っていた人は、「広島に通じる鉄道の線路上に、真っ赤であったか、白熱であったか、火の塊が見えると、まもなく轟音とともに、戸のガラスが飛び散り、掲示板も広告板も飛散した。」と、報告している。

木下イサミ宅では、爆風で庭の柳が折れ、広島市の側に向いた建具やガラスが、ほとんど大破、飛散した。また、屋根や天井には、たいした被害はなかったが、屋根瓦がずれて、雨もりがひどく、困ったところもあった。

人体には、被害というほどのものはなかったが、炸裂後にはじめて警報が発令されたようなことで、住民はひどくあわてて不安にかられた。

原子爆弾の炸裂直後、東海田町役場では、駐在巡查によって、電話は一切使用禁止の赤紙が貼られ、外部からの情報は、役場の上司と警察官だけで交換されていた。

なお、広島市から爆風などによって、紙や板ぎれなどが、飛来するということはなかった。

また、海田町から、八月五日まで、一日約一〇〇人ぐらいの作業隊が、広島市内の竹屋町付近の建物疎開に出動していたが、六日当日は非番で出動せず、犠牲者も出さなかった。

当日午前十時ごろから、翌日午前八時ごろまで、仁保町堀越・船越町を経て、徒歩やトラックで避難して来るものが絶えなかった。避難者はいずれも火傷・裂傷を負い、血まみれであった。

東海田町役場では、六日の朝、ただちに収容可能な場所、神社境内や学校などを、収容所として開設する準備をした。

収容は当日午前十一時ごろから開始し、大型トラックで運ばれて来た負傷者は、まず東海田国民学校の四教室に収容した。

六日の午後七時ごろまでに、四九人の負傷者を収容したが、翌朝二人死亡し、九月十五日の収容所閉鎖の日までに一〇人死亡した。

収容者以外で、負傷の治療に通うものが三〇人もいた。

六日の夜、広島市を望見すると、市内上空は赤く、何時までも夕焼け空をながめているような状況であった。

避難者収容所の開設、ならびに死体の処理状況は次表のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋・火葬場所	閉鎖月日
海田市国民学校	安芸郡海田市町	八月六日	一三〇	五〇	海田市火葬場	九月十日
明顕寺	安芸郡海田市町	八月六日	三〇	二〇	海田市火葬場	九月十日
真宗寺	安芸郡海田市町	八月六日	一五	五	海田市火葬場および船越堤防	九月二十日
為野病院	安芸郡海田市町	八月六日	二〇	一〇	海田市火葬場および船越堤防	九月十日
東海田国民学校	安芸郡奥海田村	八月六日	四九	一〇	寺迫火葬場	九月十五日

二、広島市救援状況

救護状況

かねて防空法に基づき、医療救護班が編成されていたが、広島市へは出動しなかった。

むしろ、広島市からの避難者が、続々とやって来たので、この救護に全力をあげた。

東軍医中尉・為野医師をはじめ、東海田町の疎開先から急ぎ駆けつけた松村医師によって、救護活動がおこなわれ、前記のとおり町内五か所の収容所に、続々と到着する罹災者の治療にあたった。

これらの救護活動には、地元の婦人会なども収容所が閉鎖されるまで、積極的に協力した。

六日当日は、罹災者の受入れが精一ばいで、炊出しもできなかったが、翌七日の昼食から三日間、東海田町内各部落婦人会により、農協から渡された米でにぎりめしを作り、トラックで警防団員と役場職員が、広島市内各所の被爆

者収容所に届けてまわった。

海田市町に避難して来た人々は、海田市町も、広島市と同様に、他の農村へ疎開するものもあったほどで、避難者が定着居住することは困難であった。したがって、避難者は、その後、それぞれの親類縁者を求めて、海田市町から去って行った。

被爆した当日は、広島駅が炎上したため、海田市駅から折返し運転で避難者が運ばれたが、二日後には、山陽本線・呉線ともに、時刻どおりの運行はなくとも、上り下りが全通し、次第に平常な海田市町を取りもどしていった。

原爆記

梶芳三

昭和二十年の五月の何日かに、瀬野川左岸の畠のなかに爆弾が五個投下された。

幸いに付近の農家に被害はなかったが、水田に落した弾の穴の太さは、直径六メートルぐらい、深さ二メートルぐらいであった。

案外、その被害が軽かったのも、これを軽視する者もいた。

そのころ、夜になると敵機が来襲しはじめたので、警防団員は、常に非常体制を取っていた。

七月二十日ごろ、いよいよ広島市の爆撃必至という事態が迫って来たので、海田市町においては、町長肥田厚・助役木田申一らが、十人の戸長を召集して、広島市の防空対策である建物疎開作業の出動命令を出した。

当時、海田市町は、町域を五部分けにしていたが、八月一日が一部、二日が二部、次が三部と四部という出動計画をたてた。

私は、第三日目の作業隊に所属して、朝七時半に総勢二〇〇人近い人々とともに、海田市町を出発、比治山の下の京橋川下流の対岸一すなわち富士見町の家屋解体作業に出動したのであった。

このようにして、被爆当日前に海田市町の五部落の人々は、だいたい全部出動した事になった。

六日その朝、私は、老衰のため食事のできなくなった七二歳の父のために、かねてから甘酒をたのんでいた知人のところへ出かけた。知人は妻の実家の知合いで、国鉄海田市駅の信号所に勤務していたので、そこへ私は行き、明日は是非…と頼み、しばらく戦争の成行きなどを話している時であった。

突然、目の玉をつらぬくような光が走った。同時にその場に居合わせた五人の者は、信号所内に倒れた。五、六秒ののち、ドンと大きな音がして、さらにみんなは驚いた。

この四十何歳になるまで、未だかつて聞いたことのない音、見たことのない稲光りであった。

私は、病床の父がどうしていることかと気になり、転ぶようにして飛んで帰った。見れば障子は全部はずれるか倒れていて、まったく見当のつかないありさまであった。

父は父で「病人のわしをそのままにして、どこへ行ったか」と、突発事態の不安から泣くやら叱るやら、何とも言えぬ表情をしていた。

海田市町付近には、幸いに怪我人は無かったが、二、三時間たったころ、広島市内からふた目とは見られない無残なすがたの人々が、ゾロゾロとやって来はじめた。

衣服は形がないほどに破れ、血まみれで正常な歩き方をする者は一人もなかった。時間が経つにしたがって、刻々と避難者の数が増えていった。重傷者は動けなくなってその場に死んでいくのもあり、苦痛に呻吟する声が町中に溢れた。

私は一日違いで、被爆からまぬがれたことが、不思議な運命のめぐりあわせのように思われた。

しかし、弟(勝海)が、市内東観音町二丁目に住んでいたのが心配で、すぐ出かけようとしたが、市中は猛火に包まれているという。夕方、じっとしておれず自転車で、東大橋から比治山下を通り、比治山橋を渡り、富士見町辺まで行ったが、すごい熱気にはばまれて前進できず引返した。

その翌日、町内の警防団員は全員出動することになり、私も出た。

八日、土木出張所に勤務していた妻の弟(林信夫)を探しに行ったが、庁舎は全焼していた。たまたま福屋デパートのところまで行ったとき、デパートの石壁に「戸坂に転送されるー林信夫」と書いてあった。探しまわったあげくようやく発見し、家に連れて帰ったが半死半生の重体であった。十日間看病したがついに不帰の客となった。

地区の概要

坂町は広島市の南東にあり、広島市とは海を隔てて指呼の間にある。爆心地から当町への遮蔽物は、仁保町の黄金山があるのみで、それも町全体を遮蔽するには至らない。爆風によって被害を受けた建物が広範囲にわたったのも、こうした地形によるものである。

また、中国配電坂火力発電所および三菱広島造船所の修理ドックは当町において大きな存在であったが、それだけに敵機の空襲によって爆撃される可能性もまた大きいものであった。しかしながら、当町自体の防衛よりも、広島市の防衛が主であったといっても過言ではなく、原子爆弾投下の当日も、国民義勇隊一八〇人が鶴見町付近に出動を命ぜられ疎開作業に従事していた。

爆心地からの最短距離	爆心地からの最長距離	面積	人口	備考
約六・二km	約一二・五km	一四・三六 k m ²	一四、〇九三人	昭和四十年十月一日国勢調査

なお、当町へは広島市内国民学校学童の疎開の受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

坂国民学校父兄会に出席していた菅田房ほか四人は、校庭において、坂町の北西部上空に敵機二機を目撃したが、余りにも高度を飛行していたので、進行方向など詳しいことはわからなかった。

炸裂時の爆風によって、当町の西北に面して建ち並んでいる家屋のほとんどは、天井が約三〇センチばかりふき上り、建具は五メートルから一〇メートルも吹き飛ばされ、ガラス戸のガラスは飛散した。

家屋の外にいた者、また、高い所にある田畑で野良仕事に従事していた者は、かるい熱気を感じた。

農作物や樹木に被害は見られなかった。

炸裂音に驚いて屋外に出てみると、西北の方向中国配電坂火力発電所のちょうど真上にあたるところに、大きなカボチャ様の白い雲が見え、それがムクムクと急速に発達していた。発電所に爆弾が投下されたものと錯覚し、急いで家に帰ったものもいた。

炸裂後に、広島市から物件が飛来することはなかった。

なお、当日朝、動員令による建物疎開作業従事隊の広島市内への出動状況はつぎのとおりである。

名 称	出動者総数	被爆による被害者数			備 考
		即死者数	負傷者数	行方不明者数	
坂村国民義勇隊	一八〇	〇	一六〇	〇	作業現場鶴見町付近 帰町後死亡 一五

当日帰坂しなかった者が一〇人ぐらいいたが、三日後には全員帰坂した。

二、避難者の状況

六日午前十時ごろから十日の午前中にわたって、全身に火傷している者、顔面火傷で誰とも判別のつかない者、負傷して身動きのできない者、こういった人たちが向洋・海田市町を経由して、三輪車・トラック・荷車で間断なく運ばれたり、または自力で歩いてやってきた。中には収容されるや精根尽きて死亡した者もあって、死亡者が続出し、その処置に手がまわりかねるほどで、火葬せず遺体をそのまま土中に埋めたものも多かった。

なお、被爆後、救護作業のため広島市への出動はなかった。

三、避難者収容所の開設ならびに埋・火葬状況

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
坂国民学校講堂	坂町字刎条	八月六日	二〇〇	火葬 二〇	旧浜宮火葬場	八月二十日
横浜国民学校講堂	坂町字横浜	八月六日	二〇〇	火葬 一五	横浜火葬場	八月二十日
小屋浦国民学校	坂町字小屋浦	八月六日	六〇	火葬 四〇	小屋浦火葬場	八月二十日
小屋浦海水浴場	坂町字小屋浦曙部隊野戦病院	八月六日	三〇〇	埋葬 一五〇	小屋浦付近	八月二十日
横浜海岸	威第一九八〇六部隊	八月六日	一五〇	埋葬 一五〇	横浜海岸付近	八月二十日

横浜海岸における埋葬は、熱気に耐えかねて、川や海にとび込んで溺死したと思われる被爆者が、潮に流され、浜辺に打上げられたのを、軍隊によって収容され、埋葬されたものである。

なお、広島市から避難して定着居住した世帯はなかった。

被爆者健康手帳の受給者数は、つぎのとおりである。

被爆者手帳発行状況

特別 九九二人

一般 九八人

計 一、〇九〇人(昭和四十二年七月三十一日現在)

第二六項 安芸郡瀬野川町…812

地区の概要

瀬野川町は、広島市の東方にあり、畑賀・中野・瀬野の三村が、昭和三十一年九月三十日町村合併を行なって誕生した町で山陽本線および国道2号線に沿っている。爆心地からの最短距離は約七キロメートル、最遠長距離は約一九・七キロメートルで、面積五八・二一平方キロメートル、人口一二、四三七人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

なお、当町には広島市内の国民学校の学童疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

畑賀村においては、役場にいた者は、すぐ上の国民学校に爆弾が落ちたのではないかと、疑ったほど激しいもので、国民学校二階のガラス窓は、ほとんど吹き飛ばされた。

乗末宅では、西向きの土蔵の頑丈な板戸が、敷居や鴨居に何らの異状もないのに、吹き倒された。また、住家のたてりに狂いを生じたものもあった。

中野村村長は、閃光の直後、黒黄色の雲が物凄い勢いで渦巻きながら、上昇するのを見た。すぐ関東大震災のとき、大火災によって発生した雲を連想したが、周囲の事情が全く異っているので、ただ不思議な現象だと思っただけであったという。爆発音と爆風はそのあとやってきた。山王部落でも湯殿のガラス障子が壊れた。総じて中野村の多くの人は、隣村の畑賀村へ爆弾が投下されたと思っていたようである。

瀬野村では、生暖かいものを感じたあと、大きな爆発音と爆風が襲いかかり、役場にいた婦人の中には、声をあげて外へ逃げ出す者もあった。上瀬野龍善寺でも、閃光のあと、もの凄い爆発音と異常な大震動とともに、本堂西側(広島市に面した側)の障子四枚が、本堂内に吹き飛ばされた。

畑賀村の者は、盛り上ったキノコ雲はちょうど五色のカボチャのようであったといい、中野村の者は、赤黒い雲が、キノコ状に拡大したと述べているが、ともにキノコ雲を認めながら、その色彩の表現は必ずしも一定していない。

炸裂時に畑賀村では、黒煙が流れ込んだが、これは広島市の火災の煙が流れてきたものと思われた。その他に飛来したものはない。

なお、建物疎開作業隊の広島市への出動状況はつぎのとおりである。

村名	出動者 総数	被爆による被害者数			備考
		即死者数	負傷者数	行方不明者数	
畑賀村	二〇	〇	一九	〇	帰村後死亡者 二
中野村	七五	〇	七三	〇	帰村後死亡者 九
瀬野村	五七	〇	四六	一	帰村後死亡者 一

二、避難者の状況

畑賀村では、六日午前十一時ごろから避難者が到着しはじめた。畑賀村への避難者は、船越峠と旧国道砂走方面から、中野村への避難者は、旧国道から到着した。これらの人は、ほとんどが火傷を負いながらも徒歩できたが、極く少数の人は、担架や荷車に乗せられてきた。避難者の列は、六日午後八時ごろまで続いた。

避難者の中には、どこかでひとまず治療を受け、繃帯に包まれている者もいたが、そのほとんどの人は、至るところに負傷し、ひどい火傷のうえにすすけた黒い顔、焦げた衣服のまま裸足で列をなすという姿であった。そして、誰が誰とも判別は困難であった。日ごろから親しい村の人が帰り着いたときでさえ、それが誰であるか全然判らなかった。

なお、安芸中野駅の国道を徒歩で通過する避難者には、無料で、東方のそれぞれの避難目的地に行くよう駅長が指示したので、ここからは汽車で逃げていった。

各村の警防団ならびに婦人会は、それぞれの任務に就いて多忙を極めており、人手不足になっていたから、避難者

の収容には、残余の僅かな人員があたるという状況で、十分な手当ができなかった。

避難者収容所の開設ならびに埋・火葬状況

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の 埋・火葬数	火葬場所	閉鎖月日
畑賀国民学校臨時救護所	畑賀村	八月六日	二八〇	四二	畑賀村 寺東山火葬場 赤羽根火葬場	八月二十六日
日本医療団畑賀病院	畑賀村	八月六日	五〇		花玄山火葬場 揚倉山火葬場	九月三十日
中野村専念寺臨時救護所	中野村	八月六日	一〇〇	約二〇	中野村 蓮華寺火葬場	八月三十一日
中野国民学校臨時救護所		八月六日	六〇			八月三十一日

避難してきたまま定住した世帯概数

畑賀村 一九世帯(二十二年までは一〇四世帯であった)

中野村 二〇世帯

瀬野村 一二世帯

三、広島市救援状況

救護状況

各村の婦人会は、炊出しに従事し、警防団がトラックで広島に搬送した。食糧搬送のつど、途中の海田市警察署で指示を仰ぎ、広島市内各所へ配達した。

中野村＝八月六日から十二日までの七日間、警防団員約二〇人が食糧搬送に従事した。六日は、東部地区一帯が火に包まれていたため、市の中心部へは到底立入ることができず、大正橋のたもとで食糧を分配したが、翌七日からは、市内各所へ配給することができた。

畑賀村＝八月六日から八日までの三日間、警防団員約一二人が、比治山下・元騎兵隊裏その他へ出動した。

瀬野村＝八月六日、警防団員約四〇人が、東練兵場・十日市方面へ出動した。

また、警防団山王地区の二野宮分団長は、警察補助員として、三日間広島市へ出動した。

[第二七項 安芸郡矢野町](#)…816

地区の概要

矢野町は、広島市の南東にあり、爆心地から最短距離約七・七キロメートル、最遠長距離約一〇・三キロメートルである。

地域面積は約一一・六平方キロメートル、人口一二、四七〇人(昭和四十年度国勢調査)である。

この地域は歴史的にも古く、考古学上の貴重な古墳遺跡が無数にあり、往昔は文化の一中心地であったことを物語っている。

また、地域の伝統的産業として「かもじ」の製造は全国的に有名であり、戦後は洋髪用マゲやブラシなどの生産が、戦前にも増して発展している。

なお、この地域には広島市内国民学校児童の疎開はなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

当日、広島市攻撃の敵機は、目撃できなかったが、かすかな爆音を聞いた。

また、敵機からの落下物は何も見えず、気もつかなかった。

八時に警戒警報が発令された(呉地区の発令か)ので、矢野町役場屋上の防空監視所に登ると同時に、大音響が起り、思わずその場に伏したが、監視所が吹きとんだような感じがした。

広島市内に爆弾が落下したものと直感したので、すぐ監視所から降りて警防団その他に連絡をとった。

役場に各地区の状況を集めてみると、当町の海岸線一帯は、窓ガラスをほとんど破壊されており、戸をあけていた家の天井は、五寸ばかり吹きあげられ、棚においてある品物は落ちていた(武田信次郎談)。

人体にも大きな衝撃を受けたが、それは普通の爆弾よりも一種独特なものであった。しかし、農作物には何ら異状を認めなかった。

爆発音は、矢野町からでは広島市の西地区江波町あたりで起ったように感じられたが、監視所から望見すると、円周五〇メートルほどのキノコ雲が昇っていた。それが青松葉に火をつけたときのように、次から次に煙が勢いすさまじく盛り上り、天に沖するばかりであった。

しかし、この爆発による広島市からの飛来物は何もなかった。

この日、矢野町七部落(奥坊条・稻荷町・高下谷・西条・祇園・姫宮町・鯨迫)から編成された国民義勇隊九四人は、午前七時半ごろ、比治山橋東詰めの山ふもとに集合し、鶴見橋付近の建物疎開作業開始の準備中に被爆した。

この時、この義勇隊を引率した町職員は、広島市の疎開作業事務所(竹屋国民学校内にあったようである)に、作業場所及び作業内容の指示を受けに行き、その帰途、比治山橋西詰付近で被爆負傷した(吉田広資料)。

すなわち、矢野隊は、疎開作業場所が未決定のまま、原子爆弾の炸裂に遭遇し、隊員一人が即死、九一人が負傷という災害をこうむった。

なお、この矢野隊のように、事務所の指示を待機中に被爆したという作業隊はほかにも幾つかあった。

二、避難者の状況

矢野町から出動の義勇隊員全滅の第一報により、役場はただちに各部落の義勇隊を動員し、その救援体制を取っていたとき、負傷はしているが、全員無事に帰路についているという第二報が伝えられた。

そこで町民総出で、国道矢野川橋付近にその帰りを待っていたところ、午前十時ごろ、広島市内からの罹災者が続々と、呉街道を徒歩で避難して来はじめた。

役場はただちに矢野国民学校を収容所に定め、これら避難者を誘導して収容につとめた。その数二一七人で、そのほとんどが負傷していた。

当時、矢野町内に暁部隊が駐屯していたので、軍医二人・衛生兵一〇数人により、負傷者の治療と看護にあたった。

夜は、国防婦人会が不寝番をして看護につとめた。

収容者のうち重傷者は、八月十二日ごろまでに身元不明のまま、症状が日々悪化し、つぎつぎと死んでいったが、努力した結果、八月二十日ごろまでには、全部身元が判明したので、その家族に連絡するなどできる限りの手をつくした。

これらの収容者は、特別に矢野町を頼りにして避難して来たのではなく、苦しまぎれに血路を矢野町にむけたものと思われる人が多かった。

避難者収容所の開設、ならびに埋・火葬状況はつぎのとおりである。

収容所名	所在地	収容者数	死体の埋・火葬数	火葬場所	開設期間
矢野収容所	矢野国民学校	三六一	二九	小越火葬場	八月六日から二十五日まで

なお、矢野町に避難して来てそのまま定着居住した世帯数は、矢野町西条二・同原一・同祇園町一・同本町二・同宮下四・同綿町一・同大井四・同姫宮一・同砂原二、以上合計一八世帯である。

昭和四十二年八月一日現在、被爆者手帳交付状況は、特別手帳九四八・普通手帳一一二、以上合計一、〇六〇通である。

三、広島市救援状況

救護状況

広島市の惨禍に対し、矢野町は当日ただちに救護班を派遣した。

救護班は呉線の汽車を利用して、出動人員六〇人が六日から十六日までの一〇日間出動して、救護作業に従事した。

また、警防団員五〇人が六日から九日まで四日間、矢野町からトラックで入市し、広島市内全域にわたって罹災者に対する炊出しをおこなった。

[第二八項 安芸郡熊野町](#)…820

地区の概要

熊野町は、広島市の南東にあたり、爆心地からの距離は、最短距離が約一〇・七キロメートル、最遠長距離が約一六・七キロメートルである。

海拔二五〇メートルの高原の町、熊野町は呉市に通ずる二河川や広の大河、海田湾にそそぐ瀬野川の水源をなし、

平和で静かな文化性の高い伝統を守っている。

俗に筆の町とも云われ、毛筆製造は一二〇年の歴史を誇る。その生産高は、全国の約九割を産し、住民の約八割が専従している。

当町は山林にかこまれた盆地であるが、やはり、原子爆弾炸裂の影響を受けた。

しかし、避難者が殺到するという事態は起らなかった。

町域面積は、三三・九平方キロメートル、世帯数二、二〇九世帯、人口九、三八五人(昭和四十年国勢調査)である。

なお、広島市からの国民学校疎開児童の受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

原子爆弾を投下した敵機と考えられるが、六日朝、その時刻にあたるころ、二機が熊野町西方面にあらわれ、飛行雲ができる高度で北西方面に向って進行したようである(中村正談)。

原子爆弾の炸裂時には、一瞬ものすごい閃光を見、つぎの瞬間、大音響とともに強烈な爆風におそわれた。建物の東南に面する二階の窓ガラスの多くが壊れ落ち、住民は恐怖を感じた。

また、熊野町第一国民学校(現熊野小学校)は、ほとんど破損した。

熊野町の北西にある観音平山上から、まっ白いキノコ型の雲が望見されたが、ちょうどま夏の入道雲のようであった。

これをみた住民は一様に、海田市町の火薬庫が爆発したものと想像した。

被爆地広島から、爆風などによって熊野町に飛来したものはなかった。また、この日、広島市の建物疎開作業に出動している者もいなかった。

当日午後二時から三時ごろにかけて、わずかの被爆者が、町内の縁故をたよって避難して来たが、そのあと殺到して来るといったようなことはなかった。

しかし、工員・会社員・挺身隊員、あるいは学生として、広島市に出ている肉親や縁者の安否を気づかって、搜索にでかけた者はおびただしい数であった。

二、広島市救援状況

救援状況

当町から医療救護班は出動しなかったが、警防団が次表のとおり出動し、被爆者の輸送に従事した。

(警防団出動状況)

町 名	出動期間	出動日数	出動数		出動場所	入市経路
			人員	延人員		
熊野町	八月八日から 八月二十二日まで	七日	－	一〇〇人	比治山付近	熊野～広島駅～比治山本町 トラック利用

なお、当町においては避難者収容所を設置する必要なく、死亡者を火葬するということもなかった。

わずかな避難者も、熊野町にずっととどまって定住者になるものもいなかった。

[第二九項 安芸郡熊野跡村](#)…822

地区の概要

当村は、広島市の東方面にあり、爆心地からは最短距離約一三キロメートル、最遠長距離約二三・五キロメートルの範囲内に位置している。

地域面積二〇平方キロメートルで、人口一、二八一人(昭和四十年国勢調査)、ほとんどが農作を生業としている。

村域の大部分が、山林で占められているという地形上からか、原子爆弾の炸裂時における大きな影響はなかった。

また、広島市から避難者が殺到することもなく、わずかの人が縁故をたよった程度であった。

なお、当村には、広島市内国民学校児童の疎開はなかったが、呉市内の警固屋国民学校児童が集団で疎開していた。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日当日、広島市を攻撃した敵機を目撃したものはなかったようである。

原子爆弾が炸裂したときも、ピカッと光ったのを感じてから、しばらくしてわずかな地響きと同時に、建物が微動した程度であって、建具や屋根などの被害はなかった。

村民も、不審をいдаくというようなこともなく、平日の静かな山村にかわりはなかった。

しかし、当村の西方に位置しているホコトリ山の上に、キノコ型の雲がムクムクと昇っているのが望見された。

正午ごろ、縁故をたよって来た避難者の語るところにより、広島市内に大きな爆弾が投下されたことが推察された。

避難者は、自転車で海田市町・瀬野川町を経由して入村したが、着のみ着のままの姿であり、惨禍のひどさを示していた。これら避難者のうち約一五世帯が、そのまま当村に定住した。

避難者収容所の開設、ならびに死体の埋・火葬状況は、つぎのとおりである。

収容所名	所在地	収容者数	死体の埋・火葬数	埋・火葬場所
民家	熊野跡村	二〇	一	熊野跡村火葬場

なお、被爆当日、広島市内からの爆風による飛来物は、何も見受けなかった。

また、広島市内の建物疎開作業に、当村からは出動していなかった。

二、広島市救援状況

救援状況

医療救護班は出動しなかったが、警防団が次表のとおり出動して、被爆者の輸送に従事した。

町 名	出動期間	出動日数	出動数		出動場所	入市経路
			人員	延人員		
熊野跡村	八月七～八日	二日	四〇	八〇	(一)横川付近・三滝の竹ヤブにいる負傷者救護 (二)東練兵場	荒神町ー比治山ー横川 トラック利用

三滝の竹ヤブや東練兵場に避難した負傷者を、トラックで広島赤十字病院へ運んだ。

[第三〇項 安芸郡江田島町](#)…825

地区の概要

江田島町は、広島湾上にある島嶼で、広島市の南に位置し、爆心地からの距離は約一七キロメートルである。

江田島の南端は、佐伯郡能美島に境界を接しており、昭和二十六年町制をしいた。

島の中央に秀峯古鷹山(三七六メートル)があり、その麓に、終戦まで約六〇年間、海軍兵学校が所在し、日本海軍揺籃の地として全世界にその名をとどろかせていた。終戦後は外国軍隊の駐留基地として接收されたが、昭和三十一年に返還され、現在は海上自衛隊第一術科学学校、幹部候補生学校などがあり、自衛官養成の中核基地となっている。

島の面積は二九・九一平方キロメートルで、人口は一八、〇二六人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に最短距離である島内の切串地域では、写真に使用するフラッシュが発光したように光った。かなり間隔において、強力な爆発音と共に爆風を受けた。

「広島が大火事だ」と、誰かが叫び、広島市の方を見ると、焼けただれたようなクラゲ雲が見え、上部が赤く紫色の煙が出ていた。

クラゲ雲の端から端にかけてムラムラと煙が湧きあがった。その湧きあがる煙から、あたかも降りそそぐ雨のように、無数の線が、広島市の街地に落ちるのが望見された。

爆風によって、畑や路面の土埃が家のなかへ舞いこみ、天井の煤がタタミの上一面に落ちた。広島市に面した一部の家では、ガラスが破損した。

樹木の被害はきわめて少なく、立木の小枝が少し折れた程度であった。農作物には被害がなかった。また、人体に感じた爆風はかなり強いものがあったが、熱さはさほど感じられなかった。

なお、広島市へ侵入する敵機を目撃したものはなかったし、爆発後、島内へ広島市から何かの破片が飛来するということもなかった。

二、避難者の状況

六日午後二時ごろ、広島市の宇品港から切串へ小型船で避難者が運ばれて来はじめたが、どの姿も顔面は火傷でふくれあがり、一見ただけでは誰かわからないほどの悲惨な姿であった。

島から広島市へ行っていた家族のものや親類などを探しに、連日船でかよったが、その帰途、広島を逃れようとする被爆者にたのまれて連れ帰ったのも多い。

避難者は当日から十六日の夕がたまで、約十月間続き、その数は約四〇〇人に達した。

山崎医師はもっぱら、これら避難者の治療にあたったが、薬品が不足し、負傷者のうち一二〇人に馬血清療法を行ったと、語っている。

六日当日、広島市の建物疎開作業には江田島村からは出動していなかった。また、広島市内国民学校児童のこの地への疎開もなかった。

なお、避難者収容所の開設、ならびに埋・火葬の状況は次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋・火葬数	埋・火葬場所	閉鎖月日
山崎病院	切串	八月六日	四〇〇		身元引受人が判明、それぞれ引き取った。	九月十七日の水害で病院は全部流失、同時に収容所も閉鎖。
切串国民学校講堂	切串	八月六日				
正念寺	切串	八月六日				
津久茂国民学校	津久茂	八月六日	一四	不明	津久茂墓地	八月十日頃

広島市から避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、向側一・鷺部五・飛渡瀬一・秋月一・小用一・切串三・大須一・津久茂一の一四世帯であった。

三、広島市救援状況

救援状況

医療救護班は、江田島村へ逃げて来た負傷者の治療だけに追われたので、市内へ派遣できなかったが、警防団は、町内各地区から七日、それぞれの船に分乗して出動し、八丁堀福屋から白島方面にかけて救護活動を展開した。

[第三一項 安芸郡音戸町](#)…828

地区の概要

音戸町は、倉橋島の北部にあり、広島市からは南、爆心地からの距離は約二五・〇キロメートルである。

隣町倉橋町と共に古くから開けた土地で、古刹来光山梵潮寺は名高い。

町の総面積は一八・一四平方キロメートルで、人口は一八、二二人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機は目撃しなかったが、その朝、恵木友一(当時・警防団副団長)の体験によれば、炸裂と同時に閃光を見たという。

ガラスの破損とか、建具が吹きとばされるということとはなかったが、家屋が震動し、ビリビリとかなり響いた。

しかし、キノコ雲も見ず、広島市から焼けた物などが飛来するということもなかった。

なお、この日、広島市の建物疎開作業にも出動していなかった。

二、避難者の状況

広島市からの避難者は別になかったが、当日、通学や商用で広島市へ行っていた町民とか、また、建物疎開による廃材を取りに行っていた人などが負傷したので、その関係家族が、舟で収容所に行き、連れて帰った。

昭和三十八年一月二十二日現在、原爆手帳保持者は三六九人、うち特別手帳保持者は一六三人である。この特別手帳保持者は、当日、通学や通勤、商用、あるいは廃材を取りに広島市に行っていて被爆したものである。

被爆者のうち死亡したものが相当数ある。

三、広島市救援状況

救援隊出動

医療救護班は出動しなかったが、十日、警防団員五〇人が舟で音戸町から市内江波町に上陸し、そこから徒歩で水主町県庁の焼跡に集合したうえ、トラックで小網町付近に出動し、救援活動をおこなった。

地区の概要

倉橋島(倉橋町)は、広島県の最南端にあり、愛媛・山口両県境に接している。古名を「長門島」と呼び、万葉集にも詠まれているが、神話時代すでに神武天皇御東征のときの軍船あるいは神功皇后の軍船の建造など伝えられ、奈良時代には遣唐使などの用船を建造、修理した。源平時代には平家の軍用船を多数建造、徳川時代に入ると各藩の用船を続々と建造し、明治以後、現代に至るまで、この優れた造船技術を継承している島である。

しかも国立公園瀬戸内海に浮ぶ島の一つであり、風光明媚、その桂浜は白砂青松の海水浴場として、広く一般に知られている。

造船工業のほか、ミカンの栽培が盛んで、海外にまで輸出されている。また、島の東部は蔬菜類を産出し、西部の葉タバコ耕作と共に有名である。

なお、海上輸送業は古い伝統に立脚して、独特な発展を続けており、町内の一部落所有の機帆船数は、その戸数に比例するという盛況で、全国一と称される。さらにまた、石材工業も全国的に名高く、特産サクラ御影石は国会議事堂に使用され、外国にも輸出されている。

倉橋町は、島の最南端部にあり、広島の爆心地からは約三二・八キロメートル離れている。町の総面積は、五四・一五平方キロメートルで、人口は一四、一七四人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機を目撃したものはなかったが、突然閃光を感じ、爆発音がきこえて来た。

しかし、爆風による被害はなく、家屋も農作物などにもなんら異状はなかった。

飛渡瀬の重油タンクか吉浦の火薬庫が爆発したのかと思われたが、そんな感じの入道雲が望見された。

この町には、広島市の国民学校児童の集団疎開はなく、またこの日、広島市の建物疎開作業には出動していなかった。

二、避難者の状況

六日午後七時ごろ、宇品から海路船便によって避難者が来はじめた。

歩行可能な者は、宇品～高尾間一日一往復の定期便を利用した。その他は別仕立ての、主として機帆船によって運ばれて来た。

避難者のほとんどは、この町出身者であったが、みんなボロボロのシャツやブラウス姿であった。それも外傷や火傷の程度のひどいものほど、衣服も損傷ひどく多くは半裸であった。

町に帰ることができず、広島市円の各収容所に収容された負傷者や、死者四一人を出した動員学徒の捜査のために、別船を仕立てて広島市に行き、見つけしだいこれに乗せて運んだ。これが八月十三日ごろまで続いた。

広島市から避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、次のとおりである。

区域名	世帯数	区域名	世帯数	区域名	世帯数	区域名	世帯数	区域名	世帯数
才の浦	三	石原浦	一	室生浦	二	長谷浦	二	大迫浦	一
松原浦	一	須川浦	三	灘浦	二	尾立浦	一二	海越浦	三
上河内浦	二	西宇土浦	一	宇和木浦	九	室尾西浦	八	鹿島下浦	一
小林浦	二	大向浦	一	釣士田浦	四	室尾東浦	一〇		

三、広島市救援状況

救援状況

医療救護班は出動しなかったが、警防団員が、特別に船を仕立てて出動した。

室尾東浦は六日当日から八日まで、毎日九人延二七人が出動し、紙屋町付近で救護活動にあたった。

翌七日は大向浦二人、灘浦三人、釣士田浦四人がそれぞれ出動し、大向浦は千田町の広島赤十字病院及び宇品町十二丁目付近で九日まで、釣士田浦は似島収容所で同じく九日まで、また灘浦は丹那国民学校収容所で十日まで救護活動にあたった。

八日には、室生浦三人が島内大向国民学校で十二日まで働いたが、陸軍運輸部の機帆船に便乗して同校へ通った。

また、宇和木浦一人、海越浦三人が十日まで連日出動し、宇和木浦は御幸橋以南宇品地区周辺で、海越浦は住吉橋付近で活動した。

九日は鹿島上浦から一人、十日は鹿島下浦から三人、共に水主町付近で救護活動にあたった。

第三三項 高田郡白木町…832

地区の概要

白木町は、広島市の北東に位置し、爆心地から約二六・四キロメートルの距離がある。

往古から瀬戸内海文化と出雲文化の交流の要路にあり、国鉄芸備線の駅が井原市・志和口・上三田・中三田と四か所ある。

白木山（標高九〇〇メートル）は風光よくハイキングコースとして広く親しまれている。

昭和三十一年九月三十日、町村合併促進法に基づき、志屋・井原・高南・三田の四か村を加えて現在の白木町が発足した。

面積は九九・七八平方キロメートルで、人口九、三八五人（昭和四十年十月一日国勢調査）である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日午前八時、高田郡三田監視所の国友雪夫監視員は、広島市へ侵入する敵機を目撃した。機数はわからなかった。

監視員交替のとき、広島地区本部からの情報が入った。それによると B29 らしい機体が四国豊後水道を北上し、江田島上空を旋回し、南方面に消え去ったということである。同時に警戒警報も解除となったが、そのあとであった。

午前八時十五分ごろ、ピカッと光ったかと思ったら、大きな音響が遠くからきこえてきた。

屋外に飛び出してみると、煙のようなキノコ雲が、大きくモウモウと広島上空に舞いあがり、それが周辺に広がると、たちまちにして薄赤色を帯びて広がった。今までの晴天の白木町上空は、そのため、霞がかかったような状態となった。

そして、落下傘らしい物が安佐郡方面に、落下するのが見られた。

大爆発音と同時に家屋が震動し、数秒後、爆風が襲来して、樹木はひどく音をたてて倒れんばかりになびいた。

なお、当日、現町域内各町村から広島市の建物疎開作業には出動していなかった。

二、避難者の状況

六日午前十時三十分ごろから、芸備線によって、続々と避難者が、町内の各駅に送られて来た。

これより先、広島市は火災となり、被爆者は相当数に上るとの情報があり、各地区の役場職員はさっそく被爆者の受入れ準備をおこなうよう命令が出て、午前十一時ごろまでに、各地区ごとに学校や隔離病院を臨時収容所として体制をととのえた。

中三田駅・志和口駅・井原市駅において、在郷軍人分会ならびに婦人会員が駅頭に避難者を出むかえ、湯茶の接待をおこなうと共に、在郷軍人会員は、被爆負傷者を担架にのせて駅から収容所へ運んだ。

被爆者はみんなひどく火傷するか、ガラスの破片その他で相当の負傷をしており、まともには見られない姿であった。

交通機関は杜絶して、芸備線鉄路による被爆者転送用列車も窓は破壊されたままで、矢賀駅から折りかえし運転した。

どの汽車も満員で、悲痛な叫び声が至るところから洩れきこえていた。無数の負傷者で救護活動も思うように手がとどかず、ただ列車の停車時間を利用してわずかな応急措置をとるのが精一杯であった。

三、避難者収容所の状況

白木町内の各駅に下車した負傷者は、次のように措置された。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
三田村立国民学校 （陸軍病院三田分院）	三田村	八月二日	八〇	一〇	三田村有	九月三十日
秋越村立国民学校 （右に同じ）	秋越村	八月二日	八〇	一五	秋越村	九月三十日

市川村立国民学校	市川村	八月二日	六〇	二〇	市川村	九月三十日
井原村隔離病舎	井原村	八月六日	三〇	五	井原村	八月二十日
井原村立国民学校陸軍病院	井原村	七月三十日	一〇〇	三〇	井原村	十一月二十日
志屋村立国民学校	志屋村	八月六日	－	－	－	八月二十日
秋越村隔離病舎	秋越村	八月六日	五〇	五	秋越村	八月二十日

なお、白木町に避難して来て、そのまま定着居住した世帯は、三田村八〇世帯・秋越村六〇世帯・市川村四〇世帯・井原村五〇世帯・志屋村四〇世帯、合計二七〇世帯である。

四、広島市救援状況

救援状況

惨禍なまなましい広島市へ、井原村から医師一人が、七日から十一日まで五日間出動して医療救護にあたった。
 また、警防団は七日から同十三日まで七日間毎日、秋越村・市川村・井原村・志屋村が、それぞれ二五人ずつ計一七五人が出動し、市内八丁堀付近の清掃作業をおこなった。出動にあたっては、それぞれの駅から汽車で矢賀駅まで行き、そこからトラックで入市した。

[第三四項 高田郡向原町](#)…836

地区の概要

現在の向原町は、昭和二十九年三月町村合併促進法により、有保村を吸収合併してできた町で、人口六、七五三人（昭和四十年十月一日国勢調査）である。

爆心地から東北約三四・六キロメートルの地点にあり、面積約八三・五一平方キロメートルで、その約八〇パーセントが山地、残り二〇パーセントが耕地である。町の南境に郡内最高峯の鷹の巣山（海拔九二二メートル）があり、和牛の改良など酪農産業が発展している。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

よく晴れていた。午前八時過ぎ、突然ラジオの騒音と同時に、電光に似た光りが障子にうつった。しばらくして、大砲を発したような音がきこえて来た。また何処かへ爆弾が投下されたかと直感した。

向原町役場の有田貢は、ちょうどそのとき、家のうちにいたが、外に出てみると、西方の彼方にはっきりと、松タケ型の白雲が立ち昇っているのを見た。

白雲は次第に上昇し、そのカサは大きくなると共に、ひだの部分が黒くなり、あるいは赤くなっていくようであった。

その間、落下傘のようなものが落下していくのが見えた。煙はその後、長方形に変形して、長く雲間に残っていたようであった。

なお、広島市に侵入した敵機の見撃者は無く、原子爆弾炸裂による衝撃とか、爆風による飛来物などは別になかった。

また、向原町には、動員令による建物疎開作業隊の出動もなく、広島市からの疎開学童も受入れていなかった。

二、避難者の状況

当日、午後二時三十分ごろ、広島市矢賀駅から出た汽車によって、無残に引きさかれた着物に、まっ黒い顔をした避難者が向原駅に送られて来た。

汽車は、高田郡白木町井原の平岡薫（当時広島工機部勤務）が、矢賀駅にあった汽車を運転したものであった。以来、毎日数十人の被爆患者が収容された。

これらの避難者は、向原町坂の向原国民学校を収容所として救護し、収容所の閉鎖された九月三十日までに一、二〇〇人に達した。

このうち、死体の埋火葬概数は約一二〇体で、向原町坂の大宋山火葬場において処理された。

なお、広島市からの避難者のうち、そのまま向原町に定着居住した世帯は概数一〇世帯である。

地区の概要

吉田町は、広島市の北東約四五キロメートルを距てる位置にあり、天正十九年（一五九一）に毛利氏の広島入城まで、三〇〇年近くのをあいだ、その拠城を置いていたところである。

広島市の被爆当時の行政区域は、従前からの吉田町と、丹比村・可愛村・郷野村の四か町村に分れていたが、昭和二十八年四月一日、この四か町村が合併して新しく吉田町として発足した。

町域面積八五・三四平方キロメートル、人口一、三三五人（昭和四十年度国勢調査）である。

なお、爆心地からの至近距離は約三七・六キロメートル、最遠長距離は約五四・九キロメートルである。

被爆当時、吉田町には、広島陸軍幼年学校および広島女子高等師範学校が疎開して来ており、さらに、広島聾唖学校や呉市の国民学校児童が、次表のとおり町内各寺院に相当数疎開して来ていた。

広島市内の国民学校児童の疎開に関しては聾唖学校関係の児童以外には受入れていなかった。

疎開児童受入れ状況

収容場所	所在地	学校名・収容児童数	期 間
徳栄寺	吉田町大賀屋	呉市 清水国民学校 六〇人	昭和二十年四月から九月まで
善立寺	郷野村八江	呉市 上山田国民学校 四〇	
広浄寺	郷野村桂	呉市 上山田国民学校 四〇	
長楽寺	丹比村多治比	呉市 清水国民学校 五〇	
法円寺	可愛村竹原	呉市 上山田国民学校 六〇	
円浄寺	可愛村山手	呉市 清水国民学校 六〇	
浄門寺	吉田町大賀屋	広島市広島聾唖学校 五〇	昭和二十年五月から昭和二十一年十二月十五日まで
法専寺	吉田町六日市	広島市 広島聾唖学校 六〇	

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市侵入の敵機も、また原子爆弾投下後に急ぎ離脱した機影も、目撃者がなかったようである。

また、敵機からの落下物は何もなかった。

当町の中心部は山間の盆地であるから、広島市被爆時、強い閃光をその上空に感じた。

その直後、ダ・ダ・ダ・ダーンと地ひびきに似た衝撃がつつわって来たが、さして強烈なものではなく、営造物などの被害はなかった。

ほとんどの住民は、当時高田郡根野村に建設中であった海軍飛行場が爆撃されたものと直感した。

そして、しばらくしてその方向にあたって巨大な入道雲が望見された。これが原子爆弾の炸裂によって、広島市上空に立ち昇ったキノコ雲の上部であったと思われる。爆風による飛来物などは何もなかった。

広島市の惨状は、当日午前十時ごろに可愛村常夏の杉村六郎と、吉田町の南条某の両人が、被爆負傷した姿のまま、町役場に立ちより、広島市が一瞬にして火災となり、ほとんどの人が火傷を受け、死亡しているだろうと口頭で伝えてから、はじめて知った。

当日正午過ぎごろから、広島市からの避難者群の最初の人々が、吉田町へ到着しはじめた。

これらの人々は、そのほとんどが半裸体姿であり、火傷のため赤黒く腫れ、重傷や軽傷を受けていた。

すでに息たえだえで、今にも倒れてしまいそうな避難者もいた。

辛うじて広島市を脱出した人々は、安佐郡祇園町・可部町を経て、国道を徒歩やトラックで当町にたどりついた者や、国鉄芸備線によって吉田駅まで逃げて来て、そこから歩いて町へ入って来たものであった。

多くの負傷者のなかには、ごくまれに普通の戦時服姿の無傷の人も見受けられたが、後から後から見るにたえないすがたの避難者群が続いて来た。

このような状況が、被爆翌々日の八日の正午ごろまで続いた。

二、避難者の状況

陸続と町に入ってくる避難者の、見るも無残な様相を見て、当町ではただちに収容と治療を開始した。

これら負傷者を、吉田病院に収容して手当をしたが、つぎつぎに到着する多数の人々を収容しきれず、臨時に高田地方事務所の会議室、ならびに吉田国民学校の特別教室とを収容所にあてた。

町内の医師・看護婦・婦人会員・女学生などを総動員して、被爆者の看護や施療、炊出しをおこなった。

収容人員は、八月六日から同月三十一日まで約二二〇人で、この間約一〇〇人が死亡した。

これら死亡者は、青山火葬場、ならびに吉田町貴船に急設した貴船仮火葬場とで荼毘にふした。身元判明者の遺骨は、その遺族や縁故関係者に渡し、身元不明者の遺骨三六体は、徳栄寺に埋葬した。

毎年の盆会には、吉田町社会福祉協議会・同婦人会・同原爆被害者の会が、この埋葬場所で供養を続けている。

なお、郷野村では、郷野国民学校内に郷野収容所を開設し、六日当日から二三人を収容し、八月十四日に閉鎖した。

三、広島市救援状況

救援隊出動

六日朝九時ごろ、吉田警察署から医療担当機関および各町村駐在保健婦に対し、広島市救援についての出動要請があった。

一同は、ただちに吉田警察署に集合し、吉田の井上敏夫医師を団長として、九時半にトラックで急遽広島市へ出動した。

この迅速な行動は、かねて県当局から配布されていた「医療関係者召集要綱」に基づく、平常の組織的な訓練で、いつでも出動できる体制が整えられていたからであった。

医療救護班は、可部・緑井・広島市と、転々と各救護所をめぐって活動した。

吉田町の吉田農学校に本部を置く高田部隊(広島地区特設警備隊中国三二〇四九部隊)では、約二〇人の警備隊を編成し、午後七時三十分ごろ、トラックに乗り町内の人々の見送りを受けて出動した。

また、翼賛壮年団員約一〇人が、本部からの指令を受けて、救援のにぎりめし四、〇〇〇人分を準備し、同夜、広島市へ向け出発、午後十時ごろ横川町の三篠信用組合建物内の、仮設救護指令所に届けた。そのあと、七日午前二時ごろまで付近の整理作業にあたった。

広島市救援に出動した警防団の活動状況は、つぎのとおりである。

吉田町	三〇人ずつ三日間	延九〇人
可愛村	三〇人ずつ三日間	延九〇人
丹比村	一五人ずつ三日間	延四五人
郷野村	一五人ずつ三日間	延四五人

いずれも六日・七日・八日の三日間出動したもので、国道広島～松江線をトラックに乗って往復し、入市後は、横川町から爆心地付近の猿楽町にかけての地域で、焼跡の整理作業にあたった。

広島駅へ行って、ただ広島のようなすを見ただけで帰ってきて、髪の毛が脱け出した例があった(広島原爆医療史、末兼英一医師談)と、いわれているが、吉田町から広島市救援に出動した人々で、現在、原爆症状の出ている人はいない。

四、避難者の定着状況

広島市から避難して来た人々で、結局そのまま現在の吉田町区域内に定着居住した世帯数は、つぎのとおりである。

- 高田郡吉田町 六三世帯
- 高田郡丹比村 三三世帯
- 高田郡可愛村 四九世帯
- 高田郡郷野村 四二世帯

なお、被爆者健康手帳保持者は、昭和四十二年七月末現在で次のとおりである。

- 特別手帳 七二一人
- 一般手帳 九〇人

[第三六項 高田郡甲田町](#)…843

地区の概要

甲田町は、広島市の東北にあたり、爆心地からの距離は約四五・八キロメートルである。

昭和三十一年四月一日、甲立町と小田村が合併して新発足した町で、町名は当時の大原博夫県知事の命名による。

町の中央を可愛川が貫流し、これを中心として農耕生産が発展した。また川を挟んで東南に国鉄芸備線が走っており、北西に一級国道広島－松江線が貫通していて、近時さらに町勢の進展を見せている。

この地域は往古から開けた土地で、五龍山城跡、祝城跡、釜が城跡、中山城跡など史蹟が多く、高林坊はその庭園と共に、安芸の名刹として名高い。

町の総面積は七二・九四平方キロメートルで、人口は七、四三三人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

八時過ぎ、稲光りのように空が光った。そして大砲の音くらいの爆発音がして、甲立町西南方面の山上からキノコ雲の立ち昇るのが目撃されたが、爆風の衝撃は感じなかった。キノコ雲は小田村からも望見された。

この日、広島市の建物疎開作業に勤労奉仕隊として小田村から七人が出動していた。

なお、広島市から国民学校の児童が約六〇人ほど縁故疎開で来ていた。

二、避難者の状況

六日午前十一時ごろ、広島市から汽車で最初の避難者が到着して、はじめて惨禍の実態に触れた。

矢賀駅から芸備線に乗って来たものであるが、トラックで運ばれた避難者も多勢いた。トラックの避難者は負傷者や火傷者がとくに多かった。

広島市からの第一便午前十一時着の列車では比較的に軽い負傷者が多かったが、午後三時ごろの第二便からはひどい火傷者や重傷者が続々と到着しはじめた。

この町出身者のみでなく、他の町の避難者もいたので、その縁故へ連絡したり、負傷の手当をしたりして土地の人は多忙をきわめた。

甲立町では一応全員を甲立国民学校に収容したが、重傷者はタンカや荷車を利用して運んだ。そして近辺に知人や親類などのある人はすぐに連絡を取った。

トラックで運ばれた重傷者は、荷台の床にワラを敷いて寝かされていたが、トラックの震動で、腫れあがった火傷場所がつぶれており、なんとも言えない異様な臭気を放っていた。しかし、これら負傷者に対してどんな治療をしてよいのか判らず、ただアカチンを塗るのが精一杯であった。

治療には、吉田町の吉田病院と、県立甲立保健所並びに足利医院から医師・看護婦の応援を求めた。

また、甲立町婦人会は、にぎりめしや漬ものを避難者に配給すると共に、広島市内へもにぎりめしをトラックでどんどん運んだ。

小田村では、平日の九時四十分ごろの汽車が十一時ごろ延着したが、これで負傷した村民が二人かえって来て、広島市の実情がようやく詳しく判ったのである。

午後三時ごろの第二便で相当数の人が帰って来たが、村出身者だけでなく他の人も幾人かがここで下車した。

吉田口駅前の木坂旅館、松村旅館に避難者を収容し、負傷者の治療をおこなった。しかし治療は、医師が全員広島市救援のため派遣されたし、薬品もなかったので、小田村の保健婦に依頼しておこなった。この保健婦もまた西村医師と共に広島市に派遣されたので、役場吏員三人が自宅にも帰らず、昼夜の別なく看護にあたった。その間一週間くらいであった。

各収容所の状況については、次のとおりである。

収容所名	所在地	開設月日	収容者数	死体の 埋火葬数	埋火葬場所	閉鎖月日
甲立国民学校	甲立町	八月八日	約一六〇	八	公設火葬場	八月十八日
木坂旅館	小田村	八月七日	三五	—	—	八月十四日
松村旅館	小田村	八月七日	四一	—	—	八月十五日

広島市からの避難者で、そのまま町内に定着居住した世帯は約一七世帯である。

三、広島市救援状況

救護状況

甲立町から医師一人が、八日から二十四日まで一七日間、出動して医療活動をおこなった。一方甲立町警防団は、七日から十五日まで九日間、一日平均五二人が甲立駅から汽車で広島に出動し、相生橋・横川・三篠付近一帯にかけての死体処理作業にあたった。

小田村からは、医師並びに看護婦各一人が六、七両日トラックで、つぎに十七、十八両日、さらに二十二日から二十四日まで汽車で出動、六、七日は市役所で、他は観音国民学校収容所で医療活動をおこなった。

また、小田村警防団は、八日から十五日まで八日間、二六人延一九二人が芸備自動車に分乗し、吉田町経由で入市、横川橋付近に下車して数班に分れ、それぞれ救援活動にあたった。

地区の概要

志和町は、広島市の東北東に位置し、爆心地からの最短距離は約一五・二キロメートル、最遠長距離は約二七・五キロメートルである。

昭和三十年八月一日、東志和村・志和堀村・西志和村が合体して、志和町となった。

地域面積は六六・四九平方キロメートル、人口七、五六四人(昭和四十年国勢調査)で、山間に所在する農村である。

地形的に周囲が山でかこまれており、距離的にも爆心地から遠くはなれていたから、原子爆弾炸裂の影響は、わずかに閃光と爆発音を認めた程度で、まったく軽微であった。

なお、志和町には、広島市内の国民学校児童の疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市を襲撃した敵機を目撃したものはいなかった。

爆弾の炸裂時には、閃光が感ぜられ、爆発音をきいたが、何らその影響はなかった。

入道雲状の大きな黒煙が見られたが、村民には、ただ火事のけむりくらいにしか思えなかった。

広島市の周辺地区のような、原子爆弾の炸裂による飛来物はなかった。

なお、六日朝、広島市の建物疎開作業に出動した者はいなかった。

また、広島市からの避難者もなかった。

二、広島市救援状況

救護状況

警防団は、六日当日から十五日までの十日間、広島市へ出動して救護作業にあたった。

出動にはトラックが使用され、作業場所はその日その日の指令に従って従事し、その範囲は火災地域全般にわたっていた。

出動人員

東志和村 延約一二〇人

志和堀村 延約一二〇人

西志和村 延約二四〇人

なお、現在、原爆手帳の発行状況は、つぎのとおりである。

特別手帳 四九八通

普通手帳 五三通

地区の概要

当町は、呉市の北東に隣接し、広島市の爆心地から最短距離東南に約一五・五キロメートル、最遠長距離東南に約二七・五キロメートルへだたったところに在る。

昭和二十九年三月三十一日に、上黒瀬・乃美尾村・中黒瀬・下黒瀬の四か村が合体し、あたらしく黒瀬町として発足した。後に、板城村の一部が編入されて現在に及んでいる。

地域面積は、約六五平方キロメートルで、そのほとんどが山林で占められている。人口は九、一八八人(昭和四十年国勢調査)で、もっぱら農業によって生計をたてている。

黒瀬町への交通便としては、呉方面や山陽本線沿線の西条町からの便は多いが、広島市方面からの道は難路のため、わずかのバス便しかないほど交通不便である。

なお、この地域には、広島市からの国民学校児童の疎開は受入れていなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市に侵入する敵機の見撃者は、一般住民のうちにはあまり無かったようである。

黒瀬町は山林地帯で、周囲が山にかこまれているためか、六日朝、ピカッと光ったのと同時に、地ひびきを感じ、しばらくして戸や障子がビリッビリッと震動したが、それ以上の大きな衝撃はなく、家屋の被害もまったく無かった。

爆発後、当町の西北西の町ざかい付近にあるコタ山とイラスケ山のあいだがら、五〇メートルぐらいの上空まで、白い雲が盛りあがっている状態が見られた。

乃美尾村の賀茂海軍衛生学校では、将来海軍の中堅幹部となる普通科練習生たちの卒業試験がはじまっていたが、その生徒の一人西家明男衛生上等兵は、次のように状況を報告している。

「八月六日朝、教室に向っていると、突然、空襲警報が鳴り、何(機種)の来襲かと空を仰ぎみれば、すでに上空を高く B29 が飛来しており、待避命令は出されない。B29 一機や二機が高空で飛んでいるのは、最近毎日のことで、そのたびに待避していたのでは、勉強にならず『また B29 か』と思いながら校舎に入り、廊下を歩いていると、一瞬、稲光りのような閃光と同時に、ガラス越しに、針のようなものに刺される感じを受け、底力のある音のようなものがした。びっくりして外をのぞくと、西の上空を B29 が急旋回しており、思わず外にとびだした。見ると、西方の山の稜線から、何か広く大きな煙の雲がのぞき出し、それがだんだんと上昇しはじめ、ちょうど大型の入道雲に似て成長した。この異様な雲は、長い尾を引いて、なおも無気味に上昇を続けた。

相当高空に達するまで見ていたが『これは何かあったな』と直感した。その日の夕がたごろ、広島市が敵の新兵器爆弾らしきもので全滅したと聞いた。そして、近くの兵舎にいた衛生学校の学生隊が救護のため、急ぎ出動した。」

また、八日に出動した同衛生学校の杉村脩一救護隊長は「空襲警報がなり、急ぎ外へ出て、頭上 B29 機が西方へ行くを見ていると、まもなく目もくらむような閃光、つづいてキノコのような雲がモクモクと空に昇るのが見られた。そして、耳の底にズーンとくるような重い爆発音がし、そのあと二つか三つの落下傘が見えた。ある者は日本に新兵器ができて、B29 を一挙に落したとか、或いは、広島の火薬庫が爆発したとか、新しい爆弾を投下したとか言って諸説紛々…」と、報告している。

なお、この地域には、広島市からの飛来物は何もなかった。

広島市内の建物疎開作業への義勇隊出動はなかった。

二、避難者の状況

距離的に言えば、広島市からさほど遠く離れているわけではなかったが、山の坂道を通らねばならない不便さのためか、他の広島市周辺地区のような混乱は起きなかった。

被爆直後、ただちに帰って来た村民は少なく、当日は一応、焼失をまぬがれた市内の親類や知人の家に一泊して、翌日か翌々日になって帰って来たようである。

このような状況であったから、当町においては、特別に避難者収容所を設置するということとはしなかった。

各村に帰って来た負傷者のうち、ただちに死亡した者はなく、相当な期間が経って死亡した者は、その縁故者が各自、普通の方法で茶毘に付した。

なお、当町に避難してそのまま定着居住した世帯は次のとおりである。

上黒瀬村 一三世帯
乃美尾村 三四世帯
中黒瀬村 一〇〇世帯
下黒瀬村 三二世帯

三、広島市救援状況

救援状況

広島市被爆による医療救護班は賀茂海軍衛生学校を除いて一般では出動しなかったが、警防団員はつぎのとおり出動して、大いに活動した。

村 名	出動期間	出動 日数	出動数		出動場所	入市経路
			人員	延人員		
上黒瀬村	八月八日	一日	一五人	一五人	市内一円	黒瀬－西条－海田－広島 トラック利用
乃美尾村	八月八日と九日	二	一〇	二〇	己斐国民学校	広経由－広島 トラック利用
中黒瀬村	八月八日	一	二五	二五	草津国民学校	黒瀬－広－海田－広島 トラック利用

下黒瀬村	八月八日	一	一五	一五	市内	広―海田―広島	トラック利用
------	------	---	----	----	----	---------	--------

第三九項 賀茂郡八本松町…853

地区の概要

八本松町は、広島市の東方にある。昭和三十一年九月一日、川上村・原村・吉川村の三か村が合体して八本松町となった。

爆心地からの距離は、最も近いところが約一七・五キロメートルで、最も遠い地点は約二四・七キロメートルである。

面積五四・八九平方キロメートル、人口八、五九二人(昭和四十年十月一日国勢調査)で、農業を主とする山村である。

被爆時、広島市内国民学校の疎開児童受入れはなかったが、原村の教順寺ほか一か所に、農村動員で高等師範学校附属中学校の引率教師四人、一年生一二〇人が宿泊していた。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

当日午前七時過ぎごろ、川上村大字宗吉の海軍弾薬庫上空と思われるあたりに、高度約一万メートルの敵機三機を認めた。二、三回旋回して東方に去り、約一〇分くらいの後、もとの位置にもどって来て、再び旋回すること二、三回で進路を東方にとり、川上村大字正力上空において、機首を南方にめぐらして去ったが、そのまま現れることはなかった。

後日の情報を総合してみると、広島市を攻撃した原子爆弾搭載機の待機の飛行機であったのではなかろうかと、目撃者の同村伊藤実成(伝承場僧侶)が報告している。

八時十五分ごろ、室内にいた者でも閃光が感じられた。そのあと一分ぐらいして、鈍い音響を聞いた。

障子が、爆風の影響でいくらかビリビリと震動した。

村民たちは、みんな宗吉の弾薬庫か、瀬野川あたりに爆弾が投下されたのではないかと思った。

八本松辺からは、落下傘三個が北の方へ落ちていくのが望見された。また、陸軍演習場のあった原村の役場付近では、別添の久保木勝美の報告のごとく、広島市上空に立ち昇るキノコ型の雲がよく眺められた。しかし、爆風による広島市からの飛来物は何もなかった。

二、避難者の状況

六日正午ごろから、汽車で村の身内をたよって避難者が来はじめた。それ以後、汽車の到着するたび三時、五時と夜間にかけて、ポツリポツリと避難者が到着した。八本松駅前の倉田セツ子宅には、身内の避難者がいちじに一七人になったので、村の公会堂を借りて泊らせるようなこともあった。しかし、特別に収容所を開設するほどのことはなかった。

三、広島市救援状況

救援隊出動

六日から三日間、警防団が三か村から出動し、いずれも東練兵場・基町・流川町・八丁堀・袋町・猿楽町・水主町・比治山で、負傷者の収容や死体の収容作業にあたった。

出動にあたっては、トラックで直接広島市内に入った班と、汽車を利用した班とがあったが、汽車を利用した班は、八本松駅から海田市駅まで汽車で行ったものの、海田市駅からは汽車不通で、あとは徒歩で市中に入った。

出動人員は、川上村が延約四五〇人、原村延約三六〇人、吉川村延約一五〇人である。

四、その他

広島市から避難して来て、そのまま定住した世帯は、川上村二〇世帯、原村五世帯、吉川村二世帯である。

その瞬間、望見の記

久保木勝美(談)

(望見場所・賀茂郡原村(現在八本松町)爆心地から約二二キロメートル。当時、西條農業学校二年生)

警戒警報も解除になったし、腹具合が悪くて学校も休んでいたのも、朝食後、ゆっくり母や兄と食卓をかこんで雑談をしているときであった。

突然、家の真上で、金属性の特徴のある B29 の爆音がきこえた。

兄も私も「あ、B29 だ。」といった。

「飛行機雲を見たことがないから、出て見よう。」と、母が起ったので、兄も私もついて起ち、家の裏へ出た。家の裏は、一帯が畑地で、広島市が真西にあたるところであった。

空を仰ぐと、ちょうど頭上の、相当な高度のところに飛行雲が二本出ていた。いつもなら、ずっと後方遠くから飛行雲がえがかれているのに、その日にかぎり、頭上ま上から飛行雲が生じて西の方へ走っていた。今から考えると、仰ぎみた頭上がまさに、原爆搭載機が超高空から急降下して来て、投下姿勢を取った原点であったことがうなずかれる。

そして、三個ほど横にならんで相当大きな落下傘が、ふんわりと気流に乗ってただよいながら、降下していくのが眺められた。

同時に一機の B29 が、その落下傘の列と交叉する角度の、北の方にむかって、まるで慌てふためいて逃げ去るという形容がピッタリの姿で、飛び去っていくのを見た。その B29 は、わりと大きく見えた。朝日に美しく映えて銀色の機体をキラキラと光らせていた。

落下傘を見ながら「あれは何だろうか」と話しあっているそのとき、一瞬、巨大な白熱光がまぶしく眼を射た。まるで朝日が西から出たようであった。とっさに三人とも家の中へとびこんだ。

おそるおそる裏木戸のところから顔をのぞかせてみると、上ツつらが桃色で下方が紫色に染まった綿菓子のような雲が、中天にむかって、内側から外側へ、外側は内側へ巻きこまれながら、ぐんぐんと膨脹して昇った。

巨大な、今にもこちらに迫って来るようなその怪雲をみているとき、爆風に襲われた。

爆風は、体を押しつけるように非常に強く通過した。家がギュッときしむような感じがした。畑の野菜や樹木があまりに震えざわめいた。

「ガスタンクがやられたのだろうか」と、こもごも話していると、まっ黒く鈍重な、夕立雲をもっと黒くしたような、わりあい扁平な雲が湧き出た。二、三時間後には、西方一帯を雲とも煙ともつかないとばかりが、ずっと広くおおっていた。翌日になってもこのとばかりが広島市上空にかかっていた。

広島市全滅の報は、午後になってから隣家の婦人が知らせてくれた。

六日の夜なか、所用で広島へ出ていた村のある中年夫婦が、焼けただれて帰って来て、不安は深刻になるばかりであった。

警防団出動の記

賀茂郡八本松町大字正力

蔵田良見(当時・警防団救援隊)

一、この日は、朝から暑さもきびしい様相の日でありました。俗にいいます処の日本晴れの雲一点とない、良いお天気でしたので、私は、この朝早くから食糧増産にと思い、田圃に出まして草とりをしておりました。

二、そのため原爆投下時は、田の中においてあの青白い強烈な閃光を見ました。田圃よりふり仰ぐと、西の空高く、銀色に輝く四発の敵飛行機が、一機また一機、急旋回しており何か落下傘の様な物が一つ、二つ落ちていくように見えたが、やがて地軸をゆるがすような大音響が、ドドーンとひびき、虹のような赤、青、茶褐色を帯びた巨大な煙が、雲の柱のように立ち昇ると見るまに、どんどん茸状に広がって白煙と黒煙との物凄い有様となりました。余りの奇怪さに家族一同の者と呆然とし、「広島市のガスタンクの爆発じゃろう。」「いや火薬庫の爆発だろう。」、あるいは「向洋の製鋼所が爆破されたらしい。」と、とりどりの推測に不安はつのるばかりでありました。

三、十時頃であったと思います。賀茂郡川上村(現在・八本松町)役場からの伝令が、私の部落に参りまして、広島市に新型爆弾が投下され、全市が壊滅的打撃を受けたことを伝え、警防団員に救護活動出動要請をしました。出動を命ぜられた団員半数は、ただちに救援に向いました。救援隊は第一班・第二班・第三班の三班に別れ、被災者救援にあたるよう、役場より通達があり、第一班は、六日午後三時頃、列車あるいは自動車にてむかい、その日団員は救援後東練兵場で野宿の一泊をして、明朝第二班と交替をしました。私はこの二班に入っておりました。

第二班は七日、八本松駅に集合をして、八本松発午前六時の列車にて向洋駅に到着し、徒歩にて広島駅を目標にと

参りました。はっきりしたことはわかりませんが、西蟹屋町あたりから爆風によって満足な建物はほとんどみられず、東練兵場に近づくにつれて、次第に街は焼土の原と化し、コンクリートの建物の原型だけが残っていたり、ボロボロに破れたわずかの衣服を身にまとい、さまよう被災者にでくわしました。

四、このような状況の中を通り過ぎて、私たちは東練兵場に到着しました。その後わずかな休憩の後、東照宮付近であったと思う仮収容所に、タンカで被災者を運びました。被災者の多くは、顔がズルズルになったり、皮膚をたらしたりして、中には、我が子を我が親を、呼び捜す人々、息絶えだえに「死んでもよいから、水をくれ」と手を合わせて訴え、余りにも頼みに水をを与えると、呑みほしたまま目の前で、息をひきとる者もありました。

仮収容所の医師は、水を与えると死んでしまうから、絶対に与えないようにとのことでしたが、このような状況下にあっては、無理におし通すことも出来ませんでした。最近被爆者の中には、あの時水を飲んだので、私は助ったのだと言う人もあり、我々素人には、どれが真実か、わかりません。

また、七日午前三時ごろから、大日本国防婦人会が、被災者のための食糧にと作ったにぎり飯をも配りました。このにぎり飯は、川上大日本婦人会が、六百戸の農家から集めた三石位の米で作られたもので、急なことで大変なご苦労を、なされたようです。配給においては、元気なかたは食べられましたが、中にはにぎり飯をもったまま死んでしまわれた人々も、沢山ありました。

七日午後三時頃まで、このような救援にあたり、その後西條警察署命令により、東練兵場の被災者たちに名残りを告げて、栄橋を通り、広島城の北を通って、己斐駅付近にある明法寺にいき、境内にある死体処理にあたりました。

第四〇項 賀茂郡西条町…859

地区の概要

現在の西条町は、町村合併促進法に基づき、つぎの町村が合併したものである。

下三永村・賀永村、昭和三十年一月一日西条町へ編入

郷田村・板城村、昭和三十年三月三十一日西条町へ編入

寺西町、昭和三十四年十月一日西条町へ編入

当町は広島市の東北東にあつて、最短距離約一八キロメートル、最遠長距離約三二・七キロメートル、面積九三、七八平方キロメートル、人口二二、四一三人(昭和四十年度国勢調査)で、近辺山間町村の指導的地位にあり、行政的にも重要な役割をもっている。

また、広島市との関係は政治的にも経済的にも密接なものがあり、一例では、賀茂鶴酒醸会社は、西条糧秣支廠となり、某大尉のもと、女工約二〇〇人が牛肉その他の罐詰を製造していた。

とくに当町の住民の中には、広島市やその近辺に職を求めている者、広島市内の学校に通学している学生が相当数あつて、この日もまた平常通り通勤・通学していた。遠隔地からの通勤・通学であるから、警報の有無によって出勤を操作するのは困難なことで、時間どおりに出勤するのは日常のことであつた。通勤・通学者以外の人も、同じ状況であつた。

なお、広島市内国民学校の学童の疎開受入れはなかった。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市襲撃の敵機と思われる一機が、西から東南へむかつて行くのを、西条町大字下見の下見農業協同組合から目撃された(井村武刀談)。

原子爆弾炸裂時には、閃光を感じたが、人体に対して衝撃はなく、建物・樹木・農作物にも被害はなかった。閃光を感じたのはほとんどの人であるが、爆発音は、聞いた人もあり、聞かなかった人もある。爆発音を聞いた人は、何の爆発か不審に思つて話合つたが、広島のカスタンクの爆発ではないかぐらいのことであつた。昼を過ぎて、被爆した西条町の者が帰り着いて、はじめてその実態を知り、被爆者の様相から爆発の物凄さをうかがい知つたのであつた。

一部の人は、爆発音と同時に「キノコ雲」が瀬野の大山方面に上がるのを望見し、その後、広島方面が白雲に覆われたと報告している。

なお、炸裂時に広島市から物件が飛来するという事はなかった。

広島市内の建物疎開作業には、西条町近辺の町村が交替で出動することになっていたが、当日は賀茂郡河内町が当番にあたっていたため、当町から出動した作業隊員は一人もいなかった。

前日五日に出動した作業隊はつぎのとおりである。

西条町 一人
郷田村 一人
板城村 一人
下三永村 一人

二、避難者の状況

六日午後一時ごろから、九日午後十時ごろまでの間、大部分の被爆者は汽車で、一部の人はトラックに便乗して避難してきた。これらの人のほとんどは、当町在住の通勤者・通学者で、九死に一生を得てやっと逃げ帰ることができた人たちであった。

その姿は、被爆したときの姿そのまま、着物は焼け千切れ、全身各所に火傷や負傷を受けて血まみれになっており、爆発の強烈さを如実に偲ばせるものがあった。

降って湧いたような負傷者の到来に施す術もなかったが、とりあえず国立広島療養所を応急収容所にして、次のように被爆者を治療した。

収容患者数 一五四人
外来患者数 一三八人

このほか、一時的には西条町望月料亭、及びその付近の民家に相当数の患者を収容した。

死亡者で身元不明の者一〇体が、西条町猪道の町有山林に埋葬してある。

なお、広島市から避難して定着居住した世帯数は、つぎのとおりである。

西条町 一〇〇世帯
郷田村 二〇世帯
板城村 二〇世帯
下三永村 二〇世帯

三、広島市救援状況

救援隊出動

(1) 救護班出動概況

西条療養所において救護班が編成され、八月六日から九月十日頃まで出動した。

(イ) 出動人員

医師 五人 延一〇〇人
看護婦 二〇人 延四〇〇人
その他 四人 延八〇人

(ロ) 出動の状態

八月十五日まで毎日 総員約二九人
八月末日まで毎日 総員約一五人
九月以降は一日おきに総員約一五人

国立療養所へ警察署から救護班の出動の要請があり、ただちに救護班が編成され、警察署のトラックで広島市大洲町の派出所前までいったが、警官によって、市中への立入りをしゃ断されていた。救護班は警察の要請によって出動した救護班であることを告げたが、命令の不徹底のためか、立ち入ることの危険性を考えての措置であったのか、市中へ一歩でも入ることは許可されなかった。やむなく改めて指示を受け、青崎国民学校の避難者の救護治療に当ることになった。その日は、患者の強い要望もあって、遅くまで治療を行ない、治療をおわって療養所に帰ったのは、夜半の三時ごろであった。

八日、はじめて市中の被爆者の治療に出動することになり、本川国民学校・己斐国民学校・草津国民学校の各応急収容所を巡回したが、殊に本川国民学校収容所の患者は悲惨であった。床の上にゴロ寝している患者は、みな灰をかぶっていて、一見して生死の区別がつかなかった。膨大な負傷者を前にして、動いている者だけを、二階の教室に運んで治療をしたが、その他の人は見捨てる結果になった。この事実は、救護隊員にとって、今なお古傷のように脳裏

から消え去らないという。

八月十七日、岡山療養所から医官など七人が応援に馳せつけて来て、大いに医療活動がはかどった。

九月四日に至って、「本日午後一時より大会議室に於て所長殿より原子爆弾の人体に及ぼす影響に就いて研究的発表あるを以て左記各位は事務支障なき限り集合相成り度回章候也」という回章があった。医療に関する指示があったのはこれが初めてであったが、これにより病状及び医療法が明示された。

(2) 警防団出動概況

(イ) 出動人員

町名	出動期間	日数	実人員	延人員
西条町	七日～二十日	五	一八〇	九〇〇
郷田村	七日～二十日	三	一三〇	三九〇
板城村	七日～二十日	三	一二〇	三六〇
下三永村	七日～二十日	三	五五	一六五

(ロ) 出動地区

西条町 広島駅前・八丁堀・流川町

郷田村 同右

板城村 流川町を主にし、その東側地区

下三永村 八丁堀・横川地区

なお、板城村は白米一石五斗の炊出しを行ない、トラックで己斐派出所に送り届けたという記録が残されている。

[第四一項 山県郡戸河内町](#)…865

地区の概要

戸河内町は、広島市の西北にあたり、爆心地からの距離は約二九・八キロメートルである。

昭和三十一年九月一日、戸河内町と上殿村が合併して新発足した。

町は西中国山岳群に源を発する河川に沿って、耕地・集落があり、産業は林業主体の農業地帯である。

特別名勝県立公園三段峡は、溪谷・山岳・高原の総合的景勝で名高く、春夏秋冬まったく別世界のように美しい。

また、深入山、恐羅漢山群は、関西地方屈指のスキー場である。

町の総面積は一九一・〇九平方キロメートルで、人口は六、〇一九人(昭和四十年十月一日国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

六日朝、飛行機の爆音をきいたという者もあるが、それが原子爆弾搭載機のものであったかどうかは不明である。

突然、光ったのが見えた。それから五〇メートルくらい歩いたころ、地ひびきが伝わって来た。軽度の地震のようであった。

町内の建物などの被害はなかったが、午前十時過ぎごろから雷鳴、稲光りがあり、山の上に黒雲がはじめボーッと昇り、たちまち空全体をおおった。

終日、うす暗い天候となり、太陽もまともに見る事ができるほど赤く見えた。

昼ごろ、葉包紙・新聞紙・雑誌類、その他軍関係のものと思われる書類の焼けた紙片、あるいは焼けてないものが多数飛来した。中には十円札も多数あったし、変ったものでは石の破片がたくさん飛んで来た。

この日、広島市の建物疎開作業のための出動はなかった。

なお、広島市の国民学校児童が、次のとおり町内の各寺院に集団疎開をしていた。

収容場所	所在地	収容者数	収容年月日	閉鎖年月日
専正寺	戸河内町	四二	昭和二十年四月十四日	昭和二十年九月二十五日
道教寺	戸河内町		昭和二十年四月十四日	昭和二十年九月二十五日
西善寺	戸河内町	四九	昭和二十年四月十三日	昭和二十年九月二十五日

戸河内町に疎開したのは竹屋国民学校児童であったが、専正寺と道教寺に収容していた児童のうち、終戦後、父兄が連れに来ない児童一六、七人が、収容所閉鎖後は二、三日くらい民家に引取られていたが、後に、広島市へ収容された。西善寺の児童二、三人は、帰る家がなくなったが、一応広島へ歩いて出たという。

二、避難者の状況

広島市の被爆によって交通はまったく杜絶した。避難者のうち二、三人は、身寄りのないものであったが、ほとんどはこの戸河内町からの出身者であって、それぞれの縁故先をたよっていった。身寄りのない二、三人も、民家が世話をしたが、混乱が落ち着くと、またいずれかに移って行った。

避難者はいずれも着のみ着のままで、何一つ持っているものはなく、命からがらのありさまであった。しかも、市内から徒歩でほとんどの者が、横川町－可部町－飯室－加計経由で、やっとたどりついた。途中、大半のものが飯室付近で一泊して翌七日に帰って来た。

避難者らはその縁故先に身を寄せたので、特別に収容所を開設することはなかった。昭和三十八年九月二十六日現在、原爆手帳保持者が二四五世帯約三〇〇人くらいいる。

町に避難して来てそのまま定着居住した世帯は、戸河内町三〇世帯、上殿村五世帯である。

三、広島市救援状況

救援状況

医療救護班は出動しなかったが、警防団員は、被爆の翌七日から十日まで、戸河内町七〇人、上殿村三〇人が出動した。出動は、七日午前四時に加計警察署に集合し、そこからトラックに分乗して、横川町の駅前付近に到着して指揮を受けた。

三篠国民学校校庭に死体を収容整理する一方、横川食糧倉庫から米を出して、市内各所に配給するためトラックに積込む作業にあたった。団員は、夕がた作業終了後は安佐郡可部町まで帰って、同町の神社や寺院などに分宿して四日間救護を続けた。

[第四二項 山県郡加計町](#)…868

地区の概要

加計町は、広島市を貫流する太田川の上流約五五キロメートルほどへだたった山間地帯にあり、藩政時代から栄えて現在に及んでいる。

産業は、往古、砂鉄の採取精練できこえたところであるが、現在では主として林産物の集産地として発展を続けている。

明治三十一年二月十日、加計村を加計町に改称、昭和二十九年八月一日に加計町に殿賀村が合併し、さらに昭和三十一年九月三十日に安野村と合併して、現在の加計町となった。

名勝吉水園は、加計町中心部から徒歩で約五分の山麓にあり、園中に棲息するモリアオガエルは日本特有の蛙で、天然記念物に指定されている。なお、園内の吉水亭は鈴木三重吉が小説「山彦」の構想をねったところとして、一般に知られている。

加計町は、爆心地から約四〇キロメートル離れており、総人口は八、五三六人(昭和四十年度国勢調査)で、地域面積は九六・一八平方キロメートルである。

戦争末期には、広島市立竹屋国民学校の児童が、集団疎開で来ていたが、この疎開当時の詳しい状況は、第四巻第二編各説第三章広島市内各学校の部に記述してある。

ちなみに、地元の疎開児童受入れ状況は、つぎのとおりであった。

収容場所	所在地	学校名・児童数	備 考
正覚寺	山県郡安野村本郷	(竹屋国民学校) 平均四〇人	(一)各所とも、ほぼ昭和二十年四月十二日から同年十一月十五日まで疎開。 (二)担任訓導 一六人、寮母 一五人 養護婦 一人、作業員一五人 (三)通学した国民学校名 イ、修道国民学校 ロ、加計国民学校 ハ、殿賀国民学校 ニ、筒賀国民学校 ホ、戸河内国民学校 ヘ、四合国民学校 ト、松原国民学校
正念寺	山県郡加計町	四〇	
礼安寺			
西円寺	山県郡殿賀村堀	四五	
明願寺			
報正寺	山県郡筒賀村	四五	
西方寺			
道教寺	山県郡戸河内町本郷	一三〇	
専正寺			
西善寺	山県郡戸河内町柴木		

松原集会所	山県郡戸河内町松原		以上七校
-------	-----------	--	------

※昭和二十年七月初め、海軍の設営隊が二〇〇人ほど、戸河内町本郷の国民学校に駐屯し、一教室二〇人で一〇教室を占拠、松根掘り、炭焼き、川原の砂あげなどを終戦までしていた。このため疎開児童は、ここで勉強ができなくなり、寮のお寺で勉強した。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

アメリカ軍飛行機が、広島市上空へ侵入するときも、爆撃後に脱出するときも、その通路から加計地域がはずれていたものか、一度もこれを目撃した住民はいなかった。

無論、六日の日、原子爆弾を搭載していたと考えられる敵機を認めたものもいなかった。

しかし、広島市が原子爆弾攻撃を受けてからの数日間は、敵機の編隊が何度も加計盆地の上空を通過し、そのつど地元民は緊張した。

原子爆弾が投下された時、加計町では、屋内にいた人々でも、一瞬、目を射るような閃光を感じた。何ごとかと、ハッとして戸外に出てみたところ、四、五秒後、耳の底を突くような大爆発音がとどろいてきた。熱風的なものは感じなかったし、人体や物体には影響なかったが、明らかにズシンと来る衝撃と微動を感じた。

町の人々はみな戸外に出て、当時約一〇キロメートル離れた下流にある中国配電の坪野、あるいは間な平の発電所に爆弾が落ち、高圧線がスパークしたのではないかと話しあった。各駐在所でもそう言ったし、消防隊がブーブーと警笛を鳴らせて駆けつけたが、発電所は何のこともなかった。

爆発の閃光・音響・衝撃を感じたあと、しばらくして、太田川の下流方向にあたる南方の山上に、キノコ型の雲が湧きあがるのが、加計町一帯から望見された。これが午前八時二十分から三十分ごろまでのことで、山から田から皆驚いて家路に帰ったという。

そのキノコ型の雲が崩れるにつれて、快晴の夏の朝であった加計町一帯が、急に異様な暗さにつつまれたから、人々は不審に思った。炸裂後二、三時間たったころ、大つぶの油まじりのような雨が降って来た。白い衣服は、この雨に濡れてみな黒い斑点で汚れた。

また、この時間ごろ、加計町方面一帯にかけて、広島市から舞いあがったいろいろの物が飛んで来た。

帳簿のページ切れ・伝票類・電車の切符、その他の紙片や、屋根のソギの破片などが、なかには一部焦げて欠けた形のものもまじって、たくさん落下してきた。

中野徳夫(加計町駅前)の話では、吉水園の近くに、広島商工会議所会頭藤田定市名入りの委付賞状が、少し角のところが焦げたまま落下してきたという。

殿賀村方面にも相当落下し、茶色によごれた伝票などの文字によって、広島市から飛来したことを知り、大変事が勃発したものと推察した。

夕がた近くなって、まず、三人の土地の人がひどい姿でたどりつき、続いてこの地域に疎開している竹屋国民学校児童の父兄が到着しはじめたが、父兄らの異様な被災姿を見、こもごもに語る被爆状況から、はじめて想像外の大惨事を蒙ったことを知ったのであった。

当日夕がたの六時ごろから、被災者たちが加計地区に到着しはじめたが、これらは、太田川に沿って横川駅から安佐郡飯室駅まで鉄道が通じていたので、飯室まで汽車を利用し、そこから加計までは、バスやトラックに乗って逃げて来たのであった。

避難者の多くは、ほとんどがこの土地に縁故のある人たちで、そのほかこの地域に疎開して来ている学童の父兄たちであった。

すべて、見るかげもなく無残な姿であり、かなりの重傷者もいた。

当時、広島市では各町村の国民義勇隊の出動を得て、建物疎開作業を連日にわたって実施していたが、加計町ははじめ安野村・殿賀村とも、距離や交通機関の関係から出動命令はかけられていなかった。しかし、公共機関の書類や物資などの運搬をおこなうため、加計町からしばしばトラックを出動させていた。

二、広島市救援状況

六日の朝、ただたぬ事態の勃発が感知されたので、山県郡特設警備隊本部からオートバイで、広島市の救護状況状況偵察に向ったが、可部町付近で、すでに広島から殺到した避難者の大混乱に出あい、その模様をまず電話で、本部へ通報した。しかし、本部はいくら説明しても容易に理解しなかった。

ちなみに、山県郡特設警備隊は、不時の変に対処するため、昭和二十年四月に、在郷軍人山県郡聯合会を主体に、郡内を三個中隊(隊員四六〇人)にわけ、郡内各町村にも町村警備隊を結成した。町村警備隊は、伝家の日本刀、槍をはじめ、竹槍などで、武装していた。本部は加計町役場に設置、常に体制をととのえていた組織(加計町史下巻)で、敗戦後一か月で解散した。

連絡を受けた警備隊本部は、ようやく事の重大がわかると、加計町・戸河内町・筒賀村・殿賀村・安野村・上殿村以上六か町村の合計三〇〇人に及ぶ救援隊を編成し、中野徳夫を隊長とし、トラック八台に分乗して広島市へ進発した。

六日夜から十四日まで九日間にわたって出動し、まず連絡場所を横川町の三篠信用組合内においた。最初ごろ二晩は、西練兵場に野営した班もあるが、第一日の夜は可部町の寺を、第二日の夜は長束の国民学校を根拠にして、連日、焦土と化した広島市にかよい、横川町・左官町・八丁堀までの間の地域で、死体の整理と道路の啓開・清掃にあたった。横川から相生橋に至るあいだ、死体を藪のうえにならべて、探訪する遺族や縁者らに、よく目につくように配慮した。

連続的な出動人員は、加計町約八〇人、安野村四〇人、殿賀村三〇人程度で、安野・殿賀両村民の出動は三日間ぐらいであった。

死体の整理などのほかに、横川踏切のところの県の農業倉庫の米に火がついて焼けるので、これを搬出したようなこともあった。また、横川駅構内で機関車の炭水車の燃えるのを消火したりした。

収容した死体は、三篠国民学校運動場で、油をかけて焼いたが、小町の市立浅野図書館で焼いたこともあった。

この地域の医師・看護婦は広島市からの避難負傷者の治療にあたる一方、六日、広島市救援の出動命令を受け、すでに組織してあった救護班員を召集し、急ぎ広島市にむかって出発した。途中、可部町品窮寺救護所に雲集した負傷者の救護をおこなった。

医療救護班は、医師九人・歯科医二人・薬剤師二人・看護婦六人のほか、助産婦三人が四班を編成し、六日から十七日まで、品窮寺をはじめ、市内の被服廠・三篠信用組合・勸業銀行などの各救護所において、全力をあげて救護活動を展開した(広島原爆医療史)。このほか、随時に天満橋の橋の下の河原や本川国民学校などにおいても治療をおこなった。

広島市から逃れて来た人々は、みなそれぞれの縁故先や関係先の家庭に入ったので、町村役場としては、特にこれら罹災者のための収容所を開設する必要はなかった。

この地域へ避難しようとした人々のうち、重傷者の大部分は、市中から来る途中の近郊地域、ないしは到着前の途中で絶命したから、加計町へたどりついてから死亡したものは四〇人たらずの数であった。

これらの死亡者は、それぞれ各部落の火葬場で荼毘にふし、ねんごろに葬った。

現在の加計町立護国神社には、戦没軍人・軍属・学徒動員犠牲者の六〇二霊が祀られていて、毎年五月一日に慰霊式が挙行される。

この神社の傍に慰霊碑が建立されて、軍人・軍属・学徒動員の原爆死没者の霊を合祀し、平和記念塔と称している。

なお、広島市からの避難者のうち、この地域にそのまま定着居住した世帯は約一〇世帯程度あったが、その後社会の正常化とともに、いつとなく再び外に出て行った。

原子爆弾の惨禍は、あまりにも悲惨をきわめたので、当時、種々のかたちでこれに関与した人々も、つとめて語らないようにし、忘れ去るようにして来たが、広島市への関連は深く、折りにふれては話が出て、若い世代へも語りつがれている。

[第四三項 甲奴郡上下町](#)…875

地区の概要

上下町は、広島市の東北、約七〇キロメートルの地点にあり、町内全般に山岳がづらなり、大古から隣国出雲路に通ずる高地(海拔四六〇米)で、陰陽の分水嶺を形成し、矢多田川は芦戸川に、上下川は馬洗川にそそいでいる。流域は一般に肥沃で農産物の生産に適している。

上下とは、往古に「城下」と書いたと云われ、府中・庄原間の要衝にあたり、昔は山陽と山陰をつなぐ宿場として

栄えた。現在、福塩線が東西を貫通し、上下駅・矢野駅があり、郊外バスの発着地でもある。風光明媚な土地で、千余年の歴史を持つ矢野温泉は、今もって賑わっている。

昭和二十九年三月三十一日、甲奴郡南部五か町村(上下・矢野・清岳・階見・吉野)が合併、越えて昭和三十二年六月十日に世羅郡甲山町の松崎部落を編入し、現在の上下町となった。

地域面積は八三・八七平方キロメートルであるが、耕地面積はその一パーセントに過ぎず、ほとんど山林地帯で、世帯数二、〇六六世帯、人口八、八〇一人(昭和四十年十月一日・国勢調査)である。

一、八月六日の状況

炸裂の影響

広島市へ侵入する B29 の機影を認めた者はいなかったし、原子爆弾の炸裂による衝撃も感じられず、キノコ雲も望見されなかった。また、被爆直後、広島市から爆風による飛来物などは何もなかった。

被爆当日、広島市の建物疎開作業に出動していた者はいなかったが、私用や勤務関係、あるいは、応召などにより広島市内にいて被爆した者があった。甲奴・神石両郡一円の予後傭兵で編成された甲神部隊は、歩兵第一補充隊に応召中被爆し、多くの犠牲者を出した。

六日午後九時三十分ごろ、終列車で約二〇人が到着した。全身焼けただれ、裸足で、衣類はボロ布同然の姿でホームに降りたとき、ちょうど灯火管制下で、その形相は筆舌に絶するものであった。

重傷者は、最寄りの病院に収容し、軽傷者は警察署の武徳殿を仮収容所として収容し、それぞれの家族に連絡した。

さらに翌日、三次市の広島陸軍病院分院に重傷者を護送し、収容所に軽傷者のみを収容し、応急手当を施して家族に引渡した。

上下警察署、武徳殿(上下駅前)の仮収容所は、六日当日から八月三十日ごろまで開設され、その間、約三五〇人を収容したが、死体の埋・火葬などはおこなわれなかった。

二、広島市救援状況

八月六日から約二〇日町、看護婦七人延二五人くらいが、医療救護班として出動した。入市経路は、上下救援隊出動から三次ー吉田ー可部を経て市内三篠町に入り、県の指揮により活動した。

また、警防団は翌七日から約一か月にわたって、実人員約一二〇人延約四〇〇人が、東・西両警察署の命令を受けて、市内一円で救援作業に従事した。入市経路は、看護婦隊と同じである。

なお、広島市から逃げて来た罹災者のうち五世帯は、そのまま町内に定住した。

甲神部隊の惨状

藤井一夫

(当時・甲神部隊油木分屯隊長・陸軍少尉)

私は昭和二十年四月に設置された第二四特設警備隊(甲神部隊)油木分屯隊長で陸軍少尉であった。

本部所在地は、甲奴郡上下町で、編成区域は、甲奴郡および神石郡一円であった。常置員は将校三名、下士官六名計九名(文屯隊の名を含む)で、構成隊員は三箇中隊約三〇〇名であった。

その下部組織として、甲神部隊油木分屯隊が神石郡油木町に所在し、神石郡一円を編成区域とし、常置員は将校一名、下士官二名、計三名であった(文屯隊の常置員も原則として本部に勤務)。

私は上下町の本部に常置員として勤務していて、油木分屯隊長の命を受けていたけれども、本部に勤務して、油木にはほとんど行かなかった。

甲神部隊に対して、八月一日、広島市の警備のため、聯隊区司令部より出動の命令があったので、八月三日、上下駅に集結し、早朝より汽車で出動した。

歩兵第十一聯隊(当時、歩兵第一補充隊)に到着、編成は三箇中隊に分けて、私は第三中隊長として、また油木分屯隊長としての任務についた。

この三箇中隊は、分散して各兵舎に落ちついた。

出動命令は、広島市の警備のためであったが、実は市民の避難場所開設のため、建物疎開作業をやることであった。

八月四日から元陸軍病院第一分院の建物を壊すために現地に出動した。

八月五日は、警戒警報と空襲警報が激しく、睡眠もとらず警備についた。

八月六日の朝も出動のため、身仕度はほとんど終り、早いものは舍外に出ていたものもあった。私は営門の入口側

にある兵舎の二階の一室(練兵場が見える)で、四名ほどが在室していたときである。もちろん、歩兵第一補充隊員も、同一の営内にいた。何か光ったように感じた。炸裂のとき音は聞かなかったと思う。

瞬間的なことで、目がくらんだと思ったら、何かに押えつけられていた。下敷きになっていた。

正気にもどったとき、「藤井少尉殿、どこにいるか」と、瀬りに声がきこえるけれども、まっ暗で、どうなっているのか見極めることができず、その上身動きも出来ないの、どうすることもできなかった。

しばらくして、隙間から光線が洩れて、局部的に物が見えるようになって来た。

このとき下敷きにたっている事を知り、手探りしていると細い棒が手にかかる。頭をあげることもできないので、その棒で、上につきあげて「ここだ、ここだ。」と叫んで合図してみた。この合図が通じたのか、木を取り除いているような気配がする。

恐しかった。取り除きようでは、大きな木材が私を圧して、助かるのが助からないのではないかと考えていた。

この間も「助けてくれ」と叫ぶ声がする。また、うめき声もきこえていた。

こうして助け出されることができたが、助け出されるときの状態は意識を失っていたのか記憶がない。

下敷きになる前、寝台に腰かけて、出動を待機していたが、爆風によって、整理棚と寝台のあいだに入ったため、寝台が天井や屋根の材木の支えになって隙間が作られたので、圧死をまぬがれたようである。

救出されて私は、市の東部へむかって避難した。白島町のところを流れている川原へまず逃げた。川原では、吐気はするし、気分が冴えないので、砂原に寝ていた。

重傷だった。腹がすいたような感じもなく、食欲は全然なかった。カボチャの小さい一片を食べた。

寝たままで、牛田方面の燃えているのを見た。そして、身の砂が舞いあがっていた。火災のためか、風が起きて上がったのかも知れなかった。

また常葉橋のところにある鉄橋で貨物列車が転覆して燃えているのを、不思議に思いながら見つめたりした。

これらは、いずれも寝たままで見たので、周囲のことは見られなかった。

夕方まで、この川原にいたが、ここで夜を明かすのもどうかと思い、奥地へ向うことにした。

戸坂に近い牛田の町はずれまで行き、農家の軒先きに避難した。その夜は、農家でお茶を一杯飲んだ。ムスビを持って来てもらったが食えなかった。ムスビを見ると食えそうに思えたが、口まで持ってくると食いたくなかった。ここで夜をあかした。

七日朝、うすく切ったトマト二切れをもらったが、これは食べられた。

中隊長としての責任もあるので、戸坂の国民学校へ行って見ることにした。翌八日だったと思うが、戸坂へ行った。戸坂国民学校が陸軍病院にあてられていたからである。

ここに来てみると、門のところで、手車に患者を乗せて入ろうとしているのを、門の内側から外へ押し出そうとしているのを見たが、これは、収容者が一杯で、収容できないからと言って、外へ追い出しているものであった。

運動場には、一面にわたって人が転がしてあって、これ以上搬入させても、どうすることもできなかったのであろう。すでに車に乗せたままで放任されている者も見た。

受付を備えて、受けつける様子もなく、帳簿とてない状態で、誰がいるかも調べることもできなかった。

教室をあちこち歩いていたら友人にあったが、友人の傍には人が死んでいて、友人は知らずにいるのであった。

学校の裏の農家へ行ってみると、軒先や土間にところ狭いほど死体や負傷者がいて、手当てをするものもなく、家の奥さんは「こんなに来てもらっても、どうすることもできないし、これからどうすればよいのか判らない。」と泣いていた。

ここまで逃げて来ては、次々に、どこということなく避難民が入って来たのであろう。中には「水をくれ、水をくれ」と言っている者もあったし、死んでいる者もあったが、誰も手助けする者はなかった。

戸坂駅まで行った。その途上、半焼けの死体が姓氏不明のまま転っていた。不思議なことに、これまで赤ちゃんを見なかった。

多分、今日で、二日ぐらいたったなと思った。戸坂で汽車にのったが、乗ると言っても貨車であった。しかも切符は買わずに乗ったと思う。

車中、私に敬礼してくれるが、誰だかわからない、顔の形相も変っていて見分けがつかないが、話してみて、やっと判った。

十日市駅に着くと、婦人たちが担架を持って迎えに来ていた。汽車に乗っている者みんなふた目とは見られないよ

うな姿なので、婦人たちは泣いていた。

十日市駅の近くにある女学校(陸軍病院)へ患者を運んで行く。私も行った。ここで「食事をするか」というので注文したけれども、いざ食べようとして、その香をかぐだけで食べる気を失った。

わが隊員の消息を調べるため、女学校を出たら、駅前でトコロテンを売っていたので買った。このときは食べられた。

十日市駅から汽車で、私は上下駅まで帰ったが、このときは切符を買ったと思う。

この列車には避難者(負傷者)が乗っていなかったようであった。

上下の屯所で、夕食を出してもらったが、全然食欲がなく、温かい蒸気で酔ったような気持であった。体はひどく衰弱していた。

風呂へ入ってあがっても、しばらく休まなければ衣類を着ることさえもできないほどであった。

ここの屯所で、十日市町の陸軍病院(女学校)や東城の陸軍病院など、その他各町村へ隊員の消息について電話連絡した。誰が死亡したとか、誰が危篤状態とか知らせた。これらの隊員は一人残らず全部死亡したようである。

元気の隊員を、広島市内へ調査に出したが、消息すらも判らないありさまで、ただ、被爆のときいた兵舎のところにある遺骨を拾って帰るのであった。

これらは、逃げる途中で死亡した隊員とともに部隊葬をおこなった。

私は、常に中隊長としての責任を感じ、任務を離れた行動はしなかった。歩いて、ここまで来るあいだも隊員を探し探し歩いて来たのであって、どこまでも責任ということがこびりついていて苦しかった。

家に帰ってから、髪が抜けたりして、まともに枕もすることができなかった。また歯ぐきが痛んで苦しんだ。このため歯が全部駄目になった。

私が負傷して歩いているとき、私の郷里の神石郡豊浜村の警防団員がトラックに乗って、広島市内の救援に行くのを見た。ともかく、部隊は全滅の状況となり、私も発熱が激しく極度に衰弱した。

甲神部隊の建物疎開兵として

豊田久夫

(当時・陸軍二等兵四四歳)

わしは原爆が落とされた三日前の八月三日広島市内の第二部隊「歩兵第一補充隊」に甲神部隊の建物疎開作業兵として召集をうけ、朝、営庭で隊伍を組んで出ているところをやられた。まるで広島へ原爆を受けに出てきたようなものであった。

爆弾が落ちたとき、一瞬にわが身がはねかえって、地面に倒されるように伏さった。それはまったく人事不省という恰好だった。帽子も、かついでいた槌も吹っ飛んで、だんだん正気づいてくるにつれ、全身がひどう痛んだ。

「広島じゃけ、爆弾を落とされた。」とわしは咄嗟にこう思った。青松葉をくすねたように、目の前は、真白い煙が渦巻き、どのくらい不省に陥っていたかよくわからない。ただ、背中から頭にかけて、瓦や壁土がバラバラ落ちかかって痛かったことを覚えている。

やっと、地上が三尺くらい灰色になって、上は白い煙にかわった。わしは、戦友のことが頭にきて、あたりをギョロギョロ探した。しかし、誰一人見えなかった。後日、みんなに聞いてみたが、わしと同様に、自分が一人しかいない、と思ったと語っている。

気分が馬鹿になっていたのか、やっと、こうしては居れんと、脅えるように身を引いて営門の方へ出ようとした。すると、宮の神木がかやったように大きな樹木が三本、落雷のときのように折れている。気づくと、兵舎もつぎつぎ吹っ飛んでいる。一階はあるが、二階の部分がどれも崩れている(これはわし錯覚で、一階から崩れてたのだが、そこまで気が付かなんだ)。そうこうしている間に、あちこちでチョロチョロ煙が上がり、やがて火を噴きだした。朝の炊事の火などがまだのこっていた為だろう。

やがて人影が北へ南へと路上を駆け出した。わしの目の前を、婦人が子どもを背負って逃げて行こうとする。ちょっとこちらに顔を向けたが、顔は八寸ぐらいなのに、血に割れたその傷は一尺二寸ぐらい、ほんまにウリを割ったように見えて、ゾッとした。大方、倒れた柱の角ででも傷をしたかに見える。しかも、それが、婦人も子どもも痛いと言って泣きもせず、逃げ脅えている恰好だった。わしは一体、どうしてこんな爆弾が落ちたかと、不思議でいけざった。

やがて、わしは兵営の裏門を出て、兵隊や市民といっしょにゾロゾロ逃げたが、そこに戦友がいた。見ると、身動きできなくなった戦友、一人は腕を持ち、一人は足を一本持ち、もう一人が股をもって、ちょうど、三人の兵隊がモッコを支えて歩いとるようだった。それぞれ誰もが、怪我をしたり、打撲をうけているので、いきおい、こうした恰好になったのだろう。

その一人が、わしを見つけて、「オーイ、豊田手ごをせい」と言う。言われて仕方なくわしは残りの手をさげてやった。

途中、「敵の飛行機が来た。」というので、防空壕にかくれたが、さげてやった兵隊は、現在も生きていたとのことだ。

防空壕を出て北へドンドン逃げていたら、同村から出ている小川太郎・藤井百石・東山らを見つけた。三人のこれらは、どうしたはずみか、屋根の上へかけ上がって逃げてゆく。「オイ、藤井、お前らそが一なところへ上がって、どうするんか」と叱るように声をかけると、「オー」というだけで、なおも屋根瓦の上を渡って逃げようとする。大方、この三人は神経の感覚を失って馬鹿になっていたようだ。体から顔までひどく焼いていたし……。

もう町は一面火の海になった。目の前に川が見えた。石垣のガンギの窪みがあり、それを伝って、川へ飛びこんだ。戸板や柱や布団が川の水面いっばいに浮いて、岸には人があふれて死んだり倒れたりしている。男ははぶさに、女は仰向けに死ぬるというが、ほんまにこのような姿勢で死んでいた。

やっと川(猿猴川)を、水につかって渡り、饒津神社前へ逃げたが、その葦の川原は身動きもできんほどの死人や病人だった。いがったり、わめいたり、のたうったり、わしの身一つ入れ場がないほどで、前の方から詰めてもらいたい気がして、「あんたらしっかりつめいや」と何べんも言った。

元気な女がポンプをついていた。「わしは何事もないんじゃけ、飲ませてくれ」と水をせがんで、それをガブガブあふり飲んだ。戦友と三人づれで、お互いはぐれまいと言い合って逃げるのだが、一人が倒れると一人は正気になる。一人が元気になると一人が動けなくなる。このようにしてあずっていると、また、空襲の飛行機がきたという。

みんなわれさきにと防空壕へはいった。見ると、動けなくなっていた藤井もいつの間にか穴にはいつていた。死ということになると、こんなにも人間は元気がでるものかと思った。

外に出ると、目まいがして、そこに身がらを横たえた。横腹に何かひどくささって痛い。

これまで腹に刺さって気になっていたが、よくみると、竹藪の竹の根株だった。やっと抜き取って捨てた。このとき思うたことだが、「これが自分の家で病気したのなら、たいへんな病人で、おそらく、家人も、親戚のものも気づかってくれる重病人だがなあ」と、自分の身を考えながら、何んだか、ひとりおかしかった。

そうこうしていると、わしら甲神部隊の小隊長である木野山氏に出会った。わしを見るなり、小隊長は、「僕の部下を呼んで来い。」と言う。わしは反抗もできず、藤井や小川といった戦友をのこして饒津の方をさがしてみた。頭と足を切って痛むし、それに耳鳴りがしどうしで、体がだるい。

あとで気づいたことだが、神石・甲奴郡から召集をうけた建物部隊兵が、朝、隊伍を組んで作業へゆくとき、大方は原子爆弾の直射光線をうけたが、さいわいわしらは兵舎の陰だったために救われた。

小隊長の命令だし、仕方なく常葉橋のところの川べりに引きかえすと、歳のいった男が小舟をあやつって人を渡していた。しかしみんな必死にとりつくので、一度ならず転覆した。

わしは、「そうじゃ、財布、タバコを水に濡らしては」と、あらかじめ、かくしから出して掌に高くさし上げて舟にすがって渡った。実は、財布の中には壱百円とほかに村の谷内から入隊している友人に預ってもっていた三十円の大金があった。作業に出る兵隊は殆んど金は班内の准尉にあずけていて無一文であったが、わしは、人からの預り金を上官に知られまいとして、ポケットにかくしもっていたわけだ。このことがこのあと少し役立つのだが。

さて、舟から陸へ上がって、体が動かなくなった。気づくと、向こうから同村の田頭(たんどう)から出ている吉岡が、戸の棧の木切れを杖にし、毛布を頭からかぶってビッコをひいて来た。苦しそうな顔をして、わしに気づかず行き過ぎようとする。

「オイ、吉岡」

と声をかけた。吉岡はつらそうに、

「助けてくれえ……」

と、哀願するようにすがりついた。

「元気を出せ！」

とはげましたが、こちらもひどく心細い気がした。二人は川原で水をあふり飲んだ。ところがこれがたたって、口へ吐きあげるし、下へさげるし、黄水が出るまで腹の中のをみんな吐き出してしまった。しんどいというてきりがないほどだ。

二人はあちこちとふらついた。途中騎兵隊のところで、サイダーを一本もらって飲んだ。

神石郡から入隊した知った男が、軍刀や皮カバンを五つくらいたばねて手にし、そこに通りかかってきた。

「そんなもの、どうする？」

と問いかけると、その男はしたり顔に、

「これだけ持っとりゃ、どうでもなるがや。戦争はハテ終りよう、これで儲けたるねえ」といって駅の方へ去って行った。

わしは吉岡が、さっきから毛布をかぶっているのがひどく気になっていた。

「あんた、この暑いのに、どうしたんじゃ、毛布なんか捨てい」と言うと、

「今晚寝にゃいけんじゃろうが」

と言う。(まことそうよの)と、吉岡の知恵のよさに教えられる思いがした。わしも急に夜のことが気になって、騎兵隊のところで、干してある毛布を盗もうとしたが、気づくと救援隊が飯をくっていたので、ハッとしてやめた。

東練兵場へまたもどってきた。そこでムスビをもらったが、塩気がなく、うまくもなかった。またそれをも吐き出した。地方医が数名テントを張っているのを見つけ、傷の手当をたのむと、

「あんたらの怪我じゃ、薬はやれん」

とあっけなく見すてられ、気おちしていると、「豊田さん」とまた誰かが呼ぶ、それはやはり同村から出て入営している殿川義弘君であった。胸のネームで誰とわかるが、顔一面焼けてだれている。

「すまんが、わしの家内が二部隊のうしろの病院に居る。看護婦じゃけ、早う連絡してくれ」とせがむ。

「そがあなことをいうても、できん」とわしは拒んで、「それより、タバコを吸え」というと、手をのすけ、「ああ、うまい、うまい」と一〇服(口)くらい吸った。もちろん、目も見えず、手が焼けて汁が出ているので、わしが口にあててやった。そうこうしていると、殿川が、

「すまんが、腰の袋をとってくれ」

と言う。やっとなと口の紐をほどいてみると、それは、あんこ餅が三つ紙に包んであった。

血水にしみたそのあんこ餅をわしは殿川に食べさせようとする、

「バカ！あんた食べ、あんたが食うんじゃ」と怒るように言う。それではと、わしも空腹しきっているし、おがんで大口をあけて食うた。

すまんで、その代償として、わしは殿川に金をやることに気づいた。

「あんた金をもっとるまい」

と問うと、

「何ももつとらん」

という。

「よし、それじゃの、わしが三十円札銭のつもりでやるけ、捨てるなよ」

と、腰袋にしっかり入れてやったが、大金なので気になった。

夕方になるし、わしは中隊長の命令を思い出して気にかかり、一緒に連れ歩いた吉岡とも一応わかれた。

広島駅に近づくと、構内は火がもう焼け抜けて、余燼が熱く身にかぶさってきた。

知らん兵隊が、カンヅメを倉庫からとってきて食っている。立ちどまって、「わしにもくれえ」というと、こそこそ三個とってきてくれた。火で熱くなっているので、水道の水につけて、やっとな中のミカンの果肉を食った。だが、それも束の間、またみんな吐き上げてしまった。

わしは最早、歩く力もなかった。夜間は迫るし、この兵隊と互いにトタンをさがしてきて、体の上にかぶせ、いつのまにか倒れてしまうように眠りこんでいった。

以上がわしの被爆の日の有様であるが、それから翌二日目に、東練兵場の山麓の民家へ収容され、頭や足に切り傷をしとるし、どのくらい難儀をしたかわからん。収容されるところは、長男の清史がこまこう書いてくれとるので省くが、夕方矢賀駅に出て、芸備線で三次から上下町へと帰りつき、そのまま寝ついて、死にる生きるの苦しみをした。当時のことやその後の苦しみは、簡単に表現することは到底できないが、要約すれば発熱が激しく、四十度に近

い熱が長くつづき、ものがおいしくなく、極度に衰弱した。組内の友人の横儀が、まだ秋に早い出来たての蕎麦を掘ってきてくれ、これを食べるのがうまかった。しかも、原子爆弾ということもお互い知らず、このせついでをどうして治療してよいかわからず困った。そうこうするうちにサルファ剤(ズルファミン剤)が良いと聞き、医者を呼んだりしてやっと一命をとりとめた。一時は他と同じように髪も脱けかけ、村へ一緒にもどってきた兵隊が死んだと聞かし、自分ながら心細いこと、きりがなかった。

あとで聞いたのだが、上下町の本部に残留した下士官が、香奠を用意して自宅を訪れてくる途中、わしがまだ死んではいないということを村民にきき、「そがあなことはあるまァ」とびつくりして、不思議がり、家まで来ず、引きかえしたそうである。

あとになったが、甲神部隊の常置員は、将校三名、下士官六名で一般兵は約三百名であった。そしてわが旧、牧村から編成に加わった者みな三、四十代の老兵(二等兵)で、約三十名。このうち即死や行方の知れぬ者十名、帰宅後死亡者十数名で、わしと共に六名だけが現在生存していることになる。

わしも幸い一命をとりとめさせてもらったが、被爆してからは風邪をひきやすく、足腰が冷えて痛むし、視力もすっかり衰えて、農業をしながらも、余り働くこともできず、孫の守りをしたり、ブラブラと町会議員をつとめたりして、六六歳の今日まで生かしてもらっている。現在、傷病恩給をほんのわずかほどもらっているが、原爆死亡者や傷病兵に対して、もっと政府は手がうてんかと思う。だが、こうして生きて居ることを考えると、そがあな不平も言えん気持になる。

(昭和四十二年二月十一日記)

主要付図・一覧表

一、広島市学童疎開実施表…12

二、集団疎開児童の記…15

三、広島市内各学校の建物疎開作業出動状況…33

四、広島市内各学校被災状況表(動員学徒を含む)…37

五、建物疎開作業に出動した地域国民義勇隊の被爆状況表…685

六、避難者郡町村別内訳表…689

資料提供者氏名表…888

広島原爆戦災誌・資料・体験記・その他提供者名簿

第一編 総説関係

木元真作、神田正昭、大野茂、長岡省吾、長屋龍人、永原敏夫、銭本三千年、木内信蔵、金井利博、田原伯(以上資料)

佐伯敏子、林福順、アリフィン・ベイ、稲富栄次郎、(以上体験記)

佐々木研治、久城革目、土田康、橋本不二夫、松窪熊市、森宗寿人、陸勝利、北山二葉、石原虎好、福井信立、広瀬自助、木村経一、木内信蔵、栗田要、山田稔、藤原映平、蜂谷道彦、平岡敬、アンナ・ドレイゴ(以上手記)

山崎与三郎、正田篠枝、重藤文夫、有末精三、新妻清一、田淵美津雄、斉藤義雄、都築正男、朱定裕、柳田博、増本春男、大佐古一郎、田村治郎、加納竜一、相原秀次、浜岡功一、崔益守(以上資料・談話)

佐伯文郎、斗樹良江、野村清、飯島信一、島筒康夫、酒井文三、山崎増一、西村春芳、寺崎隆治、栗田健男、伊藤実、佐伯尚、今井和夫、小川義男、福井信立、荒木勲、臼田正雄、下林良政、井街譲、堀江文人、元吉慶四郎、吉村実、吉田一、絹谷オシエ、住吉アヤコ、江畑郁恵、山隅文子、安達久子、徳永芳子、松浦幸子、木崎俊子、森田千代喜、児玉春美、栗原タカエ、木下セツ、堀内真佐子、古賀久子、植木正造、小山綾夫、蜂谷道彦、峯長大、吉富正一、浜崎邦夫、日高忠男、上原亨、加賀呉一、喜多嶋慎一、西川清一、松岡新平、鴉田藤太郎、松坂義正、台寿治、川田兼三郎、竹内喜三郎、井西隆人、米田真治、飯塚忠治、熊谷雄二、中村トシエ、大下薫、下田正人、藤田雄二、増原由一、松村米吉、森脇康治、下間伸一、肥後研吉、中島武三、芝光太郎、山平文子、山田等、大橋操、山崎留美、林秋子、高原琴枝、福永明、河上初枝、井上梅子、中野松枝、服部智恵子、花房光一、杉田鉄之助、松原泰、水野宗之、藤本敦、浅山吾三、大下朝子、藤森進、倉上正男、古前秀松、寺迫久子、山本テルコ、川西幸夫、崎原英夫、金子豊、矢部弘子、土居清、立松タケヨ、日野一男(以上資料・体験記)

杉村脩一(資料)

木村経一、長谷川巴、山田隆夫、野村好光、西家明男(以上体験記)

石塚恒蔵、柴田富雄、三吉義隆、指田吾一、和田功、高原きよ、竹原精一、西義美、佐々木博、川綱重治、新保正信、

竹田ハツエ、井上梅子、土橋慶治、金森芳松、前重春美、横田健一、土居源一郎(以上手記)
篠原優、田村治郎、田村繁雄(以上談話)
小林吾一(資料)
梶秀逸、篠原優、三吉義隆、野村清、広瀬自助、堀川松太郎、北山勇、富田稔、斉藤義雄、清水健、石塚恒蔵、半井良造、田村繁雄、西塔光喜、高田三郎、新保正信、佐伯常夫、野田昭夫、大荷康夫、西義美、松本宇八、小川武志、戸嶋頭、篠原正身、川綱重治、山村重定、佐々木博、和田功、荒井勇、岩下一夫、古本源吾、松井幸雄(以上体験記)
敵粉連(体験記)、任都栗司(談話)
二一六人

※被爆状況写真(各巻掲載)

山田精三・松重美人(以上中国新聞社)、木村権一・川原四儀・尾糠政美(以上暁部隊軍属)、宮武甫・松本栄一(以上朝日新聞社)、黒石勝・斉藤誠二(以上広島赤十字病院)、菊池俊吉・林重男(以上学術調査団)、岸田貢宣(陸軍報道班)、岸本吉太(写真館)、川本俊雄(県警察部囑託)、佐々木雄一郎(元、内閣情報部)、林寿麿・鴉田藤太郎・空博行・松重三男・深田敏夫・尾木正己(以上一般)、北勲(広島地方气象台)
二二人

第二編 各説関係

※市内各地区関係

節順	地区名	地区委員及び体験記その他資料提供者氏名
2	国泰寺	四竈一郎、吉村浩明、川本福一、中山良一(以上委員) 柴田富雄、藤田琴子(以上体験記) 喜多輝子、横本数満、藤井五平(以上談話) 田中稔純、黒須さかみ、戸谷しげの、後かめよ、白木ふさの、福地弘、山村城造、四竈わくり(以上談話) 浅沼辰男(詩) 藤田文子(資料) 赤井了介(手記) 西家明男(資料)
3	中島	上蘭志水、坂本潔、小林倉次郎、谷口与一郎、(以上委員) 野村英三、黒瀬重吉、山崎益太郎(以上体験記) 伊藤順平(談話) 藤堂イワ、尾崎芳夫、坂田寿章、福原亮輔、栗栖薫、木村律、土井積(以上座談会) 横田健一(資料)
4	本川	三戸忠之、横田侃(以上委員) 柳田博憲、竹野兵一郎(以上談話) 高本光信(日誌) 藤田松雄(談話)
5	基町	奥村武司(委員) 松村秀逸、大佐古一郎、松尾公三(以上体験記) 竹原精一(日誌) 大下春男、恵美敏枝、岡ヨシエ(以上手記) 守木豊一(資料)
6	白島 二葉の里	鍬谷信男、香川卯八、今村正範(以上委員) 尾木正己(体験記) 紺野耕一(談話) 荒井誠一、久都内智子(以上手記)
7	牛田	任都東司、高井一夫、西本義見(以上委員) 小野勝(体験記) 山下寛治(資料)
8	戸坂	木村八千穂(委員)
9	幟町	上甲力一、三谷直吉、的場弘(以上委員) 有木重雄、桑原房枝、乃木年雄(体験記)・中津知二(資料)・菊畠真一(談話) 小林政助、諸岡千恵子、佐渡久男(以上資料)
10	荒神	寺川勝三(以上委員) 橋本くに恵(体験記)
11	大洲	天野悦胡(委員) 山本伊留満(委員・体験記)
12	尾長	和田実、満田林之助(以上委員) 原田守行(談話)
13	矢賀	宍戸義太郎(委員) 山田隆夫(資料)
14	中山	中村忠実(委員)
15	段原	鈴木貢、赤井喜市、渡部功(以上委員) 前原静枝、杉本直治郎(以上体験記) 沖土居春子(談話)
16	比治山	横田信一、佐々木勇、本川則清(以上委員) 指田吾一(手記)
17	皆実	松島弥、吉本北男(以上委員) 古川惣二(資料) 新田美登里、河元きくの(以上体験記) 久永三郎(談話)
18	仁保	津村数一(委員)
19	大河	河口祉三、浜根肇(以上委員) 溝口悦子、金行満子(以上体験記)
20	青崎	沢井博(委員)
21	宇品	久米勝一、竹本利夫、熊本泰子、田村才四郎(以上委員) 木村玉二、柴田富雄(以上体験記)
22	似島	堀口修一(委員) 義之栄光(体験記) 堀田福美、山本治郎助、奥本カヤノ、黒木マツエ、高田治、浜本乙松(以上談話)
23	竹屋	大下直平、植木定吉、笹栗弥(以上委員) 栗栖勉、原熊太郎(以上体験記) 石川ミサヨ、石野ヨシノ、柴田シゲコ(以上談話)
24	千田	土岡喜代一、宮本一男、田中隆雄、香川軍二(以上委員) 近松幸一、瀬川博(以上体験記)・三輪俊二(資料)
25	吉島	竹内真吾(委員) 黒瀬重吉、安沢松夫(体験記) 森宗寿人(手記)
26	神崎	福永信蔵、増田美利(以上委員) 那須秀雄(手記)
27	舟入	大内義直、亀田正士(以上委員)・亀田富子(体験記) 斉藤好、浜岡辰夫、高橋積(以上談話)・水田よし(資料)
28	江波	野間源一、丸本京一(以上委員)・坂本潔、坂本文子、平川義明(以上体験記) 松下ハマノ(談話)

29	広瀬	野地兼松、小畑ヒサ(以上委員) 熊本善導(談話)
30	天満・中広	四方盛一、吉川益三、荒木武(以上委員)
31	観音	下川正一、奥田脩一、田頭新太郎(以上委員) 原田文子、金河東伯、井上美史(以上体験記) 高田靖一(談話)
32	福島・南三篠	益田与一(委員) 益信之(手記) 金崎是、神崎常夫(以上資料)
33	三篠	北山孝吉、岡村清一、中村一郎、末田実吾(以上委員) 岡村アヤコ(体験記) 石見博(談話)・ 野呂昭夫(手記)
34	己斐	川本精一、和田満苗、土井宇一(以上委員)・水岡義輝(談) 安部アヤ子、森本英子、近藤幸子 (以上体験記)
35	草津・庚午	川本実、安光歳丸(以上委員)
36	古田	清水数男、田川静男(以上委員)
37	井口	西田久登、東穰(以上委員)
九五人		

※官公庁関係

項順	官公庁名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者氏名
1	中国地方総監府	原田貢、武藤文雄(資料) 高本達寿、庭山慶一郎(体験記)
2	広島県庁	三谷昇、田中圭二、藤原一美、水野知文(以上体験記)・小笠原優、涌島秀行、永岡退蔵、 藤井五平、児玉秀一、黒田増夫、武井明、佐久間浩、竹内喜三郎、喜多島健磨、山村重定(以 上資料)・嘉屋文子、筏敏行、大道博昭、西村伊勢松、柿本四三(以上手記)・横田健一(記 録)
3	広島県警察部	久城革目、妹島正、石原虎好、松本進、田辺至六、飯田久都、小椋惣三郎、浜井信三、須 沢隆(以上手記)・矢吹静男・菅田四郎(以上体験記)・広島県議会及び県警察部資料
4	広島市役所	圓山和正、川本軍次郎、岡村直一(以上体験記)・野田益、中村正忠、矢吹憲道、浜角喜久 一、平井憲太郎、伊藤勇、岩原和一、迫田周作(以上資料)・金河東伯、浜井信三、秋山ア サ子、喜多輝子(以上手記)・柴田重暉(体験記)・亀井留吉、池内邦政(以上談話)・広島市 役所文書
5	広島鉄道局	入田茂雄、倉本進、村岡寛、花谷正(以上資料)・中村敏(手記)・荒井誠一(談話)広島鉄道 局資料
6	広島通信局関係	広藤正人(体験記)・木村玉二(手記)・中国電気通信局(資料)
7	広島管区气象台	北勲(体験記・資料)山崎正博、吉波良一(以上資料)広島管区气象台資料
8	広島地方専売局	山岡英三(資料)
9	広島財務局 広島税務署	相原勝雄、宮本忠親(以上体験記)・武永三太郎、橋本敏子(以上資料)
10	広島控訴院	福永寛(資料)・広島高等地方検察庁(資料)
11	広島控訴院検事 局	細川辰三郎、高山忠万(以上資料)
12	広島地方裁判所 広島区裁判所	益田保男(資料)
13	広島地方裁判所 検事局・広島区裁 判所検事局	稲垣康一(資料)・角田俊次郎(体験記)
14	広島刑務所	古橋浦四郎(資料)
七七人		

※銀行・会社・その他団体

項順	銀行名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者名
1	日本銀行広島支店	桜井誠一郎(資料)
2	株式会社芸備銀行	谷川市郎(資料)
3	株式会社日本勧業銀行広島支店	堺原幸橘(資料)
4	株式会社日本貯蓄銀行広島支店	清水清一(資料)
5	株式会社帝国銀行広島支店	制野忠雄(資料)・坂本潔(談話)
6	株式会社安田銀行広島支店	藤井竹次郎(資料)
7	株式会社三菱銀行広島支店	高橋敏夫(資料)
8	株式会社住友銀行広島支店	吉村隆(資料)
9	株式会社三和銀行広島支店	古谷清(資料)
10	広島中央放送局	森川定案、中村寅市、藻塩一海、倉田三郎(以上資料)・広島中央放送局(資 料)
11	合名会社中国新聞社	大佐古一郎(体験記・資料)・糸川成辰(資料)・大牟田稔(資料)・中国新聞社(資 料)
12	広島県食糧営団	山口松造(資料・手記)
13	広島電鉄株式会社	三甲卓爾(資料)・大嶺詮義(資料・体験記)・山崎与三郎(談話)広島電鉄株式 会社(資料)
14	広島瓦斯株式会社	大塚昇、栗原住三(以上資)・山口勇子、久永三郎(以上談話)
15	中国配電株式会社	山田隆夫(資料)・杉本均(体験記)・中国配電株式会社(資料)
16	株式会社福屋百貨店	大西英一(資料)・河内貞子(体験記)

17	三菱重工業株式会社 広島機械製作所 広島造船所	熊谷磐城(資料)・丹羽周夫(記録)・山口彊(体験記)三菱重工業株式会社(資料)
18	東洋工業株式会社	中峠定(資料)・栗田要、山本稔、角田光永(以上体験記) 天野カオル(談話)
19	株式会社日本製鋼所広島製作所	小栗堯(資料)
20	中国塗料株式会社	堀忠(資料)
21	藤野綿業株式会社	桧山武(資料)
22	株式会社熊平製作所熊平商店	熊平清一(資料)・高田俊秀(資料)
四 二 人		

※各国民学校

項 順	学校名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者名
	序 説	高井正文、児玉勘五(以上資料)
1	本川国民学校	長尾正一(資料)
2	袋町国民学校	室田法雄(資料)
3	幟町国民学校	臺治、下土井豊(以上資料)
4	中島国民学校	山玉璋(資料)・北川まち子(手記)
5	大手町国民学校	伊藤幸(資料)・山崎湖寿子(手記)
6	広瀬国民学校	岡沢水(資料)
7	神崎国民学校	鯉川照夫(資料)・秋山ミチ子(談話)
8	天満国民学校	井林良二(資料)
9	観音国民学校	中野繁美、岸田一雄(以上資料)・下川正一(談話)
10	竹屋国民学校	大中陸三・高井正文(以上資料)
11	白島国民学校	坂江重雄(資料)・土田康(体験記)
12	千田国民学校	臺岐武雄(資料)・円崎正二(体験記)
13	段原国民学校	本家樺三(資料)
14	三篠国民学校	坪田省三(資料)
15	舟入国民学校	石田昌義(資料)・脇谷愛子(手記)
16	皆実国民学校	酒井盛正(資料)
17	荒神町国民学校	今田親人、山田要(以上資料)・吉田達雄(体験記)
18	大芝国民学校	沢井達雄(資料)
19	牛田国民学校	蒲生信夫(資料)
20	尾長国民学校	木村足穂(資料)
21	比治山国民学校	中島文人(資料)・河元きくの(体験記)
22	己斐国民学校	桑田正清(資料)・真木賢三、上方頼己、津田哲三(談話)
23	大河国民学校	後藤琢三(資料)
24	矢賀国民学校	網本政雄(資料)
25	江波国民学校	伊原武(資料)
26	宇品国民学校	河崎英三(資料)
27	古田国民学校	渡辺俊(資料)
28	仁保国民学校	下村越夫(資料)
29	楠那国民学校	新仏英雄(資料)
30	草津国民学校	小畑稔(資料)
31	青崎国民学校	加田師一(資料)
32	似島国民学校	加藤章(資料)
33	第一国民学校	島本順一(資料)・増田勉(体験記)
34	第二国民学校	橋本千代(資料)
35	第三国民学校	長屋裕智(資料)
36	広島師範学校男子部附属国民学校	広島大学事務局(資料)
37	広島陸軍偕行社附属済美国民学校	井上博(資料)
38	光道国民学校	石本豊一、西村清暁、尼子成美(以上資料)
五 八 人		

※各中学校

項 順	学校名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者名
1	県立広島第一中学校	越智證武(資料)・川本義隆(体験記)・木村玉二(手記)・湯木良平(談)
2	県立広島第二中学校	竹本勇(資料)土井久寿美(談)
3	広島県立師範学校	平賀春二(資料)
4	県立広島工業学校	加藤正照(資料)
5	県立広島商業学校	末田賢、畠山環、田部正夫、松崎豊一、寺地操(以上資料)
6	県立広島第一高等女学校	木村二郎、今村チエ(以上資料)・中川繁尚(手記)・中山良一(談話)
7	県立広島第二高等女学校	木村二郎(資料)・平田節子(手記)

8	広島県豊学校	山田正明(資料)・ろう学校(資料)
9	広島県盲学校	盲学校(資料)
10	広島市立中学校	正月定夫(資料)
11	広島市立第一工業学校	馬谷猛(資料)
12	広島市立第二工業学校	笹岡二三登(資料)
13	広島市立造船工業学校	上枝宥元、門田宏、高木義夫、高亀茂雄(以上資料)
14	広島市立第二商業学校	加藤惣一(資料)
15	広島市立第一高等女学校	宮川造六、外林秀夫・木良之(以上資料)・森本トキ子(体験記) 山崎益太郎(手記)
16	広島市立第二高等女学校	外林秀夫(資料)
17	修道中学校 修道第二中学校 修道学校	山代辰治(資料)
18	山陽中学校 山陽商業学校 山陽工業学校	石田成夫(資料)
19	崇徳中学校	福島利美(資料)
20	広陵中学校	数田猛雄(資料)
21	松本工業学校	土橋幸之助(資料)
22	安田高等女学校	安田穰(資料)
23	進徳高等女学校	永井竜淵(資料)
24	広島女学院 高等女学校	広瀬ハマ子(資料)
25	比治山高等女学校	国信玉三(資料)・倉田美佐子、板村克子(以上手記)
26	広島女子商業学校	沼田實(資料)
27	安芸高等女学校	青原慶哉(資料)
28	西高等女学校	佐々木佐市、胡子唯夫(以上資料)

※各専門学校・高等学校・大学

項順	学校名	資料表記入者及び体験記その他資料提供者名
1	広島女学院専門学校	広瀬ハマ子(資料)
2	広島女子専門学校	土井忠生(資料)
3	広島工業専門学校	山本博(資料)
4	広島医学専門学校	水野知文(資料)・北村直次(資料・手記)
5	広島女子高等師範学校及び附属山中高等女学校	中山トシ、鎌田律子(以上資料)・星野春雄(資料・手記) 益田ミツエ(手記)
6	広島高等学校	広島大学教養部(資料)
7	広島文理科大学 広島高等師範学校 附属中学校 附属国民学校	広島大学事務局(資料)・安丸一郎、田原正人(以上体験記)
六〇人		

※市内主要神社・寺院・教会

神社資料表及び体験記提供者名	
森安忠、宗像正臣、坂本潔、内田達雄、野上正徳、尼子清松、内田熙雄、野上敏鷹、大已正晴、久保田幸重、石井頼義、池田久雄、内田達雄、池田公明、(以上資料)・岡田要(手記)・田中房子(談話)	

寺院資料表及び体験記提供者名	
梶山仙順、諏訪了我、上園志水、関根龍雄、広瀬準隆、福原英巖、渡部正康、中谷善行、高都持了誓、亀尾宥賢、大内義直、田中哲翁、佐藤天俊、山本正念、脇坂善暁、日下善暁(以上資料)	

教会資料表及び体験記提供者名	
谷本清、桧垣栄次、四竈一郎(以上資料)フーゴ・ラ・サール(体験記)横田工(談話)	
三七人	

※関連市町村

項順	市町村名	資料及びその他体験記提供者名
1	呉市	田口稔(資料)・平田操(談話)
2	大竹市	平藤虎幸、岡田盛三郎、末岡書記、児玉亀吉、植木吾市、岡田盛三郎(以上資料)・吉川房太郎(資料及び体験記)・新出収人役(談話)
3	三次市	富士原久雄、世良武彦、三原辰美(以上資料)・柴田重暉、小坂千世子(以上手記)後藤琢三(談話)
4	庄原市	滝口倫弘(資料)・藤原恵(談話)
5	因島市	織田兼市、泰忠市(資料)・矢野脩(談話)

6	佐伯郡五日市町	古池里司(資料)・加藤清子、木原貞夫(談話)・野村慶一(報告)・佐久間作一郎(体験記)
7	佐伯郡廿日市町	高本鎮郎、吉岡浅太郎(以上資料)
8	佐伯郡沖美町	加納透、松本宝一、三浦冲三郎(以上資料)
9	佐伯郡宮島町	平野勝(資料)・野坂元定(報告)
10	佐伯郡大野町	三上豊、大西栄太郎(以上資料)
11	佐伯郡湯来町	上野都市、沢田豊重、河野弘(以上資料)
12	佐伯郡能美町	藤本司(資料)・山本久市(談話)
13	佐伯郡大柵町	山下政行(資料)・中本浅夫(談話)
14	安佐郡祇園町	祇園町資料・木内秀明(談話)
15	安佐郡安古市町	中村実夫(資料)
16	安佐郡佐東町	松井高二、岡祖保(以上資料)・田中美代子、新川園江(以上談話)
17	安佐郡安佐町	福島公三(資料)
18	安佐郡沼田町	荒植義信(資料)・川崎義男、市本秀子(談話)
19	安佐郡可部町	岡本楽市、米重忠一(資料)・神田実(談話)
20	安佐郡高陽町	杉原茂、花本陸蔵、宗像秀樹(以上資料)・高下郡作、高橋房子(以上談話)
21	安芸郡府中町	田村繁信(資料)
22	安芸郡船越町	中井章、三沢税、佐古田光太郎、国吉俊見(以上資料)
23	安芸郡安芸町	垣坂実男、長谷政類(以上資料)藤原次子(談話)
24	安芸郡海田町	尾木正巳、熊野嘉一、木下クサミ、千柄吉郎(以上資料)榎芳三(体験記)・仲岡助役(談話)
25	安芸郡坂町	平田明子(資料)・菅田房(談話)
26	安芸郡瀬野川町	乗末正志、式百免精喜、野間冬至郎、井上昇、野村正美(以上資料)・二野宮智(談話)
27	安芸郡矢野町	吉田廣(資料)・武田信次郎(談話)
28	安芸郡熊野町	梶川豊、榎崎薫(以上資料)・中村忠(談話)
29	安芸郡熊野跡村	古井正昭、池田静夫(以上資料)
30	安芸郡江田島町	山中淳(資料)
31	安芸郡音戸町	* 栄谷積(資料)・恵木友一(談話)
32	安芸郡倉橋町	加納善一郎(資料)
33	高田郡白木町	酒井寿郎(資料)・国友雪夫(談話)
34	高田郡向原町	井上泰順(資料)・有田貢、平岡薫(以上談話)
35	高田郡吉田町	波多野要夫(資料)・末兼英一(談話)
36	高田郡甲田町	徳山志都一(資料)
37	賀茂郡志和町	関友要、財満幸美(以上資料)
38	賀茂郡黒瀬町	中野是重、西家明男(以上資料)
39	賀茂郡八本松町	伊藤実成、木村隆夫(以上資料)久保木勝美、蔵田良見(以上体験記)
40	賀茂郡西条町	高橋高明、尾畑一夫(以上資料)井村武刀(談話)
41	山県郡戸河内町	深野政實(資料)
42	山県郡加計町	猪論(資料)・中野徳夫、佐々木安芸男、上手惣一、馬本末三(以上談話)
43	甲奴郡上下町	重森一六、岡田薫(以上資料)・藤井一夫、豊田久夫(以上体験記)
一二二人		

資料提供者計 八二二人

〔備考〕

一、(委員)は、広島市作成の「広島原爆戦災誌資料表」に記入した広島市委嘱の「地区委員」で、多数の被爆者の証言をもとに資料表に取りまとめた代表者名である。

二、(資料)は、当時の官公庁・陸海軍の公文書、あるいは、被爆関係諸事項の個人的な調査メモ・報告書などの提供者名、及び、使用した単行本の中の、その部分の証言者も含まれている。資料提供者氏名の中には呉市のように、市民一五〇人からの証言を取りまとめて、一人の代表者が提出している場合が多い。

三、(体験記)は、本誌の編集に当って体験記を提供した執筆者名である。

四、(手記)は、既存の刊行物の中におさめられている体験記、あるいは報告書(一部分使用)の執筆者名である。

五、(談話)は、本誌編集に当り、被爆体験その他必要事項について語った人、及び新聞・雑誌その他個人的に「談話」を発表した人である。

六、(写真)は、各種被爆状況を撮影した人々で自作写真の提供者名である。ちなみに、被爆関係初期の状況の撮影者は、軍人及び学術調査団員など含めて、三五、六人いると言われ、撮影写真約二、〇〇〇枚(但し、現在行方不明のものも多い)という。

七、一人の人が、各方面にわたって、数種の資料を提供されている場合があり、氏名の重複していることもある。

八、ここに掲載した人々のほかにも、貴重な助言や指摘を与えてくださった方が、たくさんあり、深く感謝してやまない。

原爆戦災誌参考図書一覧表

書 名	編・著者	発行年月日	発 行 所
空の護り	陸軍省つわもの編輯部	昭和 11.10.15	帝国防空協会
家庭防空	西部防衛司令部	昭和 13.1.20	国防思想普及会
燈火管制規則	照明学会雑誌第二二巻	昭和 13.4.4	照明学会雑誌
沿革誌	広島市警防団矢賀分団	昭和 14.4.1	広島市警防団矢賀分団
警防団教養訓練要綱	広島県警察部	昭和 14.9.	広島県警察部
空襲下ニ於ケル食糧薪炭配給対策要領	広島市西・東・宇品警察署	昭和 15.	広島市西・東・宇品警察署
家庭防空	広島県警防課	昭和 16.3.5	日本防空普及会
家庭防空の手引(週報)	情報局	昭和 16.9.3	内閣印刷局
時局防空必携	防衛総司令部	昭和 16.12.10	大日本防空協会
出動計画書	広島市警防団荒神分団	昭和 17.1.	広島市警防団荒神分団
改正防空法及関係法令集	広島県警察部警防課	昭和 17.2.1	日本防空普及
防空待避施設指導要領	大日本防空協会	昭和 17.7.25	大日本防空協会
写真週報	情報局	昭和 19.12.20	内閣印刷局
東警察署永年防空計画	東警察署	(記載なし)	東警察署
広島県史	広島県庁編纂	大正 12.6.13	広島県庁
広島新開地干拓史	木元真作	昭和 28.9.28	広島県耕地協会
新編広島県警察史	警察史編集委員会	昭和 29.4.28	警察連絡協議会
広島県議会史一～七	県議会事務局	昭和 34～42	広島県議会
広島県の姿	広島県統計協会	昭和 34.7.10	広島県統計協会
広島県自治名鑑	広島県町村議会事務局	昭和 36.4.10	広島県町村議会
広島県市町村合併史	広島県町村議会事務局	昭和 37.3.	広島県町村議会
広島県の人口	総理府統計局	昭和 42.2.15	
広島市史一～五	広島市役所	大正 11～14	広島市役所
広島市報	広島市役所	昭和 7～18	広島市役所
広島市議会議事録	広島市	昭和 20.	広島市
広島市勢要覧	広島市総務局調査課	昭和 21～45	広島市役所
概観広島市史	市史編修委員会	昭和 30.1.25	広島市役所
新修広島市史一～七	市史編修委員会	昭和 33～37	広島市役所
広島市役所原爆誌	広島市役所	昭和 41.3.31	広島市役所
比婆郡誌	日野篤信	大正元.11.10	比婆郡役所
山県郡巡り道中記	名田富太郎	昭和 6.12.20	広陵社
山県郡史の研究	名田富太郎	昭和 28.1.1	山県・名田朔郎
岩国市史	岩国市史編纂所	昭和 32.6.1	岩国市役所
加計町史(上)	加計町役場	昭和 36.3.1	加計町役場
加計町史(下)	加計町役場	昭和 36.9.15	加計町役場
加計町史資料(上)	加計町役場	昭和 36.11.1	加計町役場
加計町史資料(下)	加計町役場	昭和 37.5.1	加計町役場
大竹市史(第一巻)	田端武敏・末永栄	昭和 36.3.31	大竹市役所
広島県大野町誌	大野町郷土誌編纂委員会	昭和 37.3.31	大野町役場
東京都戦災誌	東京都	昭和 28.3.30	東京都
大阪市戦災復興誌	大阪市役所	昭和 33.3.25	共成社
長崎市制六十五年史	長崎市総務部調査統計課	昭和 34.3.31	長崎市役所
原爆の長崎	高嶋雄三郎	昭和 34.9.20	東京学風書院
戦災復興誌(九巻)	建設省	昭和 35.11.1	都市計画協会
終戦記	下村海南	昭和 23.10.30	鎌倉文庫
ニッポン日記(上)	マーク・ゲイン	昭和 26.11.5	筑摩書房
ニッポン日記(下)	マーク・ゲイン	昭和 26.11.30	筑摩書房
終戦史録	外務省	昭和 27.5.1	新聞月鑑社
大本営発表	松村秀逸	昭和 27.5.20	日本週報社
原爆か原子平和か	谷口二郎	昭和 27.6.15	新時代社
広島－戦争と都市	岩波書店編集部	昭和 27.10.25	岩波写真文庫
太平洋戦争秘史	毎日新聞図書編集部	昭和 28.11.10	毎日新聞社
記録写真太平洋戦争(上)	ロバート・シャーロッド/中野五郎	昭和 31.6.20	光文社
記録写真太平洋戦争(下)	ロバート・シャーロッド/中野五郎	昭和 31.6.30	光文社
終戦外史	R・J・C ビュート	昭和 33.8.15	時事通信社
実録太平洋戦争(6)	伊藤正徳	昭和 35.10.25	中央公論社
広島師団の歩み	村上哲夫	昭和 36.3.21	十一会
太平洋戦争への道、日米開戦	角田順	昭和 38.5.15	朝日新聞社
太平洋戦争への道、資料編	稲葉正夫昭和	昭和 38.6.30	朝日新聞社
世界大戦原因の研究	鹿島守之助	昭和 38.10.10	鹿島研究所出版会
アメリカと極東	鹿島守之助	昭和 38.11.10	鹿島研究所出版会
現代史の瞬間	米国海外記者クラブ	昭和 40.6.25	弘文堂
核戦略批判	豊田利幸	昭和 40.8.20	岩波書店

日本の百年①新しい開国	鶴見俊輔	昭和 42.1.20	筑摩書房
日本の百年②廃虚の中から	鶴見俊輔	昭和 42.2.20	筑摩書房
日本の百年③果てしなき戦線	鶴見俊輔	昭和 42.3.20	筑摩書房
戦争と平和の心理学	チャールズ・オスグッド	昭和 43.1.30	岩波書店
戦争と国際法	松井康治	昭和 43.8.20	三省堂
我等は隠るべきか	R・E・ラップ	昭和 25.1.15	南条書店
0 の暁	W・L・ローレンス	昭和 25.1.20	創元社
原子爆弾の効果	米国原子力委員会	昭和 26.2.15	主婦之友社
恐怖・戦争・爆弾	P・M・S・ブラケット	昭和 26.5.1	法政大学出版局
ノー モア ウオー	ポーリング	34.7.31	講談社
もはや高地なし	F・ニーベル/C・ベイリール	昭和 35.10.15	光文社
ヒロシマわが罪と罰	C・イーザリー/G・アンデルス	昭和 37.8.5	筑摩書房
私が原爆計画を指揮した	レスリー・R・グローブス	昭和 39.9.5	恒文社
チャーチル第二次大戦回顧録抄	毎日新聞図書編集部	昭和 40.2.20	毎日新聞社
原爆投下決定	L・ギオワニティ	昭和 42.1.10	原書房
マンハッタン計画	ステファーン・グルーエフ	昭和 42.11.15	早川書房
ヒロシマへの七時間	ジョセフ・L・マークス	昭和 43.7.29	日本経済新聞社
ヒロシマ・パイロット	田口憲一	昭和 43.8.1	講談社
原子爆弾	武井武夫	昭和 20.9.20	同盟通信社
原子爆弾	嵯峨根遼吉	昭和 20.10.	朝日新聞社
被爆による建物被害状況等調査綴 No. 1No. 2	広島市調査課	昭和 21.8.	広島市調査課
原子爆弾による人的被害及び一ヵ年後 状況調査綴	広島市調査課	昭和 21.8.	広島市調査課
原子爆弾の話	嵯峨根遼吉	昭和 24.12.10	講談社
原爆ヒロシマの記録	原爆ヒロシマの記録編集部	昭和 25.5.5	瀬戸内海文庫
原子爆弾災害調査報告書	原爆災害調査報告書刊行委員会	昭和 26.8.1	日本学術振興会
原爆第一号写真記録	梅野彪・田島賢裕	昭和 27.8.14	朝日新聞社
原子爆弾災害調査報告集(一・二)	日本学術会議	昭和 28.3.	日本学術振興会
原爆と消防	山澤亀三郎	昭和 28.11.1	原爆と消防刊行会
原水爆実験	武谷三男	昭和 32.8.22	岩波書店
広島における原子爆弾の炸裂点の決定	長岡省吾	昭和 35.	私家版
原水爆被害白書かくされた真実	原水爆禁止日本協議会	昭和 36.7.31	原水爆禁止日本協議会
長崎における原子爆弾炸裂点および爆 心決定について	長岡省吾	昭和 36.12.25	私家版
原爆関係文献目録	横田工	昭和 40.10.15	原爆資料存会
核兵器の恐怖	島村喬	昭和 43.7.15	清風書房
原爆はなぜ投下されたか	西島有厚	昭和 43.7.15	青木書店
原爆被災資料総目録(1)(2)	原爆被災資料広島研究会	(1)昭和 44.8.6 (2)昭和 45.8.6	原爆被災資料広島研究会
原水爆被害問題資料集	原水爆禁止福岡市協議会	昭和 44.9.10	原水爆禁止福岡市協議会
写真記録ヒロシマ 25 年	佐々木雄一郎	昭和 46.6.30	朝日新聞社
原爆関係文献目録	ヒロシマ会議委員会	昭和 45.11.29	ヒロシマ会議委員会
原子力と医学	森信胤	昭和 28.9.15	創元社
驚異の原子力	岸本康	昭和 29.12.1	偕成社
原子に関する報告	ゴードン・ディーン	昭和 30.2.15	読売新聞社
原子力と産業	A・クラミッシュ/E・M・ザッ カート	昭和 30.5.15	紀伊国屋書店
原子力画報	大阪書籍	昭和 31.11.1	大阪書籍株式会社
原子力年鑑三二年版	日本原子力産業会議	昭和 32.5.10	日本原子力産業会議
原子力の歴史	吉羽和夫	昭和 32.8.15	日刊工業新聞社
放射能の利用と障害	山根文男・西脇安・三好和夫	昭和 32.9.5	朝日新聞社
原子力とエネルギー	伏見康治・安芸皎一	昭和 32.10.15	朝日新聞社
原子力ハンドブック・爆弾篇	S・グラストン	昭和 33.1.15	商工出版社
原子力と原子時代	C・F・ワイツゼッカー	昭和 33.6.17	岩波書店
原子力と人類	R・E・ラップ	昭和 34.4.10	東洋経済新報社
原子力と平和利用	松浦悦之	昭和 34.11.1	夕刊新聞株式会社
発見への道	八木勇	昭和 36.9.8	岩波書店
放医研ニュー昭和 37.1、昭和 37.8	放射線医学総合研究所	昭和 37.1.25～ 37.8.25	放射線医学総合研究所
放医研の放射能調査	放射線医学総合研究所	昭和 37.4.20	放射線医学総合研究所
放射線医学総合研究所年報	放射線医学総合研究所	昭和 37.7.1	放射線医学総合研究所
絶後の記録	小倉豊文	昭和 23.11.30	中央社
天よりの大いなる声	未包敏夫	昭和 24.4.10	東京トリビューン社
ヒロシマ	ジョン・ハーシー	昭和 24.4.25	法政大学出版局
ひろしま	衣川舜子	昭和 24.7.20	丁子屋書店

平和のとしび	吉川清	昭和 24.8.15	京都印書館
世紀の閃光	稲富栄次郎	昭和 24.12.20	広島図書
ヒロシマを忘れるな	中村武雄	1950.8.1	自由青年出版社
原爆記千袋の小箱	星野春雄	昭和 25.8.1	広島女子高等師範学校理 学教室原爆五周年刊行
原爆体験記	広島市民生局社会教育課	昭和 25.8.6	広島平和協会
原爆を浴びて	那須秀雄	昭和 26.9.17	下関水産振興協会
原爆の子	長田新	昭和 26.10.2	岩波書店
故藤野七蔵氏追懷録	藤野七蔵氏追懷録編纂委員 会	昭和 27.4.25	広島瓦斯株式会社
原爆に生きて	原爆被害者の手記編纂委員 会	昭和 28.6.25	三一書房
花の命は短かくて	小島順	昭和 28.8.6	共同出版社
広島県教育八十年誌	広島県教育委員会事務局	昭和 29.3.31	広島県教育委員会
追憶	広隆群	昭和 29.4.25	広島一中遺族会
星は見ている	秋田正之	昭和 29.8.3	鱒書房
八時十五分原爆広島十年の記録	世界平和集会広島世話人会	昭和 30.1.10	世界平和集会広島世話人会
HIROSHIMA 広島	吉川清	昭和 30.3.1	広島八・六友の会
広島原爆誌	大泉周蔵	昭和 30.8.6	中国電気通信局
原爆の実相	柴田重暉	昭和 30.8.6	文化社
らくがき随筆	重富芳衛	昭和 31.5.1	毎日広告社
中国新聞六十五年史	社史編纂委員会	昭和 31.5.5	中国新聞社
ヒロシマ日記	蜂谷道彦	昭和 31.7.20	朝日新聞社
思出ばなしところどころ	涌島秀好	昭和 31.10.1	私家版
創立七〇周年記念誌	加納哲雄	昭和 31.10.1	広島女学院
広島商人	久保辰雄	昭和 31.11.15	平凡社
あの日から今もなお	副島まち子	昭和 31.11.25	東都書房
流燈	真田安夫	昭和 32.8.6	広島市女遺族会
原爆は母を奪った	熊谷孝兵衛	昭和 32.11	私家版
「和」石田学園五〇年記念誌	藤晃	昭和 32.12.3	石田学園
千羽鶴	豊田清史	昭和 33.8.6	昭森社
原水爆時代(上)	今堀誠二	昭和 34.7.21	三一書房
その死を超え行くもの	四竈揚	昭和 34.12.20	私家版
原水爆時代(下)	今堀誠二	昭和 35.8.6	三一書房
広島原爆遭難記	佐久間作一郎	昭和 35.8.6	私家版
愛子 原爆悲記	木村玉二	昭和 35.8.6	私家版
灰嘘の光	ロベルト・ユンク	昭和 36.2.10	文芸春秋新社
ピカドン	福島菊次郎	昭和 36.7.1	東京中日新聞社
かえらぬ鶴	瀬戸奈々子・林田みや子	昭和 36.10.12	二見書房
HIROSHIMA	長岡省吾	昭和 36.10.30	私家版
平和をもとめて	広島大学新聞会	昭和 37.3.25	広島大学新聞会
あの日あの時	兵庫県原爆被害者の会	昭和 37.5.27	兵庫県原爆被害者の会
山中高女沿革史	山中トシ	昭和 37.7.2	山中高等女学校
一閃轟音(ぴかどん)	田辺至六	昭和 37.8.6	県庁職員被爆者更生会
倒壊校舎脱出手記	広島一元中生徒	昭和 37.10.16	広島県高等学校長協会
耳鳴り	正田篠枝	昭和 37.11.30	平凡社
きのこぐも	嘉屋文子	昭和 38.4.20	私家版
広島随筆	豊田清史	昭和 39.3.30	広文館本通店
広島市立学校志	広島市教育委員会	昭和 39.3.31	広島市教育委員会
広船の歩み二十年史	二十年史編纂委員会	昭和 39.5.	三菱造船株式会社広島造船 所
続きのこぐも	嘉屋文子	昭和 39.7.28	私家版
若い軌跡	勝丸博行	昭和 39.8.15	広島産興
ヒロシマ・ノート	大江健三郎	昭和 40.6.21	岩波書店
ああ広島原爆	亀田正士	昭和 40.6.26	私家版
原爆ゆるすまじ	原爆ゆるすまじ編集委員会	昭和 40.7.5	新日本出版社
原爆体験記	広島市原爆体験記刊行会	昭和 40.7.20	朝日新聞社
この世界の片隅で	山代巴	昭和 40.7.20	岩波書店
碑はみつめている	中国新聞社編集部	昭和 40.7.20	中国新聞社
暗雲を越えて	嘉屋文子	昭和 40.7.25	私家版
市民の日記(14)	昭和戦争文学全集編集委員 会	昭和 40.7.30	集英社
ガンマ線の臨終	八田元夫	昭和 40.7.31	未来社
その日の広島	新教出版社編集部	昭和 40.7.31	新教出版社
あさ第二号	山下会会誌	昭和 40.7.1	山下会
ヒロシマ・愛と死	竹内進	昭和 40.8.20	芸文社
原子爆弾投下さる(13)	昭和戦争文学全集編集委員 会	昭和 40.8.30	集英社

思い出の記	竹内助四郎	昭和 40.9.1	私家版
げんばく記	土田康	昭和 40.10	私家版
安田学園五十年史	茶園義男	昭和 40.11.5	安田学園
五十年史	山田正明	昭和 41.3.19	広島ろう学校
原爆被災誌	松田幸雄	昭和 41.3.22	広島中央放送局
広島県盲教育五〇年のあゆみ	横山卓郎	昭和 41.3.30	広島県盲学校
炎の日から二〇年	中国新聞社	昭和 41.6.15	未来社
証言は消えない	中国新聞社	昭和 41.7.30	未来社
ヒロシマの記録年表・資料	中国新聞社	昭和 41.8.6	未来社
中国支社三〇年史	川原太郎	昭和 41.10.31	国有鉄道中国支社
粟屋仙吉の人と信仰	津上毅一	昭和 41.12.25	待屋堂
原爆慰霊碑巡礼の案内	後藤純	昭和 42.8.1	原爆慰霊碑研究所
爆心地	平和を訴え続ける児童生徒	昭和 42.8.5	広島折鶴の会
原爆五〇〇人の証言	朝日新聞社	昭和 42.11.20	朝日新聞社
原爆市長	浜井信三	昭和 42.12.15	朝日新聞社
原爆の記	伊達宗彰	昭和 42.12.25	私家版
動員学徒誌	広島県動員学徒誌委員会	昭和 43.3.30	動員学徒犠牲者の会
紫色の閃光	森宗寿人	昭和 43.4.10	私家版
ぼく生きたかった	竹内淑郎	昭和 43.7.12	宇野書店
ひろしま平和の歩み	広島平和文化センター	昭和 43.8.1	広島市役所
昭和史の天皇 4	鈴木敏夫	昭和 43.8.1	読売新聞社
ドームは呼びかける	広島市役所	昭和 43.8.6	広島市役所
広島碑林	三田嘉一	昭和 43.8.6	三田蠟染堂
広島原爆の思い出	木場博	昭和 43.9.1	私家版
ヒロシマの原爆	長谷川唯夫	昭和 43.9.5	警察新聞社
被爆者は夜も眠れず	脇水聖子	昭和 43.10.1	私家版
ドキュメント日本人 8 アンチヒューマン	田寺正敏	昭和 44.3.25	学芸書林
原爆地獄(びかどん第二集)	柿本四三	昭和 44.6.10	私家版
花を友に	石橋シヅヲ	昭和 44.6.10	私家版
原爆爆心地	志水清	昭和 44.7.20	日本放送出版協会
原爆の記録	広島高等地方検察庁	昭和 44.8.6	広島高等地方検察庁
ドーム崩れる日	内田豊	昭和 44.8.6	私家版
炎のなかに	旧比治山高女第 5 期生の会	昭和 44.8.6	旧比治山高女第 5 期生の会
ヒロシマの証言	広島平和文化図書刊行会	昭和 44.8.6	日本評論社
原爆の記	指田吾一	昭和 44.8.6	社会新報
ある惑星の悲劇	旭丘光志・草河達夫	昭和 44.12.8	講談社
原爆から二十五年悲願に生きた信仰体験記	本山雲彬	昭和 45.新春	俵右考堂
原爆日記(一)	広島県医師会広報部	昭和 45.4.30	
核権力	金井利博	昭和 45.6.15	
碑(いしぶみ)	久保田忠夫	昭和 45.6.20	
原子雲の下に生きつづけて	下畠準三	昭和 45.7.25	全電通広島被爆者連絡協議会
被爆二十五年の歩み	兵庫県原爆被害者連絡協議会	昭和 45.8.6	兵庫県原爆被害者連絡協議会
わたしの二十五年	中国放送	昭和 45	中国放送
原爆回想記	吉田一	昭和 45.8.6	私家版
閃光は今もなお	宮崎県原爆被害者の会	昭和 45.11.8	宮崎県原爆被害者の会
原爆二十五年	毎日新聞	昭和 45.12.1	毎日新聞広島支局
広島ヒロシマ	翠町中学校吉岡みどり他四人	昭和 46.1.30	私家版
広島原爆医療史	原爆医療史編集委員会	昭和 36.8.6	原爆障害対策協議会
岡山県医師会報	岡山県医師会	昭和 37.8.25	岡山県医師会
大竹市医師会史	大竹市医師会	昭和 39.6.10	大竹市医師会
原爆被爆者対策事業概要	広島市役所	昭和 40	広島市役所

〔備考〕

ここに掲載した図書は、主として本誌に、その一部を引用したものであるが、単に参考資料として利用したものも含まれている。なお、新聞・雑誌・パンフレット・地図類は記載しなかったものもある。

また、小説など創作された文学作品は、資料として採用しなかった。

広島原爆戦災誌 第四巻 第二編 各説

第三章 広島市内各学校の被爆状況

第四章 広島市内主要神社・寺院・教会の被爆状況

第五章 関連市町村の状況

昭和四十六年十一月一日 印刷

昭和四十六年十一月六日 発行

編集兼発行者 広島市役所

広島市国泰寺町一丁目六番三十四号

印刷者 中本総合印刷株式会社

広島市大州五丁目一番一号